静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第159集

掛川市大和田・平島の遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

掛川市－1

宮ノ沢遺跡（第二東名No.95地点）

大和田遺跡（第二東名No.96地点）

平島Ⅰ遺跡（第二東名No.97地点）

平島Ⅱ遺跡（第二東名No.98地点）

平島Ⅲ遺跡（第二東名No.99地点）

2005

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

日本道路公団 静岡建設局

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第159集

掛川市大和田・平島の遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

掛川市－1

宮ノ沢遺跡（第二東名No.95地点）

大和田遺跡（第二東名No.96地点）

平島Ⅰ遺跡（第二東名No.97地点）

平島Ⅱ遺跡（第二東名No.98地点）

平島Ⅲ遺跡（第二東名No.99地点）

２００５

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

日本道路公団 静岡建設局

①宮ノ沢遺跡　③平島Ⅰ遺跡　⑤平島Ⅲ遺跡
②大和田遺跡　④平島Ⅱ遺跡

提供：静岡県
無断転載等は禁止する

大和田・平島地区（俯瞰、上が北）

序

静岡県掛川市大和田・平島地区では、第二東名建設事業に伴って５ヵ所の河岸段丘上の遺跡を発掘調査した。東から、宮ノ沢遺跡・大和田遺跡・平島Ⅰ遺跡・平島Ⅱ遺跡・平島Ⅲ遺跡である。掛川市には多くの遺跡が分布しており、発掘調査が行われ、注目に値する成果も多く知られている。しかし、大和田・平島地区は原野谷川上流域の平野の少ない丘陵地にあり、遺跡の発掘調査が少ない地域でもある。そうした地域にあって、今回の５ヶ所の遺跡の発掘調査が果たすべき役割は、決して小さいものではないと考える。

大和田遺跡では、縄文時代早期および中期の土器・石器が出土し、屋外炉とされる土坑の発見もあった。平島Ⅰ～Ⅲの各遺跡でも、縄文時代中期の遺物が出土し、平島Ⅰ遺跡では当時の住居跡などの発見もあった。これらの調査成果によって、少なくとも約6000年前には人々の生活が営まれていたことを知るとともに、約4000年前の段丘上に広がる営みの存在について、新たに認識することができた。

宮ノ沢遺跡の調査では、鎌倉時代以降の集落の展開が、原野谷川の上流域にまであったことを確認することができた。一方、平島Ⅰ～Ⅲ遺跡では、室町時代～近世の集落・墓域の展開をみることができた。さらに、各遺跡の展開を探っていくと、詳細な時期の特定は難しいが、大きな変動を見出すことができる。この地域は、中世においては原田荘の中にあり、鎌倉時代以降、原氏一族が国人領主としての地位を確立した場所の一部にあたる。さらに、今川氏の遠江進攻をはじめとする近世にかけての変動も知られている。このような社会変動が、何らかのかたちで大和田・平島の集落の展開にも影響している可能性が考慮される。

現地調査および資料整理、本書の作成にあたり、日本道路公団静岡建設局・静岡県教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関各位に多大なご援助、ご理解を得ている。この場をかりて深く感謝申しあげる次第である。また調査にご理解をいただいた地元の皆様、現地での発掘作業、また地道な整理作業にあたられた方々に、この機会に厚くお礼申しあげたい。

平成17年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長　斎藤　忠

例　言

1．本書は、掛川市域（以下、掛川地区）における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の総論と、静岡県掛川市大和田・平島に所在する下記の遺跡の発掘調査報告書である。

宮ノ沢遺跡（第二東名№95地点）：大和田619他
大和田遺跡（第二東名№96地点）：大和田1185-6他
平島Ⅰ遺跡（第二東名№97地点）：平島834他
平島Ⅱ遺跡（第二東名№98地点）：平島217-2他
平島Ⅲ遺跡（第二東名№99地点）：平島232他

2．第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町村）単位にて実施している。掛川地区では本書が第１冊目であり、よって「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　掛川市－１」とした。

3．調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、日本道路公団静岡建設局の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、掛川市教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4．現地調査・資料整理の期間と担当者は以下のとおりである。なお、調査体制は第１章に別記した。

宮ノ沢遺跡　確認調査：平成12年８月　加藤理文
　　本 調 査：平成13年１月～７月　大庭　宏、深田雅一
大和田遺跡　確認調査：平成11年２月～３月　平野　徹、竹原一人
　　本 調 査：平成12年６月～11月　深田雅一
平島Ⅰ遺跡　確認調査：平成11年２月～３月　平野　徹、竹原一人
　　平成11年９月～12月　竹原一人、深田雅一
　　本 調 査：平成12年３月～11月　大庭　宏、横山智之
平島Ⅱ遺跡　確認調査：平成11年９月～12月　竹原一人、深田雅一
　　本 調 査：平成12年８月～10月　柴田　睦
平島Ⅲ遺跡　確認調査：平成11年11月～平成12年１月　竹原一人、深田雅一
　　本 調 査：平成12年６月～平成13年３月　大庭　宏、中村正宏、横山智之、深田雅一
資料整理・報告書作成：平成13年８月～平成14年３月　大庭　宏、深田雅一
　　平成14年８月～平成15年１月、平成15年６月・９月、
　　平成16年３月、平成16年７月～平成17年３月　　田村隆太郎

5．執筆は以下のとおりである。

及川　司：第１章 第１節１
大庭　宏：第２章 第１節２、同章 第４節１～３および４(２)
西井　亨（当研究所主任技術員）：第３章 第３節４(１)、第４章 第３節５(１)、第５章 第３節３(１)、第６章 第３節５(１)
田村隆太郎：上記以外

6．各調査における協力者等は、各章文末に別記した。

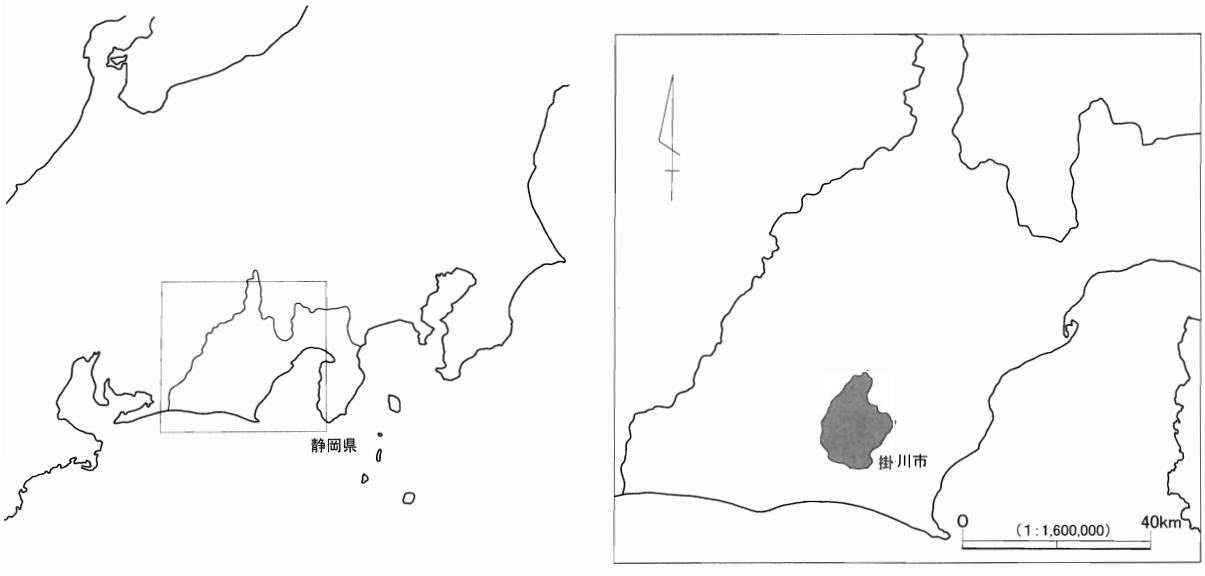
7．山茶碗以外の陶器と土師質土器については、足立順司が観察、その所見に基づいて報告している。

8．石器等の石材鑑定は、当研究所技術員　森嶋富士夫が行った。

9．各調査で実施した委託事項および委託先は、各章文中に記した。
10．巻頭図版は、静岡県の提供による空中写真であり、静岡県総務部災害対策室長の同意・許可を得て掲載している。無断転載等は禁止する。その他の航空写真の撮影は委託したものである。現地の写真撮影は各調査担当者、遺物の写真撮影は当研究所写真室が実施した。
11．金属製遺物のクリーニング・保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
12．各調査の概要は、当研究所や他の刊行になる出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
13．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
14．発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。

凡　例

1．座標は、平面直角座標Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。
2．グリッド（方眼）の設定は、１の座標を用いている。グリッドの１辺は10mとし、西から１・２…、北からＡ・Ｂ…としている。また、方位は１の座標による方位（座標北）を基準としている。
3．遺構の表記は次のとおりである。
　例）ＳＦ１５　（ＳＦ：遺構の種別　１５：遺跡内の遺構種類別通し番号）
　　ＳＢ：竪穴住居跡　ＳＨ：建物・施設跡　ＳＥ：井戸　ＳＦ：土坑　ＳＰ：小穴
　　ＳＤ：溝　　ＳＸ：その他・不明遺構
4．遺物番号は、挿図掲載遺物について種類・挿図の別に関わらず、遺跡ごとの通し番号を付している。
5．観察表にある石器等の石材は、（有）石器石材研究所の柴田徹氏と山本薫氏による石材標準資料を用いて鑑定したものであり、その和名と略号を記している。
6．本書の図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。



掛川市の位置

目　次

巻頭図版／序／例言／凡例

第１章　総　論 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 3
　　１．第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取扱いの経緯 …… 3
　　２．現地調査の体制 …… 5
　第２節　掛川市北部の位置と環境 …… 6
　　１．地理的環境 …… 6
　　２．歴史的環境 …… 8
　第３節　確認調査 …… 11
　　１．確認調査の対象地点 …… 11
　　２．確認調査の方法と経過 …… 13
　　３．各地点の概要 …… 15
　第４節　本調査 …… 23
　　１．本調査の方法と経過 …… 23
　　２．本調査の概要 …… 24
　第５節　資料整理 …… 26
　　１．資料整理の体制 …… 26
　　２．資料整理の方法と経過 …… 27

第２章　宮ノ沢遺跡　第二東名№95地点 …… 29
　第１節　位置と環境 …… 31
　　１．位置と地理的環境 …… 31
　　２．歴史的環境と調査歴 …… 32
　第２節　調査の方法と経過 …… 33
　　１．発掘調査の方法 …… 33
　　２．発掘調査の経過 …… 33
　　３．資料整理の方法と経過 …… 34
　第３節　調査の成果 …… 35
　　１．全体の概要 …… 35
　　２．遺　構 …… 38
　　３．遺　物 …… 60
　第４節　まとめ …… 74
　　１．自然環境からみた本遺跡 …… 74
　　２．中世の大和田 …… 76
　　３．原田荘と原氏および孕石氏について …… 81
　　４．調査成果にみる集落像 …… 95
　　５．おわりに …… 101

第３章　大和田遺跡　第二東名№96地点 …… 105
　第１節　位置と環境 …… 107
　　１．位置と地理的環境 …… 107
　　２．歴史的環境と調査歴 …… 107
　第２節　調査の方法と経過 …… 108
　　１．発掘調査の方法 …… 108
　　２．発掘調査の経過 …… 108
　　３．資料整理の方法と経過 …… 109
　第３節　調査の成果 …… 110
　　１．全体の概要 …… 110
　　２．遺物の出土状況 …… 112
　　３．遺　構 …… 114
　　４．遺　物 …… 119
　第４節　まとめ …… 129

第４章　平島Ⅰ遺跡　第二東名№97地点 …… 131
第１節　位置と環境 …… 133
１．位置と地理的環境 …… 133
２．歴史的環境と調査歴 …… 133
第２節　調査の方法と経過 …… 135
１．発掘調査の方法 …… 135
２．発掘調査の経過 …… 136
３．資料整理の方法と経過 …… 136
第３節　調査の成果 …… 137
１．全体の概要 …… 137
２．Ａ区の遺構 …… 138
３．Ｂ・Ｃ区の遺構 …… 144
４．Ｄ区の遺構 …… 152
５．出土遺物 …… 169
第４節　まとめ …… 177
第５章　平島Ⅱ遺跡　第二東名№98地点 …… 181
第１節　位置と環境 …… 183
１．位置と地理的環境 …… 183
２．歴史的環境と調査歴 …… 183
第２節　調査の方法と経過 …… 184
１．発掘調査の方法 …… 184
２．発掘調査の経過 …… 184
３．資料整理の方法と経過 …… 185
第３節　調査の成果 …… 186
１．全体の概要 …… 186
２．遺　構 …… 188
３．出土遺物 …… 196
第４節　まとめ …… 199
第６章　平島Ⅲ遺跡　第二東名№99地点 …… 201
第１節　位置と環境 …… 203
１．位置と地理的環境 …… 203
２．歴史的環境と調査歴 …… 203
第２節　調査の方法と経過 …… 204
１．発掘調査の方法 …… 204
２．発掘調査の経過 …… 204
３．資料整理の方法と経過 …… 205
第３節　調査の成果 …… 206
１．全体の概要 …… 206
２．Ａ区の遺構 …… 207
３．Ｂ区の遺構 …… 214
４．Ｃ区の遺構 …… 225
５．出土遺物 …… 232
第４節　まとめ …… 236
１．平島Ⅲ遺跡の展開 …… 236
２．中近世の平島Ⅰ～Ⅲ遺跡 …… 238

写真図版

抄　録

図版目次

巻頭図版

大和田・平島地区（俯瞰、上が北）

写真図版

宮ノ沢遺跡

図版１　1　遺跡から孕石方面を望む
　　2　東からの遠景
図版２　1　調査区全景（俯瞰）
　　2　調査区全景（北から）
図版３　1　SH01～SH03・SH08など（俯瞰）
　　2　SH11・SH12など（俯瞰）
図版４　1　SH23～SH26など（俯瞰）
　　2　SH23・SH24（北から）
図版５　1　SH11内SP251（北東から）
　　2　SH23内SP435（西から）
　　3　SH23内SP433（東から）
　　4　SH23内SP442（北西から）
　　5　SH24内SP486（北から）
　　6　SH24内SP494（南から）
図版６　1　SP143（西から）
　　2　SP168（東から）
　　3　SP370（東から）
　　4　SP387（北から）
　　5　SP448（東から）
　　6　SP501（東から）
図版７　1　SP698（南から）
　　2　SP403（西から）
　　3　SF12（南から）
　　4　SP163・SP164半裁状況（南から）
　　5　SF08（西から）
　　6　SF53半裁状況（西から）
図版８　1　SF01～SF05発見状況（東から）
　　2　SF01～SF05完掘状況（東から）
図版９　1　SF01半裁状況（西から）
　　2　SF15検出状況（北から）
　　3　SF24半裁状況（西から）
　　4　SF30（北から）
　　5　SD04（北から）
　　6　SD05（南から）
図版10　1　SE01（東から）
　　2　SX01（南から）
図版11　1　SE01竹筒出土状況（西から）
　　2　SE01の基礎（東から）
　　3　SX01 箕出土状況（北から）
　　4　SX01 完掘状況（東から）
　　5　SX02（西から）
　　6　SX03（南から）
図版12　出土遺物１（土師器、山茶碗１）
図版13　出土遺物２（山茶碗２）
図版14　出土遺物３（陶器１）
図版15　出土遺物４（陶器２）
図版16　出土遺物５（陶器３）
図版17　出土遺物６（陶器４、磁器）
図版18　出土遺物７（カワラケ、柄杓）
図版19　出土遺物８（金属製品）

大和田遺跡

図版20　1　東からの遠景
　　2　調査区全景（東から）
図版21　1　調査区西壁の断面（東から）
　　2　SF01～SF03（北西から）
　　3　SF01（西から）
　　4　SF04（北から）
　　5　SF05（東から）
図版22　1　SF06（西から）
　　2　SF08（東から）
　　3　SF09（東から）
　　4　SF12（南から）
　　5　SF15（西から）
　　6　SF16（西から）
図版23　1　SF17（東から）
　　2　SF19（北から）
　　3　SF20（北から）
　　4　SF21（北から）
　　5　SF22（西から）
　　6　SF23（南から）
図版24　出土遺物１（縄文土器１）
図版25　出土遺物２（縄文土器２）
図版26　出土遺物３（縄文土器３、石器、中世の遺物）

平島Ⅰ遺跡

図版27　1　西からの遠景
　　2　調査区全景（俯瞰）
図版28　1　Ａ区全景（東から）
　　2　Ａ区全景（俯瞰）
図版29　1　SH01（南から）
　　2　SF02～SF04（西から）
図版30　1　SF01（北から）
　　2　SF05・SP30（北から）
　　3　SF06（北から）
　　4　SF08（西から）
　　5　SF07検出状況（北から）
　　6　SF07完掘状況（北から）
図版31　1　Ｂ・Ｃ区全景（俯瞰）
　　2　SF09（南から）
　　3　SF10（北から）
図版32　1　SF14（東から）
　　2　SF15（東から）
　　3　SF18（南東から）
　　4　SF19（南から）
　　5　SF20（東から）
　　6　SF12（南から）
図版33　1　Ｄ区全景（俯瞰）
　　2　SB01周辺（俯瞰）
図版34　1　SB01（南から）
　　2　SB01炉（北西から）
　　3　SB01P16埋甕（東から）
図版35　1　SH04（北から）
　　2　SH05（北東から）
図版36　1　SH06・SH07（俯瞰）
　　2　SH09～SH11など（俯瞰）
図版37　1　SF22（東から）
　　2　SF28（東から）
図版38　1　SF25（北西から）
　　2　SF26（南東から）
　　3　SF30（南東から）
　　4　SF31（南西から）
　　5　SF27（北から）
　　6　SD05・SD06・SX01（南から）
図版39　出土遺物（縄文時代）
図版40　出土遺物（金属製品）
図版41　出土遺物（金属製品のＸ線写真）
図版42　出土遺物（中近世）

平島Ⅱ遺跡

図版43　1　東からの遠景
　　2　調査区全景（北から）
図版44　1　SX01・SD01・SH01（東から）
　　2　SH02（南東から）
図版45　1　SH04（南西から）
　　2　SH05（西から）
図版46　1　SH03（東から）
　　2　SF02（南東から）

3　SF04（東から）
4　SF05（東から）
5　SF06および被熱範囲（北西から）
6　SF12（南西から）
図版47　出土遺物
平島Ⅲ遺跡
図版48　1　調査区全景（西から）
2　A区全景（俯瞰）
図版49　1　SH01・SF02（南東から）
2　SH01～SH04・SH07など（俯瞰）
図版50　1　SH02（北西から）
2　SH04（東から）
図版51　1　SF01半裁状況（東から）
2　SF02半裁状況（南東から）
3　SF03検出状況（西から）
4　SF03完掘状況（南から）
5　SF04検出状況（北から）
6　SF04完掘状況（東から）
図版52　1　B区全景（俯瞰）
2　SH08（北西から）
図版53　1　SH09・SH10（俯瞰）
2　SH11・SH12など周辺遺構群（俯瞰）
図版54　1　SF07検出状況（南から）
2　SF09検出状況（西から）
3　SF08半裁状況（東から）
4　SF08（西から）
5　SF10（東から）
6　SF13検出状況（北から）
図版55　1　SF11検出状況（北から）
2　SF15検出状況（北から）
3　SF16検出状況（北から）
4　SF16完掘状況（東から）
5　C区SH16・SH17・SH21など（北から）
図版56　1　C区全景（東から）
2　出土遺物1（縄文時代）
図版57　出土遺物2（中近世）

挿図目次

総　論
第1図　掛川市中北部の地質 …… 6
第2図　掛川市の地形と地名 …… 7
第3図　周辺の遺跡分布図 …… 10
第4図　第二東名の路線と対象地点 …… 12
第5図　各地点対象範囲 1 …… 15
第6図　各地点対象範囲 2 …… 16
第7図　各地点対象範囲 3 …… 17
第8図　各地点対象範囲 4 …… 19
第9図　各地点対象範囲 5 …… 19
第10図　各地点対象範囲 6 …… 21
第11図　各地点対象範囲 7 …… 21
宮ノ沢遺跡
第12図　本遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 31
第13図　周辺の遺跡2 …… 32
第14図　本調査範囲とグリッド配置 …… 36
第15図　遺構配置図 …… 37
第16図　調査区北縁部の建物群 …… 38
第17図　SH01・SH02 …… 39
第18図　SH03・SH04 …… 40
第19図　調査区北東部の建物群 …… 41
第20図　SH08 …… 42
第21図　SH09・SH10 …… 43
第22図　調査区南東部の建物群 …… 44
第23図　SH11・SH12 …… 45
第24図　調査区北西部の建物群1 …… 48
第25図　調査区北西部の建物群2 …… 49
第26図　調査区北西部の建物群3 …… 50
第27図　SH29 …… 51
第28図　SH30 …… 51
第29図　集石土坑など …… 52
第30図　トイレ・貯蔵施設 …… 54
第31図　SD02～SD04 …… 55
第32図　SE01の石積と下部構造 …… 56
第33図　SE01・SX01 …… 57
第34図　第2遺構面（SX03・SD05） …… 59
第35図　出土土器1（土師器、灰釉陶器、山茶碗：尾張産と渥美・湖西産） …… 60
第36図　出土土器2（山茶碗：東遠江産） …… 62
第37図　出土土器3（山茶碗：知多産） …… 63
第38図　出土土器4（鉢・壺・甕：渥美・湖西産） … 64
第39図　出土土器5（その他の陶器：皿・碗・瓶・鉢） …… 66
第40図　出土土器6（その他の陶器：擂鉢） …… 67
第41図　出土土器7（磁器） …… 68
第42図　出土土器8（土師質土器） …… 69
第43図　出土木製品・金属製品 …… 70
第44図　宮ノ沢遺跡周辺の地形と地名 …… 75
第45図　掛川市域の荘園・公領分布図 …… 76
第46図　原田荘関連遺跡地図 …… 78
第47図　原氏・孕石氏関連の系図1 …… 86
第48図　原氏・孕石氏関連の系図2 …… 87
第49図　宮ノ沢遺跡の変遷 …… 97
大和田遺跡
第50図　大和田遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 107
第51図　調査区およびグリッド配置 …… 109
第52図　遺構配置図 …… 111
第53図　遺物出土量の傾向 …… 112
第54図　遺構外出土遺物の分布 …… 113
第55図　SF01～SF11 …… 115
第56図　SF12～SF19 …… 116
第57図　SF20～SF22 …… 117
第58図　SF23 …… 118
第59図　出土縄文土器1 …… 119
第60図　出土縄文土器2 …… 120
第61図　出土縄文土器3 …… 121
第62図　出土石器1 …… 123
第63図　出土石器2 …… 124
第64図　中世の出土遺物 …… 128
平島Ⅰ遺跡
第65図　本遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 133
第66図　本調査範囲とグリッド配置 …… 134
第67図　全体概要図 …… 137
第68図　A区遺構配置図 …… 138
第69図　SH01 …… 139
第70図　SF01 …… 140
第71図　SF02～SF04 …… 141
第72図　SF05～SF08 …… 142
第73図　B区遺構配置図 …… 144
第74図　C区遺構配置図 …… 145
第75図　SH02 …… 146
第76図　SF09・SF10 …… 148
第77図　SF11～SF13 …… 149
第78図　SF14～SF17 …… 150
第79図　SF18～SF21 …… 151
第80図　D区遺構配置図 …… 152
第81図　SB01内の炉 …… 153
第82図　SB01 …… 154
第83図　SH03 …… 155

第84図　SH04・SH05 …… 156
第85図　SH06・SH07 …… 157
第86図　SH08～SH11 …… 158
第87図　SH08～SH11断面 …… 159
第88図　SH12・SH13 …… 161
第89図　SH14・SH15 …… 162
第90図　SH16・SH17 …… 163
第91図　SF22 …… 164
第92図　SF23～SF27 …… 166
第93図　SF28～SF34 …… 167
第94図　SD05・SD06・SX01 …… 168
第95図　出土縄文土器 …… 169
第96図　出土石器 …… 171
第97図　出土陶器・土師質製品 …… 173
第98図　出土金属製品1 …… 174
第99図　銭の重なり …… 175
第100図　出土金属製品2 …… 175
第101図　平島Ⅰ遺跡の変遷 …… 178
平島Ⅱ遺跡
第102図　本遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 183
第103図　本調査範囲とグリッド配置 …… 185
第104図　遺構配置図 …… 187
第105図　SH01・SH02 …… 189
第106図　SH03～SH05 …… 190
第107図　SF01～SF06 …… 191
第108図　SF07～SF11 …… 192
第109図　SF12～SF15 …… 193
第110図　SF16 …… 194
第111図　SD01・SX01 …… 195
第112図　出土石器 …… 197
第113図　出土陶器・土師質土器 …… 198
平島Ⅲ遺跡
第114図　本遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 203
第115図　本調査範囲とグリッド配置 …… 205
第116図　全体概要図 …… 206
第117図　A区遺構配置図 …… 207
第118図　SH01・SH04 …… 209
第119図　SH02・SH03 …… 210
第120図　SH05～SH07 …… 211
第121図　SF01～SF06 …… 213
第122図　B区遺構配置図（部分図） …… 214
第123図　B区遺構配置図 …… 215
第124図　SH08 …… 216
第125図　SH09・SH10 …… 218
第126図　SH11・SH12 …… 219
第127図　SH13 …… 220
第128図　SH14 …… 221
第129図　SF07～SF14 …… 223
第130図　SF15・SF16 …… 224
第131図　C区遺構配置図 …… 225
第132図　C区中央の建物・施設・小穴群 …… 227
第133図　SH16 …… 228
第134図　SH17・SH21 …… 229
第135図　SH22 …… 230
第136図　SF17 …… 231
第137図　出土縄文土器 …… 232
第138図　出土石器 …… 233
第139図　出土陶器・土師質土器 …… 234
第140図　平島Ⅲ遺跡の概要 …… 237
第141図　中近世の平島Ⅰ～Ⅲ遺跡 …… 241

挿表目次

総　論
第1表　掛川地区現地調査の体制 …… 5
第2表　周辺の遺跡一覧表 …… 10
第3表　対象地点一覧表 …… 11
第4表　確認調査実施期間 …… 14
第5表　本調査実施期間 …… 23
第6表　資料整理の体制（平成16年度まで） …… 26
宮ノ沢遺跡
第7表　遺物観察表 …… 71
第8表　宮ノ沢遺跡の出土遺物数 …… 98
大和田遺跡
第9表　縄文土器観察表 …… 126
第10表　石器類観察表 …… 127
第11表　出土土器片・石器類の内訳 …… 127
第12表　遺物観察表（中世） …… 128
平島Ⅰ遺跡
第13表　縄文土器観察表 …… 172
第14表　石器類観察表 …… 172
第15表　出土土器片・石器類の内訳 …… 172
第16表　遺物観察表（中近世） …… 176
平島Ⅱ遺跡
第17表　遺物観察表 …… 198
第18表　出土土器片・石器類の内訳 …… 198

写真目次

総　論
写真1　トレンチによる調査 …… 14
写真2　遺物出土状況 …… 14
写真3　住居跡の調査
（No.104・105地点　上ノ平遺跡） …… 24
写真4　中近世集落の調査
（No.95地点　宮ノ沢遺跡） …… 25
写真5　経石群の調査
（No.103地点　角虎Ⅱ遺跡） …… 25
写真6　土器の接合 …… 27
写真7　土器の実測 …… 27
写真8　記録写真の整理 …… 27
宮ノ沢遺跡
写真9　遺構の検出 …… 34
写真10　遺構の実測 …… 34
写真11　孕石神社 …… 79
写真12　播鎌城跡 …… 79
写真13　最福寺 …… 79
写真14　照月院から本郷館跡を望む …… 79
写真15　春林院 …… 79
写真16　原頼郷供養塔 …… 79
写真17　長福寺 …… 79
写真18　伝曽我墓碑 …… 79
写真19　原一族の墓塔群（照月院） …… 80
写真20　孕石城跡 …… 94
写真21　原殿明神社 …… 94
写真22　法之脇神社 …… 94
写真23　寺田地区より原野谷川上流域を望む …… 94
写真24　寺田地区より本郷方面を望む …… 94
写真25　本郷地区より播鎌地区方面を望む …… 94
平島Ⅰ遺跡
写真26　発掘調査作業 …… 135

第1章　総　論

第１節　調査に至る経過

１．第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取扱いの経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年１月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜市から東海市に至る延長約270kmの第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては東西に貫く形となり、その延長は約170kmである。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成３年９月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成４年２月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成４年５月11日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成４年８月27日付で日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会は、平成４年９月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成５年３月18日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,518㎡となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成５年11月19日付で日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成６年度には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象総面積は1,286,759㎡となっている。

平成７年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成６年２月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名関

連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第1回の協議が平成７年12月13日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成８年７月１日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組されている。

平成８年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成８年９月24日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結した。さらに調査実施機関である（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成８年９月25日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成８年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真のNo.94地点、浜北市大平のNo.136地点、同市四大地のNo.137地点の確認調査が実施されている。その後、平成９年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地に於いて確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成９年１月31日付で建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成９年12月25日付で施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により平成６年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年９月２日付で日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は、関係する市町村教育委員会に平成10年９月25日付で再踏査の依頼をするとともに、10月２日には踏査の実施に関する打ち合せ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付で県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734㎡であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年３月５日付で協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場について（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査量の増大に（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

こうした経過の中で、掛川市地域における第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査について、最終的には後述する12地点を調査対象にした。発掘調査の実施については、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所があたることとし、用地買収が進み、一部調査実施が可能となった平成８年度に、No.94地点（掛川市倉真）の確認調査から開始した。

2．現地調査の体制

掛川市域（以下、掛川地区）の確認調査および本調査（以下、現地調査）は、平成８～13年度に実施した。その体制は、第１表のとおりである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下、本事業）においては、平成11～13年度では本事業担当の課を設けて対応した。さらに、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の範囲に合わせて工区を設定し、数多くの調査に工区単位で対応した。なお、掛川地区は掛川工区内の一地区である。

掛川工区内の掛川地区・森地区・豊岡地区の担当は、森現地事務所と掛川地区事務所を拠点として各現地調査を実施した。なお、各遺跡の調査担当者については、各報告書の例言にあげることとする。

また、現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。ただし、基礎的な整理作業（各種台帳作成、写真の整理・収納、図面の修正・整理・収納、出土遺物の注記・接合・復元・収納、遺構所見・遺跡概要の整理）については、森現地事務所にて、現地調査と併行して実施した（以下、基礎整理）。

各現地調査・基礎整理には第１表以外にも多くの者が参加した。

第１表　掛川地区現地調査の体制

			平成8年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
所　長			斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠
副所長			池谷和三		山下　晃	山下　晃	山下　晃
総務部	常務理事兼総務部長		三村田昌昭	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	粂田徳幸
	次　長						
	総務課長		初鹿野英治	杉木敏雄	杉木敏雄	杉木敏雄	本杉昭一
	担当	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸
		総務係長		田中雅代			
		会計係長		杉田　智			
		副主任	杉田　智			鈴木秀幸	鈴木秀幸
		主　事			鈴木秀幸		
調査研究部	部　長		石垣英夫	石垣英夫	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄
	次　長		栗野克巳		佐野五十三	及川　司	栗野克巳 及川　司
	次長心得			佐野五十三			
	担当課長		渡瀬　治	遠藤喜和	及川　司	及川　司	及川　司
	工区主任			平野　徹	篠原修二	加藤理文	加藤理文
	主任調査研究員						大庭　宏
	調査研究員		遠藤喜和 丸杉俊一郎	竹原一人	竹原一人 深田雅一	大庭　宏 深田雅一 松井文孝 中村正宏 柴田　睦 横山智之	深田雅一 松井文孝 桶田光俊 岡部貴之
	保存処理室長						西尾太加二

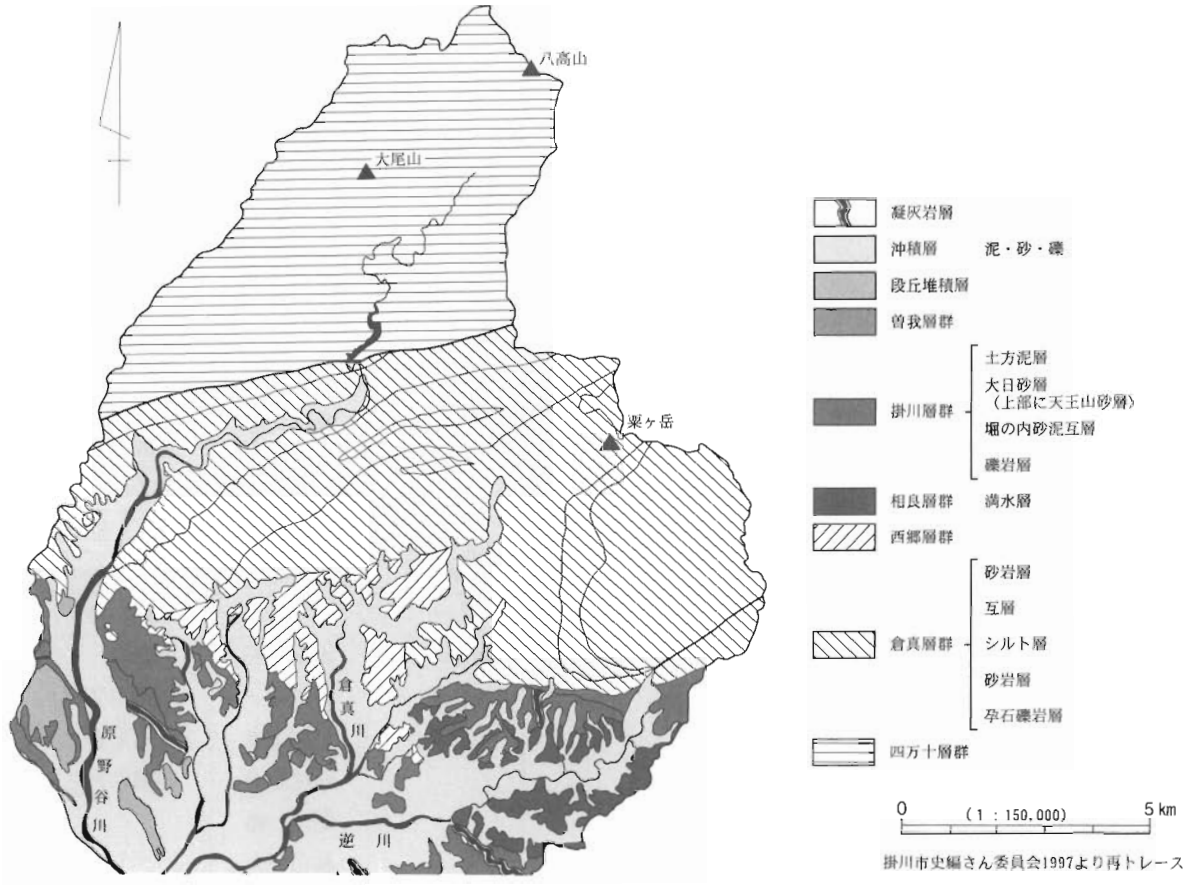
第２節　掛川市北部の位置と環境

１．地理的環境

掛川市は、北緯34度50分・東経138度00分付近の静岡県西部に位置し、総面積は約185.79k㎡、周辺の市町村の中では広い面積を有する。第二東名の予定路線は、掛川市の中でも北部をとおる。また、遺跡（埋蔵文化財）にかかわる調査については、その中でも原野谷川流域に集中することになった。したがって、ここでは原野谷川上流域を中心として掛川市北部の地理的環境をみていく。

静岡県西部は、南の太平洋側には平野部が広がり、北の内陸部は中部山岳地帯から続く山地になっている。掛川市北部は主に山地部分にあたり、低平地は倉真川や原野谷川の流域に若干みられる程度である。なお本書では、原野谷川について、蛇行しながら西に流れる原野谷中学校より上流の区域を上流域（原野谷川上流域）、そこから南へと流れて袋井市域に入るまでを中流域、それより下流の区域を下流域とする（第２図）。

原野谷川上流域の右岸（以北）に広がる山地は、６千５百万年前以前（中生代白亜紀）に海底で堆積して形成された四万十層群の砂岩や頁岩によるもので、約２千４百万年前以降（新生代新第三紀中新世）にはじまる造山活動（プレートの移動）によって陸地化したものである。その後、河川堆積や海底で堆積した泥・砂・礫によって、さらに多くの層が形成され、また幾度かの地殻変動等によって現在の地形に近付いていくことになる。原野谷川上流域の左岸（以南）に広がる山地には、約２千４百万年前以降



第１図　掛川市中北部の地質

（新生代新第三紀中新世）に堆積した倉真層群が広がっている。倉真層群は、その後に堆積して形成される西郷層群とともに、有孔虫の化石を多く産出するという。

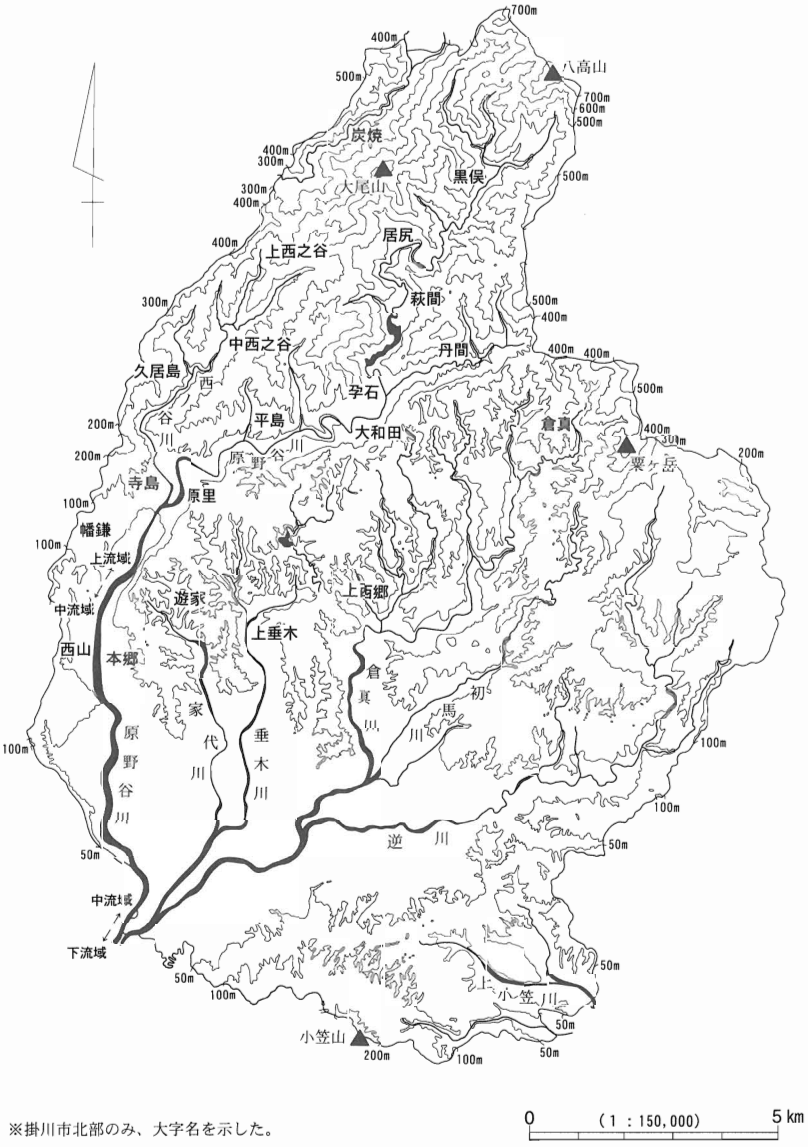
原野谷川は、大井川から春野町にまで広がる八高山山地中の谷を源流とする河川である。上流域においては、上記の山地の間を蛇行しながら、地質構造にあわせるように北東から南西に流れる。高くそびえる上記の山地が迫っており、中流域に比べても低平地は狭く圧迫感をおぼえる。ただし、狭いながらもそこには田畑が営まれている（巻頭図版等）。一方、山地においては、杉や檜の植林地や自然林が多くを占めている。ただし、山地の上部に平坦な部分もしくは緩い傾斜の部分がいくつか存在しており、茶畑などに利用されている。低平地と山地の間、山地の裾部には小さな段丘がいくつも形成されている。段丘上では、茶畑を主とする畑や人家がつくられている。また、原野谷川と支流の西ノ谷川が合流するあたりは、小扇状地的な地形になっている。

西ノ谷川などの原野谷川の支流や倉真川は、原野谷川ほど掛川市北部においては大きな流れを形成していない。これらの流域においては、低平地がさらに狭くなっている。ただし、人家や畑は営まれている。なお、原野谷川にだけはダムが建設されている。

原野谷川中流域においては、流域に沿って天竜浜名湖鉄道がとおっている。しかし、上流域の手前で路線は森町へと離れていく。道路についても、主要県道である40号線は上流域手前で森町へと西に曲がり、原野谷川上流域に沿っては一般県道である269号線が40号線から分岐してとおっている。

原野谷川上流域は、中流域とともに一つの郷や荘園の中にあった。江戸時代に編さんされた『掛川史稿』によると、平安時代の『和名類聚抄』にある遠江国佐野（益）郡の幡羅郷が、原野谷川中・上流域一帯にあたるとされている。平安時代末期に成立したといわれる原田荘の範囲も、原野谷川中・上流域の一帯に及んでいたとされている。

現在、原野谷川上流域および西ノ谷川流域は、原里・寺島など10以上の大字に分かれている（第２図）。



第２図　掛川市の地形と地名

2．歴史的環境

ここでは、原野谷川上流域に分布する遺跡を中心に概観していく（第２表、第３図）。

旧石器時代・縄文時代

原里の仲屋栄一氏は上ノ段遺跡出土の頁岩の剥片を旧石器と考えているが、疑問視されている。原野谷川上流域で最古の遺物としてあげられるものは、仲屋氏が採集した堂山遺跡（第３図９）の有舌尖頭器で、縄文時代草創期のものとされる（掛川市教育委員会1984aなど）。なお、仲屋氏は古くから原野谷川流域を中心に遺物を収集しており、仲屋考古資料館を建てて展示公開している。ここにあげる多くも、この収集品によるところである。

原野谷川上流域の縄文時代の遺跡は、発掘事例こそ多くはないが、比較的多く分布していることがわかっている。中でも、萩ノ段遺跡（11）と上ノ段遺跡（７）を主要の遺跡としてあげることができる。

萩ノ段遺跡は、原野谷川および西ノ谷川の右岸の一段丘上にある。仲屋氏所蔵の遺物に加えて、1977年に発掘調査が実施されており、多くの資料を示すことができる。縄文時代に関係する遺物には、早期の押型文土器から前期・中期までの土器・石器のほか、耳飾りがある。発掘調査の概報では、遺物の出土とともに竪穴住居跡・屋外炉跡・小形土壙状の遺構の発見が報告されている（掛川市教育委員会1977など）。

上ノ段遺跡は、萩ノ段遺跡の北東約0.5kmに位置し、東に原野谷川、西に西ノ谷川が流れる段丘上に立地する。仲屋氏が多くの遺物を採集している。縄文時代においては、中期から晩期の遺物が採集されている。多くの土器や打製石斧・定角石斧・石錘・石匙・凹石・叩石・石皿・石錐・石鏃のほか、石剣・石棒、大珠、土偶片までが採集されている（掛川市教育委員会1984aなど）。

萩ノ段遺跡と上ノ段遺跡は西ノ谷川を挟んだ位置にあり、ともに狩猟・採集を行いながら比較的長期に営まれた集落跡であると考えることができる。しかし、両遺跡の主体時期には違いがある。萩ノ段遺跡から上ノ段遺跡へという移動の想定も考えられている（掛川市教育委員会1984a）。

以上のほか、遺物が採集された遺跡は少なくない。前期までの遺物採集遺跡は平Ⅰ遺跡（13）・平Ⅱ遺跡（16）などと少ないが、中期～後期の遺物採集遺跡は中園遺跡（３）・鳥渕遺跡（４）・中瀬遺跡（10）・平Ⅲ遺跡（14）・原遺跡（21）などが加わる。発掘資料が少なく推測の域を出ないが、長期にわたる大遺跡とともに、短期で小規模な縄文時代遺跡も分布していると思われる。なお、和田遺跡（６）では発掘調査が行われ、溝や小穴の発見と土器や打製石斧の出土が示されている（掛川市教育委員会1996）。

弥生時代

原野谷川上流域は、中・下流域に比べて平野部が少なく、稲作中心に営む弥生時代の集落跡を多く想定することは難しい。しかし、全くないわけではない。発掘調査の事例自体が少なく、内容が明確になっている弥生時代の遺跡は少ないが、弥生土器が採集されている遺跡はいくつかある。中・下流域ほどの規模でなかったかもしれないが、ある程度の営みを認めることはできる。

原野谷川支流の西ノ谷川右岸の丘陵上に立地する大畑遺跡（１）では、弥生時代中期の遺物が採集されている（掛川市教育委員会1984a）。また、萩ノ段遺跡（11）や上ノ段遺跡（７）の遺物には弥生時代中期以前の土器も認められる。ただし、弥生時代後期の遺物が認められる遺跡の方が多い（掛川市教育委員会1984a）。

萩ノ段遺跡では、中期～後期の住居跡と方形周溝墓の発見が報告されている（掛川市教育委員会1977）。また、上ノ段遺跡の南東約0.3㎞、原野谷川の対岸にある堂山遺跡（９）では、発掘調査によって中期～後期の住居跡と古墳時代前期の方形周溝墓が発見されている（掛川市教育委員会2000）。その他、上ノ段遺跡などを含む10～20の遺跡で弥生時代後期の遺物が採集されている（掛川市教育委員会1984a）。なお、いずれも河川に面した段丘上に立地する遺跡である。

古墳時代

古墳時代の遺跡はほとんど知られていない。とくに集落跡については、とりあげることができる遺跡がない。ただし、堂山遺跡（９）で古墳時代前期の周溝墓が発見されている。周辺に居住域がある可能性はあり、他遺跡の弥生時代後期中心の遺物群に古墳時代前期のものが混在している可能性もある。

古墳については、明神山古墳群（18）や萩ノ段古墳（12）・平古墳群（15）などがある。しかし、いずれも数基の小規模な円墳による古墳群で、前方後円墳、大規模古墳、大群集墳などは認められない。

原野谷川中流域には古墳時代中期の前方後円墳や後期・終末期の古墳・横穴墓が多く分布している。最も上流にあり詳細のわかる古墳は、長福寺１号墳（24）である。直径約17ｍの円墳で、全長約9.6ｍの比較的大きな横穴式石室を埋葬施設とする。古く地元の有志によって発掘されており、出土遺物には須恵器・装身具・鉄製武器・鏡のほか、金銅装馬具や装飾付大刀の破片がある。古墳時代後期後半（６世紀後半）における周辺地域（小地域）の首長墓であると考えられる（田村他2001）。また、長福寺１号墳の南東約0.6㎞にある楠ヶ谷横穴群（32）や古戦横穴群（30）の一部が調査されており、須恵器・土師器・鉄製武器・装身具のほか、人骨が多く発見されている（掛川市教育委員会1997、静岡県考古学会2001）。なお、横穴墓の分布はこの周辺が北限で、原野谷川上流域では知られていない。

前期・中期に比べて後期・終末期の方が多くの古墳が広く分布することを考えれば、原野谷川上流域の古墳群は後期・終末期のものである可能性が高いと考えられる。萩ノ段古墳（12）出土遺物の中に須恵器も含まれているが（掛川市教育委員会1984a）、古墳時代終末期以降のものと判断できる。

奈良時代～中世

奈良時代以降の遺物が採集されている遺跡はいくつかある。また、堂山遺跡の発掘調査では、平安時代後期の白磁碗が出土しており、墓に入れられたものと判断されている（掛川市教育委員会2000）。しかし、多くの場合はどのような遺跡が展開しているかをあまり知ることはできない。調査事例の少ない原野谷川上流域においては、奈良・平安時代の遺跡について多くを述べることはできない。

中世の遺跡についても同様、発掘調査事例は少ない。ただし、城跡などについては、比較的多くを知ることができている（静岡県教育委員会1981、掛川市教育委員会1985など）。鎌倉時代以降、戦国時代まで国人領主である原氏が中心となっていた地域であり、原野谷川上流域の栃原城（５）・高山城（８）・寺田館（20）の跡、中流域の原砦（29）・古城（26）・幡鎌城（22）・殿谷城（第13図）などはその関連のものであるとされている。最も上流には、原氏一族である孕石氏の孕石城（２）の跡がある。なお、原氏や孕石氏については、第２章に詳しく述べている。

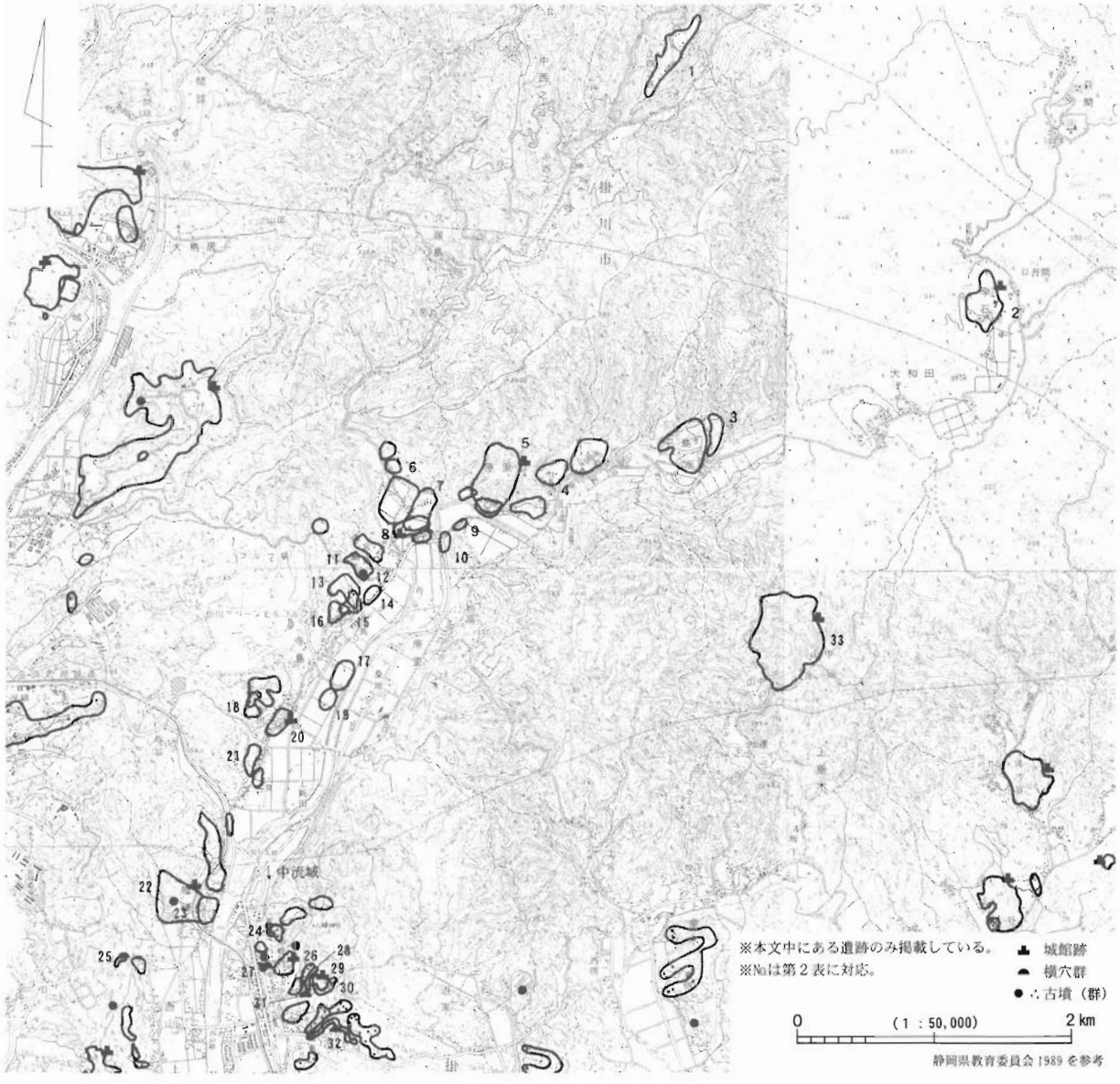
以上、時代ごとに述べてきたが、これはあくまで概観である。各遺跡の調査成果にかかわる事柄については、各遺跡の報告の中でふれることとする。また、原野谷川上流域は、発掘調査が多く行われてきた地域ではない。周知されている遺跡の大半は丘陵上に立地するが、次鎌・雨垂遺跡（17）や上川原遺跡（19）のように低地に立地する遺跡が確認される可能性はある。

第２表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	大畑遺跡	弥生	12	萩ノ段古墳	古墳	23	幡鎌古墳	古墳
2	孕石城	中世	13	平Ⅰ遺跡	縄文、弥生	24	長福寺１号墳	古墳
3	中園遺跡	縄文	14	平Ⅲ遺跡	縄文	25	久保横穴群	古墳
4	鳥渕遺跡	縄文	15	平古墳群	古墳	26	古城（本郷城）	中世
5	栃原城	中世	16	平Ⅱ遺跡	縄文、弥生、古墳	27	長福寺脇下横穴群	古墳
6	和田遺跡	縄文、弥生	17	次鎌・雨垂遺跡	弥生、古墳、奈良	28	北ノ口古墳群	古墳
7	上ノ段遺跡	縄文、弥生	18	明神山古墳群	古墳	29	原砦	中世
8	高山城	中世	19	上川原遺跡	古墳	30	古戦横穴群	古墳
9	堂山遺跡	弥生、古墳、平安	20	寺田館	中世	31	宮坂横穴	古墳
10	中瀬遺跡	縄文、弥生	21	原遺跡	縄文	32	楠ケ谷横穴群	古墳
11	萩ノ段遺跡	縄文、弥生	22	幡鎌城	中世	33	高盛城	中世

※本文中にある遺跡のみを掲載している。
※No.は第３図に対応。

掛川市教育委員会1984a･b、静岡県教育委員会1989を参考



第３図　周辺の遺跡分布図

第３節　確認調査

１．確認調査の対象地点

（１）位置と現況

第二東名の路線は、掛川市の北部を東西に横断する。掛川市域での路線は11.5km前後を測る。なお、計画ではトンネル４ヶ所，パーキングエリア１ヶ所が設定されている。

掛川市内の路線の位置を西から説明していく。西端は原野谷川右岸の丘陵地である。森町からこの丘陵を横断してくる路線は、尾根筋に対して斜方向にはしり、寺島字角庵のあたりで原野谷川流域の低地に至る。原野谷川を横断すると、路線は原野谷川左岸の丘陵・河岸段丘上を流域に沿ってはしる。大和田字上坂下あたりで原野谷川沿いを離れ、丘陵地帯に入り込み、倉真温泉や粟ヶ岳の北側をとおり、金谷町に至る。

民家は丘陵裾部や段丘上にあるが、全体的に多くはない。丘陵の多くは植林地が多いが、茶畑などに利用されている部分もある。一方、低地には水田が広がる。宅地・畑などのための造成はあるが、それ以上の大きな地形改変はほとんどない。本来の地形の形状が概ね残されているとみられる。

（２）対象地点の選定

第二東名路線範囲において、静岡県教育委員会および掛川市教育委員会が確認調査を必要とする対象地点とその範囲を選定している。掛川地区では、12ヶ所の対象地点が選定された。

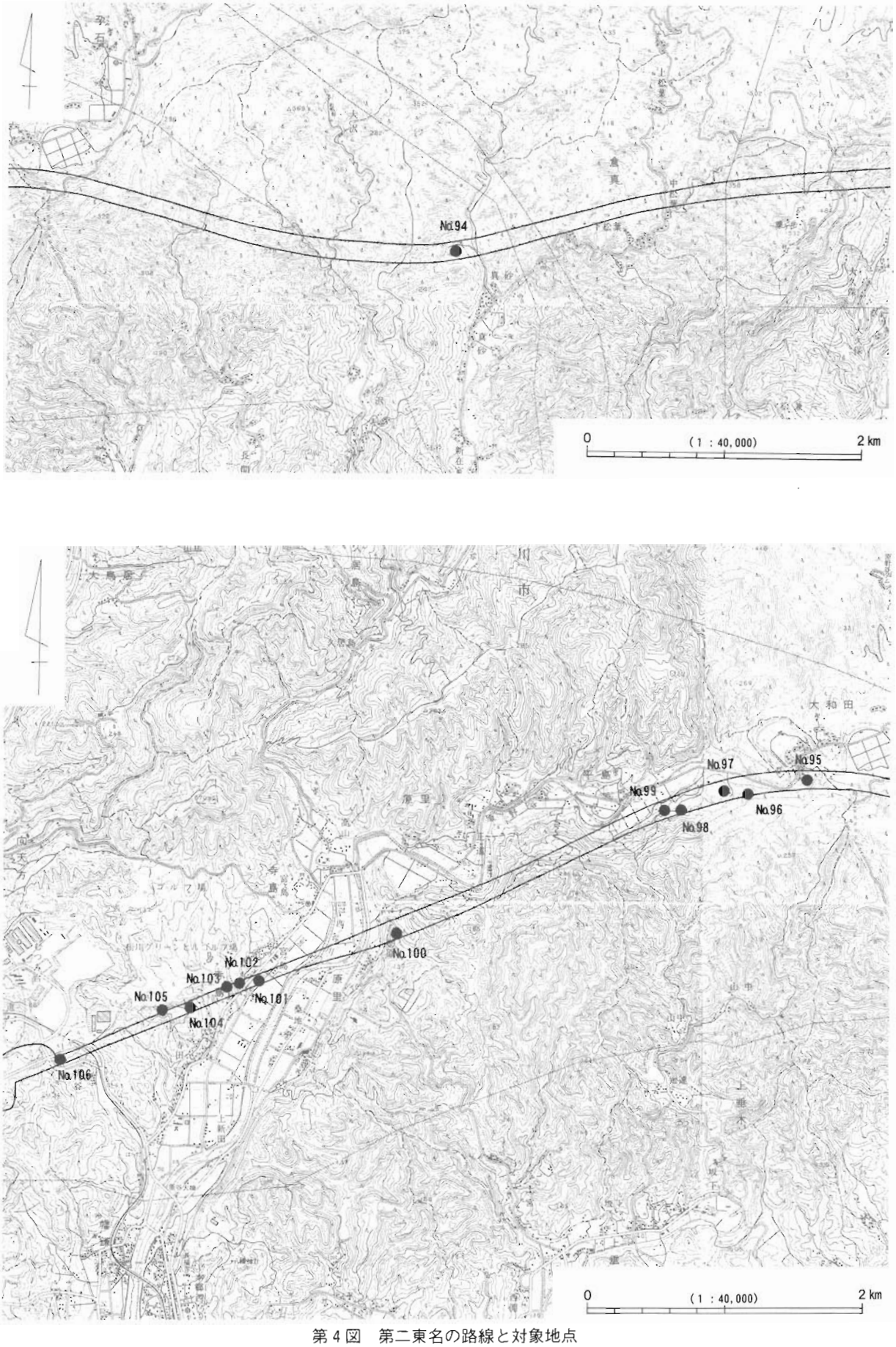
第３表に対象地点の一覧を示した。12ヶ所の対象地点の内、No.104地点は既に周知されていた埋蔵文化財包蔵地（以下、周知の遺跡）を含んだ場所である。その他は周知の遺跡を含まないが、立地地形や表採遺物、近辺の遺跡分布との関係から、遺跡の存否を含めて確認調査を行う必要があるとされた場所である。

なお、No.106地点は、西側の森町と掛川市に範囲がまたいでいるが、森地区の調査として扱った。したがって、この地点の確認調査については森地区の報告に掲載している（静岡県埋蔵文化財調査研究所2004）。

第３表　対象地点一覧表

対象地点	対応する遺跡※	対象地点	対応する遺跡※	対象地点	対応する遺跡※
No.94地点	なし	No.98地点	なし	No.102地点	なし
No.95地点	なし	No.99地点	なし	No.103地点	なし
No.96地点	なし	No.100地点	なし	No.104地点	上ノ平遺跡
No.97地点	なし	No.101地点	なし	No.105地点	なし

※現地調査前の周知の遺跡。静岡県教育委員会1989を参考。



第４図　第二東名の路線と対象地点

2．確認調査の方法と経過

（1）調査の方法

現地調査の開始にあたっては、まず駐車場・作業員棟等を設置した。ほぼ同時に、対象地点の位置と範囲を確認し、対象範囲内で調査区を設定した後、各調査区の掘削を開始した。調査区は、トレンチを基本としたが、立地地形や環境などによってテストピットによる調査区を設定する場合、また遺跡の把握の難しい場合はその周囲を拡張する場合もあった。遺跡の有無とともにその範囲を把握するため、対象範囲の全域に至るように調査区を設定することに努めたが、急斜面部においては、横穴や窯跡等の存在が想定できない限りは、作業の安全上を考慮して調査区の設定を避けた。調査区の掘削は、遺構にかかる可能性のある土層まで重機で掘削し、その後は人力で掘削した。ただし、重機が入ることができない場所については、最初から人力で掘削した。

土層については、特に遺物や遺構を発見した場所について、遺物包含層と遺構面の判断に重点を置いて、平面や調査区各壁の土層断面によって検討し、記録した。ただし、丘陵上では表土や流土・崩落土層直下が遺構面となる場合が多く、遺構の有無確認の方に重点を置いて調査を行った。

発見した遺構については、遺構面・覆土・平面形を調査区内で把握し、記録した。遺構であるか、根痕や撹乱・自然地形等であるか判断できない場合は、実際に覆土を掘り下げるか、遺構全体を把握できるように部分的に調査区を拡張して判断に努めた。

出土遺物については、基本的には位置と層位を確認・記録した後に取り上げたが、遺構内でまとまって出土した遺物や埋甕など遺構の性格を持つものについては、本調査をすることを前提として、出土位置に残したままとした。

以上の方法によって、遺構や遺物の確認と層位の把握を行い、遺跡の有無、さらに発見した遺跡の範囲について判断した。

現地の記録図面は、全体図は1/100、土層断面もしくは柱状図は1/20を基本とし、必要と判断した遺構図等は1/20もしくは1/10で作成した。なお、測量基準杭は、三角点や第二東名の工事関係用基準杭を使用し、その国土座標をもって作成した。また、条件を満たす基準杭がなかった場合は、任意に基準杭を設定して記録作業を実施した。現地記録写真は、作業工程撮影用と併行して35mm判カラーネガを用い、必要に応じて、35mm判や6×7判のモノクロも使用した。

調査区の埋め戻しについては、各地点あるいはその部分の事情に合わせて行った。埋め戻し作業は、調査区の掘削と同様、重機が入らない場所以外は重機で行った。

（2）調査の経過

各地点の確認調査は、実施できる条件がそろい、要請のあった順に実施した。よって、地点順に確認調査を実施してはいない。また、同一地点内でも部分的に数度に分けて確認調査を実施せざるを得ない場合もあった。その場合は「97地点その1」等として実施することとした。

各地点の調査期間は、第4表のとおりである。それぞれ、下に示した期間内において、先述の調査の方法に従って確認調査を実施し、遺跡の有無と範囲を把握した後、調査を終了している。

第４表　確認調査実施期間

地点名	対象面積（㎡）	平成8年度					平成10年度			平成11年度												平成12年度											
		11	12	1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
９４	5,327	―																														
９５	4,083																									-						
９６	7,483							―																								
９７ その１	18,190							―																								
９７ その２															―	―	―															
９８	7,413														-		―	-														
９９	22,433																―		-													
１００	1,040																	-														
１０１ その１	17,247										-																					
１０１ その２																										-						
１０１ その３																											-					
１０１ その４																														-		
１０２	1,887																	-														
１０３	7,580																		―													
１０４	20,347																			―												
１０５	13,347																			―												

写真１　トレンチによる調査

写真２　遺物出土状況

3．各地点の概要

（1）No.9 4 地点

位置・立地と現況

掛川市倉真の真砂地区に位置する。山地の中の谷部で、傾斜の緩い東向きの斜面地である。本地点から東に下ると、倉真川の一支流にあたる。数軒の民家と茶畑、小規模な水田が営まれていた。段造成が認められたが、現況で大きな地形改変は認められなかった。

立地地形から、縄文時代の集落跡がある可能性が考えられた。また、大きな岩があることから、祭祀的な場としての遺跡が発見される可能性も考えられた。

調査方法と確認状況

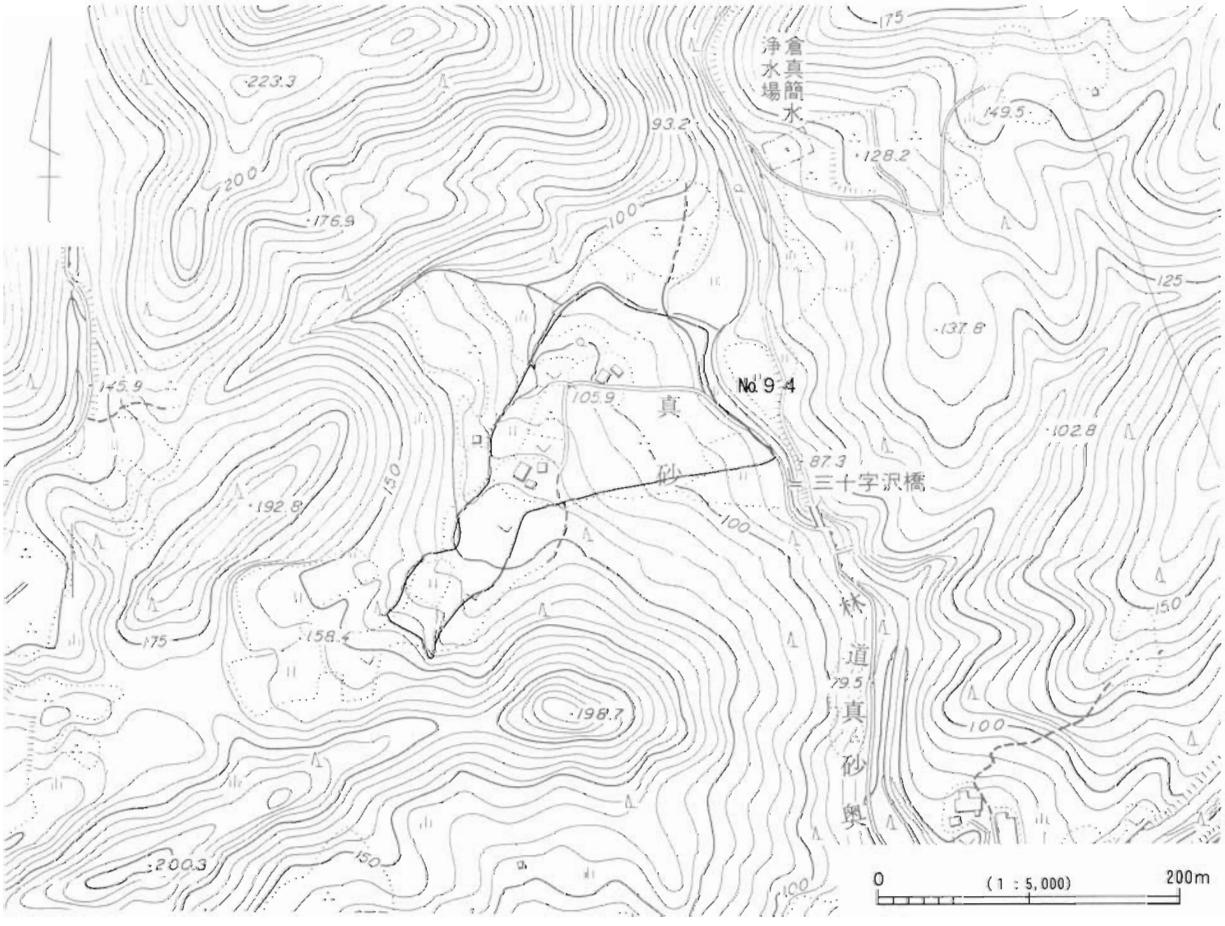
大きな岩の周辺と遺跡のある可能性が高い平坦地を中心に、テストピットによる調査を行った。

各調査区で、表土下に異なる土層が確認できた。軟礫を含む粘性の強い褐色系の層が多いが、砂質の強い層や礫層、表土下に岩盤が検出された調査区もあった。

遺物の出土はほとんどなく、調査区内における遺構の発見はなかった。

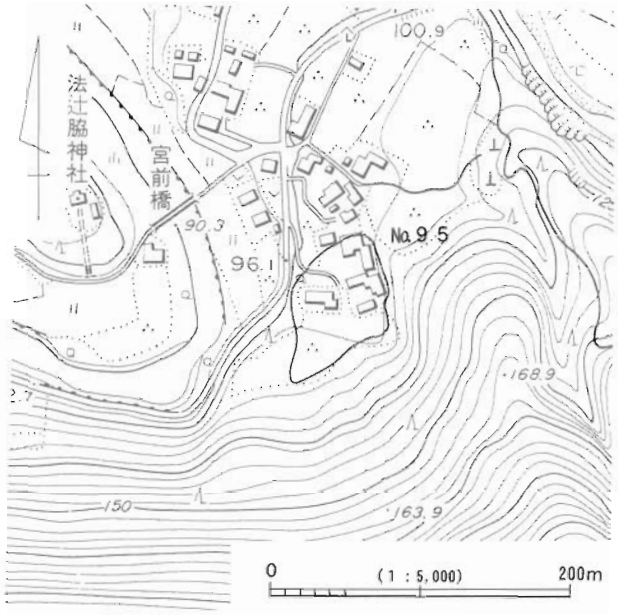
結　果

本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。



第5図　各地点対象範囲 1

（2）No.95地点



第6図　各地点対象範囲 2

位置・立地と現況

掛川市大和田619他に位置し、原野谷川の左（南）岸の段丘上に立地する。この段丘は原野谷川南の丘陵から北へ大きく張り出しており、原野谷川はその周囲をめぐるように蛇行している。本地点は、この段丘の南西隅、丘陵の急斜面に寄った段丘の付根にあたる部分になる。一部は畑であったが、大半は宅地になっていた。対象範囲の南西半部は丘陵の急斜面であったものが造成されたものと現況で判断することもできた。一方、谷筋にはしる道を挟んだ北東半部は、本来より平坦な場所であった可能性が考えられた。

表採遺物などはなかったが、立地する地形から集落跡がある可能性が考えられた。上流もしくは下流には同様の立地の遺跡（孕石城や寺ノ段遺跡など）が周知されている。

調査方法と確認状況

対象範囲の全域に対して、トレンチによる調査を行った。

南西半部では、表土を取り除くと基盤層があらわれた。遺物・遺構の発見はなかった。

北東半部では、表土下に暗褐色や灰褐色の土層の堆積を確認することができ、そこから中世以降の陶器や土師質の土器が出土した。さらに、それら遺物包含層の下に礫を多く含む黄褐色土層を確認し、その上面で小穴や土坑といった遺構を発見することができた。

結　果

段丘上の比較的平坦な部分にあたる対象範囲の北東半部で、遺物包含層および遺構の存在が認められ、遺跡が存在していることを確認した。現在、この遺跡を宮ノ沢遺跡としている。

（3）No.96地点

位置・立地と現況

掛川市大和田1185－6他に位置し、原野谷川左（南）岸の丘陵斜面中腹にある、比較的平坦な場所に立地する。茶畑に利用されていたが、大きな地形改変をみることはできなかった。

高所ではあるが原野谷川に面した平坦地であり、遺跡がある可能性は十分に考えることができた。

調査方法と確認状況

対象範囲内でも比較的傾斜が急な東半部では、表土下に丘陵の崩落による堆積が認められた。しかし、その上面・下面のいずれにおいても、遺構・遺物の発見はなかった。

平坦部が広がる対象範囲の西半部では、表土下に黒褐色土と黄褐色土の堆積が認められ、縄文土器片などが出土した。また、小穴などの遺構を発見することもできた。さらに、山茶碗の出土もあった。

結　果

比較的平坦な部分にあたる対象範囲の西半部で、遺物包含層および遺構の存在が認められ、遺跡が存在していることを確認した。現在、この遺跡を大和田遺跡としている。

（4）No.97地点

位置・立地と現況

掛川市平島834他に位置し、原野谷川の左（南）岸の丘陵から北に張り出した段丘上に立地する。河川に沿った東西方向は約0.5kmあるが、小河川による谷によっていくつかに分断されている。本地点は、その内の東部分にあたる。一部に水田もあったが、大半は茶畑であった。

表採遺物などはなかったが、平坦な地形から集落跡がある可能性が考えられた。上流もしくは下流には同様の立地の遺跡（孕石城や寺ノ段遺跡など）が周知されている。

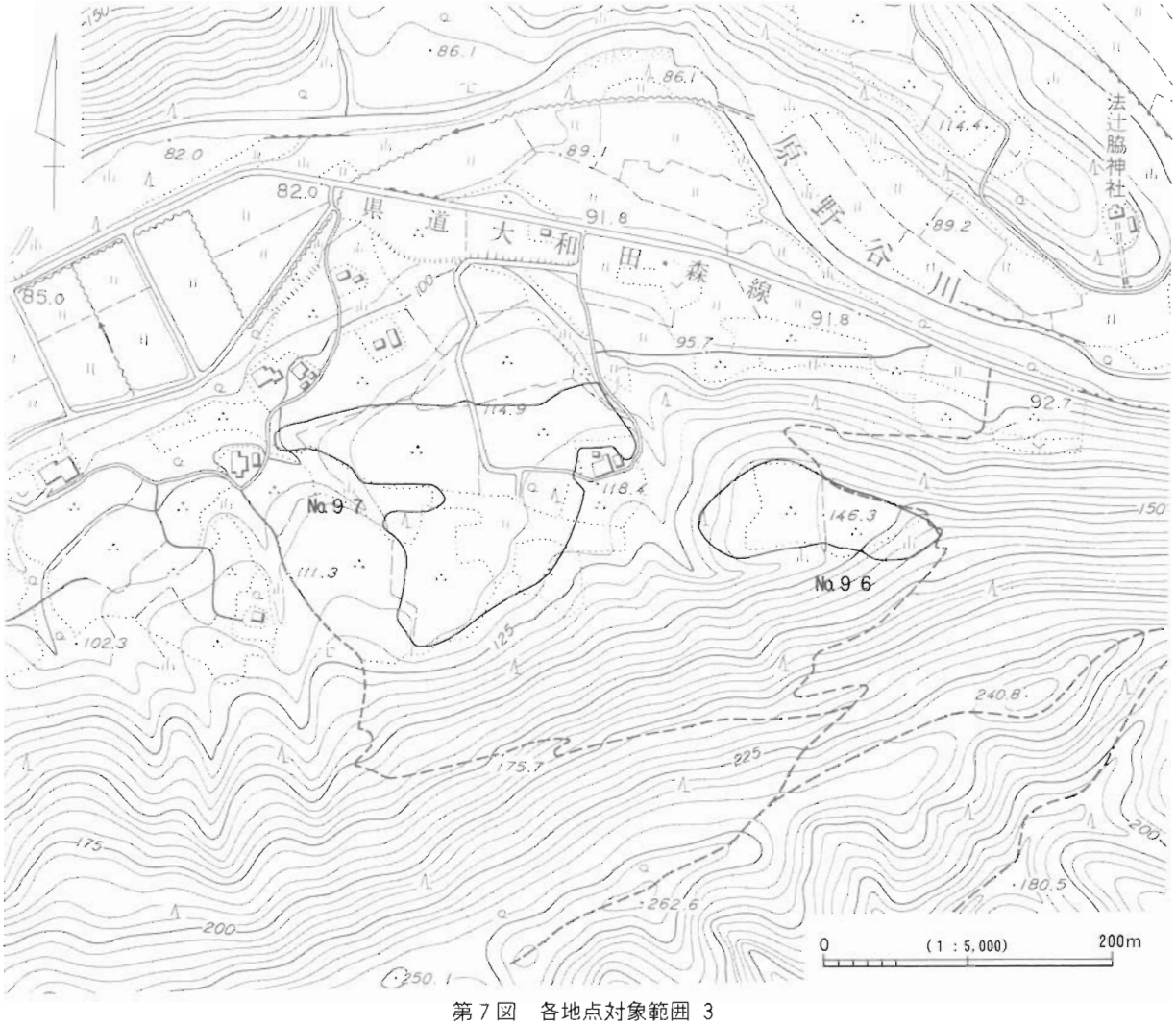
調査方法と確認状況

全域に対して、トレンチによる調査を行った。なお、2次に分けて確認調査を実施している。

表土下に暗褐色土層、その下に基盤層を確認した。暗褐色土層からは縄文時代や中世以降の遺物の出土があり、基盤層の上面で小穴などの遺構が発見された。しかし、傾斜が比較的急な場所では、遺構・遺物の発見がなかった。また、平坦部であっても、対象範囲の南寄りでは撹乱・削平を受けており、暗褐色土層は確認できず、遺構・遺物の発見もなかった場所があった。

結　果

対象範囲の南寄りの一部を除く平坦部で、遺物包含層および遺構の存在が認められ、遺跡が存在していることを確認した。現在、この遺跡を平島Ⅰ遺跡としている。



第7図　各地点対象範囲 3

（5）No.98地点

位置・立地と現況

掛川市平島217－2他に位置し、原野谷川左（南）岸の丘陵から北に張り出した段丘上に立地する。河川に沿った東西は約0.5kmあるが、小河川による谷によっていくつかに分断されている。本地点は、その内の中央部にあたる。北端は一段下がり、宅地になっていた。他の大半は茶畑であった。

表採遺物などはなかったが、平坦な地形から集落跡がある可能性が考えられた。上流もしくは下流には同様の立地の遺跡（孕石城や寺ノ段遺跡など）が周知されている。

調査方法と確認状況

宅地造成されていた北端部を除く全域に対して、トレンチによる調査を行った。

表土下に暗褐色土層、その下に基盤層を確認した。暗褐色土層からは縄文時代や中世以降の遺物の出土があり、基盤層の上面では小穴などの遺構が発見された。しかし、対象範囲の北半部では遺構・遺物の発見はなかった。北端部は造成の有無に関係なく遺跡があった可能性は低いと判断できる。また、傾斜が比較的急な場所でも、遺構・遺物の発見がなかった。

結　果

対象範囲の南寄りの平坦部で、遺物包含層および遺構の存在が認められ、遺跡が存在していることを確認した。現在、この遺跡を平島Ⅱ遺跡としている。

（6）No.99地点

位置・立地と現況

掛川市平島232他に位置し、原野谷川左（南）岸の丘陵から北に張り出した段丘上に立地する。河川に沿った東西は約0.5kmあるが、小河川による谷によっていくつかに分断されている。本地点は、その内の西部にあたる。一部には宅地もあったが、大半は茶畑などの畑であった。

表採遺物などはなかったが、平坦な地形から集落跡がある可能性が考えられた。上流もしくは下流には同様の立地の遺跡（孕石城や寺ノ段遺跡など）が周知されている。

調査方法と確認状況

対象範囲の全域に対して、トレンチによる調査を行った。

表土下に暗褐色土層、その下に基盤層を確認した。暗褐色土層からは縄文時代や中世以降の遺物の出土があり、基盤層の上面では小穴などの遺構が発見された。遺構・遺物の量は多くなかったが、段丘上のほぼ全面に分布し、南側丘陵へと上がっていく斜面部にも認められた。

結　果

段丘上および南に上がる斜面部で、遺物包含層および遺構の存在が認められ、遺跡が存在していることを確認した。現在、この遺跡を平島Ⅲ遺跡としている。

(7) No.100地点

位置・立地と現況

掛川市原里637他に位置し、原野谷川左岸の丘陵上に立地する。原野谷川は蛇行しながら流れているが、この丘陵の北東側で、西南西への流れから南南西への流れへと大きく変わる。丘陵上には若干の平坦部があり、茶畑になっていた。

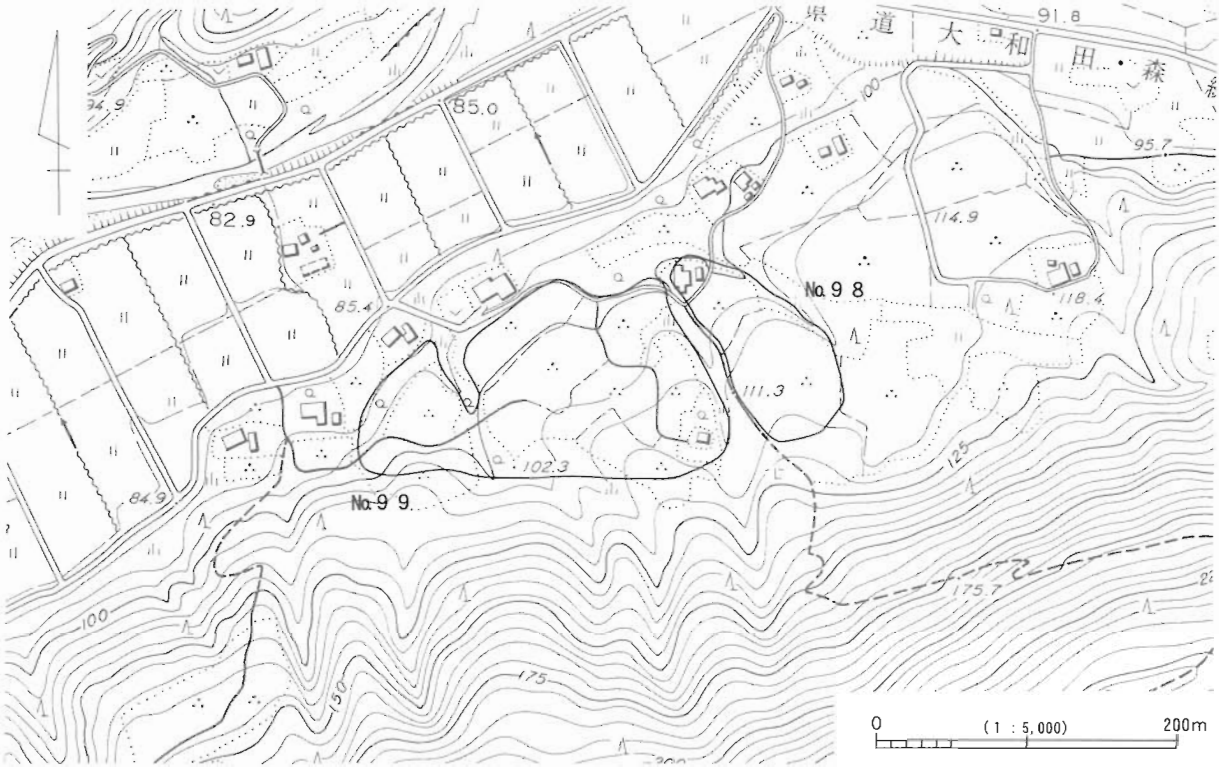
表採遺物などはなかったが、平坦部分があることから、何らかの遺跡がある可能性も考えられた。

調査方法と確認状況

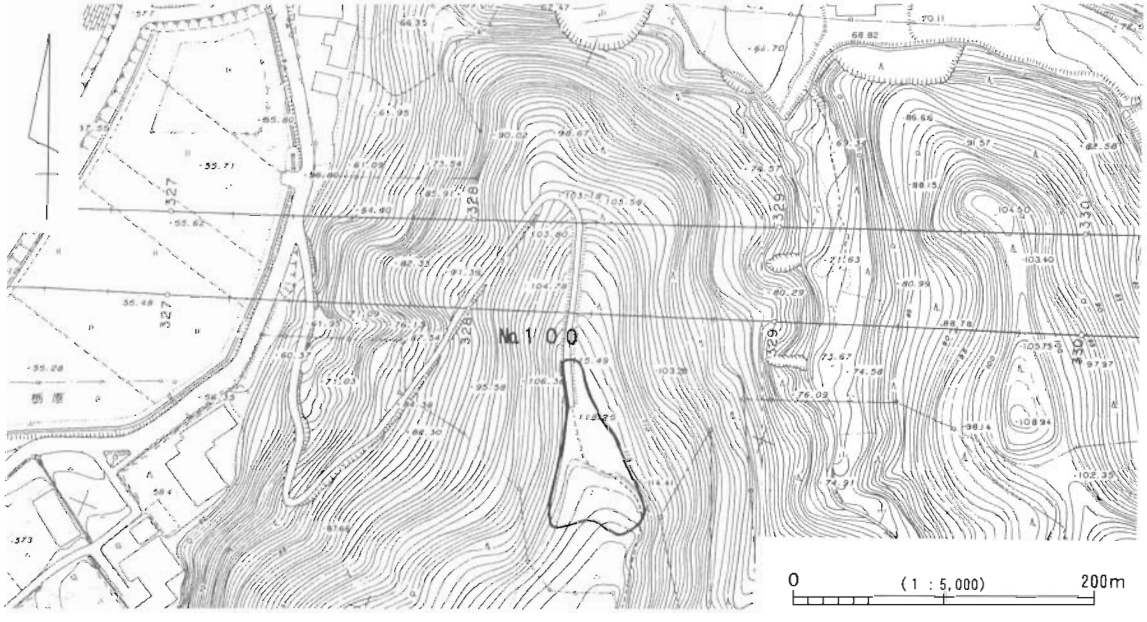
トレンチによる調査を行ったが、表土下に基盤層があらわれ、遺構・遺物の発見は全くなかった。

結　果

本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。



第8図　各地点対象範囲 4



第9図　各地点対象範囲 5

（8）No.１０１地点

位置・立地と現況

掛川市寺島1268－１他に位置し、原野谷川右岸の低地に立地する。大半は水田であったが、西部には畑や宅地があり、標高が数十cm高くなっている。微高地の存在を予測することもできた。

微高地の存在が予測できたことと、土師質の土器片が周辺で表採されたことから、遺跡がある可能性が考えられた。本地点の南には、次鎌・雨垂遺跡や上川原遺跡といった低地の遺跡が周知されている。

調査方法と確認状況

トレンチとテストピットを併用して、４次に分けて調査を行った。

対象範囲のほぼ全体において、表土・盛土下に近代以降の水田の耕作土などがあり、その下に河川堆積層（砂・礫層）が認められた。すなわち、本来は河川の中にあったことが確認できた。なお、微高地が予測された場所は、台地を切り崩して微高地状に造成した場所であることが確認できた。

いずれの場所においても、遺構・遺物の発見は全くなかった。

結　果

本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。

（9）No.１０２地点

位置・立地と現況

掛川市寺島1130－１他に位置し、原野谷川右岸の南にのびる丘陵先端部上に立地する。丘陵上に傾斜の緩い部分がある。大半は茶畑であったが、丘陵最先端の斜面には、西宮えびす神社があった。

表採遺物などはなかったが、平坦な地形から遺跡がある可能性が考えられた。

調査方法と確認状況

対象範囲の全域に対して、トレンチによる調査を行った。

丘陵頂上部では、表土下に基盤層を確認することができた。その東側では、黒褐色土によって埋まった谷を検出することができた。ただし、谷部からの出土遺物は非常に少なかった。

対象範囲北側の平坦部で、遺構・遺物が発見された。縄文土器・土師器が出土、住居跡も発見された。

結　果

対象範囲の内、丘陵頂上筋の北寄りに遺跡の広がりを確認できた。また、その内容から、縄文時代と古墳時代の集落跡であると予測できる。現在、この遺跡を角庵Ｉ遺跡としている。

(10) No.１０３地点

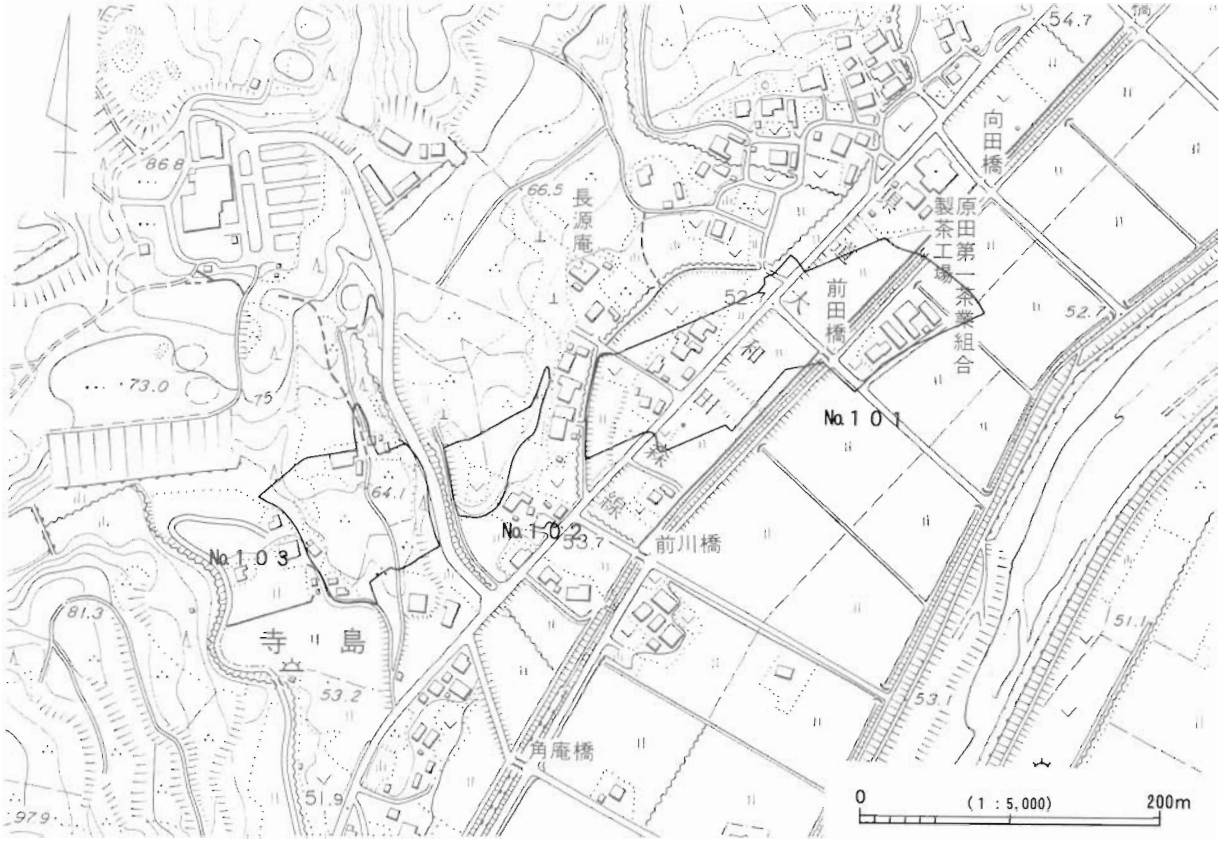
位置・立地と現況

掛川市寺島1068他に位置し、原野谷川右岸の南にのびる丘陵先端部上に立地する。丘陵上は平坦部になるが、中央に南北方向の浅い谷が確認できる。丘陵の東西斜面も範囲になっていたが、急斜面であり、遺跡が立地するような地形ではない。対象範囲の北端部に建物があったが、他は畑になっていた。

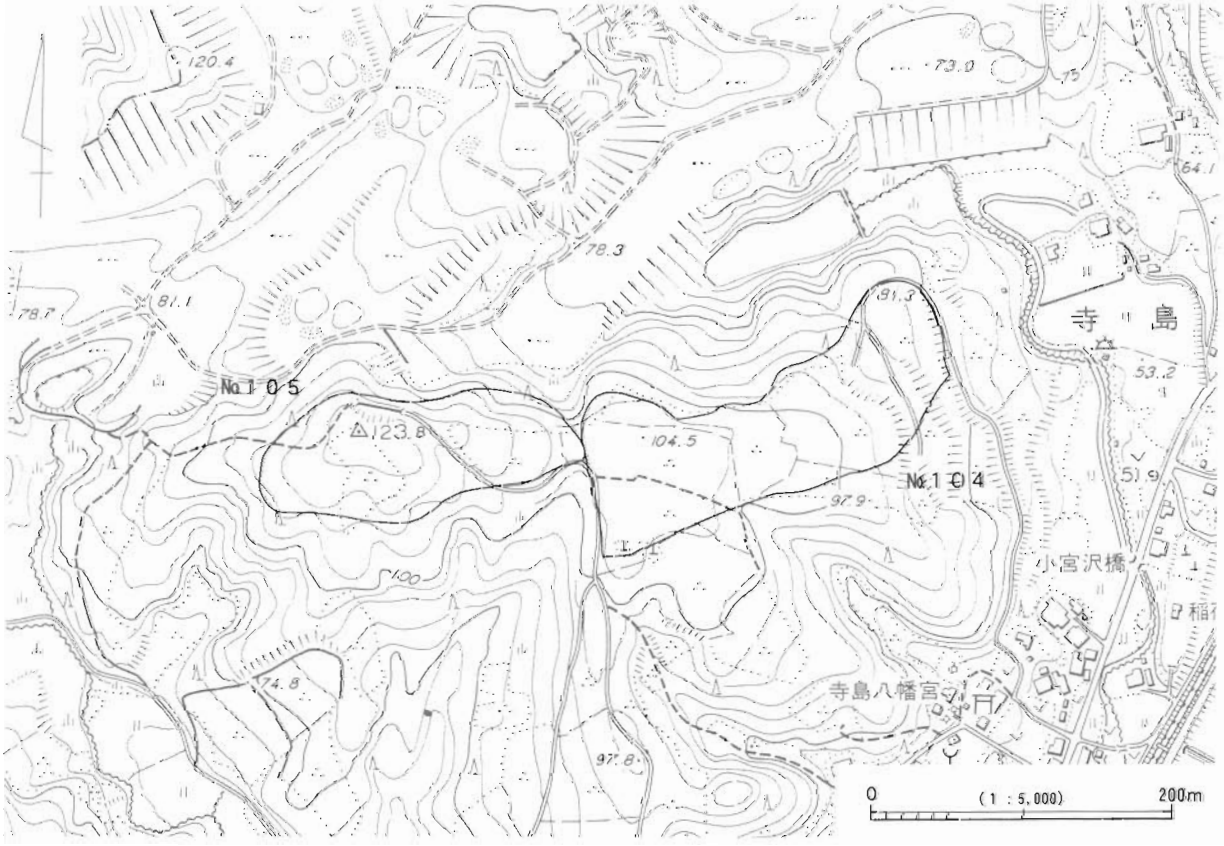
表採遺物などはなかったが、平坦な地形から遺跡がある可能性が考えられた。

調査方法と確認状況

トレンチによる調査を行った。対象範囲の北端の建物部分については、確認調査を実施することができなかった。この部分については、周辺の調査状況から判断することになった。



第10図　各地点対象範囲 6



第11図　各地点対象範囲 7

中央の谷部では、表土下に黒色土の堆積が確認できた。他の部分では、表土・撹乱土層の下に基盤層（黄色や黄灰色の砂・礫層）が確認できた。

丘陵上の部分で遺構・遺物の発見があった。中央の谷部では遺構の発見がなかったが、黒色土から多くの土器片が出土した。発見した遺構には、竪穴住居跡もあった。

結　果

対象範囲の内、東西斜面と南に下る部分を除く丘陵上に遺跡の広がりが確認できた。また、その内容から、古墳時代の集落跡であると予測できる。現在、この遺跡を角庵Ⅱ遺跡としている。

(11) No.１０４地点

位置・立地と現況

掛川市寺島1729－１他に位置し、原野谷川右岸の一丘陵上に立地する。原野谷川に向かって東にのびる丘陵で、丘陵上には広い平坦部が存在する。ほぼ全域に茶畑が広がっていた。

対象範囲は、周知されていた上ノ平遺跡の一部にあたる。縄文・弥生時代の遺物が採集されている。

調査方法と確認状況

対象範囲の全域に対して、トレンチによる調査を行った。

ほぼ全体において、表土・撹乱層の下に黄褐色粘質土層が確認できた。

丘陵の先端（東側）の急斜面を除く対象範囲の大半において、遺構・遺物の発見があった。黄褐色粘質土層の上面で遺構が発見でき、暗褐色の遺構内覆土を中心に遺物の出土があった。発見した遺構には住居跡や溝などがあり、出土遺物には弥生土器が多かった。

結　果

対象範囲の大半で遺跡の広がりを確認でき、周知されていたとおり上ノ平遺跡の存在と範囲を把握することができた。また、発見の遺構・遺物から、弥生時代の集落跡であると予測できる。

(12) No.１０５地点

位置・立地と現況

掛川市寺島1743－３他に位置し、原野谷川右岸の一丘陵上、No.104地点の西側の高くなった部分に立地する。No.104地点のような広い平坦部はない。茶畑と林が広がっていた。

No.104地点では上ノ平遺跡が周知されており、その範囲が本地点にも広がっている可能性がある。また、No.104地点の南側に古墳群の存在が周知されている。平坦面がない本地点には、No.104地点とは異なり、古墳が立地している可能性も考えられた。

調査方法と確認状況

対象範囲の全域に対して、トレンチによる調査を行った。

西寄りの高所では、表土層下に黄色礫層が確認できた。一方、東寄りの下がった部分では、表土層下に黄色・灰色の粘質土層が確認できた。

西寄りの高所では遺構の発見がなかったが、東寄りの下がったところでは、溝や小穴、竪穴住居跡の可能性が高い遺構が発見された。弥生土器の出土もあった。

結　果

対象範囲の内、東寄りの下がった部分で、遺跡の広がりを確認することができた。発見遺構・遺物の内容がNo.104地点（上ノ平遺跡）と同様であり、同じ上ノ平遺跡の範囲になると判断できる。

第４節　本調査

１．本調査の方法と経過

ここでは、主に掛川地区の本調査全体に関わる事項について触れる。

本調査を実施した対象地点とその範囲は、前節で述べた確認調査の結果に基づいて静岡県教育委員会から示されたものである。なお、本調査を実施した対象地点および対応する遺跡名は、第５表にあげたとおりである。

本調査の実施においては、調査範囲および調査に必要な諸用地（作業員棟・駐車場用地等）が確保できたこと、立木伐採・除去等の調査環境が整うこと、調査を行う体制が整うことといった条件がそろい、要請のあった順に開始することとなった。したがって、西から東、東から西へといったような整理された順序で調査を実施することはできなかった。また、№103地点（角庵Ⅱ遺跡）では、調査対象範囲をさらに３分割、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期と３回に分け、それぞれ間を置いて調査を実施した。

調査の方法は、第１節にある調査体制の中である程度の統一を図った。しかし、詳細においては各調査で異なるため、各遺跡の調査方法と経過については、各遺跡の報告で述べることとする。なお、各本調査の実施期間は、第５表に示したとおりである。

第５表　本調査実施期間

遺跡名	地点・期	面積（㎡）	平成11年度					平成12年度										平成13年度										
			11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
宮ノ沢遺跡	９５	2,000																													
大和田遺跡	９６	2,600																													
平島Ⅰ遺跡	９７	7,200																													
平島Ⅱ遺跡	９８	1,900																													
平島Ⅲ遺跡	９９	8,900																													
角庵Ⅰ遺跡	１０２	600																													
角庵Ⅱ遺跡	１０３	Ⅰ	3,060																												
		Ⅱ																													
		Ⅲ																													
上ノ平遺跡	１０４ １０５	13,900																													

2．本調査の概要

各遺跡の調査結果の概要は以下のとおりである。詳細は各遺跡の報告で述べるが、ここでは時代ごとに発見された遺構・遺物を概観してみたい。

縄文時代

大和田遺跡（No.96地点）・平島Ⅰ遺跡（No.97地点）・角庵Ⅰ遺跡（No.102地点）で、縄文時代早期の土器・石器が出土している。さらに、大和田遺跡と角庵Ⅰ遺跡では、被熱跡や焼土などが認められる土坑が発見されており、覆土と出土遺物から縄文時代早期の遺構であると判断できる。なお、角庵Ⅰ遺跡では、縄文時代前期の土器も出土している。平島Ⅰ遺跡については、明確に縄文時代早期のものと判断できる遺構はない。出土遺物量も、縄文時代中期以降に比べて縄文時代早期は非常に少ない。平島Ⅰ遺跡は、大和田遺跡から西に下った場所に位置しており、大和田遺跡における早期の営みの周縁として考えることもできる。

平島Ⅰ遺跡では、縄文時代中期の土器・石器の出土が多く、この時期と判断できる竪穴住居跡などが発見されている。住居跡は平面楕円形で、中央やや北東寄りに破壊された石囲炉があり、壁寄りに6基以上の柱穴と埋甕1基がめぐる。縄文時代中期の遺物は、大和田遺跡・平島Ⅲ遺跡（No.99地点）・角庵Ⅰ遺跡・角庵Ⅱ遺跡（No.103地点）・上ノ平遺跡（No.104・105地点）でも出土している。しかし、これらの遺跡における縄文時代中期の遺構としては、上ノ平遺跡の落し穴ぐらいしかあげることができない。遺跡の残存状況や詳細な時期の検討も要するが、居住・狩猟・採集・移動といった人々の活動の異なる場面が、それぞれの遺跡にあった可能性も考えることができる。

弥生時代～古墳時代中期

弥生時代後期～古墳時代前期の大規模集落が、上ノ平遺跡（No.104・105地点）で発見されている。丘陵上の平坦部から斜面への落ち際にかけて、住居跡180軒以上と掘立柱建物跡180棟以上が重複しながら発見されている。住居跡では、竪穴住居跡のほかに溝が周囲に巡る（竪穴）住居跡も多く発見されている。建物跡では、数種の規模・間数・柱穴規模が認められ、さらに、布掘りの建物跡が1棟発見されている。広範囲に集落を調査し、様々な構造・形態・規模の住居跡・建物跡を調査することができた。住居・建物および集落全体の構造とその変遷をみることができ、その際においても、特別な役割を伴っていたと考えられる建物の存在は注目に値すると考える。また、方形周溝墓が2基だけ発見されており、その位置付けについても興味深い。

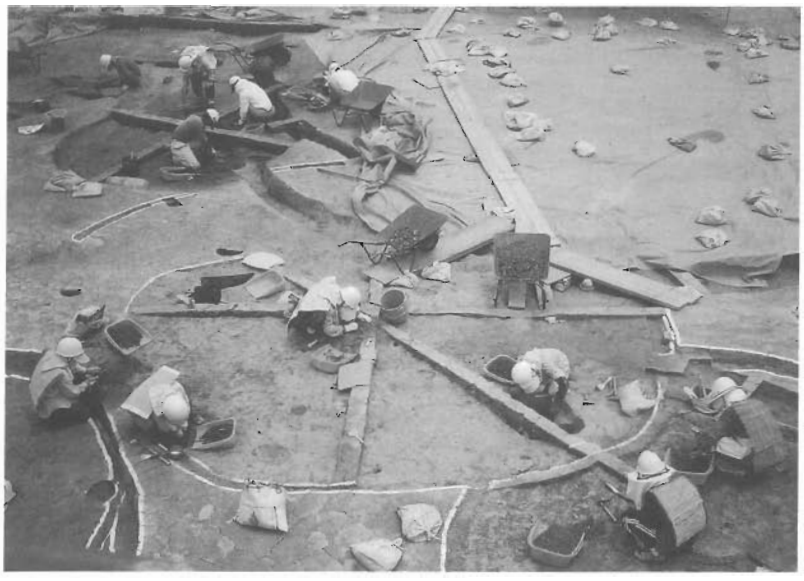


写真3　住居跡の調査　（No.104・105地点　上ノ平遺跡）

上ノ平遺跡の東に下った場所に位置する角庵Ⅱ遺跡（No.103地点）でも、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土し、古墳時代前期の竪穴住居跡が発見されている。掘立柱建物跡も発見されている。古代以降の遺跡と重複しているために時代の特定が難しいが、上ノ平遺跡の建物跡と類似した規模・特徴をもつ建物跡もある。そのほか、ガラス小玉の出土もあった土坑群があり、上ノ平遺跡の方形周溝墓とは異なる位置付けができる墓域の存在を想定することもできる。

宮ノ沢遺跡（No.95地点）では、古墳時代前期後半～中期前半の土師器（高坏）が１点出土している。ただし、この時期の遺構は宮ノ沢遺跡には認められない。

古墳時代後期～奈良時代

古墳時代終末期～奈良時代のはじめ（７～８世紀）の集落跡が、角庵Ⅰ遺跡（No.102地点）と角庵Ⅱ遺跡（No.103地点）で発見されている。竪穴住居跡を主とするが、先述のとおり、角庵Ⅱ遺跡で発見された掘立柱建物跡のなかには、この時期のものがあるかもしれない。角庵Ⅰ遺跡では、石製紡錘車の未製品が出土しており、この集落の位置付けを考える上でも注目に値する。なお、東側丘陵の高所には、古墳の分布（明神山古墳群など）が知られている。

中世以降

宮ノ沢遺跡（No.95地点）からは、平安時代後半～鎌倉時代（11～13世紀）の遺物が多く出土している。掘立柱建物跡の柱穴であろう小穴が多く検出されており、鎌倉時代の遺構も含まれている可能性がある。また、大和田遺跡（No.96地点）では、鎌倉時代（13世紀）の炭窯１基が発見されている。

宮ノ沢遺跡・平島Ⅰ遺跡（No.97地点）・平島Ⅱ遺跡（No.98地点）・平島Ⅲ遺跡（No.99地点）で多く発見されている小穴は、建物等の柱穴であると判断でき、礫が多く入れられているものもあった。各遺跡からは室町時代（15世紀）以降の遺物も出土しており、室町～江戸時代の建物跡が多いと考えられる。とくに、各遺跡で梁行５ｍ以上、桁行10ｍ以上の建物があったことがわかっており、同じ原野谷川上流左岸の各段丘上に、同様の建物を伴う集落が点在していたことがわかる。なお、平島Ⅰ・Ⅲ遺跡では、建物跡のほかに火葬に伴う遺構や炭窯も検出されている。（第２～６章参照）

角庵Ⅱ遺跡（No.103地点）では、経石が400個程入った土坑が発見されている。

写真４　中近世集落の調査　（No.95地点　宮ノ沢遺跡）

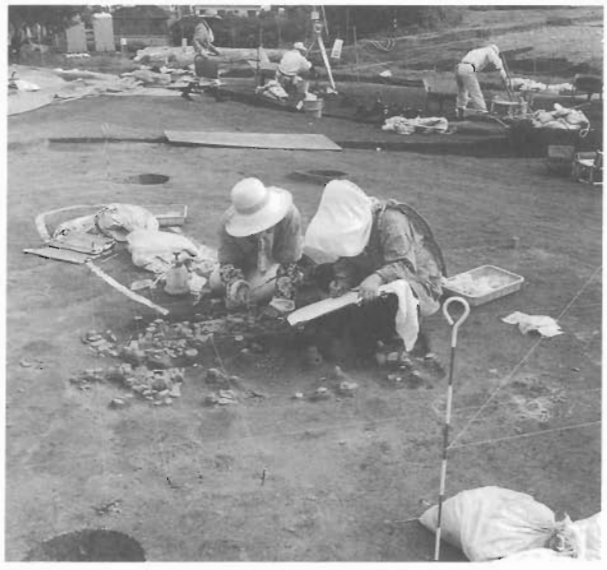


写真５　経石群の調査　（No.103地点　角庵Ⅱ遺跡）

第５節　資料整理

１．資料整理の体制

本事業では、第１節のとおり現地調査を優先したため、基礎整理は継続的に実施してきたものの、本格的な資料整理・報告書作成の作業はしばらく実施することができなかった。

現地調査・基礎整理を工区・地区ごとに実施してきたこと、現地調査を優先したことから多くの資料整理が必要になってきたこと、その多くの遺跡の資料整理を各現地担当者が同時に実施することが物理的に不可能なことなどから、資料整理および報告書の作成は、現地調査の実施と同様に工区や地区ごとのまとまりの中で、順次遺跡ごとに実施することとなった。

掛川地区の資料整理は、平成13年度の途中に開始している。現在（平成17年３月時点）、掛川地区の資料整理は豊岡・森・掛川地区の一部として、袋井整理事務所で実施している。なお、遺物の写真撮影は当研究所写真室、金属製遺物のクリーニングおよび保存処理は当研究所保存処理室での実施を基本としている。

掛川地区の資料整理体制については、現在も資料整理継続中のために、現地調査の体制のように一括掲載することはできない。よって、各報告書にてそれに関わる資料整理の体制を示すこととする。なお、本書に関わる資料整理の体制は下の第６表のとおりであるが、他にも多くの者が参加している。

第６表　資料整理の体制（平成16年度まで）

			平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
所　長			斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠
副所長			山下　晃	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫
総務部	常務理事兼総務部長		粂田徳幸	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫
	次　長				鎌田英巳	鎌田英巳
	総務課長		本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳	鎌田英巳
	担当	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸
		副主任	鈴木秀幸			中鉢京子
		主　事		鈴木秋博	鈴木秋博	
調査研究部	部　長		佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	山本昇平
	次　長		栗野克巳 及川　司	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫
	担当課長		及川　司	篠原修二	足立順司	中嶋郁夫
	保存処理室長		西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
	工区主任		加藤理文			
	主任調査研究員		大庭　宏	松井文孝		
	調査研究員			田村隆太郎	田村隆太郎	田村隆太郎

2．資料整理の方法と経過

例言２にも示したが、現地調査・資料整理とも工区・地区ごとに実施していくことから、報告書も地区ごとに作成することになった。また各地区の最初には、工区・地区単位で実施してきた調査の経過や概要等を地区ごとにまとめたもの（総論）を掲載することになった。

以上により、掛川市における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書は、本書を「掛川市－１」として、総論と数ヶ所の遺跡の報告を掲載し、続く「掛川市－２」以降の報告書に残る遺跡（角庵Ⅰ遺跡、角庵Ⅱ遺跡、上ノ平遺跡）の調査報告を掲載することとした。

各現地調査の結果に基づいて、静岡県教育委員会および掛川市教育委員会により、周知の埋蔵文化財包蔵地登録内容が変更になる部分がある。また、追加登録される埋蔵文化財包蔵地もある。以後は、変更後の遺跡名・遺跡範囲等に基づいて報告することとする。本調査を実施した各遺跡名等は第５表のとおりであるが、詳細は各遺跡の報告中でも触れることとする。

なお、現地調査終了時から周知内容の変更が行われるまでに多少の時間が経過している。そのため、変更以前に調査成果の一部を公表した場合が生じたが、その場合は当然、変更前の遺跡内容で公表している。これまで公表しているものと本書および各遺跡の報告書とで相違がある場合は、本書および各遺跡の報告書をもって訂正することとする。

資料整理の作業についてであるが、前述した資料整理の体制同様、現在資料整理継続中のために掛川地区について一括掲載することはできない。したがって、各遺跡に関わる資料整理の方法と経過は各遺跡の報告中に記すことにする。

本章（総論）に関しては、調査日報等の調査資料（書類）の整理、挿図表の作成、報告の執筆・編集といった資料整理および報告書作成作業を行った。本書掲載の各遺跡の資料整理とあわせて、平成13年９月～12月、平成14年３月、同７月～12月、平成15年１月、同９月～12月、平成16年１月～平成17年３月に断続的に実施した。

写真６　土器の接合

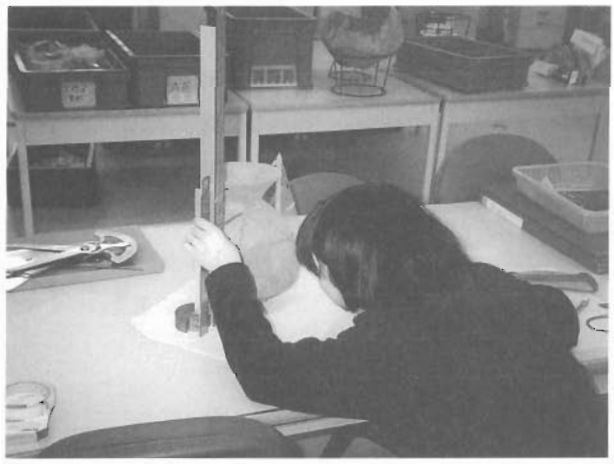


写真７　土器の実測

写真８　記録写真の整理

掛川地区各地点の確認調査から本章の執筆までにあたって、次の方々・機関に御世話になりました。ここに記して深く感謝の意を表します。（敬称略、五十音順）

井村広巳　大熊茂広　木村弘之　戸塚和美　前田庄一　松本一男　村松弘規　掛川市教育委員会

参考文献

掛川市教育委員会　1977　『萩ノ段遺跡調査概報』

1984a　『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』

1984b　『掛川市遺跡分布調査報告Ⅱ』

1985　『殿谷城址他遺跡』

1996　『出土文化財展』

1997　『出土文化財展』

1999　『出土文化財展』

2000　『出土文化財展』

2003　『原砦』

掛川市史編さん委員会　1997　『掛川市史』上巻

2000　『掛川市史』資料編　古代・中世

静岡県教育委員会　1981　『静岡県の中世城館跡』

1989　『静岡県文化財地図Ⅱ－焼津市以西－』

静岡県考古学会　2001　『東海の横穴墓』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004　『森町睦実の遺跡』

田村隆太郎・鈴木一有・大谷宏治・井口智博　2001　「遠江長福寺1号墳の研究」　『静岡県考古学研究』№33

松井一明・大谷宏治　2001　「長福寺出土の遺物について」　『静岡県考古学研究』№33

第2章　宮ノ沢遺跡

第二東名No.95地点

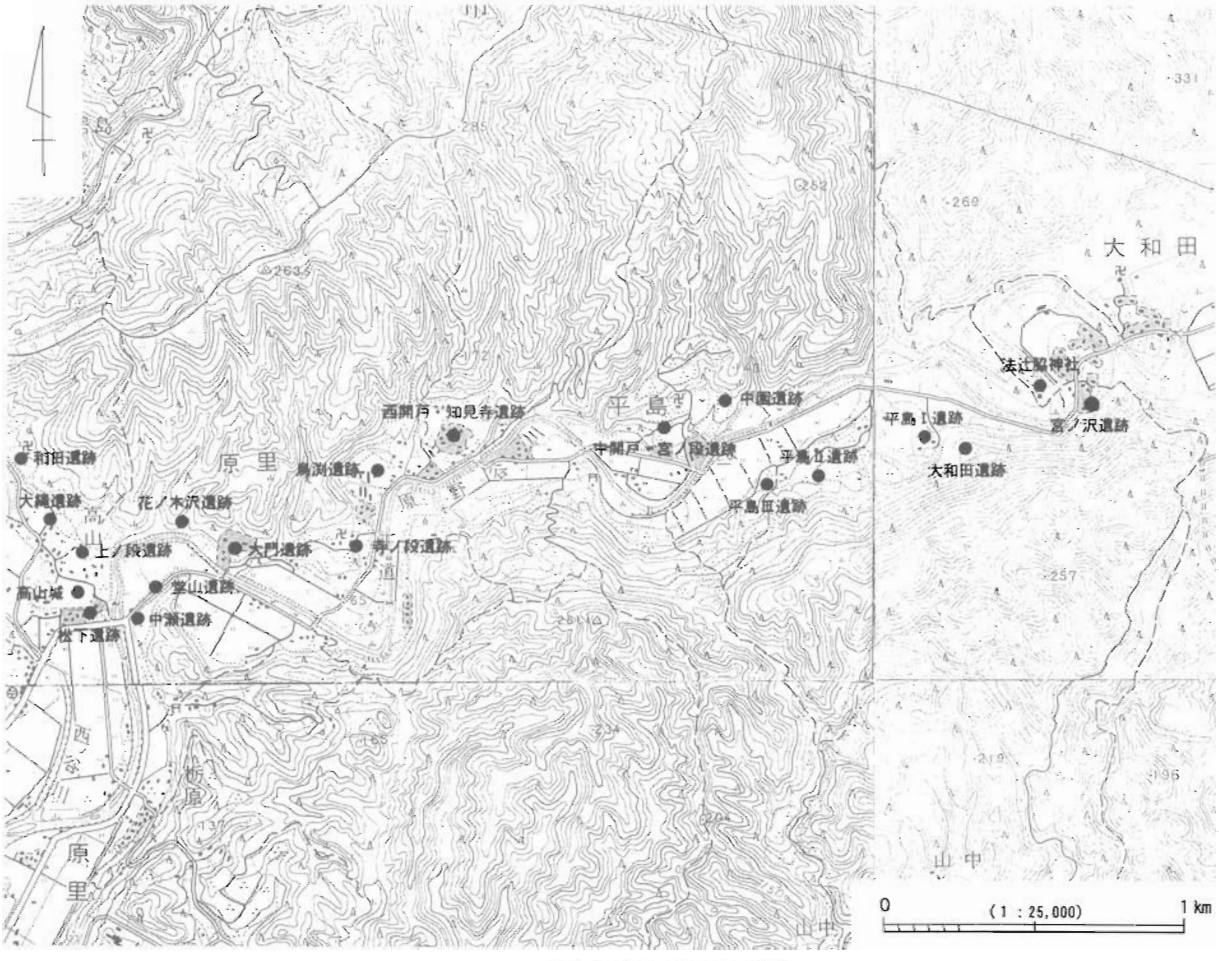
第１節　位置と環境

１．位置と地理的環境

本遺跡（宮ノ沢遺跡）は、静岡県掛川市街の北西約18km、大和田地区に位置する。大和田と平島の境付近で原野谷川が大きく曲流する左岸の小河岸段丘上で、標高101ｍ前後、南側丘陵から続く緩やかな勾配をもつ平場上に立地する。調査区南東隅が高く北西に向かって下るが、比高差は１ｍに満たない。西側を流れる原野谷川の水面との比高差は約12.3ｍである。

原野谷川は、昭和46年に丹間地区に農地防災ダムが竣工して以来、横断の障害にもならない程度の緩やかな流れの浅瀬になっている。しかし、ダムが竣工する以前の浸食作用は激しかったと思われる。洪水などの災害も少なくなかったであろう。

調査区南側の丘陵は「ナギノ沢」との小字名が付いている。「ナギ」とは、急崖状の地すべり地帯を意味し、古来より、原野谷川の浸食作用に伴う地すべりが絶えることなく続いていたようである。しかし、土砂災害への対応が必要ではあるものの、山際からの水が切れることがない平場であり、定住できない場所ではないとみることもできる。調査前の現状では数軒の民家が点在し、わずかであるが畑・茶畑が営まれていた。なお、調査区の東側は南側丘陵の支尾根が北へとのびている。調査区西側は原野谷川の形成した段丘崖に近接し、この段急崖と調査区のわずかな空間に県道が通っている。



第12図　本遺跡の位置と周辺の遺跡

2．歴史的環境と調査歴

本遺跡の原野谷川をはさんだ対岸には、法之脇（法辻脇）神社が鎮座しており、「宮ノ沢」の「宮」はこれに関連するものであろう。神社の創建時期は不明であるが、境内の「由緒書き」には、「創建の年代は明らかではないが、社殿再建の棟札に元禄五年と記録あり、（以下略）」とある。明治初年の神社統制の際、地区内の大野橋のたもとにあった水神社を同境内に移転して脇宮様として祀っている。

本遺跡が位置する大和田地区では、遺跡の発掘調査例が少ない。本遺跡の発掘調査も今回が最初である。一方、文献資料については、大和田地区を含む原田荘の関連史料が、東寺領荘園関係文書として永く伝世している。『静岡県史』と『掛川市史』において、原田荘関係文書の大半が収載され、各通史編においては原田荘を単節で取り上げ、当該史料に基づいた詳しい分析が試みられている（掛川市史編さん委員会1984など、静岡県1997など）。さらに、原田荘は原野谷川中・上流域の広範囲に展開したとされ、原野谷川中流域では、原田荘および原氏一族に関連する城館跡などの調査事例がある。

本郷の高藤城（殿谷城）跡は、原氏の本拠地とされるところであり、発掘調査されている。主郭曲輪群および東西の３つの曲輪群と土塁遺構を調査対象とし、大土木工事の末に完成した城であることがわかったとともに、本曲輪最下段からは時期の異なる掘立柱建物跡４棟が検出された。出土遺物から、従来南北朝期の築城とされていたのが、15世紀中頃以降（文明年間（1469～1486年））の築城であることがほぼ判明している。また、明応６（1497）年に駿河今川氏によって陥落し果てたとされていたが、その後もしばらく使用され続け、廃城時期は16世紀前半代であることもわかっている（掛川市教育委員会1985）。

吉岡の林遺跡は、原田荘内で発掘調査・報告された中世集落跡である。原氏本宗家14代頼郷（頼卿）が建立したとされる春林院の南側に隣接する。中世の掘立柱建物跡４棟、溝（区画溝）状遺構、多数の小穴、土壙11基が検出され、13世紀を中心とする多くの山茶碗の碗・小皿が出土している（掛川市教育委員会1993）。

一方、原野谷川上流域にも中世遺跡はある。萩ノ段遺跡（第１章第２節参照）では、少量の山茶碗片が出土している（掛川市教育委員会1984）。しかし、どのような遺跡が展開したのかはわからない。堂山遺跡の発掘調査では、墓に入れられたものとされる平安時代後期の白磁碗が出土している（掛川市教育委員会2000）。本遺跡と同じ第二東名建設に伴う発掘調査をみると、寺島の上ノ平遺跡などでも山茶碗が出土し、中世陶器は本書掲載の大和田遺跡・平島Ｉ遺跡などでも出土している。明確な根拠は多くないが、原野谷川上流域においても原田荘による集落の展開があったことが推測される。

第13図　周辺の遺跡２

その他、未調査の城館跡や寺院、さらには地名などをみても、幡羅郷に土着して以来数百年間、開発領主として、地頭として、そして国人領主として原田荘の開発・経営に取り組み続けた原氏一族の足跡が、原野谷川中・上流域にはたくさん残っている。

以上のように、本遺跡は原野谷川上流域の一中世集落跡として捉えるだけではなく、数百年間の歴史を有する原田荘との関わりの中で捉える視点も必要であろう。本書においては、本章第４節にて原田荘と原氏一族の詳細について取り上げることにする。

第２節　調査の方法と経過

１．発掘調査の方法

本調査を実施した区域は遺跡の南部に位置する。調査区の北側には、遺跡が広がる可能性がある（北側は対象範囲外）。

まず、駐車場や作業員棟等の設置、器材の搬入を行い、その後、重機による表土除去を行った。続いて、ベルトコンベアーの搬入および安全対策等の養生を行い、人力による包含層の掘削、平面的な遺構プランの検出を行い、遺構検出も人力で行った。遺構の検出に際しては、まず主軸（長軸）の直行方向に土層帯を設ける等によって覆土の一部を掘削し、土層断面によって覆土の状況を観察・注記、土層断面の記録を行った。その上で、遺構全体の検出を行った。

遺構調査に際しては、まず座標に合わせた10m方眼のグリッドを設定し、グリッド杭の設置を委託して実施した。グリッドは、全調査区にまたがるように設定した。遺構番号は、調査中に付した番号もあったが、本報告に際して、全遺構に対して遺構種類別に新たな遺構番号を付し直した。遺物については、遺構内出土遺物は遺構ごと、遺構外出土遺物は層位・グリッドごとに取り上げた。ただし、本報告に際しては、調査した結果をうけて一括出土遺物としたものもある。

現地の記録図面は、地形測量を1/100、遺構図を1/20を基本とし、設定したグリッドに沿って作成した。なお、図面作成は委託にて実施した。遺構・景観等の現地記録写真の撮影は、６×７版（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用いて行い、作業工程撮影用に35mm判（カラーネガ）を使用した。一部の遺構写真の撮影には、高所作業車も使用した。また、全景写真撮影および測量においては、空中写真撮影および空中写真測量を委託にて利用した。

２．発掘調査の経過

平成13年１月に発掘調査を開始した。１月中に作業員棟等の準備を行い、重機による掘削を２月上旬までに行った。その後、安全のための養生等を行った。とりわけ、調査区の南側および東側が低丘陵の斜面に接しているため、降雨後大量の湧き水が調査区内に流れ込んでしまうことと、遺構面が調査区のほぼ中央を中心にして全体に大きなすり鉢状を呈するために、排水に際しては多くの心労を要した。結局、湧き水の量があまりにも多いことから、調査区東側と北側とに排水溝を巡らし、排水ポンプ数台による排水を常に行わねばならなかった。また、調査開始前の時点のことではあるが、調査区外の南側低丘陵の植林伐採木を搬出するにあたって丘陵斜面沿いに重機侵入路を設定したために、斜面のほぼ全域にわたって地山が露出する状態となっていた。そして調査開始当初、降雨時、斜面から大量の土砂と共に数十cm大の岩礫が調査区南側境にまで転がり込む非常に危険な状態となってしまった。そこで、日本道路公団および第二東名高速道路大和田工事区共同企業体（ＪＶ）との合同協議の上、調査区南側沿いの全域にわたって高さ３ｍの流砂用防護フェンスを設定した。

２月上旬には基準点測量およびグリッド杭の打設を実施、２月中旬から、人力による包含層掘削から遺構検出までの作業および記録作業を随時行った。第１遺構面までの包含層掘削は３月までに行い、５月中までに第１遺構面で発見した遺構の精査・記録作業を終え、６月上旬に空中写真撮影および空中写

真測量を行った。

調査区の一部において、第１遺構面より下層に中世包含層の堆積および遺構面（第２遺構面）の存在が認められた。したがって、第２遺構面までの掘削を重機および人力で行い、再び、人力による包含層掘削から遺構検出までの作業および記録作業を行うことになった。この第２遺構面の作業は７月上旬に終えることができた。その後、撤収作業を行い、７月中に現地の調査を終了した。

なお、２月上旬に実施した基準点測量およびグリッド杭の打設は服部エンジニア株式会社、空中写真撮影および測量については朝日航洋株式会社に委託した。また、現地調査中において、基礎整理（出土土器の洗浄・注記・接合、遺構図・写真などといった現地調査の資料や出土遺物の台帳の作成）を行ったが、その全てを終了することはできなかった。一部の作業を現地調査終了後、資料整理および報告書作成の中で行うことになった。

３．資料整理の方法と経過

本遺跡に関わる資料整理作業および報告書作成作業は、平成13年７月から平成14年３月に実施し、さらに平成14年８月から平成15年１月、平成15年９月、平成16年５月～平成17年３月に、本書掲載の他遺跡の資料整理および報告書作成と併行して実施した。掛川工区内の他遺跡の資料整理・報告書作成作業、さらには他の現地調査の実施と重なることがあったため、その作業は断続的に実施していくことになった。

現地調査中の基礎整理において、出土土器の洗浄・注記・接合、遺構図・写真などといった現地調査の資料や出土遺物の台帳の作成を実施していた。よって、資料整理においては、その残務から開始し、遺構図の修正作業などが中心になった。

続いて、土器の図化作業、各図面の編集・トレース作業、遺物の写真撮影、遺跡資料の分析および報告の執筆を行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は６×７判（白黒ネガ・リバーサル）、35㎜判（リバーサル）を用いて、当研究所写真室が実施した。

写真９　遺構の検出

写真10　遺構の実測

第３節　調査の成果

１．全体の概要

（１）土層および地形

表土や撹乱・造成土を除くと、暗褐色もしくは暗黄褐色を基調とする土層（第１包含層）が調査区全体にあらわれる。この土層は中世から近世の遺物を包含している。また、基盤層と同質の礫・ブロックを多く含み、その規模や頻度はわからないが、中近世に丘陵の崩落があったことをうかがわせている。この第１包含層を除いた面が、中世から近世の遺構が多く発見された第１遺構面である。なお、第１包含層中に整地面が存在する可能性は指摘できるが、調査においてそれを把握することはできなかった。

第１遺構面を形成する土層は、人頭大以下の礫を多く含んだ黄褐色の粘質土で占められている。調査区中央の谷の底面付近は暗青灰色を呈しているが、水の影響で変色したものと判断できる。第１遺構面を検出すると、蛇行する谷地形があらわれた。この谷筋は、調査区東縁中央付近から調査区中央に下り、そこから調査区南西隅へと曲がる。周辺地形とあわせてみると、南東にそびえる丘陵と平場をもつ段丘の境（段丘の付け根にあたる部分）のあたりに形成された、浅い谷地形が検出されたのだということがわかる。

谷地形がはじまる調査区東縁中央付近だけは、他より粘性がなく、礫の少ない灰褐色土層によって第１遺構面が形成されている。この土層は、多くの山茶碗と中世陶器・カワラケ片などを包含しており、中世後半に谷に堆積した土層であることがわかる（第２包含層）。すなわち、第２包含層を除いた面が第２遺構面となるが、第２遺構面で形成されたと判断できる遺構は、確実に中世後半（15～16世紀）以前のものと判断できる。ただし、これは谷の一部分にだけ認められ、深さも0.6m程度である。第１遺構面における地形との違いは、谷地形の一部が深くなったという程度である。

（２）遺構・遺物の概要

層位から、第２包含層下の第２遺構面で検出された遺構は中世後半以前の遺構であると判断することができる。しかし、第１遺構面で発見された遺構についての時期判断は単純ではない。第２包含層が認められた部分については、概ね近世以降の遺構が第１遺構面に検出されたと考えて問題はない。簡単に判断できないのは、第２包含層のなかった大半の部分における第１遺構面検出遺構の時期である。何らかの理由で第２包含層が堆積しなかった、もしくは第２包含層の把握ができなかったということであり、中世後半以前の遺構がないということにはならない。各遺構の時期については、遺構の特徴・覆土・出土遺物などのさらなる検討を要することになる。

第２包含層直下の第２遺構面で検出され、層位から中世後半以前の遺構であると判断できるのはSD05・SX03だけである。不定形で浅い窪地状の遺構であり、人為によるものではない可能性がある。

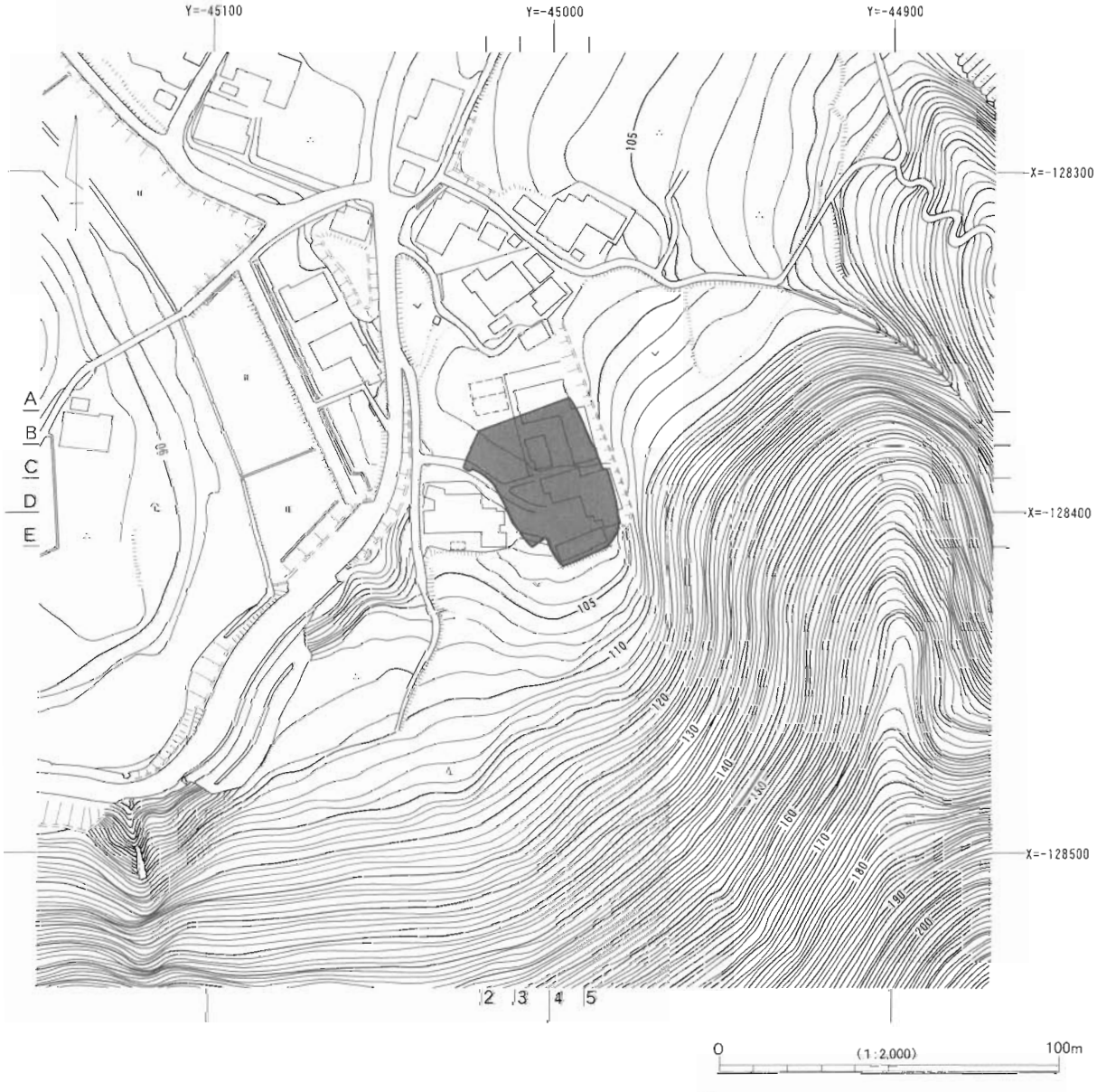
検出遺構の多くは小穴（柱穴）であり、掘立柱建物跡や柵列（SH01～SH30）が復元できた。これらは、調査区北西部・北縁部・北東部・南東部に分かれつつも混在している。北西部では、大型の柱穴が多く発見され、桁行10mほどの他より大きな建物跡の存在も知ることができた。底に根固めなどのための河原石が残っている柱穴も多かった。全体的にみると、中・小型の掘立柱建物跡よりも大型の建物跡の方が新しい時期のものであると考えられる。中世においては調査区中央域近辺に、近世においては調査区

北西部近辺のより水はけの良いところへと建物が移っていったものと思われる。

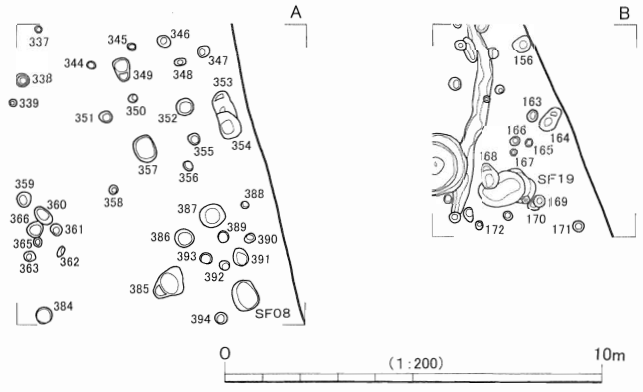
次に多く発見されたのは土坑である。中でも、近世以降の便所や貯蔵施設などとして使用した、平面正円形の土坑が多い。焼土坑（SF08～SF11）や集石土坑（SF12）については、時期・性格を示す状況・遺物をみることはできなかった。また、SF30は炭窯に似た形状を呈しているが、炭の検出はなかった。大型の建物跡の内側で発見されており、建物施設に関係する遺構である可能性もある。

調査区南寄りで石組井戸（SE01）と木組・杭列・集石部を伴うSX01を検出することができた。出土遺物には様々な時代のものを含むが、近世以降の遺構であると考えられる。遺物を含む土砂や水が集中する場所であったと予測でき、それ故に設けられた遺構であるとも考えることができる。

出土遺物の大半は土器である。古墳時代の土師器１点の他は、鎌倉時代以降のものであり、山茶碗が大半を占めている。中近世の陶磁器やカワラケなどもある。SE01から柄杓が出土したほか、土坑からは籠、SX01からは箕が出土した。しかし、籠や箕は出土時の保存状態が悪く、現地において変形し、大きく破損してしまった。金属製品では、鎌などの鉄製品と銅銭が出土した。



第14図　本調査範囲とグリッド配置



小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。
番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

第15図　遺構配置図

2．遺　構

（1）建物跡、柵などの施設跡

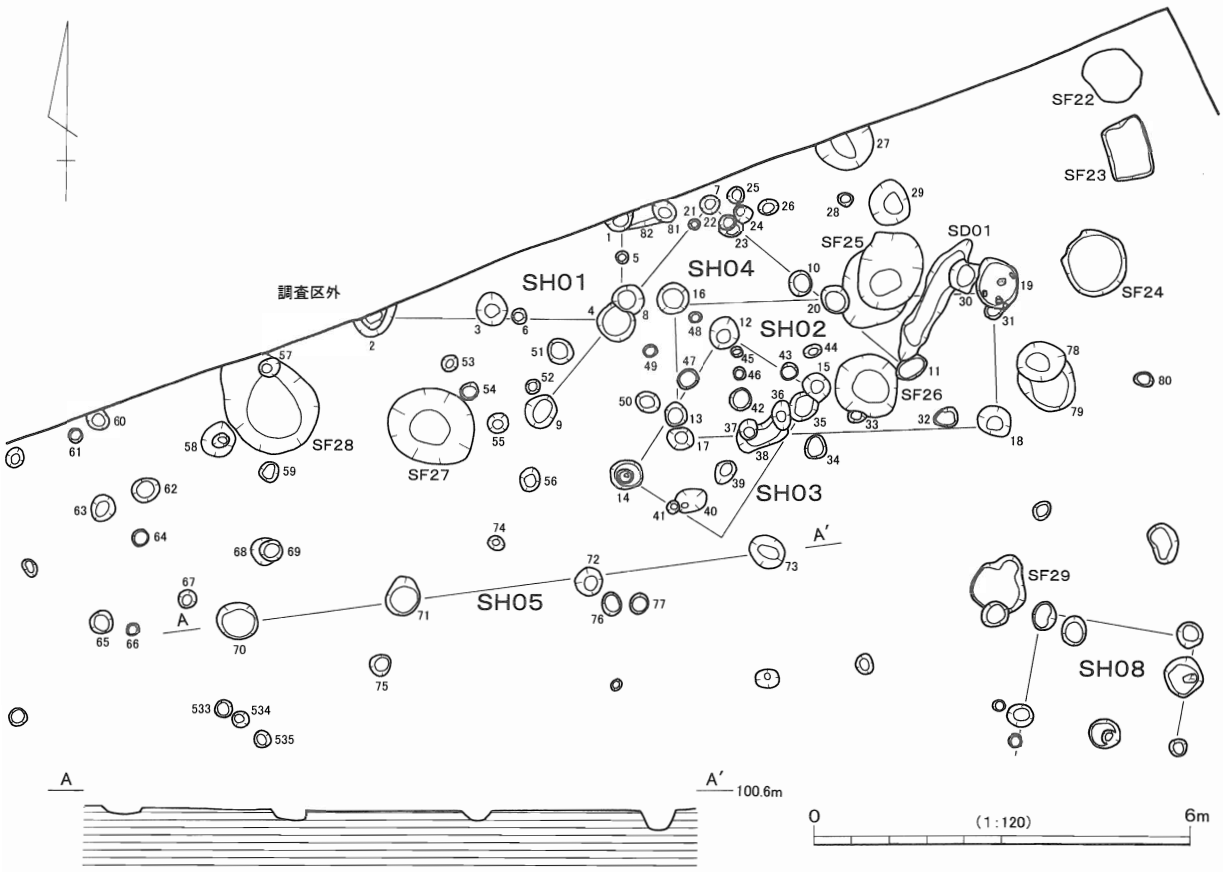
13世紀から近世の建物跡14棟と柵などの施設跡14基を抽出することができた。ただし、検出した柱穴は840基を超える。より多くの建物・施設があった可能性もある。

ここでは、柱穴の出土遺物を根拠として、各建物・施設跡の時期の判断を行う。しかし、各遺物の出土状況、詳細な時期を検討することは難しい。また、山茶碗片と近世の遺物が一緒に出土するといった場合が多く、小破片が散在的に出土していることから、建物・施設に直接伴う遺物は少ないと考える。大枠での判断を前提として、最も新しい時期を示す遺物を評価して判断することにする。

したがって、近世の建物跡を中世以降であるとしか判断しない場合もある。より詳細な時期の特定は、遺構の特徴や配置などからの検討も必要であり、その点については、第４節で検討を行い、さらなる時期の特定につとめたい。

ＳＨ０１（第16・17図）

Ｂ３グリッド北縁に位置する。建物の軸はほぼ方位と合っている。東西２間と南北１間を検出したが、大半が調査区外にあるため、建物全体の規模は不明である。柱間は、東西約2.0m、南北約1.6mである。柱穴は直径0.5mほどで、検出面からの深さは0.3mほどである。



小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。また、番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

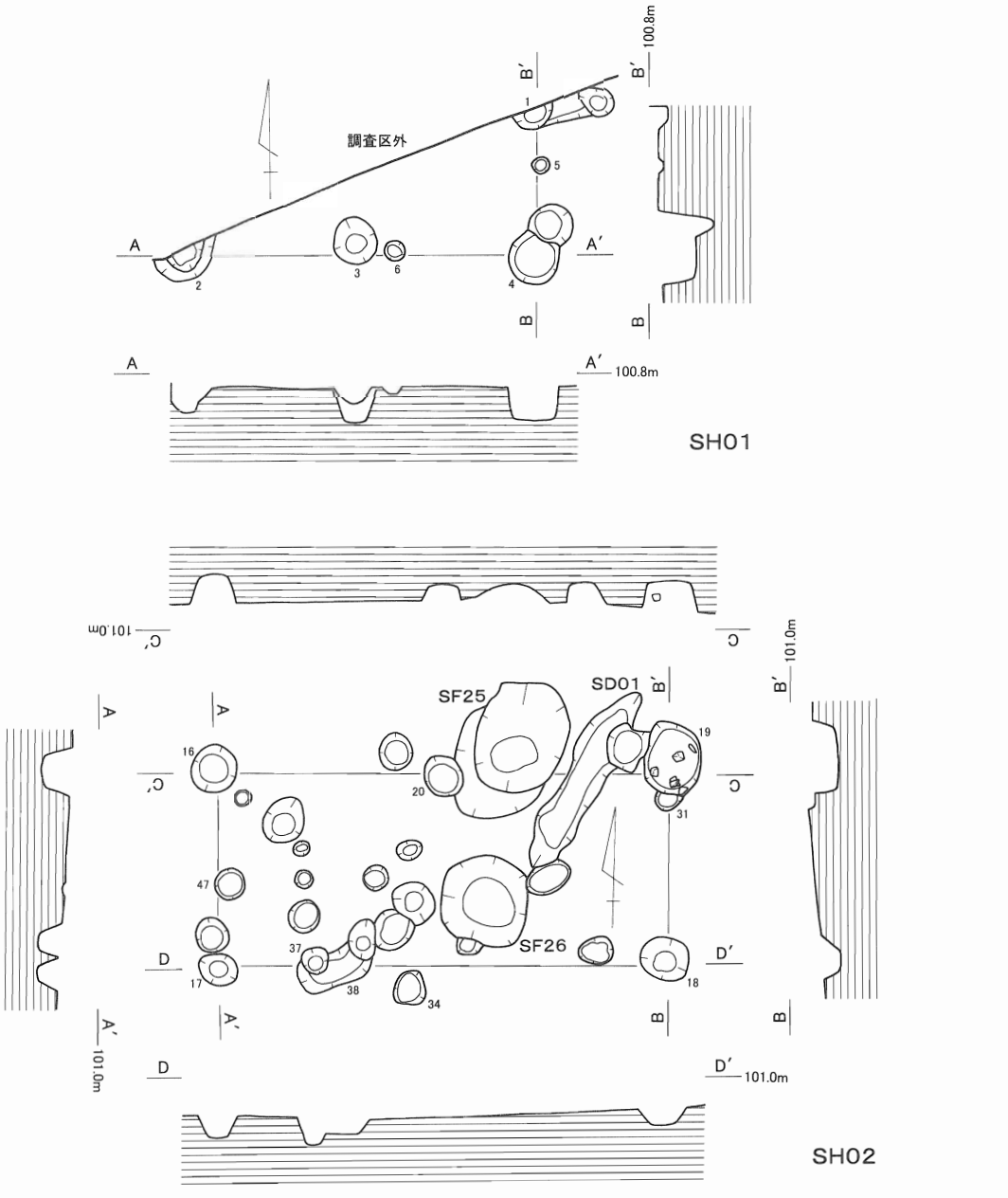
第16図　調査区北縁部の建物群

SP03・04から山茶碗片と青磁片が出土している。本遺跡出土山茶碗の大半は13世紀のものであり（第４節４）、SH01は中世（13世紀以降）の掘立柱建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ０２（第16・17図）

Ｂ３グリッド北東部に位置する。軸の方位や建物の規模などはSH01と類似する。

しかし、SP20が切り合い関係からSF25（18～19世紀）より古いことがわかるものの、SP16近辺から17世紀後半～18世紀前半の陶器（第39図93）が出土しており、SH01と同時代の遺構とするには躊躇させられる。そもそも、南辺中央の柱穴がなく、また、SP19だけが規模が大きく、小礫が検出されるなど特徴を異にしていることから、復元したSH02とは異なる柱穴群である可能性も指摘できる。



第17図　SH01・SH02

ＳＨ０３（第16・18図）

Ｂ３グリッド北東部に位置する。建物の長軸が北より約35度東に傾く。１間×１間（1.6m×2.8m）の小規模な建物跡、もしくは東により大きい建物であった可能性がある。柱穴は直径0.5mほどで、検出面からの深さ0.3m弱である。南の柱穴はなかったが、堆積土中に存在した可能性もある。

SP13～15で山茶碗片・土師質土器片が出土している。本遺跡出土山茶碗の大半は13世紀のものであり（第４節４）、SH03は中世（13世紀以降）の掘立柱建物跡である可能性が高いと判断できる。

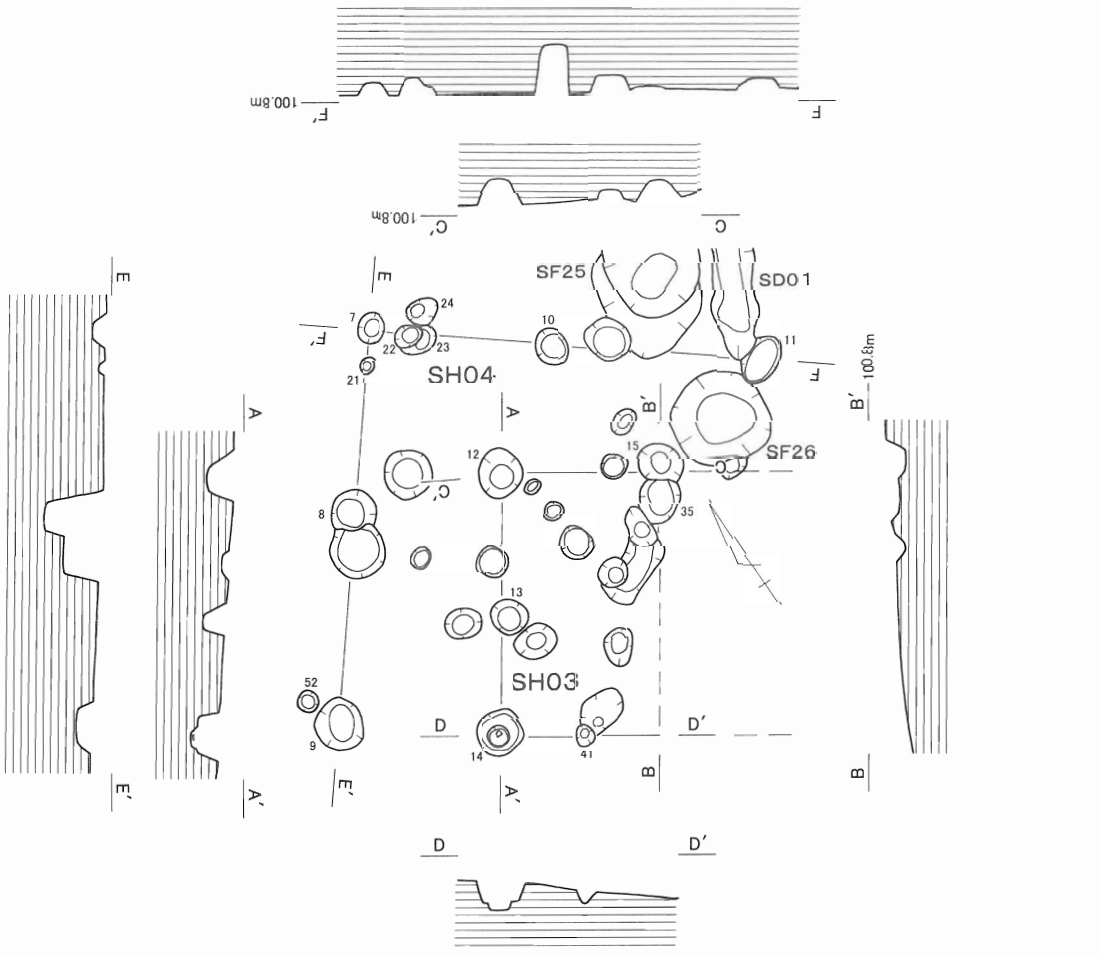
ＳＨ０４（第16・18図）

SH03の北東と北西を囲むような柵列として復元した。しかし、山茶碗片が出土したほか、SP09からカワラケ片が出土している。SH03と同時期であるかは明確ではなく、また、柱穴の規模・深さにばらつきが目立ち、復元したSH04とは異なる施設の柱穴群である可能性も指摘できる。

ＳＨ０５（第16図）

Ｂ３グリッド中央をほぼ東西に横切るように、４基の柱穴が約2.8m間隔で一直線に並ぶ。柱穴は直径0.4～0.7mで、深さは0.3m以下と浅い。

SP70～72で山茶碗・土師質土器・カワラケ片が出土している。中世（13世紀以降）の柱穴列である可能性が高いと判断できる。

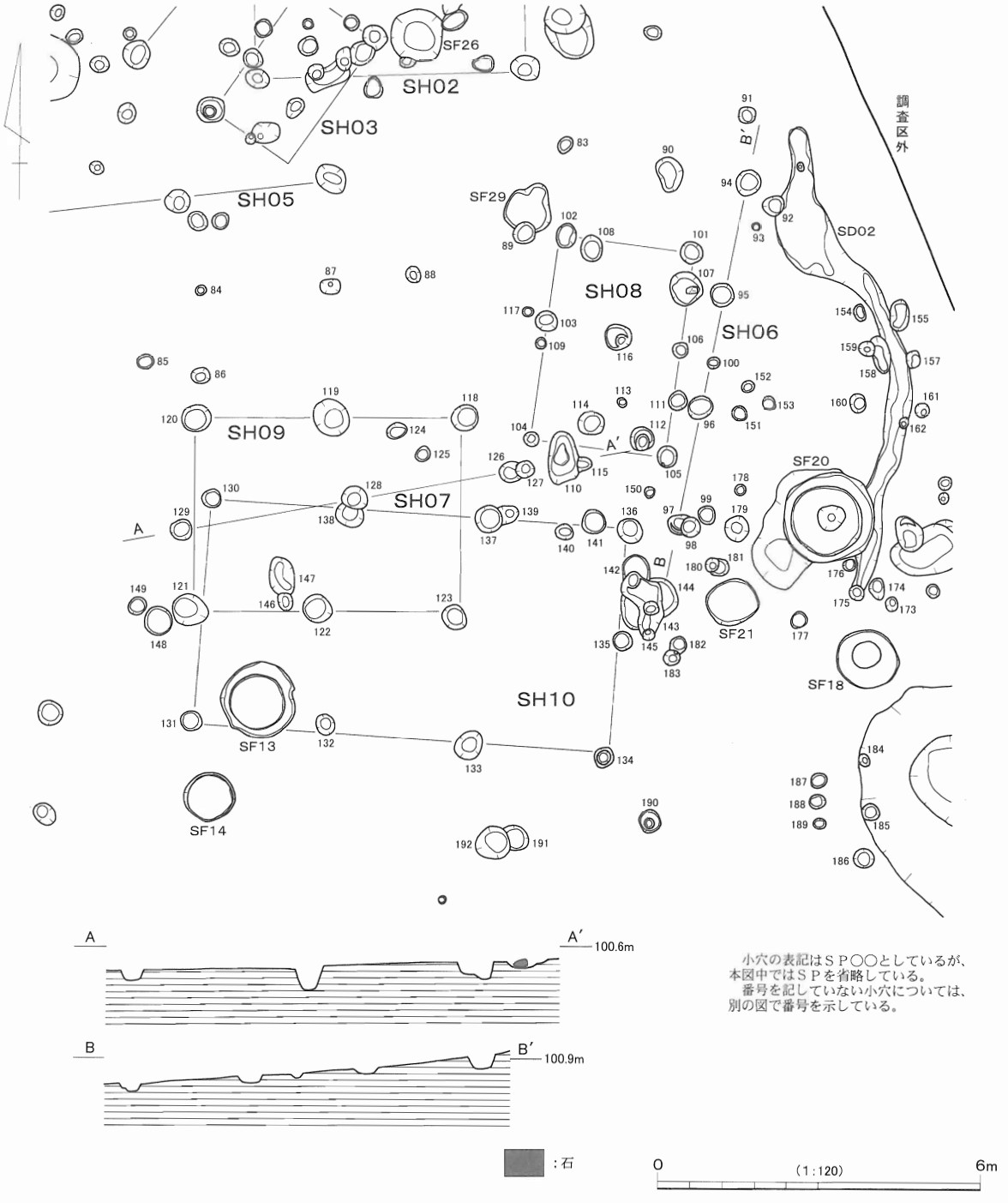


第18図　SH03・SH04

ＳＨ０６（第19図）

Ｂ４グリッド南部で、４基の柱穴が約2.1ｍの間隔で南北方向に並ぶ。柱穴は直径0.5ｍ弱で、検出面からの深さは0.25ｍ以下と浅い。

SP96・97から山茶碗片・土師質土器片が出土している。本遺跡出土山茶碗の大半は13世紀のものであり（第４節４）、中世（13世紀以降）の施設の柱穴列であると判断できる。



第19図　調査区北東部の建物群

ＳＨ０７（第19図）

Ｃ３グリッド北東部で、３基の柱穴が約3.2ｍの間隔で東西方向に並ぶ。柱穴は直径0.4ｍ前後で、検出面からの深さは0.25～0.42ｍである。

SP128・129から山茶碗片・白磁片（第41図144）のほか、室町時代以降の陶器片も出土している。SH07は中世後半（15世紀以降）の施設の柱穴列である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ０８（第19・20図）

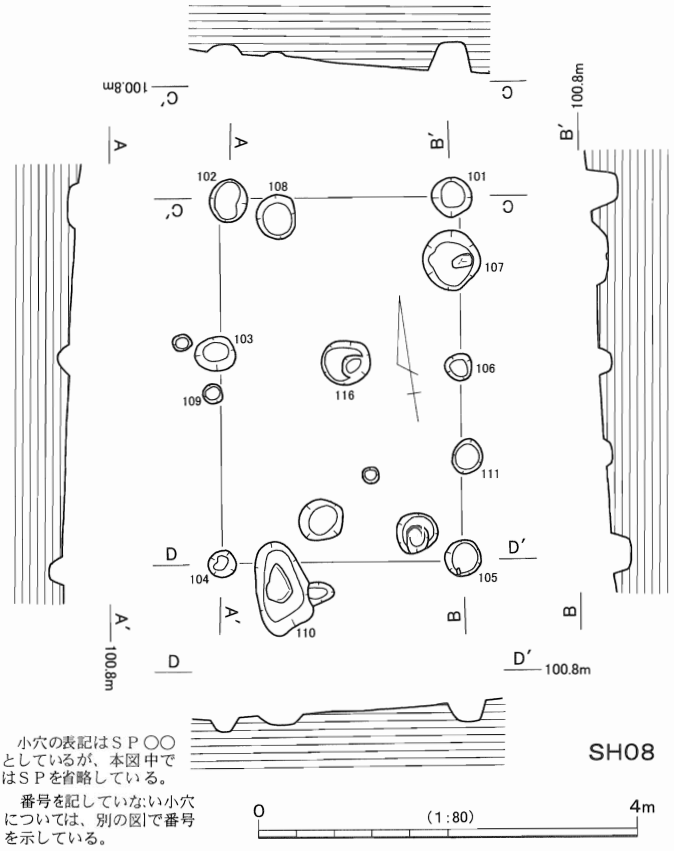
Ｂ４グリッド南部に位置する。長軸が北より約８度東に傾く、１間×２間（2.6ｍ×3.9ｍ）の建物跡である。柱穴の深さは検出面から0.3ｍ以下と浅く、直径0.4ｍ以下である。とくに、隅にならない長辺中央の柱穴が小さく、整然としない点が指摘できる。

SP101から山茶碗片が出土している。本遺跡出土山茶碗の大半は13世紀のものであり（第４節４）、SH08は中世（13世紀以降）の掘立柱建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ０９（第19・21図）

Ｃ３グリッド北東部に位置する。長軸はほぼ東西、１間×２間（3.5ｍ×5.0ｍ）の建物跡である。柱穴は、直径0.5～0.66ｍとやや大きいが、検出面からの深さは0.2弱～0.55ｍとまちまちである。

SP118～121から山茶碗片（第36図46など）・土師質土器片が出土している。本遺跡出土山茶碗の大半は13世紀のものであり（第４節４）、SH09は中世（13世紀以降）の掘立柱建物跡である可能性が高いと判断できる。なお、SH09はSH10と重なる同じ方向の建物跡であり、SH10の時期に近いものと考えることができる。

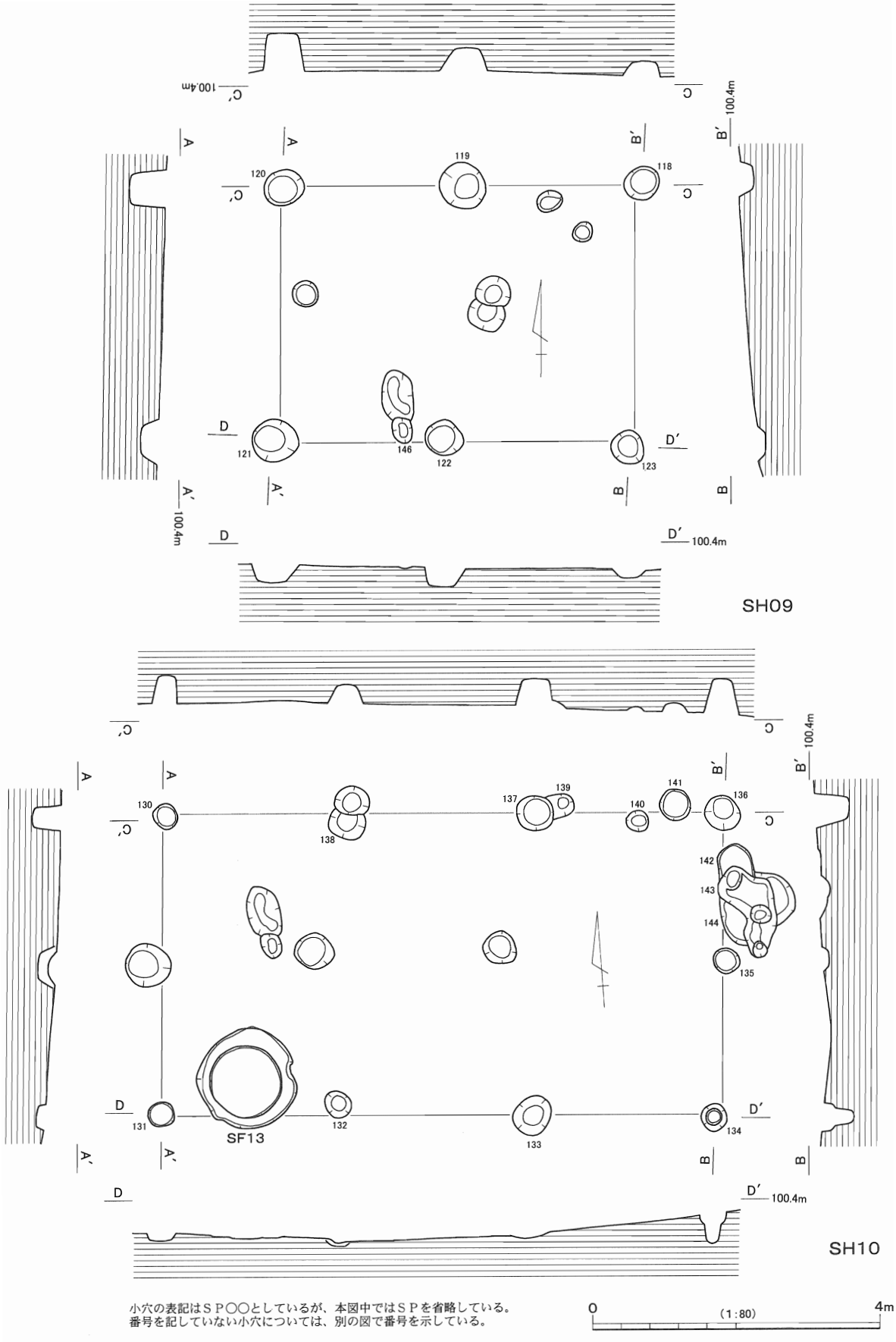


第20図　SH08

ＳＦ１０（第19・21図）

Ｃ３～Ｃ４グリッドに位置する。長軸はほぼ東西、２間×３間（4.2ｍ×7.9ｍ）の建物跡である。柱穴は直径0.35～0.65ｍとやや大きいが、検出面からの深さは最大0.6ｍで、地形の影響か、南辺の柱穴は浅く検出された。また、東辺中央の柱穴は小さく浅い。西辺中央の柱穴は検出できていないが、SH09のSP121と重なっていたために見落としてしまった可能性がある。

SP130・134・137で山茶碗片・陶器片（第39図109・110など）・カワラケ片が出土している。SH10は、中世（13世紀以降）の掘立柱建物跡である可能性が高いと判断できる。



小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。
番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

第21図　SH09・SH10

ＳＨ１１（第22・23図）

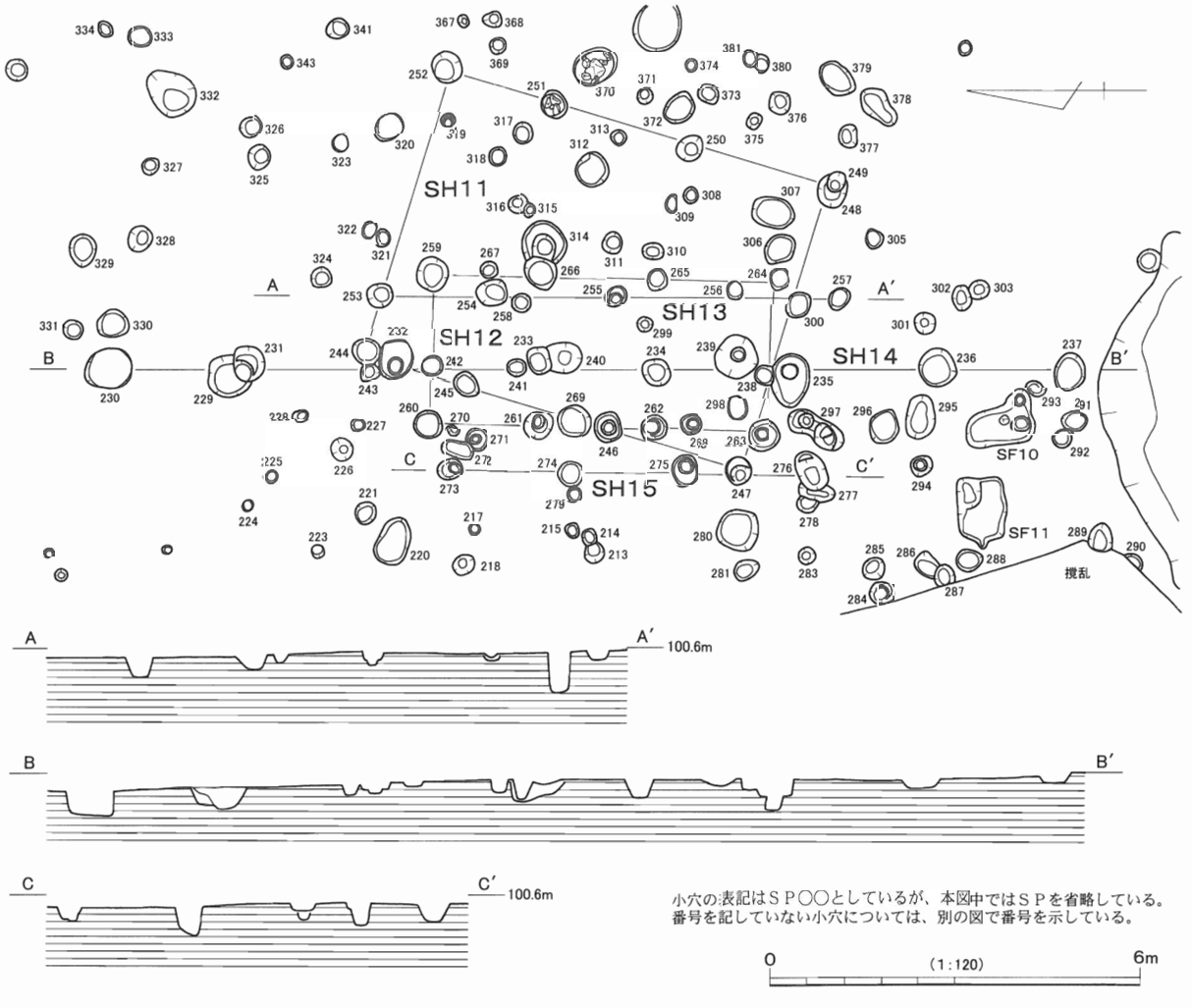
Ｄ４グリッドに位置する。長軸は北より約16度東に傾く、１間×３間（4.8m×6.5m）の建物跡である。柱穴の直径は0.4～0.6mであるが、深さはまちまちである。SP251には石が残されていた。このほかに、SH11の施設・構造上設けられた可能性がある柱穴が、建物の内側や四辺上で検出されている（SP314・310など）。

SP246・247・250～252から山茶碗片・陶器片（第40図119）・カワラケ片が出土している。15世紀後半～16世紀前半の陶器が出土していることから、SH11は中世後期（15～16世紀）の掘立柱建物跡である可能性が高いと判断できる。

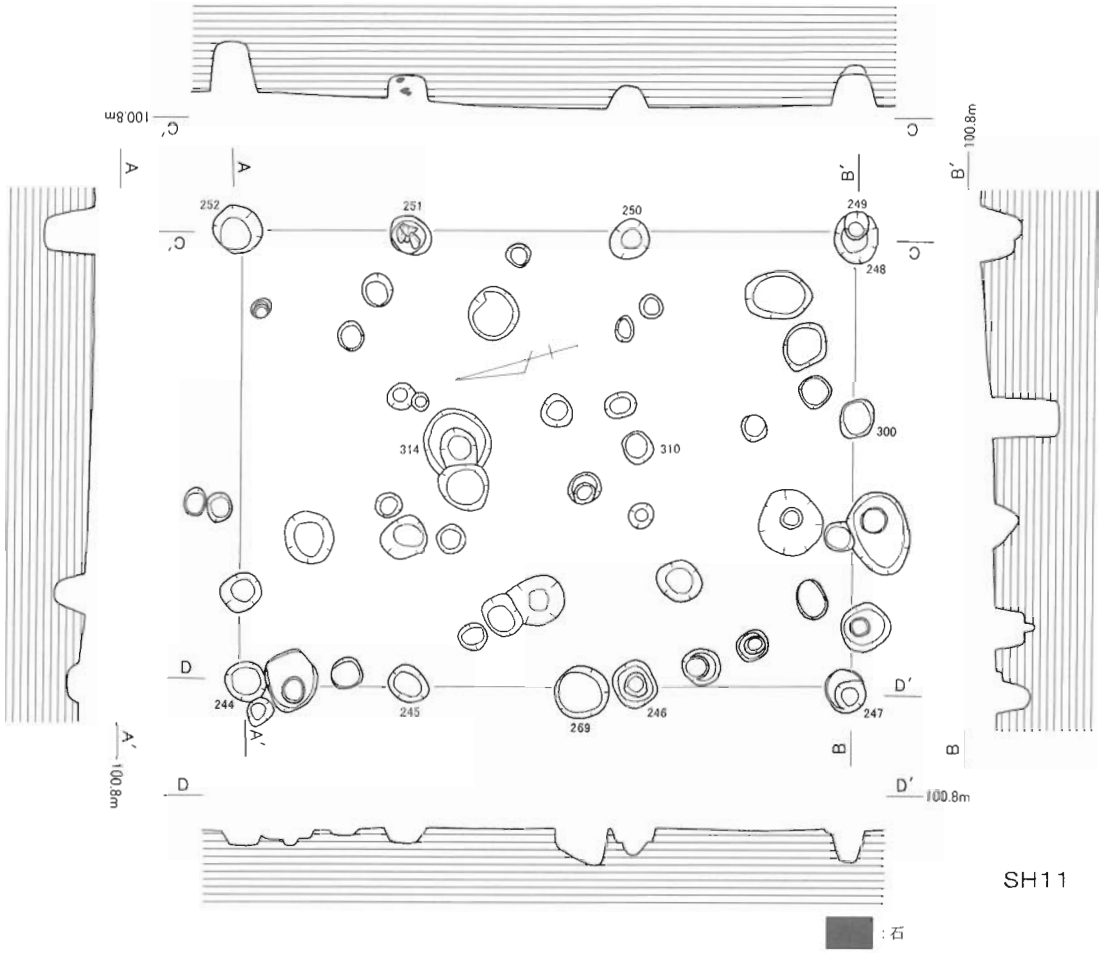
ＳＨ１２（第22・23図）

Ｄ４グリッドに位置する。長軸はほぼ南北、１間×３間（2.5m×5.5m）の建物跡である。柱穴の直径は0.40～0.65m、検出面からの深さは0.2～0.5mである。SP259・261・263では、炭化粒を多く含む柱痕が観察できた。また、南北それぞれの短辺上の中央西寄りに、他より浅い柱穴（SP238・242）を検出し、それを結んだ線上にも柱穴が検出された（SP233・234）。

SP234・238・259・261・262・265・266から山茶碗片・陶器片（第40図116など）・磁器片（第41図140）・土師質土器片・カワラケ片が出土している。15世紀後半代の陶磁器が出土していることから、SH12は中世後期（15～16世紀）の掘立柱建物跡である可能性が高いと判断できる。



第22図　調査区南東部の建物群



第23図　SH11・SH12

ＳＨ１３（第22図）

Ｄ４～Ｅ４グリッドで、５基の柱穴が約1.8m間隔で南北に並ぶ。柱穴は直径0.25～0.45m、検出面からの深さは0.3m以下である。

SP254～256から、山茶碗片・陶磁器片（第41図141）が出土している。15世紀代の青磁片の出土から、SH13は中世後期（15～16世紀）の施設の柱穴列である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ１４（第22図）

Ｄ４～Ｅ４グリッドで、７基の柱穴が約2.2～3.0mの間隔で南北に並ぶ。柱穴は直径0.65m前後で、SH13・15の柱穴よりも大きい。また、検出面からの深さは0.1～0.4mで、SH13・15よりも浅い。

全柱穴から、山茶碗片・陶磁器片・土師質土器片・カワラケ片（第42図152）が出土している。SH14は中世（13世紀以降）の施設の柱穴列である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ１５（第22図）

Ｄ４～Ｅ４グリッドで、４基の柱穴が約2.0m弱の間隔で南北に並ぶ。柱穴は直径0.45m前後、検出面からの深さは0.25～0.4mである。

全柱穴から、山茶碗片（第36図29など）・陶磁器片・土師質土器片が出土している。13～14世紀の遺物で占められており、中世（13世紀以降）の施設の柱穴列である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ１６・ＳＨ１７・ＳＨ１８・ＳＨ１９・ＳＨ２０（第24図）

Ｂ１～Ｄ２グリッドで、SH16（SP668・673・670）、SH17（SP465～467・471・469）、SH18（SP676～679）、SH19（SP680～684）、SH20（SP724～727）といった、北西から南東の方向に並ぶ柱穴列がある。

いずれも建物跡にはならない、柵などの柱穴列である。SH16・18・20は、柱間が1.1～1.5mの範囲にあり、方向も近似していることから、同じ施設のものである可能性も指摘できる。SH19は、SH16などに平行するが、柱間は２ｍを超える。SH17の柱間も２ｍを超える。SH17だけは、列の方向が異なっている。先後関係などを確認することはできないが、全て同時に存在した施設の柱穴列であるとは考え難い。

各柱穴列から、カワラケ片もしくは中近世の陶磁器片が、山茶碗片とともに出土している。いずれの柱穴列も、SH23～26の建物跡の西側に沿っており、近世につくりかえられていった建物（SH23～26）の関連施設跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ２１・ＳＨ２２（第24図）

Ｄ２グリッドで、SH21（SP760・771・769・767・758・761・756）、SH22（SP816～818）といった、南西から北東の方向に並ぶ柱穴列がある。

いずれも建物跡にはならない、柵などの柱穴列である。列の方向はSH16～20の直行方向に近い。ただし、双方の方向は若干異なる。また、SH21の柱間が１ｍ弱であるのに対し、SH22の柱間は1.9m前後と広い。遺構の切り合いなどから先後関係を判断することはできないが、SH21とSH22が同時に存在した施設跡であると評価することは難しい。

SH21のSP760・771・761から、山茶碗片・土師質土器片・カワラケ片が出土している。SH16～20と同様、近世の建物（SH23～26）の関連施設跡である可能性が高いと判断しても、問題はない。

ＳＨ２３（第24・25図）

Ｂ２グリッド西部に位置する。東西２間（約4.4m）と南北１間（約2.4m）を検出したが、北側は調

査区外へと広がる可能性がある。北側に広がるならば、SP449・448を含む総柱の建物跡である可能性が高くなる。建物の南北軸は、北より約26度西に傾く。柱穴は直径0.6～1.2mと大きく、検出面からの深さは0.5～0.8mである。SP435・442・433・449で数個の石が残されていた。重複する柱穴の状況から、建て替えのあった可能性が指摘できる。

SP433～436から、山茶碗片（第35図22など）・中世陶器片（第39図98など）・磁器片（第41図136）のほか、カワラケ片や近世の陶器片が出土している。出土遺物から、SH23は近世（17世紀以降）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ２４（第24・25図）

Ｂ２～Ｃ２グリッドに位置する。東西１間（約5.8m）×南北５間（約10.7m）の建物跡であり、南北軸は北より約25度西に傾く。SP495の評価によって、南北での施設・構造上の相違点が指摘できる可能性がある。また、SF30はSH25かSH24の何らかの内部施設跡である可能性がある。柱穴は、直径0.7～1.6mと大きく、検出面からの深さは0.3～0.7mである。SP494・486で数個の石が残されていた。また、重複する柱穴の状況から、建て替えのあった可能性が指摘できる。

各柱穴から、山茶碗片・陶器片（第39図84、第40図122など）・カワラケ片（第42図147など）が出土している。SP487からは、火打金（第43図158）や小柄（第43図160）も出土している。中期末～近世初頭の陶器を含み、SH24は近世（17世紀以降）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ２５（第24・25図）

Ｃ２グリッドに位置する。東西１間（約6.7m）×南北５間（約9.8m）の建物跡であり、南北軸は北より約25度西に傾く。SP547の評価によって、南北での施設・構造上の相違点が指摘できる可能性がある。また、SF30はSH24かSH25の何らかの内部施設跡である可能性がある。柱穴は、直径0.5～1.3mと大きく、検出面からの深さは0.2～0.7mである。SP542・549・551で数個の石が残されていた。また、重複する柱穴の状況から、建て替えのあった可能性が指摘できる。

多くの柱穴から、山茶碗片（第36図43など）・陶器片（第39図92・99・112など）・磁器片（第41図133など）・カワラケ片が出土している。出土陶器片に近世のものが含まれており、SH25は近世（17世紀以降）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

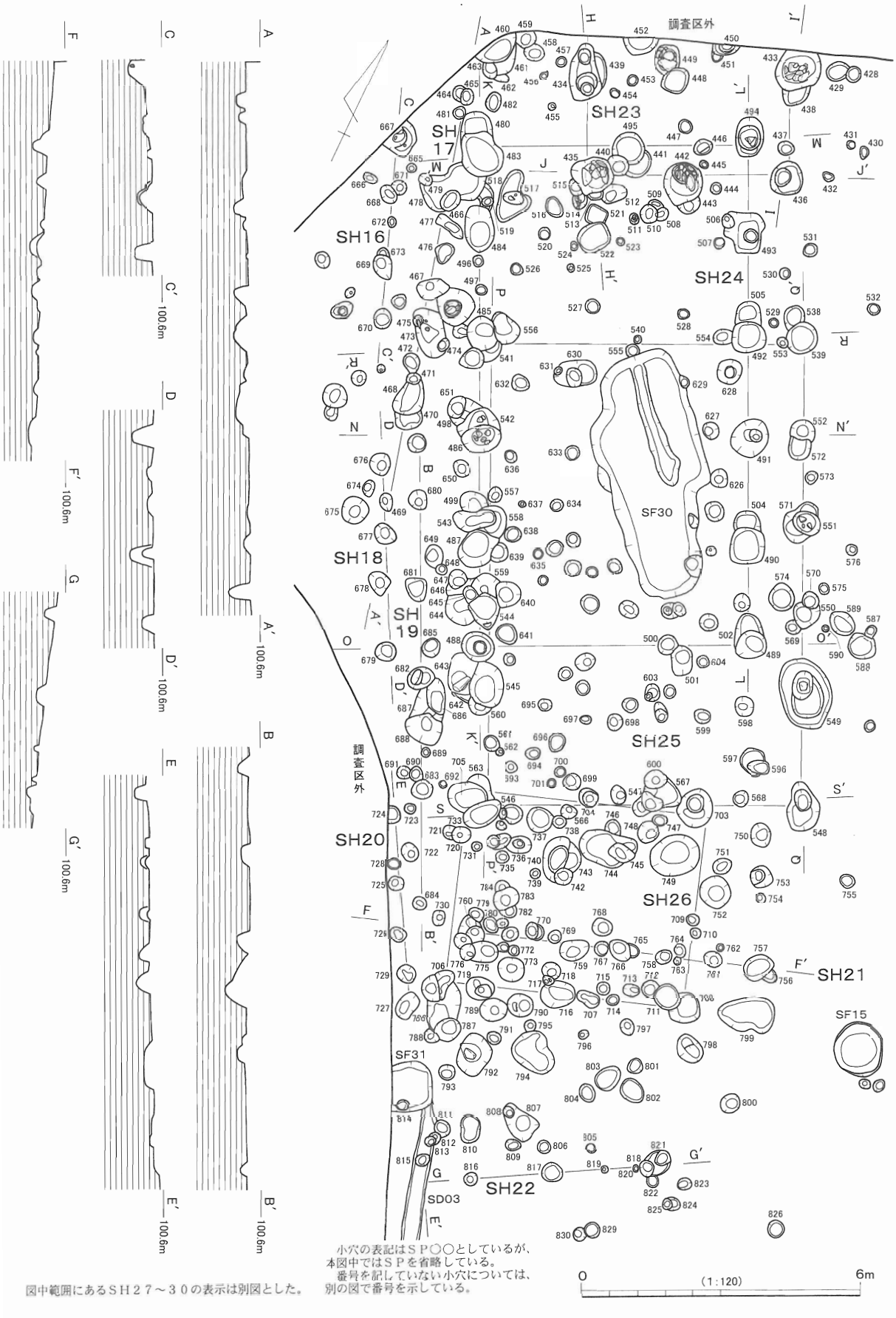
ＳＨ２６（第24図）

Ｄ２グリッド北東部に位置する。東西２間（約5.2m）×南北１間（約4.1m）の建物跡で、南北軸は北より約19度西に傾く。SP709の評価によって、東西での施設・構造上の相違点が指摘できる可能性がある。柱穴は、直径0.4～0.8mと大きく、深さは0.3～0.6mである。石の残存はなかったが、SH23～25と類似した柱穴である。また、重複する柱穴の状況から、建て替えのあった可能性が指摘できる。

SP703・704・707・709から、山茶碗片・陶器片・カワラケ片が出土している。建物の方向や構造から、近世（17世紀以降）の建物跡であるSH23～25と近い時期の建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ２７（第26図）

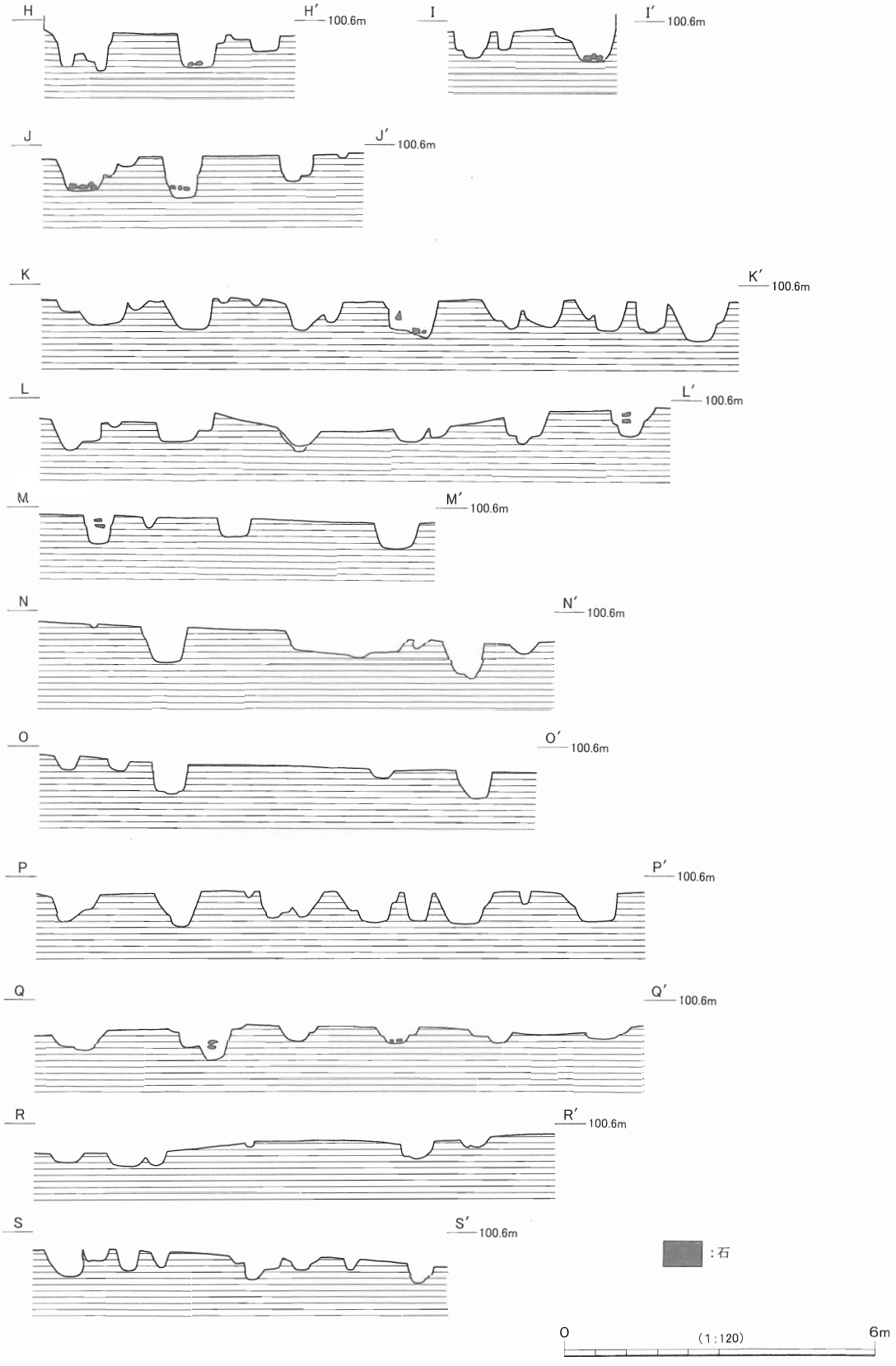
Ｃ２グリッド南東部で、３基の柱穴が約2.1mの間隔で南北に並ぶ。柱穴は直径0.4m弱で、検出面からの深さは0.3～0.4mである。柱穴・柱間はSH29・SH28と近いが、方向はSH27だけが若干傾く。また、SH27はSH28・SH29それぞれに対して、接近しすぎる部分がある。SH28・SH29と同時に存在した施設跡であるとは判断し難く、SH28と近い性格の別時期の施設跡である可能性を評価したい。



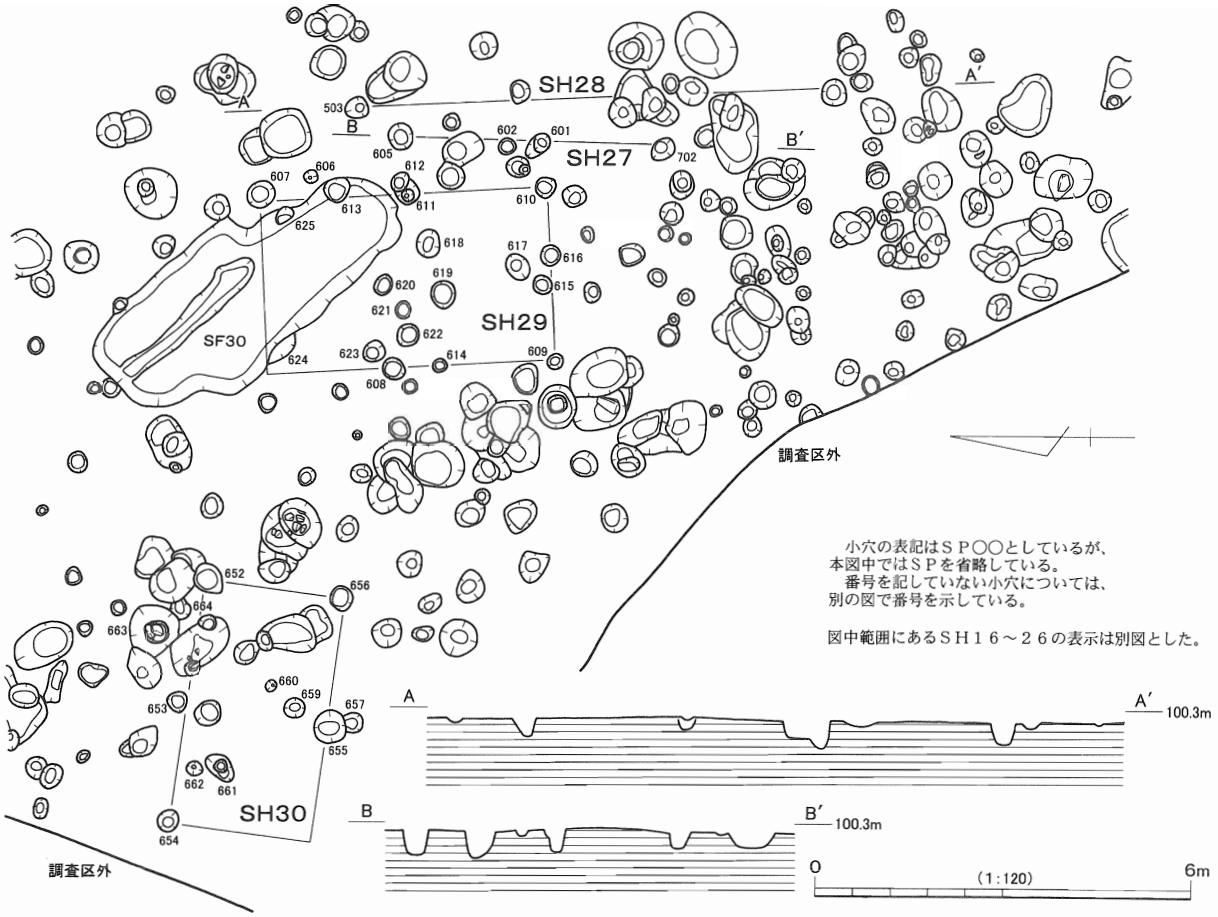
小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。
番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

図中範囲にあるＳＨ２７～３０の表示は別図とした。

第24図　調査区北西部の建物群１



第25図　調査区北西部の建物群２



第26図　調査区北西部の建物群３

SP601・605から山茶碗片・カワラケ片、SP702から山茶碗片・陶器片（第39図91）が出土している。出土遺物から、SH27は中世後半（15～16世紀）の柱穴列（柵など）である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ２８（第26図）

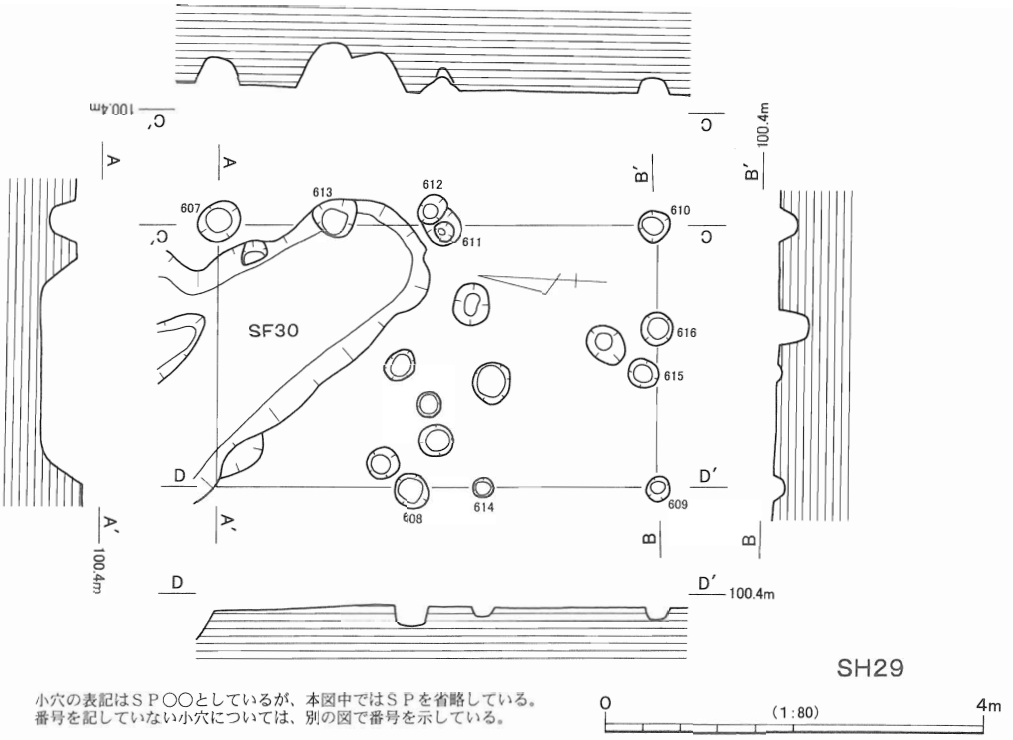
Ｃ２～Ｄ２グリッドで、４基の柱穴が約2.5m前後の間隔で南北に並ぶ。柱穴は、直径0.3～0.5m、検出面からの深さ0.15～0.35mである。柱穴・柱間の特徴やその配置から、SH29に関連した柵などの施設跡である可能性が評価できる。

SP503・599から、山茶碗片・カワラケ片・金属片が出土している。また、SH27・29と同一方向であることから、SH28は中世後半（15～16世紀）の施設の柱穴列である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ２９（第26・27図）

Ｃ２グリッドに位置する。長軸はほぼ南北、１間×２間（2.8m×4.7m）の建物跡である。柱穴の直径は0.25～0.5m、検出面からの深さは0.15～0.3mである。SF30や遺構面削平のため、北東隅の柱穴は消失していた。東辺中央の柱穴は２基重複しており、建て替えのあった可能性が指摘できる。一方、西辺中央部には２基の柱穴が離れて存在している。東辺中央の２基と対応する可能性もあるが、いずれにしても、西辺中央の柱穴は南北のどちらかに寄る。

SP607・608・610から、山茶碗片・陶器片・土師質土器片が出土している。また、SH27・28に平行することから、SH29は中世後期（15～16世紀）の掘立柱建物跡である可能性が高いと判断できる。



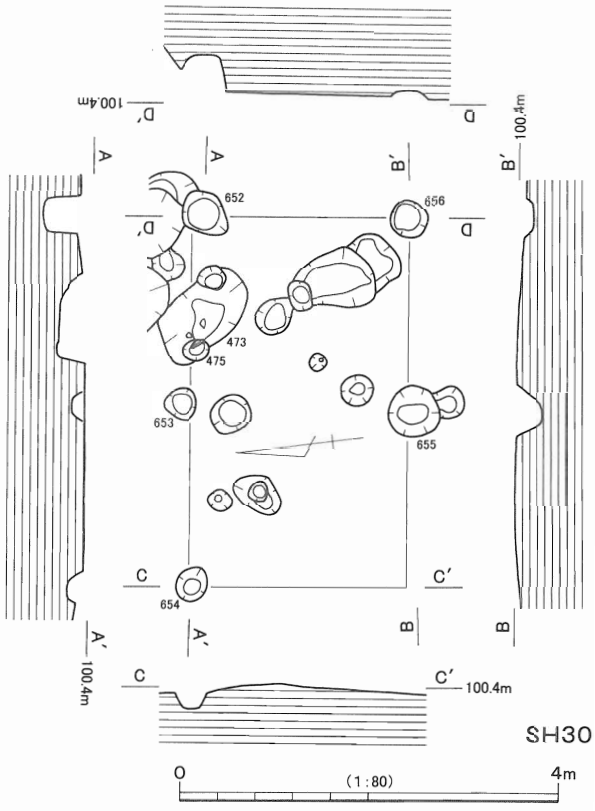
小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。
番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

第27図　SH29

ＳＨ３０（第26・28図）

Ｃ１グリッド東部に位置する。長軸はほぼ東西、１間×２間（2.3m×3.9m）の建物跡である。柱穴の直径は0.3～0.6m、検出面からの深さは0.1～0.3mである。遺構面削平のためか、南西隅の柱穴は消失していた。

SP652・655から、山茶碗片・土師質土器片が出土している。本遺跡出土山茶碗の大半は13世紀のものであり（第４節４）、SH30は中世（13世紀以降）の掘立柱建物跡である可能性が高いと判断できる。さらに、SH30はSH29などと近い方向の建物跡であり、中世でも後半（15～16世紀）の可能性の方が高いと判断することもできる。



小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。
番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

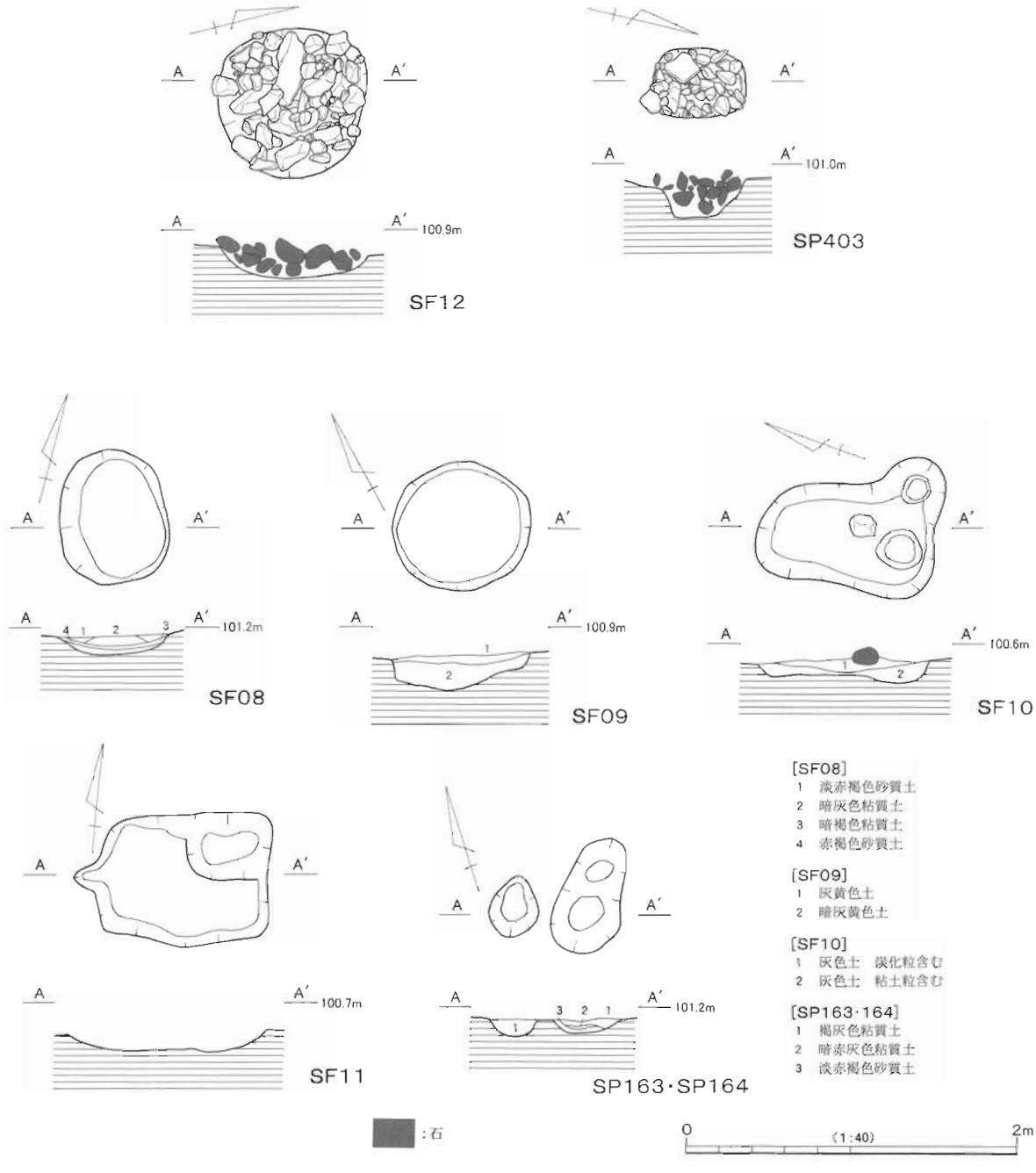
第28図　SH30

（2） 土　坑

土坑はSF01～32を検出した。集石土坑、火を使用した跡、トイレ・貯蔵施設、その他に分けて示す。

集石土坑（第29図）

SH23の柱穴やSP430（第29図）など、建物・施設跡の柱穴の中には、河原石を根固石や栗石として入れたものがある。しかし、Ｄ５グリッド南西隅に位置するSF12は、柱穴とするには直径0.9m強と大きく、単独１基だけの発見である。また、トイレ・貯蔵施設とするには浅く、木材等は全くなかった。河原石が全体に入っており、集石墓の可能性もある。しかし、出土遺物および骨の出土はない。



第29図　集石土坑など

火を使用した跡（第29図）

4基の土坑（SF08～11）のほか、2基の小穴（SP163・SP164）もあげることができる。

SF08（D5グリッド南部）は、長軸0.83mの楕円形、深さ約0.1mである。底面に焼土が認められた。SF12の近くに位置するSF09（D4グリッド南東）は、直径約0.8mの円形、深さは約0.2mである。上層で焼土化を認めることができたが、不明瞭である。両遺構とも、出土遺物はない。

SF10とSF11は、E4グリッド西寄りで隣接する。ともに長辺1.0mほどの方形で、深さは約0.1m強である。SF11には焼土粒および焼土面が認められたが、SF10にはなく、炭化粒を多く含んでいた。長軸方向が直行し、2基が関連しあっている可能性も指摘できる。ともに山茶碗片（第36図32など）などが出土している。B5グリッド南西隅のSP163・164も隣接するが、直径0.3～0.5mと小さい。深さは0.07mほどである。覆土に炭化粒が含まれ、その下に焼土が認められる。出土遺物はない。

これらは遺跡の南東部、丘陵裾に沿った部分に位置し、何らかの目的に沿った配置であると指摘できる。しかし、その目的を具体的に知ることはできない。火葬跡の可能性も考えることができるが、明確な根拠はない。

トイレ・貯蔵施設（第30図）

直径0.8～1mの正円形（掘方は不整形）の地下施設が多く発見された。①壁面に竹網籠を伴う土坑、②壁面に木製桶を伴う土坑、③壁面に漆喰を伴う土坑に分けられる。SF02・03・17は①、SF05・14・15は②である。SF01・04・07・13・16は①か②であるが、判断できない。SF06・18・20・24は③である。覆屋を伴うと判断できるものはない。

①は、竹網籠であることから、農作物などの貯蔵施設である可能性が高い。該当する3基では、円環状に巡る竹タガと、それに直行するヌキの竹材が検出された。①か②か判断できないとした5基では、竹タガと木材が出土し、ヌキは検出できなかった。

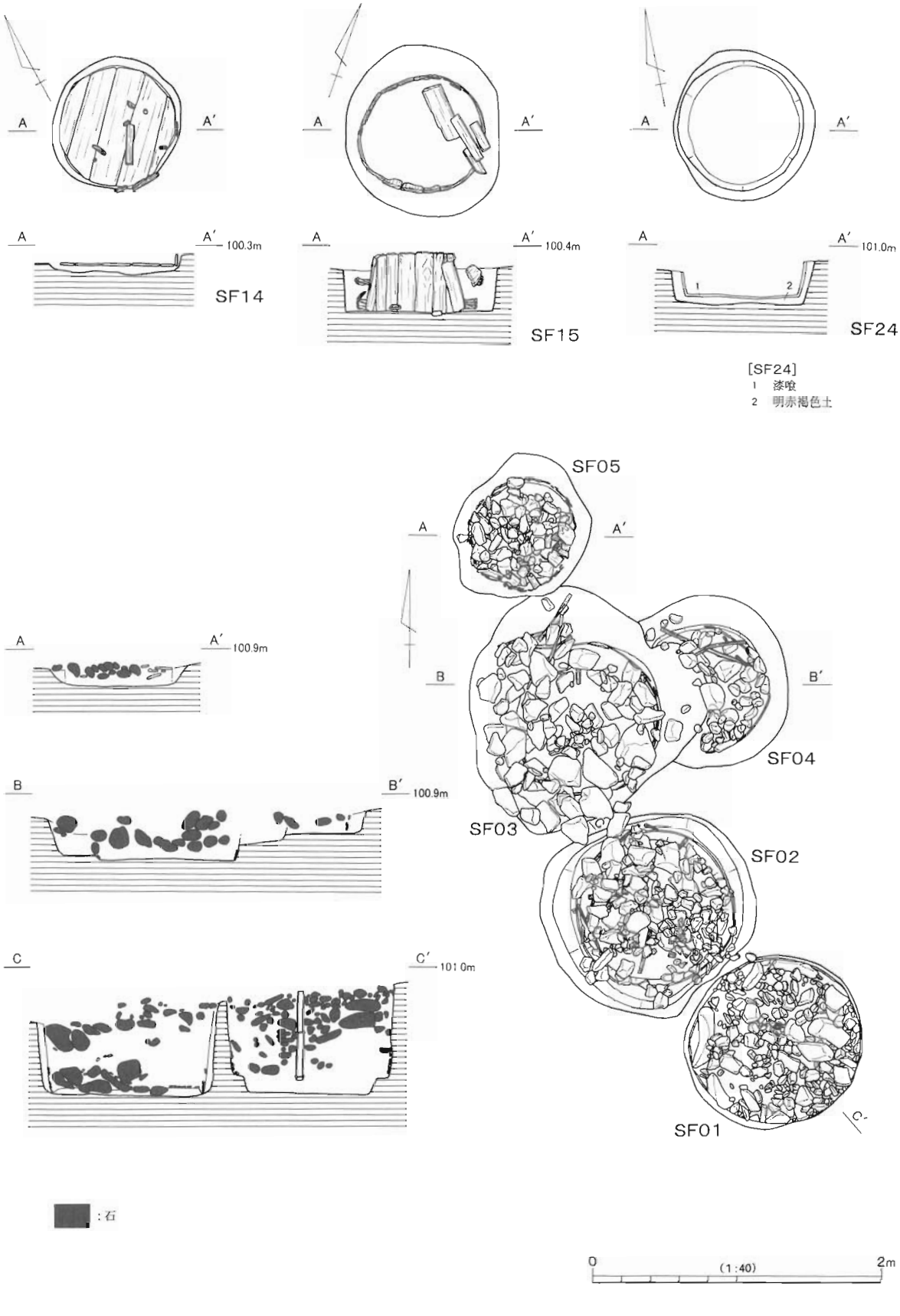
②は、貯蔵施設かトイレ遺構の可能性がある。墓の可能性もあるが、骨などの発見はなかった。SF05・14・15の近くには①の土坑があり、同じ貯蔵施設である可能性が指摘できる。ただし、②の全てが同じであったとは限らない。トイレ施設や肥溜めが含まれている可能性も否定できない。③は、トイレ遺構であると考えられている土坑である。

調査区南東部（E5グリッド西部）では、SF01～05が隣接して発見された。切り合いからSF04→SF03→SF05という先後関係が認められている。一方、SF01～03は切り合っていない。農作物などの貯蔵施設が、3基並列していた可能性もある。SF01～05は、埋め戻しの際に石が多く入れられている。SF01では、その中で垂直に立つ竹筒が見つかった。民俗事例で「息抜き」と称されるもので、廃棄に伴って呪術的な行為が行われたことを指摘することができる。なお、SE01でもこの竹筒が認められている。

各土坑から中近世遺物（SF01：第35図10、SF06：第39図85、SF07：第35図14・20、SF13：第36図40・第40図126、SF14：第43図163、SF15：第36図24、SF17：第39図94、SF20：第37図64・第39図113、など）、さらに近代の器物も出土するものがあった。多くは埋め戻しの際に入ったものであると考えられるが、概ね近世後半以降の遺構であると判断できる。

その他

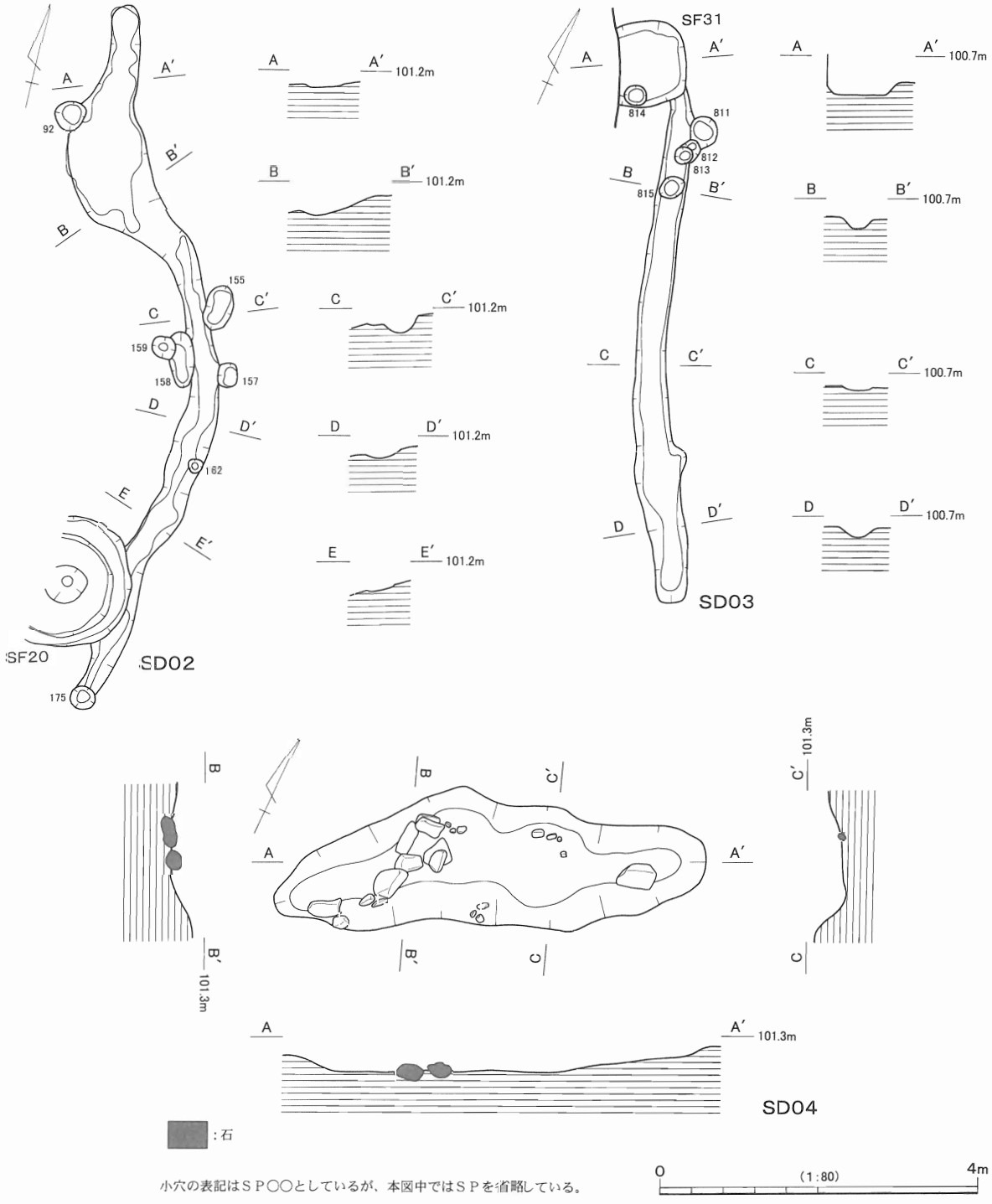
SF30は、SH24・25で述べたとおり、近世後半以降の建物（SH24・25）の内部関連施設である可能性が指摘できる（第24・25図）。覆土による判断ができなかったが、遺構の形状から、SH24・25のそれぞれに伴った2基の方形土坑が重なったものと考えることもできる。陶器・カワラケが出土しているが、小破片で占められ、詳細な時期は特定できない。その他のSFは、自然の窪地や不明遺構である。



第30図　トイレ・貯蔵施設

（3） 溝状遺構

SD01～04がある（SD01は第17図、他は第31図）。SD01・02・04は浅く平面・断面とも不定形であることから、自然地形の一部である可能性が高い。SD02・SD04から山茶碗片（第36図36）などの中世陶器片が出土している。なお、SX02も同様の性格・時期のものと判断できる。一方、SD03も浅く断面不定形だが、直線にのびる。方向が同じSH25などとの関連も想定できるが、明確な判断は難しい。



第31図　SD02～SD04

（4）井戸および周辺施設跡

ＳＥ０１（第32・33図）

Ｅ４グリッド南部で、石積みの井戸を検出した。遺跡の南縁、北側以外の三方を丘陵に囲まれた小さな平坦部に位置する。直径２ｍ強、深さ約３ｍの土坑で、高さ約2.8m分の石積みを検出した。

石積みの内法直径は約0.8mである。河原石を使用し、小口面を内側にしている。最上部には上面の高さをそろえるように石を選んで設置している。石積みの崩落は少ない。すなわち、本来よりこれが石積みの最上面であった可能性が高い。裏込めには拳大から人頭大の河原石が使用されている。

底には、井桁状にした松材４本が据えられていた。木材は丸太状であるが、その両端には継手加工を施している。この約１ｍ四方の井桁の下には、拳大から人頭大の石が配列されていた。

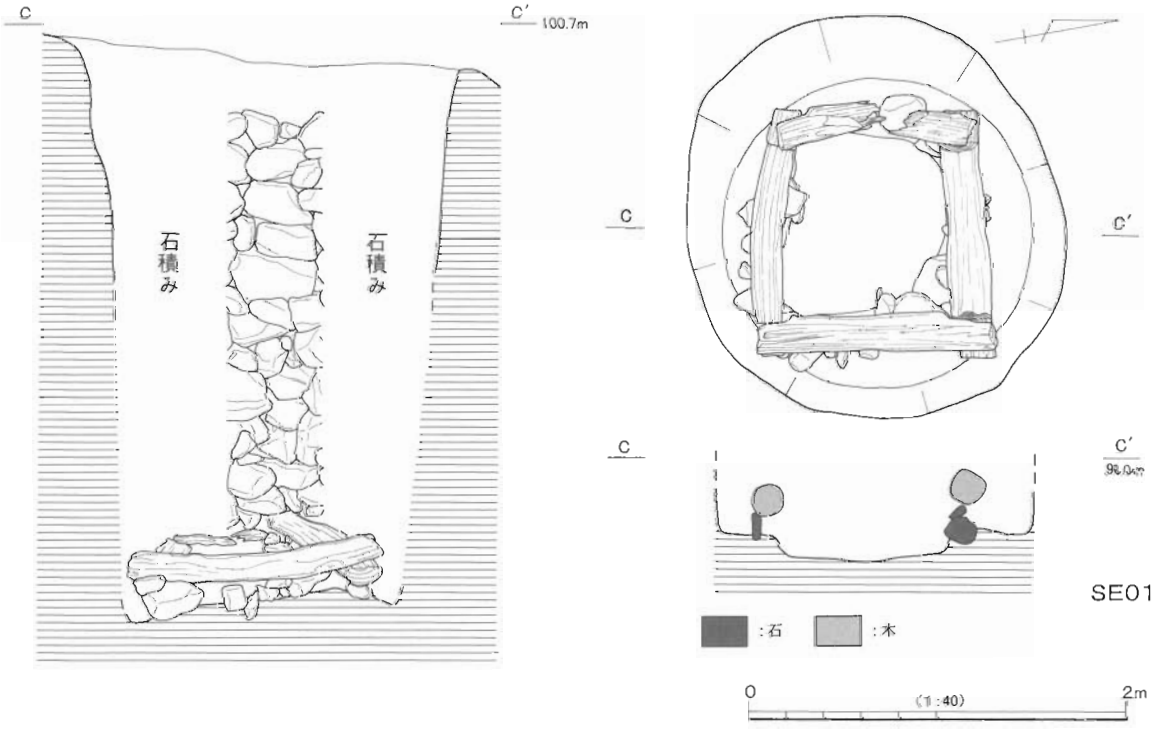
井戸は埋められていたが、上層部の中央に長さ約0.8mの竹筒が立てられていた。SF01と同様、「息抜き」という一種の民俗事例であり、信仰を背景とした廃棄に伴う呪術的行為を認めることができる。

覆土の上部で、山茶碗片（第35図13、第37図57）、陶器片（第39図90・107）、カワラケ片（第42図149・153）など様々な器物が出土している。下部では、柄杓部材などの木製品（第43図156・157）が出土している。出土遺物から、近世後半以降まで使用された可能性が高いと判断できる。

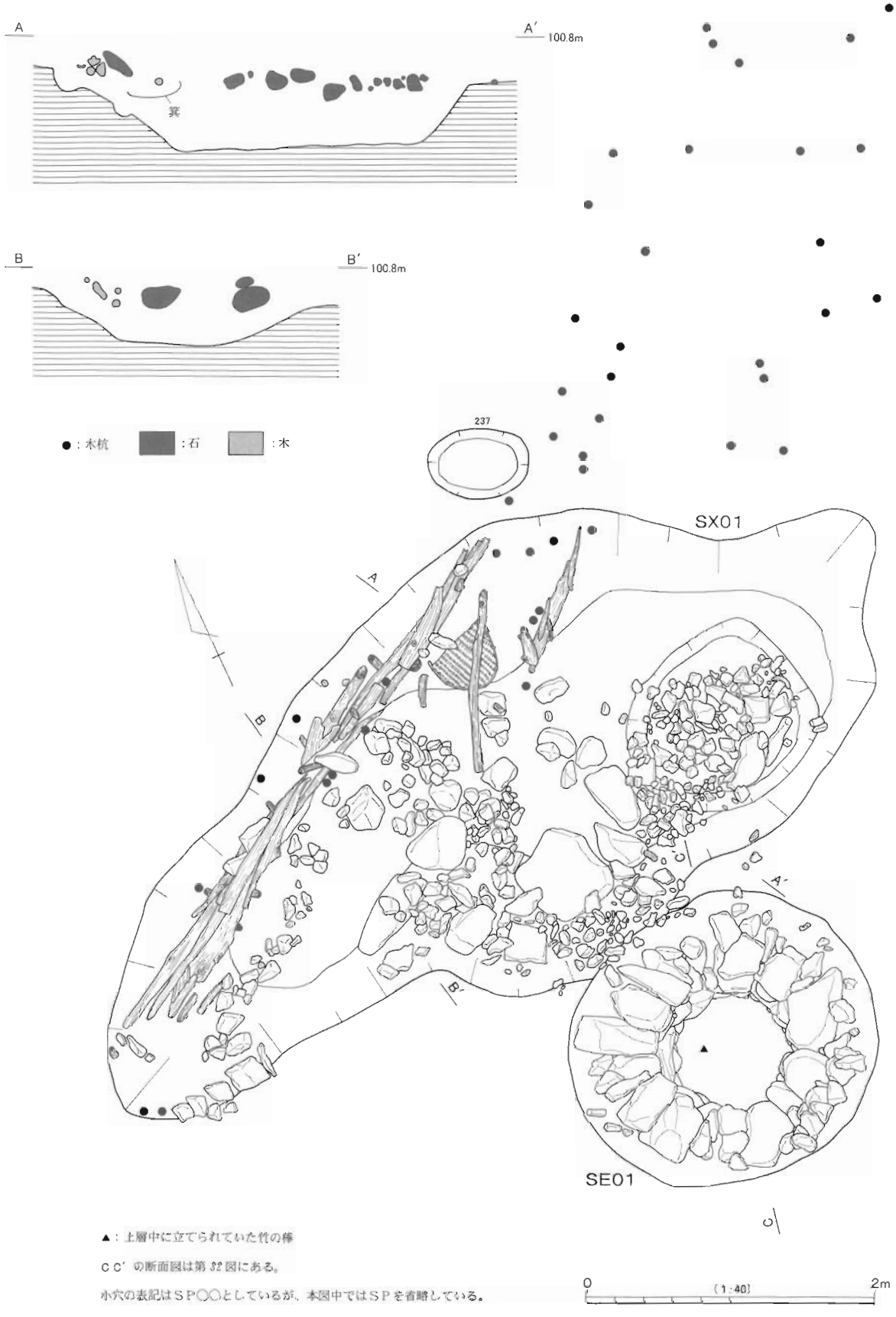
ＳＸ０１（第33図）

SE01の北隣に平面不定形の窪地状遺構が検出された。長軸約6.5m、短軸約3.0m、深さ約0.6mである。SE01との切り合い関係は把握できなかった。木組み施設と配石施設を伴うが、これら施設は掘り込みの大半が埋まった上に設置されている。

木組み施設は、SX01の北縁に丸太材数本を束ねて置き、両側に木杭を打ち込むことで固定した施設である。杭は、掘り込みの東約４ｍにまで列状に認めることができ、さらに別の杭列も検出されている。



第32図　SE01の石積みと下部構造



▲：上層中に立てられていた竹の棒

ＣＣ′の断面図は第 32 図にある。

小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。

0 (1:40) 2m

第33図　SE01・SX01

本来は、掘り込みの範囲とは直接関係しない施設であると捉えることもできる。丘陵から流れる土砂等を受け止めるもの、もしくは井戸および配石施設を外部と区画し、諸施設を使った作業を容易にするとともに、施設の保全を目的とするものであったと考えることができる。

配石施設は、SE01と木組み施設との間で、掘り込み部分と同じ範囲に広がる。まず、SE01に隣接する位置に、0.6m四方の上面を水平にして置かれた大きな河原石が注目される。周囲にも大きめの河原石が配置されており、井戸に付随する通路もしくは作業場的な施設を設けたものとして考えることができる。ただし、木組み施設の南に沿った石群は、掘り込み部分を埋める際、木組み施設の補強などのために施したものであると考えたい。また、東に広がる小さい石の集積は、多くの器物片を伴っており、礫を伴う廃棄跡である可能性も否定できない。

SX01の出土遺物として、山茶碗片（第36図27・33・34、第37図50・51・54・55・56・60・62・63・72)、陶器片（第38図77・79、第39図97・104)、磁器片（第41図139・142・143）をあげたが、ほかにカワラケ片・瓦片や箕も出土している。鎌（第43図161）も、この近辺からの出土である。多くの遺物は、木組み・配石施設の周辺からの出土であり、木組み・配石施設はSE01と同じ近世後半以降まで使用された可能性が高いと判断できる。一方、掘り込みは配石施設と無関係でなく、除水などを目的とする下部構造として設けられたと評価することもできる。この評価が妥当であるならば、井戸の使用期間を考慮する必要もあるが、概ね同様の時期であると判断することはできる。

（5） 第2遺構面の遺構

調査区東部中央の一部に、第2遺構面の存在を確認した。本章の第3節1で示したとおり、この面で形成された遺構は、層位的に中世後半（15～16世紀）以前のものと判断することができる。しかし、第2遺構面の存在が認められる範囲は狭い。また、第2遺構面で検出した遺構のうち、柱穴などは、遺構の発見・検出が難しかった第1遺構面で検出すべき遺構であり、そこで検出できなかった遺構が第2遺構面で発見された可能性が高い。以上のように考えると、確実に第2遺構面で形成された遺構であると判断できるものは、SX03とSD05だけになる。

したがって、この報告ではSX03・SD05以外の第2遺構面で検出した遺構は、本来は第1遺構面の遺構であるとして扱っている。

ＳＸ０３（第34図）

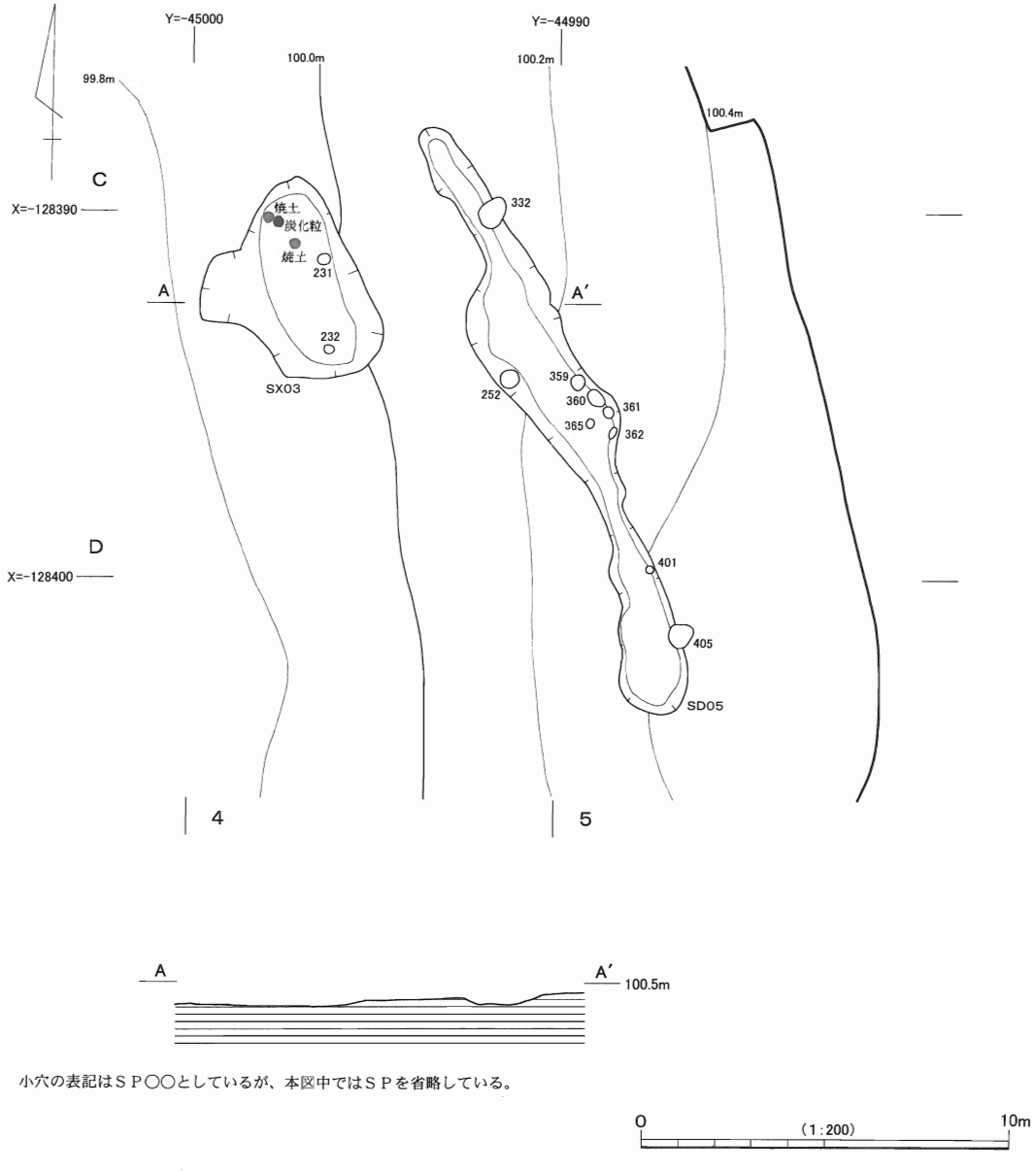
Ｄ４グリッド北西部に位置する。平面形は、長軸約5.5m、短軸約3.0mの楕円形の西側中央に張り出し部をもつ。深さは約0.1mと浅い。自然の窪地である可能性もあるが、他より出土遺物が多く、北寄りでは炭化粒の集中部や焼土の認められた部分もあった。その性格を明確にすることはできないが、何らかの人為的行為があった可能性も否定できない。

全体的に散在するように、山茶碗片（第35図４～７、第36図45・47、第37図58・59・67・68)、陶器片、磁器片（第41図131・137)、カワラケ片が出土している。中世（13世紀以降）の遺構であると判断できる。

ＳＤ０５（第34図）

Ｃ４グリッド南東部からＥ５グリッド北西部にかけた、長さ約17.2ｍの溝状遺構である。しかし、平面形・断面形ともに不定形であり、人為的な遺構であるかは疑わしい。自然流路である可能性も指摘できる。

散在的に、山茶碗片（第36図39、第37図61）のほか、陶器片・カワラケ片が出土している。遺構面による判断と同様、中世（13世紀以降）の遺構であると判断できる。



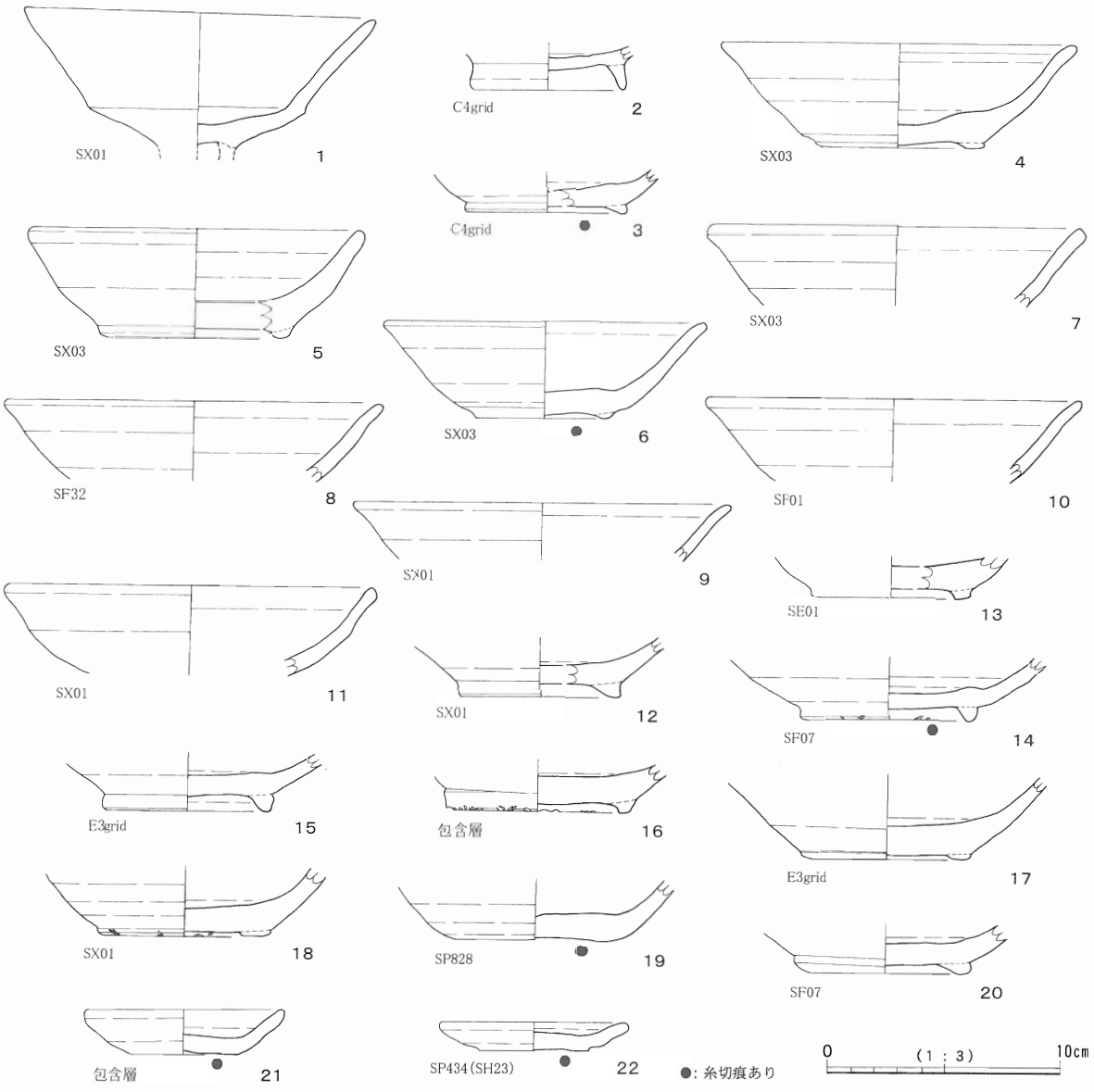
第34図　第２遺構面（SX03・SD05）

3．遺　物

（1）古式土師器　（第35図1）

第35図1は、本遺跡で唯一出土した古墳時代の遺物である。SX01から出土したが、SX01に伴うものではなく、周辺から流れ込んだ遺物であると判断できる。ただし、本遺跡や周辺において、古墳時代の遺構は確認されていない。どのような遺構、行為に伴った遺物であったのかは、全くわからない。

1は、土師器の高坏の坏部である。坏底部と口辺部の境に明確な稜をもつ。口辺部の立ち上がりは直線的で、外反はしない。口径は小さく深さのある坏部である。全体的に表面が荒れ、調整などについてはわからない。脚部接合部の断面も摩滅している。外面の口縁部寄りの一部に、黒斑が認められる。器形の特徴などから、古墳時代前期末～中期初頭に位置づけできる（松井1995、中嶋1997、鈴木敏2002）。



第35図　出土土器1（土師器、灰釉陶器、山茶碗：尾張産と渥美・湖西産）

（２）灰釉陶器　（第35図２）

灰釉陶器の出土は少なく、図示できたものは第35図２の１点だけである。底部だけであるが、胎土などから清ヶ谷産であり、高台の特徴などから９世紀末～10世紀前半（清ヶ谷古窯跡群の灰釉陶器編年（松井1989）Ⅲ期－１）に位置づけできる。

（３）山茶碗　碗・小碗・小皿　（第35～37図）

本遺跡出土遺物の内で最も多くを占めているのが山茶碗である。胎土などから尾張産、渥美・湖西産、東遠江産、知多産に大別できるが、尾張産は３だけである。底部裏面に糸切痕が残り、低くつぶれ気味の高台がつくことから、12世紀末か13世紀初頭に位置づけできる。

なお、掲載する順番は、産地→器種→残存部位の優先順で分けたものを基にしている。さらに時期順に並べるべきであったが、その点については誤った部分があることを注記しておく。

渥美・湖西産（第35図４～22）

４～20は、渥美・湖西産の碗である。体部については、いずれも内湾しながら立ち上がり、口縁部付近で外反する形状を基本とする。しかし、内湾・外反ともわずかなものばかりである。器壁は厚いもの（５・６など）と薄いもの（７・９～11など）がある。底部裏面の糸切痕も、残されているもの（６・14・19）と消されているものがある。高台については、12だけは幅広でしっかりとした高台をもつが、他は低く貧弱な高台やつぶれた高台である。19には高台がついていなかった。高台が剥離した可能性もあるが、その痕跡を明確に認めることはできない。高台端部にモミ痕が認められるもの（14・16・18）もある。なお、しっかりとした高台をもつ12には、モミ痕は認められない。

21・22は、渥美・湖西産の小皿である。ともに底部裏面に糸切痕を残し、体部は直線的に開く。ただし、21に対して22は非常に低い形状を呈している。

12は12世紀代（湖西古窯跡群の山茶碗編年（松井1989・1993a）Ⅰ期）、７や８は12世紀末（同上Ⅱ期）に位置づけできる可能性が高い。しかし、大半は13世紀代であり、15・16や21は13世紀前半（同上Ⅲ期－１）、４～６・17・18や20は13世紀中頃～後半（同上Ⅲ期－２・３）に位置づけできる。

東遠江産（第36図23～47）

23～36は、東遠江産の碗である。全体的に器壁は薄く、体部は内湾しながら立ち上がる。高台については、比較的高い断面三角形のもの（28～30）から、低く貧弱なもの（23・31～36）まで認められる。23・31・35だけ底部裏面に糸切痕を残す。また、23・33～35の高台の端部にはスノコ状痕が認められる。比較的高い高台をもつ28～30には、糸切痕・スノコ状痕とも認められない。一方、高台端部のモミ痕は、高い高台をもつ29にだけ認められる。

37～39は、東遠江産の小碗である。体部は内湾する傾向にあるが、37は直線的に近い。いずれも、底部裏面に糸切痕は認められない。また、比較的高くしっかりした三角形の高台がつく。40～47は、東遠江産の小皿である。器高の差があるが、全ての底部裏面には糸切痕が認められる。44の底部裏面には、さらにスノコ状痕が認められる。

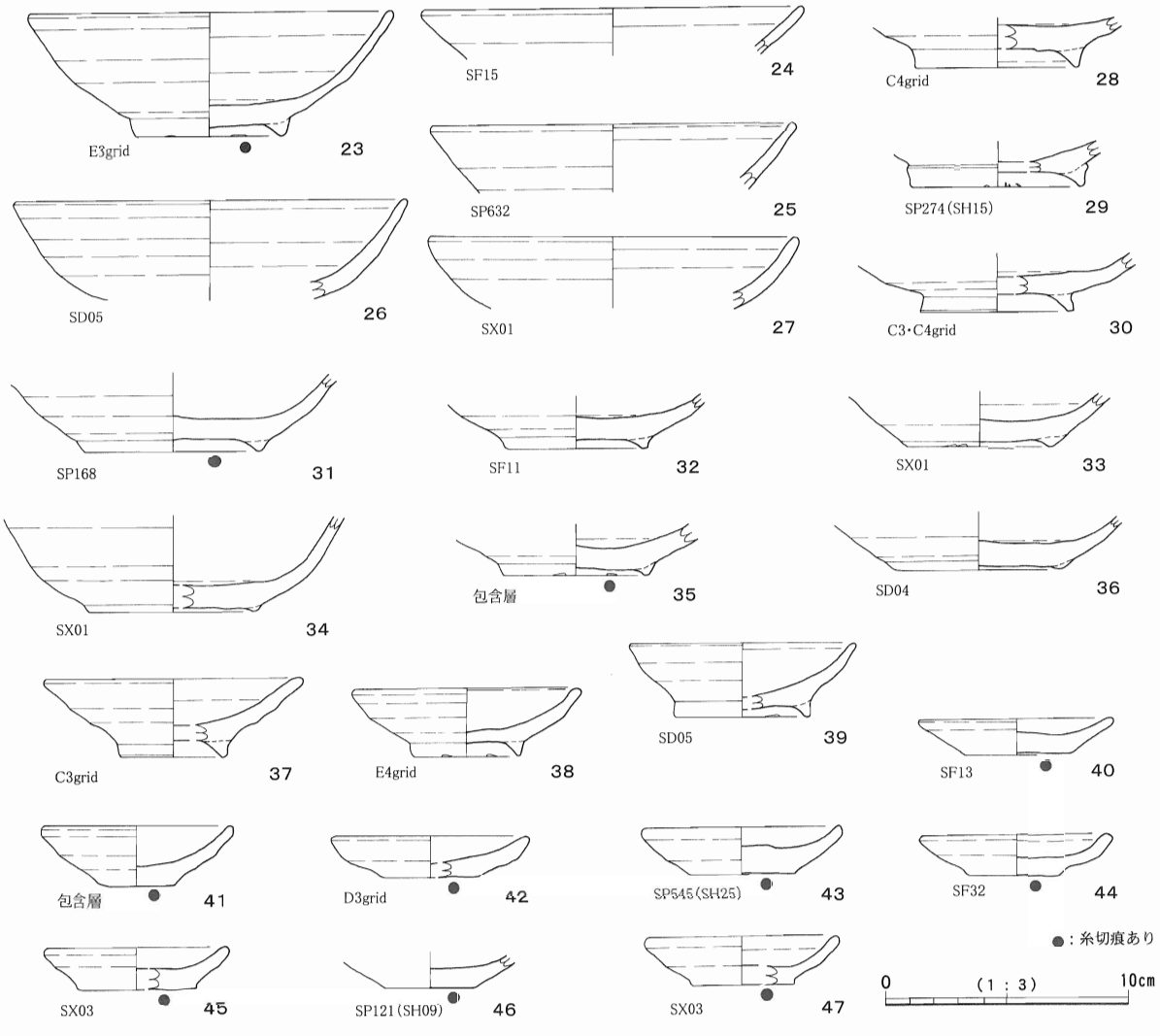
碗の28・29や小碗については、12世紀代（金谷古窯跡群の山茶碗編年（松井1993a）Ⅰ期）に位置づけできる。しかし、大半は13世紀代（同上Ⅲ期）に位置づけできるものである。30などは、その中間（同上Ⅱ期）に位置づけできる可能性がある。

知多産（第37図48～74）

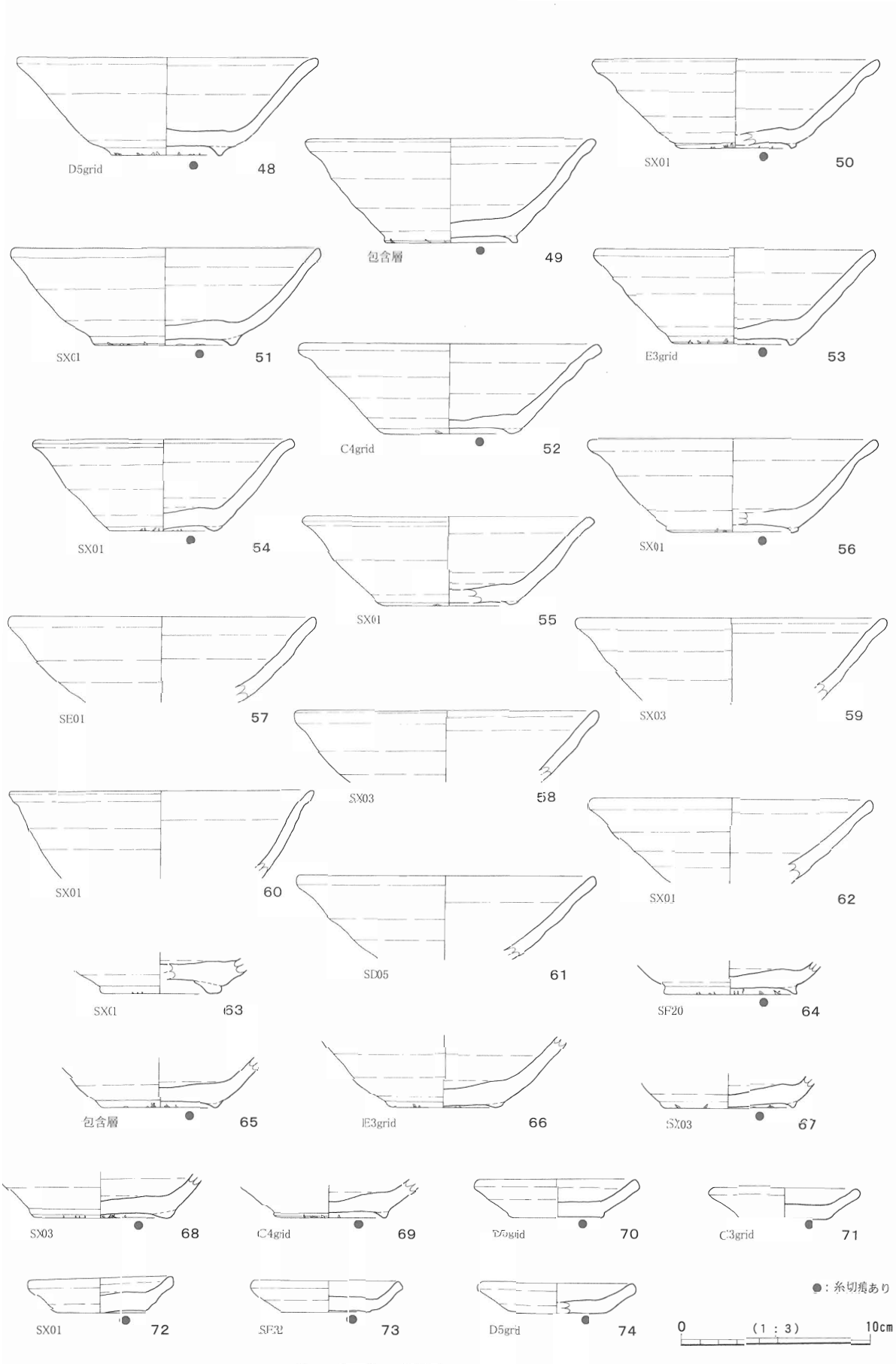
48～69は、知多産の碗である。東遠江産などと比べると、全体的に器壁が厚い。体部は、57・60などのように内湾しながら立ち上がるものから、52～54などのように直線的に立ち上がるものまである。ただし、顕著な内湾は認められない。口縁部については、強弱の差はあるものの、全て外反している。なお、口唇部には丸くおさめるもの（50・59・62など）と明確な面を形成するもの（51・53など）がある。さらに、60のように尖ってしまうものまである。高台については、63だけが幅広でしっかりした高台をもつが、ほかは低くつぶれたような貧弱な高台である。ほとんどの高台の端部にはモミ痕が認められる。底部裏面の糸切痕についても、ほかの産地のものに比べて多く、55・63・66以外で認められる。なお、55・58・62の内面にはススが付着している。

70～74は、知多産の小皿である。全て、体部は直線的に立ち上がり、底部裏面には糸切痕が残る。他に比べて、70だけが器高が高い。

63だけは12世紀代（赤羽・中野編年（中野1994）４型式）に位置づけできるが、ほかは13世紀代のものである。その中でも、13世紀前半（同上６型式）に位置づけできるものは48～50・70ぐらいであり、多くは13世紀中頃（同上７型式）に位置づけられるものである。



第36図　出土土器２（山茶碗：東遠江産）



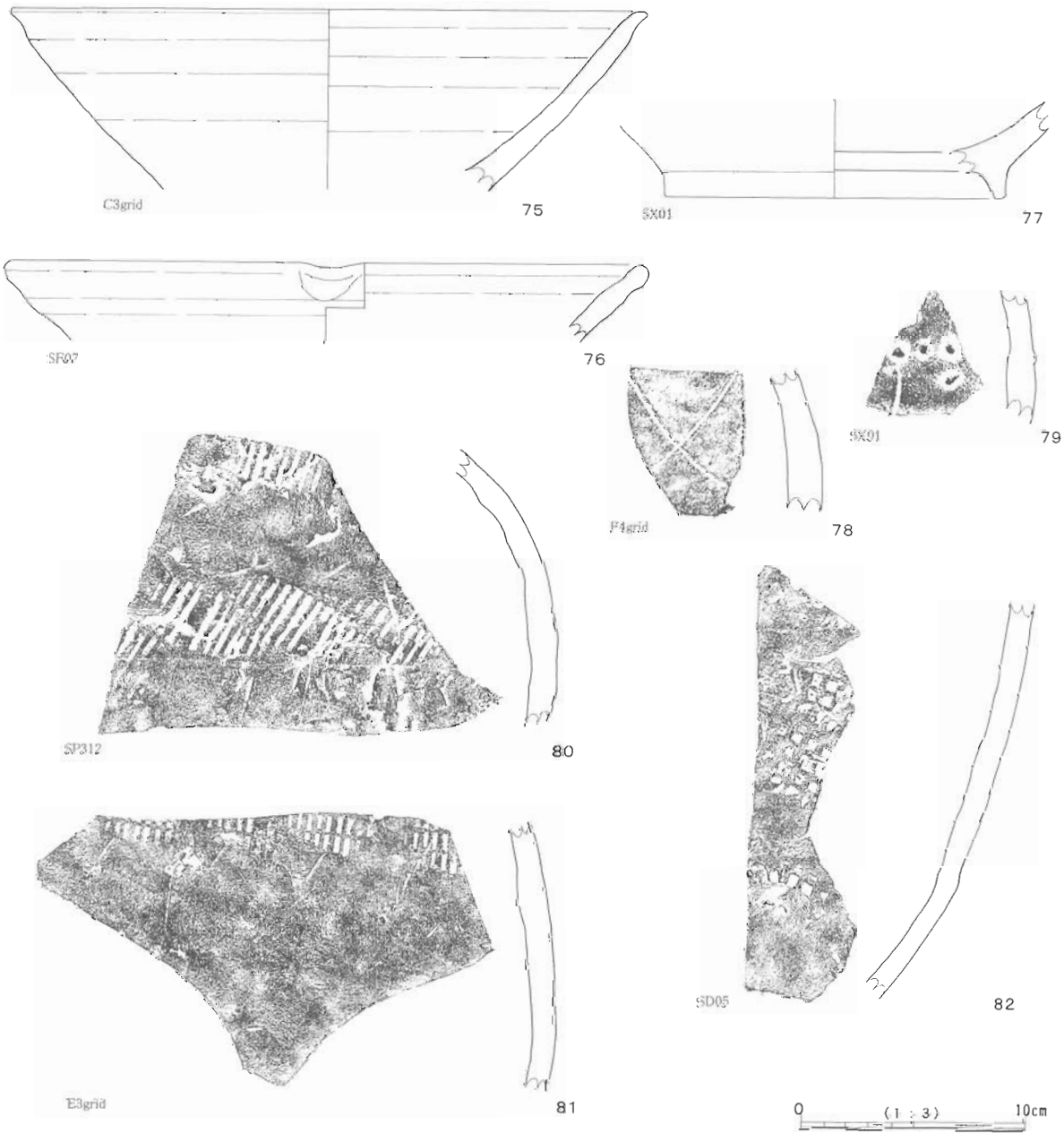
第37図　出土土器3（山茶碗：知多産）

（4）渥美・湖西産の鉢・壺・甕　（第38図75～82）

75～76は、山茶碗と同時期の鉢で、胎土などから渥美産のものと判断できる。75は、口縁部が外反する12世紀末頃の鉢である。76は片口鉢で、口縁部は75ほど外反せず、丸くおさめている。13世紀前半のものである可能性が高い。77は大平鉢の底部で、内面が著しく摩滅している。

78は、陶器の胴部片である。胎土の特徴などから、12世紀末の湖西産の壺・甕類である可能性が高い。外面に交差する２本の線刻が認められる。

79～82は、胎土などから渥美産の甕の胴部片であると判断できる。79の外面には小さな丸い円形の貼りつけ文が認められる。80～82の外面には、格子目文もしくは縦長格子目文の押印文が連続して施されている。いずれも12世紀代に位置づけできる。



第38図　出土土器４（鉢・壺・甕：渥美・湖西産）

（5）その他の陶器　（第39・40図）

古瀬戸や大窯期の瀬戸・美濃産陶器、中世～近世の志戸呂産陶器が出土している。以下に、各遺物についての器種や特徴のほか、その時期についても示していく。ただし、これらは散在した状態で出土したものであり、遺構に直接伴うものは少ない。また、小破片である場合が非常に多い。概ね位置づけられるであろう時期を示すこととする。なお、古瀬戸および瀬戸・美濃産陶器（大窯期）の時期等については藤沢良祐氏による研究がある（藤沢2000など）。ここでも、この研究成果を参考とした。

皿　類（第39図83～97）

83～85は、古瀬戸陶器である。83は灰釉卸皿で、14世紀前葉（古瀬戸中Ⅰ期）頃に位置づけできる。84は小破片で不明確だが、15世紀前半～中頃（古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期古段階）の折縁深皿（灰釉）であると判断できる可能性が高い。ただ、口唇部が波状になっている点が注意させられる。85は卸目付大皿（灰釉）で、15世紀後半（古瀬戸後Ⅳ期新段階）に位置づけできる。

86～90は、大窯期の瀬戸・美濃産陶器である。86は灰釉端反皿で、底部内面の中央に印花文（菊花文）が押印されている。15世紀末～16世紀初頭（大窯第１段階）に位置づけできるものである。なお、二次的に火を受けている。87・88は灰釉の皿の底部で、87にはトチンの痕跡が認められる。87・88ともに、概ね16世紀前半（大窯第２段階）に位置づけできる。89は鉄釉の丸皿で16世紀後半（大窯第３段階）、90は志野丸皿で17世紀代（大窯第５段階）に位置づけできる。

96・97も瀬戸・美濃産陶器である。灰釉の灯明皿で、18世紀後半～19世紀初頭に位置づけできる。

91～95は、志戸呂産陶器である。古瀬戸段階のものは91の縁釉小皿（鉄釉）だけであり、15世紀後半に位置づけできる。92は二次的な火を受けた縁釉小皿（鉄釉）で、口縁部を波状にしている。16世紀末頃に位置づけできる。93の折縁小皿（鉄釉）は17世紀後半～18世紀前半、94・95は、錆釉の小皿で18～19世紀に位置づけできる。

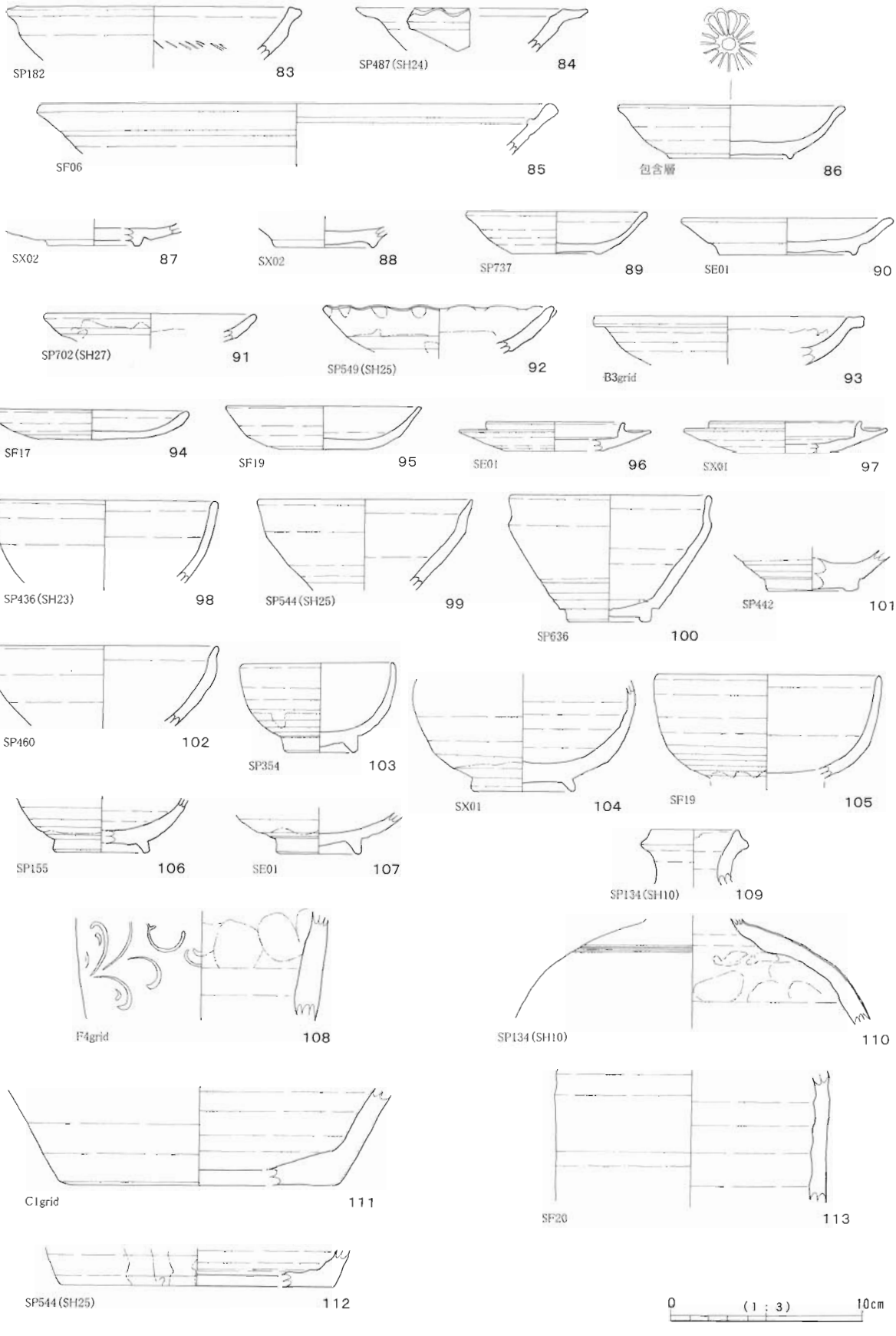
碗　類（第39図98～107）

98は、古瀬戸の丸碗であるが、内外面に鉄釉が施されている。102は、瀬戸・美濃産の天目茶碗で、17世紀代（大窯第５段階）に位置づけできる。103も瀬戸・美濃産陶器で、17世紀後半に位置づけできる灰釉小碗である。

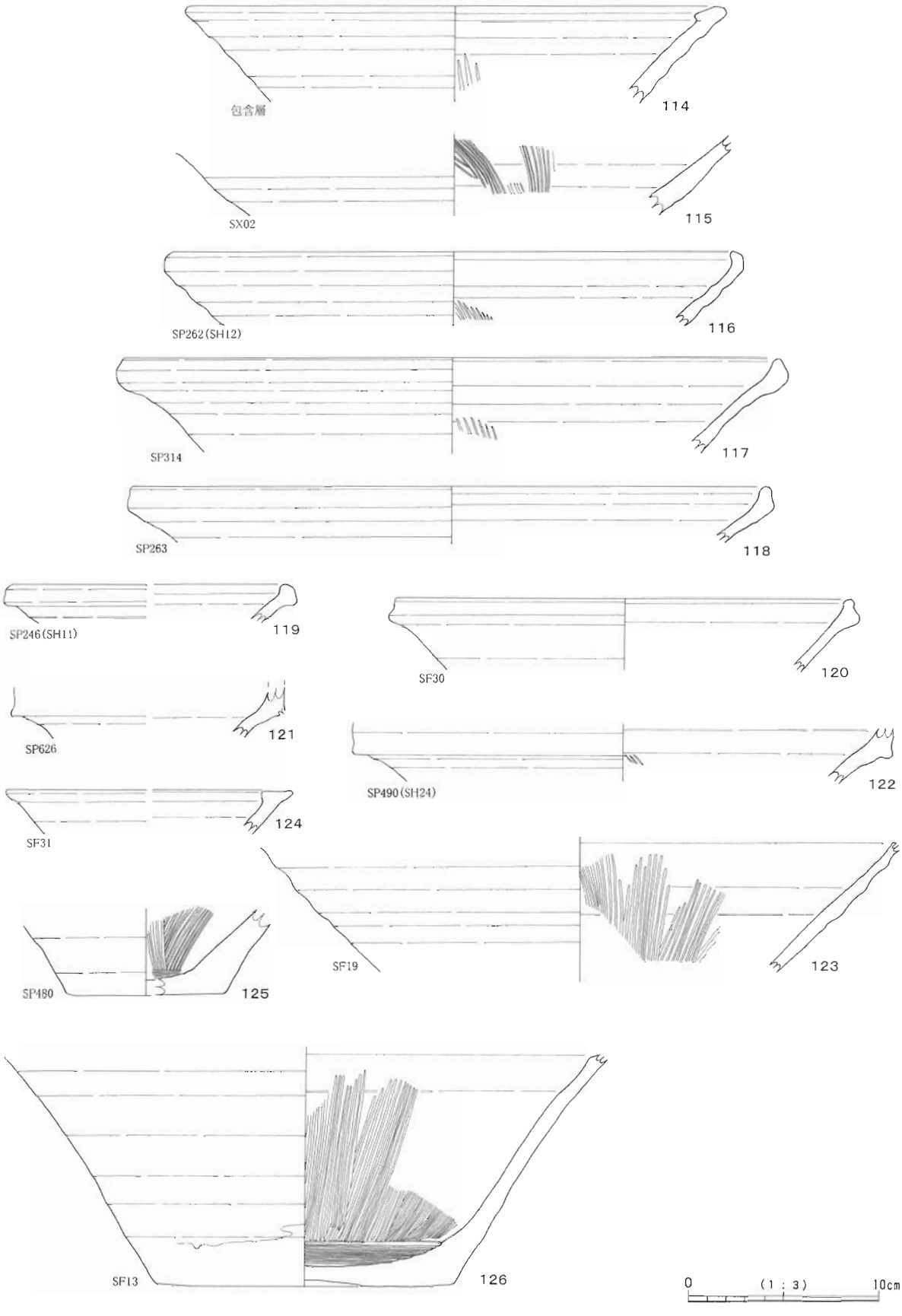
99～101は、志戸呂産の天目茶碗である。いずれも、体部は直線的に立ち上がる鉄釉陶器であるが、口縁部の特徴には違いがみられる。16世紀後半のもの（99）から17世紀代（100・101）のものまであると判断できる。104～107は、志戸呂産の碗であり、いずれも17世紀後半～18世紀初頭のものと判断できる。なお、鉄釉（104・107）と灰釉（105・106）が認められる。

壺・瓶類（第39図108～110）

108は、古瀬戸の瓶類の胴部片である。外面に草花文様が施されており、14世紀中頃（古瀬戸中Ⅲ～Ⅳ期）の灰釉梅瓶であると判断できる。109と110は、器の特徴および出土位置から同一個体である可能性が高いと判断できる。これも古瀬戸の灰釉梅瓶（瓶子）であると判断でき、13世紀後半（古瀬戸前Ⅲ～Ⅳ期）に位置づけできる。



第39図　出土土器５（その他の陶器：皿・碗・瓶・鉢）



第40図　出土土器６（その他の陶器：擂鉢）

鉢　類（第39図111～113）

111は、志戸呂産の鉢の底部で、16世紀末～17世紀初頭に位置づけできる。112は、瀬戸・美濃産の鉢の底部で、16世紀末～17世紀初頭（大窯第４段階）に位置づけできる。113は18世紀代の志戸呂産陶器と判断でき、水差や火入れを想定することができる。113だけは鉄釉、他は錆釉である。

擂　鉢（第40図114～126）

116は、古瀬戸の擂鉢で、15世紀後半（古瀬戸後Ⅳ期新段階）に位置づけできる。117～119は、15世紀後半～16世紀初頭（古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第１段階）の中での位置づけができる。一方、志戸呂産の擂鉢の中では、114だけが15世紀代に位置づけできる。

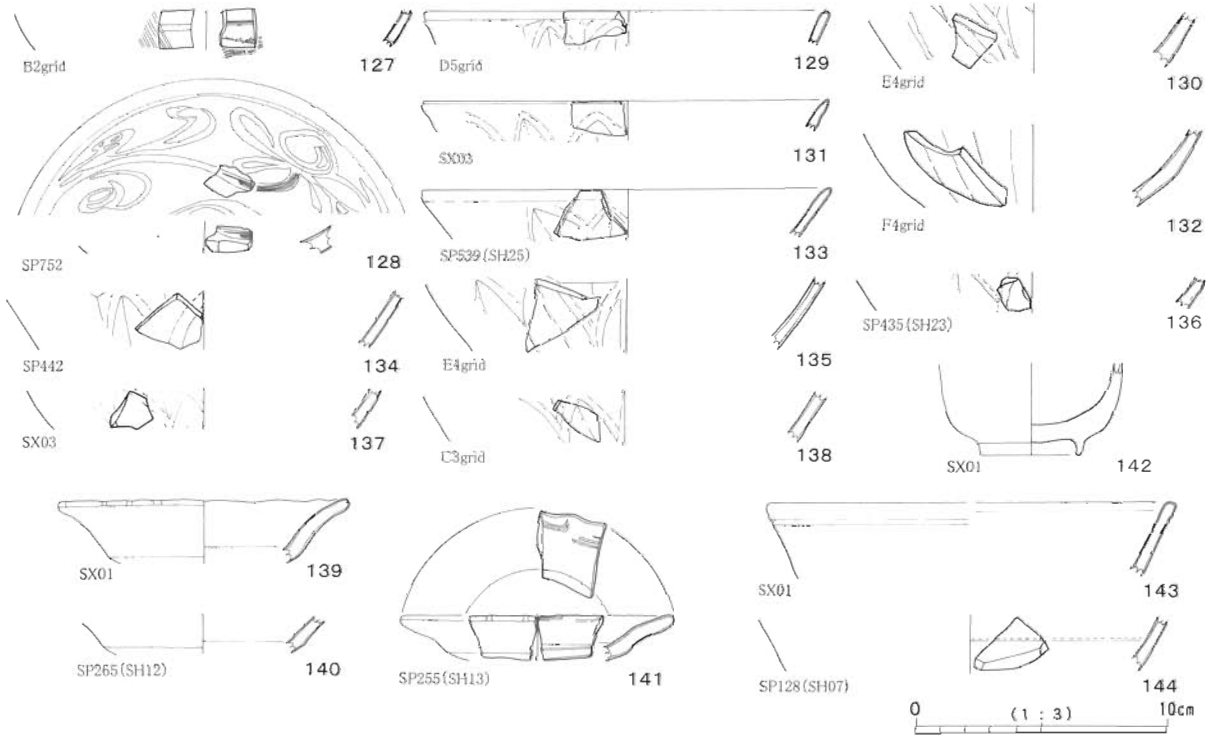
120～122は、大窯期の瀬戸・美濃産の擂鉢である。120は15世紀末～16世紀初頭（大窯第１段階）、121・122は概ね16世紀末～17世紀初頭（大窯第４段階）に位置づけできる。

志戸呂産擂鉢については、先にあげた114のほか123～126を掲載した。123は概ね16世紀後半～17世紀初頭に位置づけできるが、124は17世紀、125・126は18世紀の近世の擂鉢であると判断できる。

（６）磁　器（第41図）

青　磁（第41図127～141）

127は、青磁碗の体部片で、やや厚い器壁の内外面に櫛やヘラによる刻線が多く施されている。太宰府編年（横田・森田1978）同安窯系青磁碗Ⅰ－１ｂの可能性が高いと判断でき、12世紀中葉～13世紀初頭に位置づけできる。128も青磁碗の破片である。しかし、内面に劃花文を推測させる数条の重なる文様が認められ、太宰府編年（横田・森田1978）の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２であると判断できる。ただし、時期は127と同じ12世紀中葉～13世紀初頭に位置づけできる。



第41図　出土土器７（磁器）

129～138は全て、蓮弁の文様を有する青磁碗である。釉や胎土の違いや、129と136にだけ貫入が認められるなどといった個体差は別にして、全て太宰府編年（横田・森田1978）の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５であると判断できるものである。さらに、小破片で判断し難いものも多いが、多くはⅠ－５ｂに属するものと判断できる。いずれにしても、13世紀中葉に位置づけできるものである。

139～141は、龍泉窯系青磁の稜花皿である。腰折れ坏の器形を呈し、139・141で残存する口唇部は波状を呈する。141の内面には、二次的に火を受け観察し難くなっているが、刻線による文様を認めることができる。これらのような稜花皿は15世紀前半～16世紀前半（小野編年（小野1985）のⅠ～Ⅱ期）にみられ、とくに141は15世紀代（同上Ⅰ期）に位置づけできる。

白　磁（第41図142～144）

142は、全面に光沢釉を施した白磁小碗である。精良な灰色胎土で、体部下半の器壁が厚い一方、高台は薄い。中国産か否かも判断しかねる。143は、白磁碗の口縁部で、口唇部のやや下部外面に沈線が巡る。二次的に火を強く受けている。144は、白磁碗の体部片で、内面中位に沈線が巡る。

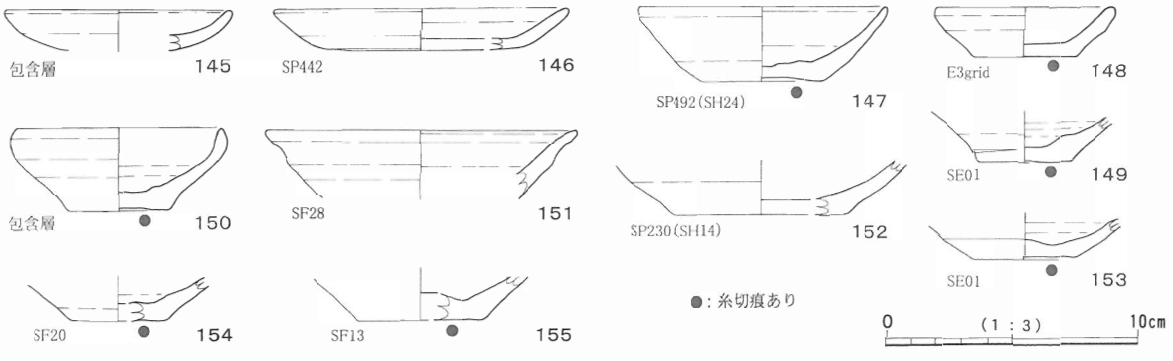
142の時期等はわからない。143は太宰府編年（横田・森田1978）の白磁碗Ⅳ類である可能性があり、144は太宰府編年（横田・森田1978）の白磁碗Ⅴ類である可能性が高い。ともに、11世紀中葉～12世紀初頭に位置づけできる。

（７）土師質土器　（第42図）

土師質土器類の大半はカワラケであり、図示できるのはカワラケだけである。カワラケの大半はロクロ成形で、底部裏面に糸切痕、さらに148ではスノコ状痕も認められる。一方、145・146はロクロによる横ナデ調整が認められるが、底部付近の外面は粗雑で、糸切がうかがえない。器形も他と異なる。

149・154・155などは体部が外反し、深い形状に復元できる。比較的硬い焼成であることからも、17世紀代に位置づけできる。153も硬い。151は比較的軟らかい焼成であるが、口縁部にかけて外反する。

多くが明るい黄～橙褐色を呈するなかで、147・150・152は茶褐色を呈している。さらに、147については、砂質の強い胎土、ノタメの弱さ、全体に内湾する形状といった特徴をあげることができ、15世紀後半～16世紀に位置づけできる可能性が高いと判断できる。150も内湾する体部などの特徴から、同様である可能性がある。148の体部も内湾する傾向にあるが、色調は明るい黄褐色を呈している。16世紀末～17世紀初頭前後のものである可能性を指摘することができる。



第42図　出土土器８（土師質土器）

（8）木製品・金属製品　（第43図）

木製品（第43図156・157）

156・157は、柄杓である。ともに、近世の井戸（SE01）の覆土下層から出土している。156・157とも、側板の緊縛、底板との連結などに樹皮を用いており、基本的に同じ構造をしている。もちろん、157にも柄孔はある。156の柄は、図の右側端部が欠損している。図では差し込みが中途になっている。本来は、柄孔の反対側の側板に端部があたる程度まで差し込まれていたと想定される。

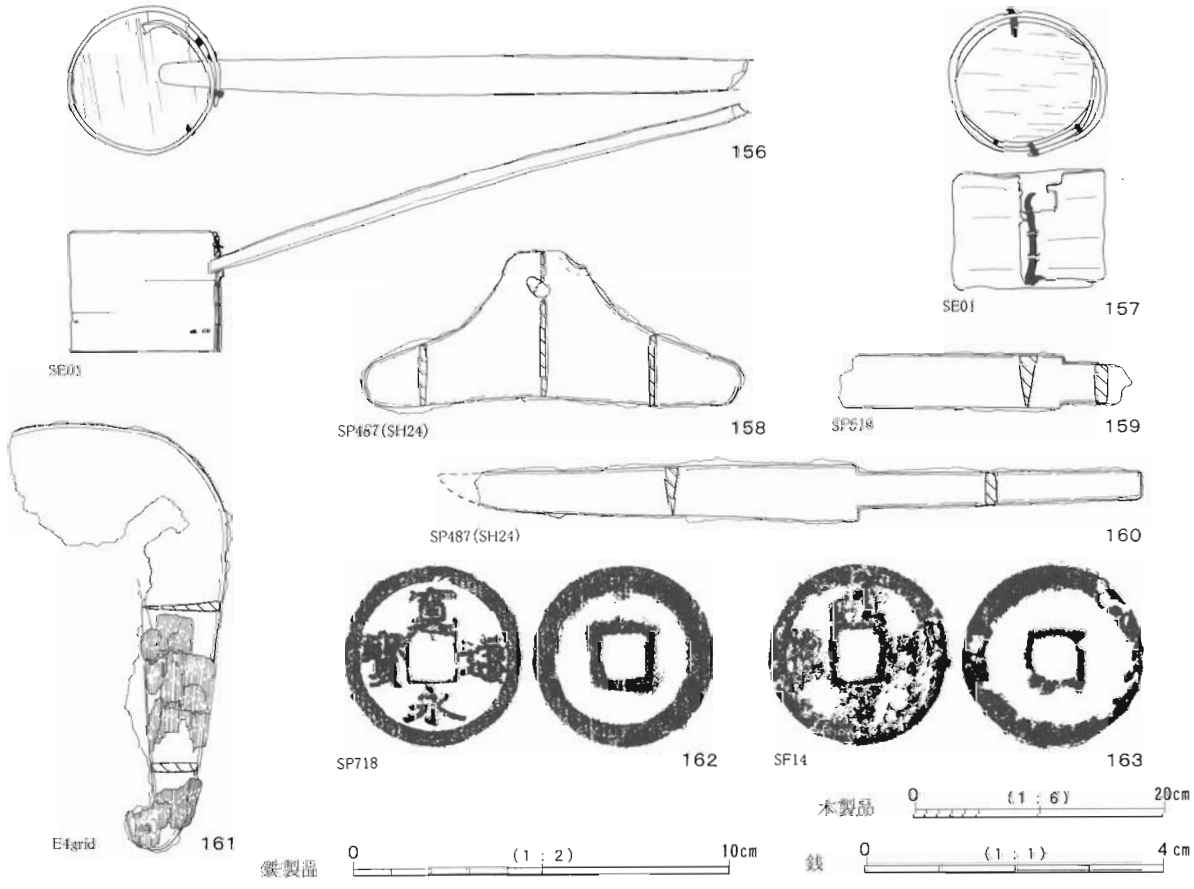
金属製品（第43図158～163）

158は、火打金である。近世（17世紀以降）の柱穴からの出土だが、近世遺構からは山茶碗も多く出土している。火打金は近世になると山形から鎹形になるとされ、中世のものと判断して問題ない。

159・160は、小柄である。X線でも目釘孔は認められなかった。ともに柱穴の上部で出土している。161は、鎌である。鉄製部の柄の端部が円形に膨らむ。X線によると、そこに目釘孔が確認できる。

162は、銅銭「寛永通寶」である。残りが良い。字の特徴などから、17世紀中葉につくられた「古寛永」であると判断できる。出土したSP718は、近世の建物跡（SH26）の近くに位置する。近世建物跡の集中範囲にあり、地鎮めなどを目的とした、建物を建てる際の祭祀的行為を認めることができる。

163も「寛永通寶」である。火を受けている。X線で17世紀末以降の「新寛永」と判断でき、色調などから背文字の存在もわかる。しかし、背文字は判読できない。桶を伴う土坑（SF14）の底で出土しており、近世後半、廃絶・埋め戻しに伴って行われた祭祀的行為のあったことが指摘できる。



第43図　出土木製品・金属製品

第7表　遺物観察表

土　器

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	産地	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	焼成	色調	備考
1	35	12	SX01	土師器		高坏	坏部	100		15.2	15.2		不良	明橙褐色	古墳時代
2	35		C4grid	灰釉陶器	清ヶ谷	碗	底部	15				(6.5)	良好	灰褐色	
3	35		C4grid	山茶碗	尾張	碗	底部	15				(6.9)	良好	淡青白灰色	糸切痕
4	35	12	SX03	山茶碗	渥美・湖西	碗	全体	80	4.55	(15.3)	(15.3)	7.3	良好	白灰色	口縁部自然釉 内外面スス
5	35		SX03	山茶碗	渥美・湖西	碗	全体	40	4.7	(14.5)	(14.5)	(8.1)	良好	白灰褐色	口縁部自然釉
6	35	12	SX03	山茶碗	渥美・湖西	碗	全体	40	4.1	(13.9)	(13.9)	(5.8)	良好	灰色	糸切痕　内面自然釉
7	35		SX03	山茶碗	渥美・湖西	碗	口縁部	10		(16.3)	(16.3)		良好	白灰褐色	内面自然釉
8	35		SF32	山茶碗	渥美・湖西	碗	口縁部	10		(16.2)	(16.2)		良好	淡青白灰色	
9	35		SX01	山茶碗	渥美・湖西	碗	口縁部	10		(16.2)	(16.2)		良好	淡青白灰色	
10	35		SF01	山茶碗	渥美・湖西	碗	口縁部	10		(16.1)	(16.1)		良好	淡青白灰色	
11	35		SX01	山茶碗	渥美・湖西	碗	口縁部	15		(15.9)	(15.9)		良好	淡青白灰色	
12	35		SX01	山茶碗	渥美・湖西	碗	底部	10				(7.0)	良好	淡青白灰色	
13	35		SE01	山茶碗	渥美・湖西	碗	底部	10				(6.8)	良好	明青灰色	
14	35		SF07	山茶碗	渥美・湖西	碗	底部	70				7.5	良好	淡青白灰色	糸切痕　モミ痕 内面自然釉
15	35		E3grid	山茶碗	渥美・湖西	碗	底部	80				7.2	良好	白灰褐色	
16	35		包含層	山茶碗	渥美・湖西	碗	底部	90				7.9	良好	明青灰色	モミ痕
17	35		E3grid	山茶碗	渥美・湖西	碗	底部	70				7.2	良好	白灰褐色	
18	35		SX01	山茶碗	渥美・湖西	碗	底部	70				(7.3)	良好	灰色	モミ痕
19	35		SP828	山茶碗	渥美・湖西	碗	底部	40				(6.5)	良好	灰色	内面自然釉　糸切痕
20	35		SF07	山茶碗	渥美・湖西	碗	底部	60				7.6	良好	白灰褐色	
21	35	13	包含層	山茶碗	渥美・湖西	小皿	全体	100	1.95	8.6	8.6	2.6	良好	灰色	糸切痕
22	35		SP434 (SH23)	山茶碗	渥美・湖西	小皿	全体	40	1.2	(8.1)	(8.1)	(4.6)	良好	灰色	糸切痕
23	36	12	E3grid	山茶碗	東遠江	碗	全体	40	5.05	(14.9)	(14.9)	(6.2)	不良	淡茶褐色	糸切痕　スノコ状痕
24	36		SF15	山茶碗	東遠江	碗	口縁部	10		(15.7)	(15.7)		良好	暗青灰色	
25	36		SP632	山茶碗	東遠江	碗	口縁部	5		(15.0)	(15.0)		良好	淡青暗灰色	
26	36		SD05	山茶碗	東遠江	碗	口縁部	5		(16.1)	(16.1)		良好	暗青灰色	
27	36		SX01	山茶碗	東遠江	碗	口縁部	10		(15.2)	(15.2)		良好	暗青灰色	
28	36		C4grid	山茶碗	東遠江	碗	底部	50				(6.7)	良好	暗青灰色	
29	36		SP274 (SH15)	山茶碗	東遠江	碗	底部	10				(7.1)	良好	暗青灰色	モミ痕
30	36		C3・4 grid	山茶碗	東遠江	碗	底部	15				(6.3)	良好	暗青灰色	重ね焼き痕
31	36		SP168	山茶碗	東遠江	碗	底部	15				(7.2)	不良	淡茶褐色	糸切痕
32	36		SF11	山茶碗	東遠江	碗	底部	30				(5.8)	良好	淡青暗灰色	
33	36		SX01	山茶碗	東遠江	碗	底部	60				(5.9)	良好	明青灰色	スノコ状痕
34	36		SX01	山茶碗	東遠江	碗	底～ 体部	20				(7.1)	良好	淡青暗灰色	スノコ状痕　重ね焼き痕
35	36		包含層	山茶碗	東遠江	碗	底～ 体部	60				(6.0)	良好	淡青暗灰色	糸切痕　スノコ状痕 重ね焼き痕
36	36		SD04	山茶碗	東遠江	碗	底～ 体部	25				(7.2)	不良	青白色	
37	36		C3grid	山茶碗	東遠江	小碗	全体	20	3.2	(10.5)	(10.5)	(4.5)	良好	淡青灰色	内面自然釉
38	36	13	E4grid	山茶碗	東遠江	小碗	全体	40	2.75	(9.4)	(9.4)	(4.4)	良好	暗青灰色	スノコ状痕　内面自然釉
39	36		SD05	山茶碗	東遠江	小碗	全体	10	3.0	(9.3)	(9.3)	(5.6)	良好	暗青灰色	スノコ状痕
40	36	13	SF13	山茶碗	東遠江	小皿	全体	50	1.45	(8.0)	(8.0)	(4.5)	良好	淡青灰色	糸切痕　スノコ状痕
41	36		包含層	山茶碗	東遠江	小皿	全体	20	2.5	(7.9)	(7.9)	(3.1)	良好	淡青暗灰色	糸切痕
42	36		D3grid	山茶碗	東遠江	小皿	全体	20	1.7	(8.0)	(8.0)	(4.0)	良好	暗青灰色	糸切痕　内面自然釉
43	36		SP545 (SH25)	山茶碗	東遠江	小皿	全体	20	1.9	(8.2)	(8.2)	(2.3)	良好	淡青暗灰色	糸切痕
44	36	13	SF32	山茶碗	東遠江	小皿	全体	100	1.7	7.9	7.9	3.9	良好	淡青暗灰色	糸切痕　スノコ状痕
45	36		SX03	山茶碗	東遠江	小皿	全体	20	1.7	(7.6)	(7.6)	(4.9)	良好	淡青灰色	糸切痕　重ね焼き痕 内面自然釉
46	36		SP121 (SH09)	山茶碗	東遠江	小皿	底部	40				(3.8)	良好	淡青暗灰色	糸切痕
47	36		SX03	山茶碗	東遠江	小皿	全体	10	1.95	(8.0)	(8.0)	(4.3)	良好	暗青灰色	糸切痕
48	37	12	D5grid	山茶碗	知多	碗	全体	50	5.1	(15.9)	(15.9)	(5.9)	良好	淡青白灰色	糸切痕　モミ痕
49	37	12	包含層	山茶碗	知多	碗	全体	40	5.45	(15.3)	(15.3)	(7.0)	良好	白灰色	糸切痕　モミ痕
50	37	12	SX01	山茶碗	知多	碗	全体	50	4.65	(15.2)	(15.2)	(6.4)	良好	淡青白灰色	糸切痕　モミ痕
51	37	12	SX01	山茶碗	知多	碗	全体	50	5.05	(16.3)	(16.3)	(7.6)	良好	白灰色	糸切痕　モミ痕
52	37		C4grid	山茶碗	知多	碗	全体	40	4.7	(16.0)	(16.0)	(7.6)	良好	淡青白灰色	糸切痕　モミ痕
53	37	12	E3grid	山茶碗	知多	碗	全体	40	5.0	(14.8)	(14.8)	(6.6)	良好	白灰褐色	糸切痕　モミ痕 口縁部自然釉
54	37	12	SX01	山茶碗	知多	碗	全体	30	4.8	(13.8)	(13.8)	(5.9)	良好	明青灰色	糸切痕　モミ痕
55	37	13	SX01	山茶碗	知多	碗	全体	40	4.65	(15.4)	(15.4)	(7.3)	良好	明青灰色	モミ痕　内面スス
56	37	13	SX01	山茶碗	知多	碗	全体	30	4.9	(15.3)	(15.3)	(7.0)	良好	白灰色	糸切痕
57	37		SE01	山茶碗	知多	碗	口縁部	10		(16.3)	(16.3)		良好	淡青白灰色	
58	37		SX03	山茶碗	知多	碗	口縁部	30		(16.1)	(16.1)		良好	白灰色	内面スス
59	37		SX03	山茶碗	知多	碗	口縁部	20		(16.4)	(16.4)		良好	白灰色	
60	37		SX01	山茶碗	知多	碗	口縁部	15		(16.0)	(16.0)		良好	白灰色	口縁部自然釉
61	37		SD05	山茶碗	知多	碗	口縁部	20		(15.9)	(15.9)		良好	白灰色	内面自然釉
62	37		SX01	山茶碗	知多	碗	口縁部	25		(15.1)	(15.1)		良好	淡青白褐色	内面スス

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	産地	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	焼成	色調	備考
63	37		SX01	山茶碗	知多	碗	底部	15				(6.4)	良好	白灰色	モミ痕
64	37		SF20	山茶碗	知多	碗	底部	70				(7.0)	良好	白灰色	糸切痕　モミ痕
65	37		包含層	山茶碗	知多	碗	底部	60				(6.4)	良好	淡青白灰色	糸切痕　モミ痕
66	37	13	E3grid	山茶碗	知多	碗	底～体部	40				(6.2)	不良	淡青灰色	モミ痕
67	37		SX03	山茶碗	知多	碗	底部	60				(7.0)	良好	淡青白灰色	糸切痕　モミ痕 内面スス
68	37		SX03	山茶碗	知多	碗	底部	70				7.7	良好	明灰色	糸切痕　モミ痕
69	37		C4grid	山茶碗	知多	碗	底部	70				6.0	良好	淡青白灰色	糸切痕　モミ痕
70	37	13	D5grid	山茶碗	知多	小皿	全体	60	2.05	(8.7)	(8.7)	(5.0)	良好	白灰褐色	糸切痕
71	37	13	C3grid	山茶碗	知多	小皿	全体	40	1.65	(8.0)	(8.0)	(4.9)	良好	淡青白灰色	糸切痕
72	37	13	SX01	山茶碗	知多	小皿	全体	90	1.95	7.7	7.7	5.0	良好	淡青白灰色	糸切痕
73	37	13	SF32	山茶碗	知多	小皿	全体	100	1.6	7.6	7.6	4.5	良好	白灰色	糸切痕
74	37	13	D5grid	山茶碗	知多	小皿	全体	30	1.6	(8.3)	(8.3)	(5.2)	良好	白灰色	糸切痕　口縁部自然釉
75	38	14	C3grid	陶器	渥美	鉢	口縁部	15		(28.1)	(28.1)		良好	淡青暗灰色	
76	38	14	SF07	陶器	渥美	片口鉢	口縁部	5		(28.4)	(28.4)		良好	灰色	
77	38	14	SX01	陶器	渥美	鉢	底部	15				(15.2)	良好	淡青白灰色	内面摩滅
78	38	14	F4grid	陶器	湖西	壺甕類	胴部	3					良好	淡青灰色	線刻 外面自然釉
79	38	14	SX01	陶器	渥美	甕	胴部	3					良好	淡青灰色	列点状貼付文・線刻 外面自然釉
80	38	14	SP312	陶器	渥美	甕	胴部	5					良好	暗灰色	押印文
81	38	14	E3grid	陶器	渥美	甕	胴部	5					良好	暗灰色	押印文
82	38	14	SD05	陶器	渥美	甕	胴部	3					良好	淡茶暗灰色	押印文
83	39	14	SP182	陶器	古瀬戸	卸皿	口縁部	15		(15.3)	(15.3)		良好	淡黄褐色	
84	39	14	SP487 (SH24)	陶器	古瀬戸	折縁深皿	口縁部	10					良好	素地:淡白灰色	内外面施釉(灰釉)
85	39	14	SF06	陶器	古瀬戸	卸目付大皿	口縁部	5		(27.0)	(27.0)		良好	素地:淡白灰色	内外面施釉(灰釉)
86	39	14	包含層	陶器	瀬戸・美濃	端反皿	全体	40	2.8	(11.8)	(11.8)	(6.5)	良好	白灰色	内外面施釉(灰釉) 二次焼成　印花文
87	39	14	SX02	陶器	瀬戸・美濃	皿	底部	15				(4.8)	良好	白灰色	内面施釉(灰釉) トチン痕
88	39	14	SX02	陶器	瀬戸・美濃	皿	底部	90				(5.1)	良好	白灰色	内外面施釉(灰釉)
89	39	14	SP737	陶器	瀬戸・美濃	丸皿	全体	60	2.2	(9.4)	(9.4)	4.7	良好	淡黄白灰色	内外面施釉(鉄釉)
90	39	14	SE01	陶器	瀬戸・美濃	丸皿	全体	60	1.9	(11.0)	(11.0)	(7.2)	良好	白灰色	内外面施釉　志野
91	39	15	SP702 (SH27)	陶器	志戸呂	縁釉小皿	口縁部	10		(11.1)	(11.1)		良好	暗赤褐色	口縁部施釉(鉄釉)
92	39	15	SP549 (SH25)	陶器	志戸呂	縁釉小皿	口縁部	20		(12.1)	(12.1)		良好	暗赤褐色	口縁部施釉(鉄釉) 二次焼成
93	39	15	B3grid	陶器	志戸呂	折縁小皿	口縁部	20		(14.0)	(14.0)		良好	淡茶褐色	口縁部施釉(鉄釉)
94	39	15	SF17	陶器	志戸呂	小皿	全体	80	1.6	10.1	10.1	5.6	良好	暗茶褐色	内外面施釉(錆釉)
95	39	15	SF19	陶器	志戸呂	小皿	全体	40	1.3	(10.1)	(10.1)	(4.4)	良好	暗茶褐色	内外面施釉(錆釉)
96	39	15	SE01	陶器	瀬戸・美濃	灯明皿	口縁部	5	1.5	(7.2)	(10.0)	(5.0)	良好	白灰色	内面施釉(灰釉)
97	39	15	SX01	陶器	瀬戸・美濃	灯明皿	口縁部	10	1.6	(10.6)	(8.0)	(5.2)	良好	白灰色	内面施釉(灰釉)
98	39	15	SP436 (SH23)	陶器	古瀬戸	丸碗	口縁部	15		(11.7)	(11.7)		良好	素地:白灰色	内外面施釉(鉄釉)
99	39	15	SP544 (SH25)	陶器	志戸呂	天目茶碗	口縁部	10		(11.1)	(11.1)		良好	淡茶褐色	内外面施釉(鉄釉)
100	39	15	SP636	陶器	志戸呂	天目茶碗	全体	30	6.55	(10.3)	(10.3)	(4.4)	良好	暗茶褐色	内外面施釉(鉄釉)
101	39	15	SP442	陶器	志戸呂	天目茶碗	底部	40				(4.8)	良好	暗赤褐色	内外面施釉(鉄釉)
102	39	15	SP460	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	口縁部	15		(11.9)	(11.9)		良好	素地:白灰色	内外面施釉(鉄釉)
103	39	15	SP354	陶器	瀬戸・美濃	小碗	全体	70	4.7	8.0	8.0	3.8	良好	淡黄白灰色	内外面施釉(灰釉)
104	39	15	SX01	陶器	志戸呂	丸碗	体～底部	70				5.4	良好	暗茶褐色	外面施釉(鉄釉)
105	39	15	SF19	陶器	志戸呂	丸碗	口縁～体部	10		(11.6)	(11.6)		良好	灰褐色	内外面施釉(灰釉)
106	39	15	SP155	陶器	志戸呂	丸碗	底部	30				(5.0)	良好	淡緑灰色	内外面施釉(灰釉)
107	39	15	SE01	陶器	志戸呂	碗	底部	80				(4.4)	良好	淡青灰色	内外面施釉(鉄釉)
108	39	16	F4grid	陶器	古瀬戸	梅瓶	胴部	25					良好	暗灰色	外面施釉(灰釉)
109	39	16	SP134 (SH10)	陶器	古瀬戸	瓶子	口縁部	40			(4.4)		良好	白灰色	外面施釉(灰釉) 下と同一個体か
110	39	16	SP134 (SH10)	陶器	古瀬戸	瓶子	胴部	25					良好	白灰色	外面施釉(灰釉) 上と同一個体か
111	39	16	C1grid	陶器	志戸呂	鉢	底部	15				(14.4)	良好	淡茶褐色	外面施釉(錆釉)
112	39	16	SP544 (SH25)	陶器	瀬戸・美濃	鉢	底部	20				(14.2)	良好	素地:灰色	内外面施釉(錆釉)
113	39	16	SF20	陶器	志戸呂	鉢	体部	10					良好	暗茶褐色	外面施釉(鉄釉)
114	40	16	包含層	陶器	志戸呂	擂鉢	口縁部	10		(28.2)	(28.2)		不良	淡黄褐色	内外面施釉(錆釉)
115	40	16	SX02	陶器	志戸呂	擂鉢	体部	5					良好	赤褐色	内外面施釉(錆釉)
116	40	16	SP262 (SH12)	陶器	古瀬戸	擂鉢	口縁部	5		(30.1)	(29.0)		良好	淡赤褐色	内外面施釉(錆釉) 二次焼成
117	40	16	SP314	陶器	瀬戸・美濃	擂鉢	口縁部	10		(34.9)	(34.2)		良好	素地:淡黄白灰色	内外面施釉(錆釉)
118	40	16	SP263	陶器	瀬戸・美濃	擂鉢	口縁部	10		(33.6)	(33.3)		良好	素地:淡黄白灰色	内外面施釉(錆釉)
119	40	16	SP246 (SH11)	陶器	瀬戸・美濃	擂鉢	口縁部	3					良好	素地:淡黄白灰色	内外面施釉(錆釉)
120	40	16	SF30	陶器	瀬戸・美濃	擂鉢	口縁部	5		(24.6)	(24.0)		良好	素地:淡黄白灰色	内外面施釉(錆釉)
121	40	17	SP626	陶器	瀬戸・美濃	擂鉢	口縁部	10					良好	素地:灰色	内外面施釉(錆釉)

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	産地	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	焼成	色調	備考
122	40	17	SP490(SH24)	陶器	瀬戸・美濃	擂鉢	口縁部	10		(28.2)			良好	素地:灰色	内外面施釉(錆釉)
123	40	17	SF19	陶器	志戸呂	擂鉢	体部	10					良好	素地:暗灰色	内外面施釉(錆釉)
124	40	17	SF31	陶器	志戸呂	擂鉢	口縁部	3					良好	素地:淡茶灰色	内外面施釉(錆釉)
125	40	17	SP480	陶器	志戸呂	擂鉢	底部	10				(8.2)	良好	赤褐色	内外底面施釉(錆釉)
126	40	17	SF13	陶器	瀬戸・美濃	擂鉢	体～底部	25				(15.6)	良好	淡黄白灰色	内外底面施釉(錆釉)
127	41	17	B2grid	青磁	同安窯	碗	体部						良好	素地:淡灰色	淡黄味灰緑色透明施釉
128	41	17	SP752	青磁	龍泉窯	碗	体部						良好	素地:淡青灰色	淡青灰緑色透明施釉
129	41	17	D5grid	青磁	龍泉窯	碗	口縁部			(16.2)	(16.2)		良好	素地:白灰色	黄味灰緑色透明施釉 貫入
130	41	17	E4grid	青磁	龍泉窯	碗	体部						良好	素地:淡灰色	淡黄味灰緑色透明施釉
131	41	17	SX03	青磁	龍泉窯	碗	口縁部			(16.2)	(16.2)		良好	素地:淡青灰色	青灰白色透明施釉
132	41	17	F4grid	青磁	龍泉窯	碗	体部						良好	素地:青白灰色	淡青灰緑白色透明施釉
133	41	17	SP539(SH25)	青磁	龍泉窯	碗	口縁部			(16.4)	(16.4)		良好	素地:青白灰色	淡黄味灰緑色透明施釉
134	41	17	SP442	青磁	龍泉窯	碗	体部						良好	素地:淡青灰色	淡青灰緑色透明施釉
135	41	17	E4grid	青磁	龍泉窯	碗	体部						良好	素地:淡青灰色	淡青灰緑色透明施釉
136	41	17	SP435(SH23)	青磁	龍泉窯	碗	体部						良好	素地:青白灰色	淡青灰緑白色透明施釉 貫入
137	41	17	SX03	青磁	龍泉窯	碗	体部						良好	素地:淡黄灰色	黄味灰緑色透明施釉
138	41	17	C3grid	青磁	龍泉窯	碗	体部						良好	素地:淡灰色	淡青灰緑白色透明施釉
139	41	17	SX01	青磁	龍泉窯	稜花皿	口縁部	20		(11.1)	(11.1)		良好	素地:淡青灰色	二次焼成(施釉白色化)
140	41	17	SP265(SH12)	青磁	龍泉窯	稜花皿	口縁～体部						良好	素地:淡青灰色	二次焼成　灰緑色透明施釉
141	41	17	SP255(SH13)	青磁	龍泉窯	稜花皿	口縁部	5		(10.6)	(10.6)		良好	素地:淡青灰色	二次焼成　灰緑色透明施釉
142	41	17	SX01	白磁	不明	小碗	底部	30				(4.0)	良好	素地:白灰色	灰白半透明施釉
143	41	17	SX01	白磁	貿易陶磁	碗	口縁						良好	素地:淡青灰色	二次焼成　青味半透明施釉
144	41	17	SP128(SH07)	白磁	貿易陶磁	碗	体部						良好	素地:白灰色	淡黄味白色透明施釉
145	42	18	包含層		カワラケ		口縁部	10		(9.0)	(9.0)		不良	淡茶褐色	
146	42	18	SP442		カワラケ		全体	15	1.6	(11.7)	(11.7)	(8.7)	不良	淡黄褐色	
147	42	18	SP492(SH24)		カワラケ		全体	30	3.0	(9.9)	(9.9)	(4.8)	不良	淡茶褐色	ロクロ成形　糸切痕
148	42	18	E3grid		カワラケ		全体	40	2.0	(7.0)	(7.0)	(4.0)	不良	黄褐色	ロクロ成形　糸切痕 スノコ状痕
149	42	18	SE01		カワラケ		底部	80				3.8	良好	淡茶褐色	ロクロ成形　糸切痕
150	42	18	包含層		カワラケ		全体	60	3.3	(8.6)	(8.0)	(4.1)	良好	茶褐色	ロクロ成形　糸切痕
151	42	18	SF28		カワラケ		口縁部	15		(12.4)	(12.4)		不良	淡黄褐色	ロクロ成形
152	42	18	SP230(SH14)		カワラケ		底部	20				(6.8)	不良	暗褐色	ロクロ成形
153	42	18	SE01		カワラケ		底部	80				4.0	良好	茶褐色	ロクロ成形　糸切痕
154	42	18	SF20		カワラケ		底部	20				(4.0)	良好	橙褐色	ロクロ成形　糸切痕
155	42	18	SF13		カワラケ		底部	10				(5.0)	良好	淡黄褐色	ロクロ成形　糸切痕

( ) 内の数値は復元値

木製品

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種類	形状	寸法(cm)	備考
156	43	18	SE01	柄杓	棒(柄)	長さ46.6以上、幅3.0	端部欠損
					曲物	直径12.0、高さ9.9	
157	43	18	SE01	柄杓	曲物	直径12.0、高さ9.4	本来、柄がつく

鉄製品

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率(%)	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
158	43	19	SP487(SH24)	鉄器	火打金	全体	100	9.75	3.8	24.94	
159	43	19	SP618	鉄器	小柄	茎～刃部	破片	7.8以上	刃部1.15	15.02	
160	43	19	SP487(SH24)	鉄器	小刀	茎～刃部	90	17.65以上	刃部1.25	21.85	
161	43	19	E4grid	鉄器	鎌	茎～刃部	破片	11.05以上×6.8以上		25.61	柄の木質が残る

銅　銭

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	銭名	書体	国名	初鋳年	銭径(mm)	内径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
162	43	19	SP718	銅銭	寛永通寶	真書	日本	1636	24.1	19.8	5.7	3.23	
163	43	19	SF14	銅銭	寛永通寶	真書	日本	1697	24.0	19.5	6.0	2.05	背文字あり(判読不能)

第4節　まとめ

1．自然環境からみた本遺跡

掛川市と金谷町にまたがる八高山（白光山、標高832m）の南西麓の谷を源流とする原野谷川は、この大和田地区で大きく曲流しながら西南方向に流れて原里付近で西ノ谷川と合流し、その後南に向きを変え、磐田郡浅羽町富里付近にて太田川と合流、遠州灘へと注いでいる。

本来、原野谷川の浸食作用は激しいものであり、その中流域では、発達した河岸段丘と比較的狭い沖積平野が形成されている。この川が一朝豪雨のたびにどれだけの洪水害をもたらしたかは、原野谷川の上流域に残された小字名から類推することができる。

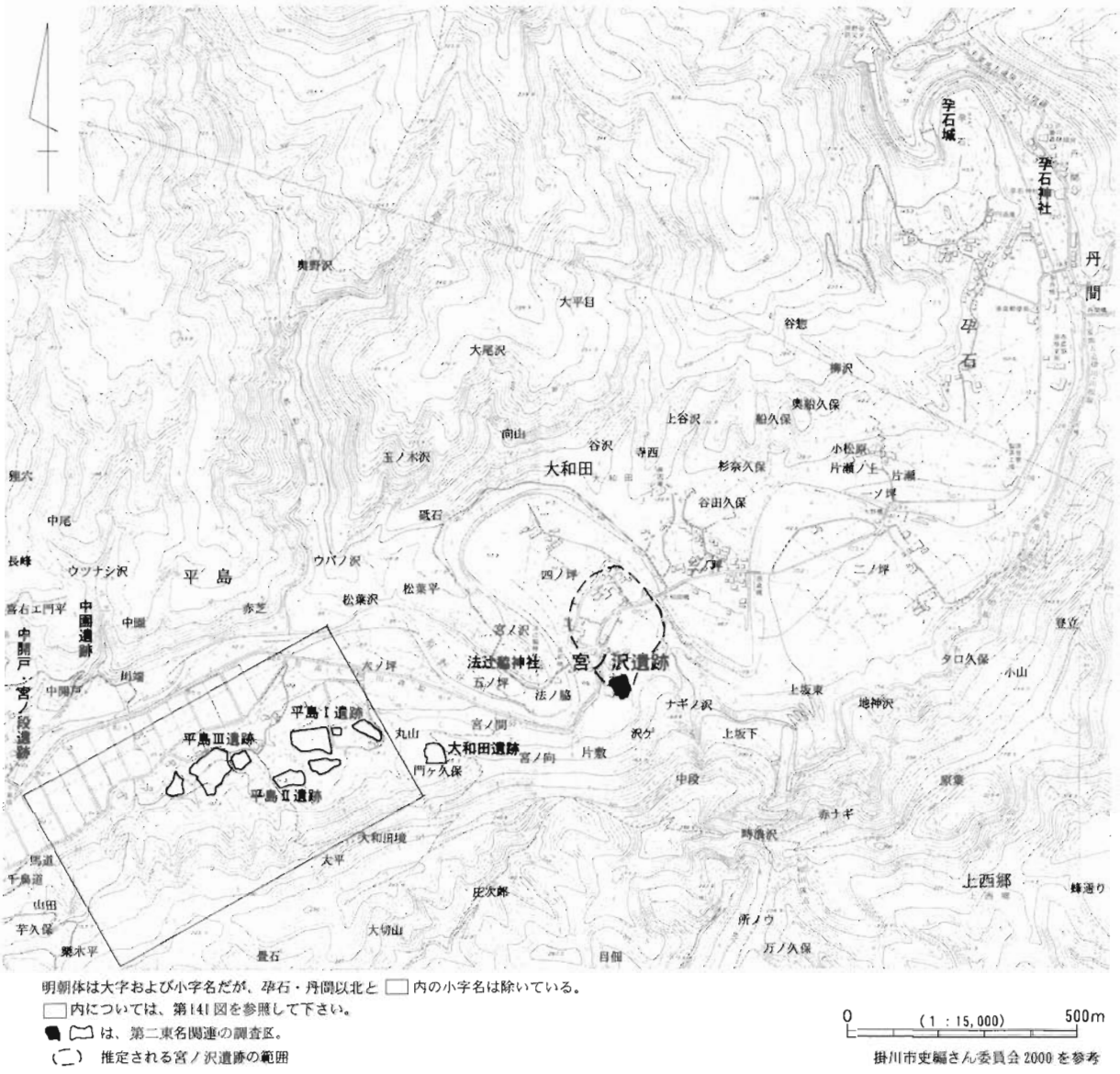
居尻には「赤ナギ」・「ナギノ平」・「宮ナキ沢」、丹間には「古ナギ」、大和田には「ナギノ沢」「赤ナギ」といった小字がある。「ナギ」とは、急崖状の地すべり地帯を意味する。居尻に「動き島」（いのきじま：井ノ木島・檜木島）と呼ばれている所があり、多量の土砂が川に流れ込んだ状態で残っている。これらから、原野谷川の洪水と多量の土砂流出が、当地において何度も繰り返し発生したことを想定することができる。『静岡縣小笠郡誌』（1915年）では、「原泉村居尻地内の安尾澤の大崩壊地」を紹介している。豪雨のたびに土石を下流域に押し流し、中・下流域においてはこの土砂が川底を押し上げて、各所で破堤を生じ、多くの洪水害を生ぜしめた。そしてこの土砂災害の要因を、明治時代以降、上流域において繰り返し行われた森林濫伐と山焼き開墾等の結果に起因するものとしている。

また、原野谷川上流域には、「島」のつく地名が多い。大字には上流から「平島」「宮ヶ島」「寺島」がある。小字では居尻に「小島」「丸ノ島」「椋ノ島」、萩間に「鹿島」がある。居尻・萩間ともに渓谷沿いの谷間の村落である。原野谷川の流れが何度も大きく曲流し、洪水のたびに流路が移動し、多くの土砂が取り残されて、微高地状の中洲となったことから、名付けられたものと思われる。

原野谷川の流れに起因して名付けられた大字名も多い。上流から、川の合流点の脇を表す地名で「黒俣（黒股）」、川上の水源地の尻と井堰で「居尻（井尻）」、谷間の中の平坦な土地を表す「丹間」、河川流域の崖崩れの石を落として懇田を開墾した「孕石」、大きく曲流する原野谷川と近世以降の新田開発によって多くの新田（懇田）が切り開かれたことから名付けられた「大和田（大勾田・大懇田）」、先述した「平島」は川の廻転する地形で「枚嶌」から来ているともされる。

この他にも、河岸段丘をあらわす「段」や河岸段丘上の平場状地形をあらわす「平」が語尾につく小字名を上流域沿いでいくつか確認することができる。原野谷川が形成した様々な自然地形上で生活を余儀なくされ続けてきた人々の自然に対する苦しみが、そのまま地名として残っていることがわかる。しかし、人々はこうした自然の脅威を「神」として畏敬するだけではなく、自ら積極的に働きかけて日々の生活の糧を築いていたと考える。

大和田地区に「一ノ坪」～「六ノ坪」の小字が残っていて、元々河床であったこの辺り一帯は、現在では実り豊かな田んぼになっている。この小字名は明治時代の地租改正の際に名付けられた地名で、本来この地区は「大野」と呼ばれていた。伝え聞くところによると、寛文・延宝年間（17世紀後半、この時期は全国的に新田開発の盛んだった時期でもある）に三河の大野から来た人々が、掛川藩の資金援助を得て、藩の普請奉行の下、孕石地区に鎮座する孕石天神社の東側付近で川の切替工事を行った。そこから下流域に向かって堤防を築くことで、河川敷を美田に変えたということである。堤防そのものは、現在県道・市道として再利用されている。



第44図　宮ノ沢遺跡周辺の地形と地名

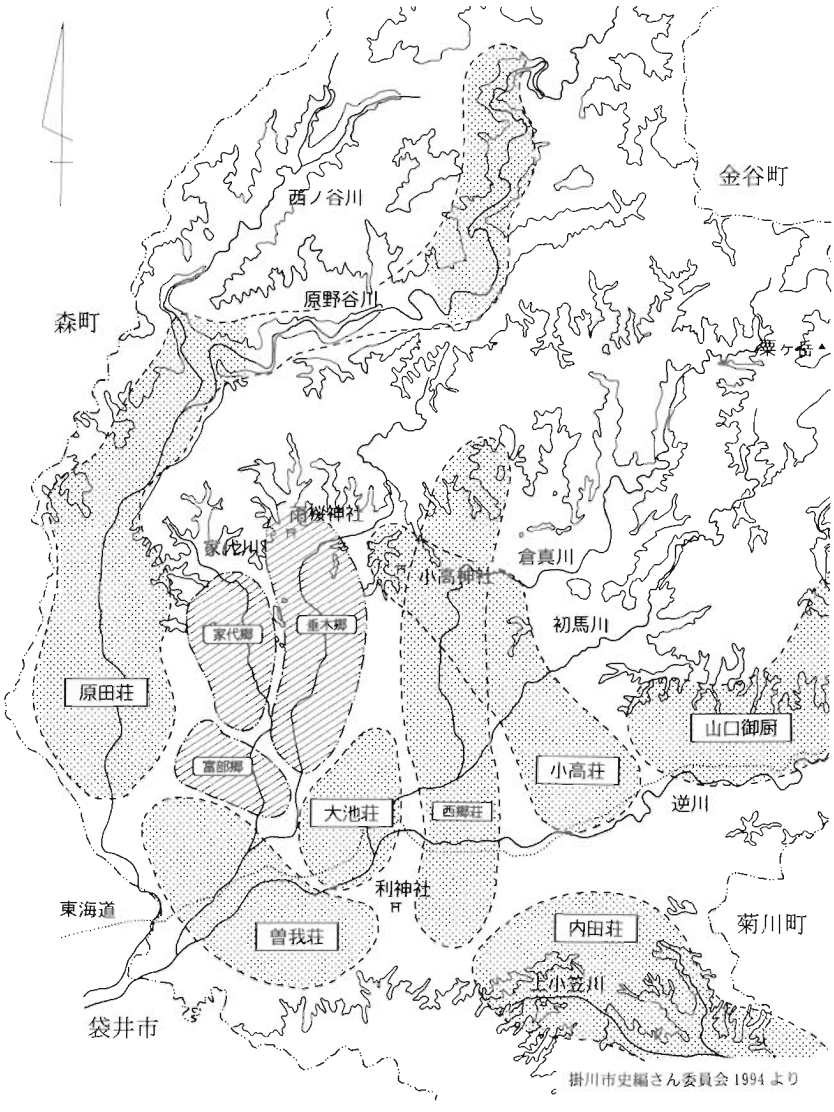
以上、原野谷川上流域には多くの小字名が残り、古くからの人々の営みの歴史をみることができた。大和田地区は山がちな地形で、少ない平坦部、短い日照、冷たい沢水といった環境から、農業（稲作）を営むには厳しい場所であったと思われる。しかし、洪水などの被害範囲・規模は下流域よりも小さかったと考えられる。また、下流域ほど大規模な土木工事をせずとも、沢や小河川をうまく利用し、谷田を発展させれば、生産性はともかく、安定した稲作を行うことも可能であったと考える。

今回の調査区は、周囲からの土砂崩れが多かったと考えられる場所にあり（第１節１）、発掘調査でも丘陵崩落土の堆積が確認できた。しかし、今回の調査区は宮ノ沢遺跡の一部分にすぎない。遺跡の範囲は不確定であるが、今回の調査区より北に、大きく広がる段丘上平坦部がある（第44図）。これを含めて遺跡とするならば、水害の影響の少ない段丘上にありながら、広い平坦地を有し、山からの水を絶えず利用できる場所に立地しており、居住に適した場所であったと捉えることができる。実際、中世以降の人々は、後述する政治的動向を一方の背景としながら、ここを居住地に選んでいるのである。

2．中世の大和田

（1）大和田と原田荘

平安～鎌倉時代になると全国的に荘園が林立し、掛川市域でも、多くの荘園がそれぞれの事情を背景として個別に立荘されていく。伊勢神宮領としての小高荘（主として逆川流域であるが、荘域は不明）、同じく小高御厨（上郷と下郷とに分かれ、上郷の中心は五明の小高神社、下郷の中心は仁藤の神明社に比定される）および山口御厨（山口郷内に位置し、本所や成滝の神明社が中心とされる）、皇室領であり全国に180ヶ所もあったとされる長講堂領の一角としての曽我荘（原野谷川と逆川の合流点付近で、領家の地名が残る）、天台宗比叡山延暦寺領であったとされる内田荘（耳川・上小笠川流域に広大な荘域を持する）、高野山金剛峰寺の塔頭の宝三昧院領としての西郷荘（倉真川流域で、後世その荘域は細分化される）、北条一族の名越氏によって支配された大池荘（逆川流域沿いで、現在の大字大池が中心とされる）、それとやや時代は下るが室町幕府6代将軍足利義教の菩提を弔うために建立された普広院を領主とする懸川荘（荘域不明）などである。



第45図　掛川市域の荘園・公領分布図

一方、従来からの公領としての国衙領もいくつか残存する。「大田文」（土地台帳）が遠江国では残ってはいないが、南北朝期の『西園寺実俊施行状』（貞治元（1362）年10月19日作成か、熊野速玉大社文書）には、同時期に存在していた遠江国内の国衙領（全33ヶ所）が列記されている。掛川市域（佐野郡内）で該当する国衙領は、垂木郷・小高郷・冨部郷・家代郷の4郷が確認できる。

宮ノ沢遺跡のある「大和田」地区は原田荘にあったと考えられる。しかし、この地名が最初に記録に登場するのは、原田荘がすでに命脈つきたと思われる応仁・文明の大乱から、さらに約100年も後のことである。元亀2（1571）年3月4日の『武田信玄判物』（孕石文書）によると、武田信玄の遠江侵略の際、武田方に立って戦功をあげた孕石元

泰に知行が宛行なわれ、佐野郡では「飛鳥郷、井尻、孕石、あかめ、そうれ、小和田、萩間、たんま、(付箋) 平島」が知行の対象とされた。「小和田」は前後の地名からして、「大和田」に比定することができる。そして、ここにあげた地名の大半が原田荘の荘域に含まれることから、「大和田」も原田荘に含まれていた可能性が高いと考える。過去において原田荘の荘域であったがために、後に原氏一族の流れを汲む孕石元泰に一括して宛がわれたものと思われる。

以上から、本遺跡については、原野谷川上流域の一中世集落跡としてだけではなく、数百年間の歴史を有する原田荘との関わりの中で捉える視点も必要である。掛川市域の荘園・国衙領の中でも原野谷川上・中流域沿いに南北に細長く展開する原田荘は、その関係史料が東寺領荘園関係文書として永く伝世し、その数は百数十点以上にもおよぶ。また、史料に基づいたかなり詳しい分析が試みられている（小和田1985、掛川市史編さん委員会1997、村井1992)。本書においては少なくとも、調査成果の報告とともに、原田荘および原氏一族についてふれるべきと考える。

(2) 原田荘に関連した遺跡

原田荘および当荘を支配領域とした原氏とその一族の孕石氏の分析を試みたいが、その前に、当荘に関係する考古学的な成果をまとめてみたい。とはいっても、文献史料の多さに比べて、当荘に関係する発掘調査事例は現時点ではわずかに2つにすぎない。

高藤城（殿谷城）跡は、本郷地内の原氏の本拠地であり、1982～1983年に発掘調査されている。調査対象地は、主郭曲輪群および東西の3つの曲輪群と土塁遺構であり、本曲輪最下段からは時期の異なる掘立柱建物跡4棟が発見されている。従来、南北朝期に築城されたと思われていたが、出土遺物を含めた検討によって、15世紀中頃以降（文明年間（1469～1486年））の築城であるということがわかっている。また、明応6（1497）年に駿河今川氏によって陥落し果てたとされていたが、その後もしばらく使用され続け、廃城時期は16世紀前半代になることもわかっている。国人領主原氏の本拠にふさわしい大土木工事の末に完成した城であるが、城自体は戦時の要塞すなわち「詰の城」であって、平時の居館は鎌倉時代以来の「本郷館」（長福寺の南接地には小字「古城」が残る）にあったとされている。遺跡自体は消滅してしまったが、国人領主原氏の動向を知る上で、多くの成果をもたらした調査となっている（掛川市教育委員会1985)。

もう1つは、林遺跡である。吉岡地内にあり、原氏本宗家14代頼郷（頼卿）が建立したとされる春林院の南側に隣接する一帯にある。宅地開発に伴って、1991年に発掘調査が行われている。中世に関する遺構では、掘立柱建物跡、溝（区画溝）状遺構、多数の小穴、土壙が発見されている。遺物の大半は、13世紀を中心とする山茶碗の碗・小皿である。山茶碗の碗は東遠江産山茶碗が1片もなく、渥美・湖西産もしくは尾張産で占められている。小皿は10点のみであるが、やはり渥美・湖西産もしくは尾張産が大半を占め、東遠江産はわずか2点だけの出土であることが判明している。原田荘の荘域内における中世集落跡の発掘調査は貴重な事例になる。掛川市の中世集落跡としても、重要な成果をあげた事例であるといえる（掛川市教育委員会1993)。

なお、原田小学校のグラウンド造成工事の際、多くの縄文土器と弥生土器が検出されて話題となった（上ノ段遺跡)。この時、山茶碗片等も採集されたということである。ただし、詳細は不明である。

また、第二東名建設に伴って原野谷川上流域の遺跡を多く調査しているが、弥生時代後期から古墳時代前期の一大拠点集落が発見された丘陵上の上ノ平遺跡（寺島地区）では、表土・撹乱層を中心として、渥美・湖西産を主体とする数点の山茶碗片が出土している。大雑把にみてみると、12世紀代に位置づけできる渥美・湖西産を主体とするようである。これらの遺物出土が原田荘とどんな関係を持っているか

第46図　原田荘関連遺跡地図

写真11　孕石神社

写真12　幡鎌城跡

写真13　最福寺

写真14　照月院から本郷館跡を望む

写真15　春林院

写真16　原頼郷供養塔

写真17　長福寺

写真18　伝曽我墓碑

については、整理作業中であることもあって検討できない。

発掘調査事例は以上であるが、幡羅郷に土着して以来数百年間、開発領主として、地頭として、そして国人領主として原田荘の開発・経営に取り組み続けた原氏一族の足跡が、この原野谷川上・中流域にはたくさん残っている。

まず、原野谷川の右岸沿いを上流から確認する。孕石地区には、原氏一族の孕石氏がいた孕石城跡および館跡がある。周囲には、「屋敷裏」「屋敷下」等の遺跡を思わせる小字名が残っている。

栃原地区には、原氏関係の栃原城跡があり、「大門」「小屋場」等の小字名が残っている。また、高山地区には、原田小学校付近に原氏の高山城（杜山城）跡があり、「上ノ段」の小字名が残る。

寺田地区は、平安時代、幡羅郷に土着した原氏一族の領域の中心地であり、後に原氏一族の庶家寺田氏の本拠になったところである。地区内には、原氏の元祖とされる原師清の館跡が知られており、彼を祀った原殿明神社が現存している。その背後の明神山には、原氏一族の松堂高盛の師大輝霊耀が永享９（1437）年に開いた円通院（現在は廃寺）があったが、駿河今川氏の殿谷城攻めの際に灰燼に帰している。なお、円通院の所在地について、高山地区に建立されたとする考えがあるが、『円通松堂禅師語録』の「故俗換曰高山」の誤読、あるいは近世の円通寺との混同によるものと思われる。

幡鎌地区には、原氏一族の庶家である幡鎌氏の領する幡鎌城跡（館跡）があり、「馬場先」「裏門」等の小字名が残っている。城跡の南側中段には、『円通松堂禅師語録』を所蔵する最福寺がある。

吉岡地区には、西山城跡（『掛川誌稿』では「飯田氏城跡」「長者屋敷」）があり、「城ノ腰」の小字名が残っている。天明４（1784）年に作成された『遠江国吉岡邑風土記書上帳』（掛川市史編纂委員会1982収載）によると、原左衛門尉殿（頼郷）と原武蔵守殿（頼延）父子２代にわたる「古館の跡」とされる。おそらく、駿河今川氏によって原氏の本拠地高藤城（殿谷城）が陥落した後、原氏本宗家が移り住んだ館跡と思われる。また、先述した春林院が同地区にある。この寺は原氏の発給文書や『原氏系譜』を何点か所蔵する。また、境内には原頼郷の五輪塔が現存する。文明16（1484）年、漂泊僧性音なる人物が「佐野郡原田荘数雲塚原」に男女老幼を聚めて大法要を営んだとされる（『円通松堂禅師語録』）が、「数雲塚原」とは、同地区の西北に拡がる和田岡丘陵のことである。

一方、原野谷川左岸沿いは、原氏の本拠地である本郷地区に「詰の城」としての高藤城（殿谷城）跡、平時の居館である本郷館跡、その他に原砦跡、原氏一族の庶家である中氏の中殿館跡がある。本郷館跡の一郭には長福寺がある。先の円通院と同じく駿河今川氏の侵攻の際に兵火に見舞われているが、原頼景が一族の松堂高盛を開山として再興したとされる。同寺の開山は古く奈良時代初頭とされ、

「遠江国佐野郡原田郷　　長福寺鐘　　天慶七年六月二日」（天慶七年は944年）

の刻銘を有する鐘（『長福寺鐘銘』）が南北朝期まで、同寺に所有されていた（現在は、奈良県吉野郡天川村金峯山行者堂にある）。境内には、14世紀末葉前後の大型の宝篋印塔（伝曽我五郎時致の供養塔）がある。また、照月寺の近くの本郷一帯を見下ろす丘陵には原氏代々の菩提所がある。

写真19　原一族の墓塔群（照月院）

細谷地区は、原田荘細谷郷が東寺領となったことで、東寺寺領関係文書に数多く登場してくる。同地区内の歓喜寺（現在は廃寺）や若一王子神社も同古文書に登場してくる。岡津丘陵には原氏によって築いたとされる高代山砦跡（現在は、丘陵の一部が消滅）がある。

3．原田荘と原氏および孕石氏について

宮ノ沢遺跡に関連する原田荘とその経営に永らく携わった原氏および孕石氏について考察する。なお、ここで取り上げた史料ならびに参考とした文献類については、本章末にある参考文献を参照していただきたい。

（1）原田荘について

原田荘は、平安時代の末期に成立したといわれ、鎌倉時代から史料上に頻出してくる。その領域は、史料で確認する限り、原野谷川の上流側と中流側に二分できる。上流側は、北から居尻・萩間・丹間・孕石の地区で、原野谷川流域沿いの小さな谷底平野に集落が散在する。中流側は、原野谷川左岸の河岸段丘上に展開する本郷を中心とした、高山・寺田・幡鎌・西山・細谷・吉岡といった地区で、原野谷川流域の沖積平野と背後の河岸段丘を含む。この2地区の間にある大和田・平島・正道の3地区については、当時の史料からでは領域であることを確認し難い。なお、平島には小字「法地場」が残る。荘園では、境界の四隅に目印として石や杭を設置することで「四至“牓示”」を明確化するとされ、「法事場」は原田荘の境界を現す地名である可能性が高い。

遠江国では、平安時代後期以降、浜名湖岸や大河川流域に相次いで大規模な荘園が成立した。平安時代中期～後期にみられた「平安の小海進」によって、下流域での氾濫が頻繁となり湿地化したことで、より安定した耕作地を求めて、河川の中流域での新たな新田開発が盛んに行われるようになったと考えられる。原田荘の領域は、原野谷川の形成した肥沃な沖積平野に恵まれている。また、原野谷川の水運を舟航行し、太田川河口の大島（福田湊）や遠州灘に出ることができ、年貢などの輸送の便に適していたとされる。

正中2（1325）年3月の『最勝光院領荘園目録案』に、原田荘と遠江国村櫛荘の両荘の得分が記載されている。村櫛荘では、「本年貢百石　綾被物一重」に対し「近年所済六十石国本定」とあり、約6割の得分に減ってはいるものの米が上納されている。一方、原田荘は「本年貢四百五十石　綾被物二重八月兵士十人」に対し「近年以代銭七十六貫文」とある。やはり大幅に減っている上、いつからかはわからないが、米納が銭納に替えられている。浜名湖岸に面した村櫛荘に比べ、原田荘では河川での輸送を長く要するため、年貢輸送にいくらか困難な状況があったと想定することもできる。早々に銭納に切り替えられた理由の一つとして、年貢米輸送にかかる経費・労力が多大なものであったことがあげられると考える。ちなみに、全国的に代銭納へと移行するのは、13世紀後半から14世紀前半にかけてのこととされている。

さて、原田荘が最初に現れる史料は、弘長3（1263）年正月の『原田荘細谷村正検取帳案』で、「原田御庄　細谷村」と記される。また、文永2（1265）年2月7日の『遠江国三代起請地并二社領注文案』に三代御起請地の1つとして「原田庄　宝（法）金剛院」とある。

この2つの史料から、原田荘は平安時代のある時期に法金剛院に寄進されたことがわかる。誰が寄進したのかはわからないが、おそらく原田荘の荘域を勢力基盤とする土着系の開発領主、原氏ではないかと考える。開発領主の手による立荘運動は、11世紀から12世紀にかけて、すでに全国的に展開していたのである。原氏が開発領主として成長し、様々な手段を駆使して所領（私領）の拡大を押し進めると、今度は国司やその代官である目代との利害対立が避けられなくなってくる。そこで、原氏は私領権確保のため、所領を寄進するのである。私領権を失ったからといっても原氏は、その見返りとして荘園領主

から現地荘官である「預所」に任命されたのであるから（後述）、預所職を獲得することによって権益の保証は十分なされているのである。寄進することによって国司側からの収公圧力は回避でき、預所職補任によって実質的な荘園支配の中核を掌握することができたのである。

史料にみえる「細谷“村”」の記載表現について。『掛川市史』（上巻）では、「鎌倉時代中期に村を名乗った地域は遠江国ではあまり例を見ない。したがって、細谷村は遠江国でも人口が多い先進地帯だった可能性がある。」としている。そこで、調べてみると、康安元（1361、正平16）年10月21日の『実蔵去状』に「遠江国原田庄内細谷“村”」とあるだけで、その他の百数十点の史料は全て「細谷郷」もしくは単に「細谷」と記載しているだけである。そもそも、中世における「村」は開発の一単位を現す言葉であって、場合によっては無人の「村」もあったほどである。「細谷村」との記載があったにしても、そこに近世のような地縁的共同体としての「村落」を結びつけることは、決して好ましくない。たとえ「村」の記載があったとしても、中世における実体を伴わない荘園内の「村」を近世村落と同一視することは避けるべきであろう。

当荘の支配スタイルについては、以下のような経過がある。弘安元（1278）年閏10月13日の『亀山上皇院宣案』によると、当荘の領家は「随心院中前大僧正静厳」（醍醐寺金剛王院門跡）であったことがわかる。しかし、当荘の領家職をめぐって相論が発生した。地頭による年貢対捍によって本家方年貢が滞ってしまったので、当荘本家である最勝光院が訴訟を起こしたのである。その結果、正応３（1290）年３月30日の『後深草法皇院宣案』と永仁３（1295）年９月９日の『関東下知状案』（鎌倉幕府の裁許）によって、当荘の煩雑な所職は明瞭なスタイルにおさまった。

ここに、『関東下知状案』を全文掲げる。

最勝光院領遠江国原田庄細谷郷雑掌与地頭原小三郎兼泰法師-法名道円-相論、本家方預所可郷務否事右訴陳之趣、枝葉雖多、所詮当庄本家者最勝光院也、領家者随心院僧正坊跡也、而領家職相論之間、依対捍本家方年貢、就本家訴訟、以細谷郷止領家綺、一向被付本家上、可令所務之由、雑掌雖申之、領家方預所、自往古居住本郷、止徴納年貢□□（過分）令運進本家之間、本家方更不相綺所務云々、而今割分当庄、以細谷郷被付本家、以本郷以下被付領家、可致所務、就中細谷郷者、最狭少之上、令混乱本家・領家者、可□細谷郷之地頭歟也、然則○（本家一円）任先例、可致其沙汰者、依鎌倉殿仰下知如件、

永仁三年九月九日

陸奥守平朝臣　御判

相模守平朝臣　御判

訴訟の結果、当荘を２分割して、細谷郷の領家職は本家に付され、本郷以下も領家に付され、それぞれが知行することとなった。いいかえれば、細谷郷の本家・領家両職を一円知行することになったのが最勝光院で、本郷以下の本家・領家両職を一円知行することになったのが随心院僧正坊跡（醍醐寺金剛王院）である。ちなみに、本郷以下の郷とは、本郷・幡鎌郷・吉岡郷・寺田郷の４つの郷とされる。この体制のもと、当荘の所務権を掌握した両寺院が在地の預所職をもつ地頭原氏を指揮するという重層支配関係が完成し、知行はその後約200年間に亙って継続されていくのである。なお、この下地中分によって、原氏の持っていた「領家方預所」職はこの時点で取り上げられたものと思われる。しかし、この点については史料による確認ができない。

さて、ここで注意しなければならないことは、この度下地中分がなされたとはいっても、当然、原田荘内の地頭職（この時代になると地頭も新しい「職」として位置づけられる）は除外されているということである。当荘はその後も原氏が地頭職をもち続けていくのであり、地頭原氏による荘務押妨はこの後も長らく続いていくのである。

このように、全国各地の多くの荘園が地頭によって相次いで侵略・押領されていく中で、東寺が当荘を寺領荘園として永く維持することができたのには、本家側が領家職の兼帯によって荘務権をかろうじて行使しえたことが一つの要因にあったとされている（最勝光院領23ヶ荘のうち、南北朝期以降も生き長らえたのは4荘にすぎない）。本家の立場が領家からの二次的な寄進を受けるだけであるのに対して、実際の荘務権を保持するのは領家である。全国に80以上もの大荘園群を保持していた東寺にあっても、本家職・領家職の両方を一元化できたのは原田荘を含めてわずか5荘である。

先の『関東下知状案』には、細谷郷の地頭として「原小三郎兼泰法師－法名道円－」とある。この兼泰なる人物は、原氏の諸種の系図に名前が残されていないことから、原氏の中でも庶流と思われる。この時点で、すでに原氏による地頭職の細分化がなされていることと、原氏が「領家方預所」として「自往古居住本郷」していたことを確認することができる。

なお、金剛王院とは、京都仁和寺の子院であり、鳥羽天皇の中宮待賢門院璋子の発願によって大治5（1130）年に建てられた寺院である。同院の所領は、長講堂領とともに後深草法皇を祖とする持明院統に代々伝領されたものである。一方、最勝光院とは、後白河天皇の女御であった建春門院の発願により承安3（1173）年に建立された御願寺である。

その後、正中3（1326）年、最勝光院領の執務職と寺領は、後醍醐天皇によって東寺に寄進され、原田荘細谷郷も東寺領となり、東寺最勝光院方の管掌するところとなった。この寄進を境にして、東寺側と地頭原氏との間での争論が史料に頻繁に現れてくる。それは、原田荘関係史料の大半が東寺領荘園関係文書であるからと考えることもできるが、それ以外にも、以下のように考えることができる。

第1に、寄進を受けた東寺が自ら現地支配を行うために、東寺から直接雑掌を派遣し荘園の管理にあたらせようとしたからである。現地で雑掌側と地頭側とで争点が発生するのは目に見えている。

第2に、細谷郷の地頭職が複雑になったことも事態を深刻にしたと思われる。貞和2（1346、正平元）年に『足利直義下知状』が3通相次いで発給されている。それぞれの下知状には「当郷一分地頭」として「当郷一分地頭原熊伊豆丸」（閏9月27日付の『足利直義下知状』）、「当郷一分地頭金子孫次郎忠継」（10月7日付の『足利直義下知状』）、「原箱熊丸」（10月27日付の『足利直義下知状』）の名が記されている。いずれも、年貢未進をする細谷郷の一分地頭に対して幕府が上納を命ずる旨が記されている。

鎌倉時代後期では細谷郷の地頭は1人であったが、南北朝期になると、決して広くない細谷郷に惣領のほか、数名の一分地頭が存在するようになる。地頭の強引さは、規制の支配秩序、東寺の支配構造の中に実力で割り込んでくるものであり、その地頭が狭い荘域に複数存在するのであるから、東寺としてはたまったものではない。彼らはそれぞれ独自に支配を進め、年貢の押領・対捍を行っている。その背景としては、原氏は南朝方についていたが、南朝勢力の衰退にともなって原氏惣領家の統率力が弱体化し、結果として一分地頭が乱立していったものと考えられる。

惣領を中心とした同族結合を重んじた武家も、分割相続によって、世代が移るとともに家の分立・独立が強まり、惣領家からの分離が進行していった。これは、原氏だけに限ったことではない。しかし、その反面で荘域支配のためには、一族が点々と配置されていく必要があり、より広い地域へと伸張し、やがて国人領主へと成長していったということも注意しておかなければならない。なお、上述の一分地頭3名の人物名について、原氏関係の諸系図を参考にしても、特定することが難しい。

さて、こうした一分地頭側の押妨に対して、東寺は室町幕府へ訴訟を起こしたが、何ら期待するほどの成果を得る事はできなかった。寺社領の救済策として打ち出された応安元（1368）年の「応安の半済令」も根本的な解決策にはならなかった。東寺としては、当荘の荘務権を在地の武士や僧侶・商人などに請け負わせる（代官請負制）などして、年貢の確保を図った。しかし、結果的に代官請負制が東寺側の年貢確保の最終手段となってしまい、荘園支配の実を回復することはできなかった。こうなると、国人領主に成長しつつあった地頭原氏およびその一族による同荘への侵略は深まるばかりである。原田荘の代官請負制については、村井章介氏の論考（村井1991）が詳しい。

長禄３（1459）年８月３日、昨年分の細谷郷の年貢（わずか五貫文に激減）を寺院内で分配した記事がある（『遠江国細谷郷未進年貢代銭支配状写』）。これを最後として、年貢が東寺側に納められた史料を確認することはできない。文正元（1466）年７月19日の『光明院尭忠書状案』に「当国細谷郷之内少寺領候、近年土貢一向無沙汰候」とあることから、何らかの事情で年貢が上納されなくなってしまったのである。この事情を知る手がかりとなるのが、本郷以下４郷に関する次の史料である。

寛正５（1464）年10月の『幕府奉行人連署奉書案』に、

三宝院御門跡領遠州原田庄年貢事、近年寄事於左右、原一族等不致其沙汰云々、為事実者太不可然、至代官職者被補任原宮内少輔訖、（以下略）

とある。おそらく、原一族による年貢対捍で困窮した醍醐寺三宝院側から、幕府に対して訴えが出されたのであろう。室町幕府は、同荘の代官職に補任された原宮内少輔に、所務執行を厳命している。これは、本郷以下４郷の年貢対捍状況についての記事であるが、細谷郷でも同じ状況を想定することができる（なお、原宮内少輔が原氏系図のどの人物に該当するかは不明である）。

原田荘細谷郷の名は、応仁２（1468）年２月10日の『光明院尭忠書状案』に「細谷郷」とあるのを最後として消失する。応仁・文明の乱（1467～77）の戦乱に乗じて、原一族が完全に同荘を席巻してしまったのであろう。原田荘と同様に東寺最勝光院領として長い間に亙って、東寺を支えてきた遠江国村櫛荘に関して、応仁２（1468）年８月３日、東寺最勝光院引付方は「只今世間物忩」であるため、当分の間年貢催促を見合わせるよう合議した史料が残されている（『最勝光院評定引付』）。東寺側のなす術を失った状況を物語っている。ちなみに、原氏の本拠地である高藤城（殿谷城）が築城されたのはこの頃のことである。

一方、金剛王院の領する本郷以下の４郷は、途中で醍醐寺三宝院門跡の管轄するところとなる。本郷以下４郷の支配については、東寺の支配した細谷郷ほどの史料は残っていない。永仁３（1295）年に鎌倉幕府から認められた荘務権は維持し続け、それを裏付ける史料は何点か残されている。しかし、先の「原一族」による年貢対捍行為によってであろうか、それ以降の史料からは消えてしまっている。後のことであるが、永正14（1517）年４月の『醍醐寺山上堂方下行物注進状』に、

「一　遠江国原田庄運上之事　上分捻弐石　宣旨枡定冬花衆ニ御支配」

とある。応仁・文明の大乱以降も、かろうじて年貢米が醍醐寺側に上納されていたことがわかる。しかし、いずれにしても東寺領細谷郷と同じ運命をたどったことは間違いない。

（２）原氏について

今まで原田荘について述べた中で、地頭原氏の姿を垣間見ることができた。この原氏とは何者であるのか。ここでは、原氏およびその一族について、原田荘が存続した応仁・文明の大乱あたりまでを対象として考えてみる。

江戸時代の寛政年間、内山真龍によって著された『遠江国風土記傳』に、

「本郷村小澤氏系譜に云う、佐野郡原田庄本郷村は、原氏十代の城地なり」（小澤氏は原氏一族）

とある。江戸時代の文化・文政年間に掛川藩によって編纂された『掛川誌稿』には

「原氏なるものもその世系を詳にせずといえども、恐らくは古より数世此に居りし家なるべし」

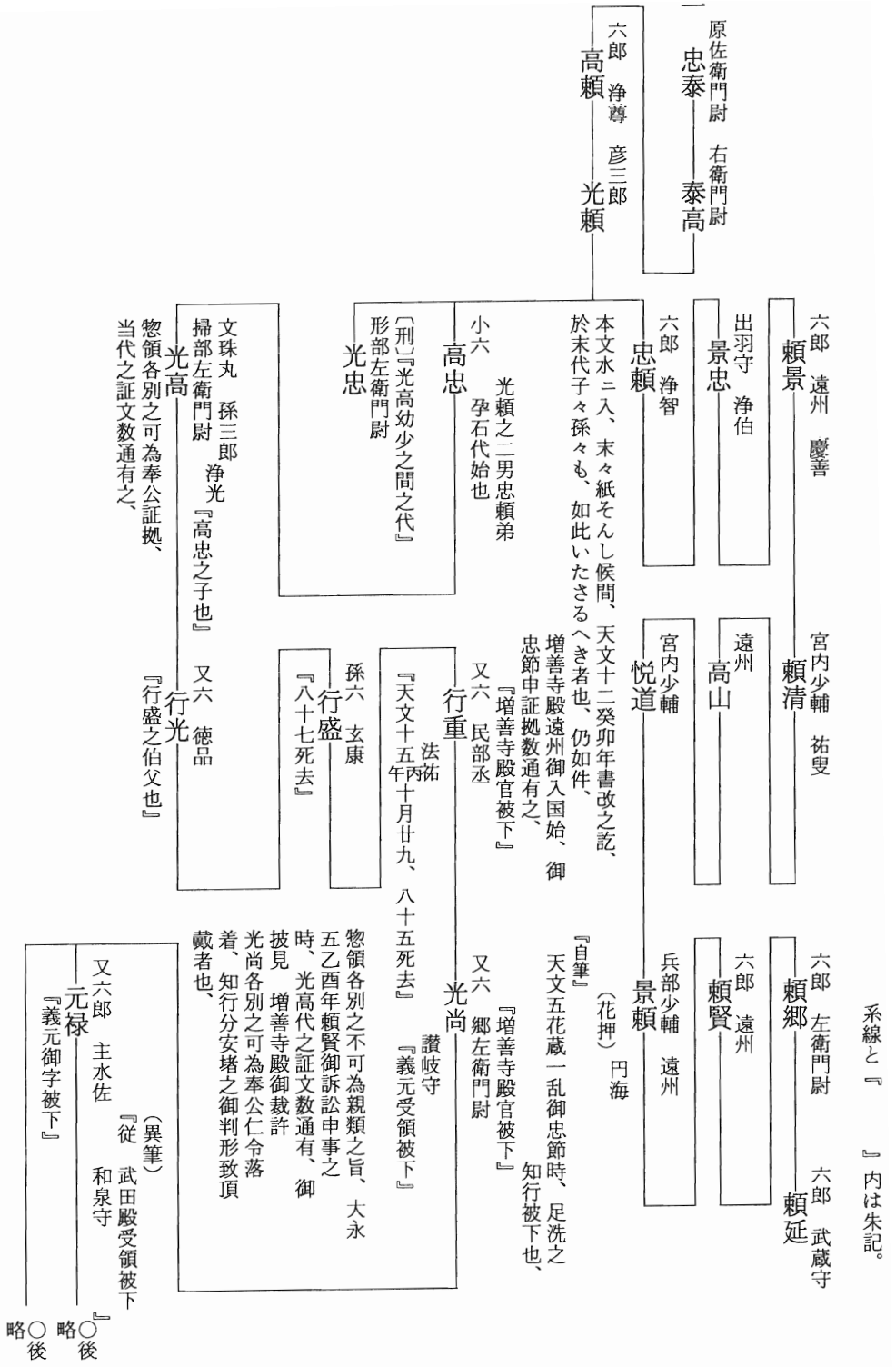
と記している。土着系の開発領主として、あるいは鎌倉幕府の地頭として永代に亙って原田荘の経営に専念した原氏、国人領主として高藤城（殿谷城）を築城し、北条早雲率いる今川軍によって陥落し落ちのびた原氏、武田信玄の遠州攻略に助力し戦功をあげた原氏一族の孕石氏、高天神城の戦いで生け捕りにされ徳川家康の直々の命により自刃し果てた孕石元泰、あるいは長福寺を再興し春林院を開いた原氏、『円通松堂禅師語録』を著した一族の松堂高盛など、みな原氏一族の事績である。

この原氏およびその一族である孕石氏については、幸いなことにいくつかの系図が伝わっている（第47・48図）。各和の春林院の所蔵で明治年間の作である『原氏系譜』、原義一氏が自家に所蔵する『家譜』に基づいて作成した『原氏系図』、神戸市の孕石元章氏の所蔵で天文12（1543）年に一族の孕石光尚が作った『孕石氏系図（原・孕石系図（仮称））』、小山町の孕石大二郎氏所蔵で江戸時代中期に作られた『孕石氏系図』の４つの系図である。ただしこの４つの系図は、それぞれ作成時に基づいたと思われる『原史料』が別々であったためか、人名の前後に錯簡がみられたり、齟齬をきたしていたりして、使用する際には注意が必要である。そこで、当該期一次史料を主とし、諸系図を従とすることで、原氏および孕石氏についてその動向を追ってみる。

原氏は、古代以来の郷名である「幡羅郷」（10世紀にできた『和名類聚抄』による）をいわゆる「名字の地」とする在地の土着勢力であり、その出自を藤原南家とする。駿河守藤原時信は、任期を終えた後も京都に戻らず、その子維清は清水市入江に土着、ここを「名字の地」として開発に乗り出し、在地領主として駿河国でも有数の武士団に成長していった。彼の子孫からは、駿河国の工藤・船越・岡部・興津・蒲原・渋川・吉川、遠江国の原・久野、橋爪、あるいは伊豆国の天野氏等を輩出している。いずれも、それぞれの土着先で開発領主として成長し、その嫡流が惣領家として一族を統括するようになる。そして、12世紀前後頃に獲得した広大な領域を寄進して立荘化するのであるが、それは「東国」型荘園の典型例でもある。

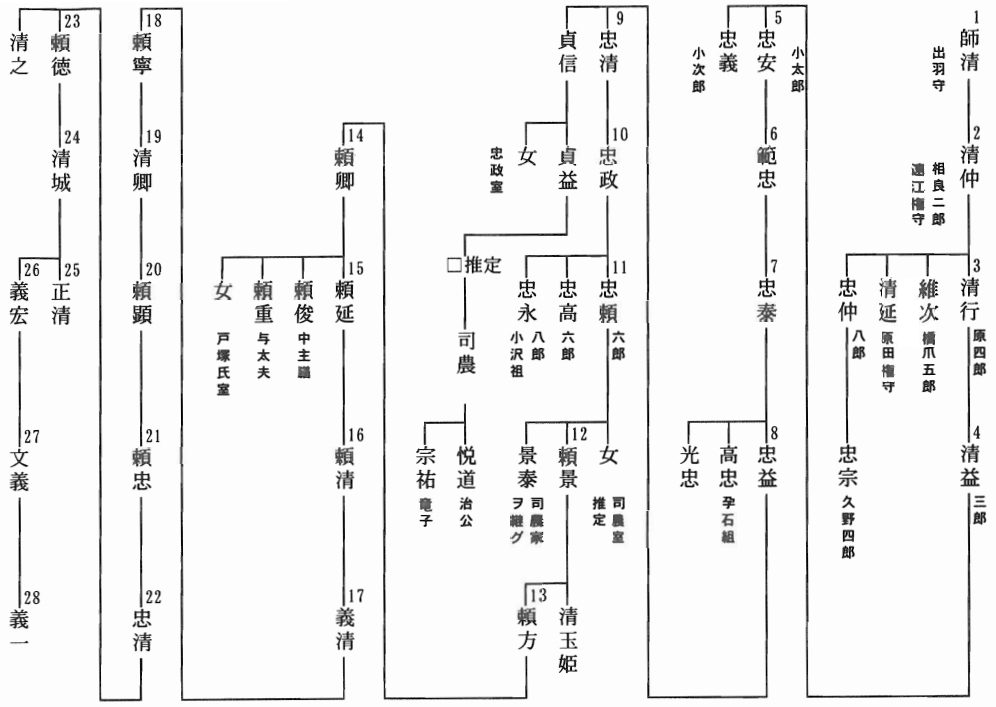
なお、原氏が藤原氏の後裔であったとする史料として、元徳３（元弘元、1331）年12月15日の『原田庄雑掌・地頭和与状』にて、「藤原忠益」とあり原忠益が花押を署している。また、原氏一族の松堂高盛が自著『円通松堂禅師語録』にて「不肖者、当山之麓、産藤氏家、父頑母嚚也」としている。原忠益および松堂高盛の両名共に、自らを藤原氏の後裔と称していることは、興味深い。

さて、工藤維清の孫師清が遠江国佐野郡幡羅郷に居住し、最初に原氏を称したとされる。原里の旭増寺にある位牌には、「神谷院殿慶増宗珍大禅定門承徳二年六月朔日」（承徳二年は1098年）とあり、これが師清のものとされる。彼は寺田郷に住んで、明神ヶ原に城を築き、没後は館跡に祠を建てて祀られたとされる。現在、寺島八幡宮の南隣近辺にある原殿明神社は、彼を祭った神廟であるという。したがって原氏の本居は当初、本郷ではなくこの寺田郷であったと考えられている。『尊卑文脈』の師清の註記に「原権守」とあることから、彼は遠江国の国衙に仕える在庁官人であった可能性が高い。単なる土着勢力であった彼が地方役人であるならば、国から一定の地位を認められているわけであり、それを背景として、土地・人民に対する支配力を強め、労働力を編成することで自ら大規模な開発を進めることも可能であった。いわゆる「開発領主」と呼ばれる存在であったのである。この開発領主の成長こそが、原田荘の経営を担う直接の主体へと発展していったのである。もっとも、師清が原氏を名乗ったことや、幡羅郷に居住したことを記した確実な史料は現在のところ見当たらない。

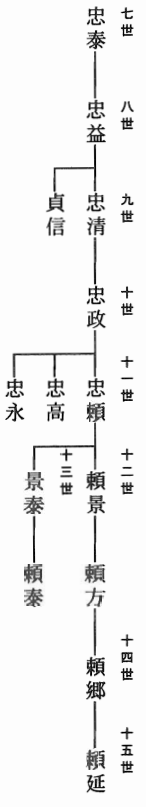


系線と『　』内は朱記。

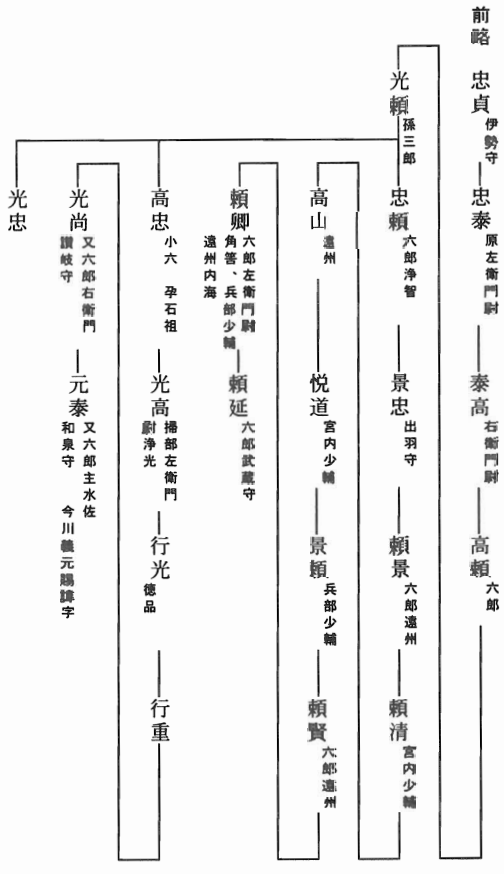
第47図　原氏・孕石氏関連の系図１



「原氏系図」（原義一氏著『原氏家譜私考』所収）



「原氏系譜」（春林院所蔵）



「孕石氏系図」（孕石大二郎氏所蔵）

第48図　原氏・孕石氏関連の系図２

原氏の中で、系図以外の当該期史料に最初に名前が出てくるのは、初代師清の曾孫にあたる4代清益である。『吾妻鏡』には、平家追討時、一ノ谷の合戦で戦功をあげた「原三郎清益」なる人物が記されている。春林院所蔵の『原氏系譜』の清益の註記に、「属源頼朝卿平家追討、有功賜遠江地頭職」とあり、同一人物であることがわかる。一方、『原氏系図』によると、この時の戦功により所領を賜り、寺田郷から本郷に移り住んで本郷館を築いたとされる。しかし、先の地頭職を賜ったことと合わせて、他に拠るべき史料がなく、この点に関しては確実視できない。いずれにしても、この前後の時期に原氏は地頭に任命されている。寿永2（1183）年の宣旨によって、鎌倉幕府は荘園の荘官に対する一定の指揮権をも獲得したのであるから、地頭原氏の実権は大幅に伸長したものと思われる。土着の開発領主として成長し続けた原氏であっても、単独で領域支配できるまでには至らない、支配力の限界はあったであろう。地頭に補任されたということは、現地の領域支配への道が公的に開けたことを意味するのである。続いて、史料上確認できる人物として、『吾妻鏡』に承久（1219～22）から建長（1249～56）年間にかけて「原左衛門尉忠康」が登場する。『原・孕石系図』はこの忠泰から書き始めており、『原氏系図』にある「左衛門尉忠泰」と同一人物とみなされている（静岡県1997　513頁）。

次に、永仁3（1295）年9月9日の『関東下知状案』に、最勝光院雑掌と相論する領家方預所として「地頭原小三郎兼泰法師－法名道円－」が現れる。この史料には、原氏が以前から本郷に居住していたことも明記されている（「領家方預所、自往古居住本郷」とある）。さて、この兼泰なる人物は、諸種の系図には全くない。法名を持する出家人であること、名前に原氏惣家の諱（「忠」の字）がつかないことから、本家筋に近い庶家出身である可能性が高い。強いていえば、この時期までに原氏による地頭職が細分化されていたことを想定することができる。すでに考察した通り、永仁3（1295）年の原田荘の下地中分を境に、細谷郷は最勝光院が、本郷以下4郷は金剛王院による本家・領家それぞれの一円知行が達成されたのであり、『掛川市史』で「原氏は一族で本家にも領家にも触手を伸ばしていた」（上巻318頁）とされる通り、原氏は一族を挙げて原田荘を蚕食していくのである。

この永仁3年の下地中分が、原氏の荘園侵略にどのような変化をもたらしたのかを考えてみる。下地中分したからといって、地頭職を確保していない東寺は細谷郷を完全に独占できたのではなく、地頭による荘園侵略は相変わらず進行し続ける。細谷郷は、下地中分の結果、本家職・領家職をもつ東寺が自ら雑掌を派遣することによって、地頭職を保有する原氏との間で常に争論が絶えない状況へと変わってきてしまったのである。争点としては、荘務権の行使をめぐる問題が大半である。具体的には、年貢徴収権を握る地頭原氏による年貢の抑留や押領（下地中分後の約30年で、年貢はほぼ半額にまで落ち込んだ）、年貢の上納方法（現米納か銭納か）、年貢未済分の支払方法等についてである。一方、下地中分によって、従来本郷以下4郷の本家職を持っていた最勝光院は、4郷に関して全ての権限を失うことになってしまった。しかも、この4郷は原田荘の中心部分を占めているのである。最勝光院方のような強力な荘園管理体制が機能しなかった金剛王院が一円知行する本郷以下4郷については、原氏は細谷郷以上にかなり露骨な方法で荘園侵略を進めることができたはずである。この点でも、原田荘の下地中分は、地頭原氏にとっては好都合だったのである。

次いで、嘉暦2（1327）年10月28日、守護大仏貞直の命により内田致景とともに飯田荘内の田地相論の真偽究明に携わっている「地頭原六郎入道」を確認することができるが（『大仏貞直奉書写』）、人物を特定することはできない。

次に登場するのが忠泰の子8代忠益で、『原氏系譜』の忠益の註記に「小三郎、居殿谷城細谷郷地頭職」とある。この時期は、原田荘の年貢納入等の所務をめぐって東寺側と原氏一族との間で争いが絶えることなく続いている。元徳3（1331、元弘元）年12月15日、『原田荘雑掌・地頭和与状』には、雑掌直瑜との間で和与の取り決めを行う「細谷郷地頭原小三郎忠益」として現れる。同じ日に忠益は自ら

『原忠益注進状』を作成している。また、先の和与を追認する形で発給された鎌倉幕府の『関東下地状』（同年12月27日）には、「当郷惣領忠益」とある。ただし、『原氏系譜』で彼が、高藤城（殿谷城）に居住していたことと、この時点で細谷郷の「地頭職」であったことについては、諸書ともに若干疑問視されている。第一に高藤城（殿谷城）は彼よりも数世代後に築かれた城であることが、最近の高藤城（殿谷城）の発掘調査で判明しているからである。次に、『掛川市史』（上巻）、村井章介氏の研究では、忠益は細谷郷全域の地頭ではなく、細谷郷の一角を占めるいわゆる「一分地頭」であったとする（村井1992）。この点に関しては、『関東下地状』に「当郷惣領忠益」と明記されていることから、忠益は細谷郷の惣領家を継いでいることは確かである。

「一分地頭」に関しては先に考察した。そもそも、地頭職は荘郷単位に一人であり、相続されるものであった。しかし、分割相続によって庶子に地頭職を配分するために、一荘一郷が一族の数人に分割されるようになったのである。忠益の時代、すなわち鎌倉幕府最末期から南北朝期にかけての動乱時代、原氏一族内にも変化が現れている。貞和２（1346）年段階で、「当郷一分地頭原熊伊豆丸」「当郷一分地頭金子孫次郎忠継」「原箱熊丸」が史料に登場し、いずれも年貢上納に対して対捍行為をする細谷郷の一分地頭として登場する。これは南北朝の争乱期、原氏惣領家の求心力が弱まり、一族の中から「一分地頭」を輩出せざるを得ない状況下にあったのであろう。また、貞和３（1347、正平２）年の11月日の『遠江国原田荘細谷郷年貢・細々物徴符』には、「（細谷郷）惣領分」と並んで、「金子孫次郎殿分」「向笠殿分」「金子十郎（忠継）殿分」「本郷惣領殿分」「天方殿分」「はたかま殿分」「御所熊殿分」「後家分并すゝ蔵分」とある。これらの人物の中には、原田荘の荘域外の地名を「名字の地」とする人物もいるが、村井章介氏は「おおかた原氏の庶流」としている（村井1991）。「（細谷郷）惣領」と「本郷惣領殿」があることから、原惣領家はこの時点で分離独立していたことがわかる。なお、原熊伊豆丸と原箱熊丸の両名（「熊」の通字）について、殿谷城報告書では、８代忠益の子の９代忠清とその弟貞信に当てているが、確たる裏付けはないように思われる。

この後も、東寺領関係文書に原氏は度々登場するが、それらの人物と原氏関係の諸系図に登載されている特定の人物とを結びつけることは困難である。例えば、応永13（1406）年頃に「原頼氏」なる人物が、細谷郷領家方年貢進上の件でわざわざ上洛している（『原頼氏書状』年欠・10月15日）。しかし、この頼氏なる人物ですら特定することはできない。この時期以降、原田荘の荘務権のほとんどを原氏によって蚕食されてしまった東寺は、荘務権の回復の術すら持ち合わせず、残るは毎年の年貢をいかにして確保するかという一点だけに絞られてしまったからである。とりわけ、代官請負制のもとでは代官である「給主」が徴税全般を東寺に代わって請け負うのであるから、東寺は現地支配から手を引くとともに、彼ら給主の京都での銭納に期待するしかなかったのである。

（３）孕石氏について

ここで、原氏一族の庶流である孕石氏について考えてみる。孕石氏は、原野谷川上流域の孕石を「名字の地」とする一族である。まずは、貞和２（1346）年８月17日の『足利直義下文写』を掲げる。

下　原孫三郎光高－童名文殊－

　可令早領知遠江国原田庄内田屋敷地頭職事

右、任父高忠元亨二年三月廿日譲状、可領掌之状如件、

　貞和二年八月十七日

これによると、観応の擾乱（1350～1352）の数年前、室町幕府の足利直義が原田荘内の田屋敷地頭職を「原」光高に正式に安堵した。しかも光高はすでに父高忠から元亨２（1322）年に、所領を譲渡され

ていることがわかる。この高忠は、『原・孕石系図』に光頼の３兄弟（忠頼・高忠・光忠）の１人として記されていて、高忠の註記には「光頼之二男忠頼弟　孕石代始也」とあり、原氏の庶流孕石氏の祖とされている人物である。『孕石氏系図』もほぼ同様で、光頼の３子の一人、高忠の註記には「孕石祖」とある。これに対して、『原氏系図』では８代忠益の弟として高忠・光忠を記し、高忠の註記には「孕石組（祖に同じ）」とみえると共に、11代忠頼の弟に忠高・忠永を記し、この忠高について『原氏系図』に基づいて考察を加えた『原氏家譜私考』では、「孕石元祖」としている。つまり、同一系図内において孕石の祖を高忠と忠高の両者においている。それでは、孕石を最初に名乗った人物は誰なのであろうか。

忠高を「孕石元祖」とする根拠は、永享の乱における彼の活躍にある。『関東合戦記』の永享11（1439）年２月10日条に、

> （前略）持氏・満貞、両御所自害あり、大御所の御頸をは金子入道斬之、小御所の御頸をは原太郎兄弟討之、京都よりの大将上杉中務か下知にて、各京へ遣はす、実検の後、金子は常陸国下妻庄にて御恩を蒙り、原兄弟は遠江国にて御恩を蒙る、此等は金沢合戦に上杉憲直か一味して討れし下総守か子也、下総守は□言の罪あるによりて誅せらるると雖、其三人外祖原左馬助貞信の吹挙により京勢に加わり、御所内に乱入り亡親の忠を顕わし、兄弟三人皆面々　所懸命の地を安堵せりとあり。

とある。すなわち、原氏「兄弟三人」は、足利持氏の叔父足利満貞を討ち取った勲功で遠江国に領地を賜ったことが記されている。「其三人外祖左馬助貞信」とあることから、「下総守」は原貞信の甥にあたる原忠政であり、「兄弟三人」とあるのは「下総守か子」である忠頼・忠高・忠永の３兄弟と考えてよいだろう。つまり、応永24（1417）年に、上杉禅秀側に立って室町幕府に抗した父原忠政の汚名返上を果たした原忠頼・忠高・忠永３兄弟が遠江国内にて領地を安堵されたということである。

当該期史料と諸種の系図とを勘案した林隆平氏は、「この永享の乱で孕石を賜った忠高を前述の系図（『原氏系図』）に見ると、原氏の系図においては貞和２年の譲状にある高忠から永享の乱の忠高までその間の世代は欠けているが、両者の年次に不合理はないものと思われる。孕石氏の系図（『原・孕石系図』）では忠頼の弟に貞和２年の文書にある高忠父子の語を録して、この系図が混同せる創意性のある系図という印象を受けるのである。」とし、『原・孕石系図』において高忠は忠頼の弟忠高と同一人物に擬したのであり、孕石の祖は永享の乱の戦功によって賜地された忠高であるとする。今、この解釈について考える前に、もう1つ別の史料を挙げてみる。

天文８（1539）年５月27日の『孕石光尚置文』は、先の『孕石氏系図』とともに小山町の孕石大二郎氏の所蔵する文書で、『静岡県史』編纂の際、同家にて初採された貴重な史料である。

孕石光尚とは、『原・孕石系図』では前述の光高の曾孫にあたる人物であり、彼が孕石氏譜代相伝の所領に関する２つの帳簿（原帳簿は散逸）を書写したものが、この『孕石光尚置文』である。２つの帳簿とは、地頭得分の回復を期して原帳簿を写した『遠州原田庄本郷之内孕石譜代椙伝之知行分坪付石米納所帳』（文中に至徳２（1385）年、貞治５（1366）年の年号あり）と、当時地頭が守護に納める負担の原簿を写した『国役納所之覚書』（「延文３（1358）之古帳」との奥付あり）である。この２つの帳簿には孕石氏の領する８ヶ所の地名が記されている。「ま門（歓喜寺前）」（歓喜寺は本郷地内に小字が残る）、「角田」（各和地内に小字が残る）、「山合」（細谷地内の岡津原丘陵の北端に小字が残る）、「楠か谷」（本郷地内の小字名）、「杉か谷」（本郷地内の小字名）の５つは本郷およびその近辺の地区とみてよいだろう。残る３つは、「孕石村」（孕石地区）、「井尻村」（居尻地区）、「笠懸」（居尻奥の黒俣地区との境の山の名）で原野谷川の上流域に点在する地名である。このうち、角田は原田荘の荘域からわずかに外れている可能性があり、単に同一の小字名であるのかもしれない（この他に、「赤目」「沢入」の地名があり、いずれも原野谷川上流域の地名である）。

さて、この史料から、少なくとも14世紀中頃段階で、原氏一族から分かれていた孕石氏が本郷およびその近辺と原野谷川上流域の2つのブロックを所領として保持していたことが確認できる。そして、先の貞和2年の『足利直義下文写』とを併せ読むことによって次の事実を確認することができる。

① 従来、孕石の地は永享の乱の戦功によって原忠高が賜り、と同時に彼が孕石を「名字の地」としたと考えられてきた。しかし少なくとも、『関東合戦記』を始めとしてその他のどの史料をみても、原忠高が賜った地が「孕石」であると特定することはできない。

② 実はそれ以前、14世紀中頃にはすでに、この地は孕石氏によって知行されていたことが『孕石光尚置文』からわかる。14世紀中頃といえば、永享の乱よりも少なくとも70～80年も前のことであるから、原忠高は同一時代の人物ではありえず、したがって彼を孕石氏の祖とする考えは訂正しなければならないだろう。

③ 原忠高が孕石の祖でないことから、次に考えられる人物は高忠である。現存する4つの原氏関係系図の内、3つの系図が高忠を孕石氏の祖としている。残る1つの系図（『原氏系譜』）は孕石氏の祖については何も触れてはいない。しかも、14世紀中頃に実在した人物として、元徳3（1331）年に『原忠益注進状』を作成した原忠益（「細谷郷地頭原小三郎忠益」「当郷惣領忠益」）がいる。この忠益と高忠の関係は『原氏系図』によると兄弟である。しかも、高忠が同時代に実在したことは先述したとおりである。これらからすると、高忠が孕石氏の祖であることがわかる。

ところが、問題が1つだけ残る。それは、高忠が孕石を名乗った史料が見つからないことである。

史料上、「孕石」を名乗って最初に登場するのは、明応7（1498）年11月13日の『今川氏親判物』の「孕石殿（行重カ）」である。『原・孕石系図』は、有光友學氏によると「惣領家の原氏の歴代とそこから分かれた孕石氏の元泰にいたるまでの当主を左右に書き分けた珍しい形式の系図である。」と指摘されている（有光1998）。すなわち原氏嫡流と孕石氏とを左右に書き分けたことと、高忠に「孕石代始也」を註記することで、高忠・光忠以下の人物を「孕石」一族として括っているものと思われる。

一方で、貞和2（1346）年8月17日の『足利直義下文写』では「原孫三郎光高－童名文殊－」とあり、光高は孕石姓を名乗っていない。このことは③との間でも矛盾を生じることとなる。しかし、現段階ではこの矛盾を説明する史料が見当たらない。唯一、この文書の所有者が孕石氏の後裔にあたる孕石大次郎氏であることは、一つの証左となりうるかもしれない。

以上、①から③をまとめると、本郷地区を含めた8地区は孕石氏の祖である高忠とその子光高が相伝した所領であり、光高は室町幕府からこれらの所領を正式に安堵されたのである。その後、孕石氏当主は行重・光尚父子に至るまで代々同地を相伝していったのである。

それでは、『原氏系図』が忠高を「孕石元祖」としたのはなぜであろうか。そもそも『原氏系図』をみるかぎり、忠高の註記には「六郎」とあるだけであり、忠高を「孕石元祖」としたのは、『原氏家譜私考』を著した原義一氏の私考ではなかろうか（『原氏系図』は戦災によって焼失したために確認不可能）。次に、『原・孕石系図』と『孕石氏系図』が高忠・光忠兄弟を忠頼の弟としたのはなぜであろうか。残念ながらこのことについても明言できない。そもそも、『原・孕石系図』では、原左衛門尉忠泰から始めて、以下、泰高－高頼－光頼－忠頼とつなげている。忠泰は先述の通り、『原氏系図』でも忠益の父忠泰として登場し、『吾妻鏡』に「原左衛門尉忠泰」として登場する実在の人物であるが、泰高－高頼－光頼の3代については、他の史料に全く登場しない。当時、原氏の諱は「忠」であるが、この3代とも「忠」を名乗っていない。おそらく、『原・孕石系図』で孕石氏の祖である高忠を系図に位置づける際、永享の乱で原一族の失地回復に成功した忠頼・忠高・忠永3兄弟の勲功にあやかって、高忠・光忠兄弟を忠頼の弟に擬し、さらに忠頼・高忠・光忠という仮の3兄弟の系譜をより不確かなものとするために、架空の泰高－高頼－光頼の三代に繋げたものと思われる。

次に、貞和３（1347）年段階で『遠江国原田荘細谷郷年貢・細々物徴符』にみえる「（細谷郷）惣領」と「本郷惣領殿」の２つの惣領家と忠益・高忠・光忠３兄弟との関係について考えてみたい。

忠益は、史料では「細谷郷地頭原小三郎忠益」（元徳３年の『原田荘雑掌・地頭和与状』）とあり、「当郷惣領忠益」（元徳３年の『関東下地状』）ともあることから、「（細谷郷）惣領」であり、しかも細谷郷の地頭職に補任されていたことは間違いない。問題はこの時の「本郷惣領殿」が誰なのかである。原氏本宗家の当主でもある８代忠益と考えるのが妥当であるが、そうすると彼は、細谷郷・本郷以下４郷のいずれの「惣領」でもあることになり、『遠江国原田荘細谷郷年貢・細々物徴符』が惣領を細谷郷と本郷とにあえて書き分けたことの説明がつかなくなってしまう。さらに、光高が貞和２（1346）年には室町幕府から、原田荘内の「地頭職」に補任されており、光高を単なる「一分地頭」とする訳にはいかない。しかし、光高を「本郷惣領殿」とすると、原本宗家の当主である叔父忠益が細谷郷のみの惣領で、甥の光高が本郷以下４郷の惣領ということになる。確たる史料の裏付けもなく、残念ながら推測の積み重ねになってしまう。それだけ、原氏一族内の惣領制の実態は、かなり複雑なものとなっていたのであると考えることができる。

「孕石」高忠・光高父子が細谷郷の「一分地頭」と同じ扱いであったにしても、彼らの所領が原田荘の中心地である本郷をも含めた広範囲にわたるものであることは注目すべきであろう。『孕石光尚置文』には、孕石譜代の相伝知行分を「六町三反二丈（あるいは五町六反二丈）」とする。それほどの広い面積ではないが、細谷郷の「一分地頭」が一町前後程度であることからすると、両者を比べてみれば「孕石」高忠・光高父子の所領がひときわ広大なものであることがわかる。

後述するとおり、後に光高の孫にあたる孕石行重は駿河今川氏の家臣として原惣領家に反旗を翻し、高藤城（殿谷城）攻略での勲功により知行を充行われているのであるが、高忠・光高の代にすでに孕石氏はこの駿河今川氏と誼を通じることによって（今川範国が遠江国守護となったのは、建武２（1335）年の中先代の乱以前とされる）、今川氏の勢威を背景として広範囲にわたる所領を獲得することができていたのかもしれない。

なお、光高以後の孕石氏について簡単にみてみよう。『原・孕石系図』では、光高－行光－行盛－行重－光尚－元泰と続く（『孕石系図』では、行盛が省略されている）。行光の註記に「行盛之伯父也」とある。行盛の註記には「八十七死去」とある。行重の註記には「天文十五（1546）丙午十月廿九、八十五死去」とある。このことから、行光は嫡流ではなく、行重は寛正２（1461）年生まれであることがわかる。行重・光尚の関係については、『孕石光尚置文』に、「民部丞行重代并左衛門尉光尚代仁、何之在所をも可相続ために」とあることから、二人が父子関係にあることを確認することができる。いずれにしても、光高以降の孕石氏当主の系図に関しては『原・孕石系図』の記載通りである。

最後に、孕石に築かれた孕石城について触れてみたい。天文５（1536）年12月27日の『今川義元判物』に、孕石光尚が花倉の乱において戦功をあげたことで今川義元から「駿河国（安倍郡）足洗郷之内朝比奈又二郎跡」を宛行われていることが記載されている。一方、元尚の子元泰は、『三河物語』等によると、徳川家康が駿河今川氏の人質時代の駿府城下における屋敷の隣家が孕石主水元泰の屋敷であったとする。これらのことから、孕石光尚・元泰父子の何れかの代において、駿府の地に屋敷を賜っていたことがわかる。とすれば、孕石城は誰が築城したのだろうか。

現地を訪れると、確かに孕石地区を見下ろす高台にいくつかの平場はあるが、茶畑の開削等によって城跡の遺構を確認することはかなり困難な状況である。北側の原野谷川の形成する急崖と、付近に残る小字名（「奥背戸」「屋敷裏」「屋敷下」等）および孕石城跡から南へ500mほどの小さな丘に「孕石主水の首塚」とされる墓石が残っていて、わずかに当時を偲ぶよすがとなっている程度である。今川家の重臣であり婚姻関係にあった孕石氏にしては、やや貧弱であると言わざるを得ない。おそらく、高忠・光

高父子の時代は当地に居館を構えていたが、その後元尚・元泰父子の時代には孕石は単なる本貫地であったに過ぎないと考えられる。

（4）その後の原氏・孕石氏について

原氏一族は、一族内から多くの「一分地頭」を輩出したり、広範囲にわたる所領を保持する孕石氏が分流するなどしたりして、惣領家は痩身状況に陥っていく。しかし、惣領家が庶家に所領を分配することは、この時期の御家人の慣習でもある。この全国的な慣習に対する打開策を講ずることができなかった鎌倉幕府は、やがて御家人から見捨てられてしまうのである。

室町幕府から正式に「原田荘内」の「地頭職」（貞和２年の『足利直義下文写』）に任命された原氏（孕石氏）は、庶家とともに原田荘の荘園侵略をさらに押し進めていった。「応安の半済令」による兵糧料所の設置、本郷以下４郷の地頭請の成立、東寺側の代官請負制の導入等を通じて原氏の荘園への侵食は更に深まった。原氏自身も、守護今川氏の家臣となって保護を受ける一方、「中遠一揆」を結成するなどして、国人領主へと着実に勢力を伸ばしていった。このころになると、原田荘に関する荘園領主側の記録がみえなくなることから、原田荘は国人領主原氏によって完全に蚕食されたものと思われる。そして、今川氏の勢力伸張を恐れた室町幕府によって、守護が斯波氏に代わると、原氏は反斯波勢力の中心的存在となる。

しかし、斯波氏が応仁・文明の大乱で後退すると、今度は今川本宗家が巻き返しをはかって遠江国に手を伸ばしてきた。今川氏親の後見人である北条早雲率いる今川軍が、東遠江の有力国人横地氏・勝間田氏を討ち滅ぼしたのは、文明８（1476）年のことである。そして、遠江国の回復の最終目標は原氏攻略に向けられた。明応３（1494）年、今川軍率いる北条早雲は、原氏に組する石谷氏の美人ヶ谷城、滝氏の滝ノ谷城、松浦兵庫助の倉真城、川井氏の松葉城等を相次いで落とし、国人領主原氏の本拠地高藤城（殿谷城）を攻め落としたのは明応６（1497）年のこととされている。この時、原氏ゆかりの長福寺や円通院も彼らの乱入によって灰燼に帰している（『円通松堂禅師語録』）。

明応７（1498）年11月13日の『今川氏親判物』によると、「去年原要害依抽忠節、為其賞宛行之了」ということで、孕石殿（行重カ）が遠江国山名郡の知行を宛行なわれている。『原・孕石系図』の孕石行重の註記に「増善寺殿（今川氏親）遠州御入国始、御忠節申証拠数通有之」とあることからも、この「原要害」（高藤城か本郷城か）の攻防戦において孕石行重は原氏一族であるにもかかわらず、敵方の今川軍に参陣し戦功を遂げているのである。

一方、孕石氏に裏切られたうえに「原要害」を落とされた原本宗家は武田方に付いたために、最終的には徳川家康によって本郷館を追い出され、同族原氏を頼って安芸国竹原へと落ちのびた。

孕石氏は今川氏と婚姻を通じるなどして（行重・光尚父子２代にわたって今川氏親の娘を娶っている）、譜代の重臣の地位を手に入れている。今川氏親・氏輝・義元３代に仕えた孕石行重・光尚親子は数々の戦功をあげることで、何度も知行を与えられていることが、今川家の発給文書によって確認することができる。また、孕石光尚の子元泰にいたっては、今川義元から偏諱（「原・孕石系図」の元泰の註記に「義元御字被下」とある）を賜っている。その後、孕石元泰は今川本宗家没落により、今度は武田信玄・勝頼親子に仕え、最後は高天神城の戦いで囚われの身となり、徳川家康の勘気をこうむって自害し果てた。孕石一族はその後、掛川城に入部する山内一豊に仕え、母衣の衆となって、一豊と共に土佐国へと移っていった。

写真20　孕石城跡

写真21　原殿明神社

写真22　法之脇神社

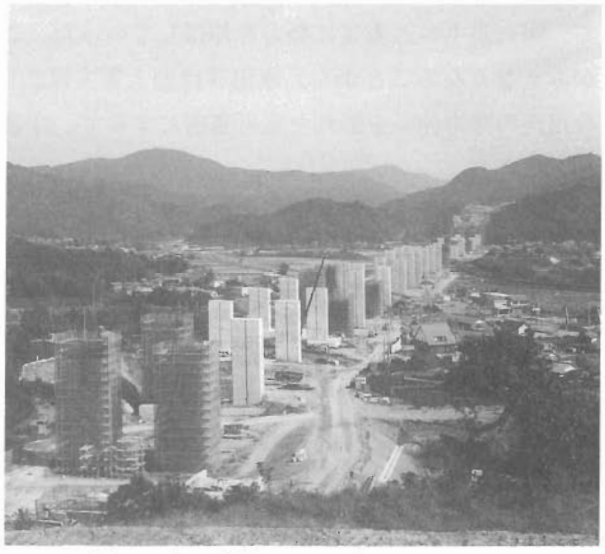


写真23　寺田地区より原野谷川上流域を望む

写真24　寺田地区より本郷方面を望む

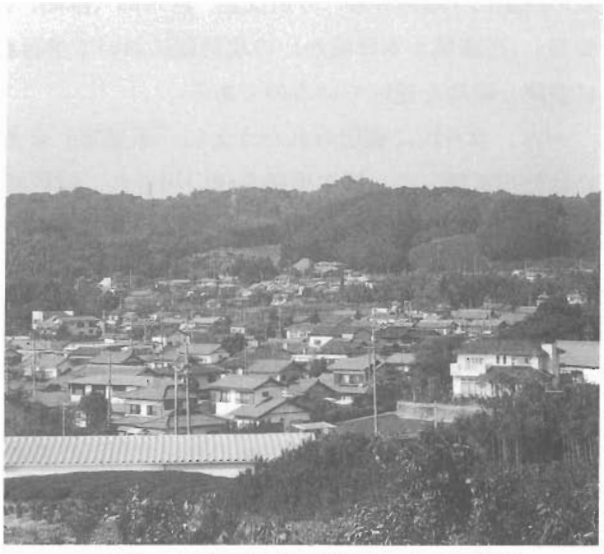


写真25　本郷地区より幡鎌地区方面を望む

4．調査成果にみる集落像

（1）集落の構造と変遷

さて、本遺跡では、発掘調査によってどのようなことがわかったのであろうか。これまで述べてきた歴史環境と合わせて考察するにも、まずは今回の調査成果をまとめる必要がある。

遺構の分布と時期

時期の区分　遺構・遺物はほぼ、中近世のもので占められる。ここでは、中近世を中世前半（13～14世紀）（時期Ａ）、中世後半（15～16世紀）（時期Ｂ）、近世初頭（概ね17世紀）（時期Ｃ）、近世後半（18世紀以降）（時期Ｄ）に大別して考える。各遺構の時期は、第３節２で出土遺物と遺構の特徴から判断しているが、これ以上の詳細な時期を識別することは難しいと考える。

建物・施設跡の分布と時期　遺構の多くは建物・施設跡の柱穴である。第３節２であげたように、建物・施設は、その分布から北縁部（①群）、北東部（②群）、南東部（③群）、北西部（④群）に群別して捉えることができる。一方、時期Ａ以降、時期Ｂ、時期Ｃといった時期判断の違いが存在する。

④群には、時期Ｂと時期Ｃの建物・施設跡がある。時期Ｃと判断した建物跡（SH23～26）は、他と全く異なる特徴をもつ。柱穴は大きく、石が検出される場合が多い。建物の規模も大きく、その軸は真北より北西に傾く。建築の際に行われたと考えられる古寛永の埋納行為も確認でき、近世前半（時期Ｃ）において建て替えられていった建物群であるという判断に問題はないと考える。

一方、SH29・30は、建物・柱穴の規模・方向の特徴が全く異なる。柱穴・建物は小さく，建物方向は方位（東西南北）とほぼ一致する。出土遺物から時期Ｂ以降と判断でき、さらに近世前半の建物跡（SH23～26）とは異なる特徴をもつことから、中世後半（時期Ｂ）に特定して問題ないと考える。

③群のSH11・12も時期Ｂと判断している。建物の方向・規模や柱穴の特徴がSH29・30（④群、時期Ｂ）と類似しており、この判断に問題ないと考える。一方、①・②群の建物跡は時期Ａ以降という判断にとどまっているが、建物の方向・規模、柱穴の規模などは時期ＢのSH11・SH29などと同様である。

①・②群の建物跡であるSH01・08・09・10は、山茶碗中心の出土遺物を根拠に時期Ａ以降と判断している。しかし、山茶碗は本遺跡で圧倒的に多い出土遺物である。中世後半・近世の遺構からも多く出土し、水・土砂の流入や整地、柱穴・土坑の掘削・埋め戻しに伴った多くの山茶碗片の移動が想定される。SH11・12などは、より新しい時期の遺物も出土しており、その時期を優先して判断している。しかし、柱穴は遺物出土数が少なく、中世後半の柱穴でも数点の山茶碗片しか出土しないという場合も想定される。すなわち、時期Ａ以降と判断できた建物跡は、時期Ａの可能性もあるが、遺構の特徴などから時期Ｂの可能性もあると考える。なお、このような問題は施設跡についてもいえる。

このような中で、SH03だけは軸が他と全く異なっている。山茶碗のみの出土である一方、時期Ｂであるとする根拠に欠けており、時期Ａである可能性が他より高いと考えられる。

その他の遺構について　人為的な遺構としては、建物・施設跡以外に集石土坑、火を使用した跡、貯蔵施設、トイレ施設、井戸および周辺施設をあげることができる。

集石土坑と火を使用した跡は、山裾にあたる遺跡の南東縁に分布する。集落の周縁の山寄りで行われた行為の跡である。火葬跡および墓である可能性もあるが、骨や副葬品の出土はなかった。行為の具体的内容を示すには根拠がなく、集石土坑と火の使用が関連したものであるかもわからない。時期についても、出土遺物から時期Ａである可能性もあるが、それ以降のものである可能性も否定できない。

貯蔵施設、トイレ施設、井戸および周辺施設については、出土遺物などから時期Dであると判断できる。各遺構の性格は、名称のとおりである。とくに竹網籠を伴う貯蔵施設は、農作物・食物の貯蔵施設である可能性が高いと判断できる。

集落の変遷（第49図）

中世前半（時期A）　SH03など建物跡の一部、集石土坑、火の使用跡は時期Aの可能性もある。しかし、明確に時期Aといえる遺構はない。一方、本遺跡からは山茶碗が圧倒的に多く出土している（第8表）。このことは、本遺跡に中世前半の人々の営みが展開していたことを明らかに示すものと考える。

第49図に、山茶碗の出土傾向を示した。これによると、調査区中央の谷部に山茶碗集中範囲があり、時期B・Cの建物跡群がある②～④群と重なる。一方、時期Aの建物跡を含む可能性がある①群は、集中範囲の北に外れる。以上のように、山茶碗の出土は調査区中央の谷に集中し、同時期の建物跡とは重ならない。したがって、時期Aの建物群（集落）はSH03以北の広い平坦部に展開しており、集落の端にあたる小谷部（本調査区）は、器物の集積・廃棄場であった可能性も考慮できる。

以上のように考えると、火を使用した跡や集石土坑が時期Aであるならば、これらは集落の端もしくは外側で行われた行為の跡ということになる。さらに、山茶碗等の集積・廃棄場所に近いこと、丘陵寄りにあることも、その性格に関連するのかもしれない。ただし、これらの考えは多くの想定を前提としたものであり、根拠をもって具体像を明示することは難しい。本当に調査区より北に時期Aの建物群が展開しているのか、本当に山茶碗集中範囲に重なる時期Aの建物がないのか（建物・施設を復元できない柱穴も多い。）、本当に火を使用した跡や集石土坑は時期Aの遺構なのかなど、今回の調査成果だけでは明らかにできない問題も多い。

なお、出土遺物からみたこの時期の集落の特徴については、後述する。

中世後半（時期B）　第2包含層や山茶碗集中範囲の存在から、この時期までに、調査区中央の谷地形がある程度まで埋まっていったと推測できる。また、谷に集中するような遺物の出土状況は認められなくなる。ただし、谷地形の中央筋に建物などを設けることはしていない。浅くなっても谷として存在したと考える。

この時期までに、多くの掘立柱建物や柵などの施設がつくられるようになる。③群（南東部）に1棟、④群（北西部）に1～2棟の建物が建てられ、②群（北東部）にも1～2棟があった可能性がある。さらに、時期A同様、①群（北縁部）より北側にも建物群が広がっていた可能性はある。

該当する各建物跡をみると、建物の規模や柱間は厳密に統一されたものではなく、全体的に強固であるとは言えないものである。しかし、建物の軸を概ね方位（東西南北）に近似させているという点は、SH11以外で共通している（SH11は地形に合わせている）。一方、柵などの施設跡も方位に近似した方向で、建物に付随するように設けられている。建物と谷地形との境界として設けられたものや、建物と調査区東側の丘陵との境界（対土砂崩れか？）として設けられたものがあるようにみることもできる。

近世前半（時期C）　建物・施設は④群（北西部）に限られるようになる。谷部の埋没がすすみ平坦部が確保できるようになった一方で、崩落の影響の強い丘陵寄りを避けたのであろうか。

建物の方向・規模・構造にも変化が認められる。規模は短辺4～7m、長辺は5m以上、10mを超える建物もあらわれる。建物の方向は地形に合わせたためか、北より西に傾くようになる。

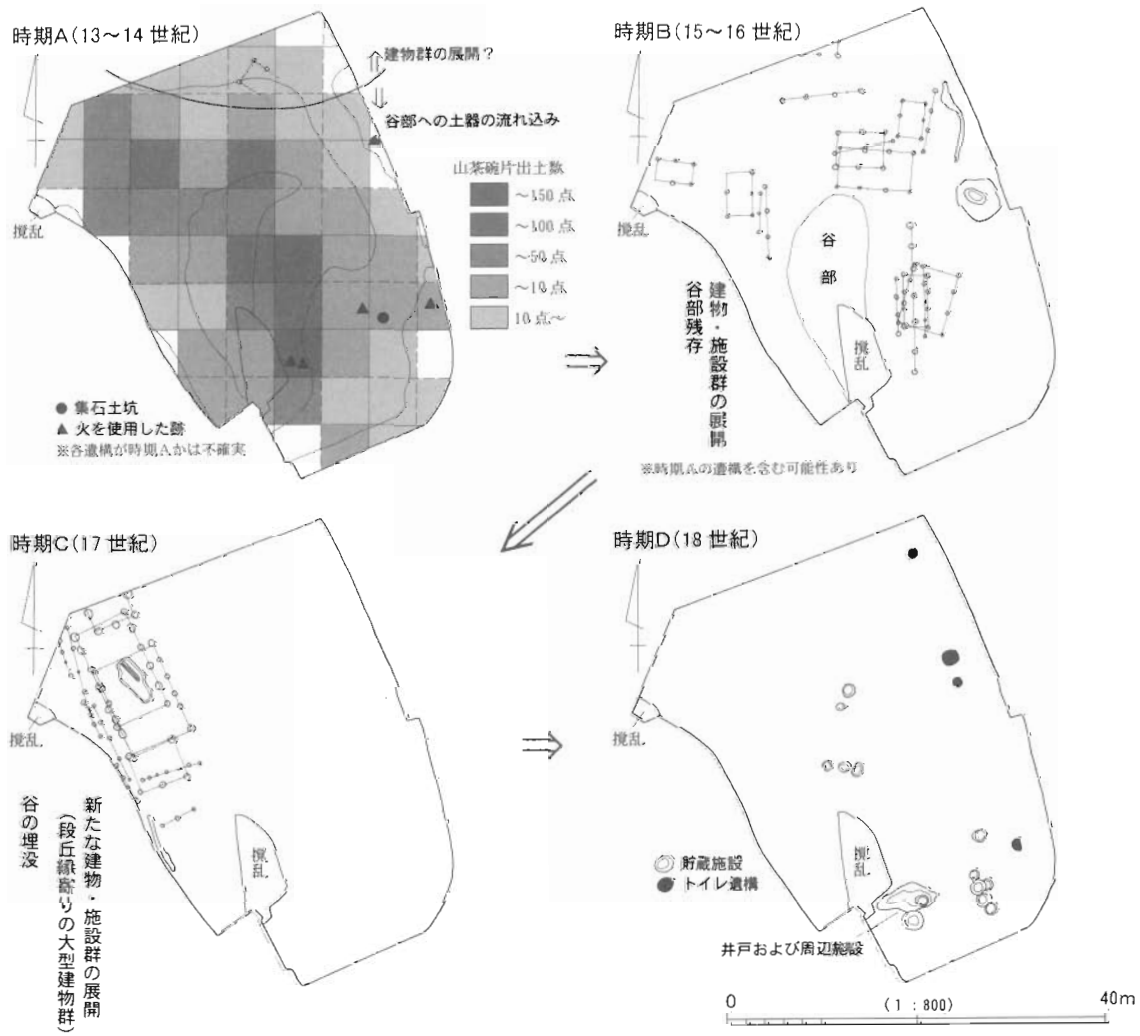
柱穴は大きく、複数の石が残るものが多い。中世の建物とは異なる、変化した基礎構造を思わせる。ただし、石場立であると判断できるものはない。そもそも、18世紀初頭には掘立柱建物と石場立建物が併存、18世紀前半以後にはほとんどが石場立建物になるという各遺跡の状況をみる（足立1996）と、時期Cに石場立建物を認めることは難しい。なお、SF30も建物構造の変化を示している可能性がある。

柵などの施設についても、④群だけになる。建物の西側および南側に柵状の施設が設けられており、とくに西側のSH16～20は、建物に付随するというよりも、建物群全体に対して設けられたものとして捉えることができる。平坦部（集落）と低地（川）との境界を意識して、段丘状平坦面の落ち際に設けられたものと把握でき、このような施設は先の時期にはなかったものである。

近世後半（時期D）　貯蔵施設、トイレ施設、井戸および周辺施設をあげることができる。

井戸は調査区南隅に位置し、丘陵からの水を利用したものと考えられる。貯蔵施設は調査区中央やや北に2基、調査区中央やや南に3基、調査区南東部に6基が発見されている。複数が並ぶ場合が多く、農作物（食物）を貯蔵したであろう施設を含む。一方、トイレ施設は貯蔵施設や井戸などから離れ、調査区東の丘陵寄りの3ヶ所で4基ある。これらは、中世～近世前半の建物跡とは重ならない。

これらが発見された一方、建物跡は1棟も発見されなかった。中世～近世前半に建物が建てられた場所は、農作業場（耕作地など）となり、建物がなくなったと説明することもできる。しかし、建物跡の未発見だけを根拠にして、全く建物がなかったと言い切ることはできない。先述のとおり、この時期には建物が石場立へと変化し、柱穴を伴わない基礎構造の建物跡が現れるようになる。今回の調査では、近世の遺構面を良好に検出できたわけではない。柱の基礎が残らなかったために建物跡が発見されなかったという可能性も考える必要がある。また、建物・施設跡として復元できない多くの柱穴の中に、その残存が含まれている可能性もある。



第49図　宮ノ沢遺跡の変遷

（2）出土遺物からみた集落

出土山茶碗の傾向

山茶碗出土数の集計　本遺跡からは、山茶碗片が最も多く出土している（第8表）。残存率の高さで抽出した169点の山茶碗を、産地および時期ごとに分類してみた。産地別にみると、渥美・湖西産が約39%、東遠江産が約25%、知多産が約35%、尾張産1%である。各編年研究に基づいて、時期別にみると13世紀中頃に集中することがわかる。

第8表　宮ノ沢遺跡の出土遺物数

種類別土器片出土数

	土師器	灰釉陶器	山茶碗	大型陶器（鉢・甕等）	その他の施釉陶器	磁器	カワラケ等土師質土器	総数
点数	17(1個体)	1	2520	174	450	67	602	3831
割合	(0.44)	(0.03)	(65.78)	(4.54)	(11.75)	(1.75)	(15.71)	(100)

（　）内は%

器種・時期別山茶碗出土数（一部）

	渥美・湖西					東遠江						知多			尾張	計
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ			Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ			4	6	7		
	1		1	2	3	1	2		1	2	3					
山茶碗	1	7	10	29	7	3		1	6	19	6	1	12	37	1	140
小碗						2	10									12
小皿			1	1	1				2	6	1		1	4		17
計	1	7	11	30	8	5	10	1	8	25	7	1	13	41	1	169
割合	57(33.73)					56(33.13)						55(32.54)			1(0.60)	169(100)

（　）内は%

周辺遺跡との比較　この集計結果の特徴が集落の特徴とどのように関わっているのかをみるために、同じ原野谷川流域にある中世集落跡の山茶碗の検出状況をみることにする。

まずは、原田荘域内に展開したとされる林遺跡（原野谷川中流域）である。調査報告によると、山茶碗は13世紀代の製品が最も多く検出されている。産地別では碗（総数58点）が渥美・湖西産67%、尾張産33%、小皿（総数10点）が東遠江産20%、渥美・湖西産50%、尾張産30%となる。調査担当者も述べているとおり、集落が遠江にあるにもかかわらず、在地性の強い東遠江産の山茶碗の占める割合が少なく、尾張産が以外に多いことが注目される。各窯跡の競合関係を踏まえると、渥美・湖西産および東遠江産がⅢ－2期を境に生産が減少するのに対して、尾張産や知多産が引き続き生産を継続していることと関連があることを指摘している（掛川市教育委員会1993）。

次に原野谷川下流域の領家遺跡である。同遺跡は長講堂領曽我荘内に位置するものであるが、原田荘の膨大な関係史料群に比べて、曽我荘に関する荘園関係史料はわずか数点にしかすぎず、その意味でも、発掘調査および刊行された報告書が貴重な資料になる。報告書によると、遺跡調査で出土した山茶碗は河道や水田耕作土から検出されたものが大半であり、そのうち産地および製作時期の明確な山茶碗（小碗・小皿を含む）が150点である。時期別では、12世紀前半が39%、12世紀中頃が9%、12世紀後半が

13%、13世紀前半が39%であり、それ以降の山茶碗の検出量はほとんどみられない。産地別では、時期によってかなりの増減がみられるが、トータルでは渥美・湖西産が62.1%、東遠江産が31.1%、知多を主体とする外来系が6.8%である。渥美・湖西産は4時期すべてにわたって過半数を占めており、安定した主要供給地とされている。また、林遺跡と比べると、外来系が少ないのに反して東遠江産の率が伸びている。もっとも、東遠江産は時期による増減があり、12世紀前半～中頃に比べて12世紀後半では半減し、13世紀前半になると再び増加する傾向が認められる。これらについて報告書では、「生産地の動向に呼応して、消費活動が変化していることを示すものと考えられよう」としている（静岡県埋蔵文化財調査研究所2001）。

原野谷川は太田川と合流して遠州灘に注ぐが、その河口域に展開したのが元島遺跡である。弥生時代などとの複合遺跡であるが、中世集落も発掘調査され、福田湊に関連した集落と推定されている。同時代の多くの土器は河川堆積層内や流路内から検出されたものである。報告書では、山茶碗496点が紹介されている。その内訳は、産地別では渥美・湖西産が53%、東遠江産が1.6%、外来系は46%（瀬戸産12%、常滑産31%、尾張産3%）である。渥美・湖西産や外来系の数値が高いのは、太田川や原野谷川流域沿いの近隣集落のさまざまな物資の集散地・港としての元島集落の社会的な位置づけを示すものである。時期別では、比率の高い数値順に13世紀前半が25.8%、12世紀前半が19.8%、12世紀後半が14.1%、12世紀中頃が11.9%で、俯瞰すると12世紀前半から13世紀前半にかけて比較的集中する（静岡県埋蔵文化財調査研究所1999）。

周辺遺跡との共通点　以上、原野谷川の中・下流域に展開する4遺跡の出土山茶碗の産地別・時期別の動向を調べてみると、いくつかの共通点をあげることができる。第1に、渥美・湖西産の占める割合がどの遺跡でも大きいことである。ちなみに、森町睦実にある奥戸綿遺跡からも多くの山茶碗が出土している。産地別にみると、渥美・湖西産が9割を優に超え、他は東遠江産・知多産がわずかにあるだけにすぎない（静岡県埋蔵文化財調査研究所2004）。

渥美古窯跡群は12世紀中頃から後半にかけて量産体制を迎えるが、13世紀前半には激減する。それに対して湖西古窯跡群は、13世紀後半に至るまで生産が確認されている。各遺跡の渥美・湖西産の出土状況は、生産地の動向に符合するものであり、おそらく海路から元島遺跡近辺に搬入された後、太田川や原野谷川もしくは隣接する陸路を利用して、各遺跡へと運び込まれたものと思われる。

第2に、いずれも中遠江にあるにもかかわらず、東遠江産の比率が少ないことである。掛川市東部、逆川上流域の牛岡遺跡は、佐夜峠一つ隔てて東遠江（金谷）の古窯群にいける場所にあり、報告にある山茶碗（360点）の9割以上を東遠江産が占めている（静岡県埋蔵文化財調査研究所1995）。一方、清ヶ谷古窯跡群が近距離にあるにもかかわらず、元島遺跡では東遠江産が極端に少ない。各産地の生産量・流通背景・流通範囲、各集落の社会的位置を総合して考える必要があるだろう。なお、宮ノ沢遺跡は、丹間～庄司の峠を一つ隔てれば東遠江（金谷）にいける場所にあるが、山間部を潜り抜けるような道になる。たしかに東遠江産が周辺遺跡よりも高い割合を示しているが、その理由を具体的に明示することは難しい。先述の地理的要因のほかに、原氏一族による新たな原野谷川上流域の開発などといった、社会状況についても考慮する必要があるだろう。

第3に、知多産や尾張産などといった外来系についてである。先にあげた多くの遺跡で、これらは30%～40%と比較的高い率を占めている。これは、渥美・湖西産と同様のルートによって供給されていたためと考えられる。しかし、領家遺跡だけは極端に少ない。これらの相違は、河川・陸路による流通が全体的に一様に続けられたわけではなく、原一族と祖を同じとする久野氏（袋井市内の太田川流域沿い）や原一族から分かれた向笠氏（磐田市北東部の太田川沿い）の支配領域の在り方、各生産地の動向、各集落（消費地）の性格などが複雑に関連していたことを示すものと考える。

遺物からみた集落の変遷と特徴

山茶碗以外の遺物　山茶碗以外の出土数は第8表のとおりであるが、いずれも山茶碗に対して少ない出土である。また、山茶碗も同様であるが、大半が小破片であり、遺構に伴うことが明らかな状態で出土したものはほとんどない。しかし、集落の評価において重要な遺物も含まれている。本遺跡の集落について、先述してきた山茶碗による評価、さらに山茶碗以外の遺物による評価を含めて、その変遷と特徴を考えておきたい。

宮ノ沢集落のはじまり　宮ノ沢遺跡においては、中世前半に集落の営みがはじまっていることは明らかであろう。ただし、その集落の開始時期については、詳細な時期の特定は避けるべきと考える。12世紀代以前の山茶碗や灰釉陶器も出土しているが、出土量は非常に少ない。器物の伝世・流通の問題もある。13世紀中頃を中心とする集落が、宮ノ沢集落のはじまりであるという程度にしておきたい。

今回の山茶碗出土量は、ある程度の規模を有する集落であったことを示すものと考える。ただし、今回の調査区は遺跡の一部にすぎず、出土量の多さと出土状況から、集落の端にある器物の集積場所（廃棄などの場所）であった可能性も指摘できる。少なくとも、この時期の建物・施設跡を明示することはできず、集落の具体像をみることはできなかった。なお、この時期における遠江の集落跡の特徴としてもあげることができるが、14世紀代の遺物は激減する。

山茶碗と同時期の陶磁器として、渥美・湖西産の鉢・壺・甕、舶載の磁器、古瀬戸陶器が出土している。磁器は少数の碗の破片だけであり、遠江の他の中世集落跡でもよくみられる程度の出土であるといえる。一方、古瀬戸陶器についても、他の遺跡と同様に出土数は少ない。しかし、古瀬戸前期の瓶類（第39図109・110）の出土が注目に値する。このような器種は東国においては威信財、一種のステイタスシンボルであるとされる。地方の消費地では領主層・名主層クラスの館跡にあるような特殊品であるだけに、本遺跡の社会的位置づけに大きな一要素を加味するものである。なお、森町の奥戸綿遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所2004）では、一般的に多くみられる中世前半の集落の遺物群が出土しているが、山茶碗、土師質土器、渥美・湖西産の鉢、渥美産の甕、舶載磁器が認められる一方、湖西産の壺甕類、古瀬戸陶器の出土は認められていない。

カワラケの出土率から、格式の違いを伺うことができるとされ、ハレの場で使用されることの多いカワラケの比率が高いことは、社会的地位の優位性を示していると考えられる。中世前半の宮ノ沢遺跡では、カワラケの出土は少なく、格式としては優位にあったとは考え難い。ただし、谷間ではじまった集落にあって、カワラケの利用度、カワラケの流通度があまりなかったとも考えられる。

集落の存続　その後の時期においては、遺物全体の出土数が減る。しかし、近世に至る各時期の土器等が出土しており、近世に至るまで断続的に集落が営まれたことがわかる。なお、遺物出土量の減少は、単に集落の衰退を示しているとは限らない。先述のとおり、中世前半では廃棄場などであったため、山茶碗の出土量が多くなったと考えることができる。今回の調査区の場所が広い集落の中でどのような場所であったのか、その変遷が遺物出土数に影響している可能性もある。

中世後半でも、少ないながらも遺物の出土が認められる。また、この時期と判断できる建物・施設跡が発見されており、この時期にも集落が営まれたことが指摘できる。さらに、14世紀の古瀬戸瓶類など注目される陶器の出土がある。威信財が遠江にあって名主クラスの在地領主層にまで浸透していく中、この集落に彼らに関係する建物・施設があった可能性を指摘することができる。舶載の磁器についても、中世前半と同様、少数ながら破片が出土している。もちろん、当然ながら擂鉢・皿類・碗類といった日常生活品の方が多く出土している。

大窯期の瀬戸・美濃陶器や志戸呂陶器、カワラケなどの近世遺物も出土している。建物・施設等の著しい変化を伴いながらも、この場所が近世まで人々が営む場所となっていたことは明らかである。

5．おわりに

中世前半の宮ノ沢集落と原田荘の動向

中世前半については、多くの土器の出土が認められた一方、建物・施設などは明示できなかった。廃棄場所などといった集落の端を調査したにすぎない可能性があり、そのため、集落の具体像を探るには至らなかったものと考える。しかし、威信財的な器物をもっていたことなどがわかり、中世前半の宮ノ沢集落は、ある程度の規模をもつ、重要視された集落であった可能性は考慮できる。

原師清が寺田郷に居を構え、開発領主として原田荘の経営をはじめるのが12世紀後半と目されており、宮ノ沢遺跡に集落が営まれはじめた時期とほぼ一致する。この時期、原氏一族が原野谷川沿いに上流域へと手を伸ばしていき、宮ノ沢に集落を設けて、大和田地区付近一帯をも把握したのかもしれない。

原田荘の荘域を地理的にみると、本郷・細谷を中心とする原野谷川の中流域と平島などの上流域、大和田より上流へと続く山間の地域に分けて捉えることができる。宮ノ沢遺跡は大和田地区内の西隅、山間地域への入り口部分に位置する。地形的には原野谷川の急な蛇行で形成された極めて狭隘な箇所であり、対岸の法之脇神社とあわせて入り口を扼する地形上に立地する。宮ノ沢集落のはじまりについては、中世前半の原田荘をめぐる何らかの意図が背景にあり、そのため、ある程度の規模をもつ重要視される集落となっていたと考えることもできるのである。

原氏・孕石氏の動向と宮ノ沢集落の変遷

中世後半以降の遺物も少ないながら出土しており、本遺跡における人々の営みは近世以降まで続けられていったことがわかる。さらに、遺構の検討によって、次のような変化をみることもできた。

中世前半（13～14世紀）：集落のはじまり。本調査区内は器物の集積・廃棄場として機能か。
中世後半（15～16世紀）：本調査区内にも建物・施設が設けられるようになる。
近世前半（概ね17世紀）：それまでと異なる配置・構造の建物・施設が設けられるようになる。
近世後半（18世紀以降）：掘立柱建物はなくなるが、貯蔵施設などを含めた営みが継続される。

これらは集落の極一部を調査した結果にみる変化であり、そこから集落全体の変化を具体化することは難しい。ただし、集落全体の変化と関連したものである可能性は決して低くないと考える。なお、近代以降、貯蔵施設などを埋め戻して、この場所の活用が続けられていったことも示すことができる。

先に述べたが、中世後半の周辺地域をめぐる社会変動は激しいものであった。14世紀中頃、南朝衰退に伴って原氏の地頭職権が弱まり、一分地頭が乱立する。またこの時期には、原氏から別れた孕石氏が原野谷川上流域を有するようになっている。15世紀後半、応仁の乱の影響もあって原氏一族が原田荘を押領、国人領主としての地位を確立していく。15世紀末～16世紀初頭、原氏は今川・北条氏によって攻め落とされ、孕石氏は原氏を裏切り戦功をあげる。16世紀後半、孕石氏が仕える武田氏と徳川氏が対立、高天神城の戦いでは大和田地区も有していた孕石元泰が囚われて自害する。

今回は残念ながら、集落が変化する時期の詳細を特定することは困難であり、また集落の一部の調査であり、集落全体の変化についてはみることができない。したがって、上記の社会変動と宮ノ沢集落の関連を具体的に結びつけることは難しい。しかし、宮ノ沢集落は孕石地区の南、原野谷川の流れが蛇行しながら南から東に変わる地域境界的な位置にあり、集落のはじまりがそうであったように、孕石氏や原氏一族などの動向の影響を比較的強く受けてきた可能性も否定はできない。もちろん、その社会変動は宮ノ沢集落周辺だけに完結するものではないと考えられ、より広い地域を含めた検討が必要になることはいうまでもない。

本遺跡の現地調査および本報告の作成にあたっては、次の方々に有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。（敬称略、五十音順）

河合　修　　清水　尚　　柴田　稔　　松井一明　　掛川市教育委員会

参考文献

愛知県陶磁資料館　1988　企画展『静岡のやきもの』

浅川・箱崎編　2001　『埋れた中近世の住まい』奈良国立文化財研究所シンポジウム報告　同成社

足立順司　1994　「消費地出土の初山焼・志戸呂焼－原川遺跡を中心に－」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集

1996　「町屋の構造と階層」　『水井遺跡・清水遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所

1998　「遠江三ツ沢窯とその背景」　『楢崎彰一先生古希記念論文集』　真陽社

有光友學　1998　「今川氏家臣『孕石氏系図』」　『戦国史研究』第35号

石田平八朗　1980　「掛川字名」　『ふる里かけがわ』第３集　掛川市教育委員会

石野武文　1982　「中世時代の掛川」　『中世時代の掛川』　掛川市教育委員会

1987　「原泉地名めぐり」　『ふる里かけがわ』第７集　掛川市教育委員会

1994　『原泉地区史跡めぐり－武田勢の名残りのあとを尋ねる－』

岩名建太郎　2004　「銭の祭祀」　『中世の祭祀と信仰』資料集　静岡県考古学会

内山真龍　1969　『遠江国風土記傳』　歴史図書社

江戸遺跡研究会　2001　『図説　江戸考古学研究辞典』　柏書房

小笠郡教育會（静岡縣）　1915　『静岡縣小笠郡誌』

荻野繁春　1992　「壺・甕はどのように利用されてきたか」　『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集

小野正敏　1995　「出土陶磁よりみた15・16世紀における画期の素描」　『ＭＵＳＥＵＭ』№416　東京国立博物館

2000　「遠江の出土陶磁器組成の特徴－貿易陶磁を中心に」　『横地城跡　総合調査報告書』資料編　菊川町教育委員会

尾野善裕　1997　「中世食器の地域性　[４]東海・濃飛」　『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

小和田哲男　1985　「殿谷白と国人領主原氏の興亡」　『殿谷城址他遺跡　発掘調査報告書』　掛川市教育委員会

小和田哲男・本多隆成　1978　『静岡県の歴史－中世編－』　静岡新聞社

掛川市教育委員会　1984　『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』

1985　『殿谷城址他遺跡　発掘調査報告書』

1993　『林遺跡　発掘調査報告書』

1998　『松葉城址－（主）焼津森線地方特定道路改築工事に伴う確認調査－』

掛川市史編纂委員会　1968　『掛川市誌』

掛川市史編さん委員会　1982　「遠江国吉岡邑風土記書上帳」　『掛川市史資料集』近世編（ニ）

1984　『掛川市史』中巻

1997　『掛川市史』上巻

2000　『掛川市史』資料編　古代・中世

金谷町教育委員会　1991　『静岡県金谷町　上志戸呂古窯跡発掘調査報告』

菊川町教育委員会　2000　『横地城跡　総合調査報告書　資料編』

静岡県　1989　『静岡県史』資料編４．古代

1989　『静岡県史』資料編５．中世一

1992　『静岡県史』資料編６．中世二

1994　『静岡県史』資料編７．中世三

1994　『静岡県史』通史編１．原始・古代
1997　『静岡県史』通史編２．中世
静岡県教育委員会　1981　『静岡県の中世城館跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991　『原川遺跡Ⅳ』
1995　『牛岡遺跡Ⅰ・頭地遺跡』
1996　『水井遺跡・清水遺跡』
1999　『元島遺跡Ⅰ』遺物・考察編１-中世-
2001　『領家遺跡Ⅱ・梅橋古墳』
2004　『森町睦実の遺跡』
柴田又一郎　1982　「思い出の記」　『ふる里かけがわ』第４集　掛川市教育委員会
鈴木一有　2002　「古墳時代前期にかんする諸問題」　『恒武西宮遺跡』　浜松市文化協会
鈴木敏則　2002　「西遠江の古式土師器－堤町様式－」　『東海の路』平野吾郎先生還暦記念論文集
鈴木正弘　1980　「西之谷川流域の古地名について」　『ふる里かけがわ』第３集　掛川市教育委員会
1980　「原野谷川上流の古地名について」　『掛川市の古地名考』　掛川市教育委員会
中世土器研究会　1995　『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社
塚本和弘　1994　「皿山古窯跡群の成立と終末について」　『地域と考古学』　向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
東北中世考古学会　2001　『竪穴と掘立　中世遺構論の課題』東北中世考古学叢書２　高志書院
戸田芳実・峰岸純夫　1990　「中世とはどういう時代か」　『世界陶磁全集』３日本中世　小学館
中嶋郁夫　1997　「東海東部の古式土師器」　『静岡県史研究』13　静岡県
中野晴久　1994　「赤羽・中野「生産地における編年について」」　全国シンポジウム『中世常滑焼をおって』資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所
永原慶二編　1995　『常滑焼と中世社会』　小学館
中村育男　1997　『掛川誌稿　全翻刻』
楢崎彰一　1990　「中世の社会と陶器生産」　『世界陶磁全集』３日本中世　小学館
林　隆平　1979　『ふるさと探訪－掛川の古城址』
原　義一　1960　『原氏家譜私考』　（原田和編『遠江資料集』所載　美哉堂）
兵庫県埋蔵銭調査会　1996　『日本出土銭総覧』1996年版
藤澤良祐　1994　「山茶碗研究の現状と課題」　『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター
1996　「中世瀬戸窯の動態」　『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界－その生産と流通－』資料集　瀬戸市埋蔵文化財センター
2000　「遠江出土の瀬戸美濃焼」　『横地城跡　総合調査報告書』資料編　菊川町教育委員会
2001　「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通－研究の現状と課題－」　『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品－東アジア的視野から－』資料集　瀬戸市埋蔵文化財センター
松井一明　1989　「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」　『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』　静岡県教育委員会
1993a「遠江における山茶碗生産について」　『静岡県考古学研究』№25　静岡県考古学会
1993b「東海地域のかわらけ編年について」　『久野城Ⅳ』　袋井市教育委員会
1995　「古墳時代前半期土器」　『坂尻遺跡』遺物・総括編　袋井市教育委員会
村井章介　1991　「東寺領遠江国原田・村櫛両荘の代官請負について」　『静岡県史研究』第７号　静岡県
1992　「遠江国原田庄の地頭支配－孕石文書寸考－」　『静岡県史』資料編６中世ニ　（「静岡県史の窓」所載）
横田賢次郎・森田勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」　『九州歴史資料館研究論集』４

主な原田荘関係史料　※年『文書名』出典、（　）：『静岡県史』資料編の巻および文書No.、『掛川市史』資料編の文書No.

承平年中（931～938）　『和名類聚抄』　（古代915、81）
天慶７（944）年　『長福寺鐘銘』　（古代2、85）
安元２（1176）年　『尊卑文脈』　『新訂増補国史大系』　（古代1893、－）
元暦元（1184）年等　『吾妻鏡』　『新訂増補国史大系』　（中世一192等）
弘長３（1263）年　『原田荘細谷村正検取帳案』　東寺百合文書こ五四（二）　（中世一1118、７）
文永２（1265）年　『遠江国三代起請地并三社領注文案』　教王護国寺文書　（中世一1140、８）
弘安元（1278）年　『亀山上皇院宣案』　東寺百合文書レ一四　（中世一1285、11）
正応３（1290）年　『後深草法皇院宣案』　東寺百合文書ゐ五　（中世一1452、13）
永仁３（1295）年　『関東下知状案』　東寺百合文書こ五四　（中世一1486、15）
正中２（1325）年　『最勝光院領荘園目録案』　東寺百合文書ゆ一　（中世一1716、17）
嘉暦２（1327）年　『大仏貞直奉書写』　内田文書　（中世一1743、－）
元徳３（元弘元）（1331）年　『原田荘雑掌・地頭和与状』　東寺百合文書こ五四（一）　（中世一1778、18）
元徳３（元弘元）（1331）年　『原忠益注進状』　東寺百合文書ウ三一　（中世一1779、19）
元徳３（元弘元）（1331）年　『関東下知状』　東寺百合文書ら三（五）　（中世一1780、20）
貞和２（正平元）（1346）年　『足利直義下文写』　孕石文書　（中世二339、16）
貞和２（正平元）（1346）年　『足利直義下知状』　東寺百合文書せ　（中世二343、17）
貞和２（正平元）（1346）年　『足利直義下知状』　東寺百合文書ら（二）　（中世二345、33）
貞和２（正平元）（1346）年　『足利直義下知状』　東寺百合文書ら（三）　（中世二346、34）
貞和３（正平２）（1347）年　『遠江国原田荘細谷郷年貢・細々物徴符』（冊子）　東寺百合文書カ四〇　（中世二372、35）
康安元（正平16）（1361）年　『実蔵去状』　東寺百合文書レ六八　（中世二625、37）
貞治元（正平17）（1362）年　『西園寺実俊施行状』　熊野速玉大社文書　（中世二662、38）
応永13（1406）年　『原頼氏書状』　東寺百合文書さ一八九　（中世二1381、82）
永享９（1437）年　『円通松堂禅師語録』一　『曹洞宗全書』　（中世二1934、126）
永享11（1439）年　『関東合戦記』　（中世二1963、－）
文安３（1446）年　『円通松堂禅師語録』一　『曹洞宗全書』　（中世二2061、140）
享徳元（1452）年　『円通松堂禅師語録』一　『曹洞宗全書』　（中世二2141、－）
長禄３（1459）年　『遠江国細谷郷未進年貢代銭支配状写』　東寺百合文書ひ八六（六三）　（中世二2342、162）
寛正５（1464）年　『幕府奉行人連署奉書案』　東寺百合文書サ　（中世二2459、51）
文正元（1466）年　『光明院尭忠書状案』　東寺百合文書サ　（中世二2513、－）
応仁２（1468）年　『光明院尭忠書状案』　東寺百合文書サ　（中世二2543、－）
応仁２（1468）年　『最勝光院方評定引付』　東寺百合文書け　（中世二2565、－）
明応３（1494）年　『円通松堂禅師語録』三　『曹洞宗全書』　（中世三193、61）
明応７（1498）年　『今川氏親判物』　孕石文書　（中世三254、64）
永正２（1505）年　『円通松堂禅師語録』一　『曹洞宗全書』　（中世三385、－）
永正14（1517）年　『醍醐寺山上堂方下行物注進状』　醍醐寺文書二五函　（中世三650、－）
天文５（1536）年　『今川義元判物』　孕石文書　（中世三1416、100）
天文８（1539）年　『孕石元尚置文』　孕石文書　（中世三1494、101）
天文12（1543）年　『孕石氏系図』　孕石元章所蔵文書　（－、97）
元亀２（1571）年　『武田信玄判物』　孕石文書　（中世四308、192）
天明４（1784）年　『遠江国吉岡邑風土記書上帳』　（掛川市史編さん委員会1982『掛川市史資料集　近世編（ニ）』）

第３章　大和田遺跡

第二東名No.96地点

第１節　位置と環境

１．位置と地理的環境

大和田遺跡は、静岡県掛川市大和田1185-6他、掛川市東部の原野谷川の上流域左岸に位置する。

原野谷川上流域では、広い沖積平野が形成されず、川は丘陵の谷間に沿うようにして蛇行している（第１章 第２図）。大和田・平島地区の原野谷川は、北に凸の弧をいくつか連続させるようにしながら、西南西へと流れる。その中で比較的緩やかな弧を描く部分があり、左岸（南側）に南北最大幅約150m、東西約600mにわたる段丘群が形成されている。本遺跡はその東端、他より高い一段丘上にある。

本遺跡は標高約146m、原野谷川より約60m高く、背後の丘陵頂上部より100m程低い。段丘上平坦面は、東西約70m、南北最大約50mである。南北と西側には、急に落ちる斜面がめぐる。東側は、南の丘陵とのつけ根にあたる。なお、平坦面の中央においては、西に下る浅い谷が観察できる。

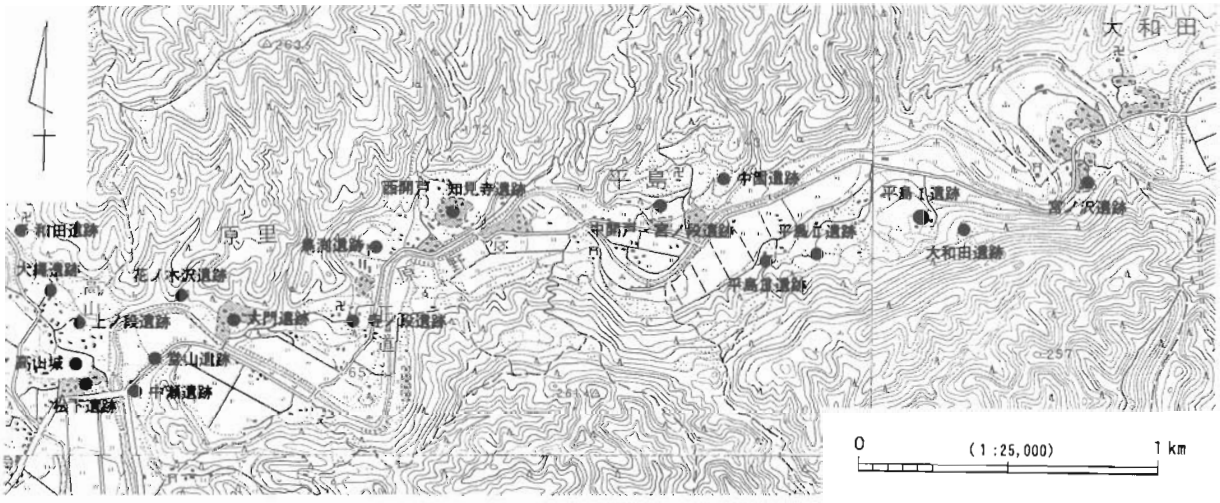
本遺跡は丘陵地帯の中にあるが、周辺の遺跡の中では比較的高い場所に立地している。したがって、河川流域への見晴らしは比較的良い方である。なお、平坦面のほぼ全体が茶畑に利用されており、多少の削平・盛土も想定できるが、大規模な地形改変を観察することはできない。

２．歴史的環境と調査歴

大和田遺跡については、今回がはじめての発掘調査である。また、今回の調査は、遺跡全体を対象としている。したがって、最初で最後の調査になるといえる。

大和田・平島の遺跡、また原野谷川上流域の左岸にある遺跡については、本書に報告のある遺跡で占められる。大和田では宮ノ沢遺跡（第２章）で、山茶碗を中心とした出土、中近世の集落跡の発見があった。本遺跡の西隣の平島Ⅰ～Ⅲ遺跡（第４～６章）でも、中近世の遺物・遺構が発見されている。

一方、本遺跡の主体は縄文時代で、平島Ⅰ～Ⅲ遺跡でも縄文の遺物が出土している。しかし、縄文時代の遺構は、本遺跡の土坑群と平島Ⅰ遺跡の竪穴住居跡だけである。第１章の第２節２で述べたとおり、より下流の右岸には、中園遺跡・上ノ段遺跡など多くの縄文時代の遺跡がすでに知られている。



第50図　大和田遺跡の位置と周辺の遺跡

第２節　調査の方法と経過

１．発掘調査の方法

本調査の区域は、段丘上平坦面の東西約46m、南北約46mを範囲とする（第51図）。確認調査などにより、本遺跡はこれよりも広がらないと判断できている。現況での標高は、約143～147mである。

発掘調査は、まず調査区を設定し、重機進入路等を設置した。さらに茶木を伐採し、作業員棟（テント）等の搬入・設置、重機による表土除去を行った。

その後、人力による表土除去および遺構面までの掘削を行った。南部分と北部分では比較的早い段階で遺構面が検出できたが、調査区の中央部では埋没した谷地形が発見され、容易に遺構面を検出することはできなかった。谷部以外では、引き続いて発見遺構の精査・検出を行った。一方、谷部では埋没状況の把握、埋没した上につくられた遺構の有無についての調査を行った。残念ながら、埋没した上での遺構は発見できなかったので、埋没土を掘削し、谷の検出および記録作業を行うことになった。

遺構検出に際しては、まず、平面プランの主軸直行方向に土層帯を設けるかプランの半分を検出し、土層断面によって覆土を観察・注記、土層断面を記録した。その上で、遺構全体の検出を行った。一方、谷は調査区西寄りに南北のトレンチを設けて掘削し、土層の観察・記録（写真・図面および注記）を行った。その後、土層の観察結果に基づいて、埋没土を掘削していった。なお、谷を検出した段階で、谷のなかにある遺構が発見された。これについても、発見後に他の遺構と同様、覆土の観察・記録等を経て検出した。なお、記録作業の内、測量・図面作成作業については委託して実施した。

遺構調査に際しては、座標に合わせた10m方眼のグリッドを調査区全体にまたがるように設定し、グリッド杭の設置を委託して実施した。遺構番号については、本報告に際して、全遺構に対して遺構種類別に新たな番号を付し直した。遺物については、遺構外出土遺物は出土地の３次元座標を計測、出土層位も記して取り上げた。ただし、表土（第54図第１層）出土遺物などは、一括化・簡略化している場合もある。遺構内出土遺物は遺構ごとを基本とし、三次元座標も計測して取り上げたものもある。

現地の記録図面は、地形測量を1/100、遺構図を1/20を基本とし、グリッドに沿って作成した。なお、測量・図面作成は委託にて実施した。遺構・景観等の現地記録写真の撮影は、６×７版（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用い、作業工程撮影用に35mm判（カラーネガ）を使用した。また、全景写真撮影および測量においては、空中写真撮影および空中写真測量を委託にて利用した。

２．発掘調査の経過

平成12年６月５日に発掘調査を開始した。調査区設定などの準備の後、７日に重機による表土除去を開始、15日に人力による作業を開始した。22・29日に基準点測量およびグリッド杭を打設、その後、遺構面検出作業および記録作業を行った。さらに、谷以外では遺構の精査・検出および記録作業を随時行っていった。９月中までに谷以外での遺構検出作業を行い、空中写真撮影を実施している。

谷については、８月から調査を開始した。まずトレンチにて掘削して土層の検討・記録を行い、９・10月に谷の検出を行った。さらに、谷検出後の発見遺構を検出した。11月上旬までに、記録作業、空中写真撮影および測量、撤収作業を行い、現地の調査を終了している。

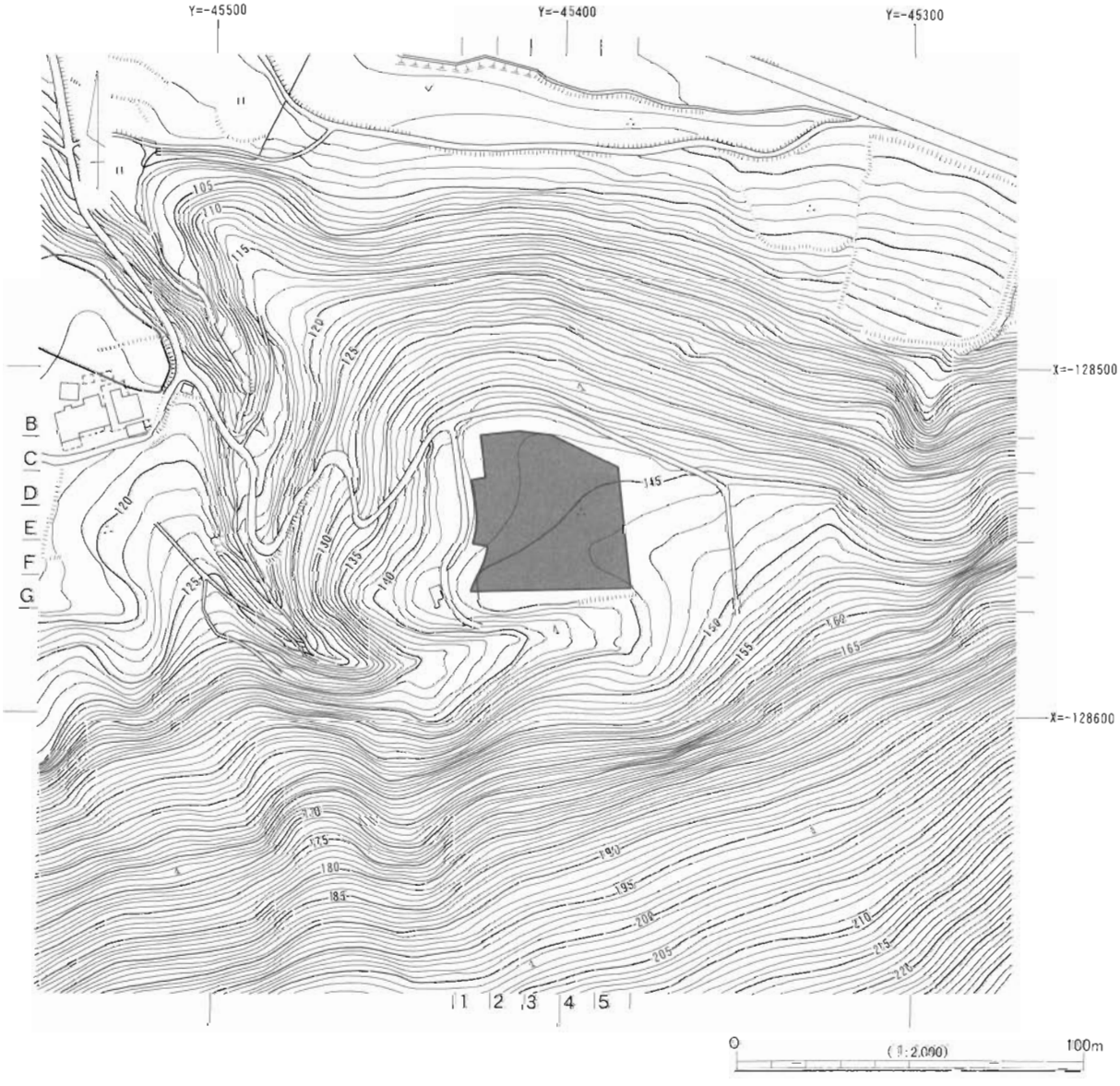
なお、測量・実測関連の作業は加藤建設株式会社、空中写真撮影は株式会社フジヤマに委託した。

3．資料整理の方法と経過

本遺跡に関わる資料整理作業および報告書作成作業は、平成14年７月から平島Ⅰ遺跡・平島Ⅱ遺跡・平島Ⅲ遺跡と同時に開始した。ただし、掛川工区内の他遺跡の資料整理・報告書作成作業、さらには他の現地調査の実施と重なることもあったため、その作業は断続的に実施していくことになった。

現地調査中および終了直後の基礎整理において、出土土器の洗浄・注記・接合、遺構図・現地写真・出土遺物の台帳の作成を実施していた。資料整理では、その残務と遺構図の修正が中心になった。

続いて、遺物の図化作業、各図面の編集・トレース作業、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。遺物写真には、６×７判（白黒ネガ）、35㎜判（リバーサル）を基本として用い、必要に応じて他種も用いた。撮影は、当研究所写真室が実施した。



第51図　調査区およびグリッド配置

第３節　調査の成果

１．全体の概要

（１）土層および地形

検出地形と基盤層　調査最終段階において検出した地形（最終検出地形）は、調査区中央に西に下る谷があり、その南北周囲に平坦面が存在するといった地形である。谷周囲の平坦面は、北西から南東に緩やかに高くなっている。この地形を形成する層（基盤層）は、砂礫の多い層で、谷筋を境にして南側は暗黄褐色、北側は黄褐色を呈する。

谷の埋没・堆積土　調査区中央の谷部は、埋没土中の出土遺物（本節２）から、縄文時代早期より前に形成され、縄文時代早～中期に大半が埋没したと判断できる。埋没土は、下から褐色土層（第54図第４層）、黒褐色土層（同第３層）、黄褐色土層（同第２層）に分けられ、第４層は縄文時代早期、第２層は縄文時代中期に堆積したものと判断できる。

表土・耕作土とした黒褐色土層（第54図第１層）は、撹乱土等とは異なり、第２層などと同様に礫を含み、縄文時代中期を中心とする遺物を含んでいた。客土や新しい整地・造成土ではなく、本来は第２層上にあった自然堆積土である可能性が高い。ただし、下部には茶畑の影響を受けていない部分もあったとは考えるが、大半では茶畑の強い影響を認めることができた。第１層から出土した遺物については、可能な限り出土地点を記録して取り上げた。ただし、出土層位としては一括して第１層（表土・耕作土）とせざるを得なかった。

平坦面の形成　谷の周囲の平坦面は、第１層直下で検出されており、茶畑などによる削平もあったと考えられる。しかし、第１層についての先の所見、さらに中世の遺構が平坦面上で検出できていることを考慮すると、削平・撹乱の度合は小さいものであったと推測できる。また、縄文時代中期までに谷の大半が埋没したとされることから、それ以降においては、最終検出地形よりも広い平坦面が形成されていたと指摘することができる。

遺構面・遺構検出面　以上から、本遺跡では最低２つの遺構面（谷埋没前と谷埋没後）がある可能性が指摘できる。しかし、谷埋没土の上面（第54図第２層上面）で遺構を検出することはできなかった。実際に遺構を検出することができた面は、最終検出の一面だけである（遺構検出面）。

（２）遺構・遺物の概要

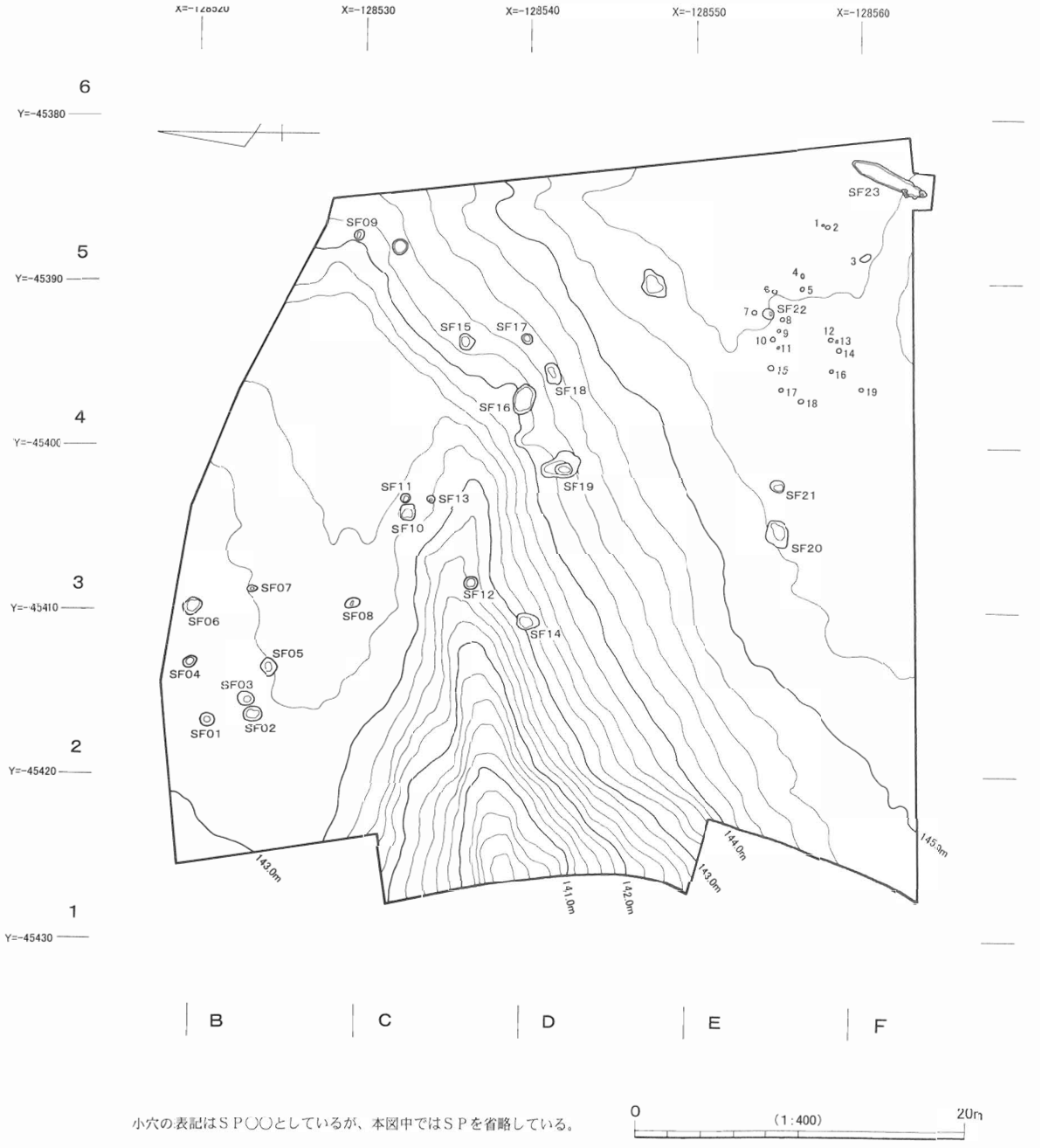
出土遺物の多くは、縄文時代の土器・石器である。そのなかでも、早期前半と中期後葉の遺物が主体である。一方、鎌倉時代の山茶碗、中世のカワラケ、刀子が少数ながら出土している。

遺構は、全て最終検出面で発見されている。その遺構には、土坑23基と小穴19基がある。

23基の土坑の内、谷部周辺に分布するSF08～SF19は、第２～４層（第54図）の下面で発見されており、縄文時代の遺構であると判断できる。また、SF01・SF20・SF22からは縄文時代の土器もしくは剥片類が出土しており、これらも縄文時代の遺構である可能性が高いと判断できる。なお、谷の南側斜面にあるSF19では、焼土が認められている。縄文時代、本遺跡で火を使用した行為があったことが想定でき、遺跡の性格を考える上で重要な要素になると考える。

北側平坦面にあるSF02～07は、層位・出土遺物から時期を明示することができない。しかし、覆土・形状の特徴は先述の縄文時代の土坑と大きく変わらない。一方、南側平坦面にあるSF23は、出土遺物や遺構の特徴から、明らかに中世の炭窯である。

炭窯の北西に分布する小穴群は、縄文時代の柱穴群であるとすると、住居跡の残存であると推測することもできる。しかし、出土遺物や層位から時期を明確にすることは難しく、性格についても明示できない。



小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。

第52図　遺構配置図

2．遺物の出土状況

遺物の出土は、ほとんどが遺構外である。谷筋が調査区の北東隅から西辺中央にかけてのびているが、これに沿って多くの土器が出土している（第53図）。なかでも、谷が深くなる西寄りで出土量が多い。第54図には、時期がわかる土器、礫、石器・剥片などについて、その出土位置を示している（遺構内出土土器は除く）。

縄文時代早期の土器群

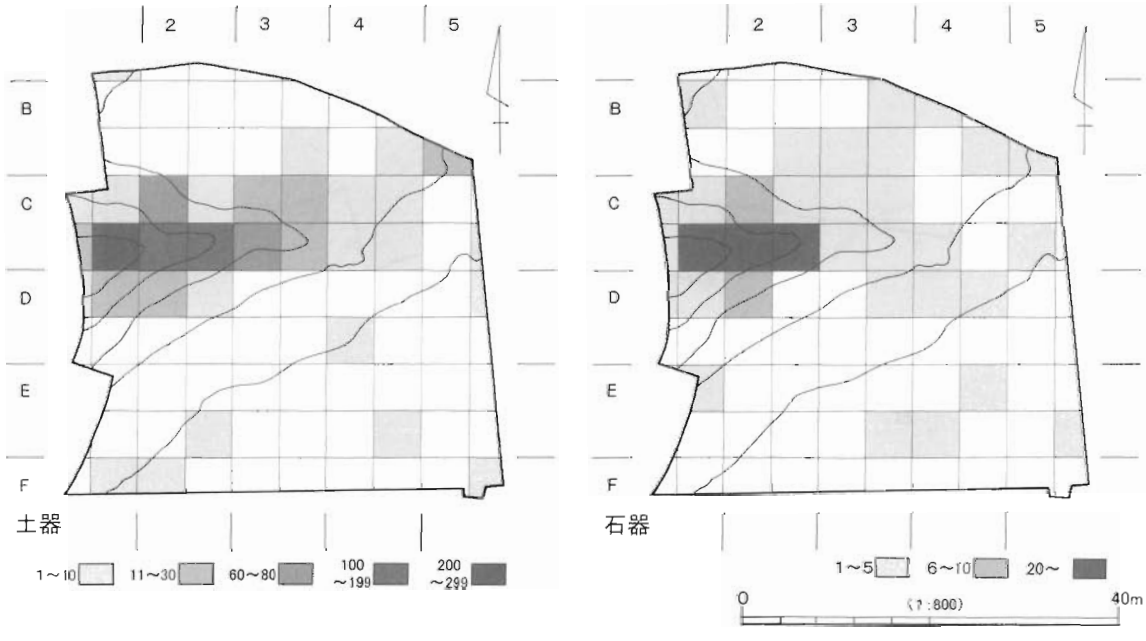
縄文時代早期の土器に限っても、谷部西寄りでの出土が多い。一方、谷の東寄りや北側平坦面寄りでも出土が認められる。出土層位（第54図）をみると、谷部西寄りの土器群は第３・４層、周辺に散在する土器群は第１・２層からの出土であることがわかる。

第３・４層は、出土土器が縄文時代早期の土器で占められており、この時期の堆積である可能性が高い。したがって、第３・４層出土の土器群は、人為か否かはわからないが、早い段階で谷部西寄りに集積され、堆積土に包含されたとすることができる。

一方、第１・２層の堆積は縄文時代中期より遡らない。よって、第１・２層出土の縄文時代早期の土器は、二次的に包含されたと判断できる。ただし、撹乱の少ない本遺跡において、第３・４層からの土器の移動を想定するには無理がある。南側平坦面のSF20でも縄文時代早期の土器が出土しており、この時期の営みが谷周囲の平坦面にも広がっていたことがわかる。第１・２層出土の縄文時代早期の土器も、本来、平坦面における営みの痕跡として残されたものであったとするのが妥当である。

縄文時代中期の土器群

第54図によると、縄文時代中期の土器の出土も、縄文時代早期の土器と同様に谷部西寄りに集中している。しかし、縄文時代早期の土器よりも集中度が高く、その集中範囲は谷部西寄りにあるものの、調査区西縁にまでは広がらない。以上から、縄文時代中期の土器出土状況については、単なる谷への流れ



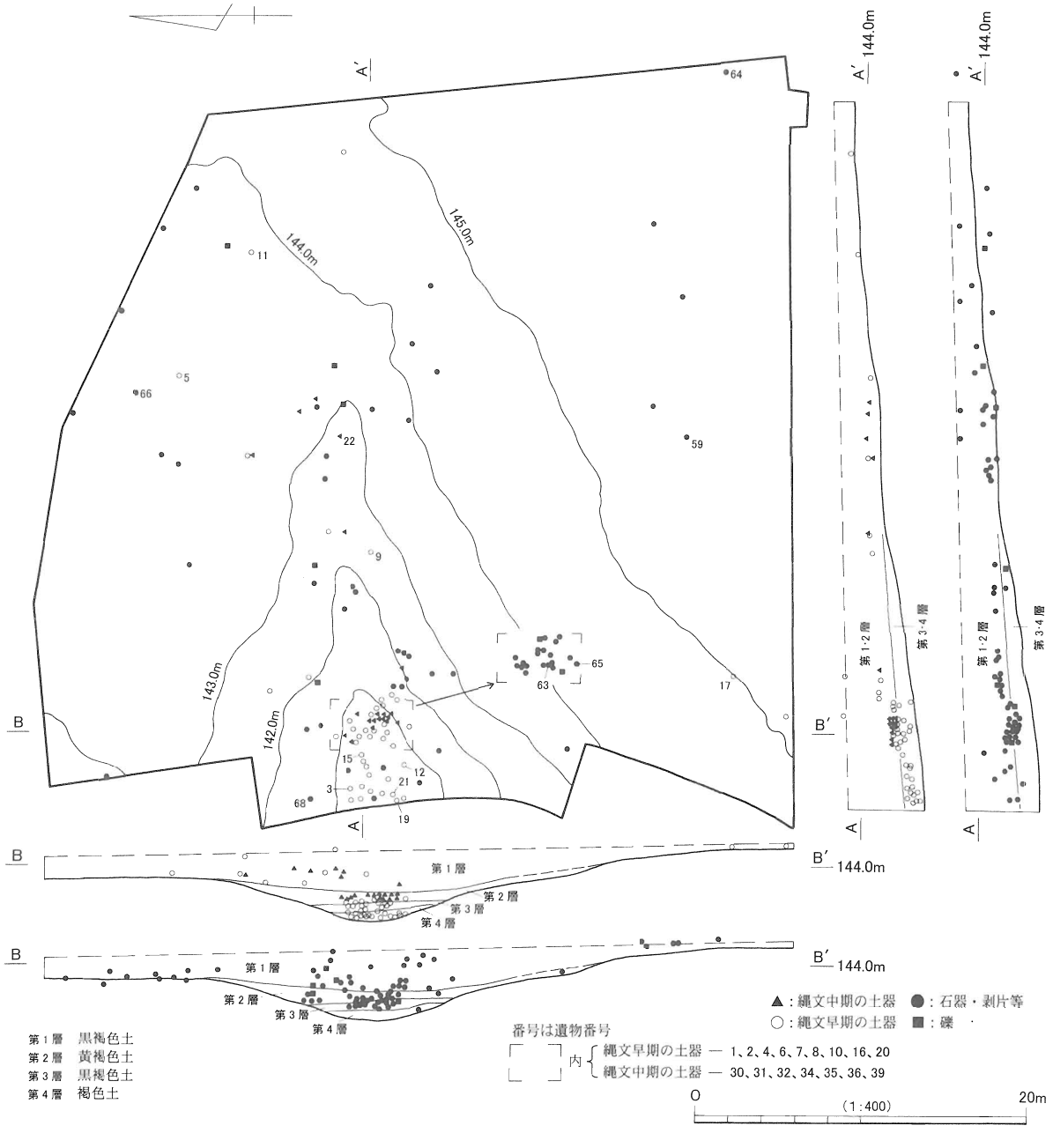
第53図　遺物出土量の傾向

込みというだけではなく、人為の影響をうかがわせている可能性も考慮できる。ただし、第54図にない時期不明の縄文土器片も多くあり、確実視することはできない。なお、出土層位については、全て第１・２層からの出土である。

礫、石器・剥片類

礫の出土は、谷筋に沿って散在的であり、礫群といえるものはない。

石器・剥片類は、谷部西寄りに集中する。集中範囲は縄文時代中期の土器と同様であるが、縄文時代中期の土器よりも分散する傾向にあり、縄文時代早期の土器と同様、周囲の平坦面にも比較的多くの出土が認められている。層位をみると、縄文時代早期の第４層にない一方、同じ縄文時代早期の第３層に多い。分散傾向と対応するように、第１・２層からの出土も少なくない。



第54図　遺構外出土遺物の分布

3．遺　構

（1）土　坑

SF01～SF23の23基の土坑があり、全て同じ遺構面で発見されている。しかし、SF23だけは他と大きく特徴が異なり、中世の炭窯であることが明らかなものである。これだけは別にして後述する。

SF01～SF22の各土坑の位置は第52図、規模・形状・覆土等は第55～57図に示したとおりである。

規模・形状

平面形では楕円形の土坑が多いが、円形（SF01・SF12・SF17）や方形に近いもの（SF10）、不定形のもの（SF19・SF20など）もある。規模についても、形状の相違に関係なく様々である。深さおよび断面形も様々で、SF02のように浅い皿状のものから、SF07・SF09のように柱穴に近いものもある。各土坑の性格を明示することはできないが、全てが同じ性格・役割をもっていたとは考え難い。

覆　土

平坦面にある土坑の覆土は黄褐色～灰黄褐色、谷部にある土坑の覆土は褐色～暗褐色を基調としている。周辺環境による覆土の違いであると把握できる。なお、覆土に礫が含まれる場合が多い。

火の使用　覆土に炭化粒が含まれる場合（SF03・SF06・SF08・SF09・SF16・SF18・SF19・SF20）、礫に被熱が認められる場合（SF09・SF18・SF19）があった。さらにSF01・SF19では、赤褐色土（焼土）が認められ、そこで火を使用したこと、火と関連した性格を伴う土坑であったことが推測できる。

炭化粒については、土坑の性格と関係なく少量が覆土中に含まれる可能性もある。また、被熱した礫も、別の場所で被熱したものである可能性がある。ただし、周辺で火を使用したと推測できる根拠にはなる。そして、その最も有力な根拠が、焼土・被熱した礫・炭化粒が顕著に認められたSF19であり、屋外炉と判断できるものである。

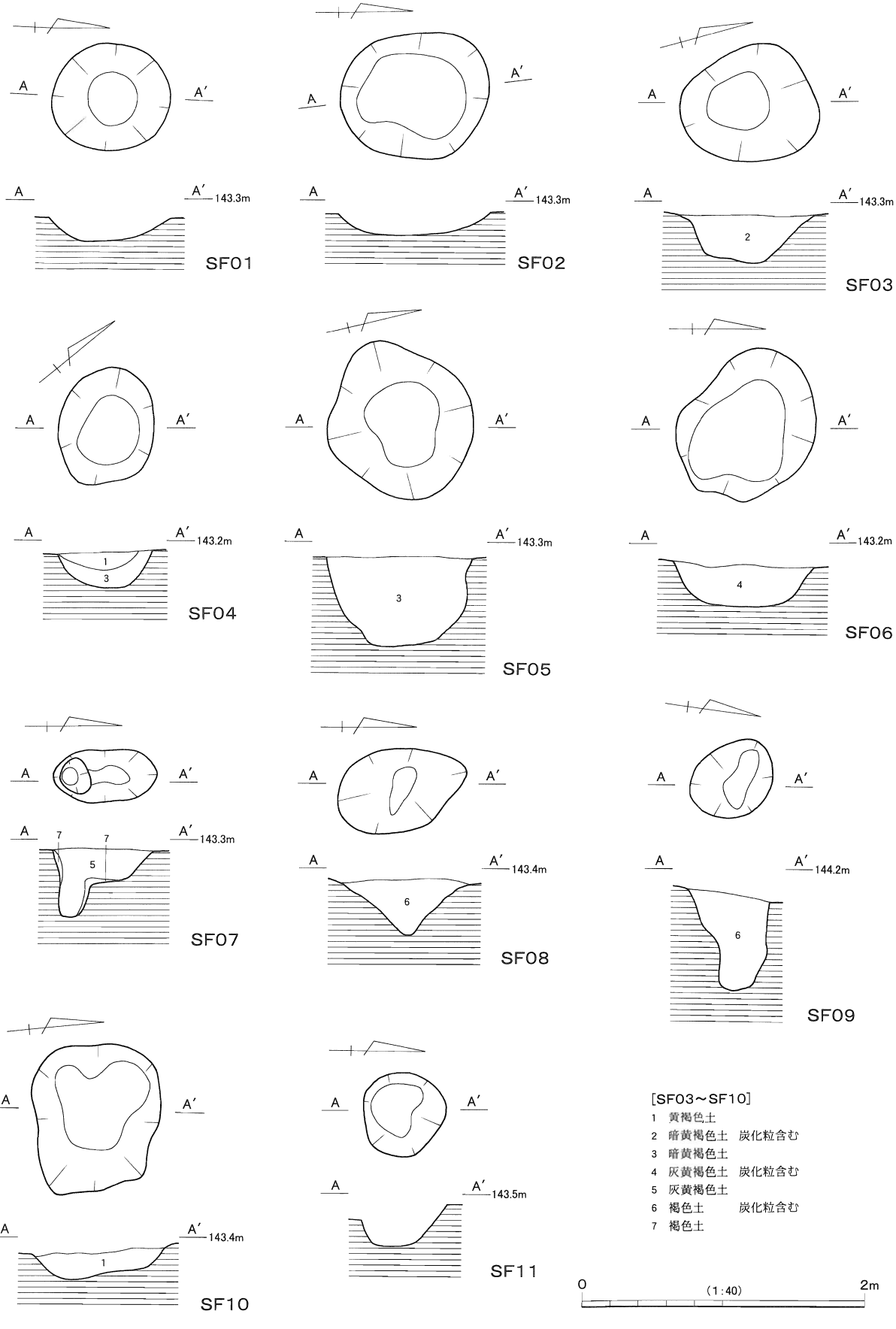
出土遺物

SF01・SF16・SF19からは、縄文土器片が出土している。いずれも小破片のため、詳細な時期は特定できない。また、SF15・22からは剥片類が出土している。これも詳細な時期が特定できるものではない。

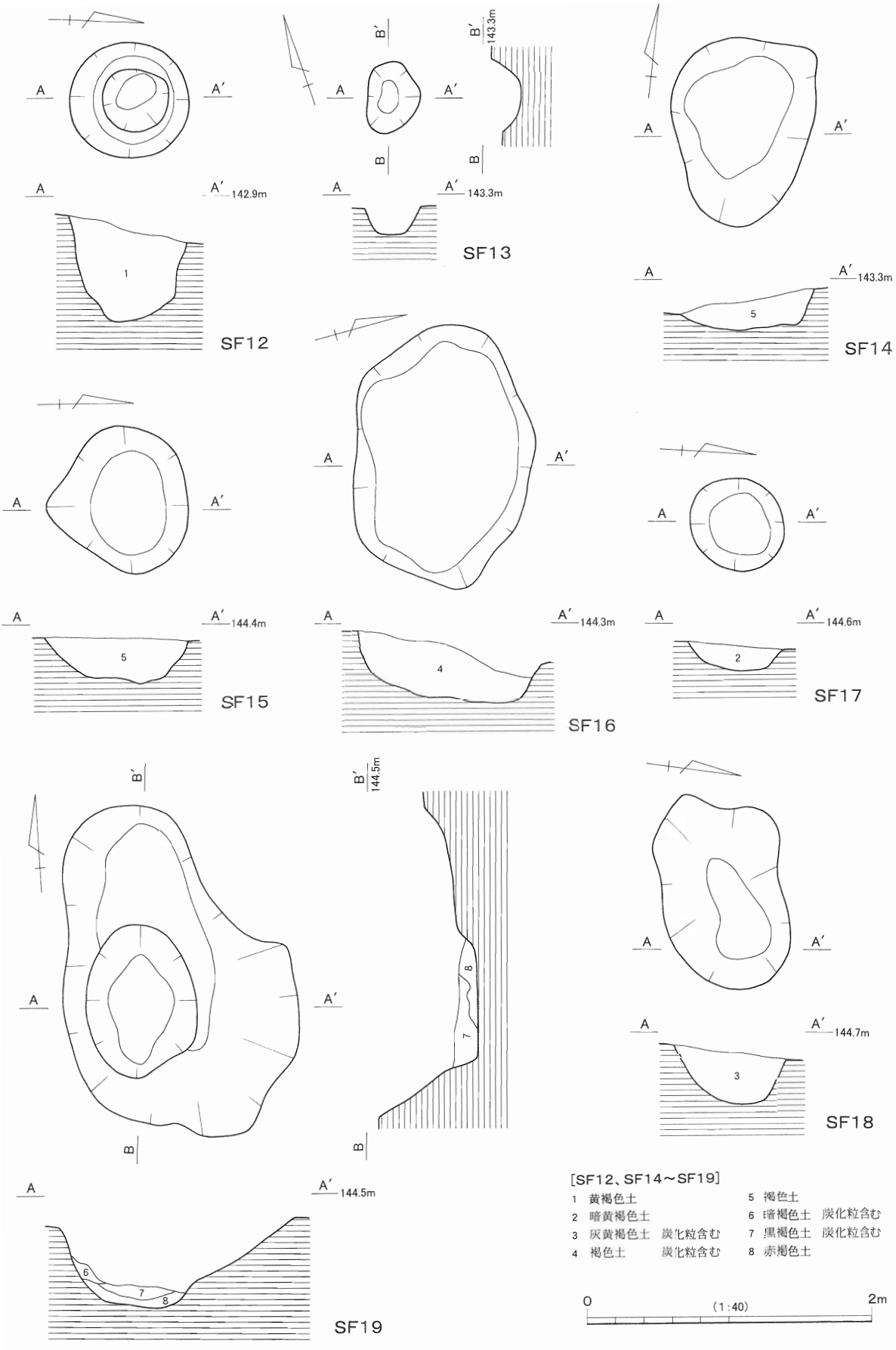
SF12・SF20からは、縄文土器片と剥片類が出土している。SF12については、詳細な時期を特定することが難しいが、SF20からは黒曜石の剥片類などとともに、縄文時代早期の土器片（第59図13・14など）が出土している。

時期の特定　本節1で述べたとおり、谷部のSF08～SF19は第54図第2～4層の下面で発見されており、縄文時代の遺構であると判断することができる。また、SF01・SF20・SF22も出土遺物から、縄文時代の遺構である可能性が高いと判断できる。以上から、多くの土坑は縄文時代のものである可能性が高いと評価できる。

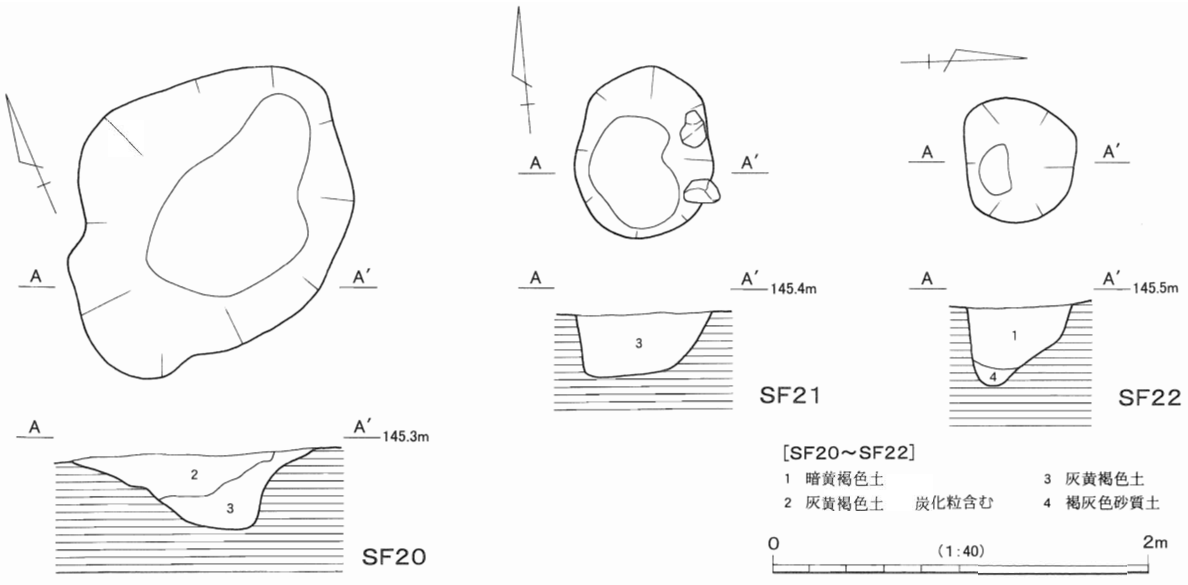
さらに、先述のとおりSF20は縄文時代早期のものと判断できる。全ての土坑が縄文時代早期のものであるというには根拠に乏しいが、少なくとも、縄文時代早期に土坑を伴う営みが展開していたことは確かである。



第55図　SF01～SF11



第56図　SF12～SF19



第57図　SF20～SF22

（2）炭　窯

ＳＦ２３（第58図）

調査区南東隅に位置し、長軸はＮ－24°－Ｅで約4.90m、短軸は最大0.96m、深さは最大0.3mである。細長い平面形で、両端部はさらに幅狭になる。全体的に焼土・炭化粒が覆土に多く含まれる。このような特徴をもつ遺構は、周辺各地の遺跡（浜松市文化協会1989など）でも多く発見されており、炭窯であることがわかっている。したがって、このSF23も炭窯であると判断できる。

南に下がる傾斜や平面形から、南に焚口が設けられていると判断でき、調査区の南の谷から入って北へと上昇する風を利用したものと想定できる。炭化室の壁に炭化粒・焼土を含まない黄橙色土が認められ、壁～天井も同様の土でつくられたと推測できる。一方、焚口と炭化室との境には、長軸約50cmの角石があり、その東に石の痕跡とも想定できる凹みがある。２石が並べ置かれていた可能性があるが、この周囲にも炭化粒・焼土を含まない黄色系の土が認められる。焚口と炭化室との境に、石と土による構造上の施設が設けられていたことがわかる。焚口の最南端には、小穴状部分がある。これも、何らかの構造を反映したものと推測できる。

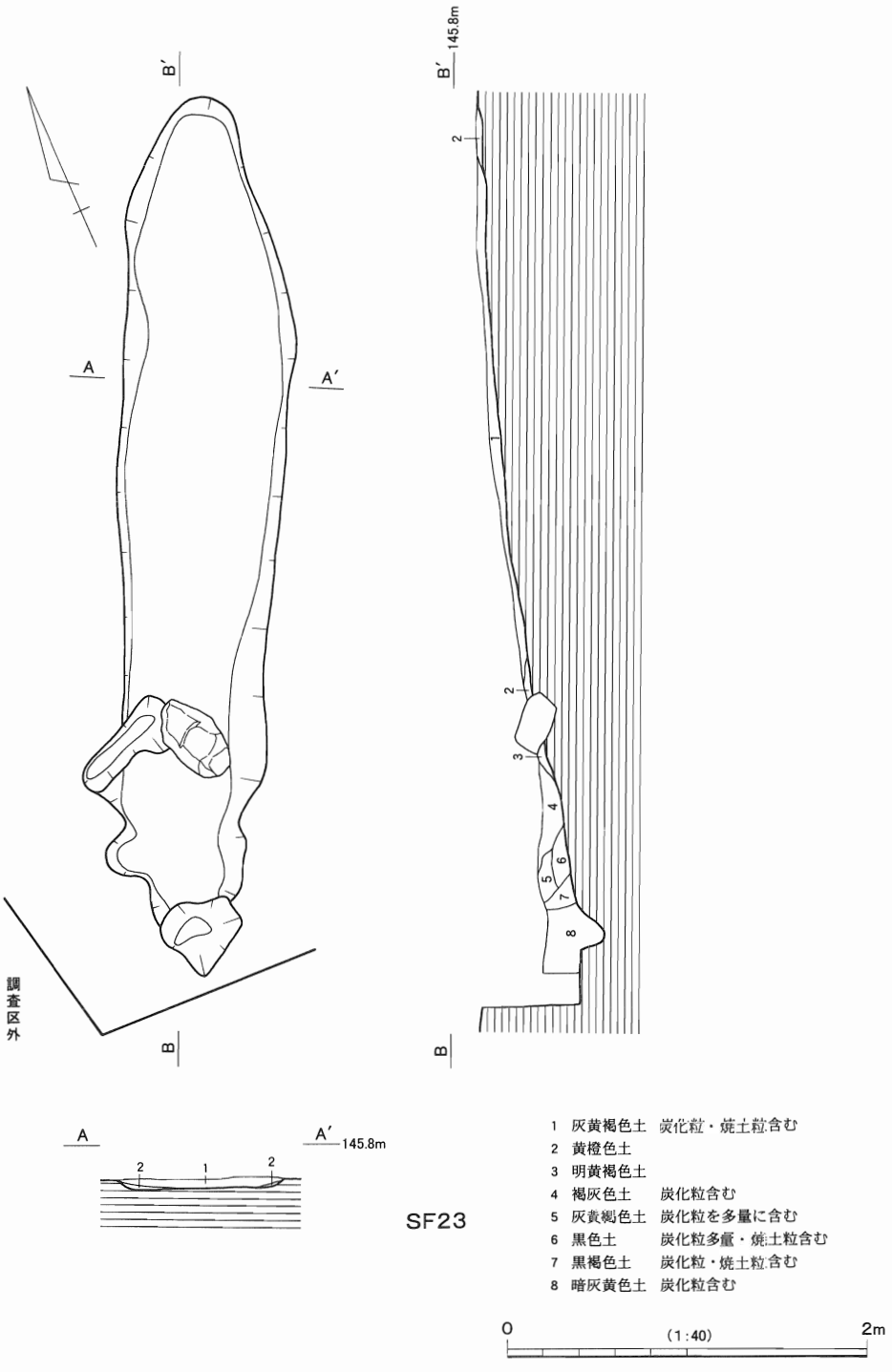
覆土の状態をみると、炭化室は単調である一方、焚口部は複雑で、炭化粒・焼土の発達した部分も認められる。焚口部の覆土中から、縄文土器片とカワラケ片が出土している。カワラケの出土からSF23は中世の遺構であると判断できる。しかし、小破片のため詳細な時期の特定は難しい。周辺から山茶碗（第64図73～75）が出土していることから、鎌倉時代（13世紀頃）にまで遡る可能性もある。

（3）小　穴

SP01～SP19の19基の小穴がある。全てが南側平坦面上、Ｅ４～Ｅ５グリッドに集中している（第52図）。これらの時期について、層位・覆土から特定することはできない（本節１参照）。また、SP10以外は出土遺物がない。小穴群周囲の出土遺物も少なく、縄文時代と中世との双方の遺物が混在している。

したがって、遺物からの時期の特定もできない。

小穴群の性格についても特定が難しい。柱穴群である可能性が考えられるが、整然と並ぶわけではなく、掘立柱建物などの施設跡を具体的に想定することができない。そのような状態のなかで、SP08～SP18は円形に分布しており、縄文時代の住居の柱穴群である可能性が指摘できる。しかし、各小穴について縄文時代であるとする根拠は得られない。実際、SP10からは刀子（第64図76）が出土しており、SP10については当てはまらない。残念ながら、時期・性格ともに不明の小穴群であるとせざるを得ない。



第58図　SF23

4．遺　物

（1）縄文時代の遺物　（第59～63図）

縄文土器

今回の調査で土器はほとんどが遺物包含層からの出土であり、破片のみで1000点近くあった。文様、形状、胎土などから早期、中期の２つの土器群に分類できる。出土地点は土器観察表に示した。

Ⅰ群土器（第59図）　早期の土器であり、文様、胎土などからさらに３つに分類される。色調はにぶい黄褐色、にぶい褐色などが多く焼成は良好である。

１　類（１～５）

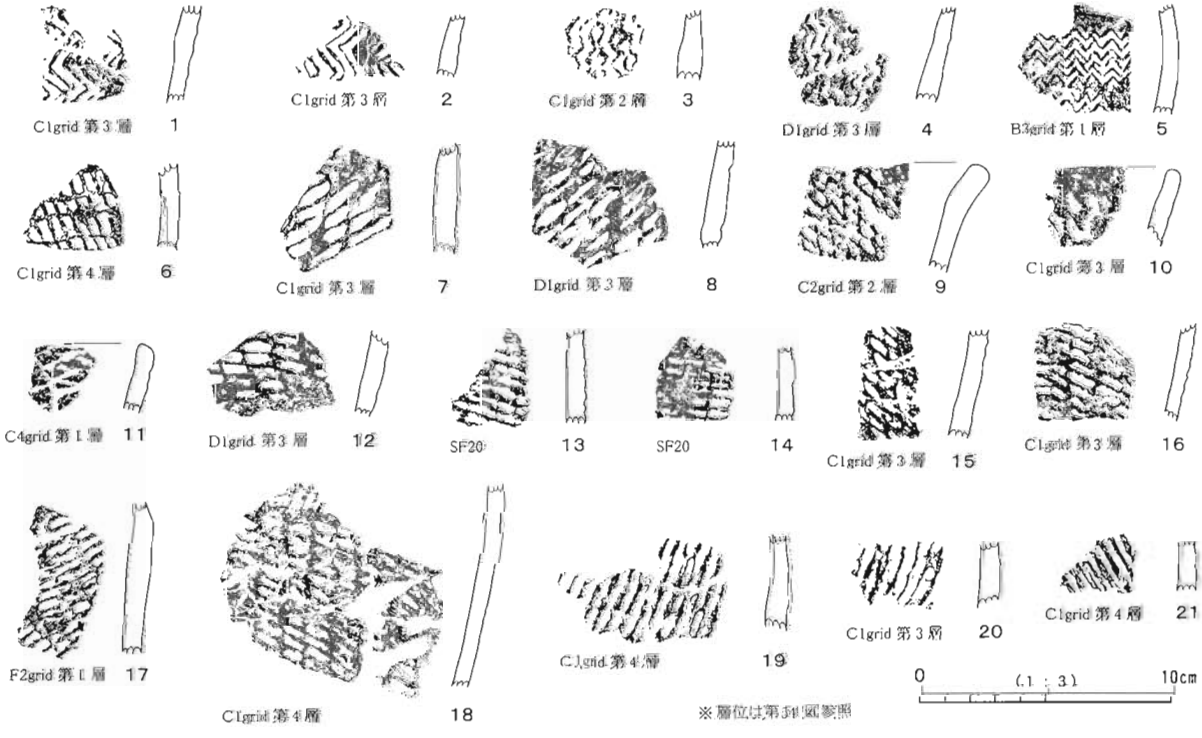
山形文を回転施文している土器。施文方向からさらに２つに分類できる。

１ａ類（１～４）

１～４は山形文を縦位方向に回転施文している。１・２は1.9cm程度の施文原体を使用し、明確な山形文を施文している。３・４も1.9cm程度の細い施文原体を使用しているが、山形文は波状を呈している。

１ｂ類（５）

５は山形文を横位方向に回転施文している。文様の間隔も密接している。色調は黒褐色であり、胎土に長石、石英、雲母を含む。焼成は良くない。



第59図　出土縄文土器１

2　類（6～18）

格子目文を回転施文している土器。格子目の形状は横に長い長方形が多く、楕円形に近いものも見られる。器体表面の摩滅が激しく明確に長方形といえるのは6のみである。格子目の大きさは0.7cm程度のものと、1.0cm程度のものがみられる。6は格子目文を縦位に回転施文している。7・8は格子目も大きく楕円形に近く、「ネガティブな楕円文」の可能性も考えられる。12～17は格子目が横につぶれた長方形を呈しており、横位に回転施文されている。18は施文方向が変化しており、上部では縦位方向に、下部では横位方向に施文している。

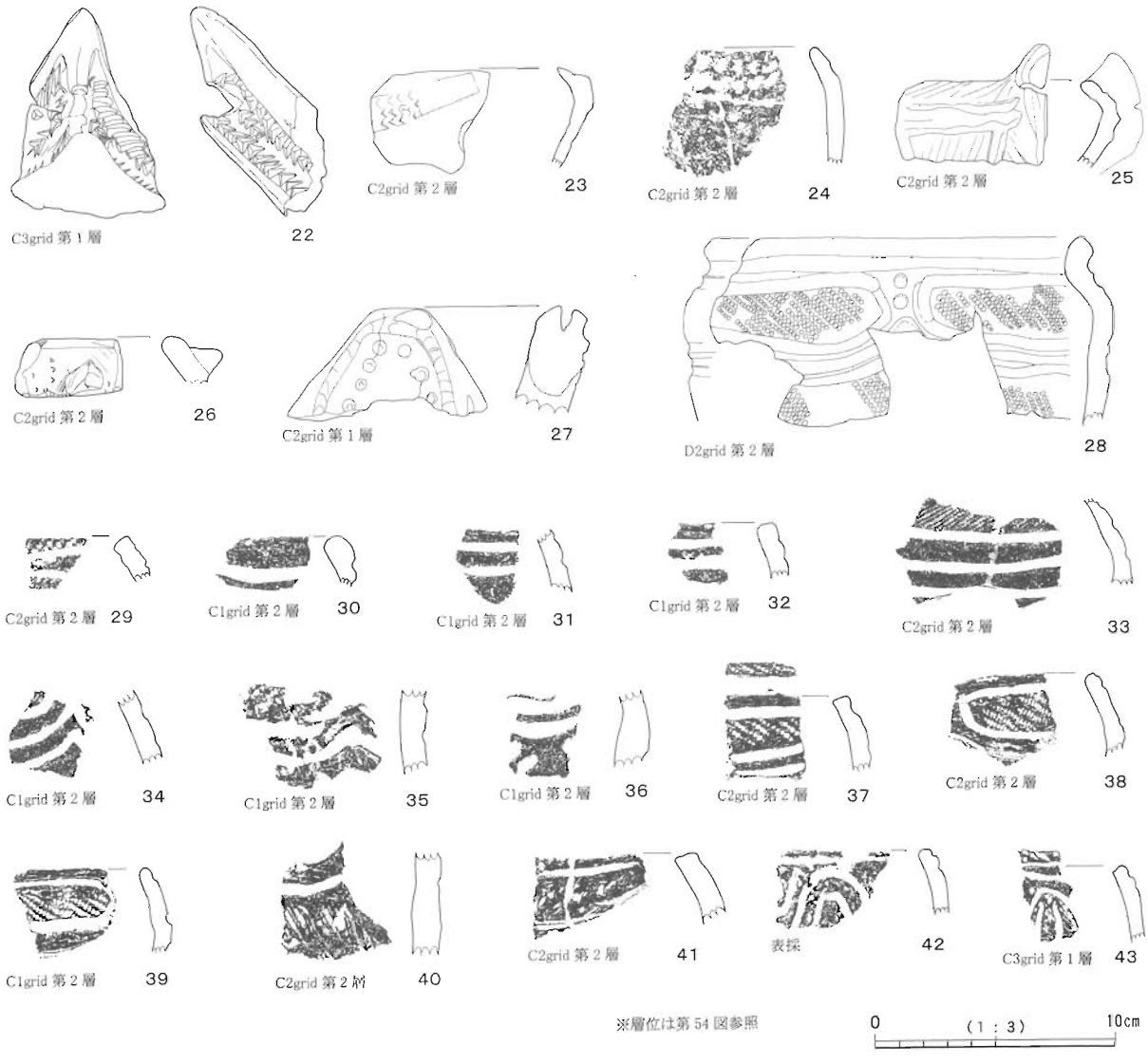
3　類（19～21）

撚糸文を施文している土器。撚糸文はつぶれて条線化している。

Ⅱ群土器（第60・61図）　中期の土器であり、文様、器形、胎土などから4つに分類できる。

1　類（22～27）

口縁部に連続刺突文や押引文を施す土器。



第60図　出土縄文土器2

1 a類（22～26）

口縁部に三角形連続刺突文や縦位の条線を施した土器。山形突起や尖頭状突起を持つものや、口縁部がくの字に内傾するものがみられる。22は山形突起を持ち口縁部には三角形連続刺突文が施文されている。この土器を上方から見ると口縁の形状は多角形を呈していると考えられる。口唇部は肥厚し山の先端部分は丸く成形され、横と上に張り出す形状となっている。23は器体表面の摩滅が著しいが三角形連続刺突文を区画して施文している。25は隆帯によって区画された条線が施文されており、一部欠損しているが尖頭状突起を有していると考えられる。口縁部で著しく内傾している。26は口縁部外面に瘤を貼付し連続刺突文を施文している。屈曲する部分で破損している。これらの土器は中期中葉に東海地方に分布する北屋敷式に比定される。

1 b類（27）

波状口縁の深鉢の口縁部で、表面には円形刺突文と押引沈線が施文されている。波頂部には深い刺突が施されている。文様や胎土から中期中葉の勝坂式の範疇に含まれると考えられる。

2　類（28～43）

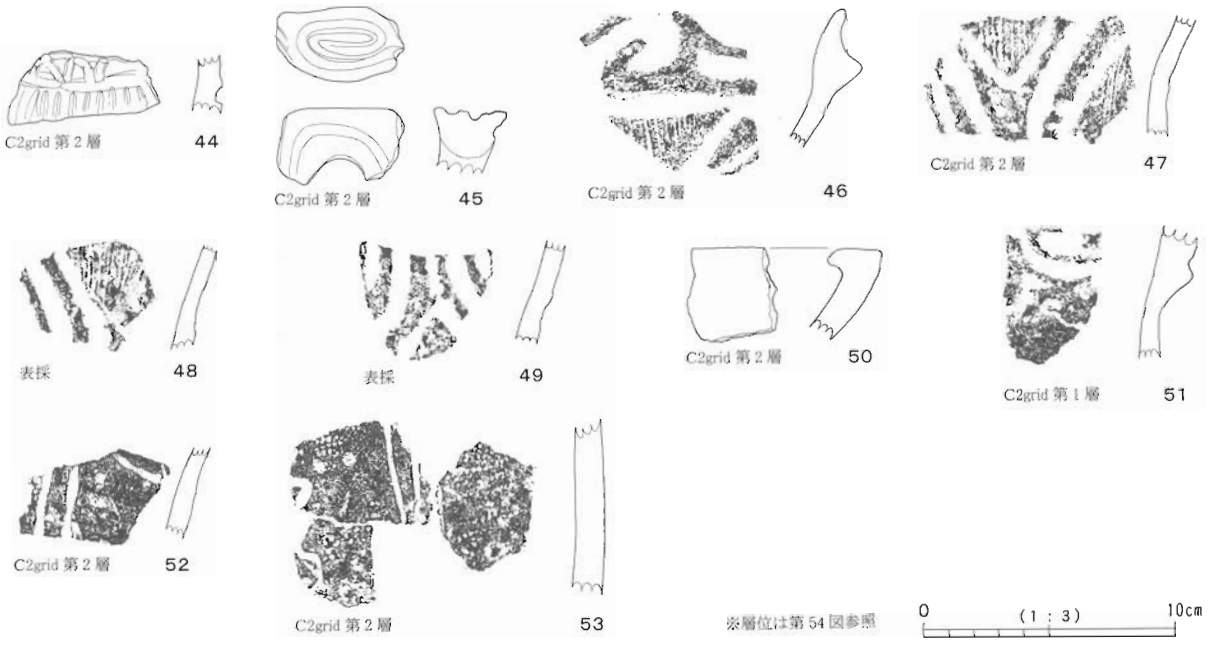
口縁部に区画文や弧線文を施す土器。中期後半に瀬戸内地方を中心に分布する里木式系の土器群である。文様の特徴や地文の違いにより、2つに分類できる。

2 a類（29）

口縁部に弧線文を施文して、地文として縄文を施す土器。29は縄文を地文として平行沈線文を施文している。

2 b類（28・30～43）

楕円区画文や弧線文が施文されている土器。器形はキャリパー形を呈し、口縁部は内湾する。色調はにぶい褐色、黄褐色を呈するものが多い。焼成は良好である。28は深鉢で平行沈線文、楕円区画文、弧線文が施文される。区画の間には円形浮文が2単位施文され、区画内にはＲＬ縄文が施される。30・31は同一個体と考えられる。口唇部はわずかに肥厚し、口縁部には平行沈線文が施される。32～34も同一個体であり、平行沈線文、楕円区画文、弧線文が施され、区画内には



第61図　出土縄文土器3

ＬＲ縄文が施文される。37～39も楕円区画文と区画内にはＲＬ縄文が施文される。42・43は口縁部に地文として縄文を施文して、半截竹管状工具により平行沈線文、波状文、連弧文を施している。43の口唇部には縄文が施文されている。２ｂ類の土器は東海地方を中心に分布する咲畑式土器の影響を受けており在地性が強い。30～39の土器は島田市東鎌塚原遺跡などに類例がみられ、咲畑式土器が他の土器群の影響を受けて成立した在地の土器と考えられている。

3　類（44～50）

渦巻き文や区画内に縦位の細条線を施す土器で、中部地方を中心に分布する曽利式に比定される。にぶい赤褐色を呈するものが多く、胎土に石英や雲母が含まれる。口縁部である50以外は、文様などから３つに分類できる。

3ａ類（44）

44は深鉢の胴部破片で、蛇行隆帯と縦位の条線を施文している。施文手順はまず横位に隆帯を貼付し、さらに短い隆帯を三角形に区画するように貼り付ける。最終的な形状は山形を呈する。その後縦位に太目の条線を施文する。曽利Ⅰ～Ⅱ式である。

3ｂ類（45）

45は波状口縁の深鉢で表面には円文、波頂部には渦巻き文が施文されている。口縁部は著しく肥厚している。曽利Ⅲ式に比定される。

3ｃ類（46～49）

口縁部から胴部にかけて渦巻き文や沈線による区画文、区画内に細条線を施す土器。頸部は若干外傾する。46～49は色調、胎土の特徴などから同一個体と考えられる。曽利Ⅳ式に比定される。

4　類（51～53）

沈線によって区画される土器。区画内には縄文が施される。51は深鉢の頸部付近であり、楕円形に区画され胴部は無文である。52は縦位の沈線によって区画され、区画内にはＲＬ縄文が施される。53も縦位の沈線によって区画され、区画内には縄文と波状懸垂文が施文される。これらの土器は関東地方を中心に分布する加曽利ＥⅢ式に比定される。

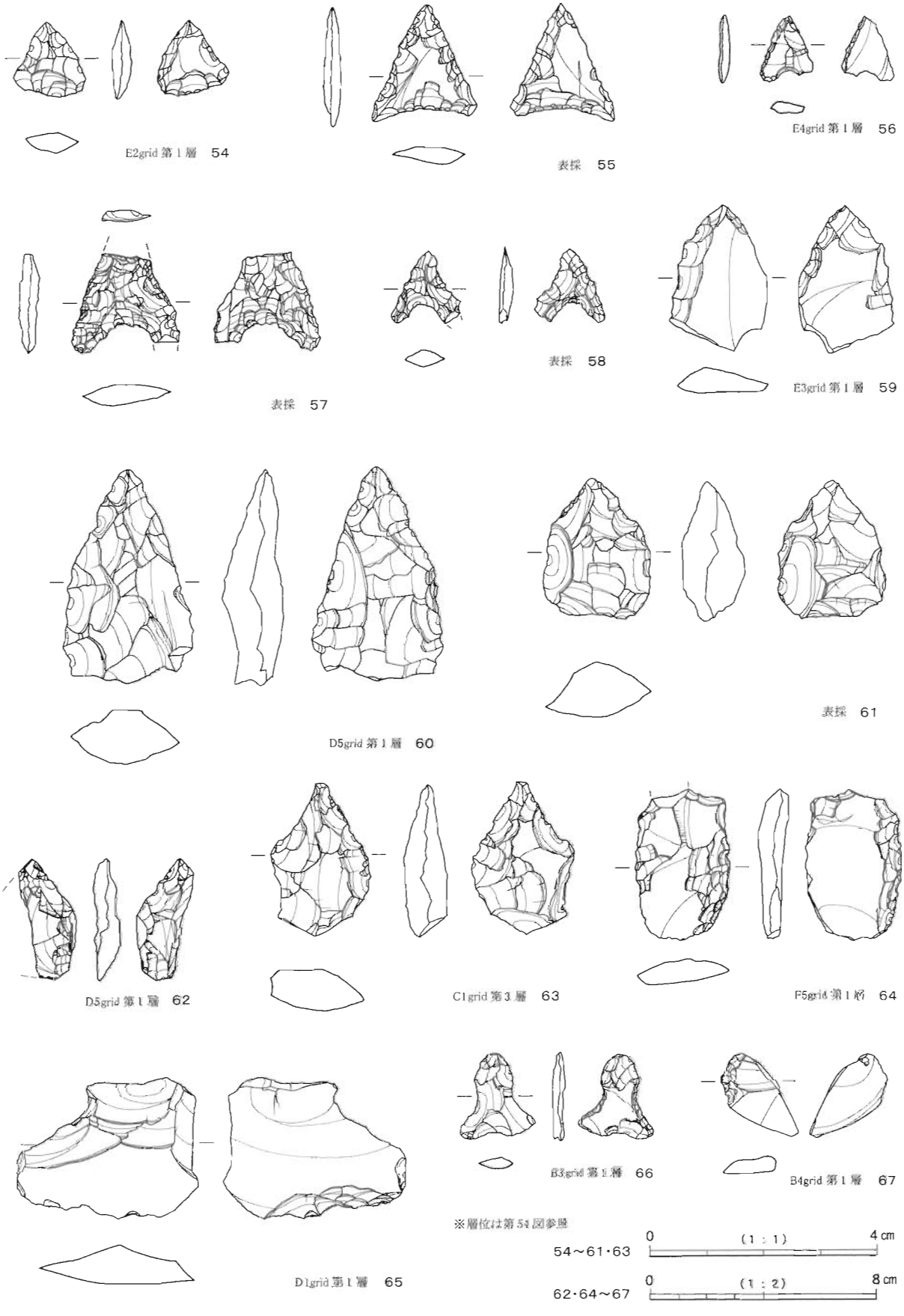
縄文時代の石器（第62・63図）

今回の調査では、土器と同様にほとんどの石器が遺物包含層からの出土であり、剥片類も含めて250点近くあった。出土地点は第10表と第62・63図に示した。石器の内訳は第11表の通りである。

石鏃・尖頭器（54～63）　石鏃は、基部形態などによって、以下の４類型に区分される。なお、尖頭器の可能性のある石器も４類に含めた。

1類　平基無茎鏃
2類　凹基無茎鏃　　a　抉入が弱い（抉入の全体に対する比率）
　　b　抉入が強く、長脚である
3類　有茎鏃
4類　未製品

54は１類であり、平面形は正三角形を呈する。正面は全体に調整が施されているが、裏面は縁辺のみに調整が施され素材剥片の剥離面を残している。55・56は2ａ類に相当し、平面形は二等辺三角形を呈する。55は調整が両面ともに縁辺のみであり、素材剥片の剥離面を残している。基部は調整によってわずかにくぼみ、両肩が張りだしており、先端部は細かな調整によって作出されている。56は正面左側縁と基部、裏面左側縁のみに調整が施され、素材剥片の剥離面が大きく残されている。57・58は2ｂ類で

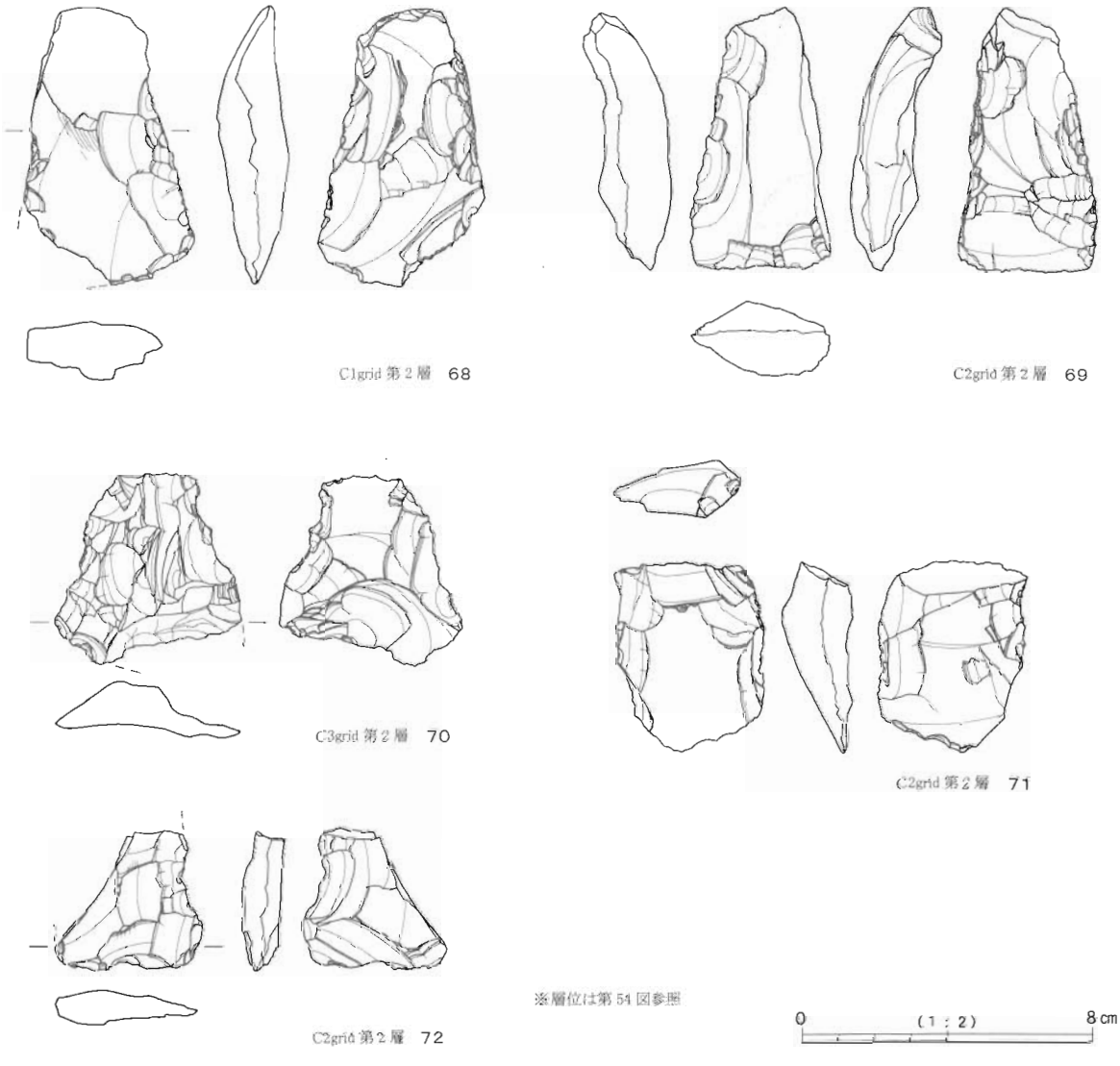

E2grid 第1層 54
表採 55
E4grid 第1層 56
表採 57
表採 58
E3grid 第1層 59
D5grid 第1層 60
表採 61
D5grid 第1層 62
C1grid 第3層 63
F5grid 第1層 64
D1grid 第1層 65
B3grid 第1層 66
B4grid 第1層 67
※層位は第54図参照
54～61・63
0 (1：1) 4cm
62・64～67
0 (1：2) 8cm

第62図　出土石器1

あり、両面に細かい丁寧な調整が施される。59～63は４類で、石鏃または尖頭器の未製品である。60は全体に調整は粗いが尖頭部は丁寧に調整されており、尖頭器の可能性もある。61は寸詰まりの形状を呈し、基部は平らである。尖頭部があまり鋭角でないことやその厚さから未製品と判断した。62は素材剥片の打面を残し、調整も粗いが尖頭部を作出しているため未製品に分類した。節理によって破損している。63も破損しているが、寸詰まりの形状であったと考えられる。

石　匕（64・65）　64は縦型石匕であり、握部が破損している。素材は縦長剥片であり、剥片の先端部に抉りを入れて握部を作出している。65は調整が粗いが、その形状や調整から石匕の未製品であると判断した。

その他の剥片石器（66・67）　66は形状や調整の粗さから石鏃未製品とも考えられるが、つまみ部を作出しようとしている意図が読みとれることから小型石匕の未製品もしくは異形石器の可能性がある。67は二次加工のある剥片である。



第63図　出土石器２

打製石斧（68～72）　68は撥形を呈し刃部が一部破損している。素材となっているのは自然面を有する大型剥片であり、その側縁の鋭利な部分をそのまま刃部としている。素材剥片の打面及びバルブは調整によって除去されている。先端部は折れており、その折断面から両面に調整が施されている。全体的に調整は縁辺に限られている。

69は撥形を呈し背面に大きく自然面を残している。素材は自然面を有する大型剥片である。背面右側縁は折れており、そこから腹面側に調整が施される。素材剥片の打面は残存しているが、バルブは厚さを減少させるために除去され、さらに腹面右側縁から調整が施される。刃部は素材剥片の先端部を利用しているが、背面には調整が施され、より鋭角に作り出されている。70は撥形を呈するが刃部は大きく破損している。剥片素材であるがわずかに主要剥離面が残っているのみである。全体的に調整は粗く未製品とも考えられる。71は破損品であり平面形は不明である。調整が粗いことから未製品とも考えられる。素材は自然面を有する大型剥片である。72は形状や調整、厚さから打製石斧と判断した。刃部は破損している。調整が粗く未製品である可能性が高い。

小　結

土　器　ここで大和田遺跡出土の縄文土器における、従来の研究を基にした各群各類の土器型式とその編年的位置づけについて述べておきたい。

Ⅰ群土器は早期前半の押型文、撚糸文土器である。１ａ類・２類・３類は色調、胎土から同一時期の土器群と考えられ、密接な山形文や格子目文も楕円形に近い土器が多く、「ネガティブな楕円文」に類似することなどから神宮寺式併行の時期に当てはめたい。１ｂ類のみ色調、胎土が異なるが他の早期の土器との時期差はさほどないと考えられる。１ａ類・２類の土器は菊川町三沢西原遺跡（菊川町教育委員会1985）に類似した資料がみられ、同一時期の資料と考えられる。

Ⅱ群土器は中期中葉から後葉の土器である。１類の土器は中期中葉の北屋敷式であるが、三角形刺突文を連続的に施文している土器は遠江地域では菊川町白岩下遺跡（加藤1979）や豊岡村新平山遺跡などに類例がみられる。２ｂ類に類似した土器は島田市東鎌塚原遺跡で多く出土しており、「曽利Ⅲ式土器と咲畑式土器の影響により成立し、遠江地方を中心に分布する在地系の土器」と報告書に記述されている（島田市教育委員会1989）。曽利Ⅲ～Ⅳ式との共伴も確認されており、咲畑式成立以降の新しい要素をもつ土器といえよう。ただし、曽利Ⅲ式がどのように影響しているかや他型式の土器群の影響は窺えないのかといった問題は解決しておらず、咲畑式からの変遷も含めて検討が必要である。

当土器群の主体的時期は早期前半と中期後葉であるが、当遺跡周辺に早期から中期にかけて断続的に営みがあったと考えられ、そこで使用された土器が谷に集まったものと推定される。既に述べたように、これらの土器の多くは谷の埋没土中の出土であり、複数ある埋没土層に混在している状態である。ただし、土器の平面・断面の分布は比較的まとまっており、埋没土上層である黄褐色土層（第54図第２層）に中期の土器、下層の黒褐色土・褐色土層（第54図第３・４層）に早期の土器が集中している。これら集中部については、一括資料として考えることもできる。

石　器　上述の土器群と同じく、石器も谷の埋没土に混在している状況であり、土器群の主体的な時期から考えて、石器群も早期と中期に属すると考えられる。しかし、器種や形状、石材などから石器の時期を特定するのは困難である。第54図の第３・４層から出土したものについては、縄文時代早期のものであると判断できる（本節２参照）。しかし、第62・63図にあげたものについては、全て第54図第１・２層からの出土であり、出土層位から早期か中期かの判断することはできない。

第９表　縄文土器観察表

番号	挿図番号	図版番号	出土位置 ※：第54図参照	層位 第54図参照	器種	部位	色調（外面）	色調（内面）	胎土・焼成	備考
1	59	24	C1grid※	第3層	深鉢	胴部	にぶい褐色		長石含む	山形押型文
2	59	24	C1grid※	第3層	深鉢	胴部	にぶい褐色		長石、石英含む	山形押型文
3	59	24	C1grid※	第2層	深鉢	胴部	にぶい褐色		長石含む	山形押型文
4	59	24	D1grid※	第3層	深鉢	胴部	褐灰色		長石含む	山形押型文
5	59	24	B3grid※	第1層	深鉢	胴部	黒褐色		長石、石英、雲母含む（焼成不良）	山形押型文
6	59	24	C1grid※	第4層	深鉢	胴部	にぶい褐色		長石、石英含む	格子目押型文
7	59	24	C1grid※	第3層	深鉢	胴部	にぶい黄橙色		長石、石英含む	格子目押型文
8	59	24	D1grid※	第3層	深鉢	口縁部	にぶい黄橙色		長石、黒色礫含む	格子目押型文
9	59	24	C2grid※	第2層	深鉢	口縁部	にぶい褐色		長石含む	格子目押型文
10	59	24	C1grid※	第3層	深鉢	口縁部	にぶい黄橙色		長石含む	格子目押型文
11	59	24	C4grid※	第1層	深鉢	口縁部	褐色		雲母含む	格子目押型文
12	59	24	D1grid※	第3層	深鉢	胴部	にぶい黄橙色		長石含む	格子目押型文
13	59	24	SF20覆土内		深鉢	胴部	にぶい黄褐色		雲母、砂粒含む	格子目押型文
14	59	24	SF20覆土内		深鉢	胴部	にぶい黄褐色		長石、石英含む	格子目押型文
15	59	24	C1grid※	第3層	深鉢	胴部	にぶい褐色		長石、石英含む	格子目押型文
16	59	24	C1grid※	第3層	深鉢	胴部	にぶい黄橙色		長石、石英含む	格子目押型文
17	59	24	F2grid※	第1層	深鉢	胴部	にぶい黄橙色		長石含む	格子目押型文
18	59	24	C1grid	第4層	深鉢	胴部	にぶい黄褐色		長石、石英含む	格子目押型文
19	59	24	C1grid※	第4層	深鉢	胴部	にぶい褐色		長石、砂粒含む	撚糸文
20	59	24	C1grid※	第3層	深鉢	胴部	にぶい褐色		長石、石英含む	撚糸文
21	59	24	C1grid※	第4層	深鉢	胴部	にぶい褐色		長石含む	撚糸文
22	60	24	C3grid※	第1層	深鉢	口縁部	黒褐色	にぶい褐色	長石、石英、雲母含む	北屋敷式
23	60	24	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	にぶい褐色	黒褐色	長石、石英、雲母含む	北屋敷式
24	60	24	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色		長石、石英含む	北屋敷式
25	60	24	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	褐灰色		長石、石英、雲母含む	北屋敷式
26	60	25	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	褐色	黒褐色	雲母、長石、小礫含む	北屋敷式
27	60	25	C2grid	第1層	深鉢	口縁部	にぶい黄橙色		長石含む	勝坂式か
28	60	25	D2grid	第2層	深鉢	口縁～胴部	にぶい褐色	黒色	長石、石英含む	咲畑式系
29	60	26	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	黒褐色		砂粒、小礫含む	里木式系
30	60	25	C1grid※	第2層	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色		長石、石英、白色砂粒含む	咲畑式系
31	60	25	C1grid※	第2層	深鉢	口辺部	にぶい赤褐色		長石、石英、白色砂粒含む	咲畑式系
32	60	25	C1grid※	第2層	深鉢	口縁部	にぶい褐色		長石、石英、白色砂粒含む	咲畑式系
33	60	25	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	にぶい褐色		長石、石英、白色砂粒含む	咲畑式系
34	60	25	C1grid※	第2層	深鉢	口縁部	にぶい褐色		長石、石英、白色砂粒含む	咲畑式系
35	60	25	C1grid※	第2層	深鉢	胴部	にぶい黄褐色		雲母、砂粒、小礫含む	咲畑式系
36	60	25	C1grid※	第2層	深鉢	胴部	にぶい黄褐色		雲母、砂粒、小礫含む	咲畑式系
37	60	25	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	にぶい黄褐色		長石、石英、白色砂粒含む	咲畑式系
38	60	25	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	にぶい黄褐色		長石、石英、白色砂粒含む	咲畑式系
39	60	25	C1grid※	第2層	深鉢	口縁部	にぶい黄褐色		長石、石英、白色砂粒含む	咲畑式系
40	60	25	C2grid	第2層	深鉢	胴部	赤褐色	にぶい黄褐色	長石、雲母、白色砂粒含む	咲畑式系
41	60	25	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	にぶい黄褐色		礫、金雲母含む	咲畑式系
42	60	25	表採	第1層	深鉢	口縁部	褐灰色	黒色	長石含む	咲畑式系
43	60	25	C3grid	第1層	深鉢	口縁部	褐灰色	黒色	長石含む	咲畑式系
44	61	25	C2grid	第2層	深鉢	胴部	黒褐色		雲母、砂粒、小礫含む	曽利式
45	61	26	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	にぶい黄褐色		長石含む	曽利式
46	61	25	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色	黒色	長石、砂粒含む	曽利式
47	61	25	C2grid	第2層	深鉢	胴部	にぶい赤褐色	黒色	長石、砂粒含む	曽利式
48	61	25	表採	第1層	深鉢	胴部	にぶい赤褐色	黒色	長石、砂粒含む	曽利式
49	61	25	表採	第1層	深鉢	胴部	にぶい赤褐色	黒色	長石、砂粒含む	曽利式
50	61	25	C2grid	第2層	深鉢	口縁部	にぶい黄褐色		長石含む	曽利式
51	61	25	C2grid	第1層	深鉢	口縁部	にぶい黄褐色		長石含む	加曽利E式
52	61	25	C2grid	第2層	深鉢	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	長石含む	加曽利E式
53	61	25	C2grid	第2層	深鉢	胴部	黒褐色		長石、白色砂粒含む	加曽利E式

第10表　石器類観察表

番号	挿図番号	図版番号	出土位置 ※：第54図参照	層位 第54図参照	名称	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	欠損	備考
54	62	26	E2grid※	第1層	石鏃	流紋岩(Rhy)	1.29	1.25	0.35	0.47		
55	62	26	表採	第1層	石鏃	珪質頁岩(SSh)	2.17	1.85	0.29	0.86		
56	62	26	E4grid※	第1層	石鏃	流紋岩(Rhy)	1.15	0.95	2.03	0.17		
57	62	26	表採	第1層	石鏃	黒曜石(Ob)	(1.77)	1.88	0.38	1.02	あり	
58	62	26	表採	第1層	石鏃	黒曜石(Ob)	1.28	1.22	0.28	0.25		
59	62	26	E3grid※	第1層	石鏃	流紋岩(Rhy)	(2.63)	1.72	0.46	1.59	あり	未製品
60	62	26	D5grid※	第1層	石鏃	流紋岩(Rhy)	3.82	2.35	1.07	7.43		尖頭器か
61	62	26	表採	第1層	石鏃	チャート(Ch)	2.52	1.89	1.04	4.78		未製品
62	62	26	D5grid※	第1層	石鏃	黒曜石(Ob)	4.23	(2.00)	0.85	5.99	あり	未製品
63	62	26	C1grid※	第3層	石鏃	ホルンフェルス(Hor)	(2.71)	1.82	0.74	3.27	あり	未製品
64	62	26	F5grid※	第1層	石匕	ガラス質黒色安山岩(GAn)	(5.27)	3.38	0.95	19.40	あり	
65	62	26	D1grid※	第1層	石匕	ホルンフェルス(Hor)	5.14	6.41	1.35	44.07		未製品
66	62	26	B3grid※	第1層	不明	ガラス質黒色安山岩(GAn)	(3.12)	(2.66)	0.47	2.58	あり	石鏃未製品か石匕か異形石器か
67	62	26	B4grid※	第1層	不明	流紋岩(Rhy)	2.16	3.26	0.62	4.67		
68	63	26	C1grid※	第2層	打製石斧	流紋岩(Rhy)	7.67	(4.65)	1.69	57.09	あり	
69	63	26	C2grid※	第2層	打製石斧	ホルンフェルス(Hor)	7.21	3.88	2.04	56.27		
70	63	26	C3grid※	第2層	打製石斧	流紋岩(Rhy)	(5.25)	5.05	1.75	38.30	あり	未製品か
71	63	26	C2grid※	第2層	打製石斧	流紋岩(Rhy)	(5.33)	4.08	2.03	39.00	あり	未製品か
72	63	26	C2grid※	第2層	打製石斧	細粒安山岩(FAn)	(3.85)	3.91	1.19	14.63	あり	未製品か

(　)内は欠損のため本来の大きさではない値

第11表　出土土器片・石器類の内訳

土器片出土数

	縄文土器	灰釉陶器・山茶碗	陶器(中世後半以降)	カワラケ	計
出土点数	1233	5	3	7	1248

石器・剥片類出土数

	石鏃 石鏃未製品	石匕 石匕未製品	石斧 石斧未製品	その他の石器 石器未製品	石核	剥片	砕片	計
遺構内	0	0	0	0	0	3	1	4
遺構外	10	2	5	2	1	104	19	143
表採他	0	0	0	0	0	42	17	59
計	10	2	5	2	1	149	37	206
内黒曜石製	3	0	0	0	0	7	13	23

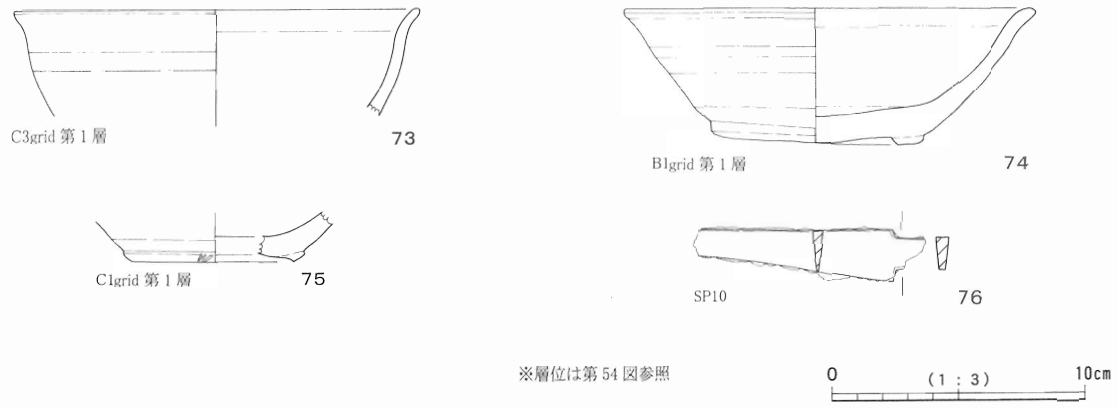
（2）中世の遺物　（第64図）

本遺跡からは、陶磁器・カワラケ・土師質土器・鉄器といった中世の遺物も出土している。しかし、縄文時代の遺物に比べると少なく、全て合わせても、A4版のビニール袋で1袋程度である。

多くは遺構外の表土からの出土であり、主に南側平坦面上からの出土である。遺構からの出土遺物では、SF23（炭窯）出土のカワラケの小片、SP10（小穴）出土の刀子（第64図76）があげられる。SF23出土のカワラケについては、詳細のわからない小片であり、図示することもできなかった。図示できたものは第64図にある73～76の4点だけである。

73～75は山茶碗の碗の破片である。胎土等から73は東遠江産、74・75は渥美・湖西産のものであると判断することができる。73は、内湾する体部から外反する口縁部までの破片で、比較的器壁が薄い。施釉は認められない。口径を16.2cmと復元したが、小破片であり異なる可能性もある。74・75の器壁は厚く、ともにつぶれた高台が付けられている。75の高台端部にはモミ痕が認められる。76は鉄製の刀子である。両端部が欠損している。

73は12世紀代から13世紀初頭（金谷古窯跡群の山茶碗編年（松井1993）Ⅰ～Ⅱ期）に位置づけることができる。一方、74・75は13世紀代（湖西古窯跡群の山茶碗編年（松井1989・1993）Ⅲ期）に位置づけることができる。



第64図　中世の出土遺物

第12表　遺物観察表

山茶碗

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	層位	種別	産地	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	焼成	色調	備考
73	64		C3grid	第1層	山茶碗	東遠江	碗	口縁～体部	5		16.0			良好	暗青灰色	
74	64	26	B1grid	第1層	山茶碗	渥美・湖西	碗	全体	70	5.4	16.2		8.4	良好	白灰色	
75	64		C1grid	第1層	山茶碗	渥美・湖西	碗	底部	20				7.1	良好	淡黄灰色	モミ痕

鉄製品

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種類	残存率(%)	残存長(cm)	刀部幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
76	64	26	SP10	刀子	60	6.2	1.4	0.4	5.044	

第4節　まとめ

遺跡の主体時期

本遺跡の主体となる時期は、縄文時代早期および縄文時代中期であるといえる。出土遺物の大半が、いずれかの時期の遺物である。遺構は土坑23基と小穴19基が検出されたが、土坑の多くは縄文時代のものである可能性が高いと判断できる。

一方、中世前半の遺物や遺構の発見もあった。しかし、縄文時代に比べると遺物量が非常に少なく、中世前半と判断できる遺構はSF23とSP10だけである。比較的高所にある狭い平坦地という立地も考慮すると、居住を伴う中世集落ではなく、集落から離れた山の活動場所であったと考えられる。そして、その活動内容は炭窯（SF23）の存在が示すとおりである。

縄文時代早期の営み

遺物の出土　縄文時代早期の土器の多くは、谷部に流れ込んだ状態で出土している。石器・剥片類も同様であると考える。ただし、本遺跡の周囲は谷や丘陵斜面に囲まれている。また、本遺跡に最も近い縄文時代早期の遺跡は萩ノ段遺跡であり、3.5km以上も下流に位置する（第1章第2節、第3図参照）。したがって、他の遺跡からの流れ込みや廃棄は想定し難い。本遺跡出土遺物は、本来より本遺跡の中で使われたものであり、本遺跡での営みを示すものと考える。

検出遺構　SF20だけは、出土遺物から縄文時代早期の遺構であると明確に判断できる。一方、他の土坑については、前節で詳細な時期の特定が難しいとした。しかし、土坑の出土土器（SF01・SF12・SF16・SF19出土土器）をみると、薄手で、少なくとも縄文時代中期であると判断できるものはない。また、他の遺跡の類例をみると、SF19のような屋外炉は縄文時代中期ではなく、縄文時代早期の集落に多く認められている。以上から、SF20によって土坑を伴う営みが縄文時代早期にあったということは明言でき、さらに、屋外炉であるSF19など相当数の縄文時代早期の土坑があったと考えたい。

営みの内容　以上のように、縄文時代早期の本遺跡では、石器の製作、土器・石器の使用、さらに火の使用などを伴う生活の存在を認めることができる。しかし、屋外炉などの土坑だけで、竪穴住居跡は全く発見されなかった。地形的にも、この時期の本遺跡には谷部が存在し、多くの住居を設けるような場所の確保は難しかったと想定できる。したがって、ある時期、ある季節などといった短期間に限定された、定住性の低い小規模な集落であったと考えたい。

縄文時代中期の営み

遺物の出土と遺構　遺構の時期の根拠となる縄文時代中期の遺物はなく、縄文時代中期であると推測できる遺構はない。いずれにしても竪穴住居跡や落し穴、土坑墓と判断できる遺構の発見はなく、集落や墓域として明確化することは難しい。とはいっても、縄文時代中期の土器の出土は明らかにあり、先述のとおり、他遺跡からの自然の流れ込みは想定し難い。縄文時代中期においても、本遺跡で何らかの営みがあったと考えたい。

営みの内容　遺物の出土は、縄文時代早期と同様、谷部西寄りに集中している。しかし、谷部は埋没がすすんで緩やかになっている一方、遺物の集中度がより高くなっている。埋没の途中の谷部において、何らかの人為があった可能性も否定できない。水の通り道になるであろうから、住居を設ける場所としては考えにくい。一括的な廃棄の跡である可能性の方が高いと考えたい。ただし、実際に根拠を得ることができていないので、いずれにしても推測の域を出ない。

本遺跡から谷を挟んだ東隣、本遺跡より25m程低い段丘上にある平島Ⅰ遺跡でも、縄文時代中期の遺構・遺物が発見されている（第4章参照）。本遺跡と同様、中期のなかでも後半を主としており、同時性の高い遺跡であるといえる。しかし、平島Ⅰ遺跡の方が広い平坦部に立地し、竪穴住居跡などといった集落を構成する遺構が発見されている。このような状況から、平島Ⅰ遺跡が居住生活の中心である集落であったと考えられ、本遺跡は集落周辺における一活動域として位置づけできる可能性を指摘しておきたい。

本遺跡の現地調査および本報告の作成にあたっては、掛川市教育委員会の方々、とくに、松本一男氏には有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。

参考文献

小野正敏（編集代表）　2001　『図解・日本の中世遺跡』　東京大学出版会

掛川市教育委員会　1984a『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』

1984b『掛川市遺跡分布調査報告Ⅱ』

掛川市史編さん委員会　1997　『掛川市史』上巻

2000　『掛川市史』資料編　古代・中世

加藤賢二　1979　「白岩下遺跡－西方川河川改修工事における採集遺物－」　『森町考古』4　森町考古学研究会

菊川町教育委員会　1985　『三沢西原遺跡』

静岡県教育委員会　1989　『静岡県文化財地図Ⅱ－焼津市以西－』

静岡県考古学会　1998　『縄文時代中期前半の東海系土器群－北屋敷式土器の成立と展開－』第5回東海考古学フォーラム

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1995　『牛岡遺跡Ⅱ』

島田市教育委員会　1989　『東鎌塚原遺跡発掘調査報告書』

浜松市文化協会　1989　『都田地区発掘調査報告書　上巻』

袋井市教育委員会　1984　『長者平遺跡』

松井一明　1989　「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」　『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』　静岡県教育委員会

1993　「遠江における山茶碗生産について」　『静岡県考古学研究』№25　静岡県考古学会

矢野健一　1993　「押型文土器の起源と変遷－いわゆるネガティブな楕円文を有する押型文土器群の再検討－」　『考古学雑誌』78－4　日本考古学会

山崎克巳　1997　「静岡県西部における縄文時代中期後半土器群の様相」　『静岡県史研究』13　静岡県

第４章　平島Ⅰ遺跡

第二東名No.97地点

第１節　位置と環境

１．位置と地理的環境

平島Ⅰ遺跡は、静岡県掛川市平島834他、掛川市東部の原野谷川の上流域左岸に位置する。

原野谷川上流域では、広い沖積平野が形成されず、川は丘陵の谷間に沿うようにして蛇行している（第１章 第２図）。大和田・平島地区の原野谷川は、北に凸の弧をいくつか連続させるようにしながら、西南西へと流れる。その中で比較的緩やかな弧を描く部分があり、左岸（南側）に南北最大幅約150m、東西約600mにわたる段丘群が形成されている。本遺跡は、その東寄りの一部分に立地している。

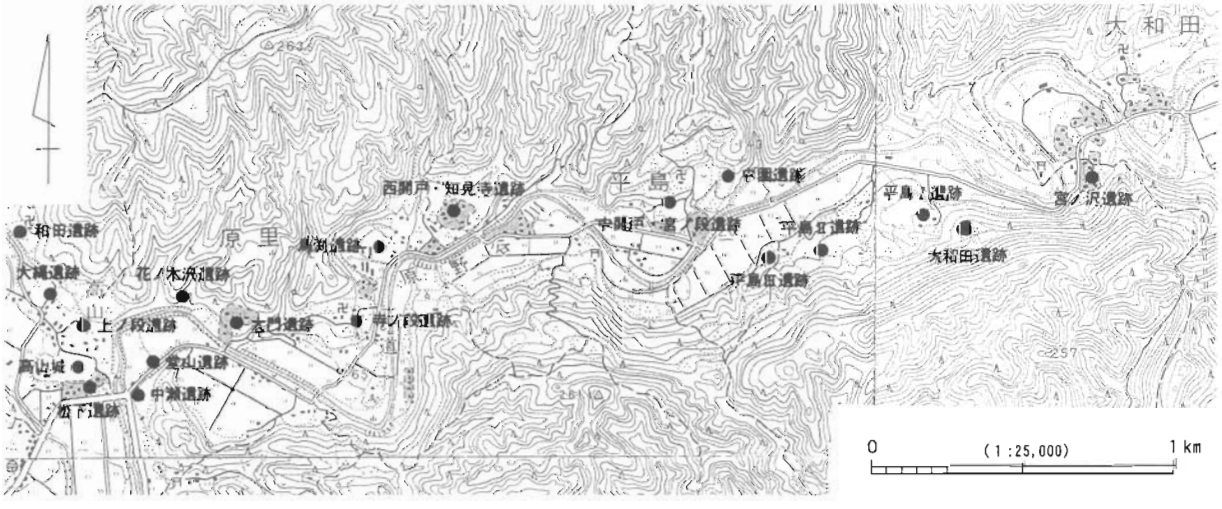
段丘は、南北に流れる小河川（小谷）によって、いくつかに分断されている。本遺跡の東西も小谷によって区画されている。段丘の上部は、全体的には緩やかに南西に下っている。南には丘陵の急斜面、北には河川に向かって下る斜面地が続いている。

見晴らしは、原野谷川流域をいくらか望める程度であり、決して良いとはいえない。なお、平坦面のほぼ全体が茶畑に利用されており、多少の削平・盛土も想定できるが、大規模な地形改変を観察することはできない。

２．歴史的環境と調査歴

平島Ⅰ遺跡については、今回がはじめての発掘調査である。遺跡の範囲は、段丘上平坦面の範囲にほぼ一致すると推測できる。したがって、今回の調査区より北側に遺跡が広がっている可能性がある。

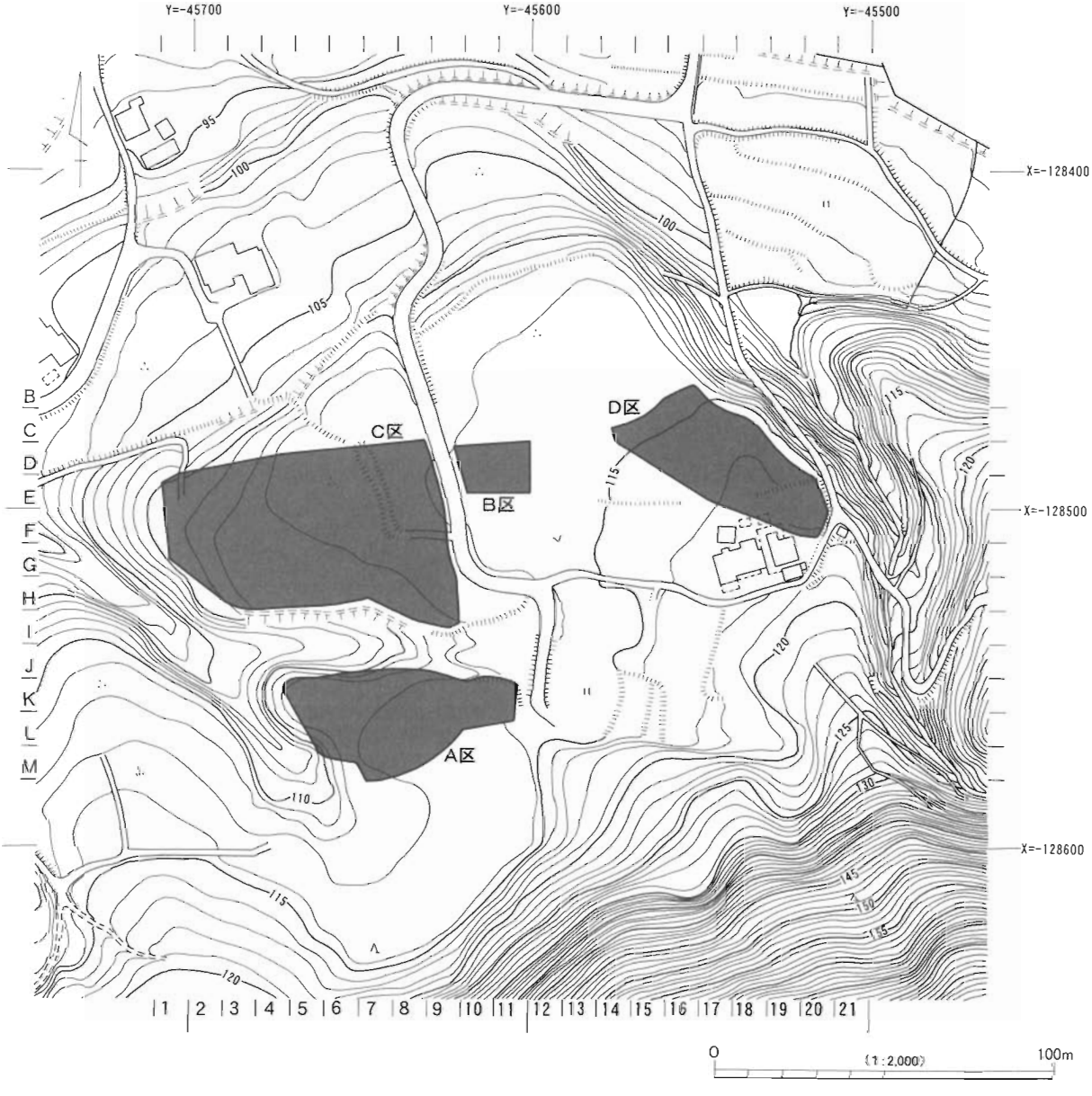
大和田・平島の遺跡、また原野谷川上流域の左岸にある遺跡については、本書に報告のある遺跡で占められる。大和田では宮ノ沢遺跡（第２章）で、山茶碗を中心とした出土、中近世の集落跡の発見があった。本遺跡の西にある平島Ⅱ・Ⅲ遺跡（第５・６章）でも、中近世の集落跡が発見されている。平島Ⅰ～Ⅲ遺跡は同じ段丘上で隣接しており、互いに関連性を考えることができる遺跡である。なお、本遺跡の周辺には「藤右エ門屋敷」といった屋敷を想定させるような小字名、「堂ノ上」といった阿弥陀堂などを想定させるような小字名が残っている。



第65図　本遺跡の位置と周辺の遺跡

本遺跡の東隣、一段上がった段丘上には大和田遺跡（第３章）がある。早期・中期を主とする縄文時代の遺物・遺構が多く発見されており、本遺跡との関連を考えることができる遺跡である。

第１章の第２節２で述べたとおり、より下流の右岸には、中園遺跡・上ノ段遺跡など多くの縄文時代の遺跡がすでに知られている。上ノ段遺跡は、本遺跡の約３km下流の段丘上にあり、縄文時代の中期から晩期の土器や石器、石剣・石棒、大珠、土偶片も採集されている（掛川市教育委員会1984aなど）。萩ノ段遺跡は、上ノ段遺跡の南西約0.5kmの段丘上にあり、縄文時代早期の押型文土器から前期・中期までの土器・石器のほか、耳飾りが発見されている。また、発掘調査が行われ、竪穴住居跡・屋外炉跡・小形土壙状の遺構の発見が報告されている（掛川市教育委員会1977など）。そのほか、遺物が採集された遺跡は少なくない。



第66図　本調査範囲とグリッド配置

第２節　調査の方法と経過

１．発掘調査の方法

本調査を実施した区域は、４ヶ所に分かれており、Ａ～Ｄ区として扱うこととした。Ａ区は、本遺跡最南西部に位置し、南北が谷で挟まれた比較的狭い部分にあたる。現況での標高は、約111～114mである。Ｂ区は、Ａ区の北側の広い段丘上平坦部、そのほぼ中央に位置する。現況での標高は約114～115mである。Ｃ区はその西側に位置し、現況での標高は約110～114mである。Ｄ区は、本遺跡の立地する段丘の最東部に位置し、現況での標高は約115～116mである。いずれも、段丘上の傾斜の非常に緩い平坦部に立地する。

確認調査の結果、Ｂ区とＤ区の間では遺構・遺物を確認することができなかった。削平などによって遺跡が消滅してしまったと判断することができる。一方、Ａ区の南北には小谷があり、ここについても遺跡の広がりは認められない。以上から、本遺跡の範囲はこの段丘上全体におよぶと考えられるが、小谷部は遺跡の範囲外となり、また段丘上でも遺跡が消滅してしまった部分があると判断することができる。なお、Ｂ～Ｄ区の北側は、今回の調査対象範囲（工事範囲）の外になる。

調査は、区ごとに別の工程で実施した。ただし、調査の方法は変わらない。

まず、調査区および作業道や作業員棟等を設置した後、重機による表土除去を行った。その後、平面的な遺構プランの検出を人力で行い、続いて遺構検出も人力で行った。遺構の検出に際しては、まず主軸直行方向に土層帯を設けるかプランの半分を検出し、土層断面によって覆土の状況を観察・注記、土層断面を記録した。その上で、遺構全体の検出を行った。

遺構調査に際しては、まず座標に合わせた10m方眼のグリッドを設定し、グリッド杭の設置を委託して実施した。グリッドは、全調査区にまたがるように設定した。遺構番号は、調査中に付した番号もあったが、本報告に際して、全遺構に対して遺構種類別に新たな遺構番号を付し直した。遺物については、遺構内出土遺物は遺構ごと、遺構外出土遺物はグリッドごとに取り上げた。ただし、遺構外出土遺物は少ないため、本報告に際しては一括にした。

現地の記録図面は、地形測量を1/100、遺構図を1/20を基本とし、設定したグリッドに沿って作成した。なお、図面作成は委託にて実施した。遺構・景観等の現地記録写真の撮影は、６×７版（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用いて行い、作業工程撮影用に35mm判（カラーネガ）を使用した。また、全景写真撮影および測量においては、空中写真撮影および空中写真測量を委託にて利用した。

写真26　発掘調査作業

2．発掘調査の経過

平成12年４月25日に発掘調査を開始した。調査区を設定し、Ｄ区の表土除去などを行うとともに、現地作業員棟・駐車場・作業道などを設置し、資器材等の準備を５月中旬までに行った。

調査区がいくつかに分けられることになったので、作業も区別に実施、Ｄ区、Ｂ・Ｃ区、Ａ区の順に開始して実施することとした。したがって、発掘作業の経過については、下に区別で記す。なお、６月下旬～７月上旬に基準点測量およびグリッド杭を打設したが、その実施は株式会社フジヤマに委託した。また、空中写真撮影および空中写真測量は株式会社フジヤマ、空中写真測量以外の測量・実測は加藤建設株式会社に委託して実施した。

全調査区の作業が終了した後に撤収作業を行い、11月上旬に現地の調査を終了した。

Ｄ　区

４月下旬～５月上旬に重機による表土除去を行った。その後、Ｂ・Ｃ区の作業のために中断し、人力による作業は５月下旬に開始した。６月上旬～７月上旬も、他区の調査のために中断している。

大半では表土直下に遺構検出面が現れたため、表土除去に引き続いて遺構プランを検出し、随時、遺構検出作業・遺物取り上げ・遺構の検討・記録作業を行った。以上の作業を９月下旬までに行い、９月末に空中写真撮影および空中写真測量を実施した。

Ｂ・Ｃ区

５月上旬に重機による表土除去を行った。その後、遺構検出面および遺構プランの検出作業を行い、随時、遺構検出作業・遺物取り上げ・遺構の検討・記録作業を行った。以上の作業が終了した後、８月上旬に空中写真撮影および空中写真測量を実施した。

Ａ　区

７月中旬に重機による表土除去を行った。その後、他区の調査のために中断し、９月下旬に人力による作業を開始した。大半では表土直下に遺構検出面が現れたため、表土除去に引き続いて遺構プランを検出し、随時、遺構検出作業・遺物取り上げ・遺構の検討・記録作業を行った。以上の作業を11月中旬までに行い、その後に空中写真撮影および空中写真測量を実施した。

3．資料整理の方法と経過

本遺跡に関わる資料整理作業および報告書作成作業は、平成14年７月から、大和田遺跡・平島Ⅱ遺跡・平島Ⅲ遺跡と同時に開始した。ただし、掛川工区内の他遺跡の資料整理・報告書作成作業、さらには他の現地調査の実施と重なることがあったため、その作業は断続的に実施していくことになった。

現地調査中および終了直後の基礎整理において、出土土器の洗浄・注記・接合、遺構図・現地写真・出土遺物の台帳の作成を実施していた。資料整理では、その残務と遺構図の修正が中心になった。

続いて、土器の図化作業、各図面の編集・トレース作業、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真には６×７判（白黒ネガ）と35㎜判（リバーサル）を基本として用い、必要に応じて他種も用いた。撮影は、当研究所写真室が実施した。

第３節　調査の成果

１．全体の概要

基本土層　各調査区のほぼ全域において、表土・造成土直下に遺構検出面（泥岩礫を多く含む黄褐色粘質土層の上面）が検出できた。ただし、Ｃ区南部（Ｇ・Ｈの６～８グリッド）の小谷部などでは、遺構検出面の上に堆積土（暗褐色土層など）が確認できた。

検出地形　発掘調査によって検出された地形は、基本的には現況地形と大きく変わらない。なお、微地形を含めた地形の詳細については、各区の遺構の冒頭で述べることにする。段丘上面は削平を受け、遺構の上部は壊されている。この削平は、茶畑造成に伴ったものと考えられる。とくに、Ｂ区東半からＤ区西縁部にかけては削平の影響が大きく、遺構は検出されなかった。確認調査の結果のとおり、Ｂ・Ｄ区間は削平によって遺跡が消滅した可能性が考えられる。

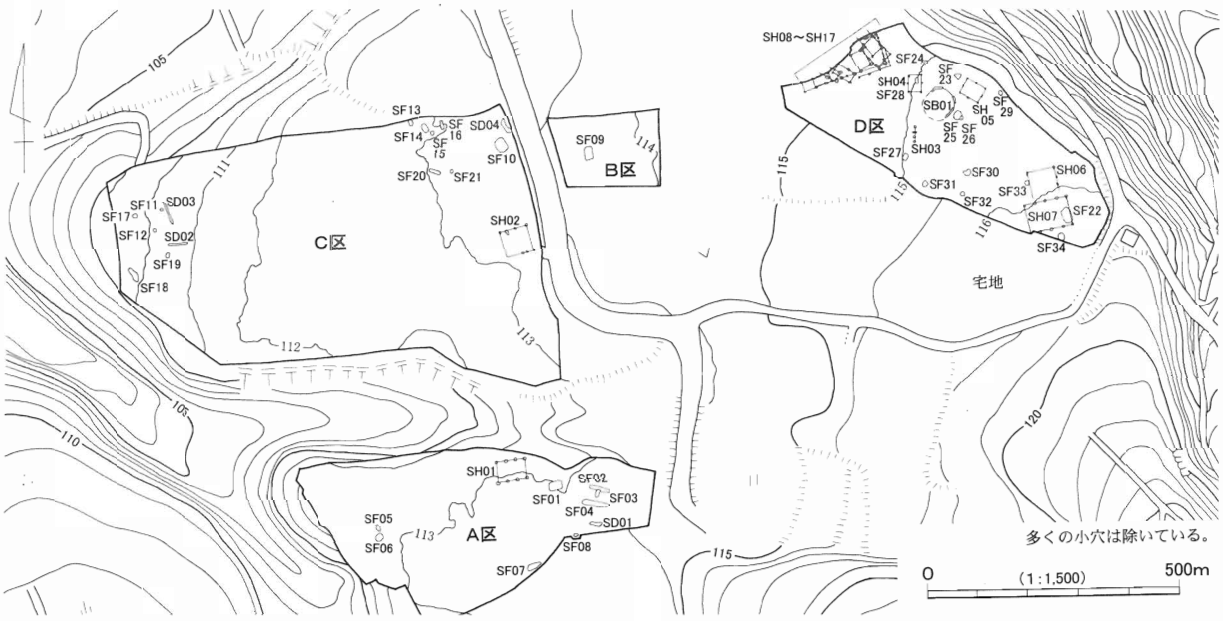
遺構と遺物　検出遺構には、竪穴住居跡・（掘立柱）建物跡・小穴・土坑・溝・不明遺構がある。出土遺物には、縄文時代の遺物と中近世の遺物がある。縄文時代の遺物は中期を主とする。Ｄ区に集中するが、少数の出土は他でも認められる。中近世遺物は16世紀以降を主とし、全体に出土が認められる。

竪穴住居跡は、Ｄ区で１基だけ発見されている。出土遺物から縄文時代中期のものと判断できる。SF26は縄文時代の石囲炉と考えられるが、焼土は観察されなかった。一方、落し穴などといった縄文時代の土坑も発見されている。Ｄ区に多いが、Ｃ区にも認められる。

建物跡は各区で発見されており、全て中近世の遺構である。建物の規模・形状・間数などは様々で、数時期に分けられる。最大規模のものは、Ｄ区北縁に位置する約5.8m×14.9mのSH09である。

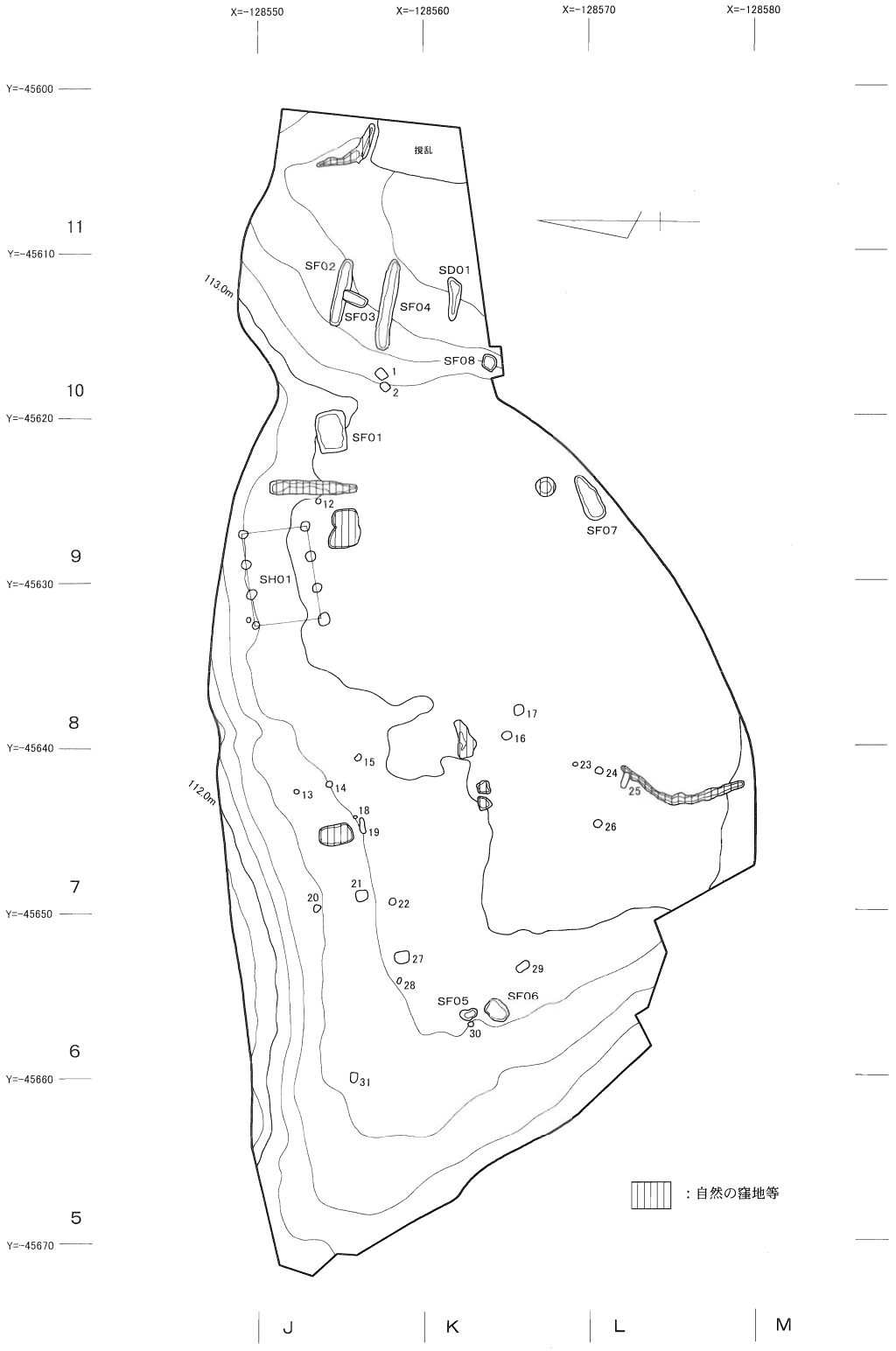
中近世の土坑も各区で発見されている。方形・円形・細長形と形状は様々で、さらに規模差を認めることもできる。また、焼土・炭化粒・礫の有無の違いもあり、火葬に関連した土坑もある。

さらに、Ａ区のＪ10グリッドで炭窯が３基、集中して発見されている。土坑として扱っているが、溝状を呈する。溝状遺構や不明遺構の検出は少ない。また、性格を明確に示すことができるものはほとんどなく、人為によるものか疑わしいものも多い。



第67図　全体概要図

2．A区の遺構



小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。
番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

0　(1:400)　20m

第68図　Ａ区遺構配置図

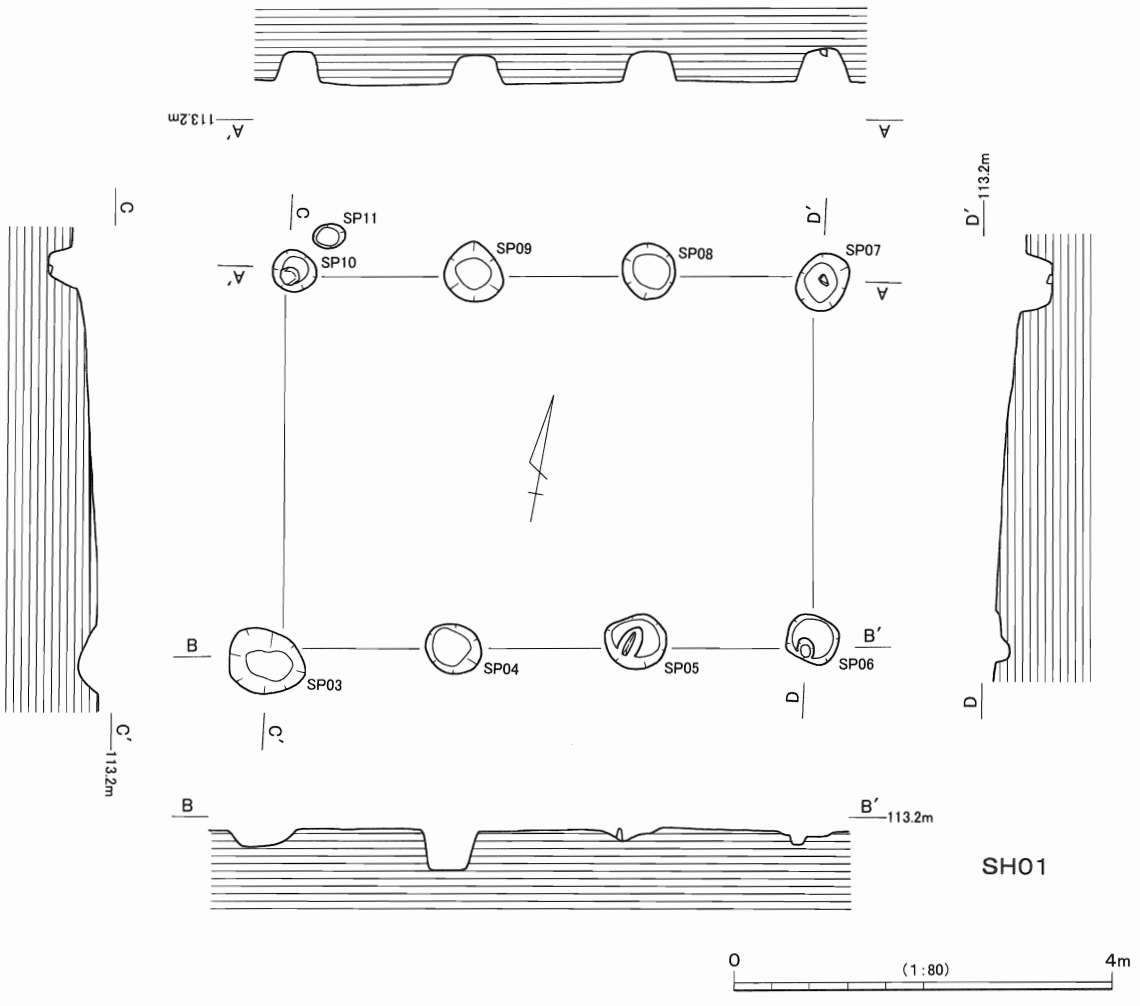
Ａ区は本遺跡の南部に位置する。南北と西側は急傾斜で下る斜面が巡り、Ｂ～Ｄ区（北側）とは地形的に分割されている。調査区西部では西に下る緩斜面、中央部では平坦部および北に下る斜面が検出できた。調査区東部では、丘陵状に盛り上がった地形が検出できた。

中央の平坦部は、遺構が少ない。遺構の大半が周囲の斜面部に分布する。北側斜面際の掘立柱建物跡１棟、調査区東部斜面の炭窯３基のほか、火葬関連の土坑や小穴がある。出土遺物には縄文土器もあるが、大半が中近世のものである。発見遺構の多くは中世以降のものであると判断できる。

（１）建物跡

ＳＨ０１（第69図）

Ｊ８～Ｊ９グリッドに位置する。１間×３間（4.0m×5.6m）の掘立柱建物跡で、長軸は東西に近い。柱穴は直径0.6m前後が多く、北辺４穴の深さは同様である。SP08から土師質土器片が出土している。本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。



第69図　SH01

（2）土　坑

ＳＦ０１（第70図）

Ｊ９グリッド東部に位置する。平面長方形で、長軸をほぼ東西にする。長軸約2.6ｍ、短軸約1.9ｍ、深さ約0.4ｍである。覆土に炭化粒を含むが、焼土・被熱はない。陶器片と黒曜石片が出土、本遺跡の主体時期（第４節参照）も考慮すると、中世後半以降（16世紀以降）の土坑であると判断できる。

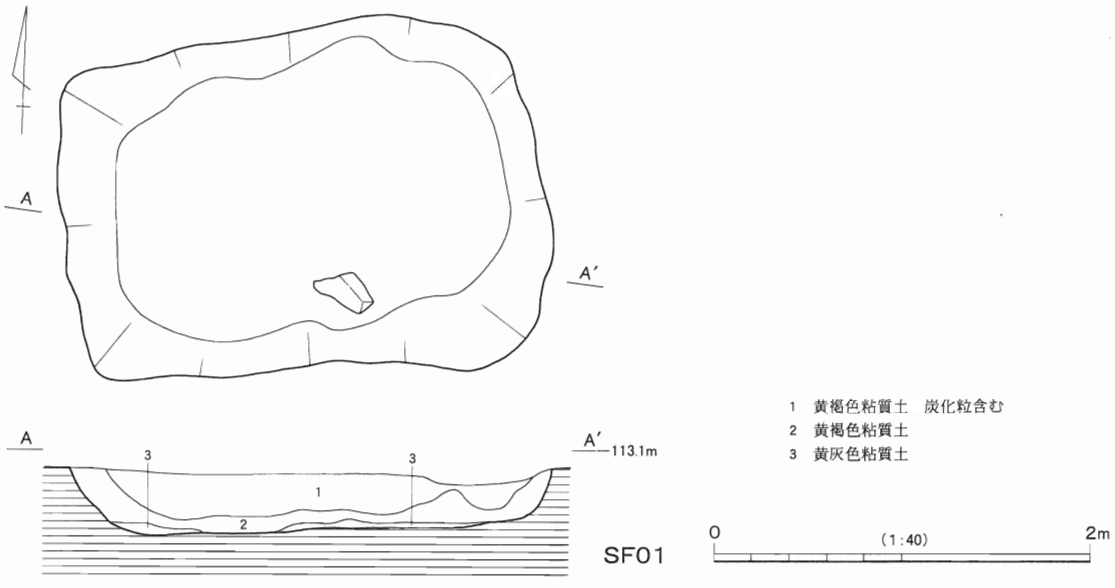
ＳＦ０２～ＳＦ０４（第71図）

Ｊ10グリッド東部、北西に下る斜面地に立地する。SF02とSF04はいずれも溝状に長く、長軸をほぼ東西にして平行に並ぶ。長軸はSF02が約4.2ｍ、SF04が約5.5ｍである。短軸は0.8ｍ前後、深さは最大約0.2ｍである。いずれの底面も東に高くなる。覆土は複雑だが、全体に炭化粒・炭化材を多く含んでいる。また、部分的に焼土粒を多く含み、底面および壁には顕著な被熱が認められた。

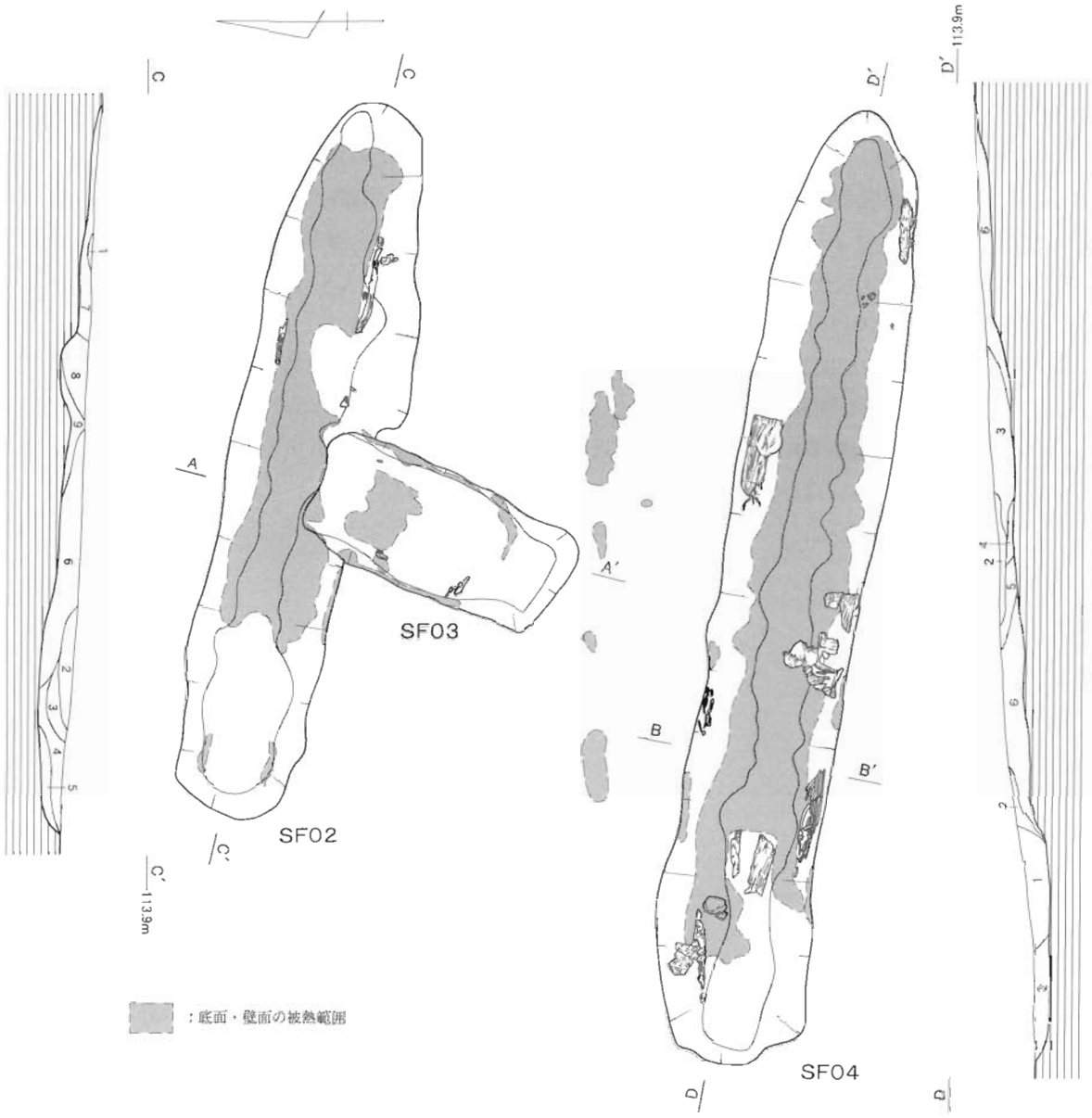
SF03も溝状を呈するが、SF02に切られ南部だけ残存している。長軸は残存約1.60ｍでSF02に直行、短軸は約0.74ｍ、深さは最大約0.3ｍである。底面は北に高くなる。覆土はSF02・04と同様、炭化粒を多く含み、底面・壁に被熱が認められる。一方、覆土中の焼土粒が他より多い。出土遺物はない。

SF02～SF04は、炭窯であると判断できる。火葬跡である可能性も考えたが、人骨や銭などの出土はなかった。また、本遺跡で検出した他の火葬跡（SF07・SF18・SF20）をみると、長さは３ｍほど（棺より若干長い程度）で、傾斜はなく、これほど多くの炭化粒（材）もない。以上から、SF02～04は炭窯であり、SF02・SF04は西側、SF03は南側が焚口であると判断できる。底面における被熱の有無も、焚口と炭化室との違いを示しているのであろう。

SF04から、カワラケ片と鉄片が出土しているが、詳細な時期の特定は難しい。本遺跡の主体時期（第４節参照）からして、中世後半以降（16世紀以降）の炭窯である可能性を評価したい。なお、SF03とSF04の間に、南北に長い被熱跡の範囲が認められている。これも炭窯の残存である可能性が高い。一方、SD01もSF04に平行する溝状の遺構である（第68図）。炭化粒や焼土・被熱は認められず、炭窯とは認められないが、排水路などといった関連施設である可能性はある。



第70図　SF01



[SF02、SF03]

1	黄褐色砂質土	炭化粒含む	8	暗灰黄色砂質土	炭化粒含む
2	灰黄色砂質土	炭化粒含む	9	暗灰黄色砂質土	炭化粒・焼土粒含む
3	黄褐色砂質土	炭化粒を多量に含む	10	黄褐色土	炭化粒・焼土粒含む
4	暗灰黄色砂質土	炭化粒含む	11	灰黄褐色土	炭化粒含む
5	暗灰黄色砂質土	炭化粒を多量に含む	12	灰黄褐色土	炭化粒・焼土粒含む
6	灰黄色砂質土	炭化粒を多量に含む	13	暗灰黄褐色土	炭化粒含む
7	灰黄褐色砂質土	炭化粒・焼土粒含む			

[SF04]

1	暗灰黄色砂質土	炭化粒を多量に含む
2	暗灰黄色砂質土	炭化粒・焼土粒含む
3	暗黄色砂質土	炭化粒含む
4	暗灰黄色砂質土	炭化粒を多量に含む
5	灰黄色砂質土	炭化粒含む
6	暗灰褐色砂質土	炭化粒・焼土粒含む

0 (1:40) 2m

第71図　SF02～SF04

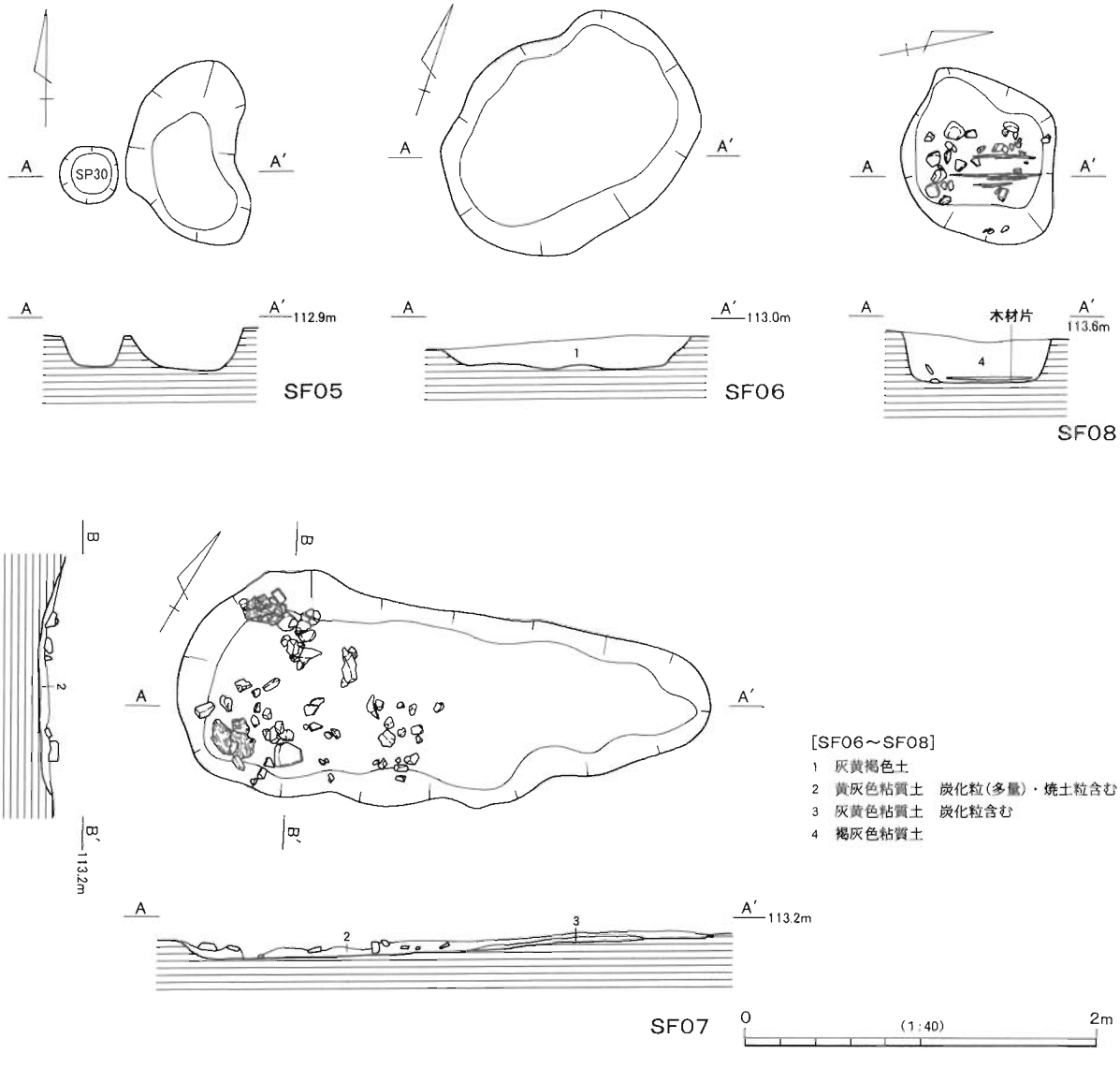
ＳＦ０５・０６（第72図）

Ｋ６グリッドの北西部、西側の谷への落ち際に立地する。双方とも平面不整形で、長軸はほぼ南北を示す。規模は、SF05が長軸約1.1m、SF06が長軸約1.5m、深さはともに0.2m前後である。

SF05・SF06とも、炭化粒・焼土粒・骨（片・粉）は認められていないが、被熱した６点の銭（SF05：第98図46～51、SF06：第100図58～63）が出土している。その他の出土遺物はない。

以上から、別の場所で火葬した骨および六道銭を集めて、ここに納めたものと判断できる。なお、SF05とSF06は南北に並ぶ（北：SF05、南：SF06）が、さらに北側から被熱した銭６枚（第98図52～57）、その周辺の表土中からも被熱した銭４枚（第100図64～67）が出土している。墓穴の残存は認められなかったが、SF05・SF06以外に最低２基の墓が周囲に存在したと考えることができる。

出土銭には、11～12世紀初鋳の北宋銭が多いなか、14～15世紀初鋳の明銭も含まれる。また、被熱や錆によって各銭の詳細を判断することは難しいが、15世紀～近世初頭に多い模鋳銭が含まれている可能性がある（出土銭の詳細は本節５参照）。さらに六道銭であることも考慮すると、中世後半（15世紀中頃～16世紀）の墓群である可能性が高いと判断することができる。



第72図　SF05～SF08

ＳＦ０７（第72図）

Ｌ９グリッドの北縁、比較的平坦になった場所に立地する。平面は不整形だが、三角形に近い。長軸は約2.8m、短軸は約1.3mである。長軸の方向は北より東に傾く。調査区の南東になる丘陵地形に合わせて設けられたとも推測できる。深さは最大0.1mと浅く、底面は北東側が若干高い。

覆土全体に炭化粒・焼土粒が多く、幅広になる南西側では炭化材や被熱のある礫の残存が検出されている。また、散在的に骨の小片や骨粉が認められている。出土遺物はなく、詳細な時期の明示は難しい。しかし、火葬の跡（荼毘の跡）であることは明らかであると判断できる。確かではないが、SF05・SF06との関連で中世後半（15～16世紀）のものである可能性が指摘できる。

ＳＦ０８（第72図）

Ｋ10グリッドのほぼ中央、西に下る斜面に立地する。平面は不整形だが、一辺0.9m程度の方形にも近い形状を呈している。深さは約0.3m、断面は箱形～逆台形を呈している。

出土遺物はないが、覆土中に骨の小片が数点、散在的に認められている。また、底に木材片と礫の残存が検出されている。具体的に示すことは難しいが、木材と礫は何らかの底の構造物であったものであると推測することができる。一方、覆土中の炭化粒や焼土粒、礫などの被熱、木材の炭化など、ここで火を使った痕跡は認められていない。

以上から、別の場所で火葬された骨を集めて納めた墓穴であると判断できる。出土遺物がなく、詳細な時期の明示は難しいが、SF07とSF08は10mも離れていないことから、同時期の火葬に伴う関連遺構である可能性を指摘することができる。

（３）その他　（第68図）

小穴（SP01～SP31）には、SH01の柱穴を含む。その他は散在的に分布しており、性格を明確にできるものはない。SP17から縄文土器片、SP14から土師質の土器片が出土している。

溝状の自然流路や窪地（ともに遺構番号は付していない）もいくつか検出されている。これらからも、縄文土器や中近世の土器の破片が出土している。

3．B・C区の遺構

B・C区は、本遺跡の中央～北西部に位置する。B区東半より東側は、削平によって遺跡が消失している。北側は工事範囲外である。出土遺物の多くは中近世で、ほかに少数の縄文時代の遺物がある。

遺構は、B区の西半～C区の北東部、C区の中央部、C区の東部の3ヶ所に集中して分布している。C区の東部だけは西に下る斜面地で、ほかは平坦部に立地する。検出遺構には小穴・溝・土坑がある。小穴には、柱穴も含まれると考えられるが、抽出できる建物・施設跡は掘立柱建物跡1棟（SH02）だけであり、遺構集中範囲から外れたものである。なお、SH02および小穴の多くは、出土遺物などから中世後半以降の遺構であると判断できる。

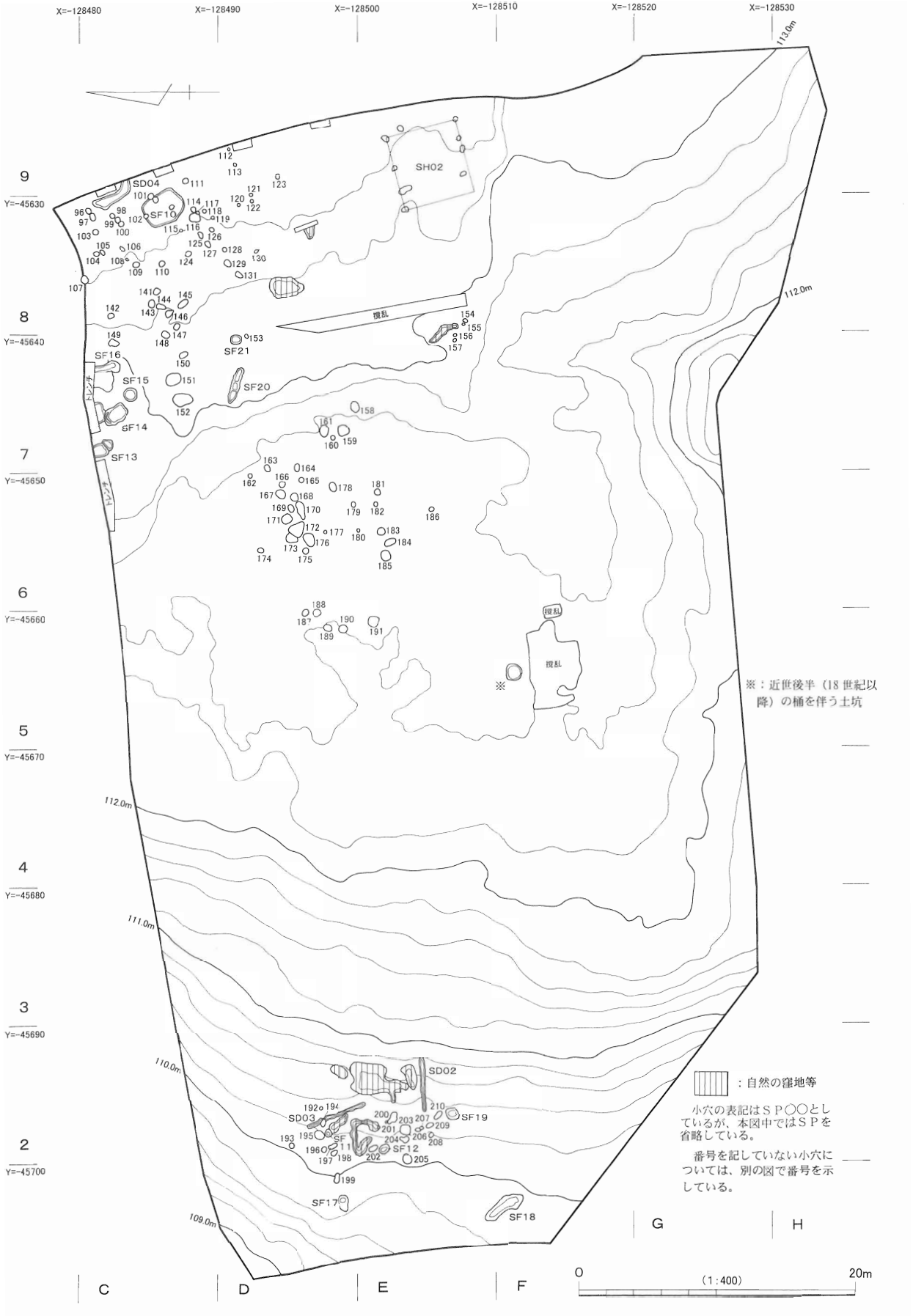
土坑の形状・規模・特徴は様々である。長軸3m弱の方形土坑、小さな焼土坑、火葬関連遺構が数基ずつあり、多くは中世後半以降である可能性が高いと判断できる。一方、出土遺物から縄文時代と判断できる土坑も数基検出されている。その中には、落し穴や火の使用を推測できる土坑がある。

（1）小穴・溝　（第73・74図）

多くの小穴があるが、SH02の柱穴（7基）以外は、性格を明確にすることはできない。縄文土器片がSP44・173（第95図9）、剥片類がSP58・176から出土している。SP173からはカワラケも出土、陶磁器・カワラケ片や鉄片などといった中近世の遺物は、SP63・75・80（第97図29）・81・97・101・103（第97図31）・167・168・170・171・177（第97図36）・183・184・190・191・195・205からも出土している。

溝（SD02～SD04）は、出土遺物もなく時期・性格とも不明である。

第73図　B区遺構配置図



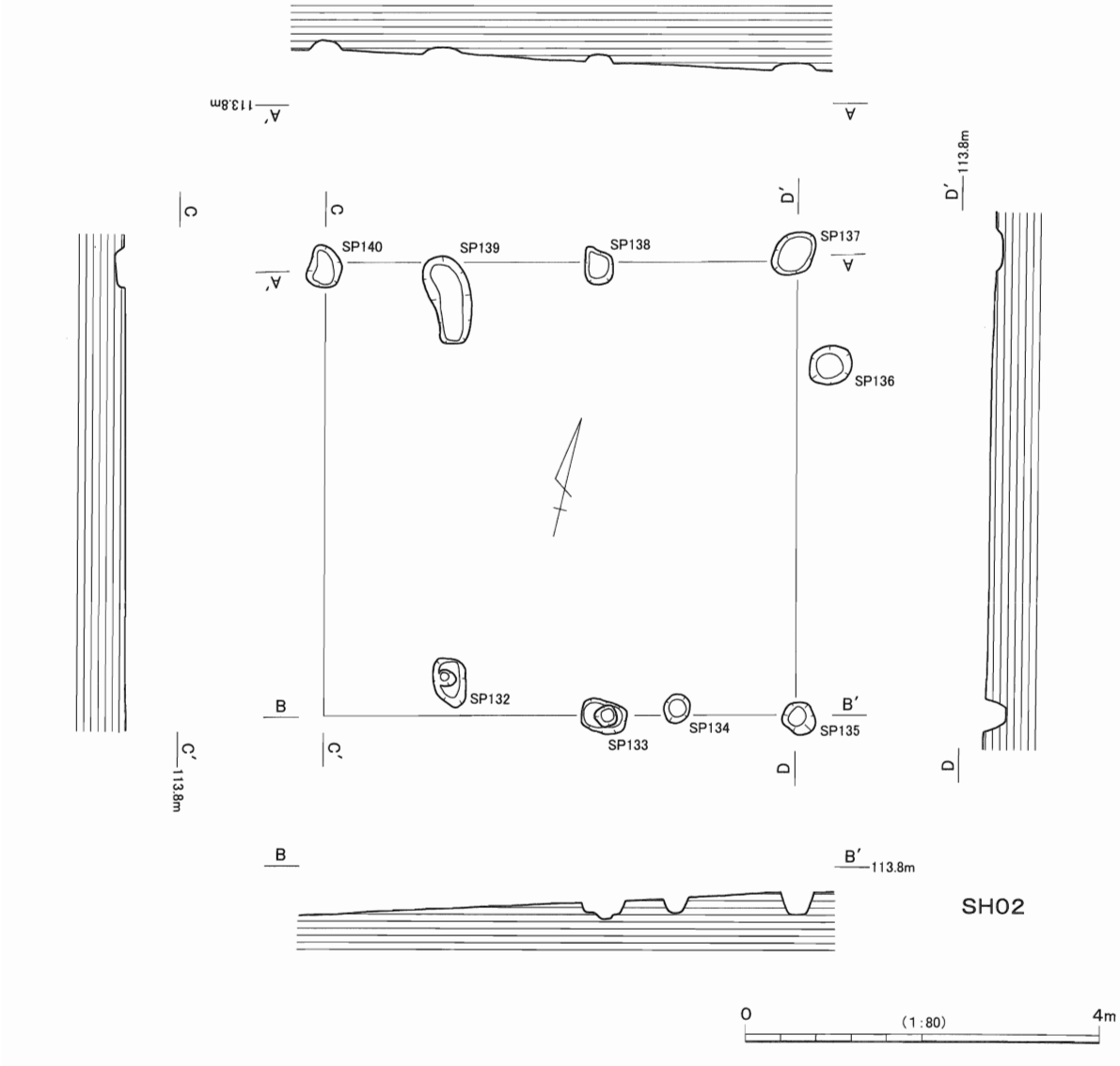
第74図　Ｃ区遺構配置図

（２）建物跡

ＳＨ０２（第75図）

Ｅ８～Ｅ９グリッドに位置する建物跡であり、建物の方向は方位に近い。１間×３間（5.1m×5.3m）であるが、東西辺の１間は長すぎ、南北辺の３間の柱間は均等でない。また、南辺の一柱穴であるSP132は、内側にずれてしまっている。柱穴は概ね直径0.4m前後であり、SP132・SP133の中央には直径0.2m強の柱痕が認められている。最も深いもので検出面から約0.3mであり、全体的に非常に浅い。南西隅の柱穴は、削平のために消失している。なお、SP139が内側に長くなっているのは、柱の設置もしくは抜き取りに関係する可能性もある。

SP138から土師質の土器片が出土しているが、極めて小さな破片であり、詳細な時期を特定できる根拠にはなり得ない。本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。



第75図　SH02

（3） 土　坑

ＳＦ０９・ＳＦ１０（第76図）

SF09は、Ｃ10グリッド南寄りに位置する。平面長方形で、長軸をほぼ南北にする。長軸約2.6m、短軸は約1.7m、検出面からの深さ約0.25mである。覆土上層に炭化粒を含むが、焼土や被熱部は認められない。また、人頭大以下の石が検出されているが、人為である根拠は認められない。

SF10は、Ｃ８グリッド東部に位置する。平面は長方形に近い不整形、長軸は北西を向き、約2.9m、短軸約2.4m、検出面からの深さ約0.1mである。数個の石があるが、一つの大石が割れたものである（茶畑のためか）。SP101（鉄片・陶器片が出土）・SP102と切り合うが、SF10の方が新しい。一方、P1・P2はSF10の底で発見され、SF10より古い小穴もしくはSF10に属する小穴である可能性がある。

両土坑は相違点もあるが、規模などは近い。さらに、SF09はSF01と類似する。SF10からカワラケ・土師質土器片が出土しており、中世後半以降（16世紀以降）の土坑である可能性が高い。

ＳＦ１１～ＳＦ１３（第77図）

いずれも焼土のみを覆土とした、小規模で浅い不整円形土坑である。

SF11とSF12とは近く、Ｄ２～Ｅ２グリッド南縁の傾斜地に位置する。SF11からは鉄製品（第100図68）、SF12からは中近世の陶磁器片が出土している。周辺には多くの小穴や溝がある一方、火葬関連の遺構も分布している。これらと関連した遺構である可能性も指摘できるが、推測の域を出ない。

SF13はＣ７グリッド西寄りの平坦部に位置する。出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

ＳＦ１４・ＳＦ１５（第78図）

SF14は、Ｃ７グリッド北寄りに位置する。平面は胴張長方形、長軸は北より西に傾く。規模は1.8m×1.1m前後、深さは検出面から約0.55mである。底に小穴がある。覆土には拳大の礫を多く含む。

SF15は、SF14の南東に位置する。平面は直径0.9m強の円形、深さは検出面から約0.5mである。覆土中および底で拳大の礫を多く検出しているが、人為か否かは判断し難い。

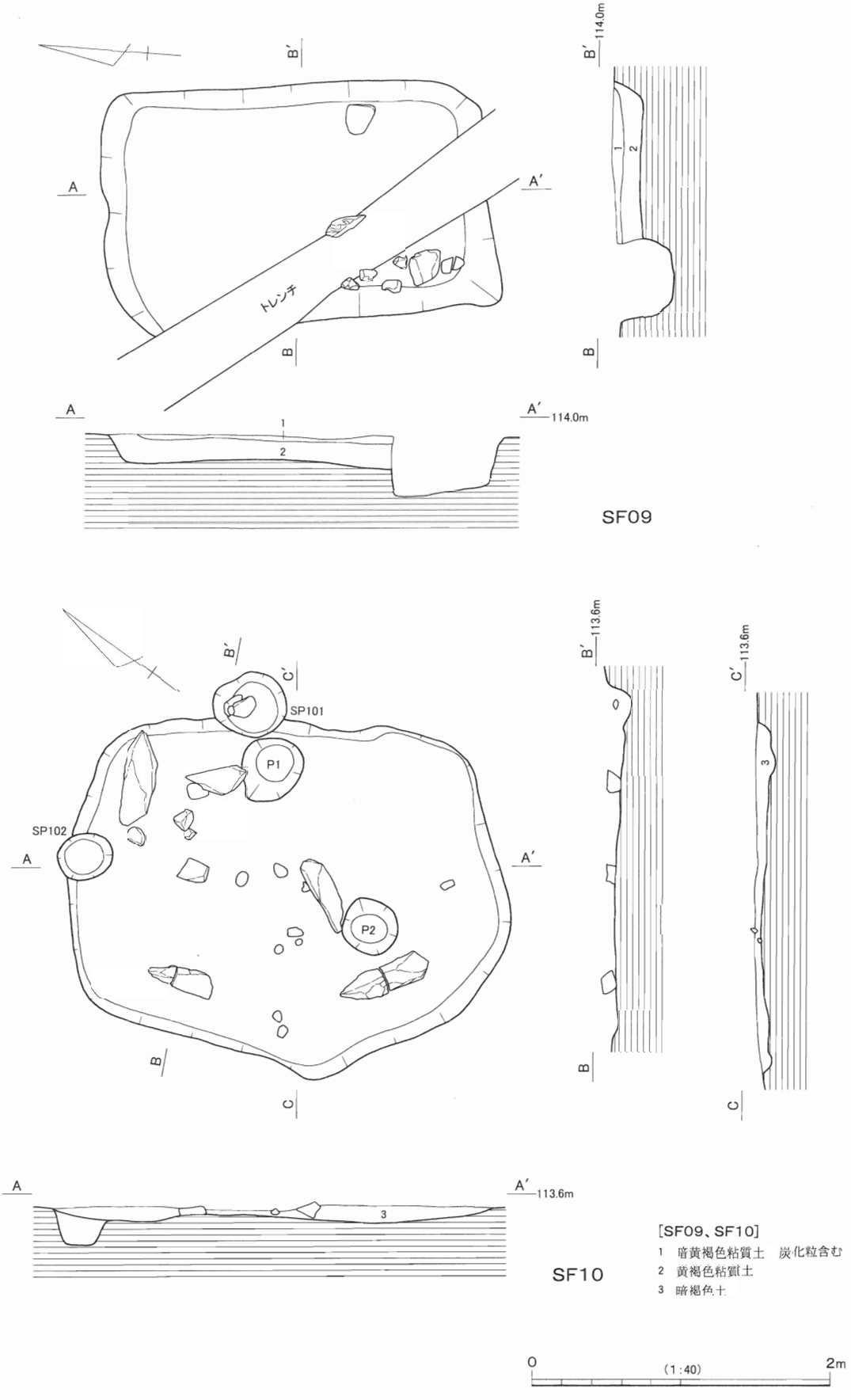
SF14・SF15とも、周辺では中近世の遺構・遺物が多いなかで、縄文土器片と剥片類だけが出土している。縄文時代の遺構であると判断でき、SF14は、遺構の形状および逆茂木を想定させる小穴から、落し穴である可能性が指摘できる。SF15も、平面形は異なるが、深さや覆土の状況はSF14と同じである。SF14と類似した性格の遺構、もしくは関連した遺構であると判断できる。ただし、遺構面が削平されているとはいえ、落し穴としてはSF14・SF15とも浅めである。

ＳＦ１６・ＳＦ１７（第78図）

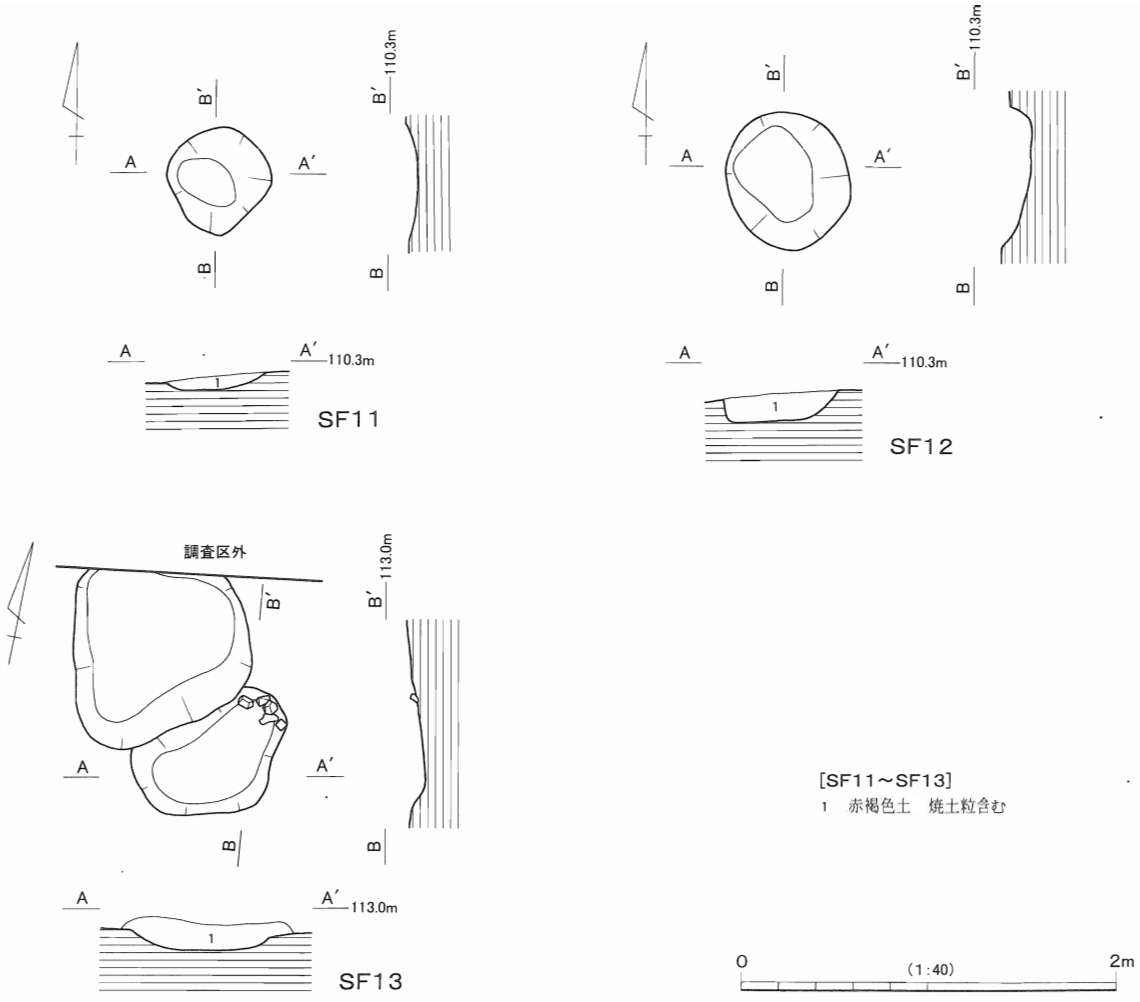
SF16は、SF15の北東に位置する。南北に長い不整形な溝状を呈し、深さは0.1m以下と浅い。覆土中に炭化粒を多く含む。また、南部で拳大の礫を多く検出しているが、被熱の痕跡が認められている。

SF17は、Ｄ１グリッド南縁、西に下る斜面地に立地する。平面は東西に長い楕円形（長軸約1.0m、検出面からの深さ最大約0.45m）だが、底面は東寄りで円形になる。覆土に多くの礫が認められている。

SF16は縄文土器片、SF17は縄文土器片と剥片類だけの出土であり、ともに縄文時代の遺構である可能性が指摘できる。しかし、SF16については、縄文時代の火の使用と関係した遺構の可能性がある一方、周辺には中世の墓穴や火葬跡（SF20・SF21）も分布していることから、中世の火葬（荼毘）跡である可能性も考慮できる。また、SF17については、石器砕片が多く出土していることを特徴としてあげることができるが、詳細な時期の特定および遺構の性格についての評価は難しい。



第76図 SF09・SF10



第77図　SF11～SF13

ＳＦ１８・ＳＦ１９（第79図）

SF18は、Ｆ１グリッド北縁、西に下る斜面地の中で比較的緩い傾斜の部分に立地する。平面は北西から南東へと長く、長軸約3.2m，短軸最大約1.1m、深さ最大約0.3mである。南東が幅広、北西に尖る。北西部では多くの焼土、中央部では多くの炭化粒・焼土粒が認められるほか、少量の焼骨片が認められている。南東部では、炭化粒と被熱のある礫が多く認められている。以上から、火葬の跡（荼毘跡）と判断でき、各部の違いは、火葬施設の構造もしくは諸作業による影響の違いを示すものと推測できる。

SF19は、SF18の北東（斜面上方）約８m、西に下る斜面に立地する。長軸南北（0.9m強）の平面楕円形、検出面からの深さ最大約0.2mである。覆土に炭化粒を多く含む。礫も多く認められているが、被熱は認められていない。出土遺物や骨は確認できず、SF19単独でその性格を把握するということは難しい。しかし、次のようにSF18と関係する遺構であると指摘することはできる。

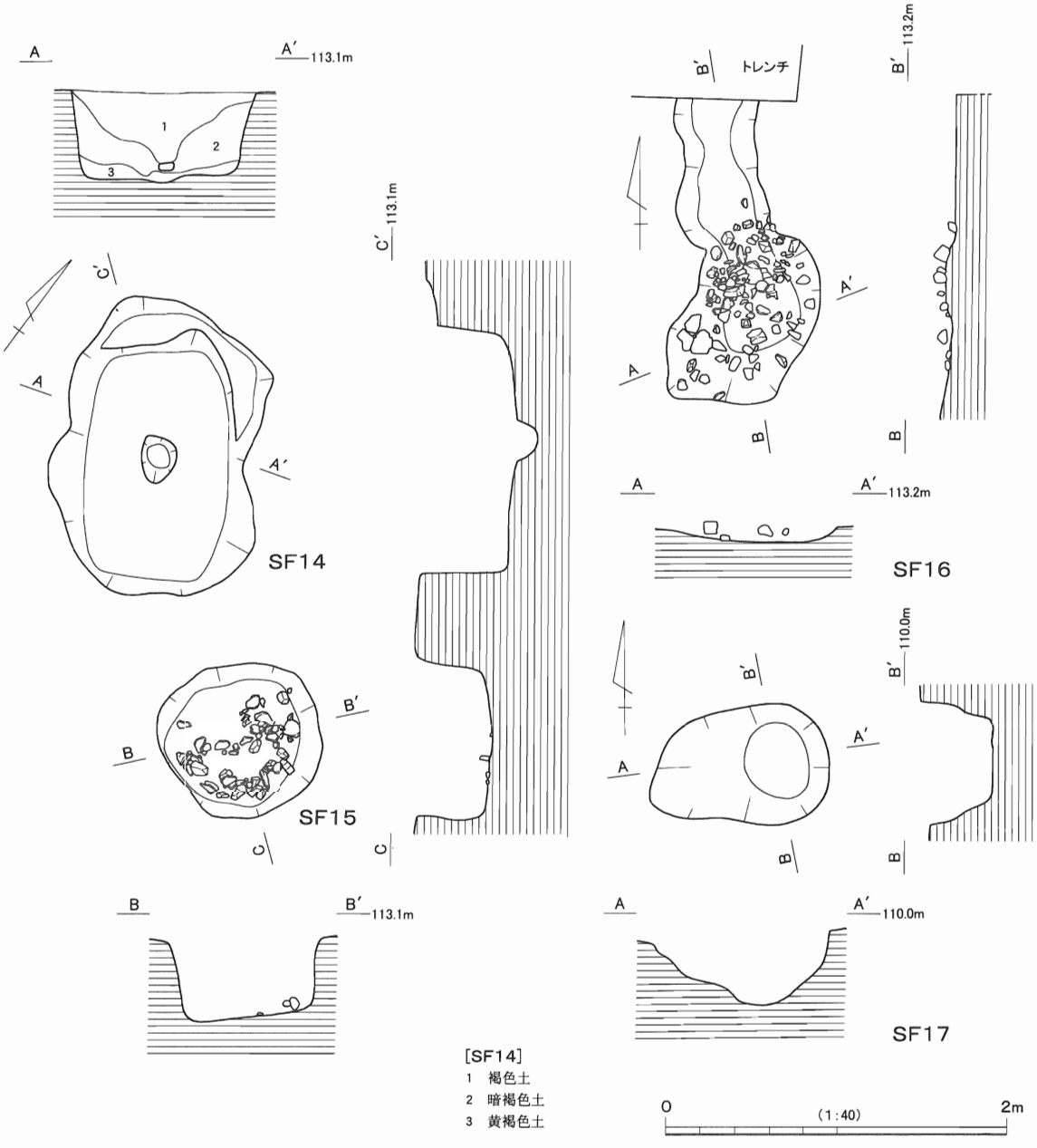
Ａ区のSF07・SF08では、火葬跡と墓穴という組み合わせが把握できている。一方、このSF18・SF19は比較的近くに位置しており、遺構の規模・形状などの諸特徴をみると、SF07・SF08との共通点を多く認めることができる。以上から、出土遺物はなく、SF19では骨の残存も認められていないが、SF07・SF08と同様であると指摘できる。すなわち、中世後半（15～16世紀）の双方関連した火葬（荼毘）跡（SF18）と火葬したものを集めて納めた墓穴（SF19）である可能性が高いと判断することができる。

ＳＦ２０・ＳＦ２１（第79図）

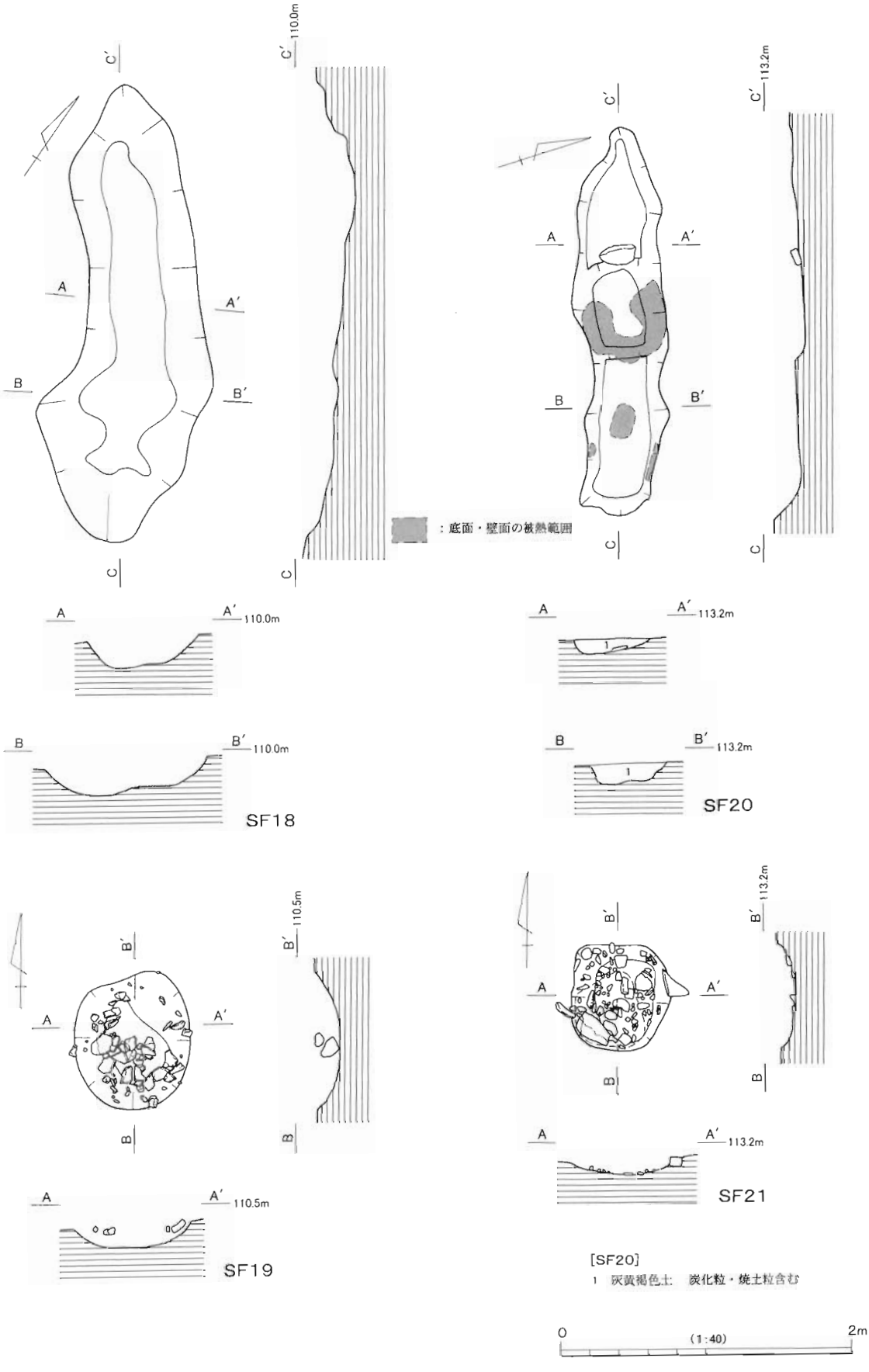
SF20は、Ｄ７グリッド北部に位置する。東西に長く、西端が尖る。長軸約2.7m、短軸0.6m前後、中央部が一段深くなり、検出面からの深さ最大約0.2mである。覆土に多くの焼土粒・炭化粒を含み、礫および底面の一部に被熱が認められている。極小さな縄文土器片１点だけが出土している。

SF21は、SF20の東２mに位置する。長軸は南北で約0.7m、短軸約0.6m、検出面からの深さ約0.15m、平面は長方形に近い。覆土には炭化粒が多く含まれている。また、礫に被熱が認められ、底の中央に赤化した部分が認められている。出土遺物はない。

遺構の特徴がSF07・SF08およびSF18・SF19と類似することから、SF20は火葬（荼毘）跡、SF21は火葬骨などを集めて納めた墓穴であり、中世後半（16世紀頃）のものである可能性が高いと判断できる。ただし、SF20・SF21で骨は確認されていない。また、SF21の赤化範囲は他と共通しない。



第78図　SF14～SF17



第79図 SF18～SF21

4．D区の遺構

小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。
番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

0　(1:400)　20m

第80図　Ｄ区遺構配置図

Ｄ区は、本遺跡の東縁部に位置する。西側のＢ区との間は、削平によって遺跡が消失している。北側は工事範囲外である。Ｄ区の遺構・遺物は、縄文時代中期と中世後半～近世前半に大別される。

縄文時代については、竪穴住居跡１軒と土坑数基が検出されている。土坑には落し穴の可能性があるものを含む。住居跡は残りが悪い。周囲に石囲炉のような土坑や縄文土器が多く出土する窪地などが分布しており、遺跡の残りが良ければ、竪穴住居跡も多く検出できたと推測できる。なお、縄文時代の遺構・遺物は、Ｄ区の中でも中央部に集中する。

中世後半～近世前半の遺構としては、多くの掘立柱建物跡をあげることができる。調査区南東部に２棟、中央部に２～３棟が検出されている。さらに、北縁部では掘立柱建物跡９棟と施設跡が検出されているが、規模や方向から２つに大別できる。重なって検出されており、時期による変化をみることができる。なお、建物内の施設である可能性がある土坑（SF22・SF28）も検出されている。一方、Ａ・Ｃ区のように墓に関係すると判断できる土坑の発見はない。

（１）竪穴住居跡

ＳＢ０１（第81・82図）

Ｂ17～Ｃ17グリッド、平坦部に立地する。削平と倒木跡の影響を受けており、残存状況は悪い。

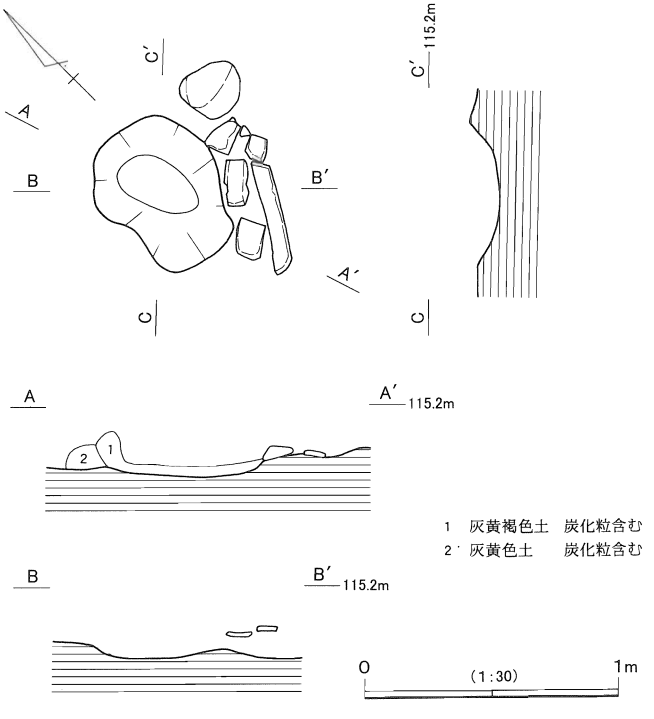
壁体は、南東部は削平によって大きく消失、北西部も一部が倒木痕で破壊されている。ただし、楕円形に壁が巡り、最大幅0.4m、深さ0.05m程の周壁溝を伴うことがわかる。柱穴は、P1・P2・P4・P6（もしくはP5）・P7（・P8）・P9・P13が検出され、７～８本の柱が住居内縁に巡っていたと復元できる。柱穴の直径は0.3～0.6m、深さは0.3～0.6m、柱の間隔は均等でない。

埋甕が、柱穴で囲まれた範囲の南西にある（P16）。口縁部および胴下半～底部を欠く深鉢（第95図８）が、正位で埋められていた。上に向いた口縁部については、後世の削平で失われた可能性もあるが、下にしていた胴下半～底部については、埋設時には既に欠いていたと判断できる。穴は、埋設に余裕の少ない大きさである。土器の内部は土だけしかなかった。

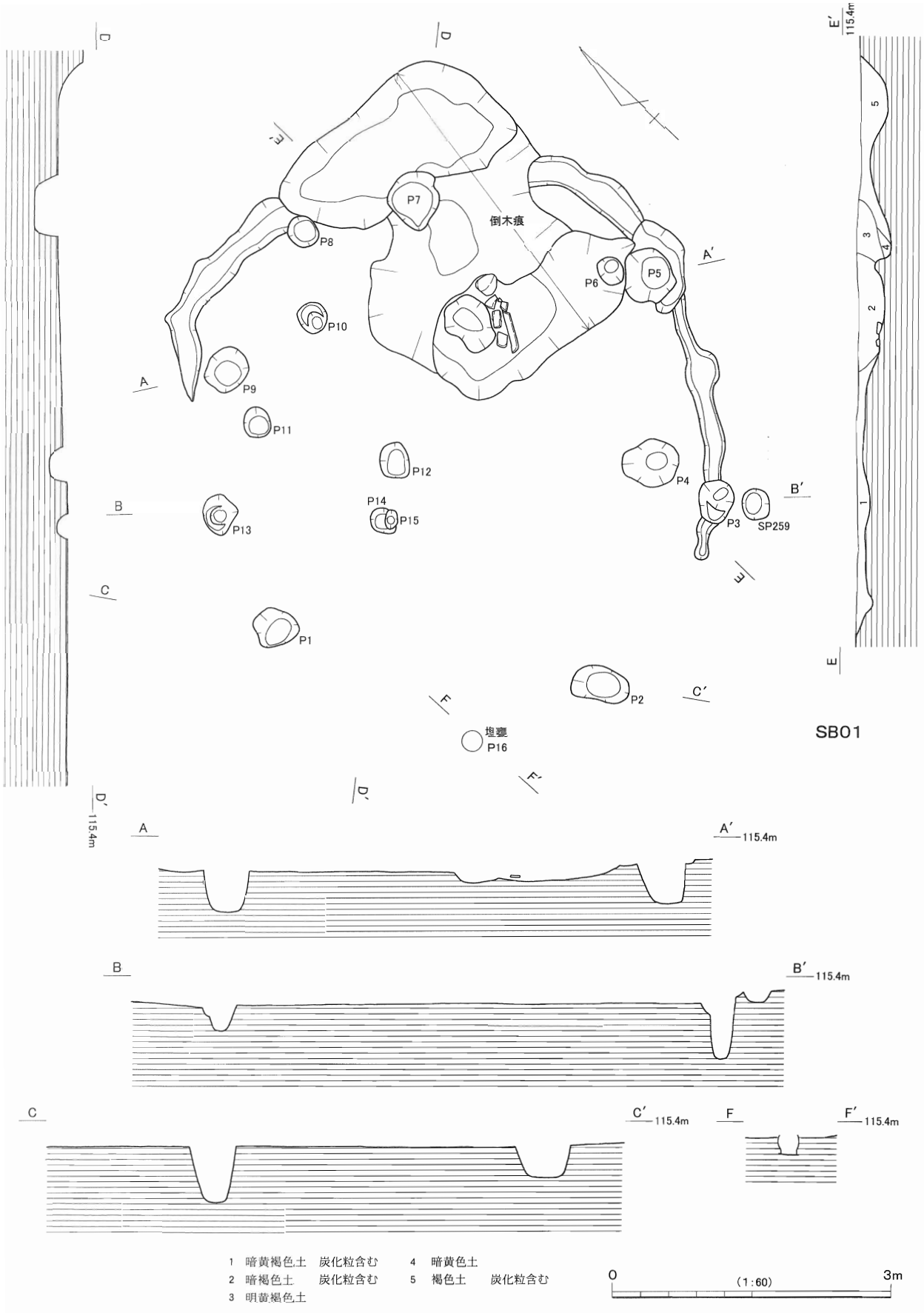
埋甕の位置と、柱穴間の中でP1－P2が広いことから、南西が出入口にあたると推測できる。さらに、壁・周壁溝の残存や柱穴・埋甕の配置から、主軸は北西を向き、主軸長約6.8m、直行方向約6.0mの平面楕円形の竪穴住居跡であると復元できる。

炉は、倒木痕の影響を大きく受けた状態で検出されている。不整形な炉で、石なども乱れた状態になっている。また、炉の位置も移動している可能性がある。

住居範囲全域で縄文土器片（第95図１～８など）や石器（第96図17・23・24など）・剥片類が多く出土しており、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡であると判断できる。



第81図　SB01内の炉


SB01
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
SP259
倒木痕
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
115.4m
1 暗黄褐色土 炭化粒含む
2 暗褐色土 炭化粒含む
3 明黄褐色土
4 暗黄色土
5 褐色土 炭化粒含む
0
(1:60)
3m

第82図　SB01

（２）建物跡、柵などの施設跡

ＳＨ０３（第83図）

Ｃ16グリッド東縁に位置する。南北約3.1ｍに、４基の柱穴が等間隔に並ぶ。柱穴は概ね、深さ約0.25ｍである。SP255・SP256は、抜き取り痕であろうか、柱穴が東西に長くなっている。建物跡としては検出できず、柵などの施設跡である可能性もある。しかし、西に下る傾斜地にあり、さらに西側に撹乱があることから、柱穴列より西に展開する掘立柱建物跡である可能性も考えることができる。

出土遺物はないが、本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ０４・ＳＨ０５（第84図）

SH04は、Ｂ16～Ｂ17グリッドに位置する2.7ｍ×3.5ｍの掘立柱建物跡で、長軸は南北である。一方のSH05は、Ｂ17～Ｂ18グリッドに位置する3.2ｍ×4.3ｍの掘立柱建物跡で、長軸は北より西に傾く。ともに２間×２間の建物跡であると考えられるが、各辺中央の柱穴が若干外側に設けられている場合が目立つ。他とは異なる性格の柱（棟持柱など）を含んでいる可能性も否定できず、１間になる部分があるかもしれない。柱穴の直径は0.4ｍ以下、深さは検出面から0.2ｍ前後である。SH04・SH05ともに自然流路と重なるが、SH04・SH05の方が新しい。なお、SH04の中央北寄りに長方形土坑（SF28）がある。土坑として後述するが、SH04の内部施設である可能性もある。

ともに出土遺物はない。本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

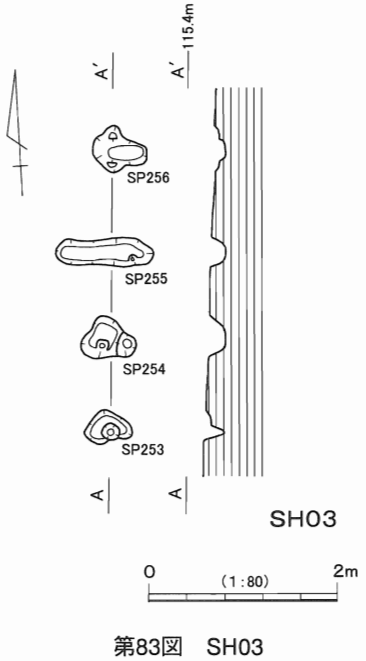
ＳＨ０６（第85図）

Ｄ19グリッド、北西に下る緩斜面に立地する。３基の柱穴が南北約3.6ｍに並び、その北端のSP227から直行方向に約5.3ｍの位置にSP228がある。SH07と方向や柱間が類似しており、近い時期の掘立柱建物跡であると評価できる。しかし、不完全な抽出であり、南北に並ぶ３基の間隔は一定でない。正しい建物跡の抽出ではない可能性もある。出土遺物はない。

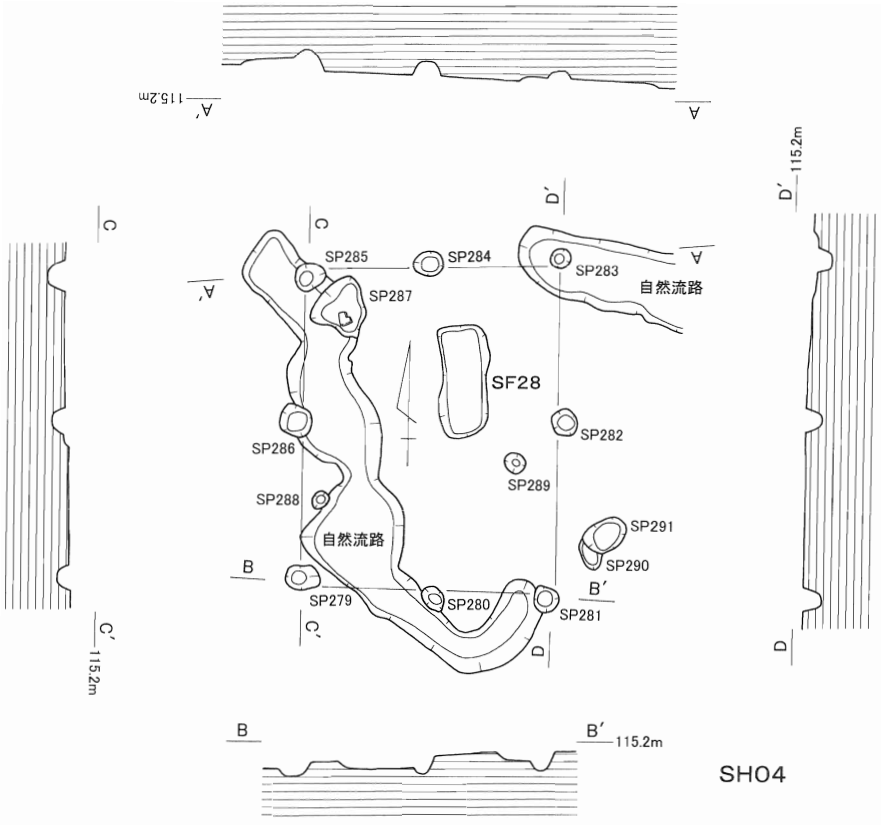
ＳＨ０７（第85図）

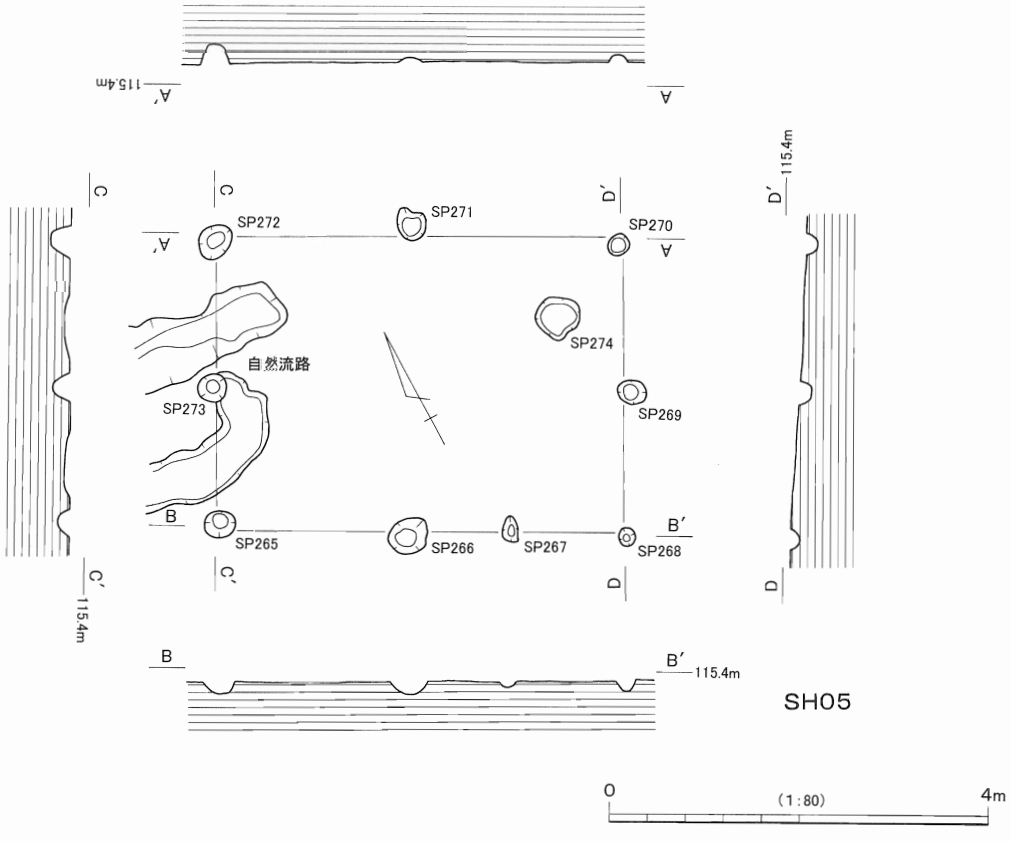
Ｄ19～Ｅ19グリッド、北西に下る緩斜面に立地する。１間×４間（5.7ｍ×8.3ｍ）の掘立柱建物跡で、長軸は東西である。柱穴は直径0.5ｍ前後、深さ0.35ｍ以下だが、南西隅は調査区外、その東の柱穴は小さい。東縁に内部施設の可能性がある土坑（SF22）があるが、これについては土坑として後述する。

出土遺物はない。本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

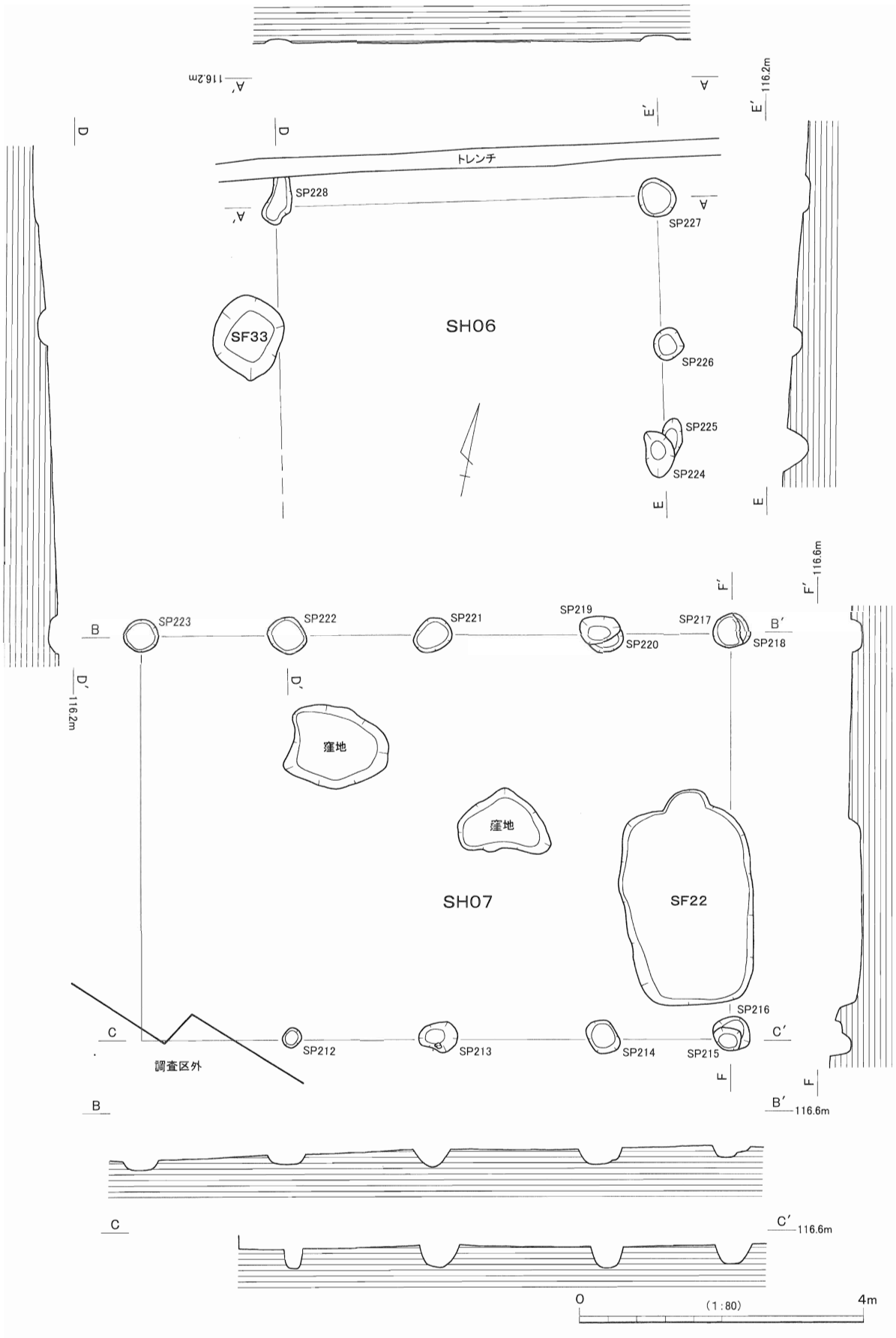


第83図　SH03

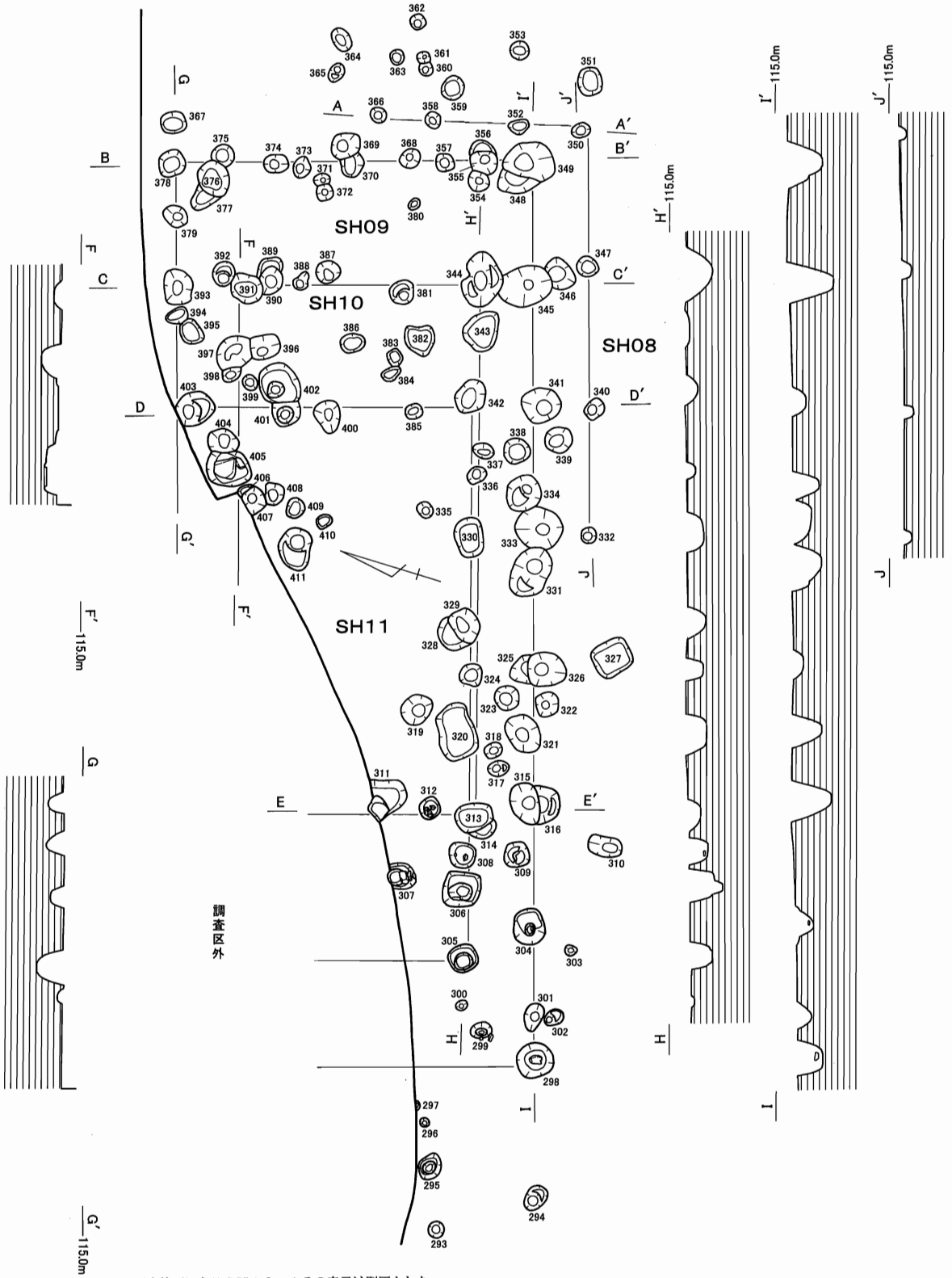




第84図　SH04・SH05



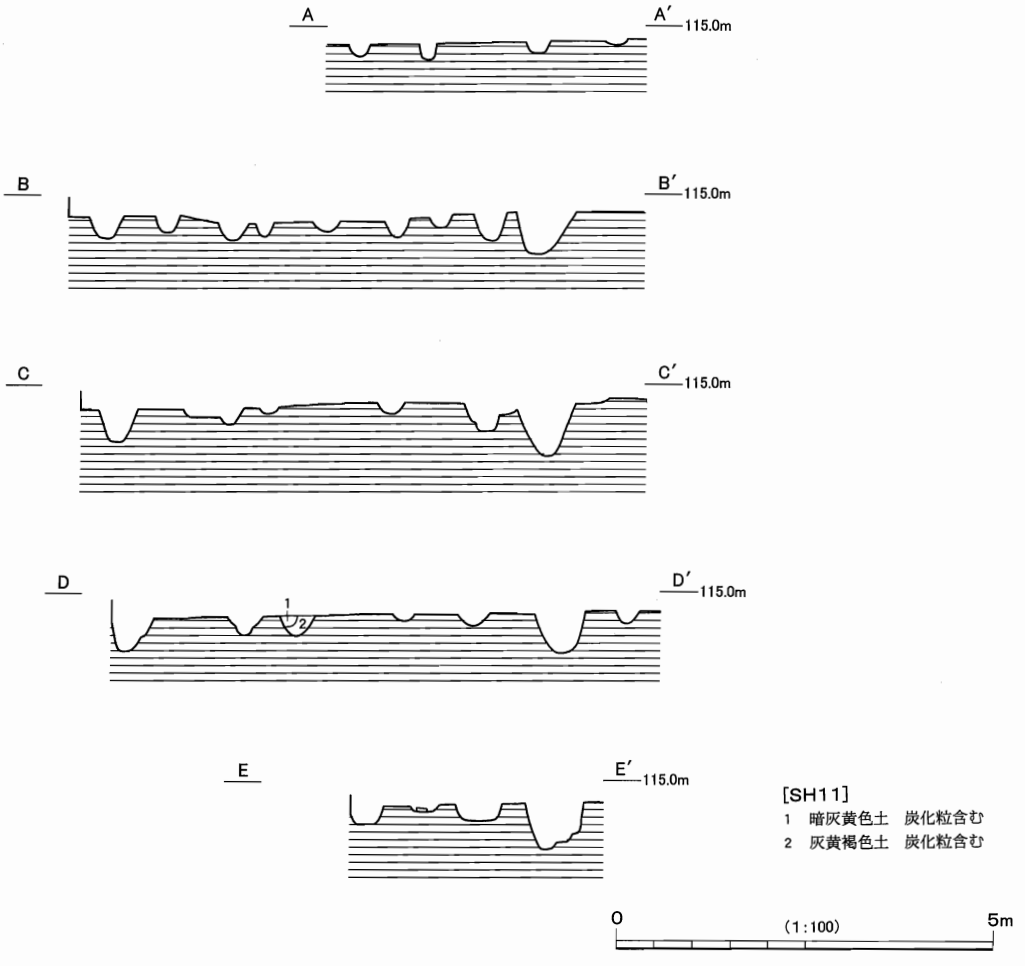
第85図　SH06・SH07



図中範囲にあるＳＨ１２～１７の表示は別図とした。

小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。

第86図　SH08～SH11



第87図 SH08～SH11断面

ＳＨ０８（第86・87図）

A16～B16グリッドに位置する。南北3.4mに4基の柱穴が並び、その南端（SP350）から西6.8mにSP347・SP340・SP332が並ぶ。SH09などと同様の方向を示すが、南北辺と東西辺は正確には直行しない。また、南北柱穴間は等間隔でない。柱穴は直径0.35m以下と小さく、深さは0.2m以下である。これらの特徴を考慮すると、SH09などに関連する柵などの施設跡である可能性が高いと評価できる。したがって、出土遺物はないが、SH09などと同様の時期の遺構である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ０９～ＳＨ１１（第86・87図）

B14～16グリッドで、同一方向の建物跡3棟が重なって検出されている。建物の長軸は東西に近いが、若干傾く。SH09は1～3間×7間（5.8m×14.9m）、SP374・SP368を評価すれば3間、SP370を評価すれば2間、いずれも浅く評価できないとすれば1間になる。SH10は1間×3間（4.0m×8.7m）、SH11は2間×5間（4.7m×9.0m）である。柱穴は直径0.5m以上、深さは0.2～0.8mでばらつくが、深い柱穴が多く石が残されていても顕著ではない。比較的強固な掘立柱建物であったと推測できる。

SP378（SH09）・SP313（SH10）から縄文土器片、ほか数基から剥片類が出土しているが、柱穴掘削などの際に混入したものであろう。SP315・SP304（SH09）から土師質土器片・陶器片、SP400（SH11）から陶器片（第97図30）が出土しており、また掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の中で建て替えられながら営まれた可能性が高いと判断できる。

なお、周辺域を含めて覆土に焼土塊を含む柱穴が分布している（SP315・SP323・SP329・SP333・SP411等）。SH08～SH17のなかで火事があったことを示すものと推測できる。

ＳＨ１２（第88図）

Ａ16～Ｂ16グリッドに位置する。１間×２間（3.6m×5.0m）の掘立柱建物跡、長軸は北西を向く。柱穴は直径0.5m以下、深さ0.3m以下である。とくに、北東辺と南西辺（２間）の中間にあるSP373・SP383は小さい。また、その北東辺・南西辺の２間は等間隔にならない。

SP401からカワラケ片が出土している。出土遺物および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ１３（第88図）

Ｂ15グリッドに位置する。１間×２間（3.6m×5.0m）の掘立柱建物跡で、長軸は北西を向く。四隅の柱穴は直径0.5m以上あるが、長辺中央（SP335・SP384）は小さい。長辺１間である可能性もある。

本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ１４（第89図）

Ａ16グリッド南西に位置する。１間×１間以上（2.6m×2.5m以上）、北西調査区外に展開する可能性のある掘立柱建物跡である。建物方向はSH12等と同様、柱穴は直径0.4m以上、深さはばらつく。

SP396から土師質土器片が出土している。出土遺物および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ１５（第89図）

Ｂ15グリッドに位置する。１間×２間（2.0m×3.9m）の掘立柱建物跡、長軸は北西を向く。柱穴の形状・規模・深さは一定でなく、北隅の柱穴は検出できていない。正しい建物跡の抽出ではない可能性もある。なお、SP328はSH11のSP329と重なるが、SP328の方が古い。また、SP327・331からカワラケ片が出土している。正しい抽出であるならば、切り合い・出土遺物および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ１６（第90図）

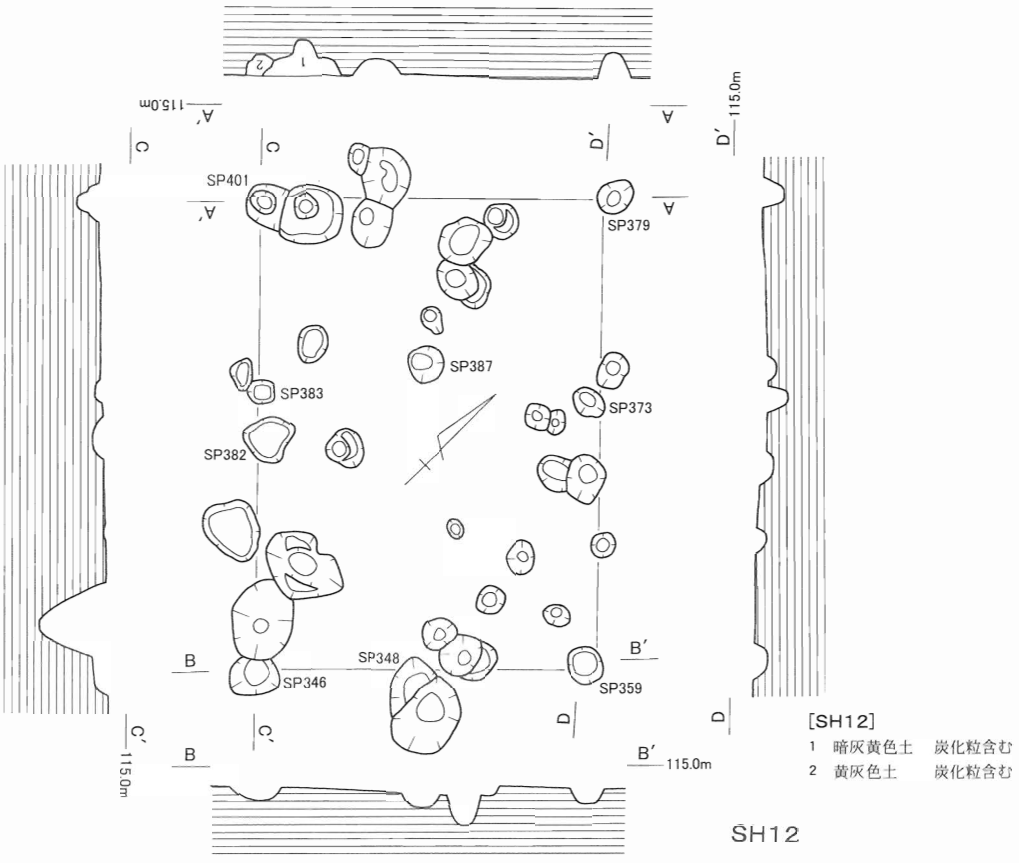
Ｂ15グリッドに位置する。１間×１間以上（1.8m×1.8m以上）、建物方向・規模等はSH15に近く、北西調査区外に展開する可能性がある。柱穴直径0.5m以上、深さ0.3～0.6m、石が残る柱穴もある。

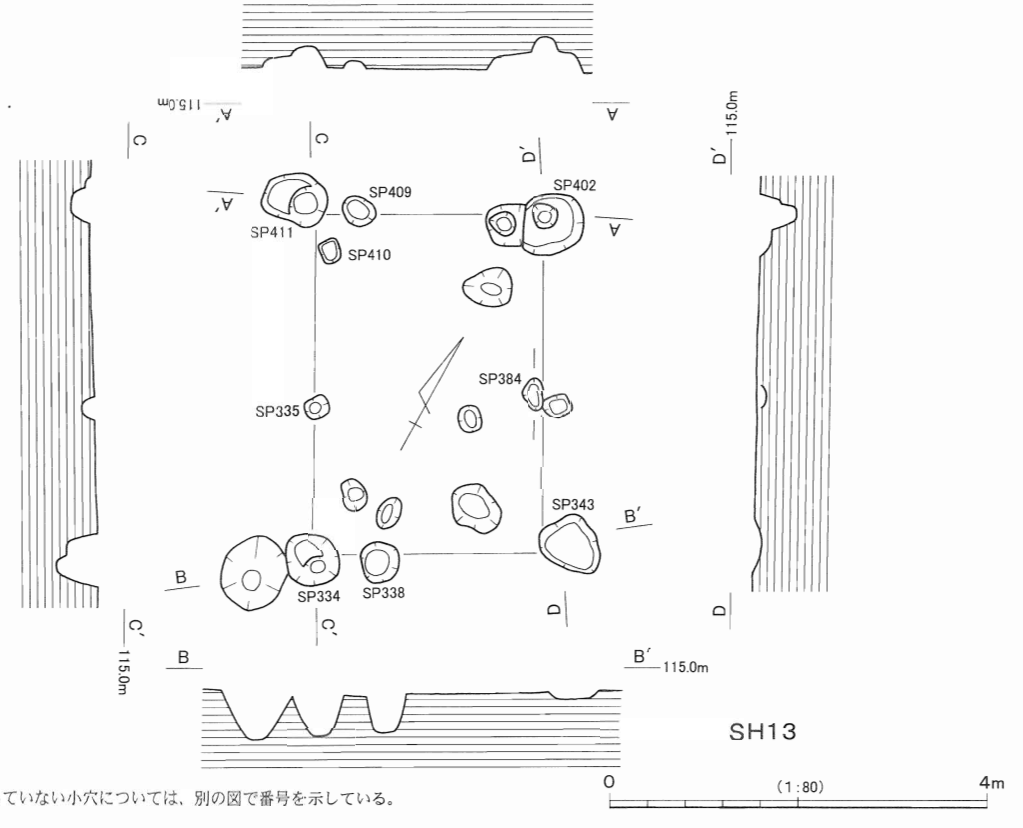
出土遺物はない。本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ１７（第90図）

Ｂ14・15グリッドに位置する。１間以上×２間（2.0m以上×5.5m）、北西調査区外に展開する可能性がある。建物方向はSH09にやや近い。柱穴は直径0.4m前後、深さ0.4m前後である。直径0.15m前後の柱痕が確認できる柱穴もある。石が残存する柱穴もあるが、石は小さく少ない。

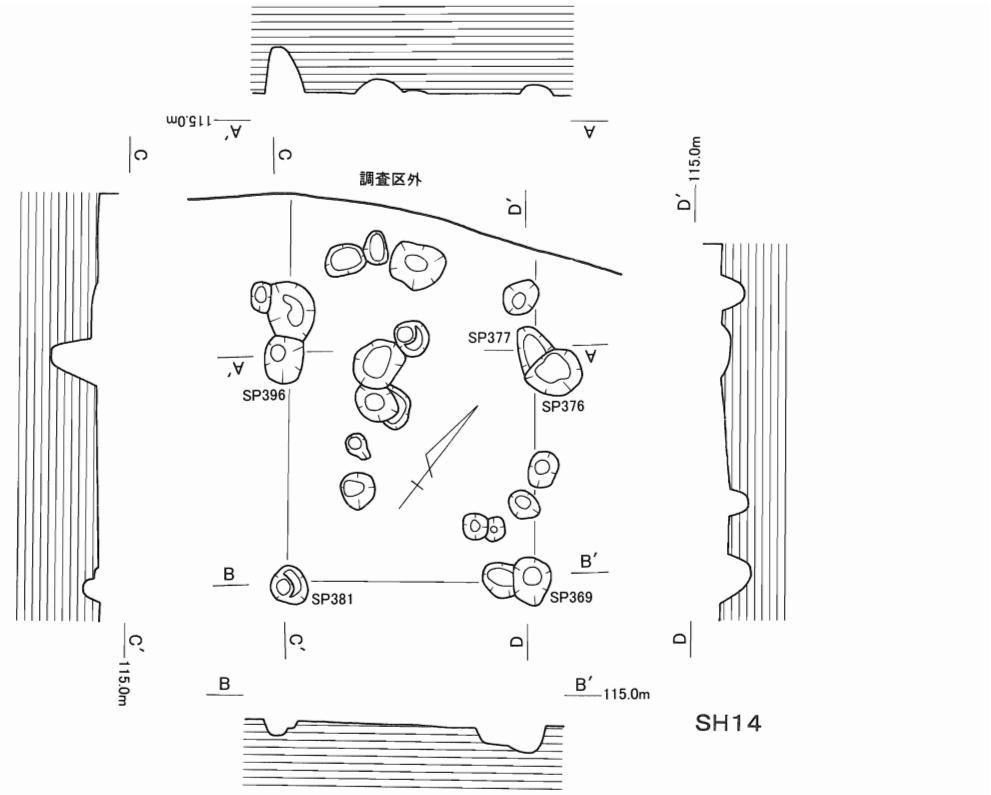
出土遺物はない。本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

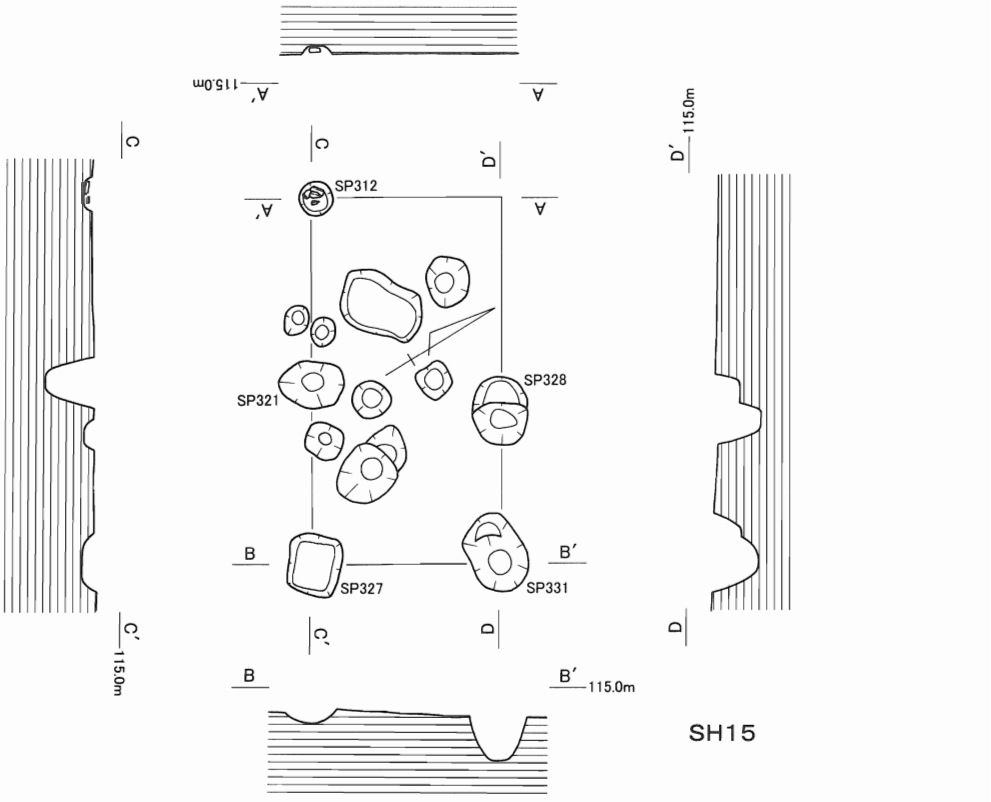




番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

第88図　SH12・SH13

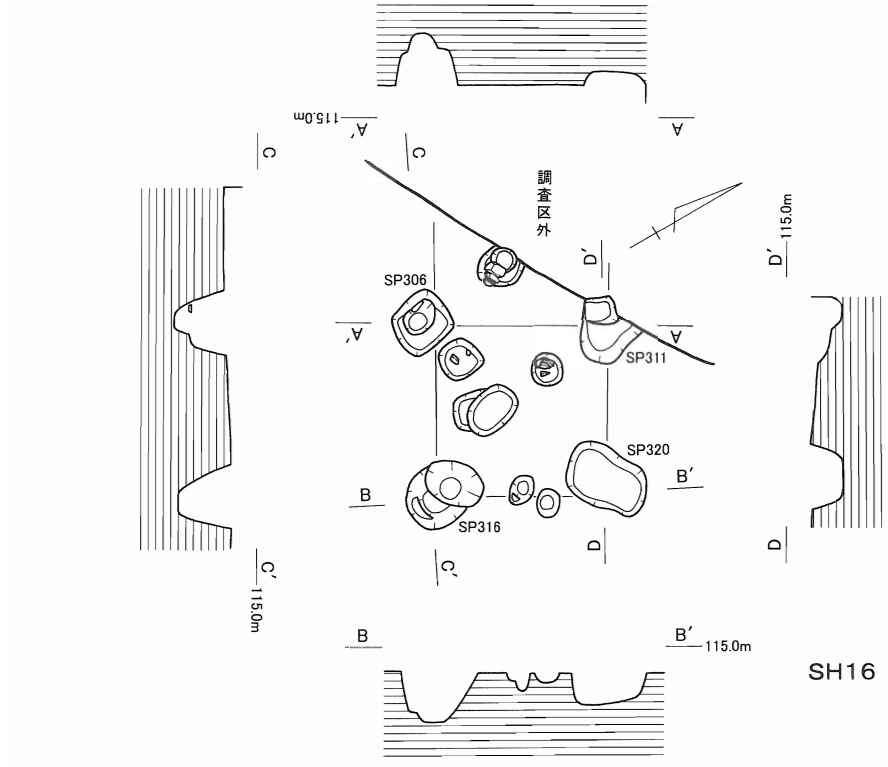


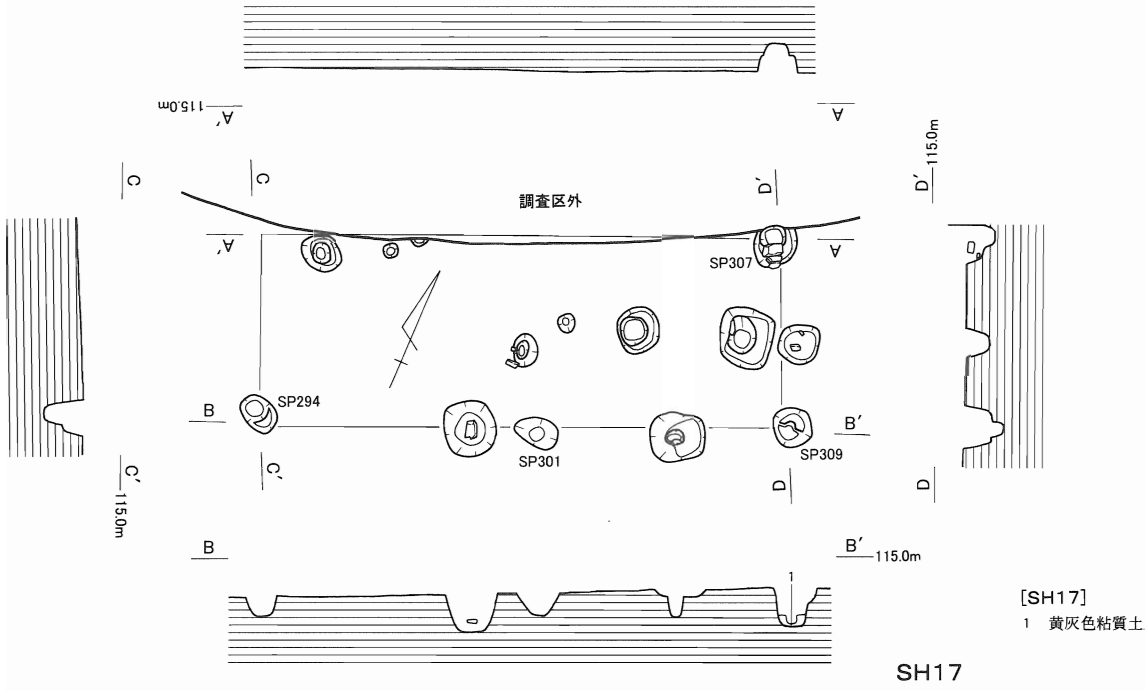


番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

0 (1:80) 4m

第89図　SH14・SH15





番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

0 (1:80) 4m

第90図　SH16・SH17

（3）土　坑

ＳＦ２２（第91図）

Ｅ20グリッド北西に位置する。長軸は北よりやや西に傾く。平面は約2.8ｍ×約1.8ｍの丸みのある長方形で、北側に0.25ｍ程の張り出しをもつ。検出面からの深さは約0.25ｍである。覆土に炭化粒を含むが、焼土や被熱の痕跡は認められない。出土遺物はない。

SH07（建物跡）の東縁に位置し、その内部施設跡である可能性も指摘でき、SH07と同様の中世後半～近世前半（16～18世紀初頭）である可能性が高いと判断できる。また、建物内部施設か否かはともかく、遺構の規模・形状等はSF01・SF09・SF10と類似しており、時期の判断は先のものと矛盾しない。

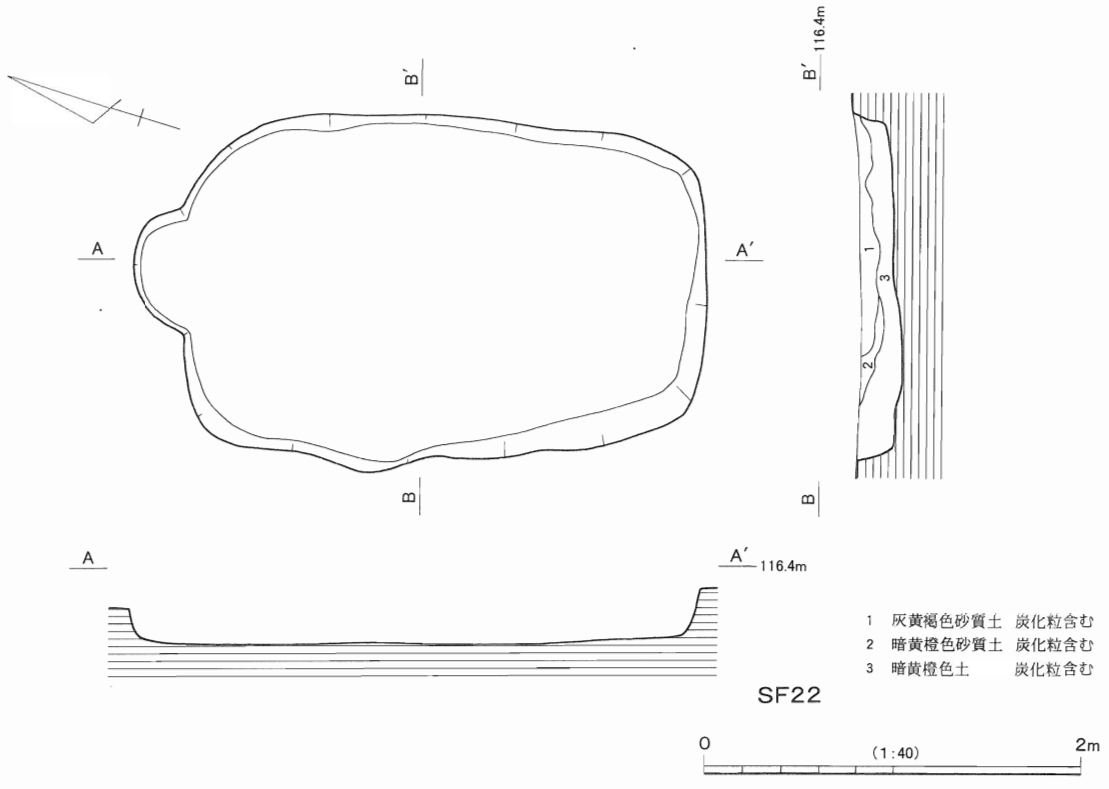
ＳＦ２３・ＳＦ２４（第92図）

SF23は、Ｂ17グリッド東部の不整形な遺構で、多くの縄文土器片が出土している。周辺には自然流路・窪地・倒木痕が多く、縄文土器片や剥片類が多く出土している。これらと同じ可能性もある。

SF24は、Ｂ17グリッド北西に位置する。直径約0.8ｍの不整円形、検出面からの深さ約0.35ｍである。撹乱で南縁が壊されている。形状等から人為的な土坑であり、縄文土器片（第95図10など）の出土から縄文時代の遺構である可能性が高いと判断できる。しかし、その性格・目的はわからない。

ＳＦ２５・ＳＦ２６（第92図）

Ｃ17グリッド北東部に位置する。SF25とSF26とは接しており、SF25がSF26より古い。ただし、いずれも縄文土器片（SF26：第95図13など）や剥片類が多く出土しており、縄文時代中期後葉の遺構である可能性が高いと判断できる。



第91図　SF22

SF25は、長軸約4.4mの平面楕円形、深さ約0.9mの擂鉢形を呈する。覆土に炭化粒を含む。深さはあるが、断面形から落し穴であるとは考え難い。むしろ、貯蔵施設などである可能性を評価したい。

SF26は、直径約0.8mの平面円形、深さは検出面から約0.15mであり、多くの石が残されている。焼土はないが、炭化粒を含み、石に被熱が認められる。崩れた縄文時代の炉であると判断できる。

SF26の近くに縄文時代の竪穴住居跡（SB01）が発見されているが、削平のために残存状況は悪い。この削平は遺跡全体に及んでおり、本来はより多くの住居跡が展開していたと判断できる。以上から、SF25も集落を構成する一遺構であり、また、SF26を炉とする竪穴住居があったと推測することができる。

ＳＦ２７（第92図）

Ｃ16グリッド南縁に位置する。平面は約1.0m×約1.5mの丸みのある長方形、長軸は北東を向く。深さは検出面より約0.75mで断面箱形、底面中央に小穴がある。覆土は炭化粒を含む自然堆積土である。

縄文土器片が多く出土、縄文時代の遺構であると判断できる。また、浅めではあるが、遺構の形状および逆茂木を想定させる小穴から、SF14（Ｃ区）と同様、落し穴である可能性が指摘できる。

ＳＦ２８（第93図）

Ｂ17グリッド西縁に位置する。平面は0.5m×1.2m、長軸南北の長方形である。検出面からの深さは約0.2mで、断面箱形を呈する。覆土に礫や土塊を多く含み、故意に埋め戻された可能性がある。また、中央に人頭大の石が検出されている。意図はともかく、底面より上で検出されていることから、埋め戻しの際に入れられたものである可能性を評価したい。

出土遺物はない。また、他に形状等が類似する遺構はなく、本遺跡内での比較検討は難しい。ただし、建物跡（SH04）内にあることから、建物の内部施設跡である可能性も指摘できる。そうであるならば、SH04と同様の中世後半～近世前半（16--18世紀初頭）の土坑である可能性が高いと判断できる。

ＳＦ３０・ＳＦ３１・ＳＦ３３（第93図）

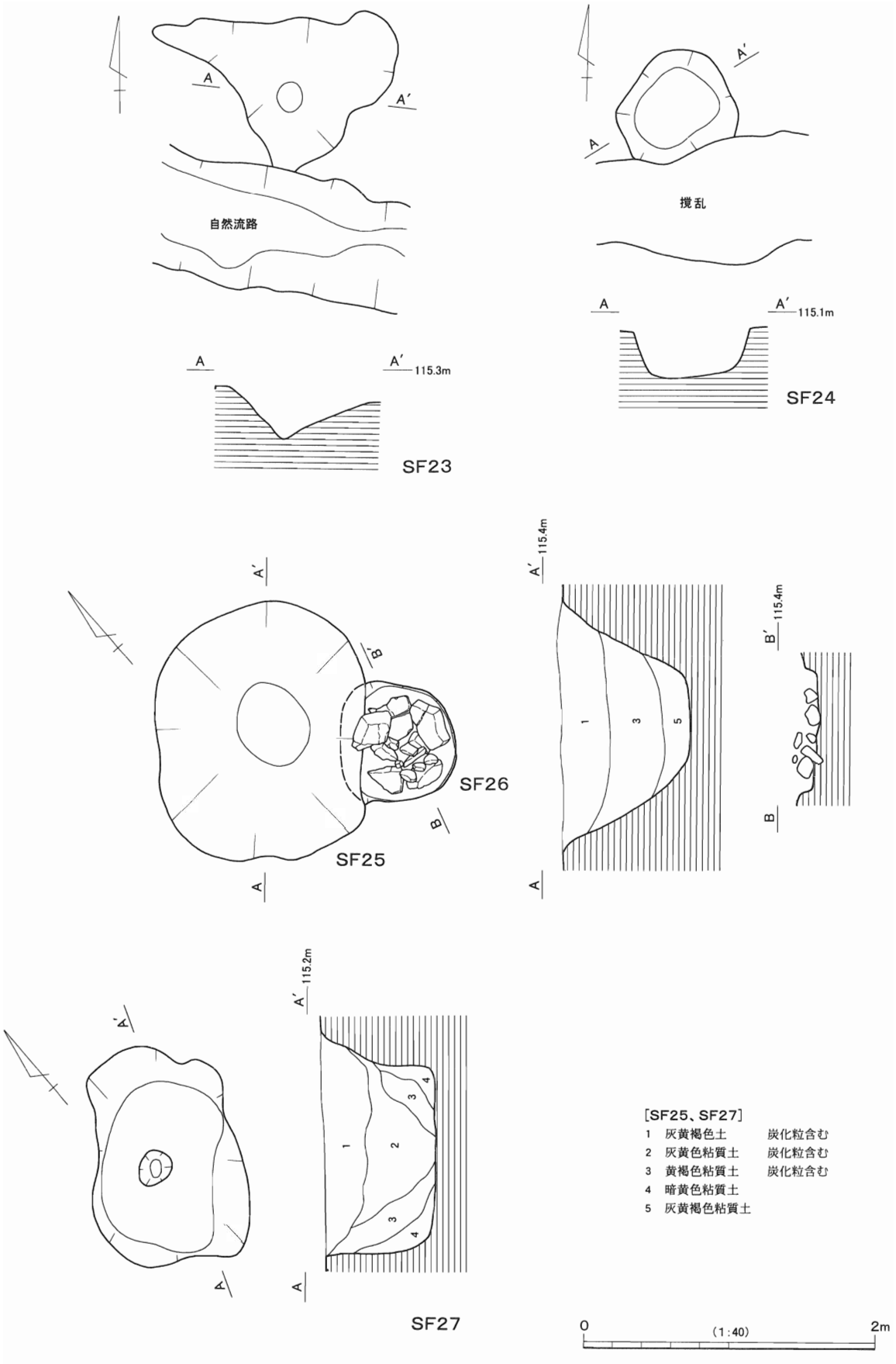
SF30はＤ18グリッド北西、SF31はＤ17グリッド西寄り、SF33はＤ19グリッド西寄りに位置する。いずれも、平面は丸みをもつ長方形で0.9m前後×1.2m前後、検出面からの深さは0.5～0.7m、断面箱形を呈する。ただし、長軸の方向は一定ではない。また、SF30だけは張り出し部をもつ。覆土の状態は近似しており、概ね自然堆積であるとみることができる。

遺構の形状や規模はSF27と類似しており、これらも縄文時代の落し穴である可能性が高いと判断できる。しかし、出土遺物はSF31の剥片類だけである。また、逆茂木の痕跡は認められていない。

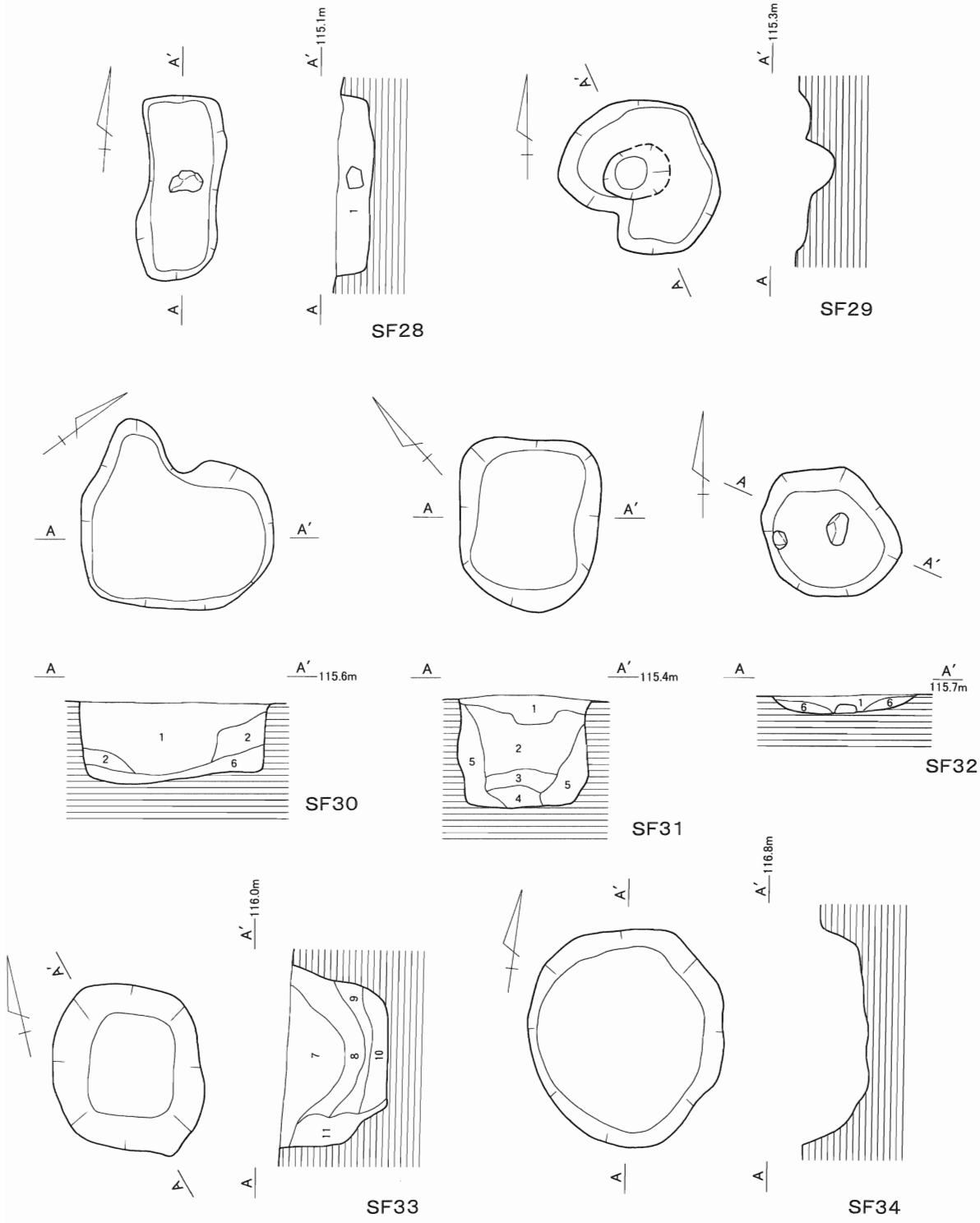
ＳＦ２９・ＳＦ３２・ＳＦ３４（第93図）

SF29はＢ18グリッド南東、SF32はＤ17グリッド東縁、SF34はＥ19グリッド東寄りに位置する。いずれも比較的浅い平面不整円形の土坑である。ただし、平面直径は0.8～1.3m、検出面からの深さは0.1～0.4mであり、様々である。また、SF29だけは底の中央に小穴が検出されている。

出土遺物はSF34の剥片類だけである。また、他に形状等が類似し、時期・性格のわかる遺構はないため、本遺跡内での比較検討は難しい。いずれも時期・性格は不明であり、これらが同様の遺構であるか否かについても判断できない。



第92図　SF23～SF27



[SF28、SF30～SF33]

1　灰黄褐色土
2　灰褐色粘質土
3　灰黄褐色粘質土　炭化粒含む
4　黄褐色粘質土
5　灰黄褐色粘質土
6　暗黄褐色粘質土
7　灰黄色粘質土
8　黄褐色粘質土
9　暗黄色粘質土
10　黒褐色粘質土　炭化粒含む
11　明黄褐色土　炭化粒含む

0　(1:40)　2m

第93図　SF28～SF34

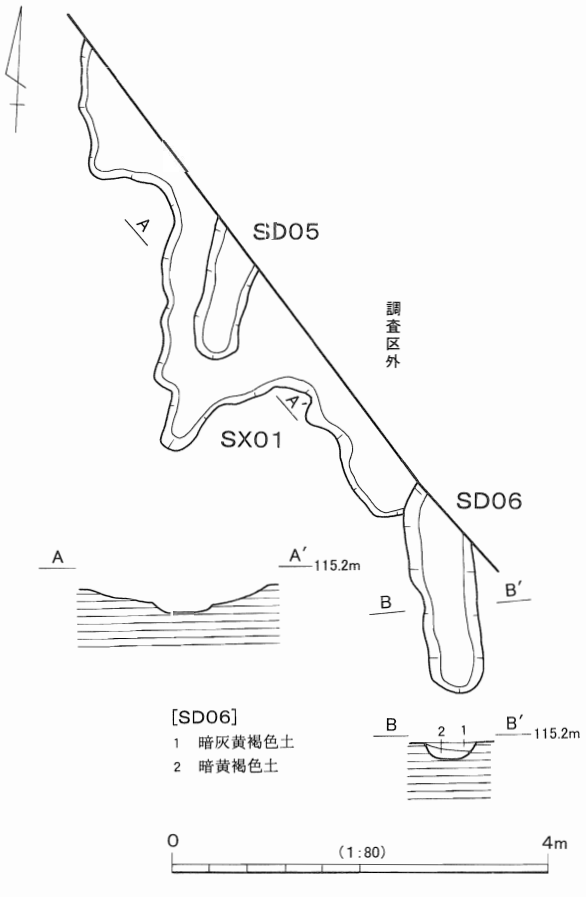
（4）小　穴

多くの小穴があるが、既に述べた住居跡や建物・施設跡の柱穴等以外で、性格を明確にできるものはない。ただし、これらは散在するものではなく、A・Bの14～16グリッドの建物群周辺、D17～D18グリッド、B18～C18グリッド、B17グリッドなどに集中して分布している。削平が本遺跡全体に及んでいることから、それぞれの小穴群が、いくつか重なる住居跡や建物跡の残存である可能性も指摘することができる。

A・Bの14～16グリッドの建物群周辺では、SP388・317で黒曜石の小片が出土している一方、SP323・SP367から陶器片（SP323：第97図33）が出土している。中世後半～近世前半（16～17世紀）の建物群が集中する場所であり、建物跡などとして抽出されなかった小穴についても、同様の柱穴等が多く含まれている可能性が高いと推測できる。

それ以外の場所では、SP244から縄文土器片と石鏃（第96図20）、SP248からも縄文土器片が出土している。落し穴などが分布する場所にあり、縄文時代の遺構である可能性も指摘できる。

（5）溝・不明遺構など



第94図　SD05・SD06・SX01

B・Cの18～19グリッドで、SD05・SD06およびSX01が検出されている（第94図）。北西の調査区外は谷に下る急斜面になっており、2条の溝はそこに向かっている。また、SX01は不整形で浅い窪地状を呈している。以上から、谷への流路を含む自然地形である可能性が指摘できる。なお、出土遺物はない。

自然流路や窪地などは、他にも多く検出されている。大半（SD05・SD06・SX01・SF23以外）は、遺構配置図（第80図）に図示するだけで、遺構番号を付すなどしては扱っていない。

B17グリッドにある窪地および自然流路では、縄文土器片が多く出土している。また、C18グリッド南西隅で直径約4mの範囲の倒木痕が検出されているが、ここからも、縄文土器片が多く出土している。これらは、縄文時代の集落に伴って、もしくは集落廃絶後、中世より前に形成された可能性が考えられる。それはともかくとして、これらの周囲にも縄文時代の営みが広がっていたことは明らかである。

5．出土遺物

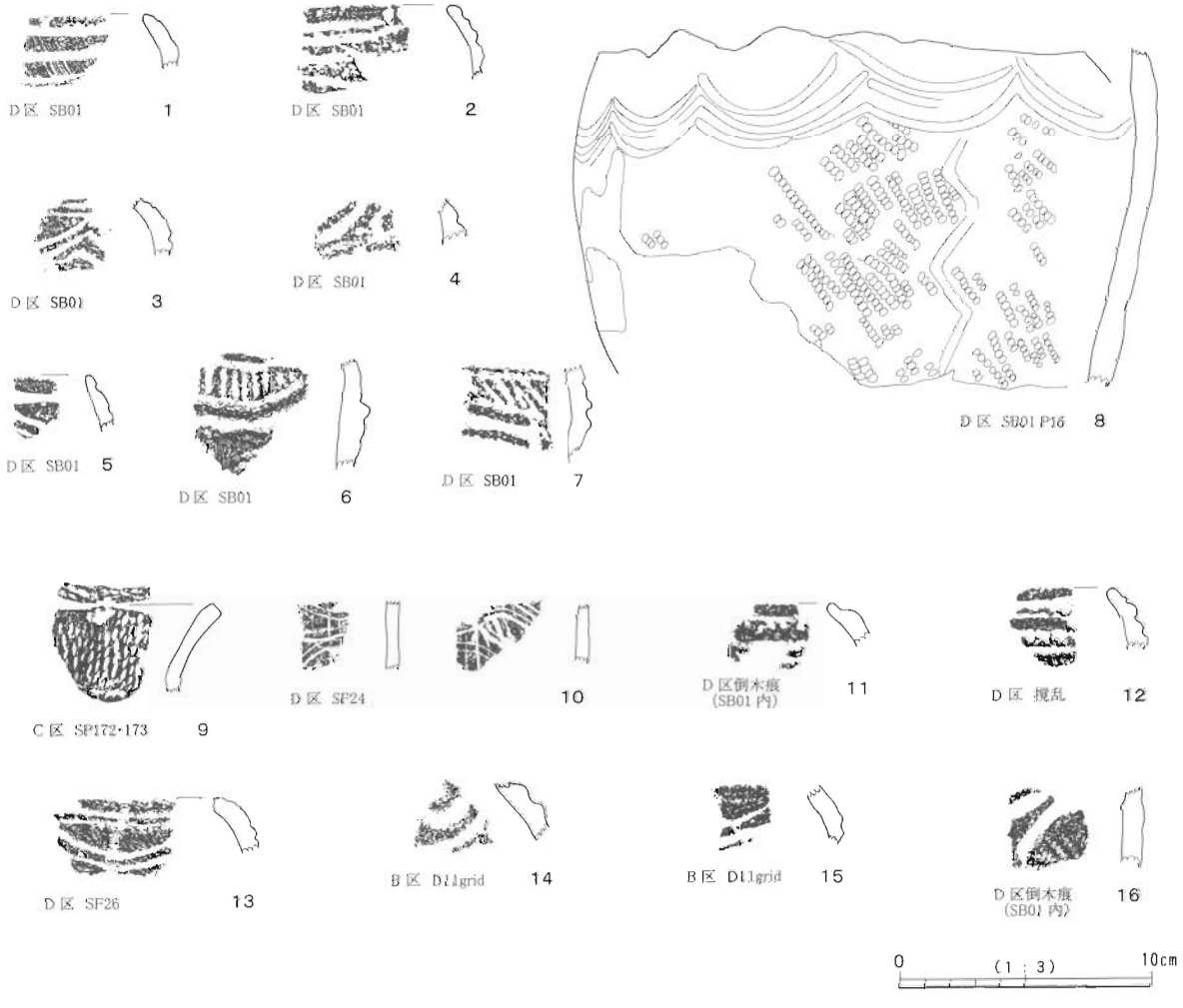
（1）縄文時代の遺物

土　器（第95図）

縄文時代の土器は、SB01からの出土が多く、土坑やピットなどからの出土はわずかである。

SB01出土土器（1～8）　SB01から出土した土器片のうち、型式が判別可能な8点を図示した。1～5は中期後葉の里木Ⅱ・Ⅲ式に比定される。平行沈線文と弧線文が施文され、1には地文として縦斜位の細条線が施されている。口縁部は著しく内湾したキャリパー形を呈する。6・7は横位の沈線によって区画され、中に縦位や斜位の沈線が施文されており、曽利Ⅳ式に比定される。

8は埋設土器である。胴部のみであるが、接続しない弧線文が3条施文されており、地文としてＲＬ縄文が施文されている。里木式に類似しているが、地文として縄文が施文されていることや、波状懸垂文が施されていることから曽利式の影響を受けて在地化したものと考えられる。



第95図　出土縄文土器

その他の出土土器（9～16）　9は外湾した口縁部であり、外面及び口唇部に「ネガティブな楕円文」が施文されている。押型文土器の古い段階に位置づけされ、大川～神宮寺式期に対比される。10は薄手の胴部破片で細い沈線によって波状文が施文されており、地文として縦位の細条線が施される。胎土は灰褐色を呈する。早期末の下吉井式に比定される。11～13は里木Ⅱ・Ⅲ式に比定され、著しく内彎した口縁部をもち、全体の器形はキャリパー形を呈すると考えられる。11は口縁部の沈線下に刺突列が施される。12は平行する沈線を交互に刺突して鋸歯文を作り出し、その下に刺突列を施している。13は平行沈線と弧線文を施文して、地文として縦斜位の細条線を施している。14～16は太めの沈線によって区画されており、区画内には縄文が施文される。加曾利ＥⅢ式に比定される。

石　器（第96図）

石鏃6点、石錐2点、石匕2点、石核2点を図示した。なお、出土石器・剥片類の内訳について、第15表に示した。

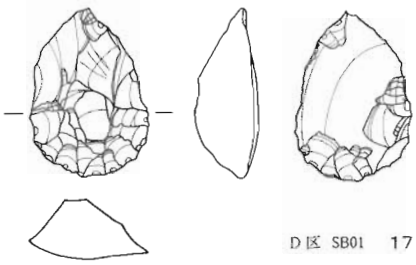
石　鏃（17～22）　17は石鏃とほぼ同じ大きさであるが、尖頭部が鋭角でないことやその厚さから、第3章で分類した類型の内の4類に相当する。調整は施されているが素材剥片はほぼ原形で残っており、わずかにバルブを除去して厚さを減少させている。尖頭部はあまり調整を加えず素材剥片の先端部の鋭角な部分をそのまま利用している。基部は両面から細かな調整が施されており凸型を呈する。

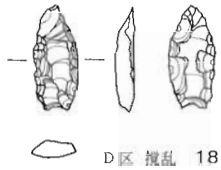
18は凹基無茎で浅い抉りがみられ、2ａ類（第3章参照）に相当する。調整は両面の縁辺のみであり、主要剥離面が残存している。19・20は凹基無茎で深い抉りがみられる。先端部、基部ともに細かい入念な調整が施され両面全体に及んでいる。21・22は石鏃の破損品と考えられる。22は石錐とも考えられるが、その厚さや調整の状況から石鏃の茎部と判断した。

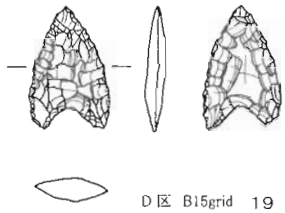
石　錐（23・24）　23はその形状から有茎石鏃の未製品とも考えられるが、平面形が非対称であることや茎部の調整が粗いことから石錐と判断した。錐部は折れていると考えられる。つまみ部は腹面の縁辺に調整が施される。素材剥片の打面部に錐部を作出している。24は錐部に両面から細かな調整が施されているが、その他の部分はわずかに縁辺のみの調整である。折れた剥片を素材としており、側縁部に錐部を作出している。

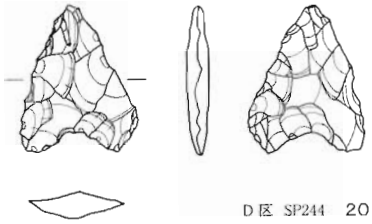
石　匕（25・26）　25は横型石匕である。つまみ部は両面から入念に調整が施され、刃部は背面のみ調整が施される。素材剥片の打面部と先端部の腹面を加工してつまみ部を作出し、その後、背面の打面部、側縁部、先端部と調整を施している。26は横型石匕である。素材剥片の腹面側に調整を加えてつまみ部を作出し、その後、背面側を調整している。刃部は素材剥片の側縁部の鋭利な部分を利用しており、背面のみに調整を施している。

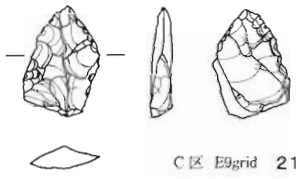
石　核（27・28）　27・28は、自然面を有する大型剥片を素材としている。上下端から打撃を加えて、寸詰まりの剥片を作り出している。

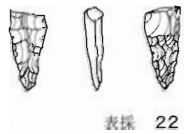

D区 SB01 17

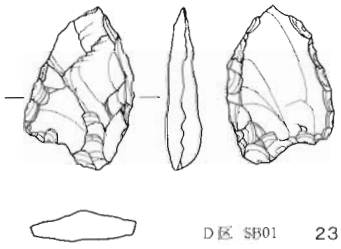

D区 攪乱 18

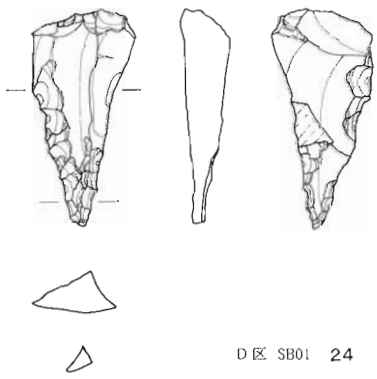

D区 B15grid 19

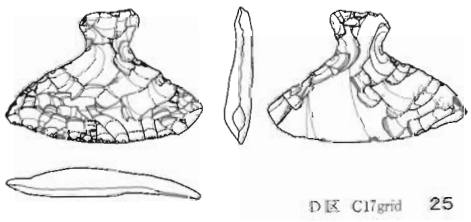

D区 SP244 20

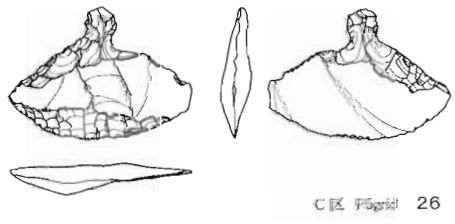

C区 E9grid 21

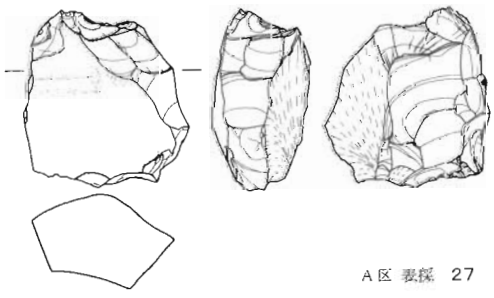

表採 22

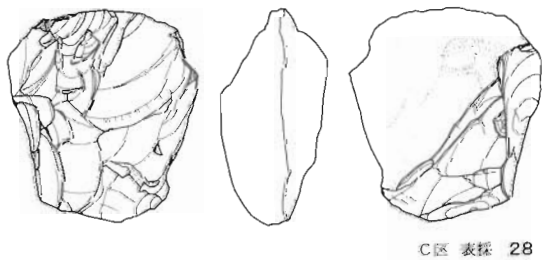

D区 SB01 23

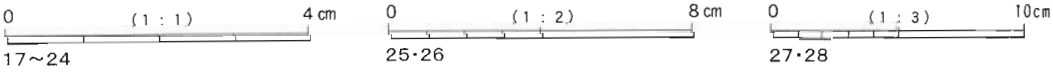

D区 SB01 24


D区 C17grid 25


C区 F5grid 26


A区 表採 27


C区 表採 28


0 (1 : 1) 4cm
17～24
0 (1 : 2) 8cm
25・26
0 (1 : 3) 10cm
27・28

第96図　出土石器

第13表　縄文土器観察表

番号	挿図番号	図版番号	区	出土位置	器種	部位	色調（外面）	色調（内面）	胎土・焼成	備考
1	95	39	D	SB01	深鉢	口縁部	黒褐色		長石含む	里木Ⅱ・Ⅲ式
2	95	39	D	SB01	深鉢	口縁部	にぶい黄褐色	黒色	長石、焼成不良	里木Ⅱ・Ⅲ式
3	95	39	D	SB01	深鉢	口辺部	黒褐色		砂粒含む、焼成不良	里木Ⅱ・Ⅲ式
4	95	39	D	SB01	深鉢	口辺部	暗褐色		長石含む	里木Ⅱ・Ⅲ式
5	95	39	D	SB01	深鉢	口縁部	褐色	黒褐色	雲母含む	里木Ⅱ・Ⅲ式
6	95	39	D	SB01	深鉢	胴部	にぶい赤褐色		長石、石英、砂粒含む	曽利式
7	95	39	D	SB01	深鉢	口辺部	にぶい赤褐色		長石、石英、砂粒含む	曽利式
8	95	39	D	SB01P16	深鉢	胴部	暗赤褐色	黒色	長石、石英、白色砂粒含む	里木・曽利式系
9	95	39	C	SP172・173	深鉢	口縁部	褐色	暗褐色	長石、白色砂粒含む	押型文
10	95	39	D	SF24	深鉢	胴部	灰褐色		褐色礫含む	下吉井式
11	95	39	D	倒木痕（SB01内）	深鉢	口縁部	褐色	黒褐色	砂粒含む	里木Ⅱ・Ⅲ式
12	95	39	D	撹乱	深鉢	口縁部	褐色	黒色	長石、石英含む	里木Ⅱ・Ⅲ式
13	95	39	D	SF26	深鉢	口縁部	黒褐色		砂粒含む、焼成不良	里木Ⅱ・Ⅲ式
14	95	39	B	D11grid	深鉢	口辺部	褐色		長石含む	加曽利E式
15	95	39	B	D11grid	深鉢	口辺部	黒褐色		長石、石英含む	加曽利E式
16	95	39	D	倒木痕（SB01内）	深鉢	胴部	褐色		長石含む	加曽利E式

第14表　石器類観察表

番号	挿図番号	図版番号	区	出土位置	名称	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	欠損	備考
17	96	39	D	SB01	石鏃	黒曜石（Ob）	2.27	1.56	0.78	2.27		未製品
18	96	39	D	撹乱	石鏃	黒曜石（Ob）	1.36	0.63	0.22	0.19		
19	96	39	D	B15grid	石鏃	黒曜石（Ob）	1.65	1.04	0.27	0.37		
20	96	39	D	SP244	石鏃	流紋岩（Rhy）	1.97	1.54	0.32	0.82		
21	96	39	C	E9grid	石鏃	黒曜石（Ob）	(1.45)	(1.06)	0.29	0.41	あり	
22	96	39		表採	石鏃	黒曜石（Ob）	(1.08)	(0.49)	0.27	0.09	あり	石錐か
23	96	39	D	SB01	石錐	流紋岩（Rhy）	(2.08)	1.37	0.38	1.26	あり	石鏃未製品か
24	96	39	D	SB01	石錐	珪質頁岩（SSh）	2.92	1.38	0.6	1.72		
25	96	39	D	C17grid	石匕	流紋岩（Rhy）	3.51	5.22	0.7	8.52		
26	96	39	C	F5grid	石匕	珪質頁岩（SSh）	3.49	4.85	0.69	7.87		
27	96	39	A	表採	石核	ホルンフェルス（Hor）	6.72	6.68	3.77	191.79		
28	96	39	C	表採	石核	ホルンフェルス（Hor）	8.6	8.67	4.44	217.52		

（　）内は欠損のため本来の大きさではない値

第15表　出土土器片・石器類の内訳

土器片出土数

	縄文土器	陶器（中世後半以降）	磁器（近世後半以降）	カワラケ	その他の土師質土器	計
A区	1	6	3	49	3	62
B・C区	84	134	108	95	22	443
D区	712	19	0	23	45	799
出土区不明	13	32	0	31	5	81
計	810	191	111	198	75	1385

石器・剥片類出土数

	石器・石器未製品	石核	剥片	砕片	計
A区遺構内	0	0	0	3(1)	3(1)
A区遺構外	0	1	1	2	3
C区SF07	0	0	0	146	146
B・C区他遺構内	0	0	2	3(2)	5(2)
B・C区遺構外	2(1)	1	5	11(3)	19(4)
D区SB01	3(1)	0	5	59(51)	67(52)
D区他遺構内	1	0	8(1)	10(5)	19(6)
D区遺構外	3(2)	0	4(1)	20(11)	26(14)
A区　計	0	1	1	5(1)	7(1)
B・C区　計	2(1)	1	7	160(5)	170(6)
D区　計	7(3)	0	17(2)	89(67)	113(72)
出土区不明	1(1)	0	5	21(13)	27(14)
計	10(5)	2	30(2)	275(86)	317(93)

（　）内は黒曜石製の数

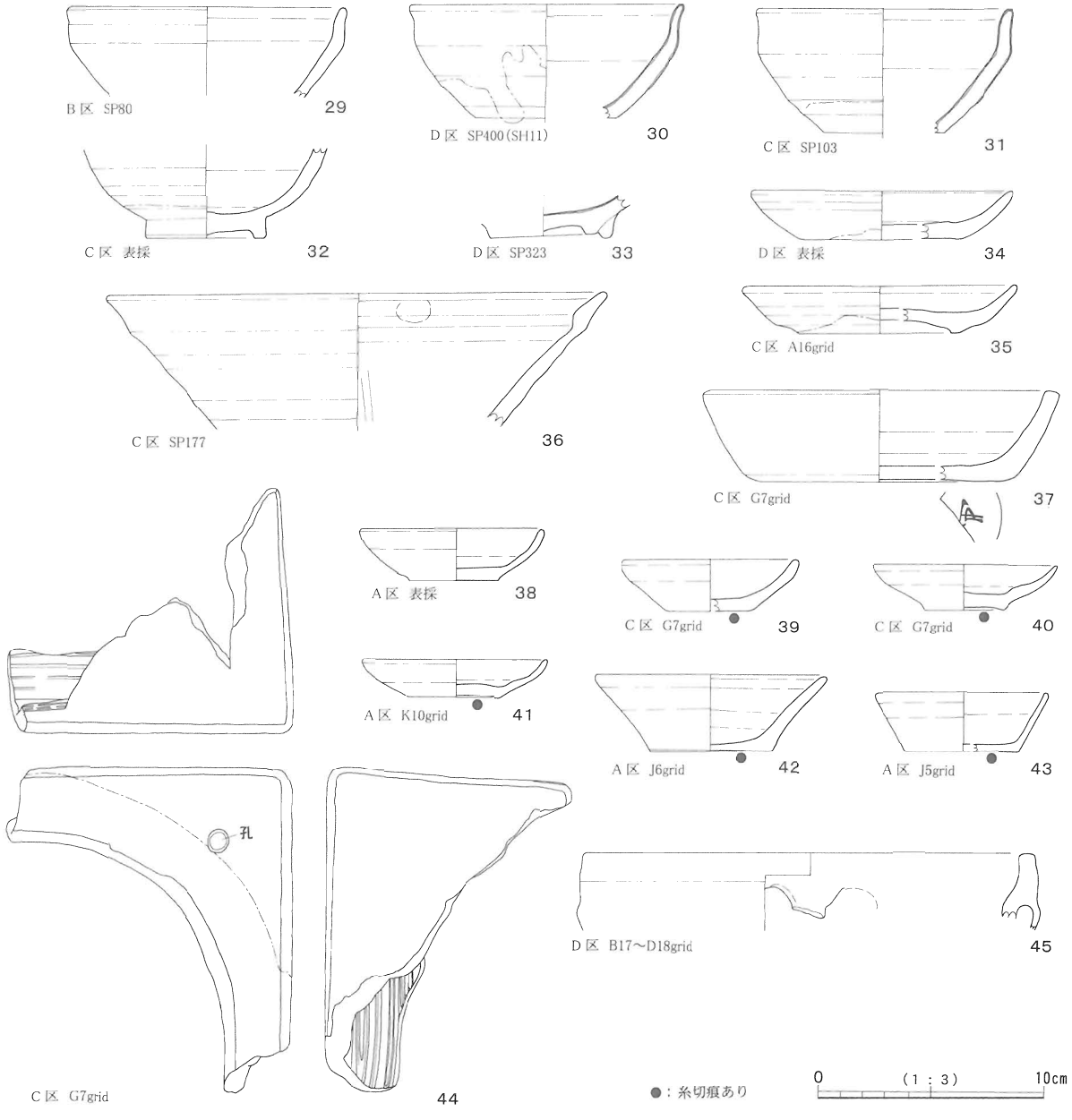
（2）中近世の遺物

土器類（第97図）

調査区全体から、陶器片・土師質製品の小破片がＡ４版の袋で５袋程度出土している。

陶　器（29～36）　29・30は志戸呂産の天目茶碗で、16世紀末前後に位置づけできる。31～33は瀬戸・美濃産の碗類である。31は天目茶碗で17世紀前半、32は丸碗で17世紀終り～18世紀初めを中心とした時期に位置づけできる。なお、31・32に二次焼成の痕跡が認められる。34・35は初山の内禿皿で16世紀後半、36は志戸呂産の擂り鉢で32などと同様の時期に位置づけできる。

土師質製品（38～45）　37は、カワラケと同じ胎土・焼成の鉢である。底部裏面に解読できない記号



第97図　出土陶器・土師質製品

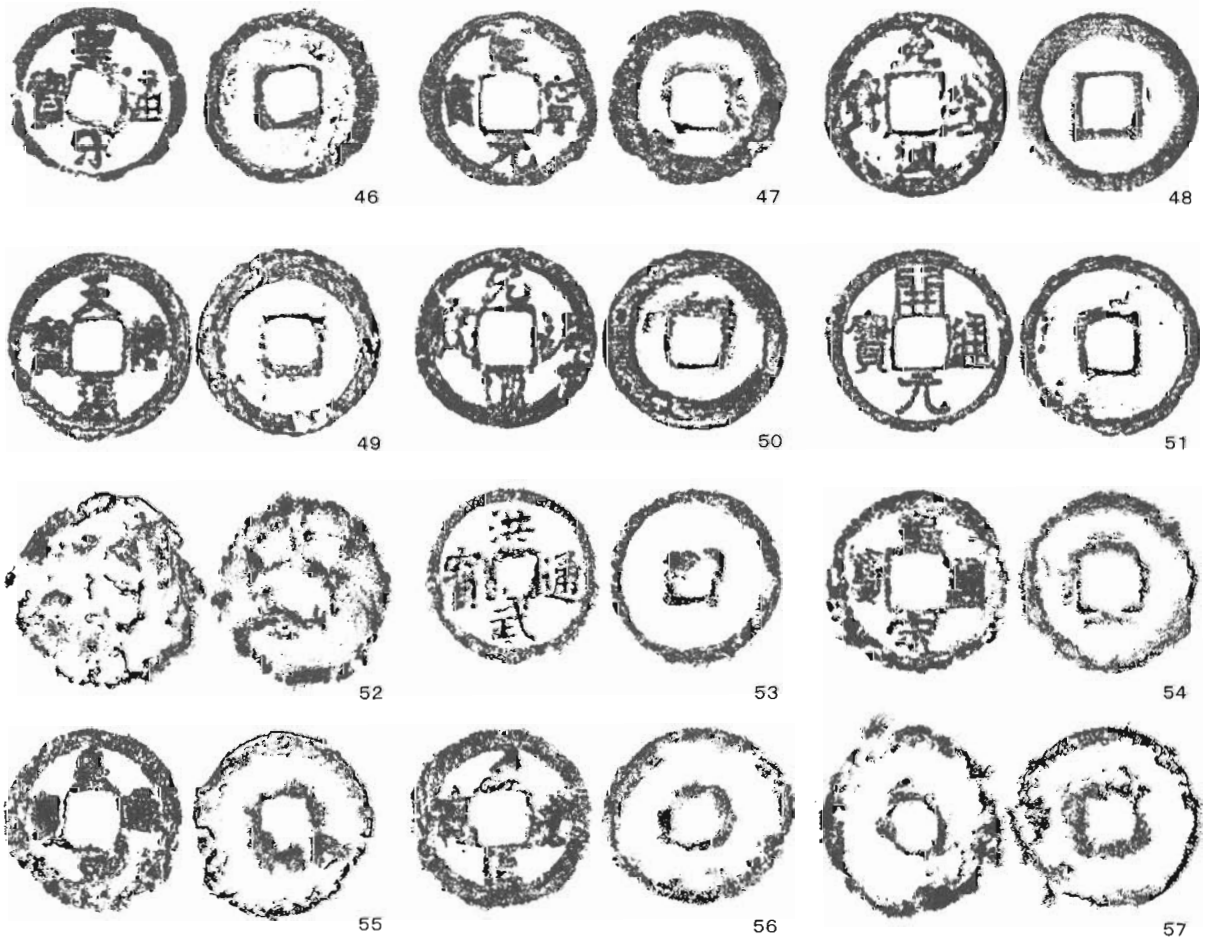
の線刻がある。38～43はカワラケで、陶器等と同様、中世後半～近世（16～18世紀）に位置づけできる。その中で、39・42は他より焼成が軟らかく、器壁が厚いことから、比較的古い可能性を考慮することができる。44は調理具（置き竈）で、ススの付着がある。45は内耳鍋片で、近世のものであろう。

金属製品（第98・100図）

銅　銭（46～67）　SF05・SF06および周辺２ヶ所（計４ヶ所）で、それぞれ６枚か４枚の銅銭が出土している。いずれも火葬によるであろう被熱を受けており、重なった状態（第99図）で出土している。なお、火葬場所からの銅銭の出土はなく、銅銭の出土はＡ区西部の墓穴および周辺表土からで占められる。この点については、第４節にて後述する。

各銅銭については、図・写真および観察表のとおりである。全体的に被熱による変形が著しく、重量などは本来のものではないと判断できる。また、被熱の具合によって字が判読できない銭もある。

北宋銭が多いが、南唐銭や明銭もある。第100図67の初鋳は1408年で、Ｋ６グリッド出土銭を伴う葬送は15世紀以降となる。さらに、遺構数などから、この墓域が数百年におよぶとは考え難い。六道銭の一般化が室町時代後半以降である（足立1997、など）ことからも、15世紀中頃以降の墓域に伴う銅銭群である可能性が評価できる。なお、これらの中に模鋳銭が含まれている可能性も指摘できるが、変形のために個々についての判断は難しい。

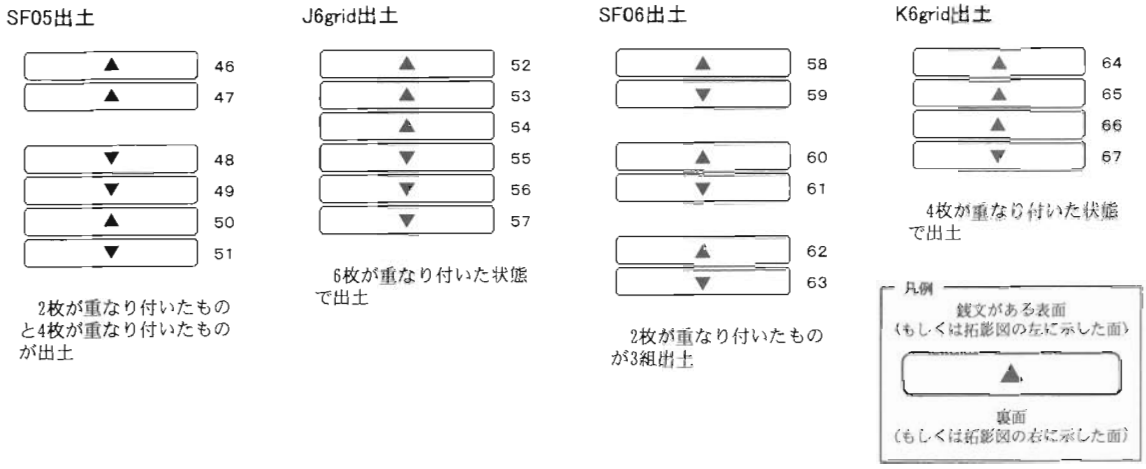


46～51：A区 SF05
52～57：A区 J6grid

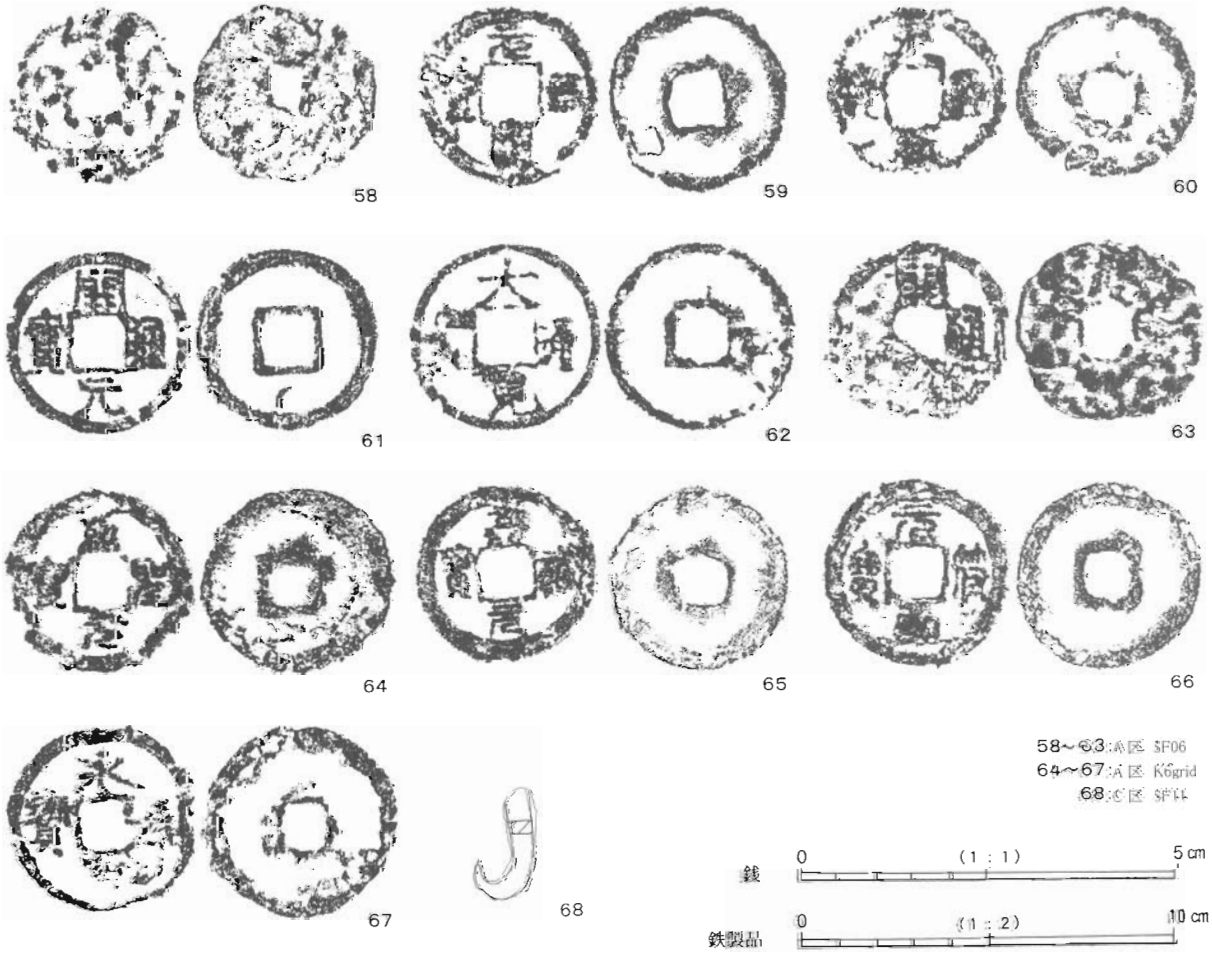
0　（1：1）　5cm

第98図　出土金属製品１

鉄製品（68）　68は、焼土坑であるSF11から出土した鉄製品である。断面方形であるが、先は尖っており、釣針の形状を呈している。詳細な時期の判断は難しい。



第99図　銭の重なり



第100図　出土金属製品２

第16表　遺物観察表（中近世）

陶器・カワラケ・土師質土器

番号	挿図番号	図版番号	区	出土位置	種別	産地	器種	部位	残存(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	焼成	色調	備考
29	97	42	B	SP80	陶器	志戸呂	天目茶碗	口縁部	5		(12.2)	(12.0)		良好	素地：暗灰色	内外面施釉（鉄釉）
30	97	42	D	SP400(SH11)	陶器	志戸呂	天目茶碗	口縁～体部	30		(12.0)	(12.0)		良好	茶灰色	内外面施釉（鉄釉）
31	97	42	C	SP103	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	口縁～体部	10		(11.4)	(11.2)		良好	淡黄白色	内外面施釉（灰釉）二次焼成
32	97	42	C	表採	陶器	瀬戸・美濃	丸碗	体～底部	60				5.2	良好	淡黄白色	内外面施釉（鉄釉）二次焼成
33	97	42	D	SP323	陶器	瀬戸・美濃	碗類	底部	70				4.8	良好	淡黄白色	内外面施釉（鉄釉）
34	97	42	D	表採	陶器	初山	内禿皿	全体	30	2.2	(11.4)	(11.4)	(7.0)	良好	暗赤褐色	内外面施釉（鉄釉）
35	97	42	C	A16grid	陶器	初山	内禿皿	全体	20	2.1	(12.2)	(12.2)	(7.0)	良好	暗赤褐色	内外面施釉（鉄釉）
36	97	42	C	SP177	陶器	志戸呂	擂鉢	口縁～体部	5		(22.0)	(22.0)		良好	素地：暗灰色	内外面施釉（錆釉）口縁部に指押部あり
37	97	42	C	G7grid	土師質		鉢か	全体	10	4.1	(15.8)	(15.8)	(12.0)	良好	明黄褐色	底部に線刻記号あり
38	97	42	A	表採	カワラケ			全体	80	2.2	8.0	8.0	4.0	良好	黄褐色	底部摩滅
39	97	42	C	G7grid	カワラケ			全体	35	2.3	(7.9)	(7.8)	(3.8)	不良	黄褐色	糸切痕
40	97		C	G7grid	カワラケ			全体	50	2.0	(8.1)	(8.1)	3.5	良好	橙褐色	糸切痕
41	97	42	A	K10grid	カワラケ			全体	70	2.2	8.2	8.1	3.9	良好	明橙褐色	糸切痕
42	97	42	A	J6grid	カワラケ			全体	95	3.4	10.2	10.2	5.6	不良	明橙褐色	糸切痕
43	97	42	A	J5grid	カワラケ			全体	25	2.6	(7.6)	(7.6)	(5.0)	良好	明橙褐色	糸切痕
44	97	42	C	G7grid	置き竈（土師質）			上部	15	一辺23cm程度の立方体か				良好	橙褐色	スス付着部あり
45	97	42	D	B17～D18grid 攪乱	土師質土器		内耳鍋	口縁部	5		(20.4)	(20.0)		不良	淡黄白色	外面スス付着

銅銭

番号	挿図番号	図版番号	区	出土位置	種別	銭名	書体	国名	初鋳年	銭径(mm)	内径(mm)	孔(mm)	重量(g)	備考
46	98	40	A	SF05	銅銭	皇宋通寶	真書	北宋	1038年	22.9	20.0	6.5	1.70	
47	98	40	A	SF05	銅銭	熙寧元寶	真書	北宋	1068年	23.1	19.0	7.3	1.95	
48	98	40	A	SF05	銅銭	元豊通寶	行書	北宋	1078年	24.5	19.9	6.9	2.92	
49	98	40	A	SF05	銅銭	天禧通寶	真書	北宋	1017年	24.9	20.1	6.8	2.81	
50	98	40	A	SF05	銅銭	元符通寶	行書	北宋	1098年	24.2	19.7	6.9	3.79	
51	98	40	A	SF05	銅銭	開元通寶	真書	南唐	960年	24.5	20.9	6.9	2.51	
52	98	40	A	J6grid	銅銭	不明				24.0	21.0	7.0	1.43	
53	98	40	A	J6grid	銅銭	洪武通寶	真書	明	1368年	23.7	19.1	5.9	3.77	
54	98	40	A	J6grid	銅銭	皇宋通寶	真書	北宋	1038年	24.3	19.8	7.2	2.54	
55	98	40	A	J6grid	銅銭	皇宋通寶	真書	北宋	1038年	23.3	20.0	6.5	1.96	
56	98	40	A	J6grid	銅銭	元豊通寶	行書	北宋	1078年	24.1	18.8	7.1	3.05	
57	98	40	A	J6grid	銅銭	不明				23.9	不明	6.8	1.96	
58	99	40	A	SF06	銅銭	不明				23.6	19.7	6.3	0.97	
59	99	40	A	SF06	銅銭	元祐通寶	篆書	北宋	1086年	23.9	20.2	7.3	2.30	
60	99	40	A	SF06	銅銭	□□通寶	真書	不明		23.5	不明	6.8	1.81	頭文字は天・元・大のいずれか
61	99	40	A	SF06	銅銭	開元通寶	真書	南唐	960年	24.4	21.0	6.8	2.49	
62	99	40	A	SF06	銅銭	大観通寶	真書	北宋	1107年	25.2	22.2	7.2	1.82	
63	99	40	A	SF06	銅銭	開元通寶	真書	南唐	960年	24.9	20.5	7.0	1.66	
64	99	40	A	K6grid	銅銭	紹聖元寶	篆書	北宋	1094年	23.5	20.0	6.1	1.64	
65	99	40	A	K6grid	銅銭	嘉祐元寶	篆書	北宋	1056年	23.8	18.7	6.5	1.54	
66	99	40	A	K6grid	銅銭	元符通寶	篆書	北宋	1098年	24.6	19.7	6.7	2.04	
67	99	40	A	K6grid	銅銭	永楽通寶	真書	明	1408年	24.6	21.9	6.3	1.39	

鉄製品

番号	挿図番号	図版番号	区	出土位置	種類	残存	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
68	99	40	C	SF11	釣針形鉄製品	一部欠損	3.0	0.7	0.4	1.848	

第4節　まとめ

遺跡および遺構の時期について

本遺跡の主体時期は、出土遺物から縄文時代と中世後半～近世前半に分けて捉えることができる。縄文時代については、出土土器の大半が中期後葉の土器片で占められており、ほかに早期の土器片も出土しているが、数点に限られる。

中世後半～近世前半については、15世紀中頃～16世紀であろう六道銭があり、陶器・土師質土器等は16世紀後半～18世紀のもので占められている。図示した陶器・土師質製品をみると、16世紀後半～17世紀初頭と17世紀末～18世紀前半に集中しており、営みの断続期間も想定できる。ただし、図示した以外の中近世遺物も少なくない。また、遺物量と実際の営みの断続・盛衰が対応するとは限らない。確実性の高い判断としては、15～16世紀にはじまり18世紀に至るという程度が妥当と考える。

遺構の時期については、前節で個々に述べている。しかし、出土遺物および一部の特徴からの判断であり、確実性は比較的高いものの、ほぼ縄文時代か中世後半～近世前半かの判断だけに留まっている。本節では、推測も加えながら、縄文時代と中近世それぞれにおける遺跡の広がりや展開などについて述べていきたい。

縄文時代の集落

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡（D区SB01）、落し穴（C区SF14・SF15、D区SF27・SF30・SF31・SF33）、貯蔵穴の可能性があるSF25（D区）、炉であるSF26（D区）がある。火の使用跡であるSF16（C区）、用途不明の土坑であるSF17（C区）、SF24（D区）も縄文時代の遺構である可能性があり、また、小穴の中に縄文時代の遺構が含まれている可能性もある。

縄文時代早期　D区SF24とC区SP172・173などで早期の土器片が出土している。東隣の大和田遺跡（第3章）で早期の土器片が多く出土しているが、本遺跡との間には谷があり、両遺跡間で自然に遺物が流出入するとは想定し難い。大和田遺跡を中心とした縄文早期の営みが、本遺跡にも多少は広がっていたことを示すものと評価したい。

縄文時代中期　竪穴住居跡が1軒（D区SB01）だけ検出されている。しかし、本遺跡は全体的に大きく削平を受けており、ほかに消失した住居跡があっても不思議ではない。SB01の周辺では、住居の炉になるSF26、さらに、倒木痕や窪地（SF23）などにおける縄文時代遺物の集中出土が認められている。以上から、D区中央部には複数の竪穴住居跡が展開していたと復元することができる。また、その展開時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉を主とすることがわかる。

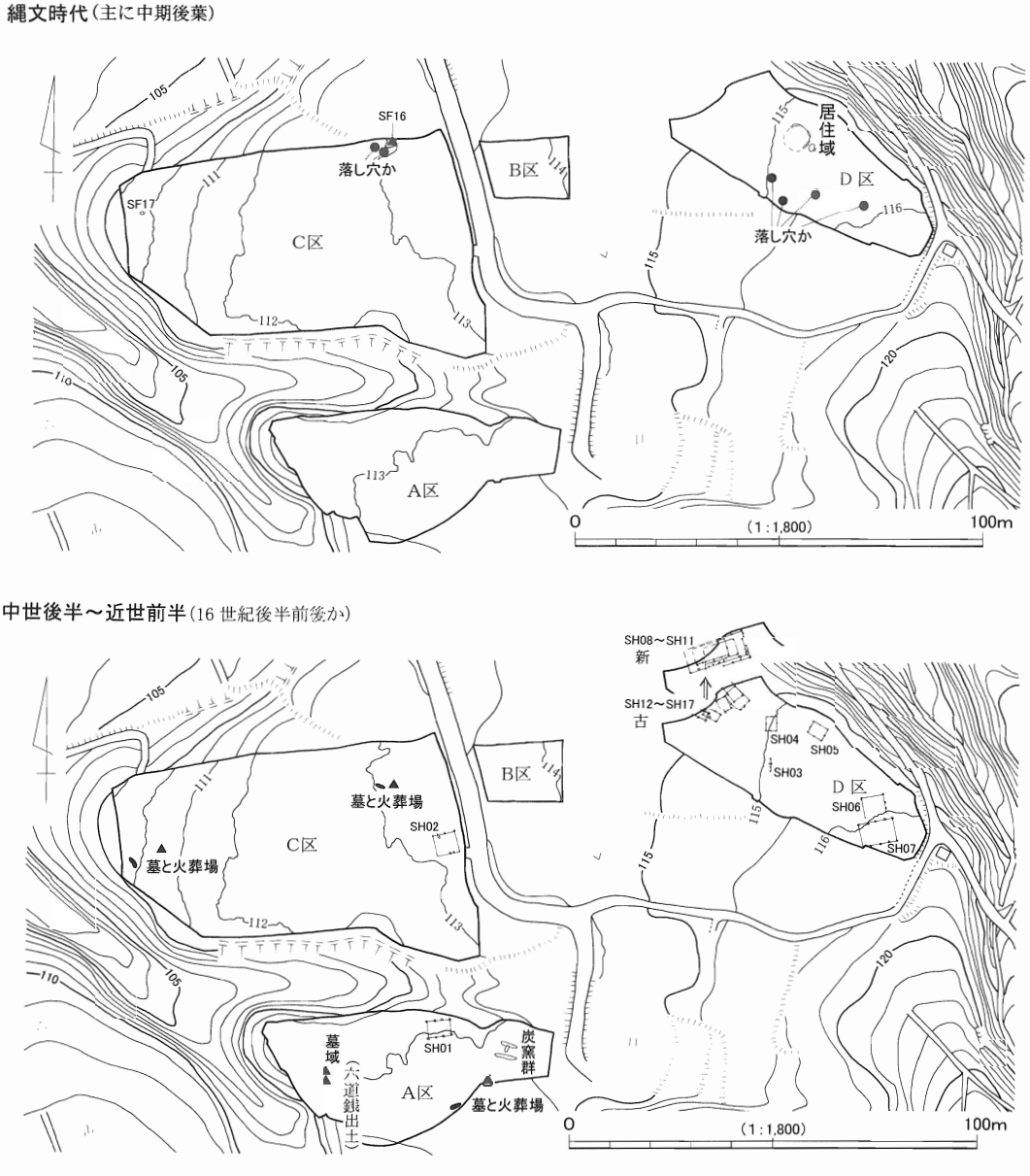
住居跡等の南側では、丘陵寄りに沿って並ぶ4基の落し穴が検出されている。また、落し穴はC区でも発見されており（SF14・SF15）、縄文時代中期の営みがC区にまで（段丘上全体に）広がっていたと判断することができる。残念ながら、D区とC区の落し穴がつながっていたのか、C区周辺にも居住域があったのか等については、遺跡の残存状況や今回の調査範囲から判断し難い。遺物出土量をみるかぎりでは、営みの中心はあくまでD区中央部にあると判断できる。また、C区の火の使用跡（SF16）や石器砕片を多く含む土坑（SF17）が縄文時代の遺構として評価できるならば、C区にはD区にない異なる活動内容があった可能性も指摘することができる。

縄文時代中期後葉の遺物の出土は、大和田遺跡・平島Ⅱ遺跡・平島Ⅲ遺跡でも認められている（第2・4・5章）。居住・狩猟・採集・生産といった様々な活動の中で、広い範囲をそれぞれに活用していたことを示すものとして評価できる。

中世後半～近世前半の墓と建物

墓群の特徴　火葬（荼毘）跡および火葬墓（墓穴）が、４ヶ所（Ａ区西部・Ａ区中央部・Ｃ区西部・Ｃ区北東部）で検出されている。これらは、西の谷への落ち際や段丘上の傾斜変換部に立地しており、各々は数基の墓と火葬遺構で構成されている。全てが火葬に関わる遺構であり、土葬は認められない。なお、明確に墓に伴うといえる遺物は、Ａ区西部で出土した４組の六道銭だけである。

火葬後の銅銭は拾われない、もしくは廃棄される場合が多く、意識として六道銭を必要としたのは納棺後火葬に至るまでの間であったと推定されている（寺島2001、など）。しかし、本遺跡では最低２組の六道銭が火葬後に墓穴に入れられており、一方、火葬跡からは銅銭が出土していない。また、六道銭の出土はＡ区西部に限定されるという特徴も指摘できる。偶然による可能性も否定できないが、本遺跡の墓群の時期や性格・地域性、もしくはＡ区西部の集団だけが帯びていた性格などが影響している可能



第101図　平島Ⅰ遺跡の変遷

性もある。残念ながら、出土遺物が少なく各墓群の詳細な時期的変遷や特徴・相違点を求めることはできない。今回の調査成果のみからの判断は困難である。

墓群の時期　17世紀（近世）になると、儒教の影響により土葬が主になることが指摘されている（木村1997、藤澤1997）。一方、寛永通寶を含まない六道銭は15世紀中頃～17世紀中頃か後半であろうという指摘もされている（足立1997、など）。さらに、墓群の周辺では、16世紀後半に位置づけできるカワラケの出土が認められている（第97図42）。以上から、本遺跡の墓群は中世後半（15世紀中頃～16世紀）に形成されたと判断することができ、16世紀後半の可能性が比較的高いと考えられる。

建物跡の時期と特徴　中近世の建物15棟は、全て掘立柱であり、建物基礎の変遷（足立1991・1996）から考えて、18世紀初頭以前の建物であると判断できる。それ以上の限定が容易な建物跡は少ない。規模や特徴をみると、大規模建物・小規模建物・中規模建物の３つに分類することができる。

大規模建物としては、Ｄ区北部のSH09～SH11をあげることができる。建て替えながら営まれた建物跡群であり、SH11は出土遺物から16世紀末以降に限定できる建物跡である。４ｍ以上×８ｍ以上の比較的大きな建物であり、柱穴も他より大きめで、石が残されているものもある。このような特徴をもつ建物跡群は、宮ノ沢遺跡（第２章）でも検出されており（SH23～SH25）、近世前半（概ね17世紀）の可能性が高いと考えている。本遺跡のSH09～SH11についても、中世末頃～近世前半（16世紀後半～17世紀）のものである可能性が考慮できる。

小規模建物としては、SH09～SH11と重なるSH12～SH17と、その南側のSH03～SH05をあげることができ、Ｄ区北半に集中している（第101図）。時期については、切り合いからSH15がSH11より古いと判断できており、SH12～SH17の展開はSH09～SH11の展開（16世紀末～17世紀）より古いものと考えられる。ただし、掲載した本遺跡出土土器（第97図）をみるかぎり、16世紀後半より古い土器は認められない。以上から、小規模建物群はSH09～SH11が展開する直前～同時期に展開した可能性が考えられる。

中規模建物としては、Ｄ区南部のSH06・SH07とＡ区SH01、Ｂ区SH02をあげることができる。建物方向などは大規模建物のSH09～SH11と類似し、建物規模をみても大規模の類に入るものもある。しかし、これらにはSH09～SH11のような建て替えの存在は認められない。時期については他と同様、16世紀後半～17世紀の中であるといった判断しかできない。ただし、他と異なる分散する分布傾向を見出すことができ、大規模建物もしくは小規模建物と同時期であったとしても、その性格・機能についてはそれらと大きく異なる可能性が考慮できる。

中世後半の墓群と建物群　以上、墓および建物の時期等について述べてきた。各遺構の時期の詳細は特定できず、墓と建物の時期差についての明確化も困難な状況である。また、抽出した建物跡の柱穴以外にも小穴が多く検出されており、さらに、遺跡が立地する段丘上部は今回の調査区の北側にも広がっている。それらの中に、ここで述べる展開と異なる状況が隠れている可能性は否定できない。しかし、今回の調査成果をみるかぎりにおいては、次のような理解が妥当ではないかと考える。

墓群・建物群とも、16世紀後半の可能性が比較的高い、もしくは16世紀後半を展開期間に含むものと考えられる。そして、墓群は西寄りに分布する一方、大規模建物・小規模建物は東寄りに集中して分布しており、双方は墓域と居住域（屋敷地）に対応する可能性も指摘することができる。なお、中規模建物は東西に分散するように分布しており、墓域の近くでも検出されている。中規模建物の性格・機能は東側に集中する大規模建物・小規模建物とは異なり、墓域と関連するものである可能性も考慮できる。ただし、他との時期差を考慮する必要もあり、またSH06・SH07付近には墓群が認められていない。

近世の営み　近世的な社会構造になるのと関連して、墓および墓域の様相が大きく変化すると考えられている（木村1997、藤澤1997）。本遺跡の墓域についても、近世の墓を含むと判断できる根拠は認められない。墓域自体が本遺跡外に移った可能性が指摘できる。

一方、建物跡については、先述のとおり詳細な時期は特定できず、どれが近世の建物跡なのか、もしくは近世の建物跡を含んでいるのかについては判断し難い。また、未調査部分などに近世建物跡が隠れている可能性もある。今回の調査では、近世後半にまで至る遺物が出土しており、とくにB・C区では、多くの近世後半以降の磁器および陶器が出土している（第15表）。実際に、近世後半以降の桶を伴う土坑（第74図）も認められており、近世にも営みがあった点については明らかであるといえる。さらに、18世紀中頃以降の建物の基礎は石場立などになるとされており（足立1991・1996）、削平等により検出できない場合が多いと推測できる。したがって、建物を伴っていた可能性も否定することはできない。

本遺跡の現地調査および本報告の作成にあたっては、掛川市教育委員会の方々、とくに、松本一男氏には有益な御指導・御助言をいただきました。また、河合　修氏にも有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。

参考文献

足立順司　1991　「遺構の変遷」　『原川遺跡Ⅳ』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
1994　「消費地出土の初山焼・志戸呂焼－原川遺跡を中心に－」　『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集
1996　「町屋の構造と階層」　『水井遺跡・清水遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
1997　「六道銭と墓」　『静岡県における中世墓』　静岡県考古学会
江戸遺跡研究会　2001　『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房
小野正敏（編集代表）　2001　『図解・日本の中世遺跡』　東京大学出版会
掛川市教育委員会　1984a　『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』
1984b　『掛川市遺跡分布調査報告Ⅱ』
掛川市史編さん委員会　1997　『掛川市史』上巻
2000　『掛川市史』資料編　古代・中世
木村弘之　1997　「中世墓の種類と変遷」　『静岡県における中世墓』　静岡県考古学会
静岡県教育委員会　1989　『静岡県文化財地図Ⅱ－焼津市以西－』
静岡県考古学会　1997　『静岡県における中世墓』
1998　『縄文時代中期前半の東海系土器群－北屋敷式土器の成立と展開－』第5回東海考古学フォーラム
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991　『原川遺跡Ⅳ』
1996　『水井遺跡・清水遺跡』
寺島孝一　2001　「堺の銭座と六道銭」　『図説江戸考古学研究事典』　江戸遺跡研究会
兵庫県埋蔵銭調査会　1996　『日本出土銭総覧』1996年版
藤澤典彦　1997　「中世墓地の成立と終焉」　『静岡県における中世墓』　静岡県考古学会
山崎克巳　1997　「静岡県西部における縄文時代中期後半土器群の様相」　『静岡県史研究』第13号　静岡県

第５章　平島Ⅱ遺跡

第二東名No.98地点

第１節　位置と環境

１．位置と地理的環境

平島Ⅱ遺跡は、静岡県掛川市平島217他、掛川市東部の原野谷川の上流域左岸に位置する。

原野谷川上流域では、広い沖積平野が形成されず、川は丘陵の谷間に沿うようにして蛇行している（第１章 第２図）。大和田・平島地区の原野谷川は、北に凸の弧をいくつか連続させるようにしながら、西南西へと流れる。その中で比較的緩やかな弧を描く部分があり、左岸（南側）に南北最大幅約150m、東西約600mにわたる段丘群が形成されている。本遺跡は、その中央部に立地している。

段丘は、南北に流れる小河川（小谷）によって、いくつかに分断されている。本遺跡の東西も小谷によって区画されている。段丘の上部は、全体的には緩やかに南西に下っている。南には丘陵の急斜面、北には河川に向かって下る斜面地が続いている。

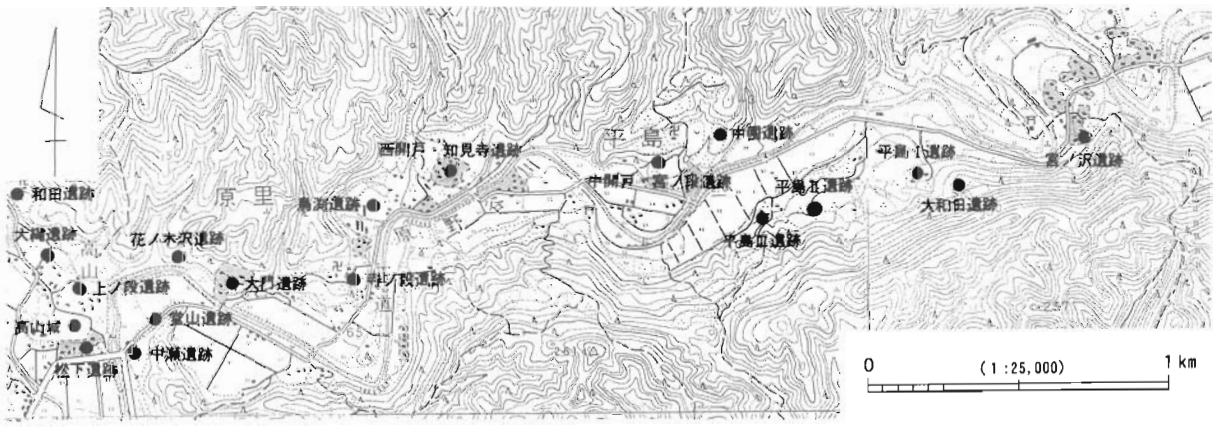
見晴らしは、原野谷川流域をいくらか望める程度である。なお、平坦面のほぼ全体が茶畑に利用されており、多少の削平・盛土も想定できるが、大規模な地形改変を観察することはできない。

２．歴史的環境と調査歴

平島Ⅱ遺跡については、今回がはじめての発掘調査である。遺跡は幅約70mの段丘上平坦面に立地し、今回の調査区の東西には谷がある。また、調査区の南北については、確認調査によって遺跡の存在が認められなかった。したがって、今回の調査によって本遺跡のほぼ全体を調査したことになる。

大和田・平島の遺跡、また原野谷川上流域の左岸にある遺跡については、本書に報告のある遺跡で占められる。大和田では宮ノ沢遺跡（第２章）で、山茶碗を中心とした出土、中近世の集落跡の発見があった。本遺跡の東隣にある平島Ⅰ遺跡（第４章）、西隣にある平島Ⅲ遺跡（第６章）でも、中近世の集落跡が発見されている。平島Ⅰ～Ⅲ遺跡は同じ段丘上で隣接しており、互いに関連性を考えることができる遺跡である。なお、本遺跡の周辺には「藤右エ門屋敷」といった屋敷を想定させるような小字名、「堂ノ上」といった阿弥陀堂などを想定させるような小字名が残っている。

東隣の平島Ⅰ遺跡やさらに東に位置する大和田遺跡（第３章）では、縄文時代の遺物・遺構が多く発見されている。この段丘上には縄文時代の営みもあったことがわかっている。



第102図　本遺跡の位置と周辺の遺跡

第２節　調査の方法と経過

１．発掘調査の方法

本調査の区域は、段丘上平坦面の東西約70m、南北約35mを範囲とする（第103図）。前節２で述べたとおり、調査区の東西は谷、南北は確認調査によって遺跡が存在しないことが確認されている。したがって、本遺跡の範囲は調査区よりも広がらないと判断できている。なお、現況での標高は約112～115mである。

発掘調査は、まず駐車場・作業員棟用地の整地から開始した。さらに、重機進入路等の設置、調査区の設定を行い、その後、作業員棟等の設置などとともに、重機による表土除去を開始した。

重機による表土除去を開始した後、重機による表土除去が済んだ部分から、随時、人力による表土除去および遺構検出面までの掘削を開始した。大半の部分については、表土除去後間もなく遺構検出面を検出することができた。ただし、調査区北西隅の部分では、表土・耕作土下に暗褐色土の堆積が確認され、それを除去することになった。なお、表土除去以降の作業を円滑にすすめるため、また排土処理のためもあり、重機による作業と人力による作業の一部は並行して行っている。また、表土除去およびその後の作業は、基本的に西から東へとすすめていった。

遺構検出面の検出ができた場所から、随時、遺構の検出作業を行っていった。遺構検出に際しては、まず、平面プランの主軸直行方向に土層帯を設けるかプランの半分を検出し、土層断面によって覆土を観察・注記、土層断面を記録した。その上で、遺構全体の検出を行った。

遺構調査に際しては、座標に合わせた10m方眼のグリッドを調査区全体にまたがるように設定し、基準点測量およびグリッド杭の設置を委託して実施した。遺構番号については、調査中に付したものもあるが、本報告に際して、全遺構に対して遺構種類別に新たな番号を付し直した。遺物については、遺構外の出土遺物は出土地点の３次元座標を計測して取り上げた。ただし、表面採集（表採）した遺物や撹乱出土遺物などについては、一括化・簡略化している場合もある。遺構内の出土遺物は遺構ごとを基本とし、三次元座標も計測して取り上げたものもある。なお、出土遺物総数は少なく、遺物出土地点の分布にさしたる傾向を見出せてはいない。本報告に際しては、各遺物の出土地点を３次元座標ではなく、グリッドにて示した。それ以上の出土地点の詳細について示す必要があるものについては、文中で述べることとした。

現地の記録図面は、地形測量を1/100、遺構図を1/20を基本とし、グリッドに沿って作成した。なお、測量・図面作成は委託にて実施した。遺構・景観等の現地記録写真の撮影は、６×７版（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用い、作業工程撮影用に35mm判（カラーネガ）を使用した。また、全景写真撮影においては、空中写真撮影を委託にて利用した。

２．発掘調査の経過

平成12年８月３日に発掘調査を開始した。調査区設定などの準備の後、７日に重機による表土除去を開始、８日に人力による作業を開始した。18日に基準点測量およびグリッド杭を打設、その後、遺構面検出作業、遺構の精査・検出作業を随時行っていった。８月末頃から実測・測量作業を開始、遺構検出

作業の進行に合わせて断続的に実施していった。

調査区全体の遺構検出作業が終了した後、９月19日に空中写真撮影による調査区全景の写真撮影を行った。その後、個別の遺構写真撮影や実測・測量作業を行い、さらに撤収作業を行った。10月下旬に現地の調査を終了している。

なお、測量・実測関連の作業は加藤建設株式会社、空中写真撮影は株式会社フジヤマに委託した。

３．資料整理の方法と経過

本遺跡に関わる資料整理作業および報告書作成作業は、平成14年７月から、大和田遺跡・平島Ⅰ遺跡・平島Ⅲ遺跡と同時に開始した。ただし、掛川工区内の他遺跡の資料整理・報告書作成作業、さらには他の現地調査の実施と重なることがあったため、その作業は断続的に実施していくことになった。

現地調査終了直後の基礎整理において、出土土器の洗浄・注記・接合、遺構図・写真などといった現地調査の資料や出土遺物の台帳の作成を実施していた。よって、資料整理においては、遺構図の修正作業などが中心となった。

続いて、土器の図化作業、各図面の編集・トレース作業、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は、４×５判（白黒ネガ・リバーサル）、６×７判（白黒ネガ・リバーサル）、35㎜判（リバーサル）を用いて、当研究所写真室が実施した。

第103図　本調査範囲とグリッド配置

第３節　調査の成果

１．全体の概要

（１）土層および地形

大半の部分では、表土・耕作土を除くと遺構検出面となる黄橙色層上面があらわれる。この黄橙色層には岩盤の礫を多く含み、Ａ５グリッド中央部では岩盤が露出してしまっている。一方、調査区の北西隅、Ａ・Ｂの１～２グリッドでは、表土・耕作土の下に暗褐色土の堆積が確認されている。それを取り除くと、北西に下る斜面地があらわれる。なお、表土・耕作土の厚さは平均0.5mである。

発掘調査によって検出された地形は、基本的には現況地形と大きく変わらない。全体としては、調査区中央を尾根筋として北側に緩く下る地形であり、周辺と比べると概ね平坦な場所であるともいえる。調査区東半は、一定の緩い傾斜で北東に下る。一方、調査区西半はさらに緩い傾斜で北西に下るが、調査区北西隅では傾斜が急になる。

なお、この場所は茶畑として利用されていたこともあり、削平・撹乱を受けていることがわかっている。調査区のほぼ全体に削平が及んでおり、検出した地形は本来より平坦化していると推測することができる。ただし、本来より上面が比較的平坦な段丘であったこと、あくまで茶畑のための削平・撹乱であること、実際に調査区内の高所でも遺構が検出されていることから、それほど大きな地形改変ではなかったと考える。

（２）遺構・遺物の概要

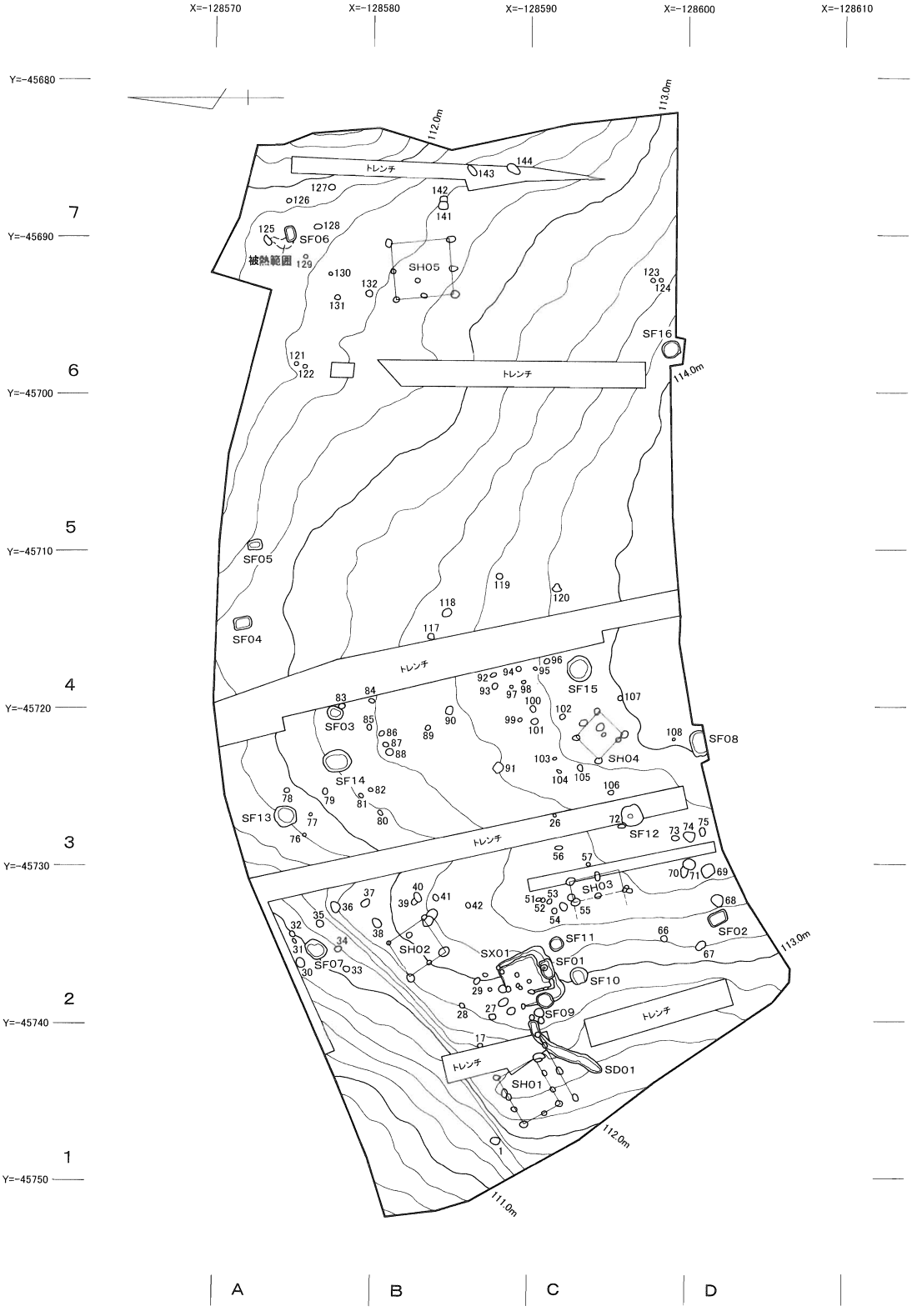
最も多い遺構は小穴であり、140基以上が検出されている。小穴の分布は調査区西半に多く、数ヶ所に集中する。一方、北東部にも小穴の集中がみられる。柱穴も多く含まれており、北東部で１棟（SH05）、西半で４棟（SH01～SH04）の掘立柱建物跡が認められている。多くの建物跡は、出土遺物等から中世後半～近世前半と判断できる。しかし、SH04はより古い時代の住居跡の残存である可能性もある。

土坑は16基検出されている。これらには、近世以降の肥溜め（SF13～SF16）、中世後半以降の平面長方形の土坑（SF03～SF07）などのほか、縄文時代の可能性のある土坑（SF10・SF12）もある。

調査区西部で、一辺3.5mの方形の竪穴遺構が検出されている（SX01）。住居にしては炉や竈はなく、柱穴も判然としない。出土遺物から近世の遺構であると判断でき、用途のわからない不明遺構とした。また、その西側に長さ0.58mの溝が検出されている（SD01）。この性格も不明である。出土遺物はないが、SX01との関連も想定される。

出土遺物には、縄文時代の遺物と中近世の遺物がある。縄文時代の遺物は中近世の遺物に比べて非常に少ない。縄文時代の遺物には、極小さな土器片と石器・剥片類がある。中近世の遺物には、陶器片のほかにカワラケをはじめとする土師質土器片が多い。

遺物の多くは表土・耕作土からの出土であり、調査区全体で散在的に分布している。ただし、調査区中央から西寄り部分（Ｂ５グリッド西部～Ｃ２グリッドの周辺）に比較的多く、中世後半の遺物は調査区北西隅の暗褐色堆積土中からも比較的多く出土している。遺構からの出土は数点だけであるが、縄文時代の遺物はSF10・SF12、中近世遺物は小穴（柱穴）・土坑・不明遺構からの出土が認められる。



小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。
番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

0 (1:400) 20m

第104図　遺構配置図

2．遺　構

（1）建物跡、柵などの施設跡

ＳＨ０１（第105図）

Ｂ１～Ｃ１グリッドに位置する掘立柱建物跡で、長軸は北方向より東に傾く。削平やトレンチ等による消滅部分があり、3.7m×4.6mの建物に復元できる可能性もある。しかし、検出した柱穴の配置をみる限りでは、2.8m×3.4m（１間×３間）の建物跡で、南側に柵などの施設が付随するという方が妥当と評価した。なお、西辺上にSP11が検出されているが、中央には位置していない。

柱穴は直径0.6m以下、検出面からの深さ0.3m以下である。SD01と重なるが、浅い検出のため先後関係は判断できない。SP14からカワラケ片、SP10から土師質土器片が出土しており、また掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断できる。

ＳＨ０２・ＳＨ０３・ＳＨ０５（第105・106図）

SH02は、Ｂ２グリッド北西部に位置し、長軸が北方向より西に傾く掘立柱建物跡である。2.5m×2.8mの正方形に近い建物跡で、１間×２間であろうか。SP47の位置がずれており、またSP50・SP47は小さく浅いことから、１間×１間である可能性も評価できる。柱穴は直径0.6m以下、深さ0.3m以下である。なお、SP45でカワラケ片が出土している。

SH03は、Ｃ２グリッド東寄りに位置する掘立柱建物跡で、長軸は北方向より若干西に傾く。１間×２間（1.4m×3.3m）の細長い建物跡であるが、西に緩く下る場所にあり、西側により大きい可能性も否定できない。南東隅の柱穴がないのはトレンチ・撹乱のためである。柱穴は直径・深さとも0.5m以下である。なお、SP62・SP63からカワラケ片が出土している。

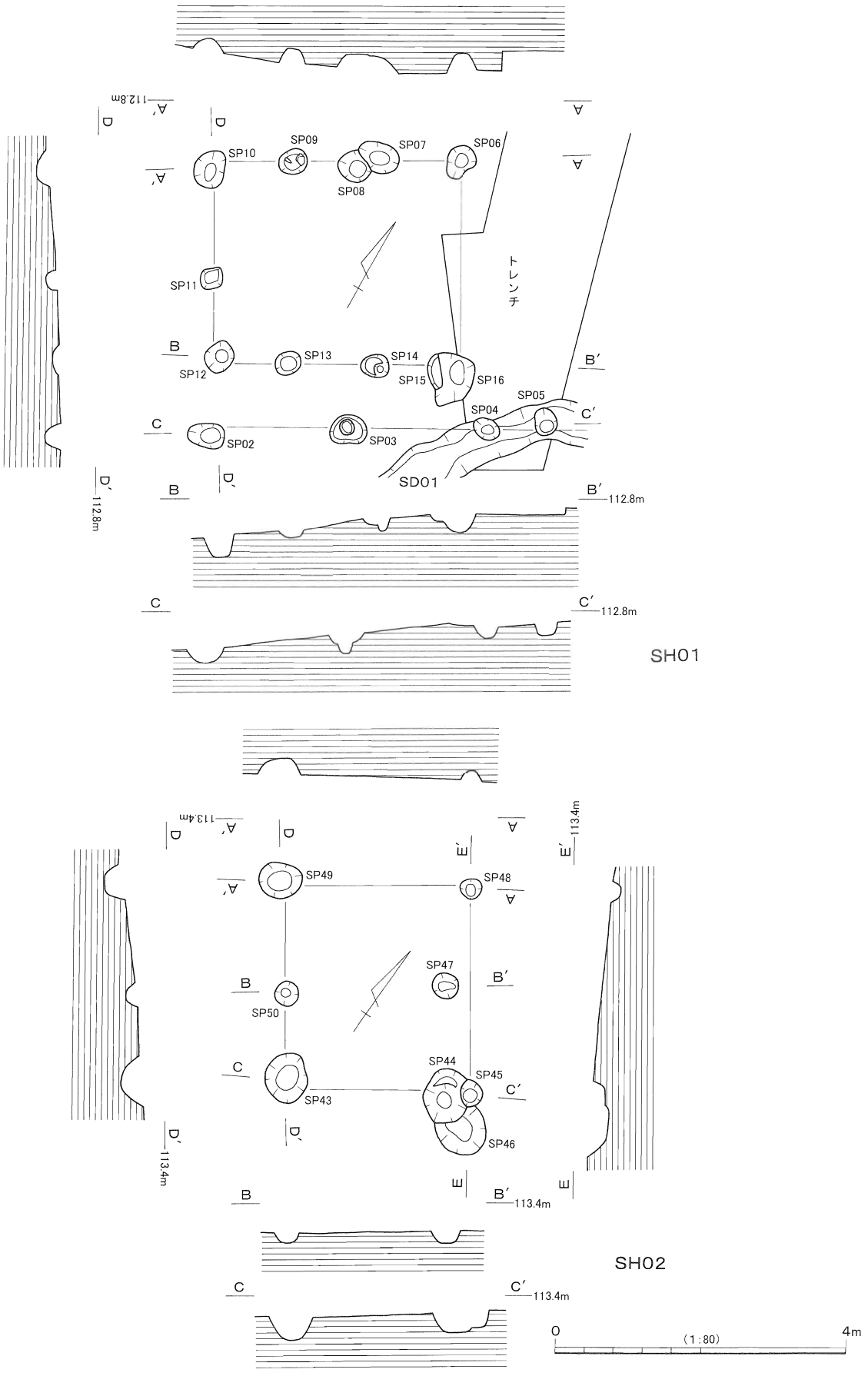
SH05は、Ｂ６グリッド東寄りに位置する。3.4m×3.5mと平面正方形に近い掘立柱建物跡で、方向はほぼ方位に合う。２間×２間の可能性が高いが、東辺中央の柱穴が検出できていない。中央の柱穴は浅いため、東辺中央は消失してしまった可能性もある。柱穴は直径0.6m以下、深さ0.35m以下、直径0.25m程の柱痕が底面に認められる柱穴、外側に長くなった柱穴もある。また、SP134にだけ石が残っている。なお、SP135から中近世の土師質土器片が出土している。

SH02・SH03・SH05は、それぞれの出土遺物から、また掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断できる。

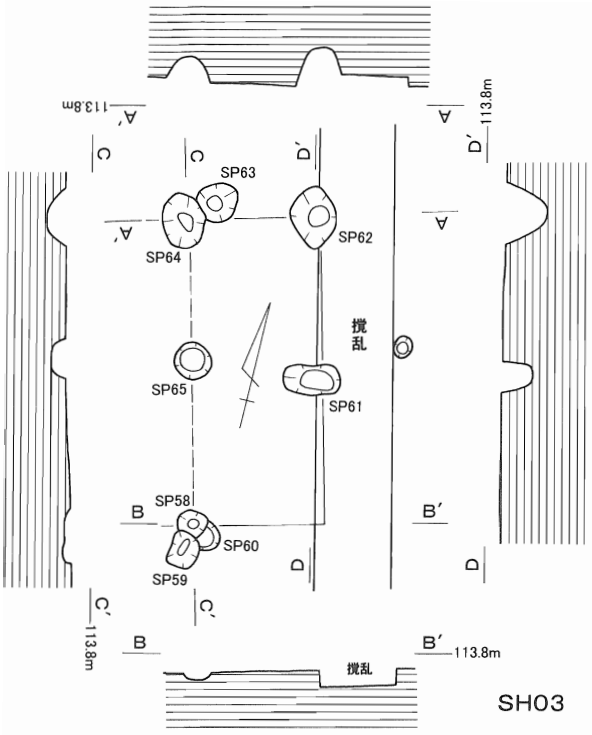
ＳＨ０４（第106図）

Ｃ３グリッドに位置する。１間×１間（2.1m×2.3m）で正方形に近い。長軸方向は北より西に傾く。柱穴は直径0.4m程、深さ0.3m前後であり、直径0.2m程の柱痕が底面に認められるものもある。

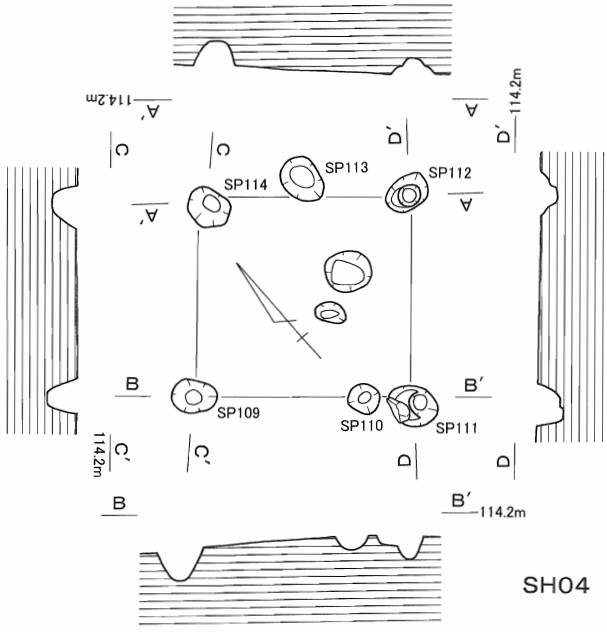
出土遺物はSP109の剥片類だけである。周辺でも縄文時代の遺物が少数出土しており、竪穴住居跡の残存である可能性も否定できない。しかし、周辺からの出土遺物をみると、中近世の遺物の方が多い。また、遺構の形状・覆土等に縄文時代といえる積極的根拠はない。さらに、中近世の掘立柱建物跡であるSH02・SH05も正方形に近いことを考慮すると、SH04は中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の掘立柱建物跡である可能性が高いと評価できる。



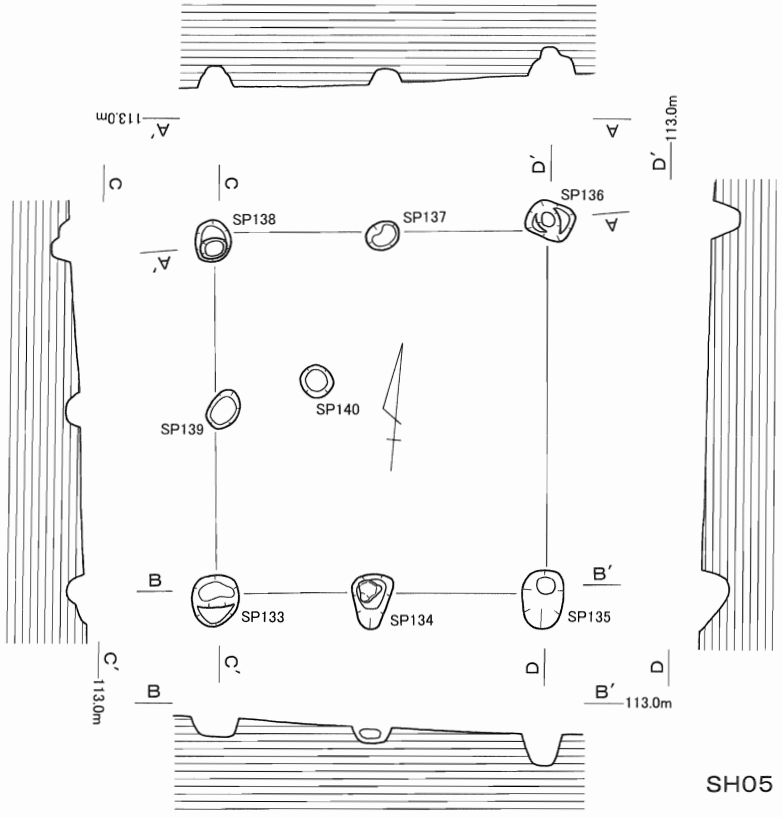
第105図　SH01・SH02



SH03



SH04



SH05

番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

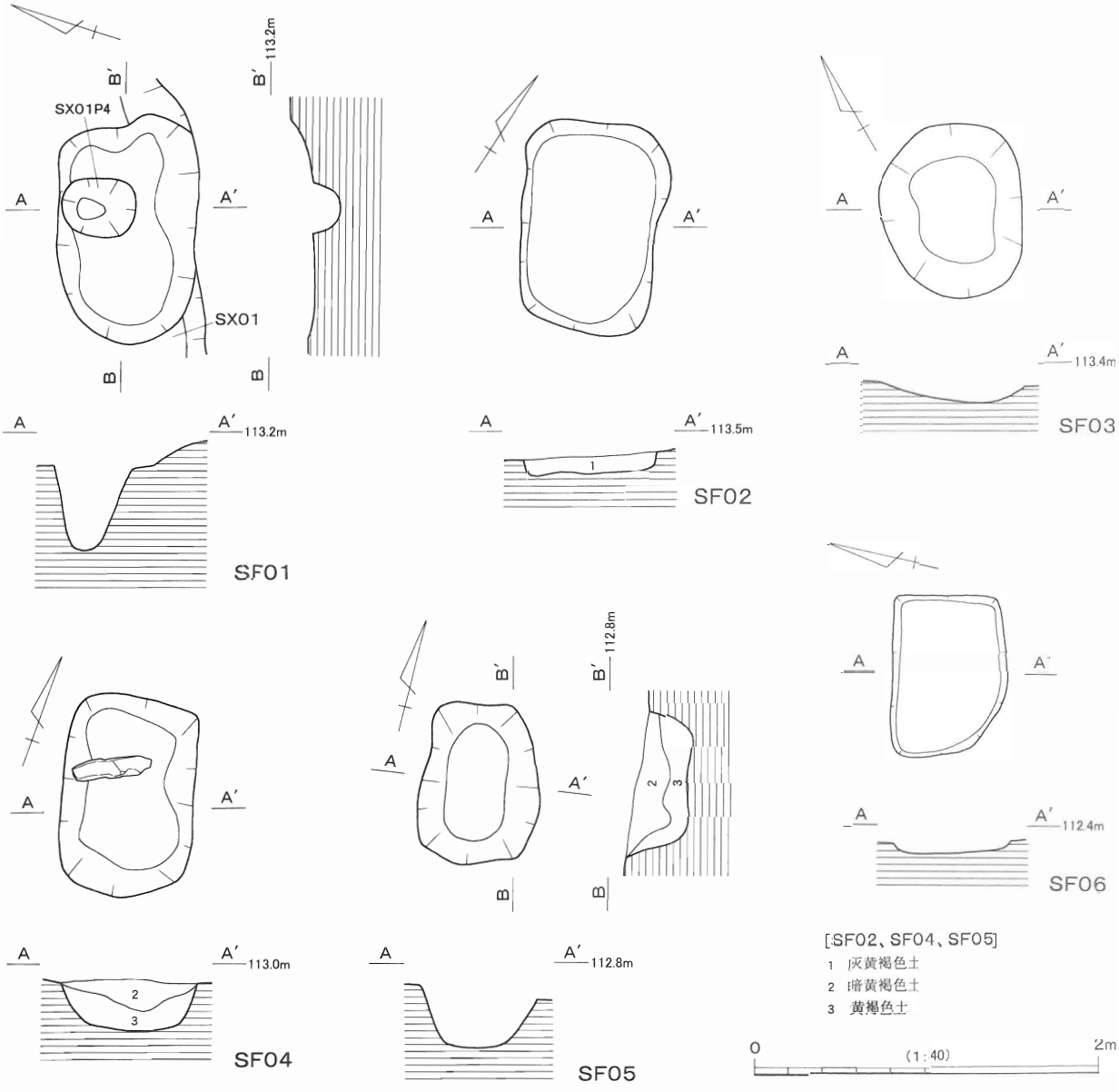
0 (1:80) 4m

第106図　SH03～SH05

（2）土　坑

ＳＦ０１（第107図）

Ｃ２グリッドに位置する。平面は0.8ｍ×1.3ｍの楕円形で、浅い。SX01の南縁にあり、SX01に付随する可能性がある。別遺構であるとすると、SF01の方が古い。小穴とも重なるが、検出が浅く先後関係はわからない。中近世陶器が出土しており、中世後半以降（15世紀以降）の土坑であると判断できる。

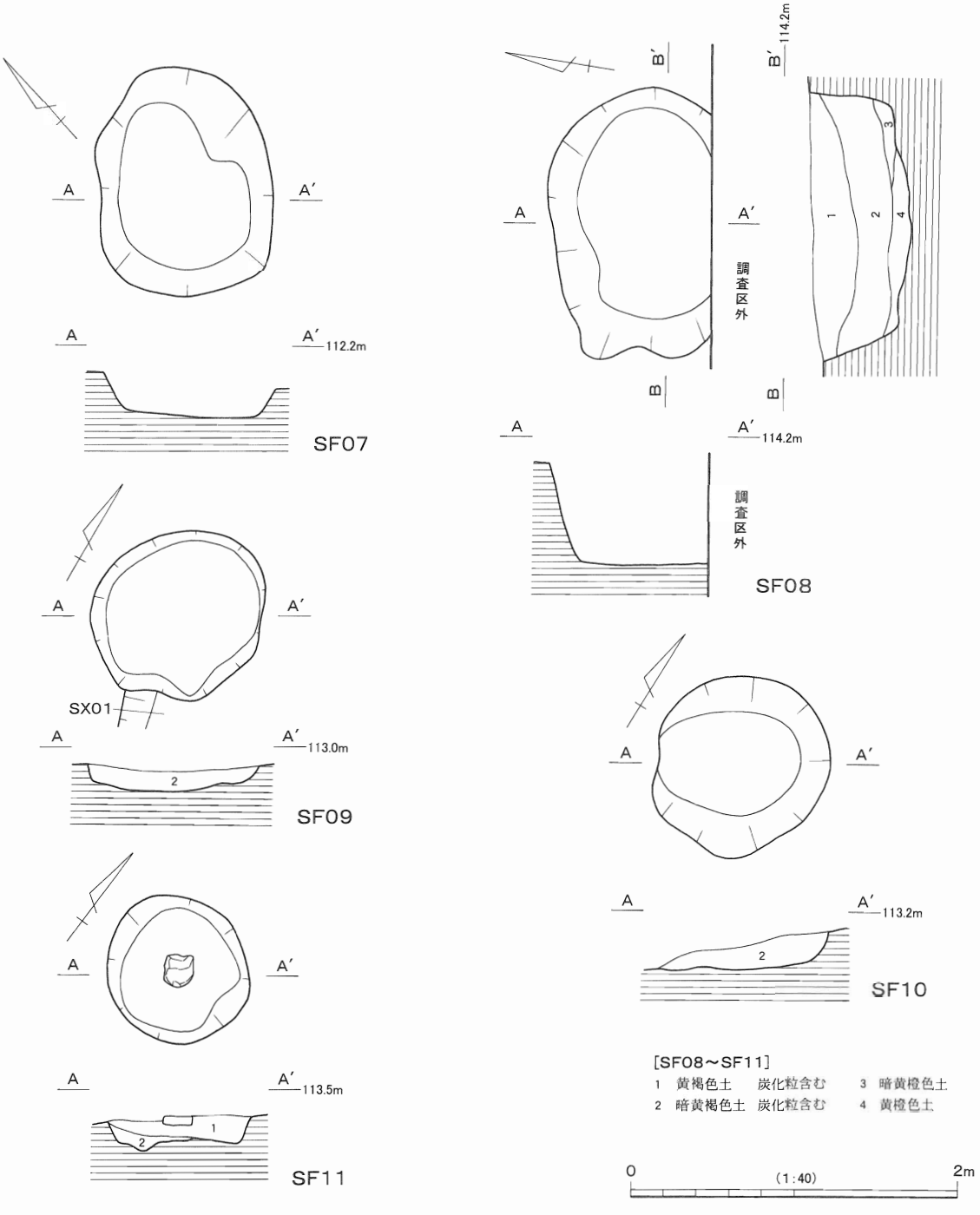


第107図　SF01～SF06

ＳＦ０２～ＳＦ０６（第107図）

長軸0.9～1.2m、短軸0.7～0.9mの平面長方形の土坑が５基検出されている。深さは0.35m以下と浅い。長軸方向は一定でなく、散在して分布しているが、緩斜面部の縁部に立地する点は共通している。また、これらの覆土の大半は、暗めの黄褐色土で占められている。

SF02～SF06は覆土・形状等の共通点が多く、時期・性格が近似している可能性が指摘できる。性格を具体的に知ることは難しいが、SF06の北側に被熱範囲があり（第104図）、関連する可能性がある。一方、SF02からカワラケ片が出土、中世後半～近世（15世紀以降）である可能性が高いと判断できる。

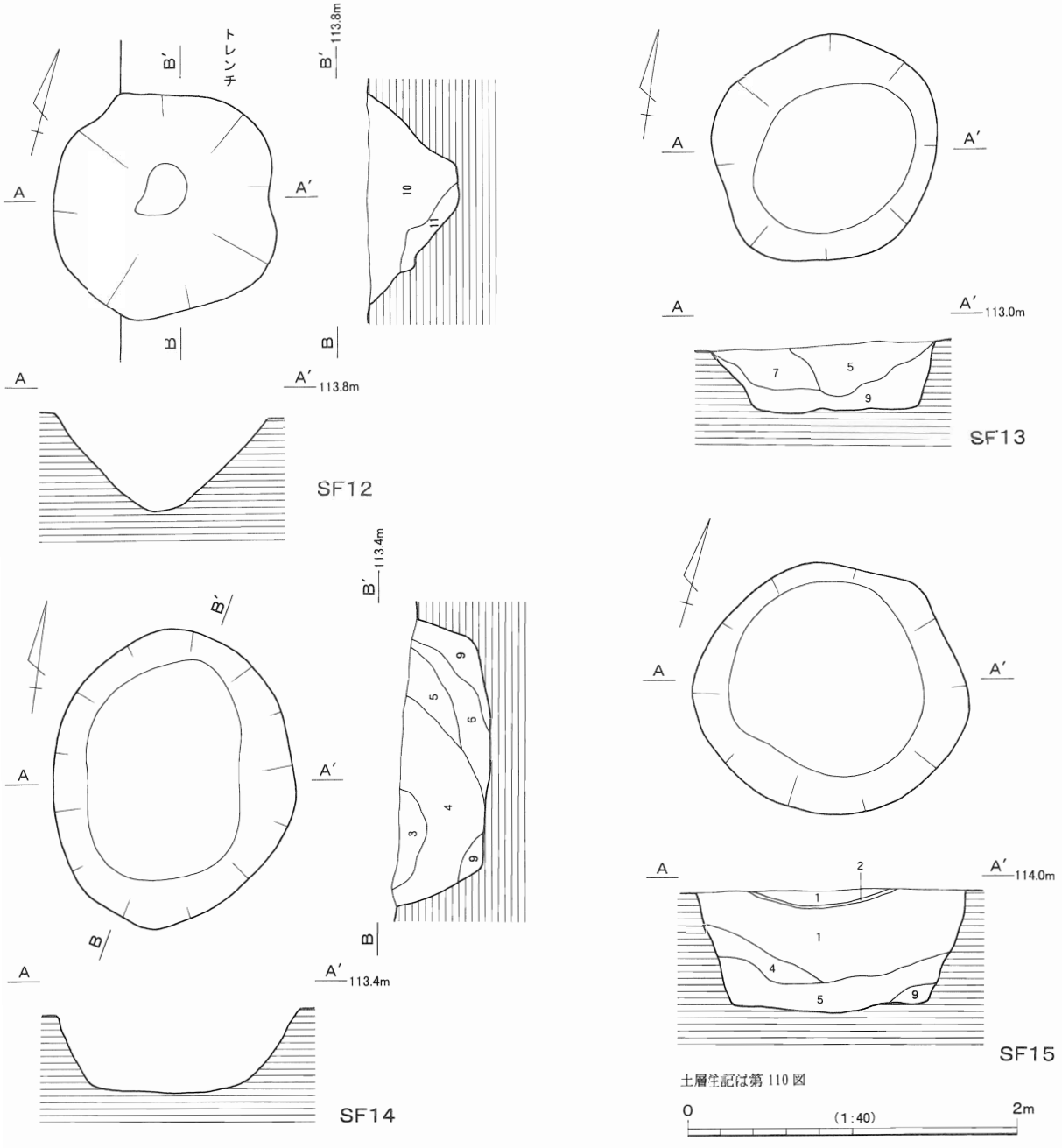


第108図　SF07～SF11

ＳＦ０７・ＳＦ０８（第108図）

SF01～SF06よりも大きい平面楕円形の土坑である。SF07はＡ２グリッドの斜面地、SF08はＤ３グリッド北寄りに位置する。長軸はともに北より東に傾く。深さは、SF08が0.6mであるのに対して、SF07は0.25mと浅い。立地や形状に大きな違いがあり、同様の性格のものとは判断し難い。

SF08はカワラケ片が出土しており、中世後半～近世（15世紀以降）の土坑である可能性が高いと判断できる。一方、SF07については出土遺物がなく、時期の判断が難しい。ただし、覆土はSF01～SF06およびSF08と同様で、暗い黄褐色土で占められている。同様の時期である可能性が指摘できる。



第109図　SF12～SF15

ＳＦ０９・ＳＦ１１（第108図）

Ｃ２グリッドで直径1.0m前後の円形土坑２基が検出されている。２基は東西に位置し、ともに深さは検出面から0.2m以下と浅く、暗黄褐色土を覆土としている。SF09はSX01と重なるが、検出が浅く先後関係は判断できていない。SF11から土師質土器片が出土しており、SF09・SF11とも中世後半～近世（15世紀以降）の土坑である可能性が高いと判断できる。

ＳＦ１０（第108図）

Ｃ２グリッドに位置する。直径1.0m強の平面円形に検出されているが、本来は南西に長い平面楕円形であった可能性がある。浅い土坑であり、覆土は暗黄褐色土である。剥片類のほか、土師質の土器片が出土している。若干の違いもあるが、近くに位置するSF09・SF11と類似した特徴が目立つ。SF09・SF11と同様の中世後半～近世（15世紀以降）の土坑である可能性が高いと判断できる。

ＳＦ１２（第109図）

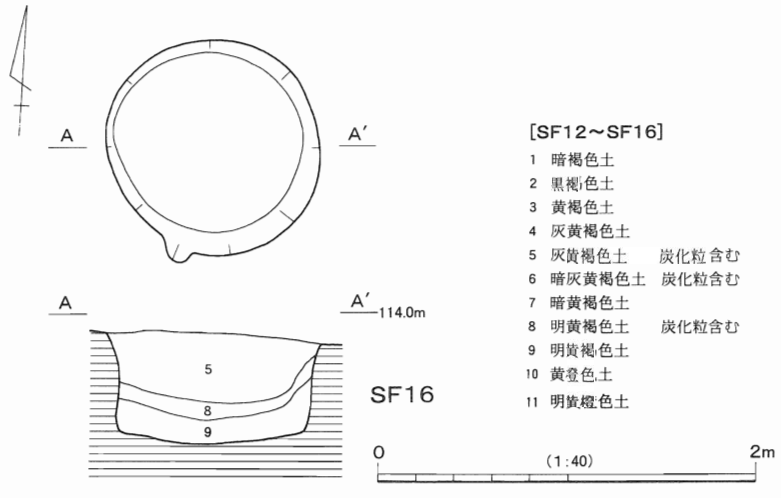
Ｃ３グリッドに位置する。直径1.4m弱の平面円形で、検出面からの深さ約0.6m、擂り鉢状の断面形を呈する。覆土は黄橙色土で占められており、他の遺構とは全く異なる。また、剥片類の出土がある一方、中近世の遺物の出土はない。覆土および出土遺物から、縄文時代の土坑であると判断できる。

平島Ⅰ遺跡のSF25（第４章 第92図）と遺構の形状が類似しており、貯蔵施設などといった縄文時代の集落遺構である可能性も指摘できる。

ＳＦ１３～ＳＦ１６（第109・110図）

SF13・SF14はＡ３グリッド、SF15はＣ４グリッドに位置する。直径1.4～1.7mの円形もしくは楕円形の土坑である。深さは検出面から0.4～0.7mと比較的深く、断面形は箱形に近い逆台形を呈する。覆土は黄褐色を基調とするが、SF15の上層には黒褐色土も認められている。SF15から中近世の陶器片が出土、遺構の形状などから近世後半以降（18世紀以降）の貯蔵施設（肥溜めか）であると判断できる。

SF16はＣ６グリッド南寄りに位置する。直径約1.1mの円形土坑であり、平面規模はSF13～SF15より小さい。しかし、深さ・断面形・覆土といった特徴は同様であり、SF13～SF15と同様の遺構であると判断することができる。



第110図　SF16

（3）その他

ＳＤ０１・ＳＸ０１（第111図）

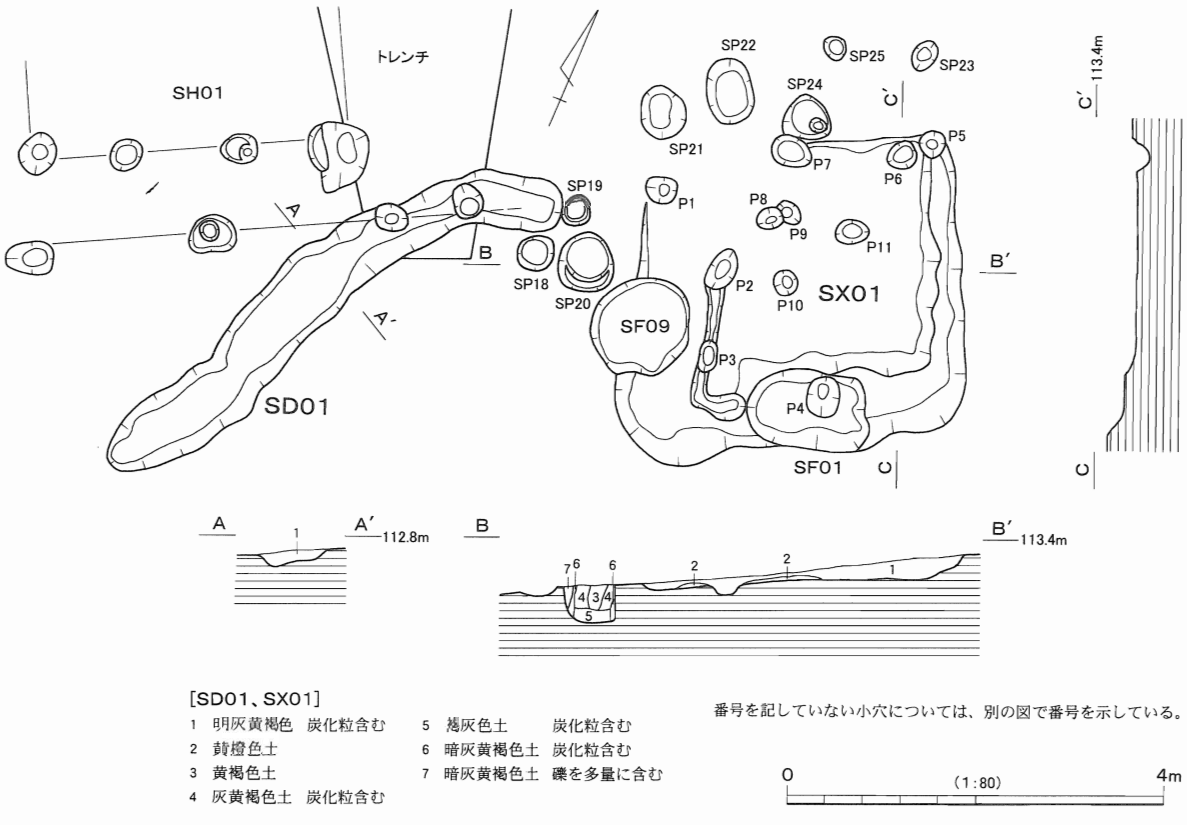
SD01は、Ｃ１グリッド北東に位置する、長さ約5.7ｍの溝である。蛇行しており、幅の変動も若干認められる。深さは0.2ｍ以下で、断面は一定しない。以上から、人為による溝ではない可能性が指摘できる。ただし、東隣のSX01から斜面下方にのびており、人為遺構（SX01）の影響を受けて形成された流路である可能性はある。この関係が成立するならば、SX01と同様の時期の遺構である可能性が高いと判断できる。なお、出土遺物はない。また、SH01と重なるが、検出が浅く先後関係は判断できていない。

SX01は、SD01の東隣に位置する。一辺3.5ｍ程度の方形、検出面からの深さ0.25ｍ以下の竪穴状遺構である。削平のためか、北西の壁体は失われている。南辺中央から東辺部では、壁沿いのテラスが削り出されている。さらに、南辺中央から西辺の内側には細く浅い溝が巡る。ただし、これらからSX01の性格・構造について明示することは難しい。また、P1～P11の小穴があるが、柱穴といえるものはない。

SF01・SF09と重なるが、検出が浅く先後関係は判断できていない。SF01はSX01に属する可能性もある。カワラケ片（第113図16・18・19など）や陶器片が出土しており、SX01は近世（17～19世紀）の遺構であると判断することができる。

小穴群（第104図）

多くの小穴があるが、既に述べた建物跡の柱穴等以外で、性格を明確にできるものはない。ただし、これらは散在するわけではなく、SH05北側・SF14付近など数ヶ所での集中が認められる。それぞれの小穴群が、建物跡（群）の残存である可能性も指摘することができる。SP56からカワラケ片、SX01西隣のSP20からもカワラケ片（第113図17）が出土している。



第111図　SD01・SX01

3．出土遺物

（1）縄文時代の遺物　（第112図）

縄文時代の出土遺物には、土器・石器ともにある。しかし、非常に少ない。合計してもＡ４版の袋で１袋に満たない。さらに、縄文土器片については、かろうじて縄文土器であることがわかる程度の極小さな破片ばかりである。したがって、縄文土器片は図示することができず、ここで詳細を述べることもできない。以下、縄文時代の石器類だけについて述べることにする。

１は平基無茎の石鏃である。腹面の縁辺のみに細かな調整が施されて尖頭部を作出している。その調整の状況から未製品ではなく完成品と考えたい。背面の打面からの剥離はどの段階でのものかは特定できないが、柄に装着するための剥離とも考えられる。２・３は二次加工のある剥片である。４は楔形石器である。素材剥片の上下端から調整を加えて、角柱状に仕上げている。５は背面の縁辺にのみ調整が施されているが、その形状から石匙の破損品と判断した。つまみ部分は欠損していると考えられる。６はスクレイパーである。腹面に調整が施されているが粗く、製作途中の可能性がある。石材や調整の状況から打製石斧の未製品とも考えられる。７は磨石であり、表裏両面に磨った痕跡が認められる。

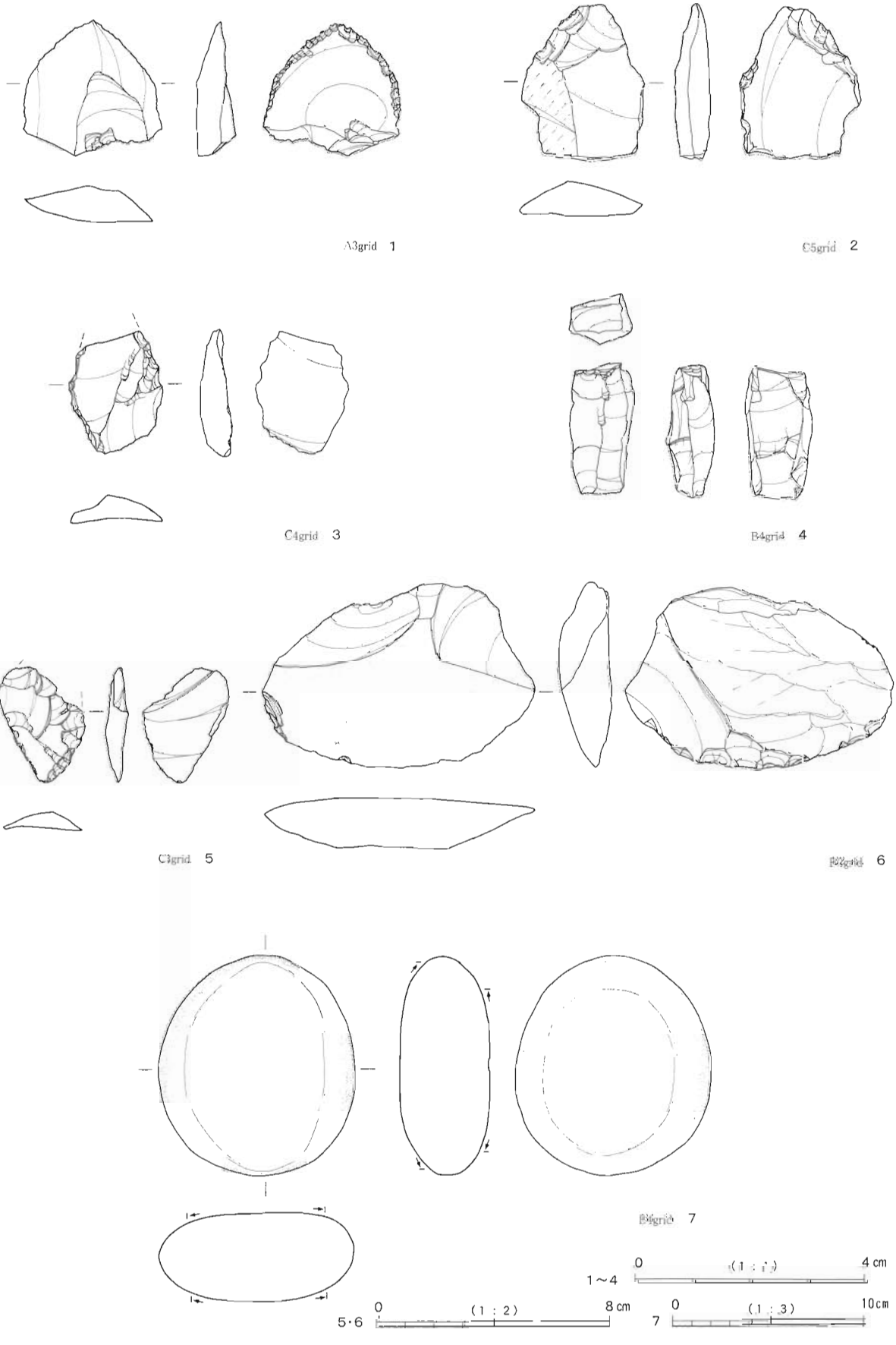
（2）中近世の遺物　（第113図）

陶磁器と土師質土器の破片が出土しているが、全体でもＡ４版の袋で２袋程度である。土師質土器片には多くのカワラケ片が含まれる。図示できる土師質土器はカワラケだけであった。また、磁器片のなかに図化することができ、時期等のわかるものはない。

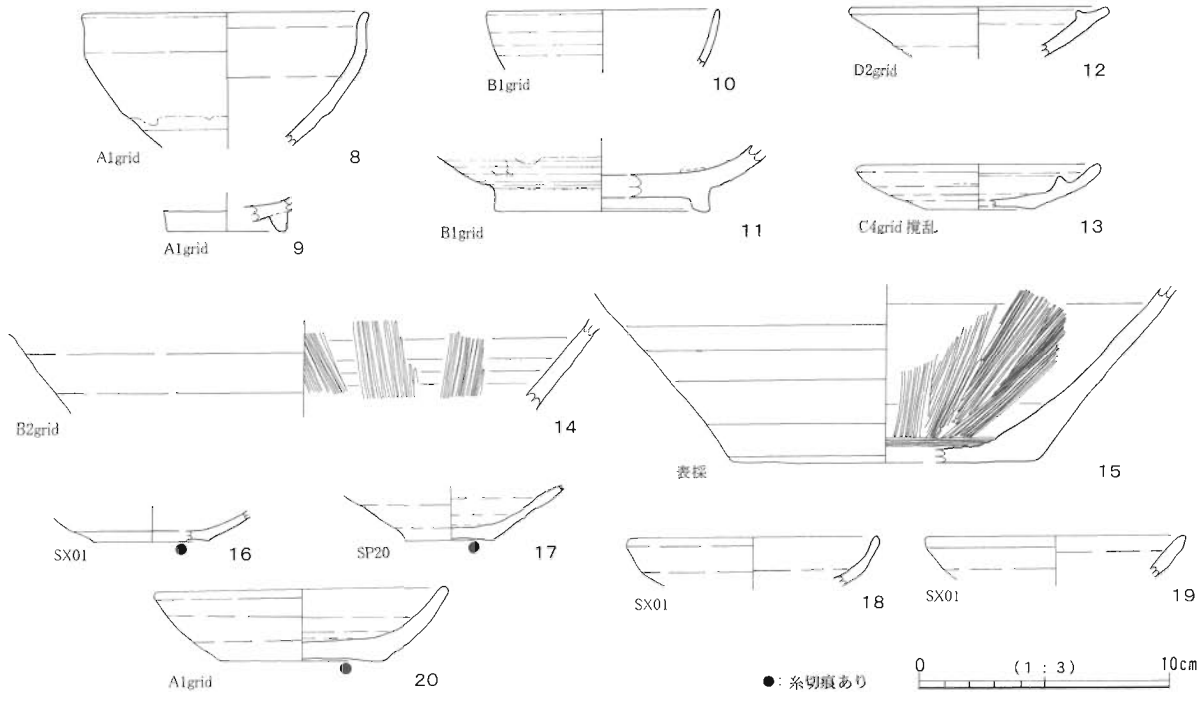
陶　器（８～15）　８・９は、瀬戸・美濃産の陶器で、同一個体である。鉄釉の施された天目茶碗であり、近世前半、17世紀前葉～中葉頃に位置づけることができる。10～15は、すべて志戸呂産の陶器であり、近世でも概ね18世紀に位置づけできるもので占められている。ただし、14は近世前半に位置づけできる可能性もある。11の底部内面にはトチン痕が認められる。

土師質土器（16～20）　図示した土師質土器は、全てカワラケである。全てロクロ成形によってつくられている。また、16・17・20の底部裏面には糸切痕が認められる。器の形状をみると、17だけが外反する体部で、他の体部は内湾していることがわかる。焼成については、特に硬くつくられたといえるものがない一方、19・20の胎土・焼成は古代以前の土師器にも近く、器面がざらついている。19・20については、他より器壁が厚い点でも共通する。

20のように15世紀代の可能性が高いものがある一方で、17のように18世紀代の可能性が高いものも出土している。19は、前者に近い時期のものであろう。16・18は、体部こそ内湾するが、胎土・焼成や器壁の薄さは17に近い、両時期の中間的位置づけを考慮することができる。なお、20には内面を中心に二次的な焼成を受けた痕跡を認めることができる。


A3grid 1
C5grid 2
C4grid 3
B4grid 4
C3grid 5
B2grid 6
B4grid 7
1～4
0 (1 : 1) 4 cm
5・6
0 (1 : 2) 8 cm
7
0 (1 : 3) 10cm

第112図　出土石器



第113図　出土陶器・土師質土器

第17表　遺物観察表

石　器

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	名称	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
1	112	47	A3grid	石鏃	ホルンフェルス(Hor)	2.40	2.40	0.69	3.30		
2	112	47	C5grid	二次加工のある剥片	珪質頁岩(SSh)	(2.69)	2.15	0.61	3.73	あり	未製品か
3	112	47	C4grid	二次加工のある剥片	ホルンフェルス(Hor)	(2.15)	1.61	0.40	1.41	あり	未製品か
4	112	47	B4grid	楔形石器	珪質頁岩(SSh)	2.32	1.15	0.78	2.78		
5	112	47	C3grid攪乱	石匙	流紋岩(Rhy)	(4.08)	(2.89)	0.53	5.58	あり	
6	112	47	B2grid	スクレイパー	頁岩(Sh)	9.35	6.23	1.80	119.36		石斧未製品か
7	112	47	B4grid	磨石	砂岩(中粒)(MSS)	11.38	10.21	4.90	873.40		

(　)内は欠損のため本来の大きさではない値

土　器

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	産地	器種	部位	残存率(%)	器高(cm)	器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	焼成	色調	備考
8	113	47	A1grid	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	口～体部	10		(11.4)	(11.2)	(4.6)	良好	淡黄白色	同一個体 内外面施釉(鉄釉)
9	113	47	A1grid				底部	10							
10	113	47	B1grid	陶器	志戸呂	丸碗	口縁部	10		(9.0)	(9.0)		良好	素地：淡茶灰色	内外面施釉(鉄釉)
11	113	47	B1grid	陶器	志戸呂	鉢	底部	40				(8.4)	良好	明黄灰色	内外面施釉(灰釉)
12	113	47	D2grid	陶器	志戸呂	灯明皿	全体	5		(10.0)	(10.0)		良好	暗茶灰色	外面施釉(鉄釉)
13	113	47	C4grid攪乱	陶器	志戸呂	灯明皿	全体	30	1.8	(9.6)	(9.6)	(4.2)	良好	淡青灰色	内外面施釉(灰釉)
14	113		B2grid	陶器	志戸呂	擂鉢	体部	10					良好	素地：淡橙褐色	内外面施釉(錆釉)
15	113	47	表採	陶器	志戸呂	擂鉢	体～底部	5				(11.8)	良好	素地：暗茶灰色	内外面施釉(錆釉)
16	113	47	SX01		カワラケ		底部	10				(4.5)	良好	橙褐色	糸切痕
17	113	47	SP20		カワラケ		体～底部	60				3.5	良好	明黄褐色	糸切痕
18	113	47	SX01		カワラケ		口縁部	5			(9.6)		良好	橙褐色	
19	113	47	SX01		カワラケ		口縁部	5			(10.8)		良好	淡橙褐色	内外面摩滅
20	113	47	A1grid		カワラケ		全体	80	2.9		11.5	6.35	良好	淡黄灰褐色	糸切痕　二次焼成

第18表　出土土器片・石器類の内訳

土器片出土数

	縄文土器	陶器(中世後半以降)	磁器(近世後半以降)	カワラケ	その他の土師質土器	計
出土点数	25	47	4	75	28	179

石器・剥片類出土数

	石器・石器未製品	剥片	砕片	計
計	7	27	28	62
内黒曜石製	0	0	1	1

第4節　まとめ

遺跡および遺構の時期について

本遺跡の主体時期は、出土遺物から縄文時代と中近世に分けて捉えることができる。縄文時代については、詳細のわかる縄文土器片の出土がなく、時期の特定が難しい。周辺の平島Ⅰ遺跡・平島Ⅲ遺跡（第4・6章）と同様と考えるならば、中期後葉の営みがあったものと推測することもできる。また、縄文時代といえる検出遺構は土坑1基（SF12）だけであり、どのような営みが展開していたのかはわからない。遺物出土量・検出遺構数は少ないが、ある程度の削平の影響もあったと考えられ、また、磨石の出土から居住域であった可能性も否定はできない。

出土遺物および検出遺構の多くは、中近世のものである。さらに、出土遺物から中世後半（15～16世紀）および近世（17世紀以降）に限定することができる。一方、掲載した遺物（第113図）は近世（17世紀以降）のもので占められているが、その評価には慎重にならざるを得ない。本遺跡の遺物総数は少なく、しかも大半は掲載できなかった小破片である。さらに、近世の可能性が高いと判断できる遺構は、SX01および一部の土坑だけであり、掲載遺物のように近世の遺構で占められているとはかぎらない。

中近世の平島Ⅱ遺跡

建物について　検出遺構の多くは柱穴の可能性がある小穴であり、5棟の建物跡が抽出できている。この5棟の建物は全て掘立柱であり、建物基礎の変遷（足立1991・1996）から考えて、18世紀初頭以前の建物であると判断できる。本遺跡の主体時期と合わせて考えると、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の中で営まれたものということになる。それ以上の時期の限定は難しい。

東部に位置するSH05は、平島Ⅰ遺跡における中規模建物と規模・方向などの特徴が類似しており（第4章 第4節参照）、同様の建物であった可能性を評価することができる。一方、西部に位置する4棟は方向が異なり、平島Ⅲ遺跡東半の建物群に近い（第6章 第4節参照）。ただし、この4棟は他になく小規模であり、建物方向についてもばらつきが目立つ。平島Ⅰ遺跡・平島Ⅲ遺跡が河川流域に面した場所に立地するのに対して、本遺跡は比較的奥まった丘陵寄りの場所にある。他と異なる性格・役割を伴った場所であった、もしくは他との階層差等が存在しているのかもしれない。

墓について　本遺跡は、平島Ⅰ遺跡で検出された中世後半の墓域と谷を挟んだ位置にある。さらに、本遺跡東側のSH05と平島Ⅰ遺跡の中規模建物との類似性を先に指摘したが、平島Ⅰ遺跡の中規模建物については、墓域と関連するものである可能性が指摘されている（第4章 第4節）。以上から、本遺跡にも中世後半の墓域があった可能性を考慮することができる。そして、SF03・SF05・SF06などの形状・規模については、平島Ⅰ遺跡の火葬墓（SF05・SF06・SF08・SF19・SF21）（第4章）との類似性が評価できる。また、SF06周囲の被熱範囲が、火葬（荼毘）の存在を示している可能性もある。

福田町元島遺跡では、60㎝×90㎝程度の棺に屈葬埋葬した中世土葬墓が発見されている（静岡県埋蔵文化財調査研究所1998）。先にあげたSF03・SF05・SF06の規模は小さいものの、SF01・SF02・SF04・SF07・SF08の平面規模は、元島遺跡の土葬墓と同等以上である。しかし、墓穴である根拠も明確でない上、削平の存在を考慮しても浅すぎるものが目立つ。すなわち、平島Ⅰ遺跡の墓域と同様、土葬墓の存在について根拠をもった評価はできないと考える。

以上のように、平島Ⅰ遺跡と同様の墓域、すなわち中世後半（15～16世紀）から近世初頭（17世紀初頭）に営まれた火葬墓中心の墓域が、本遺跡にもあった可能性を指摘することができる。ただし、骨や副葬品の発見は全くなく、墓の存在を示す明確な根拠が得られているわけではない。

中近世の展開　以上のように、中世後半（15～16世紀）にはじまる墓域、墓域に関連する建物、周辺屋敷地（平島Ⅲ遺跡）とは異なる小規模な建物の展開を見出すことができた。もちろん、この内容は多くの推測の上で述べたものであり、全てに対して明確な根拠を伴っているというわけではない。ただし、平島Ⅰ遺跡・平島Ⅲ遺跡との比較検討は有効な手段であったと考える。すなわち、平島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の評価については、これらを全体的にみる必要があると考える。（第6章 第5節参照）。

なお、本遺跡にも近世後半（18世紀以降）に至る遺物の出土があり、近世の方形竪穴状遺構（SX01）、近世後半以降（18世紀以降）の貯蔵施設（肥溜め等か）（SF13～SF16）が検出されている。すなわち、近世後半に至る営みの存在も確認することができる。

本遺跡の現地調査および本報告の作成にあたっては、掛川市教育委員会の方々、とくに、松本一男氏には有益な御指導・御助言をいただきました。また、河合　修氏にも有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。

参考文献

足立順司　1991　「遺構の変遷」　『原川遺跡Ⅳ』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
1994　「消費地出土の初山焼･志戸呂焼－原川遺跡を中心に－」　『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集
1996　「町屋の構造と階層」　『水井遺跡・清水遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
江戸遺跡研究会　2001　『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房
小野正敏（編集代表）　2001　『図解・日本の中世遺跡』　東京大学出版会
掛川市教育委員会　1984a　『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』
1984b　『掛川市遺跡分布調査報告Ⅱ』
掛川市史編さん委員会　1997　『掛川市史』上巻
2000　『掛川市史』資料編　古代・中世
静岡県教育委員会　1989　『静岡県文化財地図Ⅱ－焼津市以西－』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991　『原川遺跡Ⅳ』
1996　『水井遺跡・清水遺跡』
1998　『元島遺跡Ⅰ』（遺構編　本文）

第6章　平島Ⅲ遺跡

第二東名No.99地点

第１節　位置と環境

１．位置と地理的環境

平島Ⅲ遺跡は、静岡県掛川市平島232他、掛川市東部の原野谷川の上流域左岸に位置する。

原野谷川上流域では、広い沖積平野がなく、川は丘陵の谷間に沿うようにして蛇行する（第１章 第２図）。大和田・平島地区の原野谷川は、北に凸の弧をいくつか連続させながら、西南西へと流れる。その中で比較的緩やかな弧を描く部分があり、左岸（南側）に南北最大幅約150m、東西約600mにわたる段丘群が形成されている。本遺跡は、その西部段丘上に立地している。

段丘は、南北にはしる小谷によって、いくつかに分断されている。本遺跡の東、平島Ⅱ遺跡との境にも小谷がある。さらに、本遺跡内も２つの小谷によって３つの段丘に分かれている。段丘上は、南西に下る緩斜面になっている。南には丘陵の急斜面、北～西には河川に向かって下る急斜面が続いている。

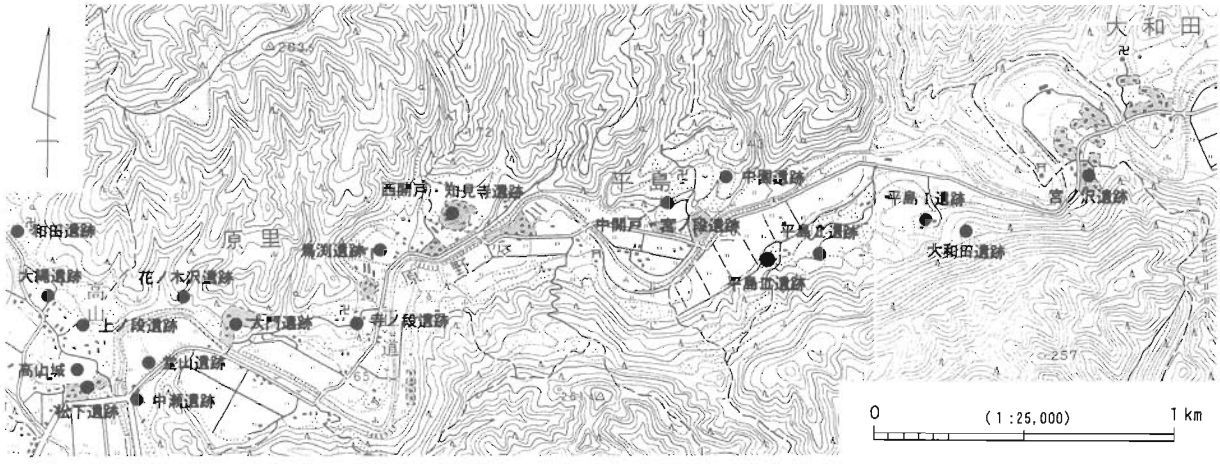
見晴らしは、原野谷川流域をいくらか望める程度である。なお、平坦面のほぼ全体が茶畑に利用されており、多少の削平・盛土も想定できるが、大規模な地形改変を観察することはできない。

２．歴史的環境と調査歴

平島Ⅲ遺跡の発掘調査は、今回がはじめてである。小谷で分かれる３つの段丘のうち、東の段丘と西の段丘については、今回で全体を調査したことになる。中央の段丘についても、段丘上全体に遺跡が広がっている可能性があるが、その北西部は今回の調査対象（工事）範囲の外になる。

大和田・平島の遺跡、また原野谷川上流域の左岸にある遺跡については、本書に報告のある遺跡で占められる。大和田では宮ノ沢遺跡（第２章）で、中近世の集落跡の発見があった。本遺跡の東隣にある平島Ⅱ遺跡（第５章）、さらに東の平島Ⅰ遺跡（第４章）でも中近世の集落跡が発見されている。平島Ⅰ～Ⅲ遺跡は同じ段丘上で隣接しており、互いの関連を考えることができる遺跡である。なお、この周辺には「金平屋敷」などといった、屋敷などがあったことを想定させるような小字名が残っている。

平島Ⅰ遺跡やさらに東に位置する大和田遺跡（第３章）では、縄文時代の遺物・遺構が多く発見されている。この段丘上には縄文時代の営みもあったことがわかっている。



第114図　本遺跡の位置と周辺の遺跡

第２節　調査の方法と経過

１．発掘調査の方法

本調査の区域は、Ａ～Ｃ区に分かれる。Ａ区は本遺跡最東の比較的狭い段丘上（標高101～104m）、Ｂ区は中央の比較的広い段丘上（標高98～106m）、Ｃ区は最西の狭い段丘上（標高110～114m）に立地する。Ａ・Ｃ区は、各段丘上の全体にあたり、周囲への遺跡の広がりは想定できない。一方、既述したように、Ｂ区の北西は調査対象（工事）範囲外になるが、段丘上は続いている。

発掘調査は、まず調査区および作業道を設置した後、重機による表土除去を行った。その後、作業員棟等の準備や安全対策を行い、人力による作業を開始した。人力による作業は、遺構検出面までの掘削および平面的な遺構プランの検出、遺構の精査・検出の順で行った。遺構の検出に際しては、まず主軸直行方向に土層帯を設けるかプランの半分を検出し、土層断面によって覆土の状況を観察・注記、土層断面を記録した。その上で、遺構全体の検出を行った。

遺構調査に際しては、まず座標に合わせた10m方眼のグリッドを設定し、グリッド杭の設置を委託して実施した。グリッドは、全調査区にまたがるように設定した。遺構番号は、調査中に付した番号もあったが、本報告に際して、全遺構に対して遺構種類別に新たな遺構番号を付し直した。遺物については、遺構内出土遺物は遺構ごと、遺構外出土遺物はグリッドごとを基本として取り上げた。

現地の記録図面は、地形測量を1/100、遺構図を1/20を基本とし、設定したグリッドに沿って作成した。なお、図面作成は委託にて実施した。遺構・景観等の現地記録写真の撮影は、６×７版（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用いて行い、作業工程撮影用に35mm判（カラーネガ）を使用した。また、全景写真撮影においては、空中写真撮影を委託にて利用した。

２．発掘調査の経過

調査の開始　平成12年４月に発掘調査の届け出をしたが、他の調査を含めた工程上の理由などから、人力掘削を伴う作業の開始は同年11月になった。その間、一部を除いた調査区の設定と重機による表土除去を６月下旬～７月初旬および10月上旬に行った。また、基準点測量も随時行い、10月下旬にはグリッド杭の打設を委託にて実施した。平成12年11月１日から、人力作業開始に向けた準備として、現地作業員棟・駐車場・作業道などを設置し、資器材等の準備も11月上旬までに行った。

遺構検出までの作業　Ａ区は、平成12年11月７日に人力による遺構検出面までの掘削を開始した。厚い堆積土もなく、14日には遺構精査・検出作業を開始することができた。必要な実測・写真撮影も行い、12月14日までには、全ての遺構検出を終えることができた。

Ｂ区は広範囲のため、南西部→東部→北西部の順で作業をすすめた。南西部は、11月７日に人力による遺構検出面までの掘削を開始、同日に遺構精査・検出作業も開始することができた。15日には空中写真撮影を行っている。東部は、11月９日に人力による遺構検出面までの掘削を開始、12月初旬～下旬に遺構精査・検出作業を行った。北西部だけは、重機のよる表土除去が完了していなかったため、12月中旬～下旬に重機による表土除去を行い、平成13年１月末までに人力による遺構検出面までの掘削～遺構検出の作業を行った。なお、Ｂ区全体で必要な実測・写真撮影を、11月中旬から随時行った。

Ｃ区は、11月22日から人力による遺構検出面までの掘削、12月初旬からは遺構精査・検出作業を実施

した。必要な実測・写真撮影も行い、12月14日までに、全遺構の検出を終えることができた。

全景撮影～現地調査の終了　B区の進捗に合わせて、平成13年１月後半～２月初旬に各区の写真撮影のための清掃を行った。２月５日には撤収・撤去も開始した。２月15・16日に空中写真撮影（全景写真撮影）を実施し、その後、３月までに各種写真撮影および実測・測量を行い、現地調査を終了した。

なお、測量・実測関連の作業は加藤建設株式会社、空中写真撮影は株式会社フジヤマに委託した。

3．資料整理の方法と経過

本遺跡に関わる資料整理作業および報告書作成作業は、平成14年７月から、大和田遺跡・平島Ⅰ遺跡・平島Ⅱ遺跡と同時に開始した。ただし、掛川工区内の他遺跡の資料整理・報告書作成作業、さらには他の現地調査の実施と重なることがあったため、その作業は断続的に実施していくことになった。

現地調査中の基礎整理において、出土土器の洗浄・注記・接合、遺構図・写真などの現地調査資料や出土遺物の台帳の作成を実施していた。よって、資料整理では遺構図の修正作業などが中心になった。

続いて、土器の図化作業、各図面の編集・トレース作業、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は、４×５判（白黒ネガ・リバーサル）、６×７判（白黒ネガ・リバーサル）、35㎜判（リバーサル）を用いて、当研究所写真室が実施した。

第115図　本調査範囲とグリッド配置

第３節　調査の成果

１．全体の概要

基本土層　各調査区の全域において、表土・耕作土直下に遺構検出面（泥岩礫を多く含む黄褐色粘質土層の上面）が検出できた。大半が茶畑に利用されていた場所であり、天地返しなどのために表土・耕作土の厚さが0.5mを超える部分もあった。

検出地形　発掘調査によって検出された地形は、基本的に現況地形と大きく変わらない。詳細については後項（各区の遺構）の冒頭で述べるが、段丘上平坦部とその南北の斜面の一部を検出することができた。なお、基本土層をみるかぎり、茶畑による削平などによって本来（遺跡形成時）の遺構面が失われている可能性を指摘することができる。しかし、部分的に大きく地形を変更させるような造作は認められていない。検出した地形は、概ね本来の地形を表現していると判断できる。

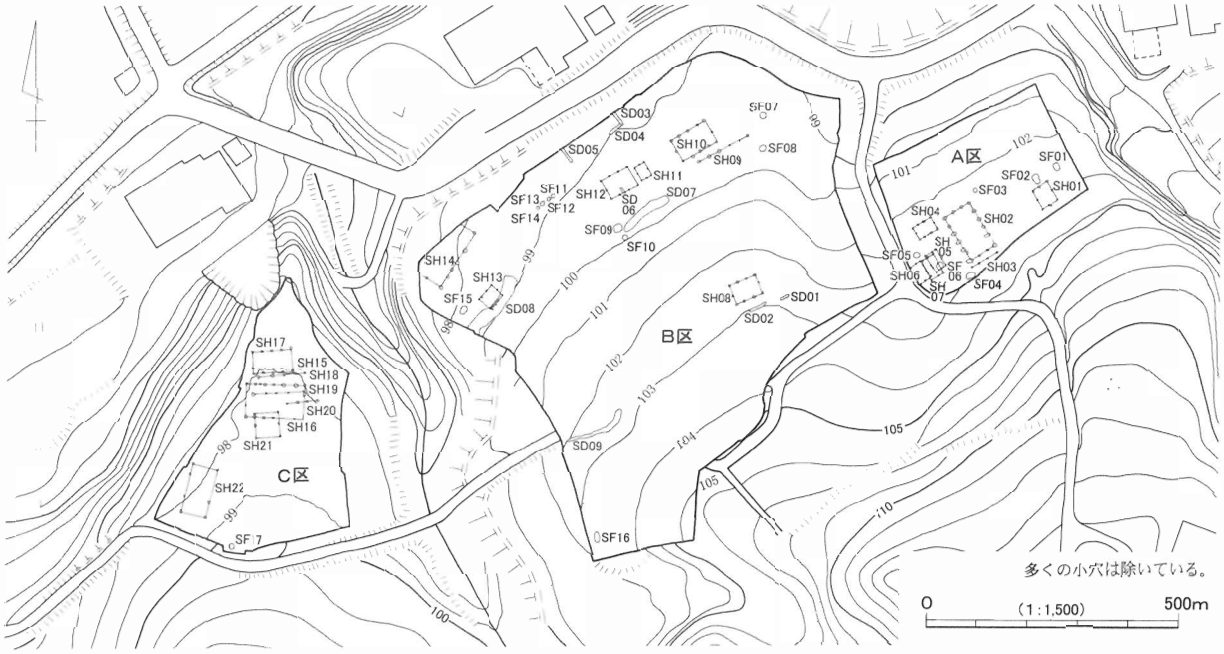
遺構と遺物　縄文時代の遺物と中近世の遺物が出土している。縄文時代の遺物（土器・石器・剥片類）は、Ｂ区北寄りからの出土が多いが、少数の出土は他区でも認められる。中近世遺物は中世後半以降（14世紀以降）の土器で占められ、掲載した遺物をみるかぎりでは、近世（17世紀以降）の遺物が多い。

検出遺構には小穴が多く、各区で建物跡や柵などの施設跡が抽出できている。その他、土坑や溝も検出されている。なお、縄文時代であると明示できる遺構はなく、多くは中近世の遺構である。

建物跡は、各区で複数発見されている。中世後半以降と判断できるが、それ以上の時期の限定は難しい。建物の規模は様々だが、方向などは類似し、数棟が同方向に並ぶ状態も認めることができる。

土坑については、規模・形状などをみても様々なものがあることがわかる。SF06だけは建物内施設の可能性もある。SF08・SF10は、桶を伴う近世の貯蔵施設などであると推測でき、覆土中には多くの礫を伴う。Ｂ区では、この他にも覆土中に多くの礫を伴う土坑が多く、共通の廃棄方法が想定できる。

これら遺構の多くは、比較的平坦な場所に分布する。しかし、斜面地に立地する建物跡などもある。さらに、Ｂ区南西部の丘陵斜面では、火葬（荼毘）の跡が１基（SF16）発見されている。

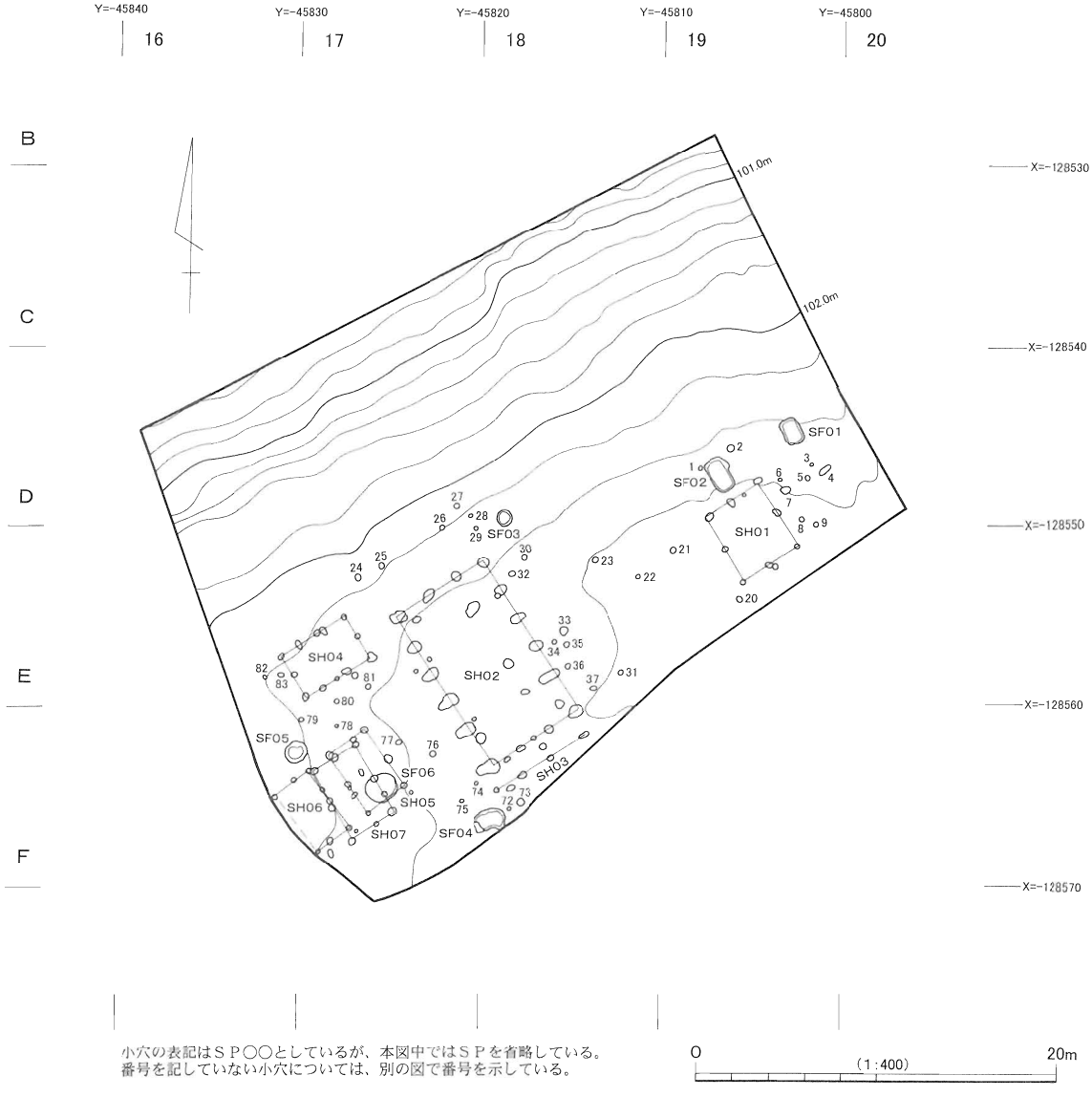


第116図　全体概要図

2．A区の遺構

A区は、本遺跡最東の段丘上に立地している。南は丘陵斜面、北および東西は谷で区画されている。ただし、西側の谷は比較的浅い。調査区では段丘上平坦部と北側に下りはじめる斜面を検出することができた。茶畑による削平等はあるものの、遺構の検出状況や大きな撹乱がないことから、概ね遺跡形成時の地形を反映したものであると判断できる。

検出遺構は調査区南寄りの平坦部に限られ、建物跡6棟と柵列を含む多くの小穴、さらに土坑6基が検出されている。出土遺物の大半は中近世であり、中世後半以降（15世紀以降）、とくに近世前半（17～18世紀）の遺物が多い。以上のような出土遺物および遺構の特徴から、中世後半以降の遺構群であると判断できる。縄文土器片や石器・剥片類も出土しているが、縄文時代であるといえる遺構はない。



第117図　A区遺構配置図

（1）建物跡、柵などの施設跡

ＳＨ０１（第118図）

Ｄ19～Ｅ19グリッドに位置する。２間×２間（3.5m×4.2m）の掘立柱建物跡であり、長軸方向は北より西に傾く。柱穴は直径0.4m前後である。検出面からの深さは0.1～0.5mで、北西列が深い。

出土遺物はない。建物規模および柱穴規模は小さいが、建物の方向と柱間距離については、SH02と共通している。SH01とSH02が同時期に並んでいた可能性も考慮することができる。

ＳＨ０２・ＳＨ０３（第119図）

SH02は、Ｅ～Ｆの17～18グリッドに位置する。３間×５間（5.6m×9.7m）の掘立柱建物跡であり、建物方向はSH01と一致する。なお、建物内にSP47・SP56・SP55・SP54の柱穴列が検出されているが、列の方向や柱間等の対応から、建物（SH02）の構造を反映したものであると判断することができる。

柱穴の多くは直径0.55m以上あるが、南東辺中央の２基などは小さい。検出面からの深さは0.8m以下でばらつくが、南西辺の南側３基はそろって深い。溝部が南西側に付く柱穴が多い。土層断面による検討の結果、柱穴と溝部とは切り合う別遺構ではないと判断できている。また、抜き取りによる柱痕の乱れなどは認められていない。以上から、柱穴に付く溝部については、柱の設置のために設けたものである可能性を評価したい。なお、数基の柱穴で確認できた柱痕は、直径0.25m程である。

SP42・SP47・SP49からカワラケ片が出土しており、また掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断できる。

SH03は、SH02の南東に位置し、SH02の短辺に平行する柱穴列である。４基の小穴が長さ約5.8mに並ぶが、柱間は均等でない。柱穴は直径0.5m以下で小さく、深さは0.4m以下である。出土遺物はないが、SH02との関連が考慮できるならば、SH02と同様の時期である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ０４（第118図）

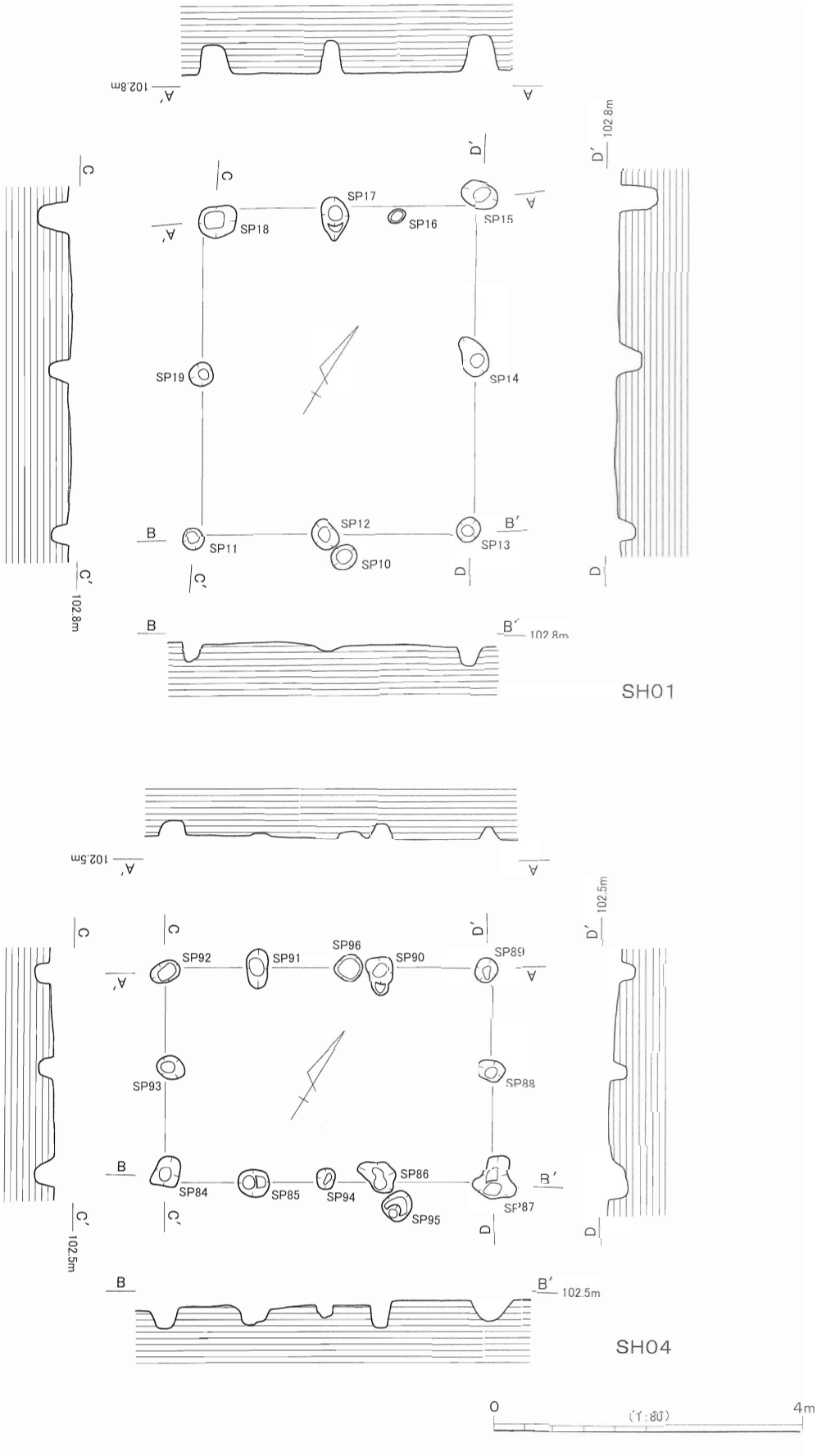
Ｅ17グリッド南西隅に位置する。２間×３間（2.7m×4.2m）の掘立柱建物跡であり、SH02にほぼ直行する方向の建物跡である。出土遺物はないが、建物方向などから、SH02の西隣に並ぶ建物跡である可能性を指摘することができる。ただし、建物規模だけでなく、柱穴も直径0.4m以下、深さ0.35m以下と小規模である。SH02とは異なる性格・構造であった可能性が考慮できる。

ＳＨ０５・ＳＨ０６（第120図）

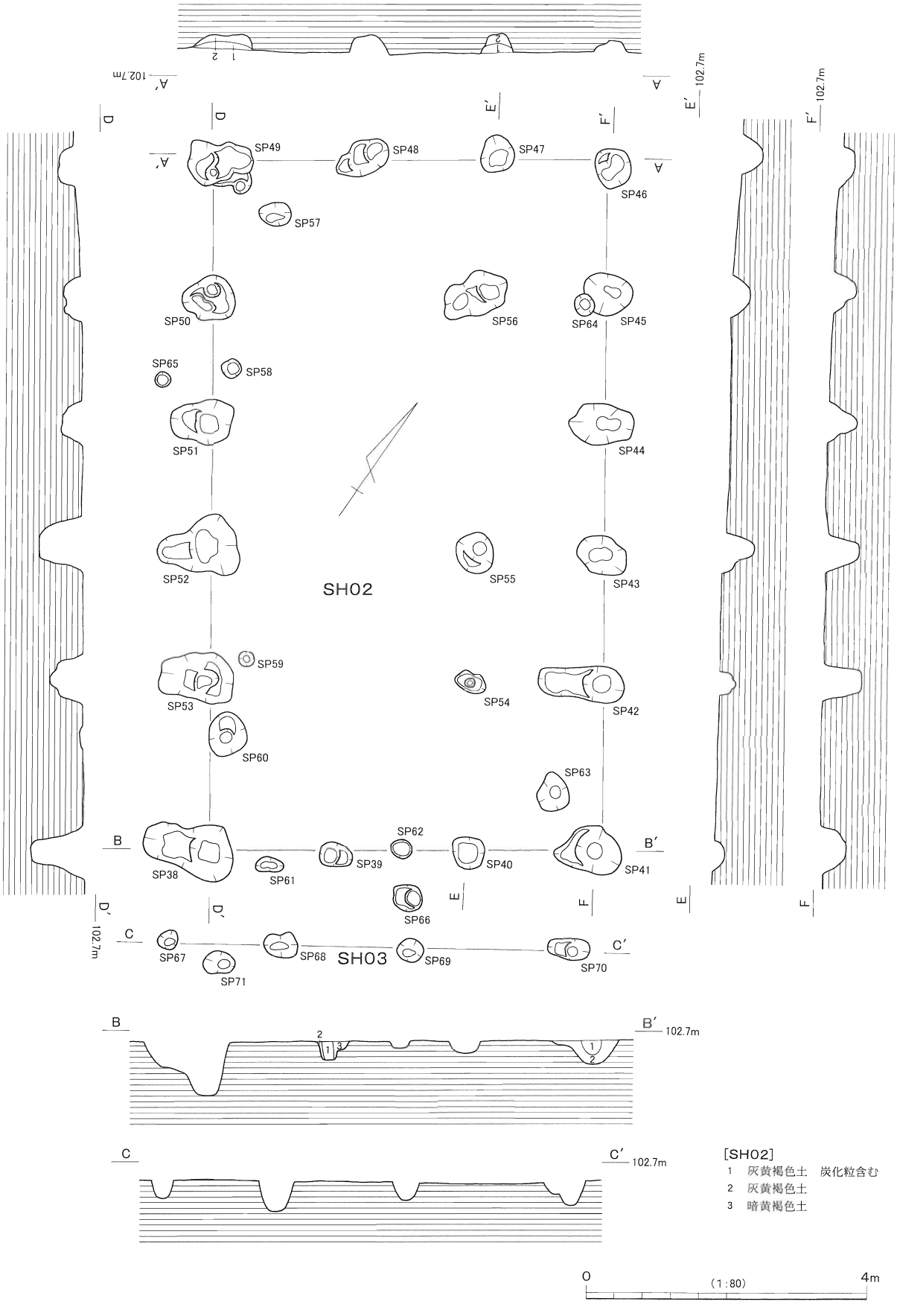
SH05とSH06は、Ｆ17グリッド西寄りに並ぶ、ともに１間×２間（2.4m前後×3.9m）の掘立柱建物跡である。建物方向も２棟一致する（SH02とは異なる）。柱穴は、直径0.4m以下と小規模である。なお、SH05西隅の柱穴（SP101）がSH07のSP121と重なり、SP101の方が古いことが確認できている。また、SH05の南東半部にSF06があり、内部施設の可能性もあるが、根拠は得られていない。

SH05とSH06は、位置関係および建物規模・方向等の類似性から、同時に並んでいた可能性が評価できる。SH05・SH06およびSF06の出土遺物はないが、本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断できる。さらに、柱穴の切り合いから、SH05はSH07よりも古いことがわかっている。

なお、SH06では、SP109に対応する南西辺中央の柱穴がなく、SH06は西側調査区外に広がっている可能性も指摘できる。しかし、西側調査区外は谷部になっている。SP109も浅い柱穴であり、対応する南西辺中央の柱穴は削平のために消失したという方が妥当であると判断した。



第118図　SH01・SH04

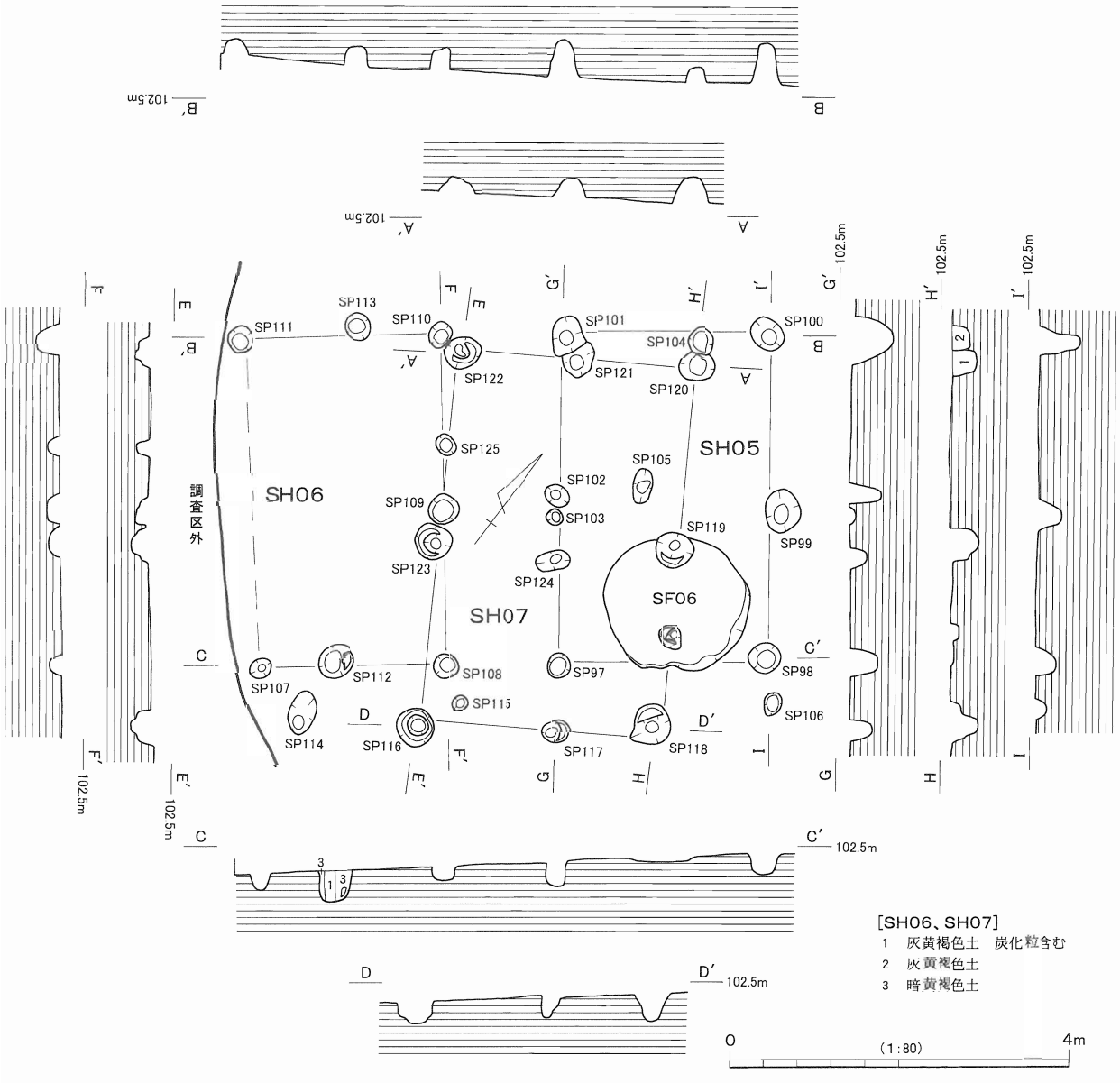


第119図　SH02・SH03

ＳＨ０７（第120図）

SH05とSH06の間で、双方と重なる位置にある。２間×２間（2.8m×4.3m）の掘立柱建物跡であり、建物規模はSH04と類似し、建物方向はSH02（SH04の直行方向）と一致している。柱穴は0.4m前後、深さ0.3m前後であるが、南東辺中央（SP117）だけは小さい。なお、北西辺中央の柱穴（SP121）がSH05のSP101と重なっており、SP121の方が新しいことが確認できている。

出土遺物はない。しかし、本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断できる。さらに、遺構の切り合いから、SH05よりも新しいことがわかっている。一方、SH01～SH04と方向が一致しており、これらと同時期に並んでいた可能性も考慮することができる。



第120図　SH05～SH07

（2）土　坑

ＳＦ０１・ＳＦ０２（第121図）

SF01は、D19グリッドに位置する。平面は丸みのある長方形で、1.0m×1.45mである。長軸は北より西に傾く。深さは検出面から約0.2mと浅い。覆土は灰黄褐色土で礫を含むが、出土遺物はない。

SF02は、D19グリッド南西部に位置する。平面は丸みのある長方形で、1.1m×1.95mである。長軸方向や深さ、覆土の特徴もSF01と類似する。縄文土器の極小破片が出土しているが、本遺構の評価に関わる遺物であるかは疑問である。覆土については、他の中近世遺構と同じである。むしろ、建物跡（SH01）の北西に位置し、長軸方向が一致していることから、建物との関連性が考慮できる。

建物跡との関連があるのであれば、SF02はSH01と同時期、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の土坑である可能性も指摘できる。さらに、SF01とSF02は、平坦面の縁に沿って４m離れて並んでおり、遺構の形状や長軸方向等が類似していることから、類似する時期・性格の土坑である可能性が考慮できる。ただし、これらの根拠は遺構配置と形状・方向等の類似性だけであり、確実性には欠ける。

ＳＦ０３（第121図）

D18グリッド南西に位置する。平面は直径約0.9mの不整円形で、検出面からの深さは約0.3m、断面箱形を呈する。覆土は灰黄褐色土である。大小の礫が多く検出されており、礫より上では炭化粒が認められている。しかし、被熱や骨の残存は認められない。墓関連の遺構とするには根拠が乏しい。さらに、礫については、覆土中位での検出で、丁寧に敷き並べたという状態ではない。他の遺構でも覆土中・上位での礫の検出が認められており、これらと同様，廃棄によるものである可能性が指摘できる。

縄文土器片が出土しているが、本遺構の評価に関わるかは疑問である。むしろ、覆土や礫についての特徴など、他の中近世遺構との類似点が多いことを高く評価したい。

ＳＦ０４・ＳＦ０５（第121図）

SF04はF18グリッド南西、SF05はF17グリッド西寄りに位置する。規模等は異なるが、平面形はともに不整形である。深さは検出面から0.25m以下、断面皿形を呈している。覆土は灰黄褐色土であり、礫を多く含む。不整形で非常に浅いことから、人為による遺構ではない可能性も指摘できる。なお、SF04から近世陶器（第139図22など）が出土している。

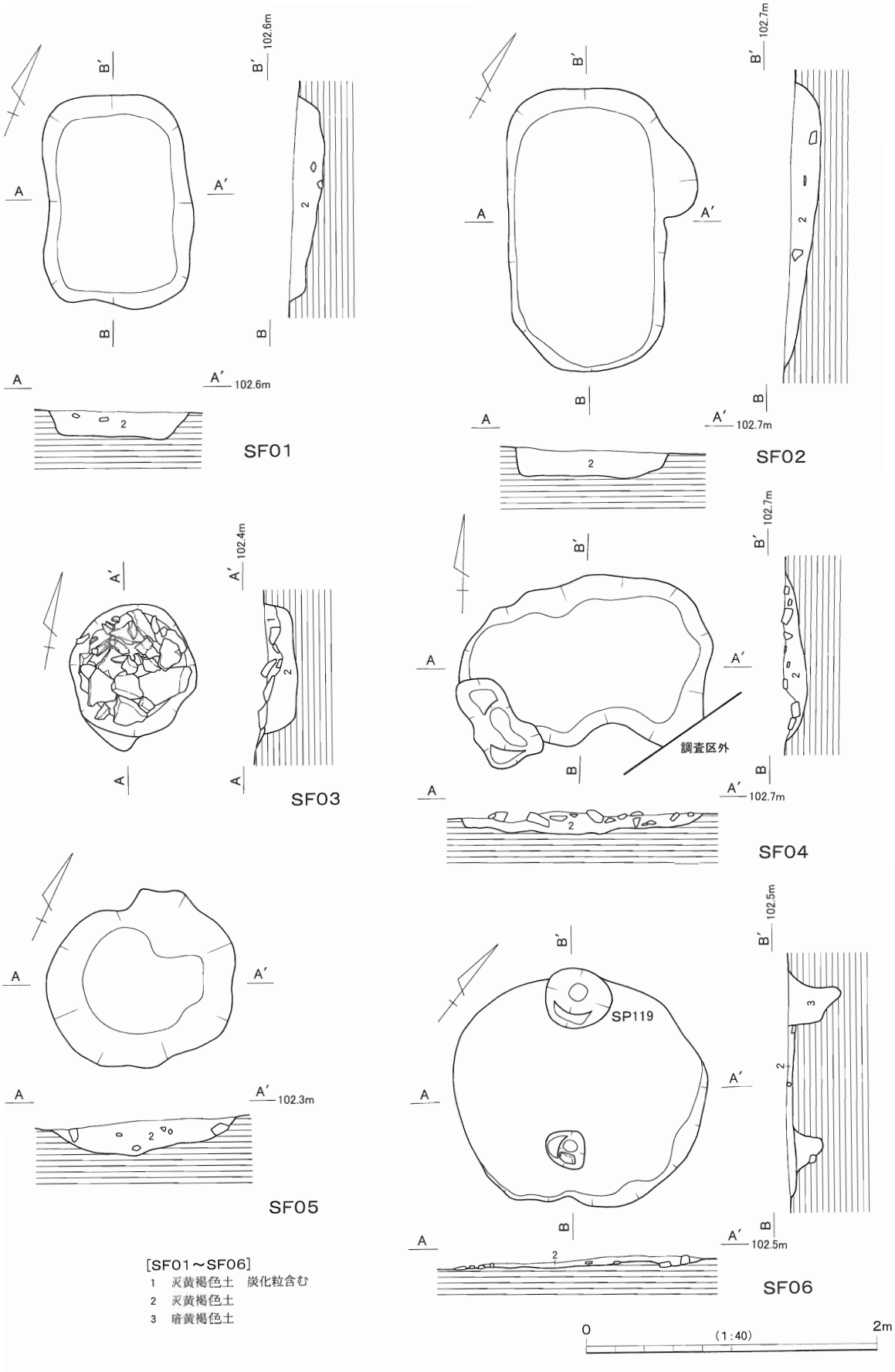
ＳＦ０６（第121図）

F17グリッド、SH05の南西半部に位置する。平面は直径1.65m前後の円形であり、深さは検出面から0.1m以下と非常に浅い。覆土は灰黄褐色土である。SH07のSP119と重なるが、SF06の方が古い。

出土遺物はないが、覆土等から中近世遺構であると判断できる。なお、推測の域を出ないが、SH05内に位置することから，建物内に形成された施設跡である可能性も考慮することができる。

（3）その他

既に述べた建物・施設跡の柱穴以外にも、数十の小穴が検出されている。SP04からカワラケ片、SP27から黒曜石片が出土しているが、根拠をもって時期・性格を明示できるものはない。



第121図 SF01～SF06

3．B区の遺構

B区は、本遺跡中央の段丘上に立地している。調査区の南は丘陵斜面、東西は谷で区画されているが、北には段丘上が続く。調査区内では、北半に段丘上の比較的平坦な地形、南半に丘陵へと上る比較的急な斜面を検出することができた。茶畑による削平や溝状の撹乱はあるものの、遺構の検出状況などをみるかぎり、検出地形は概ね遺跡形成時の地形を反映したものであると判断できる。

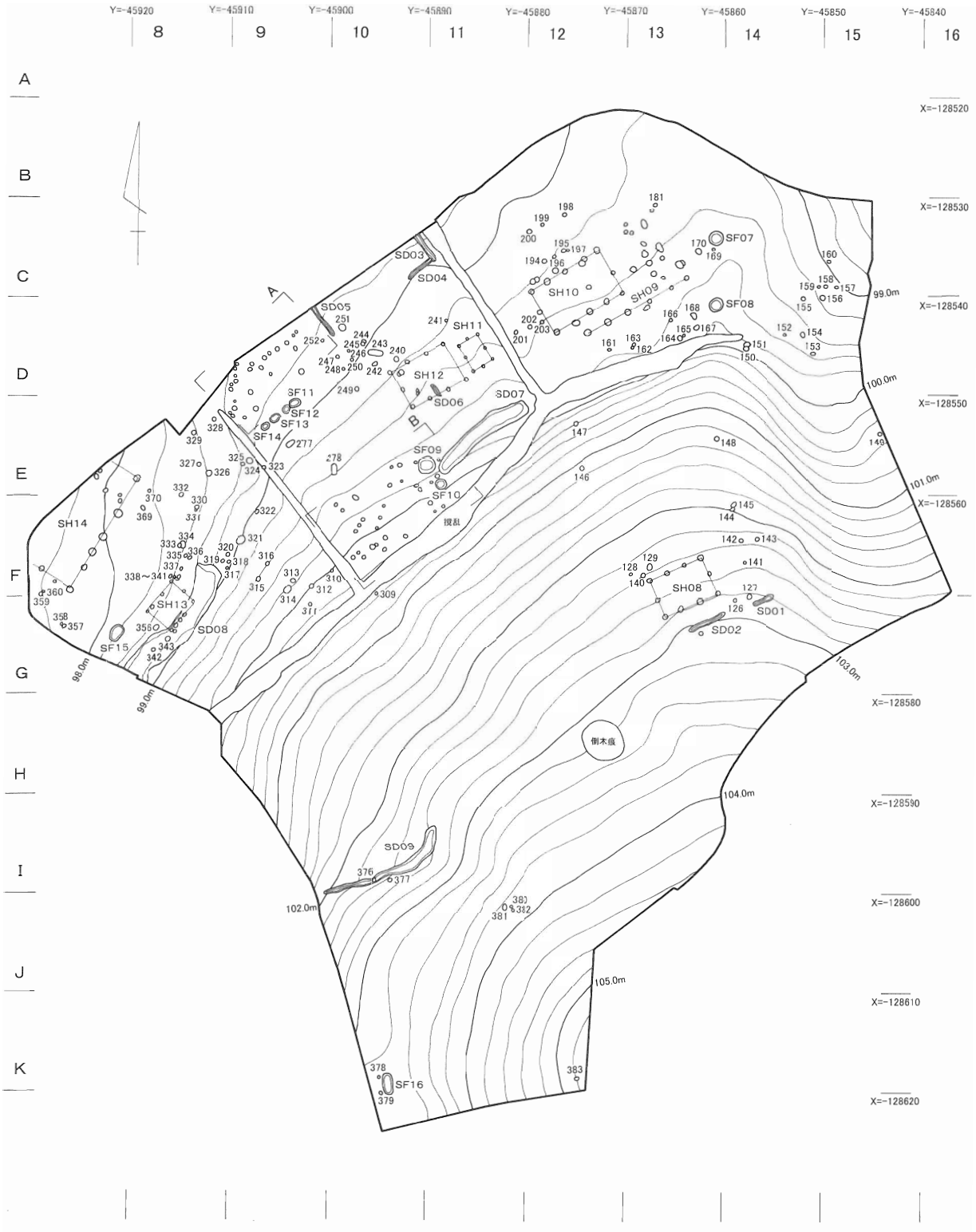
検出遺構は調査区北寄りの平坦部に多く、建物跡5棟と柵列を含む多くの小穴、土坑9基、溝6条がある。一方、南の斜面部でも建物跡1棟を含む小穴、土坑や溝が検出されている。建物跡は大小様々だが、長軸は全て等高線に平行、数棟が並ぶ状況も認められる。土坑には、北側平坦部の近世の円形土坑数基と、南斜面部の火葬（荼毘）跡1基がある。溝には、幅広で不整形な溝と幅狭で直線的な溝がある。出土遺物には中世後半（15世紀）以降、とくに近世前半（17～18世紀）の遺物が多い。遺構に伴う遺物は少ないが、以上のような遺構・遺物の特徴から、概ね中世後半以降の遺構群であるといえる。

なお、明確に縄文時代といえる遺構はないが、縄文時代の遺物（土器および石器・剥片類）が他区より多く出土している。B区の中でも、北寄りに出土が集中し、さらに、調査区より北で縄文土器片等が表面採集されている。B区の段丘上北半を中心に、縄文時代の営みがあったことは明確である。

（1）小　穴　（第122・123図）

後述する建物・施設跡の柱穴以外にも、多くの小穴が検出されている。縄文土器片がSP191・326・327から、縄文土器片と石器・剥離類がSP321（第138図10・14）・286から、カワラケ片がSP153・246・249から、陶器片がSP185・193・335（第139図17）・342から、金属片がSP292・293から出土している。SP27からは黒曜石片が出土している。根拠をもって時期・性格を明示できるものはないが、F10・11グリッドやE10グリッドなどに集中する傾向をみることができ、複数の建物跡等の残存である可能性が指摘できる。また、SP301からSP333にかけて、またSP328からSP342にかけてなどは、整然としないものの列を成しており、柵などの施設跡である可能性も指摘できる。

第122図　B区遺構配置図（部分図）



小穴の表記はＳＰ○○としているが、本図中ではＳＰを省略している。
番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

0 (1:600) 30m

第123図　Ｂ区遺構配置図

（2）溝

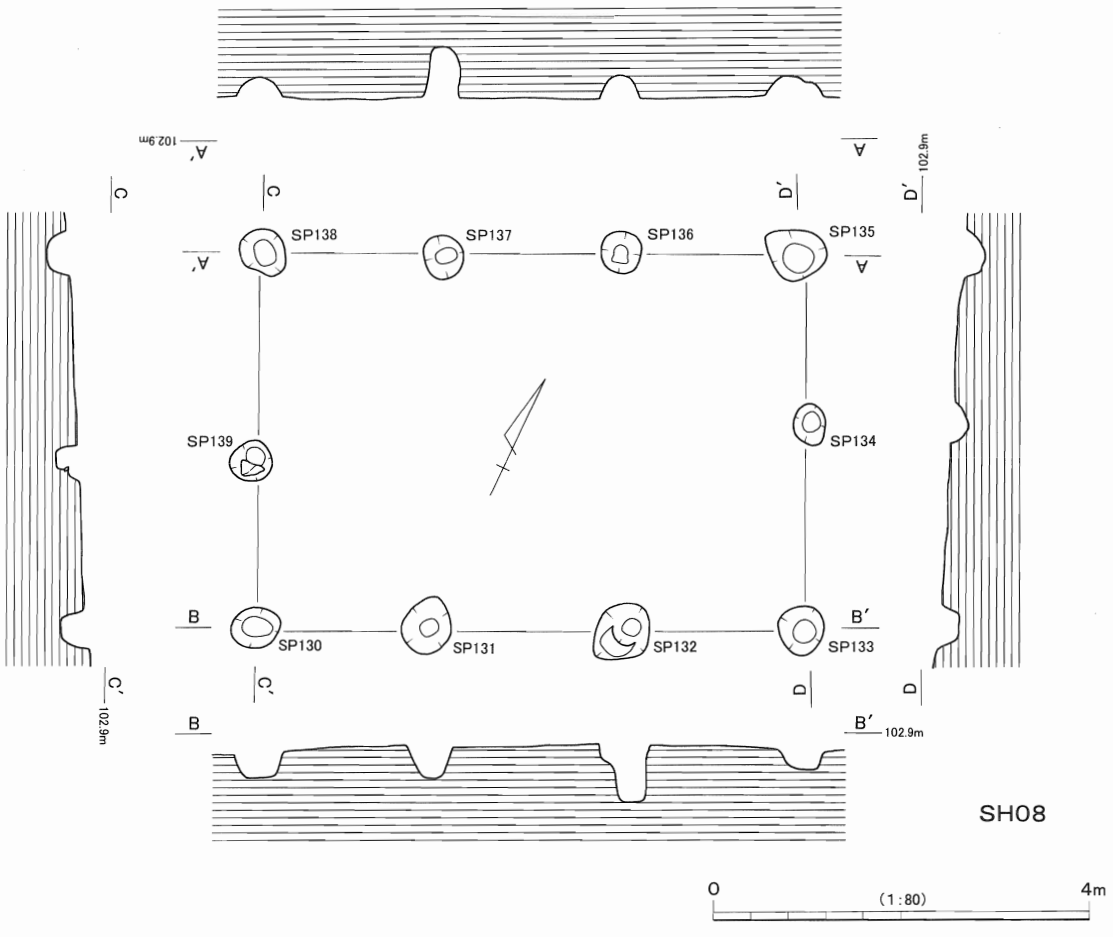
ＳＤ０１～ＳＤ０５（第123図）

いずれも幅0.5m前後、深さ0.1m前後の直線的な溝である。SD01・SD02はSH08の斜面上方に位置し、建物長軸と平行になっている。SD03～SD05も、対象となる建物跡は検出できていないが、方形を意識した配置になっている。以上から、建物に付随した溝である可能性が高いと判断できる。排水も考慮されたであろうが、浅いことから、区画をより意識していたと推測できる。なお、出土遺物はないが、建物跡との関連から、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）である可能性が高いと判断できる。

ＳＤ０７～ＳＤ０９（第123図）

幅１ｍ以上で、直線にならない溝状の遺構である。深さは0.2m以下と浅く、平面は不整形であるが、等高線に平行してのびる溝であり、単なる自然流路であるとは想定し難い。遺構の配置や形状をみるかぎりでは、建物や畑に対する排水溝もしくは造成跡である可能性が指摘できる。

SD08からは、17～18世紀の陶器片（第139図16・20・29）のほか、縄文土器片・剥片類・カワラケ片・金属片も出土している。また、SD09からは、カワラケ片と近世以降の磁器片が出土している。近世でも18世紀以降の遺物が出土しており、掘立柱建物に付随するものではなく、その後に形成されたものである可能性が高いと判断できる。



第124図　SH08

（３）建物跡、柵などの施設跡

ＳＨ０８（第124図）

Ｆ13グリッド南寄りに位置し、唯一、南側丘陵へと上る斜面に立地する建物跡である。２間×３間（4.1m×5.8m）の掘立柱建物跡であり、長軸方向は北より大きく東に傾く。柱穴は直径0.4～0.6m、深さは検出面から0.2～0.6mである。なお、南側（斜面上方）に建物長軸と平行な溝（SD01・SD02）が検出されている。遺構配置から、SH08と関係した溝である可能性が指摘できる。

SP137から鉄片、SP132・SP138から土師質土器片が出土しており、また掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断できる。

ＳＨ０９・ＳＨ１０（第125図）

SH10は、Ｃ12～Ｄ12グリッドに位置する。4.8m×7.8mの掘立柱建物跡であり、長軸方向は北より大きく東に傾く。柱穴は直径0.45～0.8m、検出面からの深さ0.1～0.4mである。なお、短辺中央の柱穴については、他より小さく浅いことと、若干外側に出た場所に設けられていることから、他とは異なる性格の柱（棟持柱など）である可能性がある。したがって、長辺は４間であるが、短辺については、２間ではなく１間の可能性も指摘できる。

SP213から陶器片・剥片類、SP208・SP210・SP214・SP219からカワラケ片が出土、また掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断できる。

SH09は、SH10の南側に位置する、SH10の長軸にほぼ平行な柱穴列である。６基の柱穴が等間隔に並び、約11.4mの柱穴列を形成している。ただし、東西で柱穴規模に大きな差があり、西側３基と東側３基はつながらない可能性もある。遺構配置からSH10との関連も考慮できるが、厳密にみると、双方の方向は異なっている。SH09からの出土遺物はない。

ＳＨ１１（第126図）

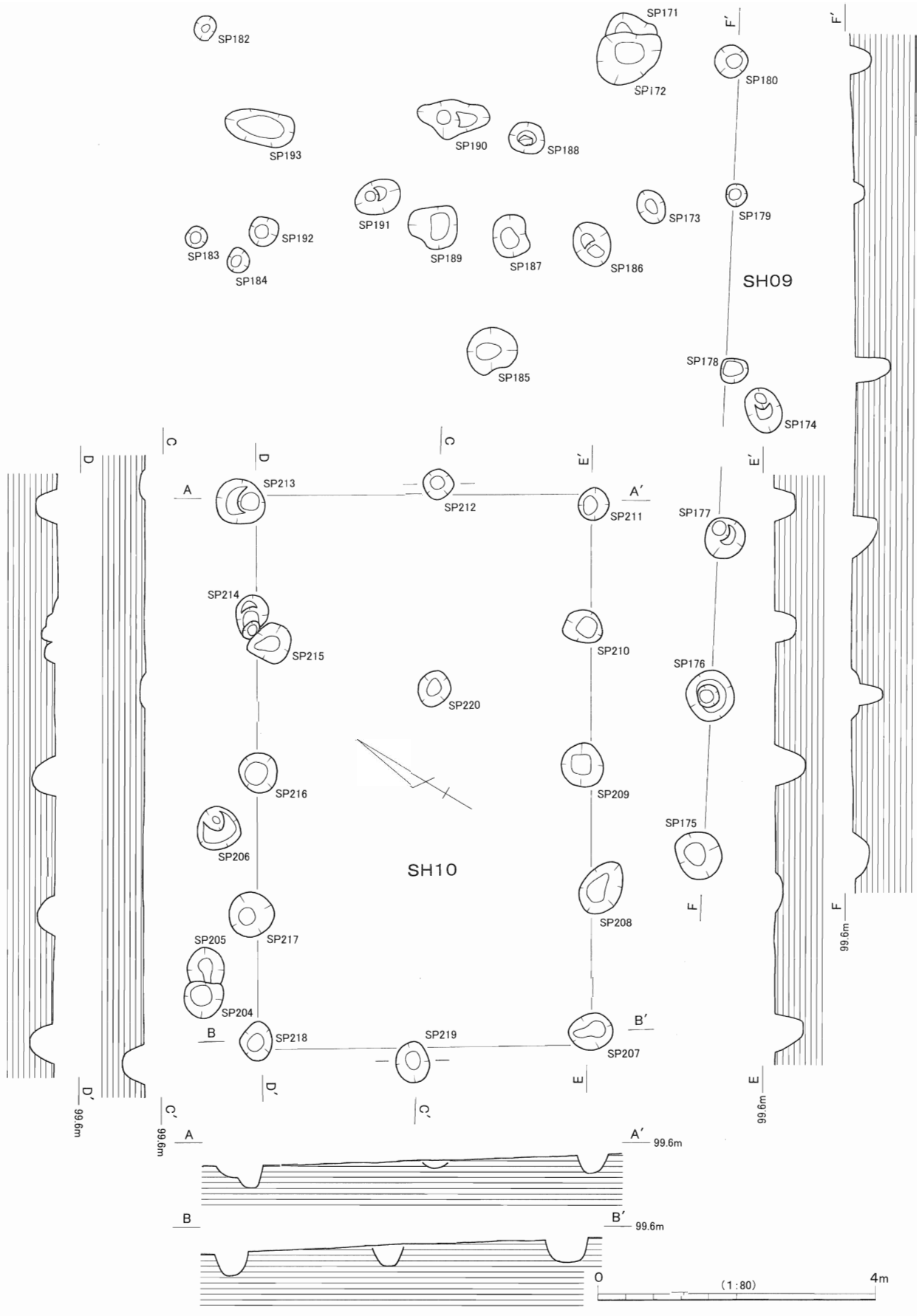
Ｄ11グリッドに位置する。2.2m×3.0mの掘立柱建物跡であり、長軸は北より西に傾く。柱穴は直径0.3m前後、検出面からの深さ0.3m以下である。SP227・SP228の底面には、石が残されている。なお、短辺中央の柱穴は浅く、北側短辺の中央（SP226）は若干外側に設けられている。他と異なる性格の柱（棟持柱など）が短辺中央にはあり、短辺は２間ではなく１間の可能性も指摘することができる。長辺は２間である。

出土遺物はないが、本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱建物跡であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断できる。

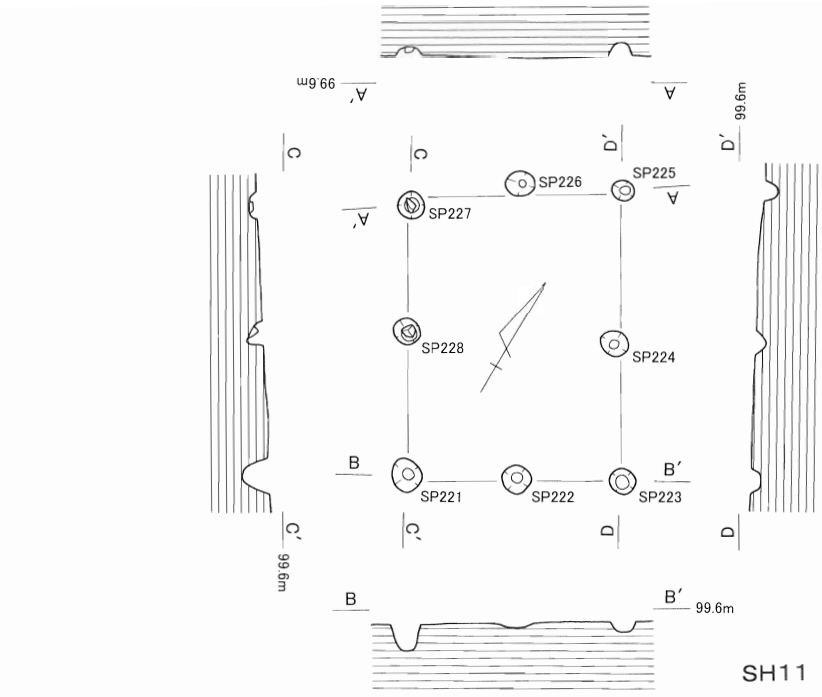
ＳＨ１２（第126図）

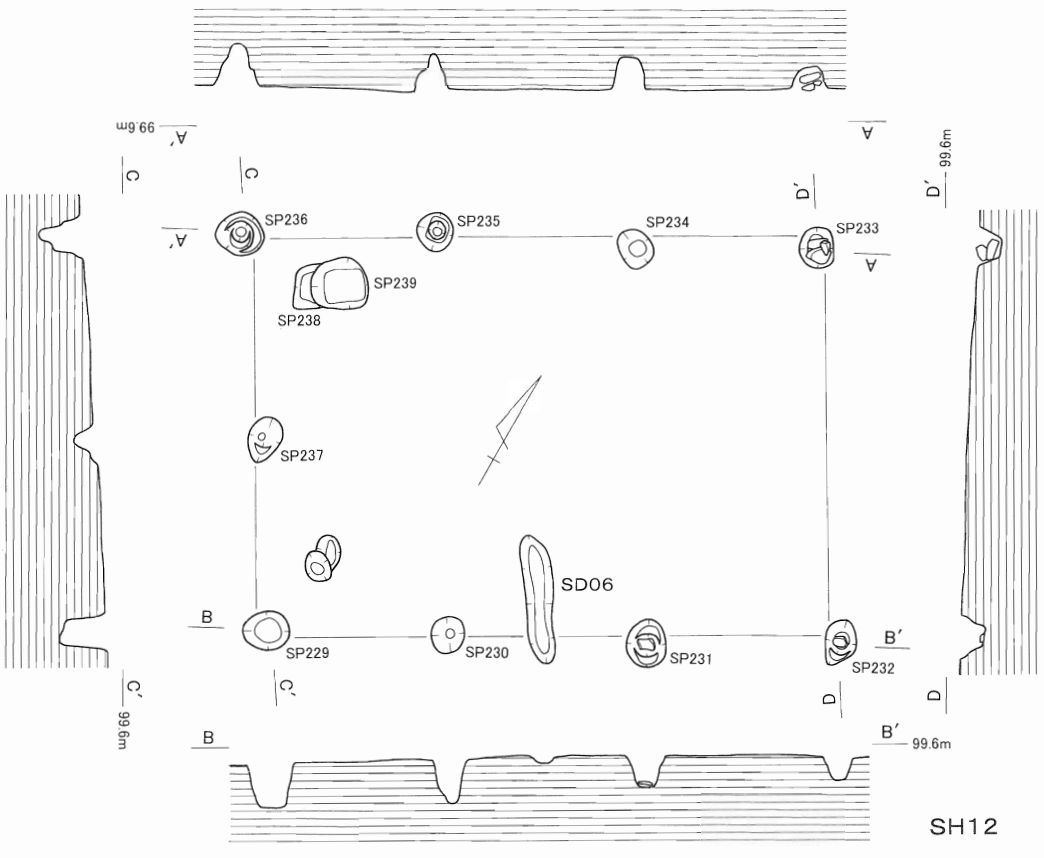
SH11の南西隣に位置する。１間×３間（4.2m×6.1m）の掘立柱建物跡であり、長軸方向はSH11と直行する。柱穴は、直径0.4m前後、検出面からの深さ0.25～0.6mであり、底に石が残されているものや、柱の痕跡が認められるものもある。なお、SP237は西側短辺の中央に位置し、SH12に関連している可能性がある。浅い柱穴であり、他と異なる性格の柱（棟持柱など）であった可能性も指摘できる。

本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱建物跡であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断できる。さらに、遺構配置をみると、SH11と同時期に並んでいた可能性も考慮することができる。一方、SP229から石器（第138図５）が出土しているが、本遺構の評価に直接関わる遺物ではないと判断できる。



第125図　SH09・SH10





番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

0 (1:80) 4m

第126図　SH11・SH12

ＳＨ１３（第127図）

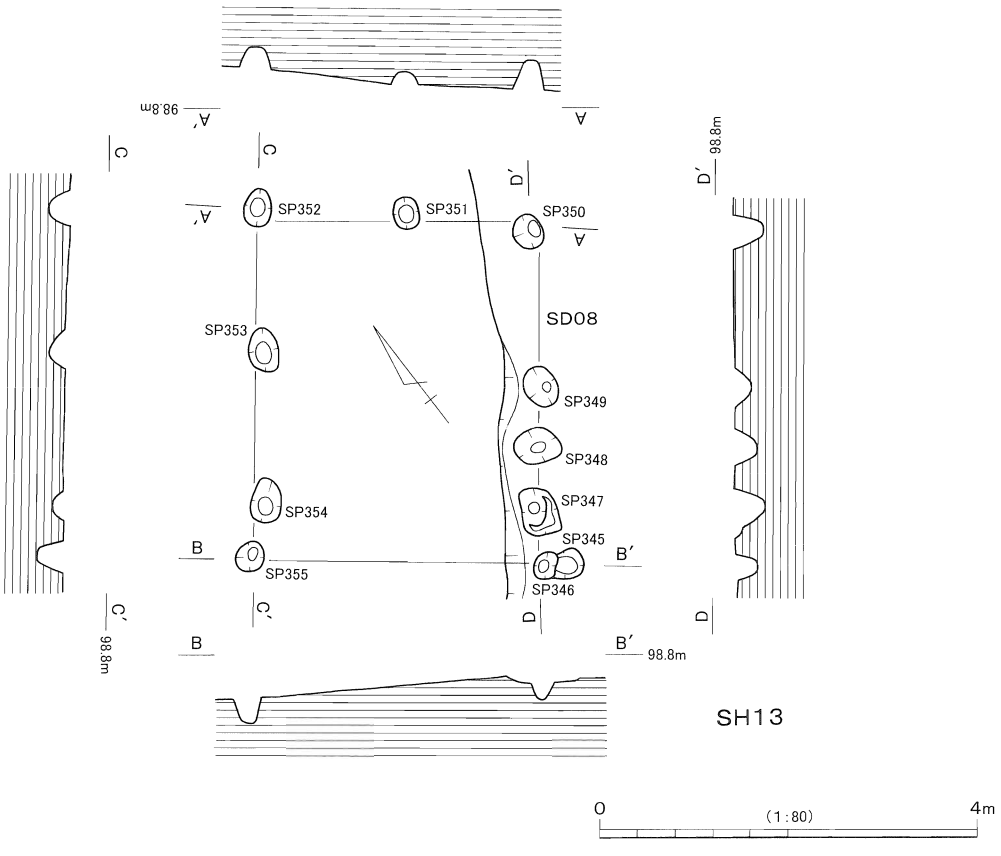
Ｇ８グリッド北寄りに位置する。2.9m×3.6mの掘立柱建物跡であり、長軸は北より東に傾く。柱穴は直径0.3m前後、検出面からの深さ0.4m以下である。長辺については、東側には中央の柱穴があり、２間であると判断できるが、西側には対応する中央の柱穴がない。一方、短辺については、北側は中央の柱穴があるが、南側にはない。いずれも２間もしくは１間の可能性が指摘できる。

SP350からカワラケ片が出土している。出土遺物および掘立柱建物跡であることから（足立1991・1996)、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断できる。なお、SD08と重なるが、検出が浅いために先後関係の確認はできていない。

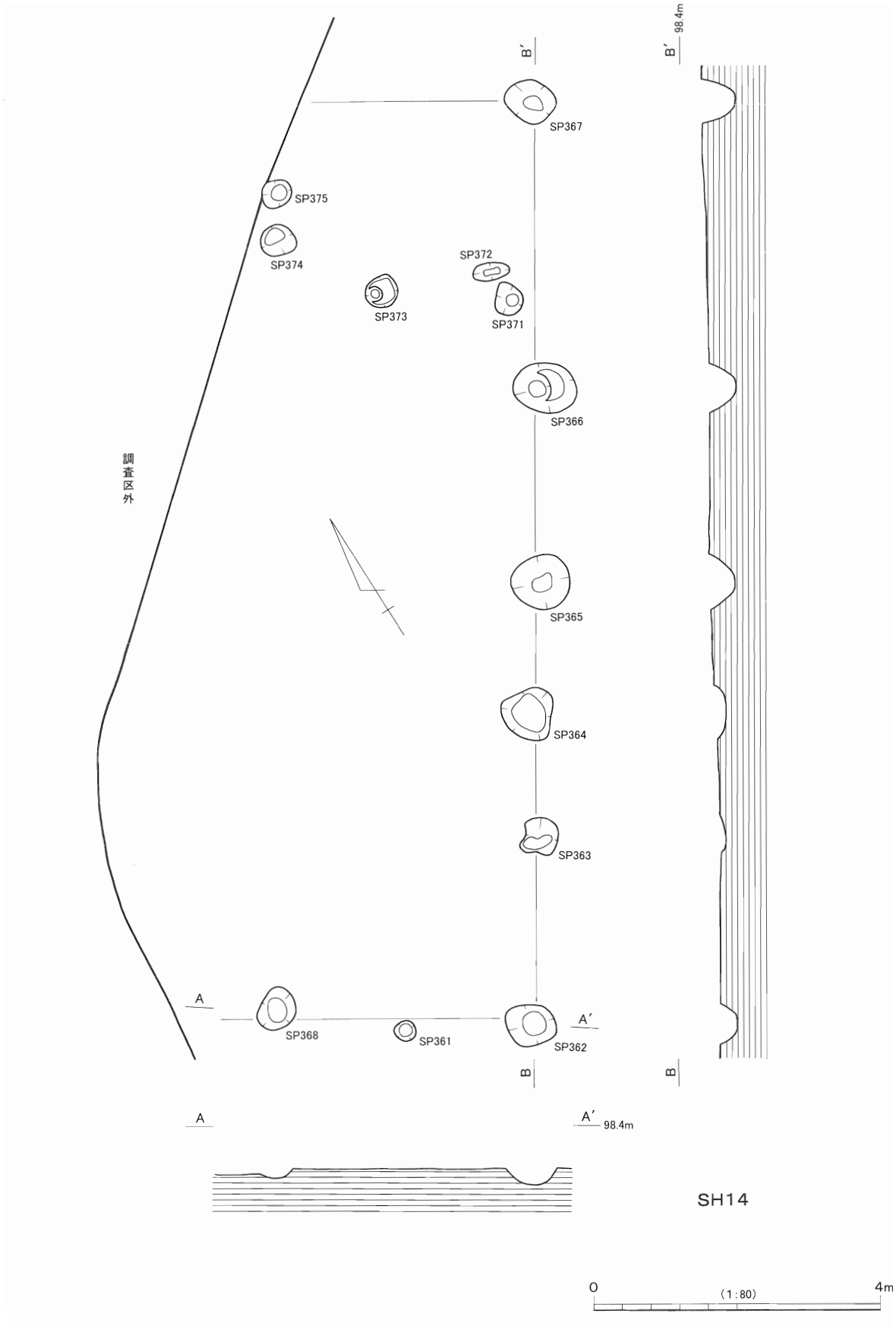
ＳＨ１４（第128図）

Ｅ７～Ｆ７グリッドに位置する。本遺構は、北西の調査区外に広がっている可能性が高く、全体を把握することはできていない。SP367からSP362を長辺とすると、長辺３間（約12.7m)、短辺１間（3.6m）以上、長軸は北より東に傾く掘立柱建物跡であるということになる。柱穴は直径0.7m前後、深さは検出面から0.5m以下である。

SP366からカワラケ片が出土している。出土遺物および掘立柱建物跡であることから（足立1991・1996)、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断できる。



第127図　SH13


B′
B′ 98.4m
SP367
SP375
SP374
SP372
SP373
SP371
SP366
調査区外
SP365
SP364
SP363
A
SP368
SP361
A′
SP362
B
B
A
A′ 98.4m
SH14
0
(1:80)
4m

第128図　SH14

（4）土　坑

ＳＦ０８・ＳＦ１０（第129図）

SF08は、Ｄ13グリッドに位置する。平面は直径1.2ｍ強の円形、深さは検出面から約0.7ｍ、断面は箱形を呈する。木材が破片の状態で残されている。一方のSF10は、Ｆ11グリッドに位置する。平面は直径約1.1ｍの円形、深さは検出面から約0.5ｍで、断面箱形を呈する。木材片の検出はなかったが、遺構の規模・形状はSF08と類似する。いずれも、覆土中に大小の礫が多く含まれていた。

SF08から陶磁器片・カワラケ片・瓦片・鉄片、SF10から陶器片（第139図19・28など）と鉄片が出土している。ともに、近世後半以降（18世紀以降）の土坑であると判断できる。

宮ノ沢遺跡でも同様の遺構が検出されており（第２章 第30図参照）、壁面に桶を伴った土坑で、近世後半以降（18世紀以降）のトイレもしくは貯蔵施設の可能性が高いことがわかっている。SF08・SF10も、同様であると推測できる。なお、SF08の木材は桶材、SF10の底面周縁に巡る溝は、桶材のはめ込み痕であると判断できる。また、覆土中の礫は廃棄に伴って入れられたものであり、宮ノ沢遺跡でも同様の状況が認められている。

ＳＦ０７・ＳＦ０９（第129図）

SF07は、Ｃ13グリッドに位置する。平面は直径約1.4ｍの円形、検出面からの深さ約0.4ｍ、断面は逆台形を呈する。一方のSF09は、Ｅ11グリッド南西に位置する。平面は直径1.6ｍ程の不整円形、検出面からの深さ約0.4ｍ、断面は逆台形を呈する。いずれも、覆土中位に多くの礫を含んでいる。SF07とSF09は、形状・規模・覆土のほか礫の検出状況までもが類似しており、同様の時期・性格・構造の土坑であると指摘できる。

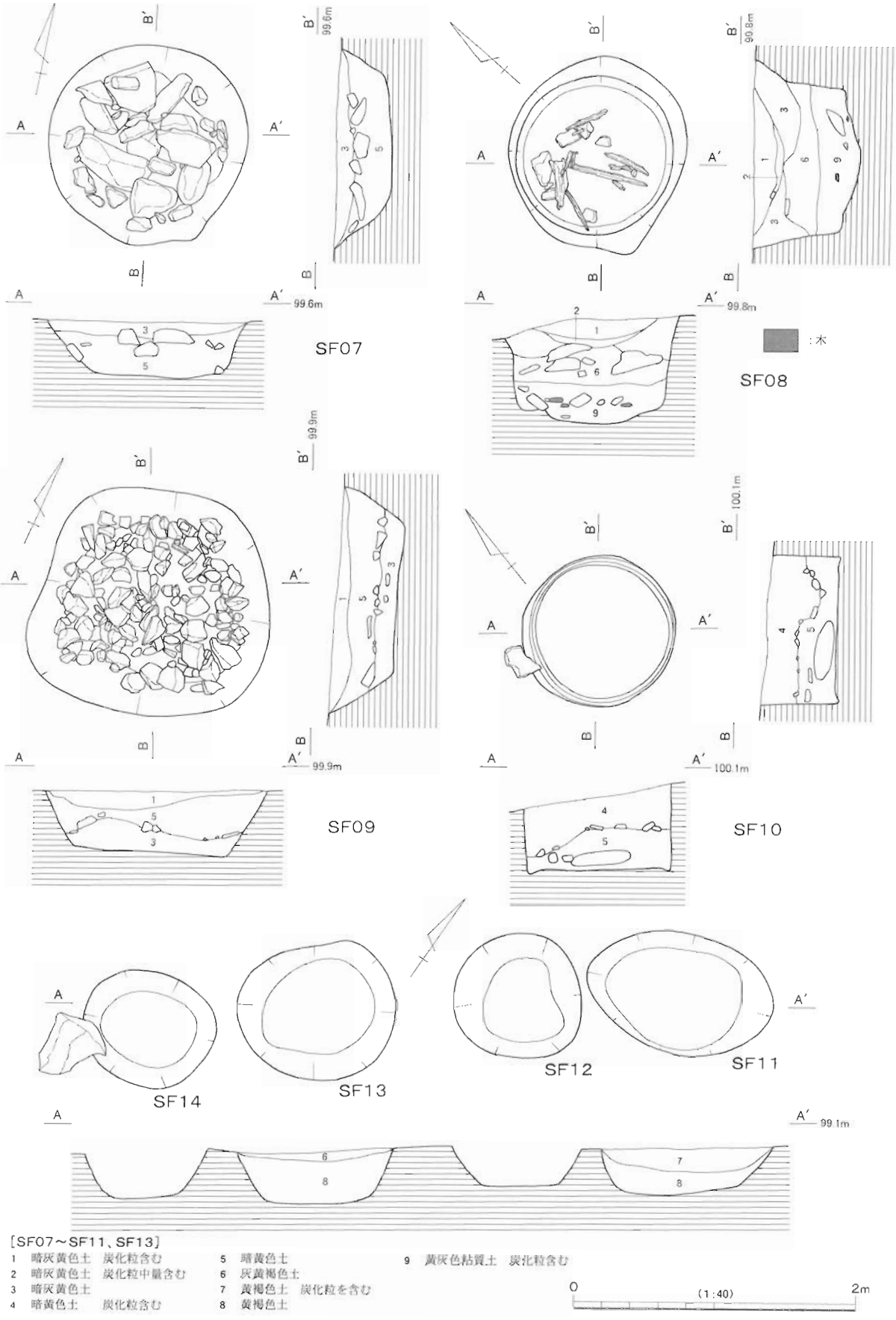
SF07・SF09は、遺構の形状などからSF08・SF10とは構造が異なると判断できる。しかし、礫を伴う廃棄については共通している。さらに、SF07はSF08の北約５ｍ、SF09はSF10の北隣に位置しており、それぞれが対になっているように認識することができる。具体的な性格・機能を明示するには、この調査結果だけでは根拠に乏しい。しかし、遺構の配置や廃棄方法の共通性から、桶を伴う円形土坑との関連が指摘でき、そこに何らかの機能を見出すことができるのかもしれない。

以上のように判断できるならば、SF09出土遺物に17世紀前半の陶器片（第139図25）を含むものの、SF07・SF09はSF08・SF10と同様、近世後半以降（18世紀以降）の土坑である可能性が高いと指摘することができる。

ＳＦ１１～ＳＦ１４（第129図）

Ｅ９グリッドにおいて、長軸0.9～1.4ｍの平面楕円形の土坑４基が、並んだ状態で検出されている。深さはいずれも0.4m弱、覆土は灰黄～黄褐色土で、下層に礫を多く含んでいる。礫は底面まで多く認めることができ、覆土中位に礫が多いSF07～SF10とは状況が異なる。しかし、礫の検出状況に加工や意図を認めることはできず、SF11～SF14の礫も廃棄によるとするのが妥当と判断できる。

SF11から縄文土器片と石器（第138図４）が出土しているが、遺構の覆土等の特徴は、中近世の遺構と共通している。宮ノ沢遺跡では、近世後半以降（18世紀以降）の貯蔵施設と考えられる籠や桶を伴う土坑が、数基並んだ状態で検出されている（第２章 第30図）。SF11～SF14に籠や桶が伴っていたとは判断できないが、宮ノ沢遺跡の例も廃棄に礫を伴っており、共通する状況をみることができる。



第129図 SF07～SF14

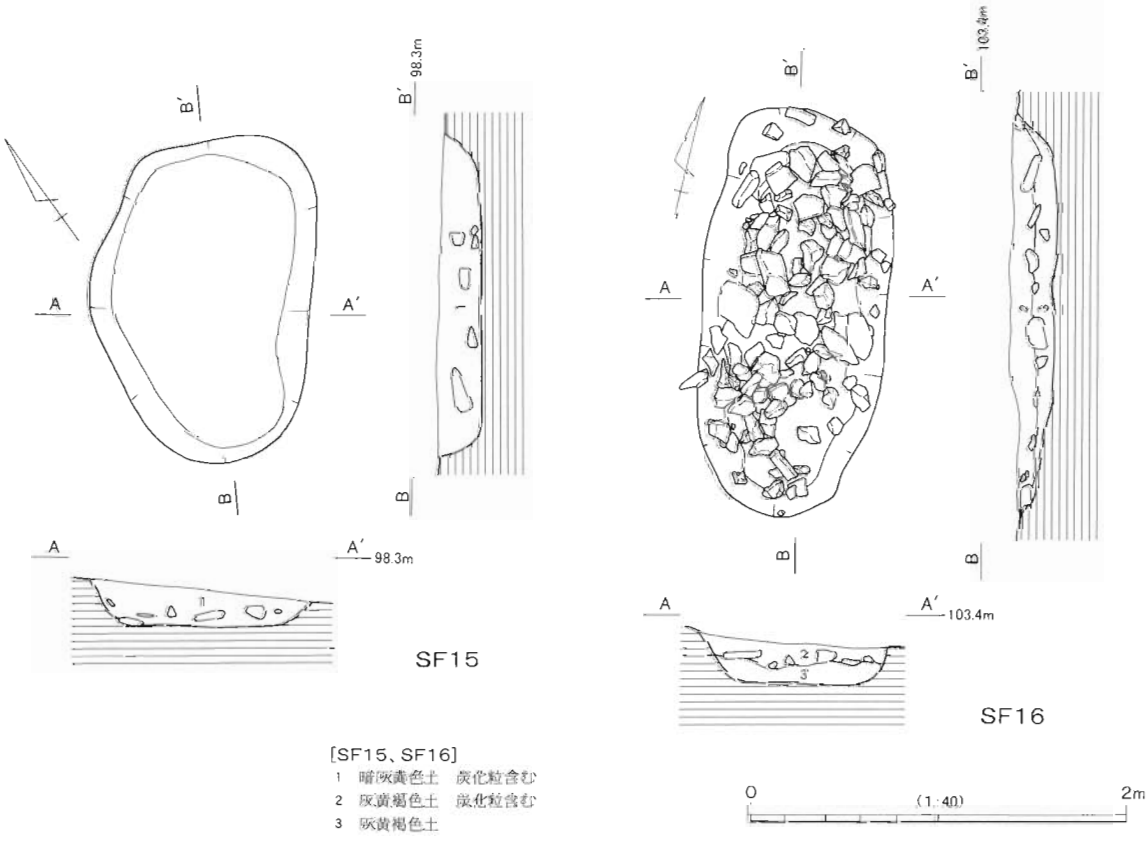
ＳＦ１５（第130図）

Ｇ８グリッドに位置する。平面は1.2ｍ×1.3ｍの不整楕円形、検出面からの深さ約0.2ｍである。近世後半以降の陶磁器片・カワラケ片・金属片が出土しており、近世後半以降（18世紀以降）の土坑と判断できる。比較的多くの器物が出土しており、廃棄土坑である可能性も考慮できる。

ＳＦ１６（第130図）

Ｋ10グリッド南寄りに位置する。平面は1.0ｍ×2.2ｍの長楕円形、深さは検出面から約0.25ｍである。多くの礫が、覆土中～下位で検出されている。礫の検出状況に特別な意図は認識し難いが、被熱を認めることができる。また、中央～南部にわずかな骨粉が認められている。以上から、SF16は火葬（荼毘）跡であると判断できる。

陶器片・カワラケ片・鉄片が出土しており、近世中頃（17世紀後半～18世紀前半）に位置づけできる鉢（第139図26）を含む。しかし、被熱のない破片であり、本遺構に伴うとは判断できない。むしろ、近世には土葬が主となるとされており（木村1997、藤澤典1997）、SF16は火葬（荼毘）跡であることから、より古い時期の可能性が指摘できる。詳細な時期は特定できず、建物群との時期差はわからないが、段丘上から離れた斜面上方、しかも段丘上から隠れた西側谷部に至る場所に墓域を設けたという特徴は指摘できる。また、出土遺物は、周囲の平坦面が近世中頃に機能していたことを示しており、表土・耕作土中の浅い墓、もしくは近世以降に破壊された墓が多くあった可能性が指摘できる。



第130図　SF15・SF16

4．C区の遺構

C区は、本遺跡最西の段丘上に立地している。南は丘陵斜面、東は谷、北～西は河川流域に下る急斜面が巡る。調査区内では段丘上の比較的緩やかな斜面地、および周囲の斜面地のはじまり部分を検出することができた。ただし、段丘上の平坦部もしくは緩斜面部といえる範囲は、A・B区に比べて狭い。なお、茶畑による削平等はあるものの、概ね遺跡形成時の地形を反映したものであると判断できる。

第131図　C区遺構配置図

調査区中央北寄りの緩斜面部では、多くの小穴が検出されおり、掘立柱建物跡３棟や柱穴列（施設跡）の存在を認めることができる。一方、調査区南西の斜面地でも、掘立柱建物跡１棟を検出することができている。土坑は調査区南縁で１基、他の種類の遺構は検出できていない。

縄文時代の遺物の出土は少なく、縄文時代であるといえる遺構はない。出土遺物の大半は中世後半以降、とくに近世前半（17～18世紀）の遺物が多い。以上の遺構・遺物の特徴から、中世後半以降の遺構群であると判断できる。なお、掲載した遺物（第139図）においては、中世後半の遺物はＣ区出土に限られている。Ａ・Ｂ区よりも中世後半の建物跡などが含まれている可能性が高いと評価することもできる。しかし、全般的に建物・施設跡に伴う遺物は少なく、詳細な判断には慎重にならざるを得ない。

（１）小　穴

後述する建物・施設跡の柱穴以外にも、多くの小穴が検出されている。建物・施設跡が集中する緩斜面部（Ｈ・Ｉの３～４グリッド）に多く分布しており、確認できるよりも多くの建物・施設がつくられ続けており、それらの柱穴の一部が残存している可能性がある。

SP424・437からカワラケ片、SP387から土師質土器片、SP397・414・419・420から陶器片、SP434から剥片類が出土している。SP419出土陶器（第139図27）とSP420出土陶器（第139図24）は中世後半（15世紀頃）に位置づけでき、この時期には建物・施設がつくられていた可能性が指摘できる。

（２）建物跡、柵などの施設跡

ＳＨ１５・ＳＨ１８・ＳＨ１９・ＳＨ２０（第132図）

Ｈ４～Ｉ４グリッドで、東西に直線的にのびる柱穴列が４列ある（北からSH15・SH18・SH19・SH20）。建物跡に復元することはできず、柵などの施設跡である可能性が指摘できる。

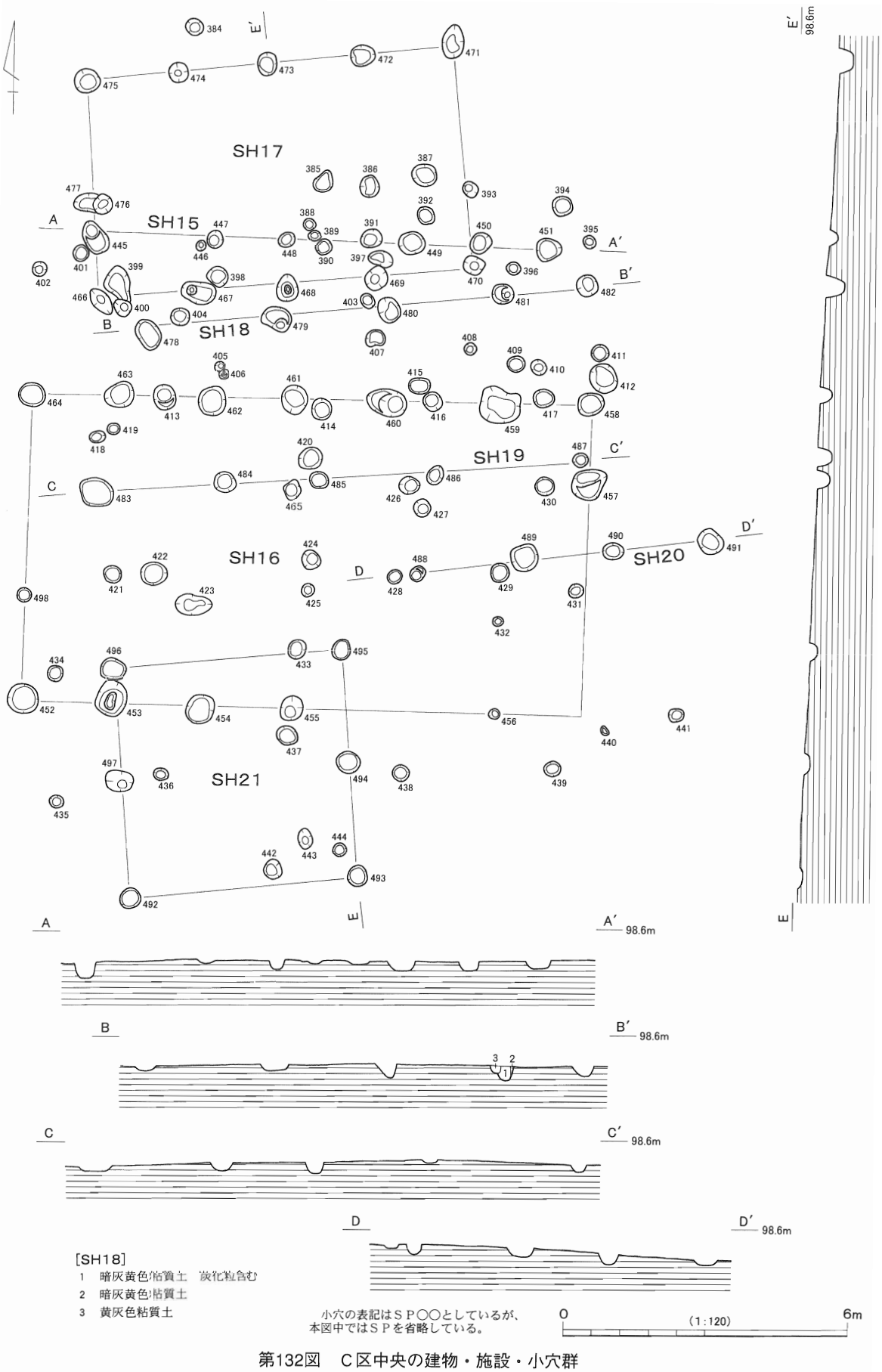
SH15は、約9.6mにSP445・SP447・SP448・SP390・SP391・SP449・SP450・SP451が並ぶ。柱穴の間隔は等しくならず、異なる柱穴が混在している可能性もある。SH18は約9.4mにSP478～482、SH19は約10.2mにSP483～487、SH20は約6.3mにSP488～491が並ぶ。いずれも柱穴の間隔は等間隔に近いが、厳密には異なる。柱穴の規模は直径0.6m以下でばらつく。深さは、検出面から0.3m以下である。

SH15のSP391から陶器片・カワラケ片、SP449から鉄片・土師質土器片が出土している。また、SH18のSP480からカワラケ片が出土している。SH18・SH19・SH20はSH17・SH21と、SH15はSH16と平行にあり、いずれも建物と関連する可能性が評価できる。したがって、建物跡と同様、中世後半～近世前半の柱穴列であると判断でき、出土遺物も矛盾していない。

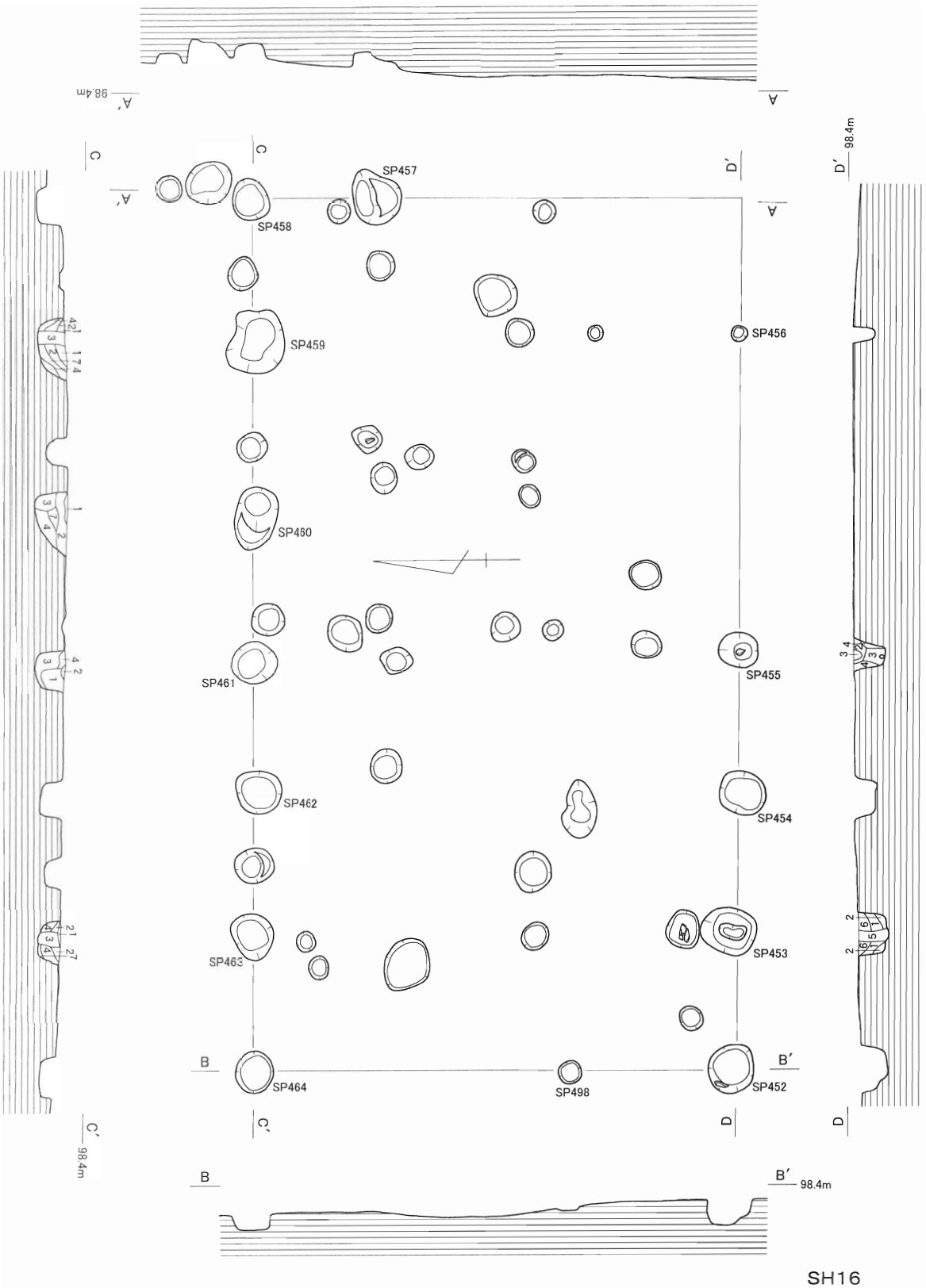
ＳＨ１６（第132・133図）

Ｉ４グリッドに位置する。１間×６間（6.5m×11.5m）の掘立柱建物跡であり、長軸は概ね東西である。柱穴は直径0.6m前後、深さは検出面から0.4m前後である。柱穴の多くでは、土層断面によって直径0.2m前後の柱痕が認められている。なお、南東隅の柱穴およびSP456－SP455間の柱穴が検出できていない。また、SP456は目立って小さい。遺構検出面の状況をみるかぎり、削平の影響で柱穴が消失した可能性はあるものの、本来より南東寄りの柱穴は小さく浅いものであったと復元できる。

SP452から陶器、SP461からカワラケ片と15世紀の陶器片（第139図15）が出土している。本遺跡において近世陶器の出土が多いなか、SP461出土陶器は中世後半（15世紀）に位置づけできるものである。したがって、中世後半（15～16世紀）の建物跡である可能性が高いと判断できる。



第132図　Ｃ区中央の建物・施設・小穴群



SH16

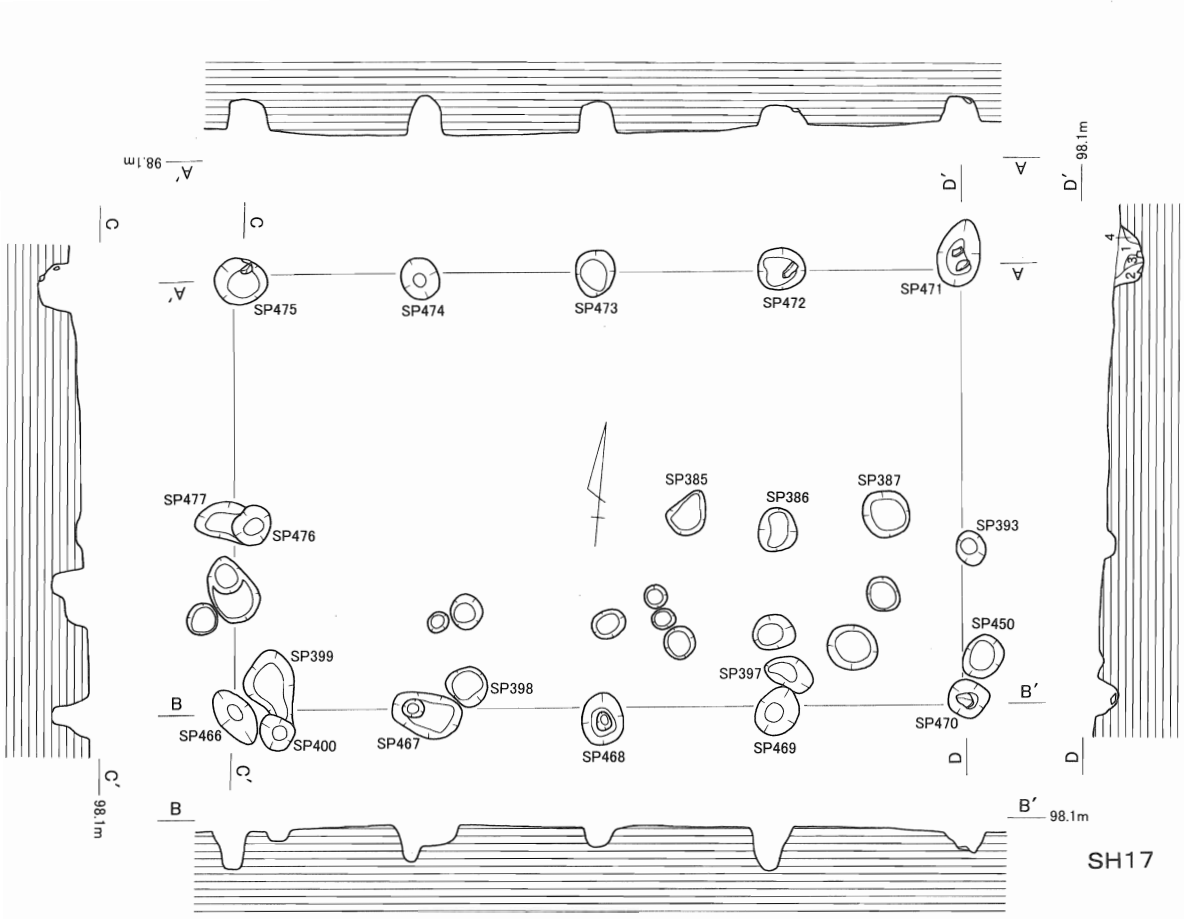
番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

[SH16]

1	灰黄色粘質土	炭化粒含む	5	灰黄色粘質土	炭化粒含む
2	灰黄色粘質土		6	灰黄色粘質土	
3	暗灰黄色粘質土	炭化粒含む	7	黄灰色粘質土	
4	暗灰黄色粘質土				

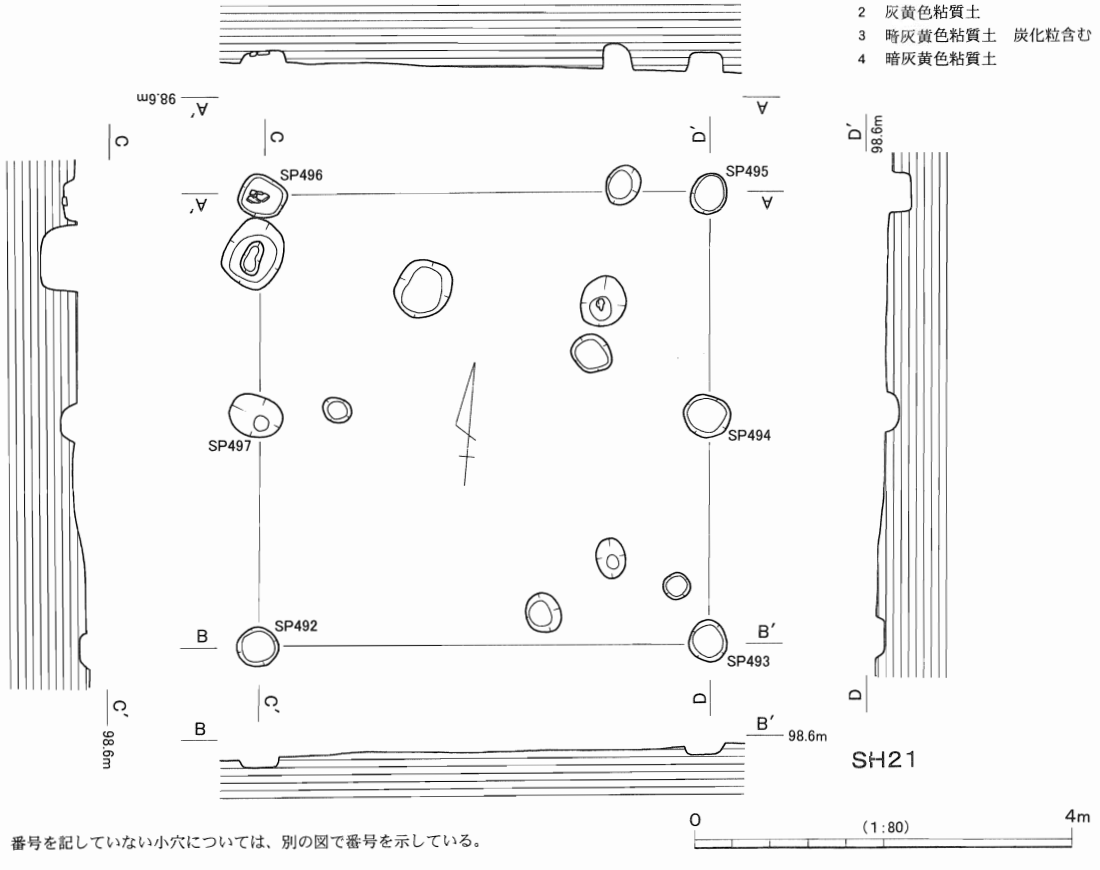
0 (1:80) 4m

第133図　SH16



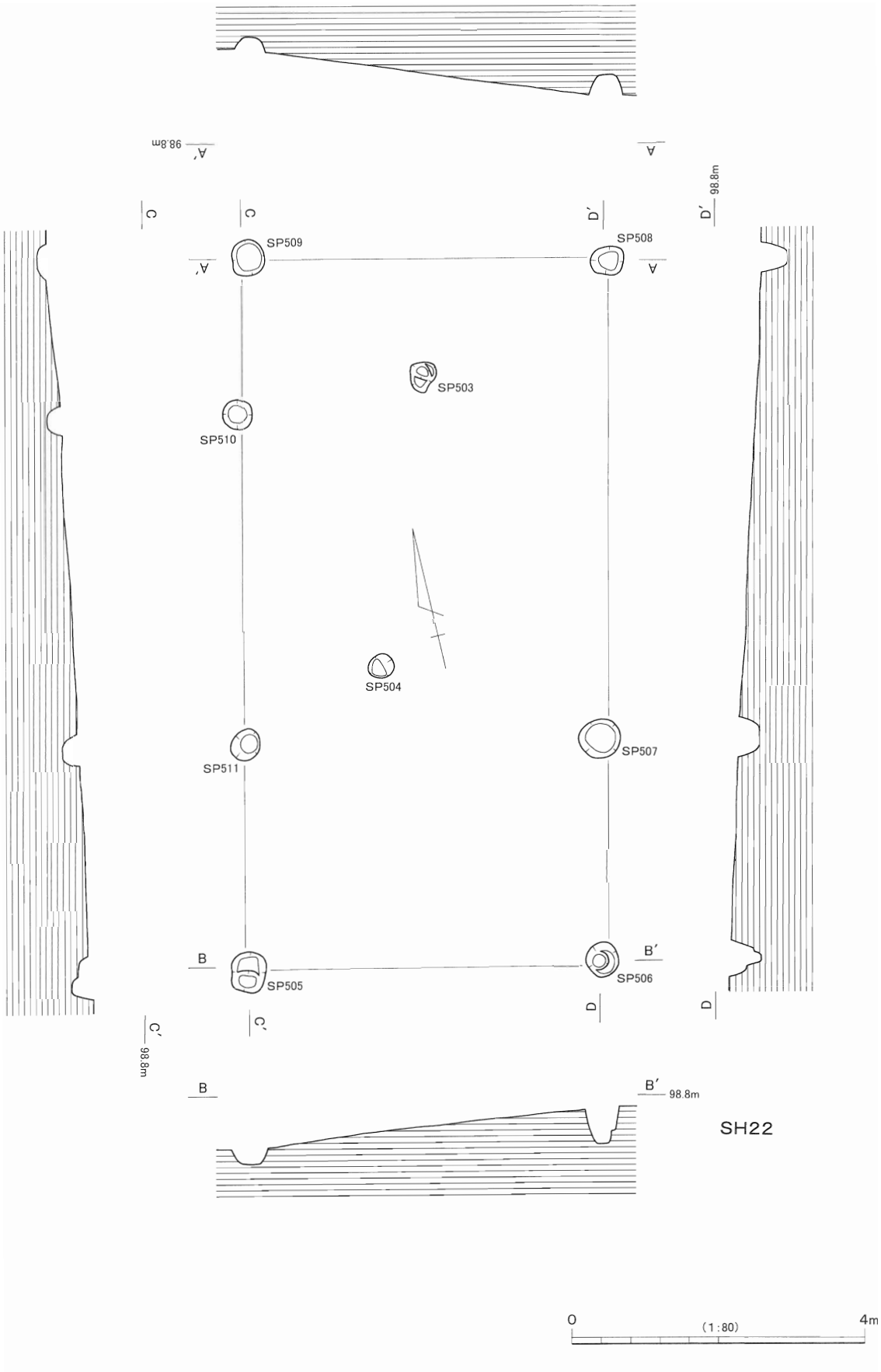
[SH17]

1　灰黄色粘質土　　炭化粒含む
2　灰黄色粘質土
3　暗灰黄色粘質土　炭化粒含む
4　暗灰黄色粘質土



番号を記していない小穴については、別の図で番号を示している。

第134図　SH17・SH21


SP509
SP508
SP503
SP510
SP504
SP511
SP507
SP505
SP506
SH22
98.8m
0
(1:80)
4m

第135図　SH22

ＳＨ１７（第132・134図）

Ｈ４グリッドに位置する、１間×４間（6.5m×11.5m）の掘立柱建物跡である。長軸は概ね東西だが、SH16よりも若干傾く。柱穴は直径0.5m前後、検出面からの深さ0.2～0.5mであり、１～２個の石が残されているものもある。なお、短辺上の中央よりやや南にも柱穴があり（SP476・SP393）、さらに、SP472・SP469の間にも同様の柱穴が認められる（SP386）。柱穴の配置からみて、これらも建物（SH17）の構造に関連した柱穴である可能性が指摘できる。

SP471から陶器片、SP468から陶器片・カワラケ片が出土している。SP471出土の陶器（第139図21）は近世のものである。出土遺物および掘立柱建物跡であることから（足立1991・1996）、近世前半（17世紀～18世紀初頭）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ２１（第132・134図）

Ｈ４グリッドに位置する、１間×２間（4.8m×4.8m）の建物跡である。建物方向はSH17に一致する。柱穴は直径0.5m前後、検出面からの深さ0.2m前後である。柱穴が浅く、SP496に石が残されているが、石場立であると判断するのは難しい。柱穴が浅いのは、削平の影響でもある。

SP497からカワラケ片が出土している。中世後半以降（15世紀以降）の建物跡である可能性が高いと判断できる。

ＳＨ２２（第135図）

Ｊ２～Ｋ２グリッドの北西に下る斜面地に立地する。4.9m×9.5mの掘立柱建物跡であり、長軸は北より若干東に傾く。短辺は１間、長辺は３間であると復元できるが、SP509－SP511間の柱穴とSP508－SP507間の柱穴が検出できていない。斜面地にあることから、堆積土上において整地して建てられたため、検出できなかった可能性がある。柱穴は直径0.5m前後、検出面からの深さ0.5m以下である。

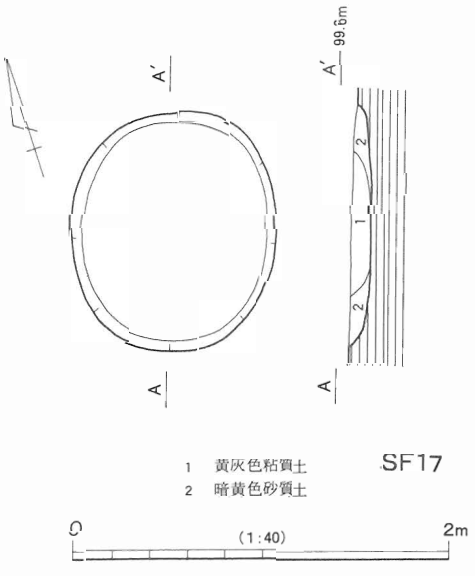
出土遺物はない。本遺跡の主体時期（第４節参照）および掘立柱であることから（足立1991・1996）、中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物跡であると判断することができる。

（３）土　坑

ＳＦ１７（第136図）

Ｌ３グリッドに位置し、南側丘陵寄りの斜面地に立地している。平面は1.1m×1.3mの円形で、深さは検出面から0.1m程である。覆土は、ほかの中近世の遺構と同様である。

出土遺物はないが、遺構の形状等の特徴から、近世の土坑である可能性が高いと判断できる。浅い検出であるが、遺構検出面よりも上層（表土・堆積土層中）から掘られた土坑であり、より深い土坑であったと想定することもできる。



第136図　SF17

5．出土遺物

（1）縄文時代の遺物

土　器（第137図）

縄文土器片の出土量は、A4版の袋で2袋程度である。全て小さな破片であり、多くはB区北寄りからの出土で占められている。B区南半およびA・C区からの出土は10点程度である。1～3は、沈線によって区画され、区画内には縄文が施されている。これらの土器は加曽利EⅣ式に比定される。

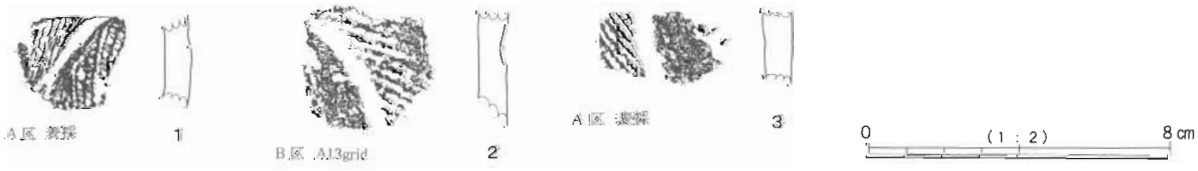
石　器（第138図）

石器は、以下にあげるもので全てである。その他、剥片・砕片なども出土しているが、出土数の内訳は第20表のとおりである。出土状況については、概ね縄文土器片と同様である。

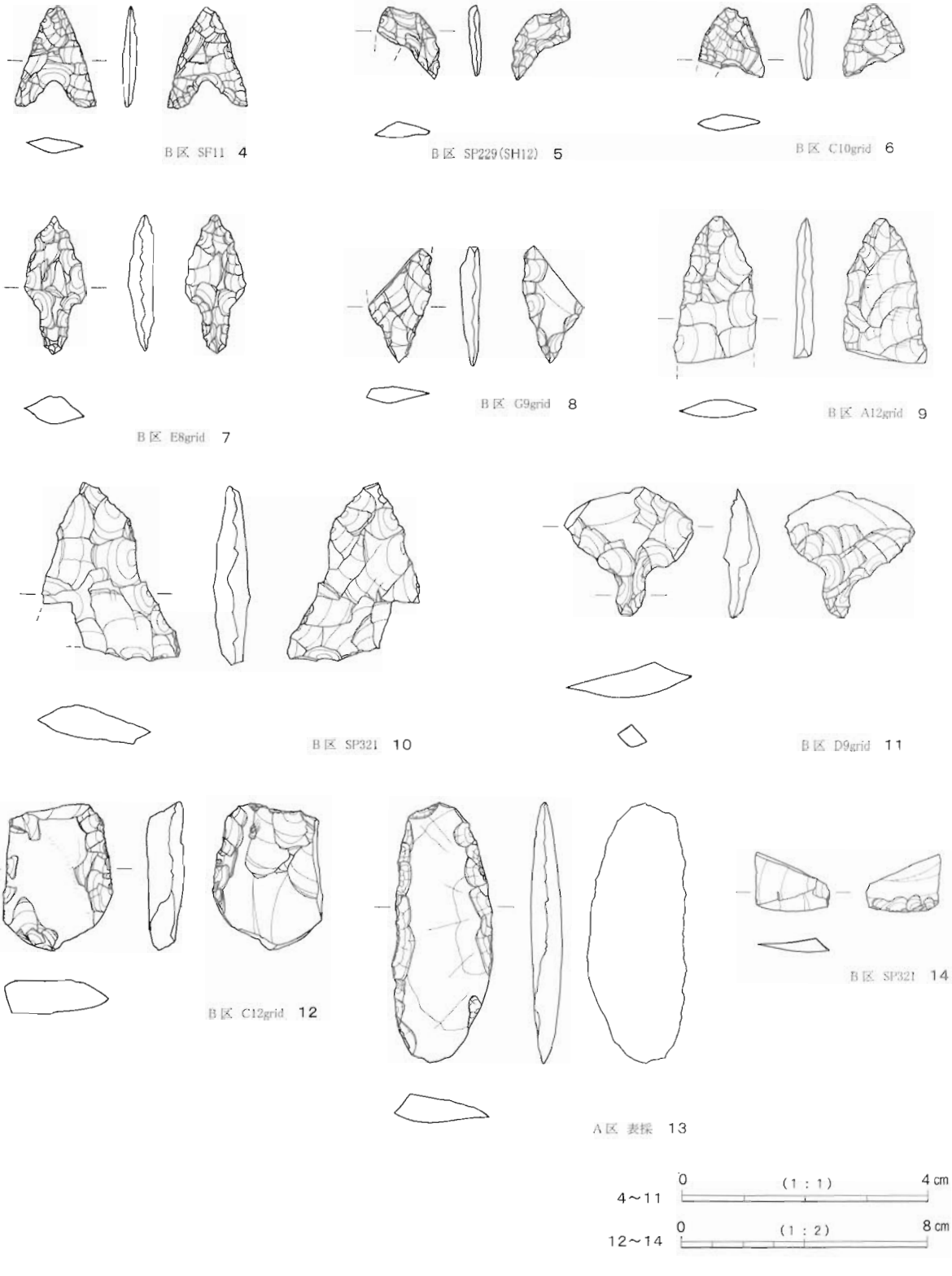
石　鏃（4～10）　4～6は2b類（第3章 第3節4参照）の石鏃である。4は両面に細かな調整が施され先端部をつくり出している。基部の抉りは深く全体の3分の1程である。5・6も基部は欠損しているが抉りは深く両面とも入念な調整が施されている。ともに先端部が欠けているがこれは「衝撃剥離」である可能性が高い。「衝撃剥離」は尖頭器や石鏃などの刺突具の先端部にみられる石器の軸と平行な先端部からの剥離のことであり、刺突時の破損と考えられている。7・8は3類であり、7は両面に細かい入念な調整が施されて先端部や茎部を作出している。8は一部欠損しているが残存部にわずかに抉りが入っていることから茎部と判断した。9は両面が丁寧に調整されており、先端部には「衝撃剥離」が認められる。基部は欠損している。10はその形状と調整の粗さから石鏃の未製品と判断した。

石　錐（11）　11は石錐の破損品である。錐部作出のために両面に調整を施している。錐部の先端は欠損している。

その他（12～14）　12は自然面を有する剥片が折れたものを素材としており、剥片の先端部の両面や側縁部に調整が施される。折損しているため詳細は不明だが、エンドスクレイパーのような形態であった可能性も考えられる。13は背面全体に自然面が残存しており、腹面の打面部、先端部に調整が施されている。14は剥片の先端部に細かな調整が施されている。



第137図　出土縄文土器


B区 SF11 4
B区 SP229(SH12) 5
B区 C10grid 6
B区 E8grid 7
B区 G9grid 8
B区 A12grid 9
B区 SP321 10
B区 D9grid 11
B区 C12grid 12
B区 SP321 14
A区 表採 13
4～11
0 (1：1) 4 cm
12～14
0 (1：2) 8 cm

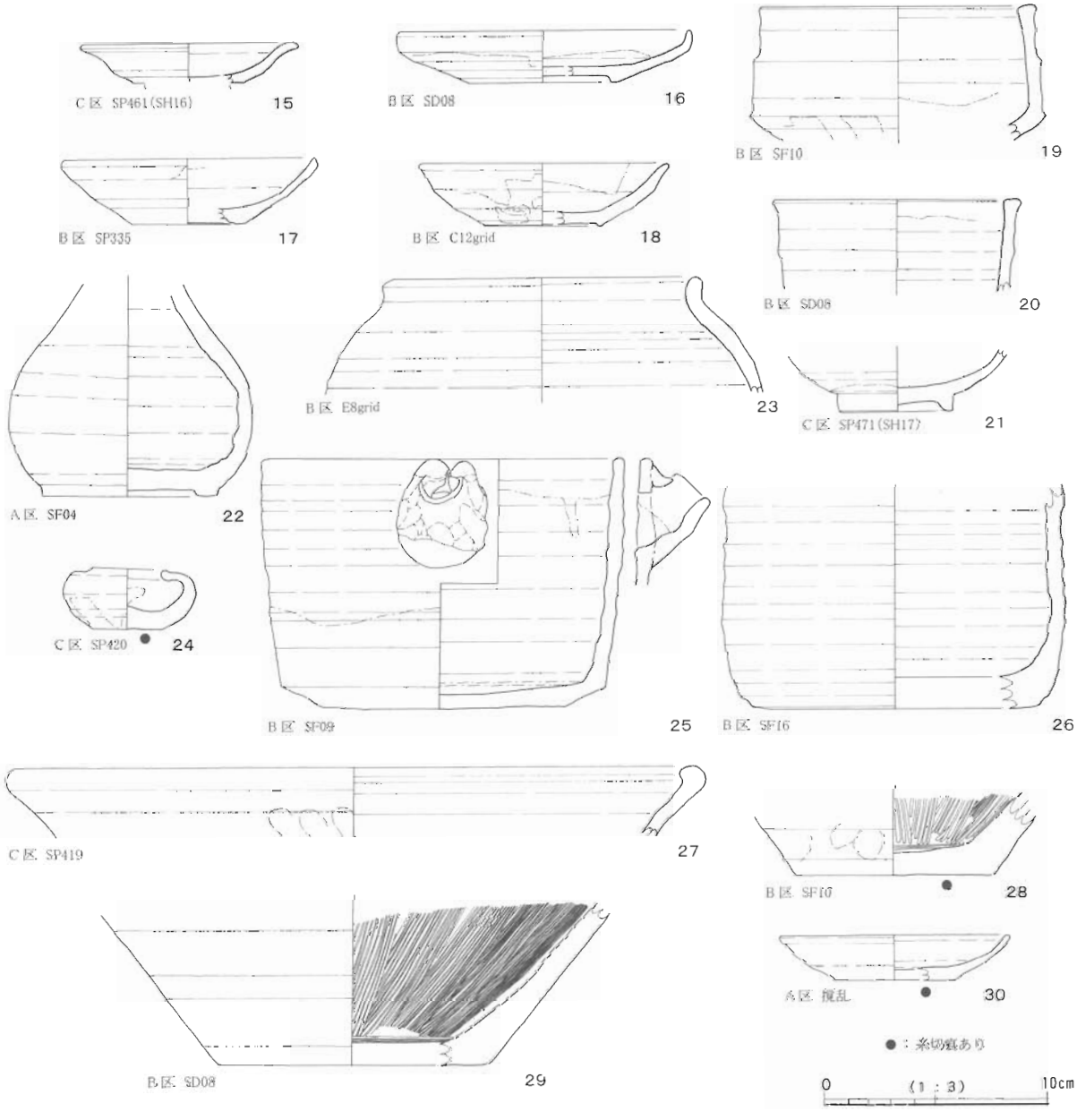
第138図　出土石器

（２）中近世の遺物　（第139図）

陶器片とカワラケをはじめとする土師質土器片で占められている。出土数は、縄文時代の遺物に比べて多く、Ａ４版の袋で５袋程度である。磁器や鉄片も出土しているが、出土数は少ない。以下、図示して詳細について判断できる中近世の陶器片・カワラケ片をあげる。

15・24・27は、古瀬戸後期の陶器である。15は灰釉の腰折皿で、底部内面にトチン痕が認められる。27の擂鉢とともに、15世紀後半（古瀬戸後Ⅳ期）に位置づけできる。24は灰釉の合子で、二次焼成を受けている。形状の特徴などから、14世紀後半（古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期）に位置づけできる。なお、21の碗も瀬戸・美濃産であるが、18世紀前半のあたりに位置づけできるものである。なお、いずれもＣ区中央部にある小穴から出土した陶器である。

ほかの陶器（16～20・22・23・25・26・28・29）は、すべて志戸呂産である。16～18の皿は、いずれ



第139図　出土陶器・土師質土器

も削り出しによる高台で、鉄釉が口縁部にだけ施されている。これらと鉄釉壺（22）および片口の鉢（25）は、17世紀前半に位置づけできる。19の鉄釉碗は17世紀代、20の鉄釉碗や26の鉢は17世紀後半～18世紀前半の中で位置づけることができる。23の壺や28・29の擂鉢は、18世紀代に位置づけできる。

30だけはカワラケである。ロクロ成形で、底部に糸切痕が認められる。体部は内湾するが、浅い。器壁は薄く、焼成は非常に硬い。以上から、近世のものと判断できる。なお、二次焼成を受けている。

第19表　遺物観察表

縄文土器

番号	挿図番号	図版番号	区	出土位置	器種	部位	色調（外面）	色調（内面）	胎土・焼成	備考
1	137	56	A	表採	深鉢	胴部	にぶい黄褐色		砂粒含む	加曽利E式
2	137	56	B	A13grid	深鉢	胴部	にぶい黄褐色	灰黄褐色	長石含む、焼成不良	加曽利E式
3	137	56	A	表採	深鉢	胴部	にぶい黄褐色		雲母・長石含む	加曽利E式

石　器

番号	挿図番号	図版番号	区	出土位置	名称	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	欠損	備考
4	138	56	B	*SF11*	石鏃	流紋岩（Rhy）	1.67	1.30	0.22	0.33		
5	138	56	B	SP229（SH12）	石鏃	黒曜石（Ob）	（1.20）	（1.01）	0.20	0.15	あり	
6	138	56	B	C10grid	石鏃	黒曜石（Ob）	1.19	（1.00）	0.22	0.22	あり	
7	138	56	B	E8grid	石鏃	流紋岩（Rhy）	2.28	0.98	0.50	0.73		
8	138	56	B	G9grid	石鏃	流紋岩（Rhy）	（1.89）	（0.99）	0.31	0.39	あり	
9	138	56	B	A12grid	石鏃	珪質頁岩（SSh）	（2.39）	1.39	0.30	0.93	あり	
10	138	56	B	SP321	石鏃	流紋岩（Rhy）	2.91	（2.21）	0.57	2.25	あり	未製品
11	138	56	B	D9grid	石錐	チャート（Ch）	2.06	2.13	0.63	1.67	あり	
12	138	56	B	C12grid	スクレイパー	ホルンフェルス（Hor）	4.60	3.60	1.08	26.87	あり	
13	138	56	A	表採	スクレイパー	頁岩（Sh）	8.54	3.23	0.88	33.11		
14	138		B	SP321	二次加工のある剥片	流紋岩（Rhy）	1.92	2.45	0.42	1.79		

中近世の遺物

（　）内は欠損のため本来の大きさではない値

番号	挿図番号	図版番号	区	出土位置	種別	産地	器種	部位	残存率（%）	器高（cm）	器径（cm）	口径（cm）	底径（cm）	焼成	色調	備考
15	139	57	C	SP461（SH16）	陶器	古瀬戸	腰折皿	口縁～体部	10		（9.6）	（9.6）	（4.8）	良好	淡黄白色	内外面施釉（灰釉）
16	139	57	B	SD08	陶器	志戸呂	皿	全体	25	2.3	（13.1）	（12.7）	（6.7）	良好	明茶灰色	口縁部施釉（鉄釉）
17	139	57	B	SP335	陶器	志戸呂	皿	全体	20	2.8	（11.2）	（11.0）	（5.0）	良好	暗赤茶灰色	口縁部施釉（鉄釉）
18	139	57	B	C12grid	陶器	志戸呂	皿	全体	15		（10.8）	（10.8）	（4.8）	良好	明茶灰色	口縁部施釉（鉄釉）
19	139	57	B	SF10	陶器	志戸呂	碗	口縁～体部	20		（13.3）	（12.3）		良好	茶灰色	内外面施釉（鉄釉）
20	139	57	B	SD08	陶器	志戸呂	碗	口縁～体部	10		（11.0）	（11.0）		良好	暗灰色	口縁部・体部外面施釉（鉄釉）
21	139	57	C	SP471（SH17）	陶器	瀬戸・美濃	碗	底部	70				5.05	良好	淡黄白色	内外面施釉（灰釉）
22	139	57	A	SF04	陶器	志戸呂	壺	体～底部	80		10.8		7.7	良好	淡赤茶灰色	外面施釉（鉄釉）
23	139	57	B	E8grid	陶器	志戸呂	壺	口縁～体部	10			（13.9）		良好	明茶灰色	外面施釉（錆釉）
24	139	57	C	SP420	陶器	古瀬戸	合子	全体	99	2.8	5.8	3.2	3.1	良好	淡黄白色	内外面施釉（灰釉）二次焼成
25	139	57	B	SF09	陶器	志戸呂	片口鉢	全体	60	11.0	（16.2）	（16.0）	10.8	良好	淡赤茶灰色	内外面施釉（鉄釉）
26	139	57	B	SF16	陶器	志戸呂	鉢	体～底部	15		（15.0）		（12.8）	良好	淡青白灰色	外面施釉（錆釉）
27	139	57	C	SP419	陶器	古瀬戸	擂鉢	口縁部	5			（29.8）		良好	淡橙白灰色	内外面施釉（錆釉）
28	139	57	B	SF10	陶器	志戸呂	擂鉢	底部	40				（8.8）	良好	橙赤色	糸切痕
29	139	57	B	SD08	陶器	志戸呂	擂鉢	体～底部	30				（12.0）	良好	素地：灰色	内外面施釉（錆釉）
30	139	57	A	撹乱	カワラケ			全体	50	2.0	（10.2）	（10.0）	（5.5）	良好	橙褐色	糸切痕　二次焼成

第20表　出土土器片・石器類の内訳

土器片出土数

	縄文土器	陶器（中世後半以降）	磁器（近世後半以降）	カワラケ	その他の土師質土器	計
A区	12	8	0	49	8	77
B区	107	85	12	77	132	413
C区	2	36	18	24	104	184
出土点数	121	129	30	150	244	674

石器・剥片類出土数

	石器・石器未製品	剥片	砕片	計
A区	1	2	5（5）	8（5）
B区	10（2）	33（2）	19（7）	62（11）
C区	0	1	0	1
出土区不明	0	0	1（1）	1（1）
計	11（2）	36（2）	25（13）	72（17）

（　）内は黒曜石製の数

第４節　まとめ

１．平島Ⅲ遺跡の展開

遺跡および遺構の時期について

本遺跡の主体時期は、出土遺物から縄文時代と中世後半～近世に分けて捉えることができる。

縄文土器片の大半は中期後葉のものであり、大和田遺跡・平島Ⅰ遺跡・平島Ⅱ遺跡（第３～５章）と共通している。しかし、縄文時代の遺構は認められず、その活動内容はわからない。縄文時代の遺物の出土がＢ区北寄りに多いことから、調査区よりも北の段丘上（Ｂ区の北側）に居住域などが広がっている可能性もある。一方、平島Ⅰ遺跡で当時の居住域が発見されており、そこを中心とした広範囲の営みの中で、本遺跡における活動内容も位置づけられる可能性がある。

出土遺物の多くは中近世のものであり、検出遺構の大半も中近世のものと判断できる。詳細な時期が特定できる第139図の遺物をみると、15世紀頃と17～18世紀のものに分かれている。近世遺物がより多く、また16世紀に断絶を認めることができる。ただし、図示した以外の中近世の遺物も少なくない。また、遺物量と実際の営みの断続・盛衰が対応するとは限らない。確実性の高い判断としては、平島Ⅰ遺跡・平島Ⅱ遺跡と同様、中世後半（15～16世紀）の営み、さらに近世前半（17～18世紀）の営みが認められるといった把握が妥当であると考える。なお、遺構の大半は小穴（柱穴）であり、16棟の建物跡や柵などの施設跡を認めることができている。建物を主とする遺構群である点も、平島Ⅰ遺跡・平島Ⅱ遺跡と同様である。

各建物の時期・特徴については、前節でも述べているが、詳細まで求めることはできていない。本節では、推測も加えながら、中近世における本遺跡の展開などについて述べたい。さらに、次項では平島Ⅰ遺跡・平島Ⅱ遺跡を含めた中近世の平島集落、その全体像についてもふれておきたい。

中近世の平島Ⅲ遺跡

東半部の建物　Ａ区では、４棟の建物（SH01・SH02・SH04・SH07）が方向を一致させており、同時期に並んでいた可能性を指摘することができる。また、Ｂ区北西部でも、方向を一致させた３棟の並びが認められている（SH10・SH11・SH12）。先述した出土遺物からみた本遺跡の時期、および掘立柱の基礎であることを考慮すると（足立1991・1996）、これらは中世後半～近世前半（15～18世紀初頭）の建物群であると判断することができる。

なお、SH05・SH06は、Ａ区でも４棟の建物群（SH01等）とは方向が若干異なり、切り合いからSH07より古いことがわかっている。ただし、２棟が並ぶ点、建物方向の差も大きくはない点などから、４棟の建物群（SH01等）の直前にあった可能性を考慮したい。一方、Ｂ区南西部のSH08については、建物方向は傾斜によると考えられるものの、規模や間数までもがSH12と近似する。丘陵斜面にあるという立地が特徴的であり、Ｂ区北西部の３棟と同時併存していたとしても、異なる役割などを伴っていたと想定することができる。

西半部の建物　Ｃ区中央部の段丘上緩斜面部では、中世後半にはじまり、近世前半に至るまで建物が設けられていったことがわかっている。SH16については、周辺の柱穴を含めて14世紀末～15世紀後半の陶器が比較的多く出土しており、中世後半（15～16世紀）の建物であった可能性が高いと判断できている。一方、SH17については、出土遺物および掘立柱であることから、より近世前半（17～18世紀初頭）に近い可能性を評価することができる。

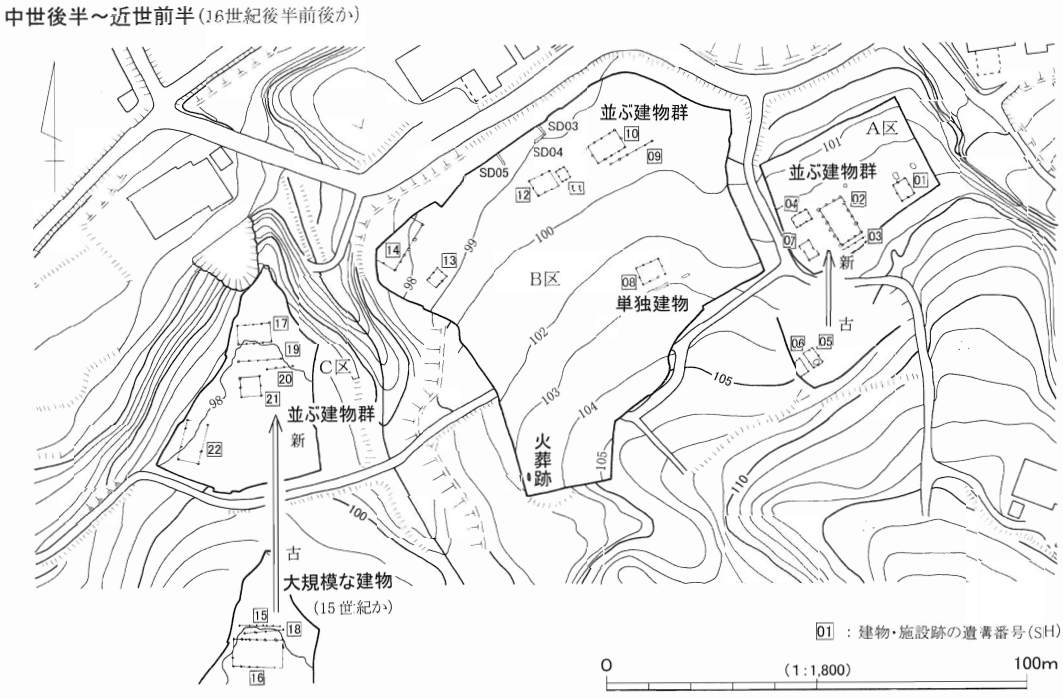
Ｂ区南西部とＣ区では、西側の谷に下る際にも、１棟ずつの建物跡が検出されている。比較的規模の大きい建物であるが、他と同一方向にはならず、柱間なども大きく異なる。他と時期が異なる可能性もあるが、周辺からの出土遺物に違いは認められない。むしろ、立地の特異性から、同時期でも性格が異なる建物（施設）である可能性も指摘しておきたい。

中近世の展開　本遺跡における中近世の展開は、次のように推測することができる。

中世後半（15～16世紀）に建物を伴う営みがはじまる。はじまりは最西の比較的狭い段丘（Ｃ区）に限られていた可能性もあるが、比較的大きな建物を伴った営みであったことがわかる。その後、近世前半までの間に、各段丘に建物を伴う営みが展開する。概ね16世紀後半頃であろうと考えたいが、掲載した出土遺物をみるかぎりでは、むしろ17世紀以降の遺物が目立っている。

各段丘に展開した建物群をみると、Ａ区とＢ区では大小数棟の配置をみることができる。建物の大小は役割に対応したものであり、それらを組み合わせて整然と並べることで、一つの居住域（屋敷地）の営みが機能したものと考えられる。なお、Ｂ区の北側に居住域（屋敷地）が広がり、検出した建物群はその一部である可能性がある。方形に巡る溝（SD03～SD05）も、これらに関連している可能性がある。なお、近世後半の遺物出土および土坑の検出から、18世紀以降にも営みがあったことが確認できる。

墓については、Ｂ区南西隅で火葬（荼毘）跡が発見されている。建物群が展開する段丘上から離れた斜面上方、しかも段丘上から隠れた西側谷部に至る場所につくられている。火葬跡の詳細な時期、墓域の存続期間などについての判断は難しいが、火葬であるということから（木村1997、藤澤1997）、中世後半を主とした墓域である可能性を評価したい。



第140図　平島Ⅲ遺跡の概要

2．中近世の平島Ⅰ～Ⅲ遺跡

平島Ⅰ遺跡・平島Ⅱ遺跡・平島Ⅲ遺跡は、小谷を挟んで隣接しており、同じ段丘群に立地するともいえる。さらに、いずれも縄文時代中期後葉と中世後半～近世前半に主体時期があると考えられる。

縄文時代中期後葉については、平島Ⅰ遺跡で住居跡などを発見した一方、他では該当する遺構はほとんどなかった。遺物出土数も平島Ⅰ遺跡の住居跡周辺が圧倒的に多い（第15・18・20表）。削平部・未調査部もあって断定は難しいが、各遺跡が関連しているとするならば、平島Ⅰ遺跡が拠点となる居住域であり、その他は居住域外の活動域として位置づけることもできる。

中世後半～近世前半についても、3遺跡の展開が関連している可能性が考えられる。そこで、本書の最後に、中世後半以降の平島集落について、3遺跡を総合してみておきたい。なお、遺跡・調査区名については略すことにする。たとえば、平島Ⅰ遺跡のA区は「ⅠA」と表記する。また、遺構名の前には、遺跡の別を示すためにⅠ～Ⅲを付す（たとえばⅢSF01）。

中世の営みのはじまり

建物を伴う営みのはじまりは、出土遺物から15世紀に求めることができる。ただし、その時期の可能性が高いと判断できる遺構は、ⅢCの建物跡（ⅢSH16）だけである（第141図）。

この時期は、原野谷川中・上流域で力のあった孕石氏などの原氏一族が、国人領主としての地位を確立していく時期にあたる（第2章 第4節）。力をのばしてきた原氏一族の意図を背景として、平島における営み、6.5m×11.5mと比較的大きい建物（ⅢSH16）を伴う営みがはじまったと評価することもできる。ただし、他の多くの建物跡は詳細な時期が特定できていない。また、未調査部分もある。これらの中に、ほかの15世紀の営みが隠れている可能性は否定できない。さらに、周辺地域における遺跡調査事例が少なく、異なる評価につながる可能性もある。

屋敷地について

西部における屋敷地の展開　大小の建物数棟の群が、数ヶ所で認められる。複数の建物が同時期、同区域に配置されていたとするならば、そこに屋敷地があったと評価することもできると考える。

まず、屋敷地であるとの評価が比較的明確にできる場所として、西部のⅢAとⅢB北部をあげることができる。出土遺物などから各建物間の時期差を明示することは難しいが、建物の配置などから、複数の建物が同時併存していた可能性を考えたい。すなわち、役割の異なる大小の建物を同区域に配置することで、ⅢAの屋敷地、ⅢB北部の屋敷地が営まれていたと考える。なお、ⅢAの方が大きな建物が検出されているが、ⅢB北部には未調査の段丘上部が広がっている。未調査部分については推測の域を出ないが、ⅢB北部で検出した建物群は屋敷地の一部、裏手部分を構成するものである可能性がある。また、各屋敷地間での規模の差（力・役割の差）もあった可能性が指摘できる。

ⅢCでは、ⅢSH16の後にⅢSH17・ⅢSH21が設けられている。柱穴間の違いもあるが、建物方向は一致、西辺が一直線上にある。また、他にも小穴が多くあり、それらを含めて数棟の配置があった可能性が指摘できる。ただし、平坦面は狭く、ⅢB北部のような規模は望めない。なお、段丘上の西際～斜面に、他と特徴の異なる建物跡（ⅢSH22）がある。立地および建物の特徴から、役割・機能の違いを評価したい。ⅢB北部の西側にも、同様の建物跡（ⅢSH14）が認められている。

中央部・東部における屋敷地の有無　一方、平島Ⅰ～Ⅲ遺跡の中央部・東部をみると、大小数棟の建物配置が指摘できるのは、ⅠD北部に限られる。さらに、そのⅠD北部においても、大型建物の建て替

え（ＩSH09～SH11)、それ以前の小規模建物の存在（ＩSH12～SH17)、統一的でない建物方向など、ⅢＡなど西部の屋敷地との違いが目立つ。屋敷地間に多少の差異があっても不思議ではないであろう。また、ＩＤの北側には未調査の段丘上面が広がっており、そこに、西部と同様の屋敷地が残されている可能性もある。詳細は求められないが、ＩＤ北部にも屋敷地があった可能性は指摘できる。

以上のようにＩＤ北部に屋敷地があるとするならば、ＩSH06・ＩSH07は、その背後（南側丘陵寄り）に位置することになる。ⅢＢ北部のⅢSH10～ⅢSH12のように大小の建物数棟の配置とは捉えにくいが、屋敷地の裏手に設けられた建物として位置づけできる可能性も考慮したい。

中央部にあたるⅡ西半にも、数棟の建物の存在が認められている。しかし、全て小規模な建物である。他より奥まった場所にあり、場所による役割の差異もしくは階層差の存在を示している可能性が考慮できる。その他、中央部・東部には点在する建物が認められているが、これについては後述する。

屋敷地の時期　各遺跡の掲載した遺物をみると、16世紀後半以降の遺物が多くを占めている。したがって、平島Ⅰ～Ⅲ遺跡の各所で展開する屋敷地などは、16世紀後半以降に限定できる可能性が高い。また、検出した建物跡は掘立柱で占められており、近世前半（17世紀）までのものと判断できる。

15世紀に位置づけた営みのはじまりと16世紀後半以降の屋敷地の展開との間には、断絶があったのであろうか。もしくは、どのような変遷があったのだろうか。15世紀末には、北条早雲率いる今川軍によって、国人領主原氏の本拠地などが攻め落とされる。一方、孕石氏は原氏を裏切って戦功を遂げる（第２章 第４節)。平島の３遺跡の変遷も、このような状況に影響されていたのかもしれない。ただし、出土遺物総数は少なく、その大半は詳細な時期が特定できないものである。また未調査部分が存在することから、断絶の有無などについて、現状での明確な判断はできないと考える。

なお、屋敷地が展開する16世紀後半以降は、豊臣秀吉の天下統一、徳川の時代へと変動する時期にあたる。この一帯の地域も、1570年代に徳川氏の領するところとなる。ただし、このような状況変化は本地域に限ったことではない。平島の３遺跡だけをみて社会変化と集落の変遷を強く結びつけるのは危険であろう。ここでは、何らかの影響があった可能性も指摘できるといった程度に留めておきたい。

墓域について

墓域の形成　中央～東部のＩＡ・ＩＣ・Ⅱでは、数ヶ所に墓や火葬（荼毘）跡が検出されている（第141図)。墓の多くは火葬によるものと判断でき、ＩＡの墓穴等で六道銭が出土、いくつかの墓群の周辺からは、15～16世紀後半のカワラケも出土している。以上から、中世後半（15世紀中頃～16世紀）に墓域が形成されたと判断でき、とくに16世紀後半の可能性が高いと考えられる（第４章 第４節)。

検出した墓穴および火葬施設は、数ヶ所の群を形成するように分布している。表土除去中に出土した六道銭もあり、検出した以上の墓穴などが展開していたと復元することもできる。ただし、火葬跡は各墓群に伴うように数ヶ所で検出されており、本来より、群別されていたと推測できる。また、Ⅱの墓穴の分布が他より分散傾向にあること、六道銭の出土がＩＡ西部の一群に限られていることなど、群による差異も認めることができる。ある集団の単位ごとに墓群が形成されており、その出自・役割・経済力・階層等の違いが表れている可能性も指摘することができる。

なお、ⅢＢ南西隅にも、ほぼ同時期の可能性がある火葬跡が発見されている（前節参照)。屋敷地の南側丘陵の谷際、屋敷から離れ、隠れた場所に一墓群が営まれたと把握できる。

墓群に近い建物　墓域の展開が認められるＩＡ・ＩＣ・Ⅱでも、建物跡が検出されている。しかし、その特徴は先述の屋敷地を構成する建物跡とは異なっている。

まず、その代表的なものとして、ＩＡのＩSH01とＩＣのＩSH02をあげる。いずれも単独的に立地する建物跡であり、屋敷地を構成する建物群とは異なる役割・機能を伴っていたと推測できる。さらに、火

葬施設を含む墓群の近くに位置するという、共通した特徴を見出すことができる。すなわち、屋敷地を構成する建物ではなく、墓域の営みに関連した建物であった可能性を指摘することができる。

Ⅱにも、同様の建物跡（ⅡSH05）が検出されている。単独的に立地し、近くには墓穴と火葬跡の可能性がある遺構（ⅡSF06近辺の被熱範囲）があることから、ISH01・ⅠSH02と同様、墓域に関連した建物であったと考えられる。なお、以上の3棟はⅠSH09～ⅠSH11ほど大規模ではなく、ⅠSH12～ⅠSH17やⅡSH01～SH04のように小規模でもない。また、建物方向の類似性も見出すことができる。

ⅢBのⅢSH08は、ⅢB北部の屋敷地の背後、南側の丘陵斜面に単独立地している。これについても、屋敷地を構成する建物群とは異なるものと把握できる。ⅢB南西隅の火葬跡から60m程離れているが、同一丘陵斜面に立地しており、同様に墓域と関連した建物であった可能性も否定できない。なお、建物規模などはⅢSH12とも類似するが、ⅠSH01とも類似している。

以上のように、数ヶ所に分かれて墓群および火葬施設が分布しており、それぞれが1棟の建物を伴って営まれていた可能性が指摘できる。

営みの変化と継続

墓域の変化　一般的に、近世になると儒教の影響などで土葬が主となり、石塔から墓標・碑へ移行、棺が使用されるようになる。キセルの副葬が目立つのも近世墓の特徴である。さらに、寺壇制度に代表される支配体制の影響による、墓群の状況変化も認められている（木村1997、藤澤典1997など）。

平島の3遺跡については、中世後半の墓域が認められる一方で、上記のような近世的要素を含む墓（群）は認められていない。近世になると墓域がなくなる、もしくは他に移動したと考えられる。いずれにしても、平島においても近世的社会の確立・広がりに伴う墓域の大きな変化を認めることができる。

近世後半に至る営み　平島Ⅰ～Ⅲ遺跡の各遺跡では、近世の遺物も比較的多く出土しており、何らかの営みが近世前半（17世紀）、近世後半（18世紀以降）にまであったと考えられる。

墓域については、先述のとおり近世への継続は認められない。しかし、屋敷地の建物跡については、近世前半に至るものを含んでいる可能性も否定できない。さらに、近世後半の土坑（桶を伴う土坑など）が各遺跡で検出されており、肥溜めなどを含む貯蔵施設の存在が認められている（第141図）。

18世紀中頃以降の建物は、基礎が石場立などになり（足立1991・1996）、削平等によって検出できない場合が多いと推測できる。したがって、近世後半においても、貯蔵施設などの他に建物を伴っていた可能性は否定できない。ただし、これら近世の営みが中世後半からの継続として評価できるかはわからない。地域開発の進展や近世的社会構造の確立・普及による変化も、考慮する必要があると考える。

遺物出土数の傾向

各遺跡・各区の種類別遺物出土数を、第15・18・20表に示した。多少の変動の可能性はあり、この数値から詳細を論じるのは危険であると考える。しかし、大雑把にみても次のような指摘が可能である。

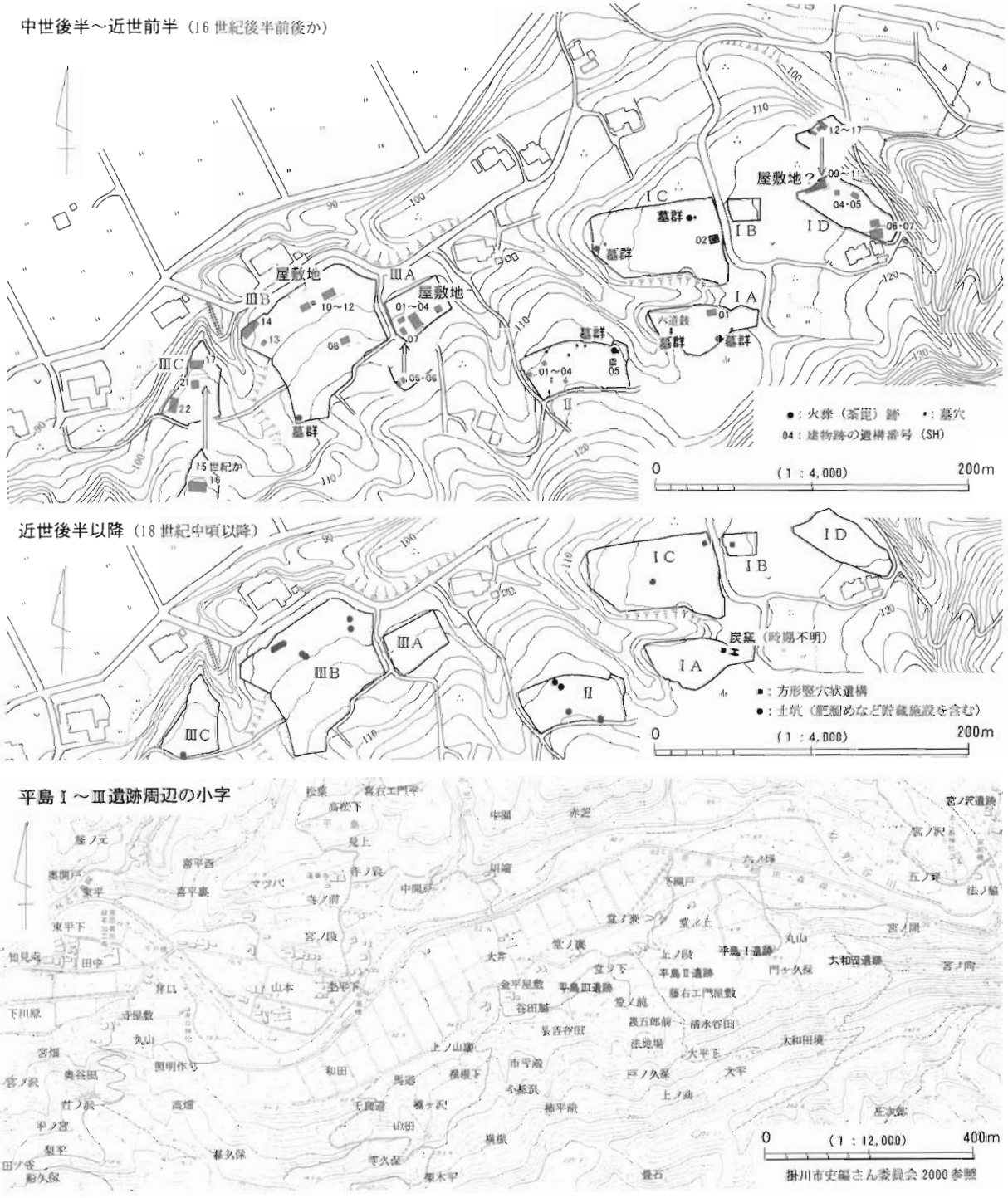
近世後半以降の陶磁器　出土磁器は、全て近世後半以降のものである。その磁器の出土はⅠB・ⅠCで多く、近世後半以降の営みはⅠB・ⅠCで顕著であったと推測できる。ⅠB・ⅠCの出土陶器が多いのは、それに伴う近世後半以降の陶器の出土に影響されたものと考えられる。

カワラケと他の土師質土器　ⅠD・ⅢB・ⅢCでは、カワラケよりも他の土師質土器が多い。一方、ⅠA・ⅠB・ⅠC・Ⅱではカワラケの方が多い。前者は屋敷地、後者は墓域と考えられている区域である。一般的にみても、土師質の鍋・甕などは通常生活に使用され、一方の墓域ではカワラケが多く使用されると考えられる。以上から、営みの違いが遺物出土数に表れている可能性が指摘できる。ただし、屋敷地と考えられるⅠAは、カワラケの方が多い。

地名について

平島Ⅰ～Ⅲ遺跡の東に、下開戸という小字がある（第141図）。平島には下開戸・中開戸・上開戸が離れて位置しており、「開戸」は「開土」すなわち開墾地を意味するとされている（鈴木1980）。いつの時期かはわからないが、中近世における開発の進展をうかがわせている。

平島Ⅰ～Ⅲ遺跡の西部周辺には、「屋敷」の付く小字があり（金平屋敷・藤右エ門屋敷）（第141図）、比較的有力な屋敷地が複数あったと考えられる（鈴木1980）。また、その東側には「堂」の付く小字が分布しており、付近に阿弥陀堂などがあったのではと指摘できる（鈴木1980）。直接的な対応を詳細に求めることはできないが、先に論じてきた屋敷地や墓域の展開と関連している可能性が考慮できる。



第141図　中近世の平島Ⅰ～Ⅲ遺跡

結　語

以上、平島Ⅰ～Ⅲ遺跡の中世後半～近世前半の様相について、総合的にみてきた。各遺跡の調査成果には詳細のわからない点も多く、記述の内容には推測の多い強引な部分も含んでいる。とくに時期の詳細などについては、異なる可能性も否定はできない。しかし、遺物の出土数や地名なども検討材料に含めることができ、屋敷地と墓域の展開、その概要はうかがうことができたと考える。

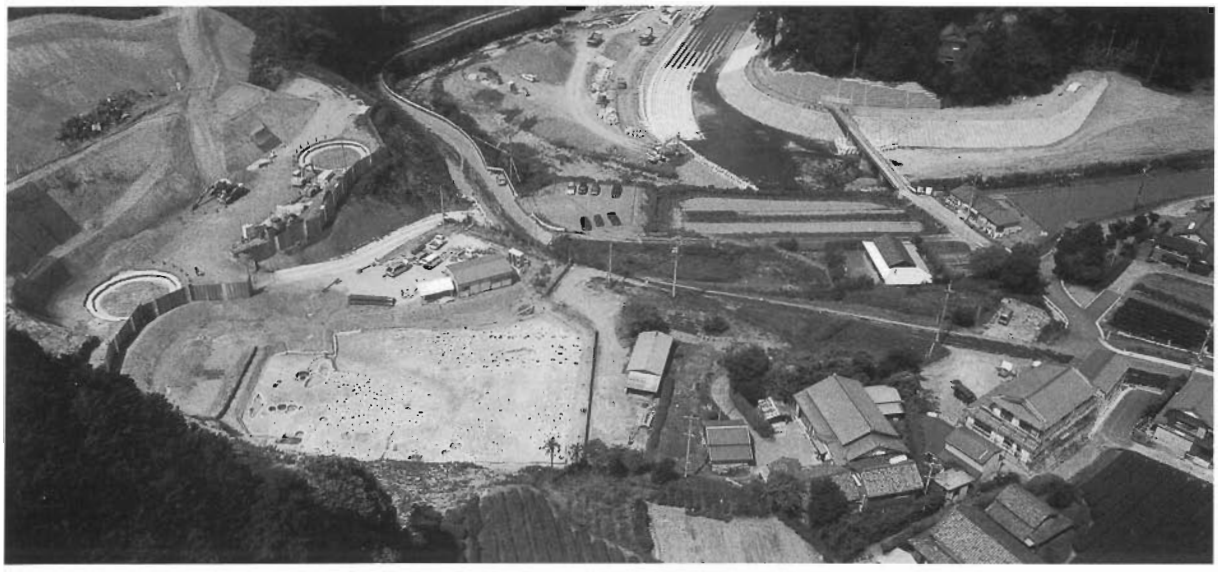
本遺跡の現地調査および本報告の作成にあたっては、掛川市教育委員会の方々、とくに、松本一男氏には有益な御指導・御助言をいただきました。また、河合　修氏にも有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。

参考文献

足立順司　1991　「遺構の変遷」　『原川遺跡Ⅳ』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
1994　「消費地出土の初山焼・志戸呂焼－原川遺跡を中心に－」　『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集
1996　「町屋の構造と階層」　『水井遺跡・清水遺跡』　静岡県埋蔵文化財調査研究所
石野武文　1994　『原泉地区史跡めぐり－武田勢の名残りのあとを尋ねる－』
江戸遺跡研究会　2001　『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房
小野正敏（編集代表）　2001　『図解・日本の中世遺跡』　東京大学出版会
掛川市教育委員会　1984a　『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』
1984b　『掛川市遺跡分布調査報告Ⅱ』
掛川市史編さん委員会　1984　『掛川市史』中巻
1997　『掛川市史』上巻
2000　『掛川市史』資料編　古代・中世
金谷町教育委員会　1991　『静岡県金谷町　上志戸呂古窯跡発掘調査報告』
菊川町教育委員会　2000　『横地城跡　総合調査報告書　資料編』
木村弘之　1997　「中世墓の種類と変遷」　『静岡県における中世墓』　静岡県考古学会
静岡県教育委員会　1989　『静岡県文化財地図Ⅱ－焼津市以西－』
静岡県考古学会　1997　『静岡県における中世墓』
1998　『縄文時代中期前半の東海系土器群－北屋敷式土器の成立と展開－』第５回東海考古学フォーラム
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991　『原川遺跡Ⅳ』
1995　『牛岡遺跡Ⅰ・頭地遺跡』
1996　『水井遺跡・清水遺跡』
鈴木正弘　1980　「原野谷川上流の古地名について」　『掛川市の古地名考』　掛川市教育委員会
中世土器研究会　1995　『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社
藤澤典彦　1997　「中世墓地の成立と終焉」　『静岡県における中世墓』　静岡県考古学会
藤澤良祐　1996　「中世瀬戸窯の動態」　『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界－その生産と流通－』　瀬戸市埋蔵文化財センター
2001　「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通－研究の現状と課題－」　『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品－東アジア的視野から－』資料集　瀬戸市埋蔵文化財センター
山崎克巳　1997　「静岡県西部における縄文時代中期後半土器群の様相」　『静岡県史研究』第13号　静岡県

写真図版

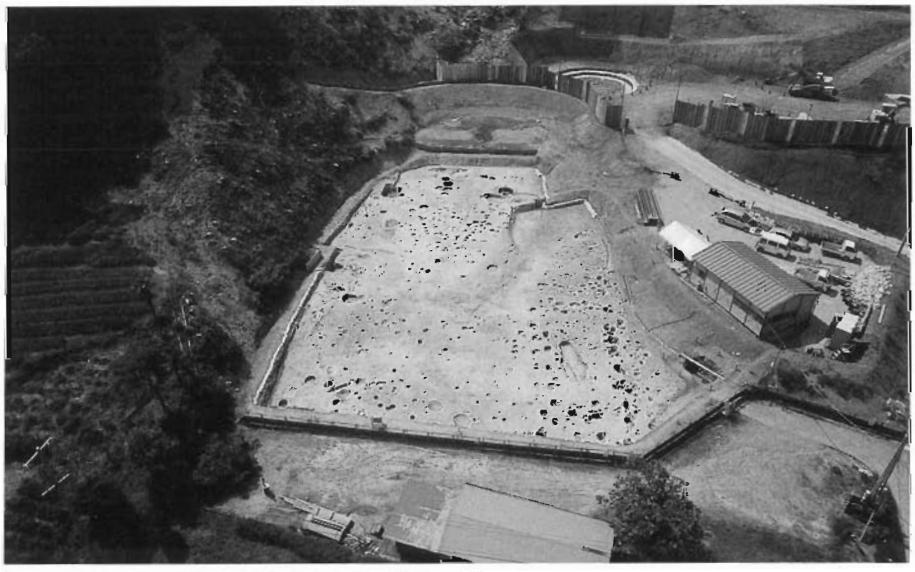
1　遺跡から孕石方面を望む



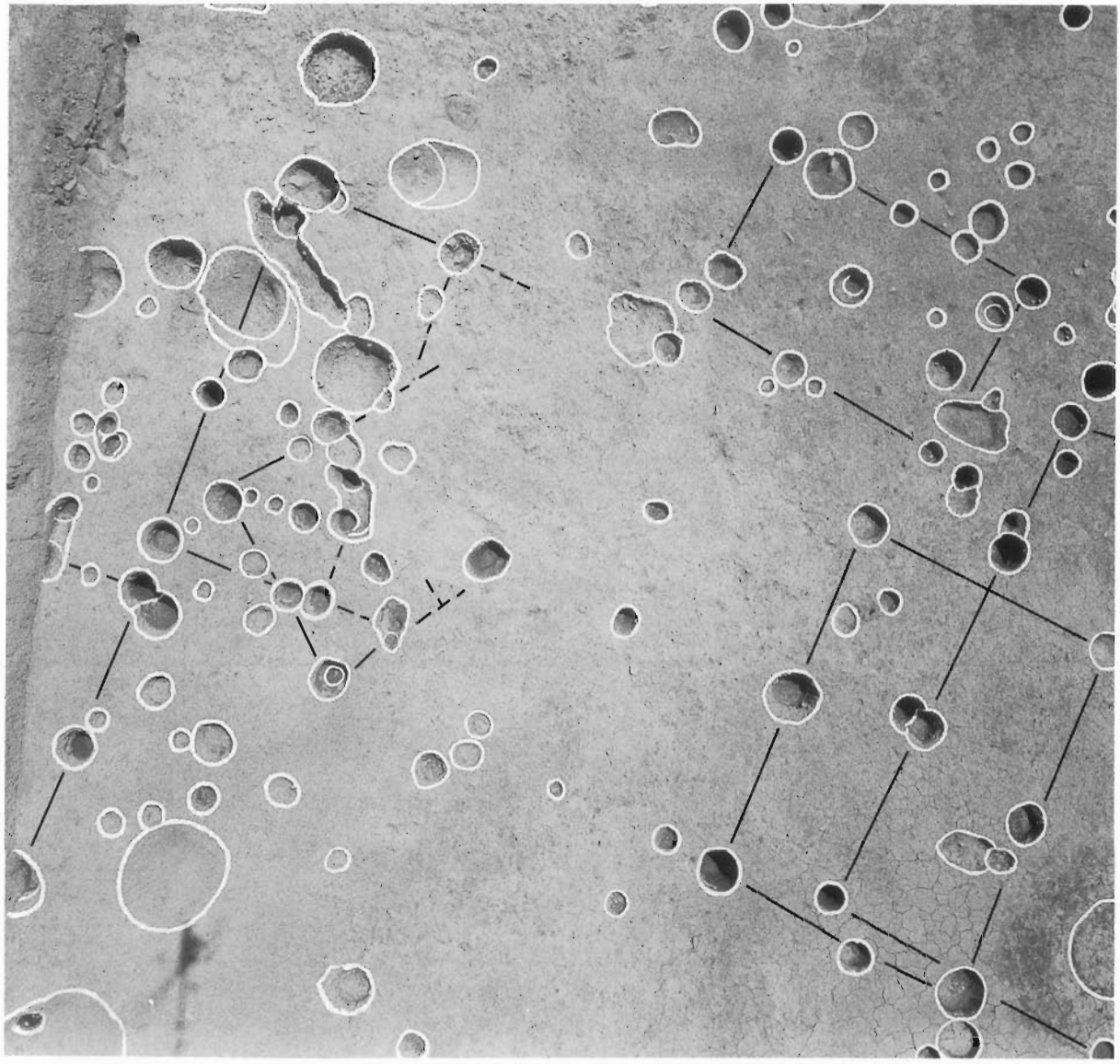
2　東からの遠景

図版２　宮ノ沢遺跡

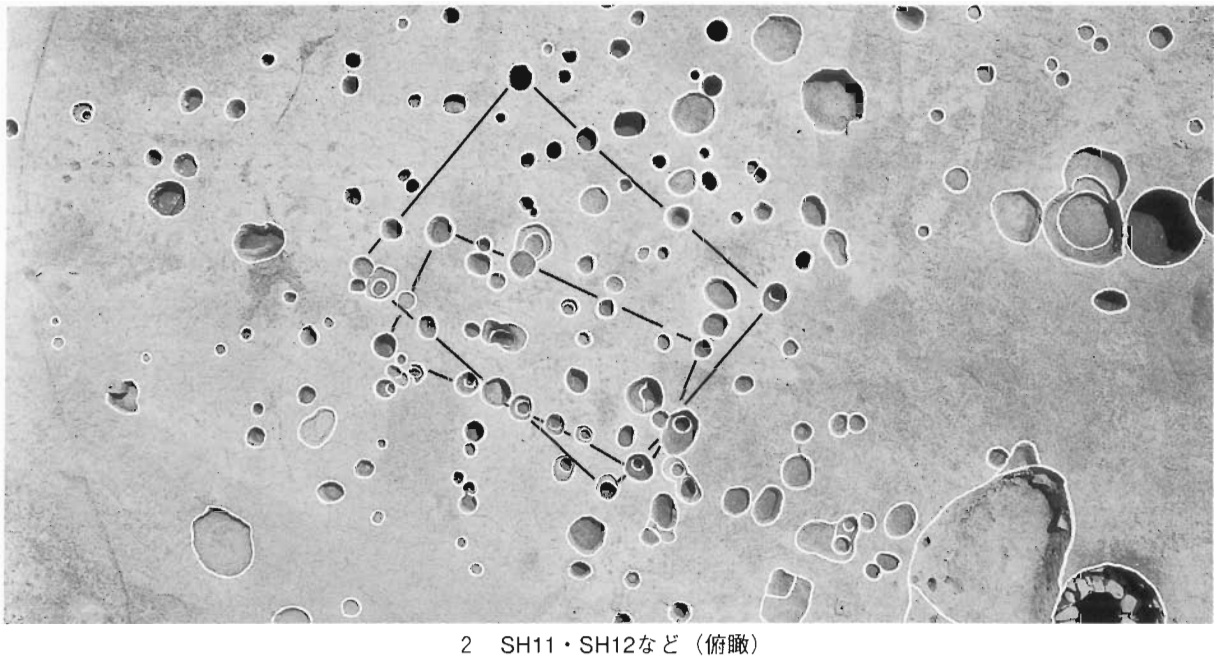
1　調査区全景（俯瞰）



2　調査区全景（北から）



1　SH01～SH03・SH08など（俯瞰）

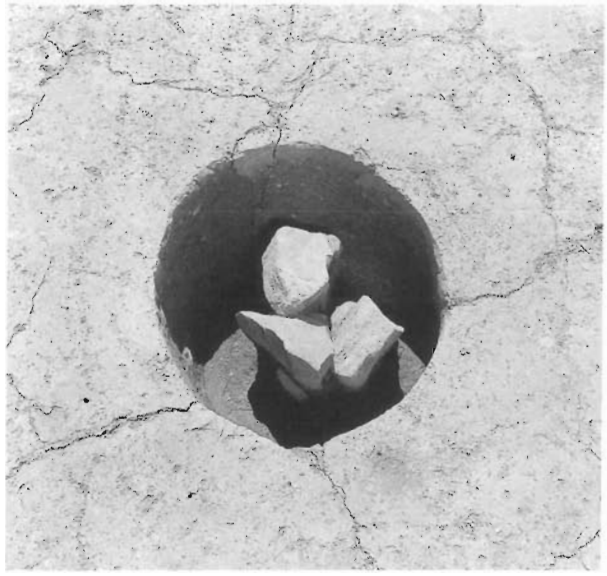


2　SH11・SH12など（俯瞰）

図版４　宮ノ沢遺跡

1　SH23～SH26など（俯瞰）

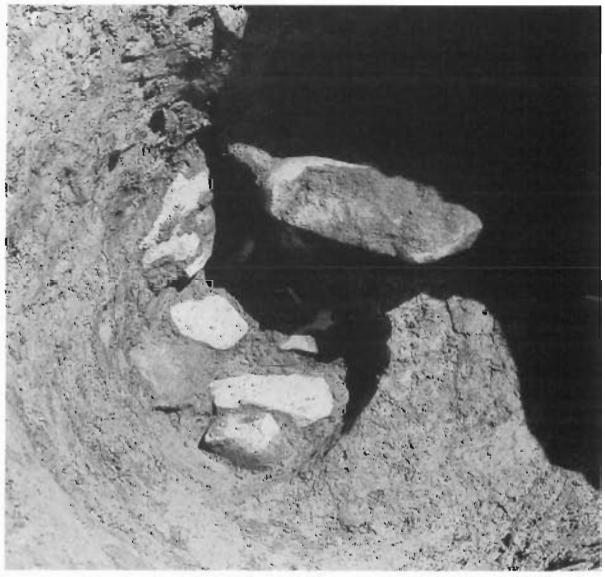
2　SH23・SH24（北から）



1　SH11内SP251（北東から）

2　SH23内SP435（西から）

3　SH23内SP433（東から）



4　SH23内SP442（北西から）

5　SH24内SP486（北から）

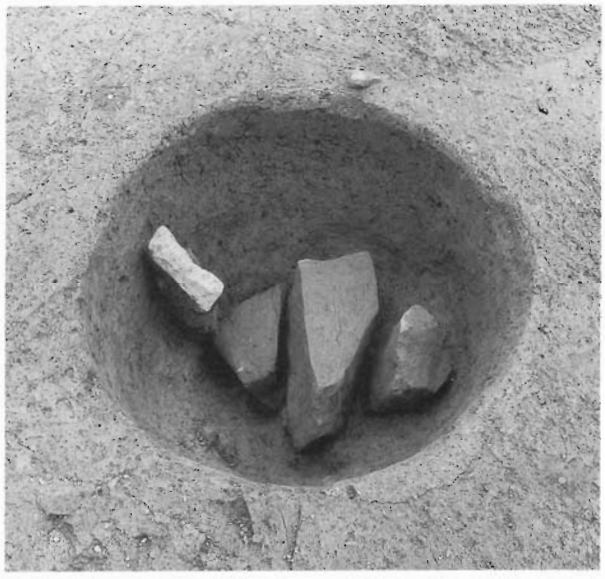
6　SH24内SP494（南から）

図版6　宮ノ沢遺跡

1　SP143（西から）

2　SP168（東から）

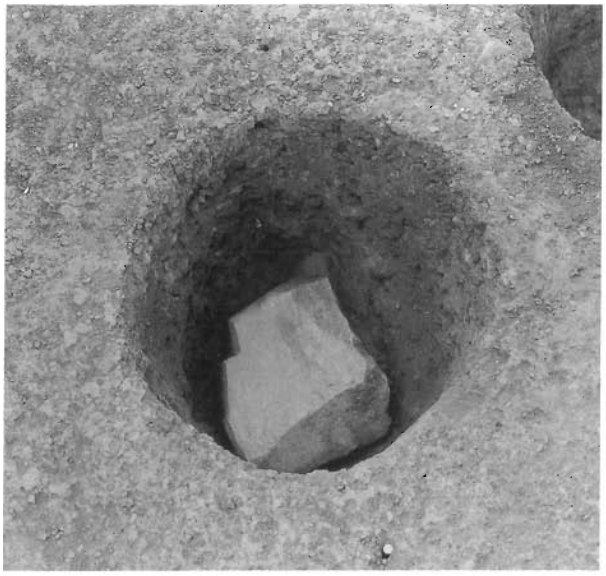
3　SP370（東から）



4　SP387（北から）

5　SP448（東から）

6　SP501（東から）



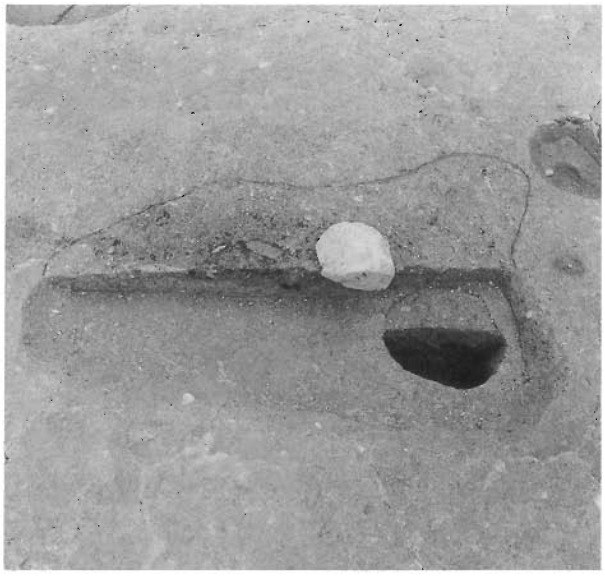
1　SP698（南から）

2　SP403（西から）

3　SF12（南から）

4　SP163・SP164半裁状況（南から）

5　SF08（西から）



6　SF53半裁状況（西から）

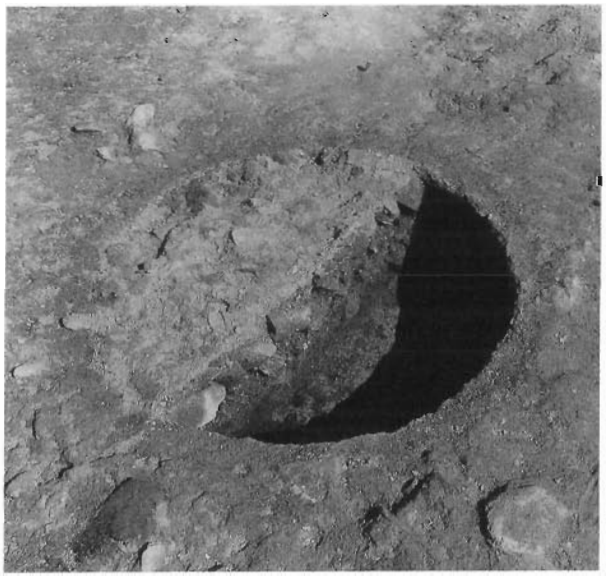
図版８　宮ノ沢遺跡

1　SF01～SF05発見状況（東から）

2　SF01～SF05完掘状況（東から）

1　SF01半裁状況（西から）

2　SF15検出状況（北から）



3　SF24半裁状況（西から）

4　SF30（北から）

5　SD04（北から）

6　SD05（南から）

図版10　宮ノ沢遺跡

1　SE01（東から）

2　SX01（南から）

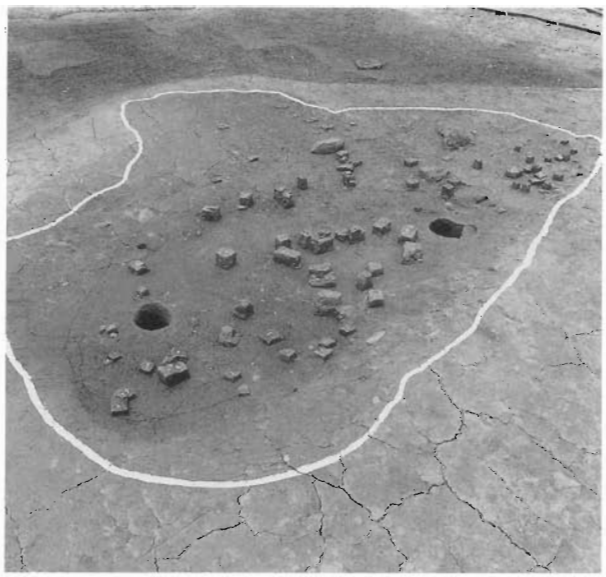
1　SE01竹筒出土状況（西から）

2　SE01の基礎（東から）

3　SX01箕出土状況（北から）

4　SX01完掘状況（東から）

5　SX02（西から）



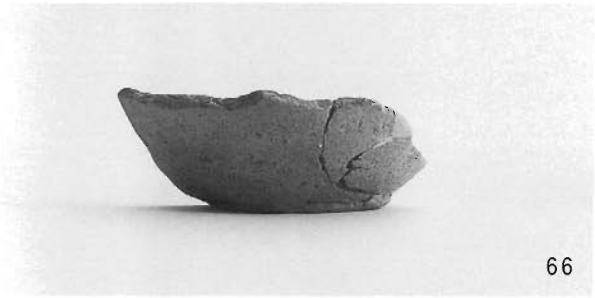
6　SX03（南から）

図版12　宮ノ沢遺跡

出土遺物１（土師器、山茶碗１）

55

56


66

21

38

40

44

70

71

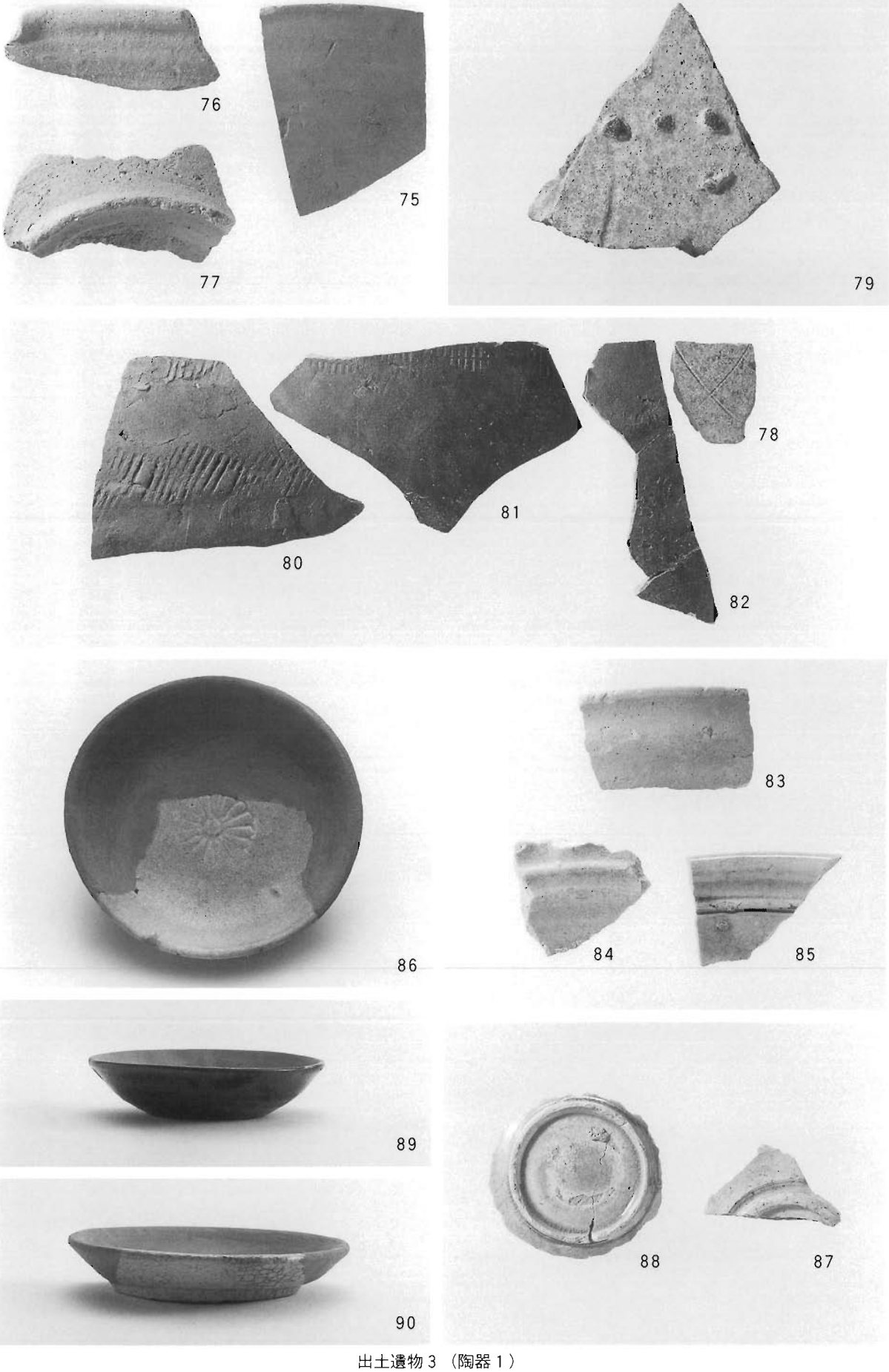
72

73

74

出土遺物２（山茶碗２）

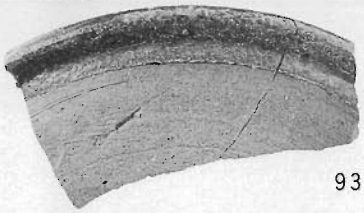
図版14　宮ノ沢遺跡



出土遺物３（陶器１）

92

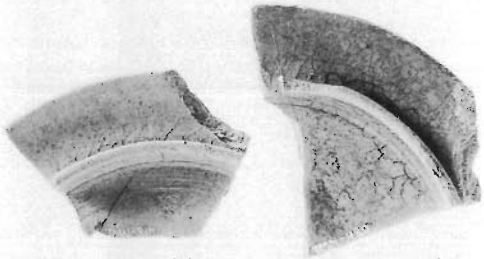
91


93

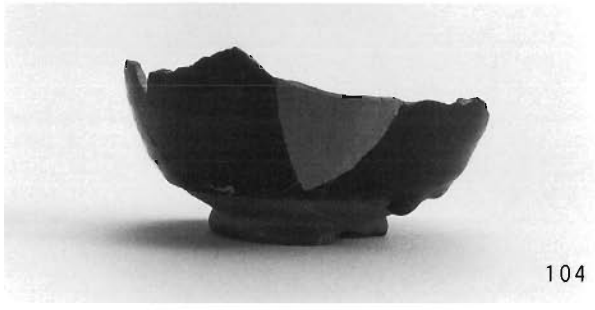
94

95

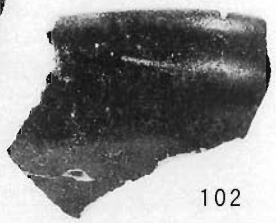
100


96

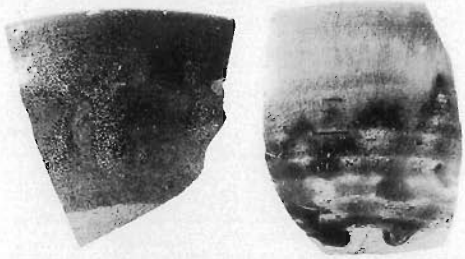
97


104

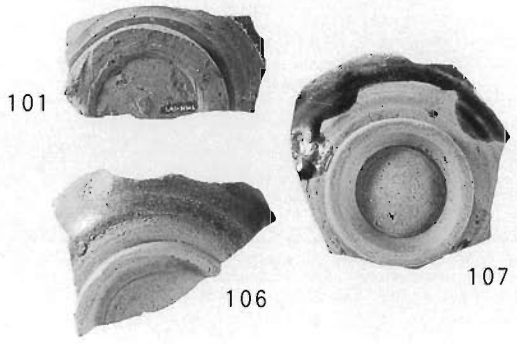
98


102

103

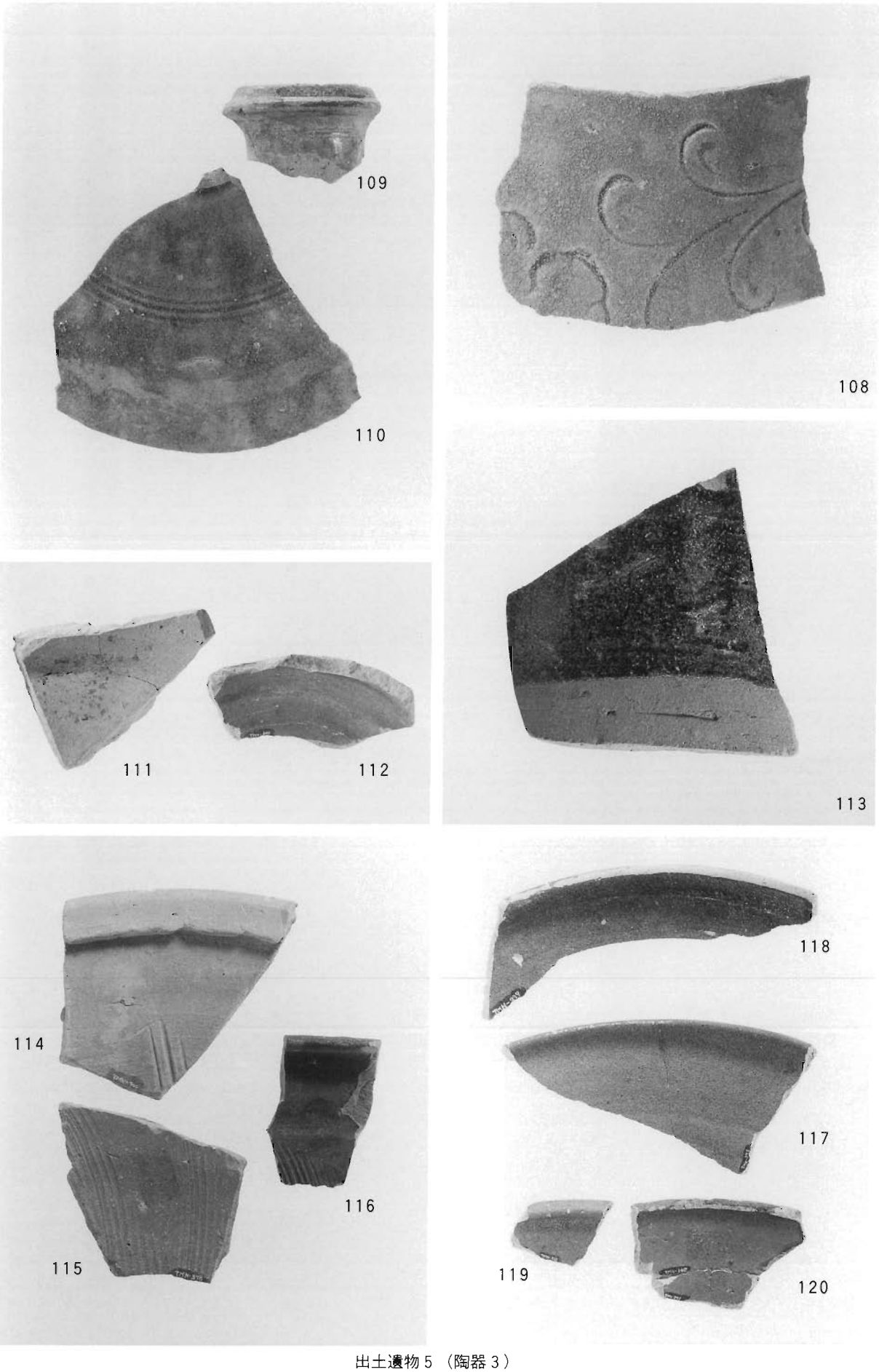

99

105

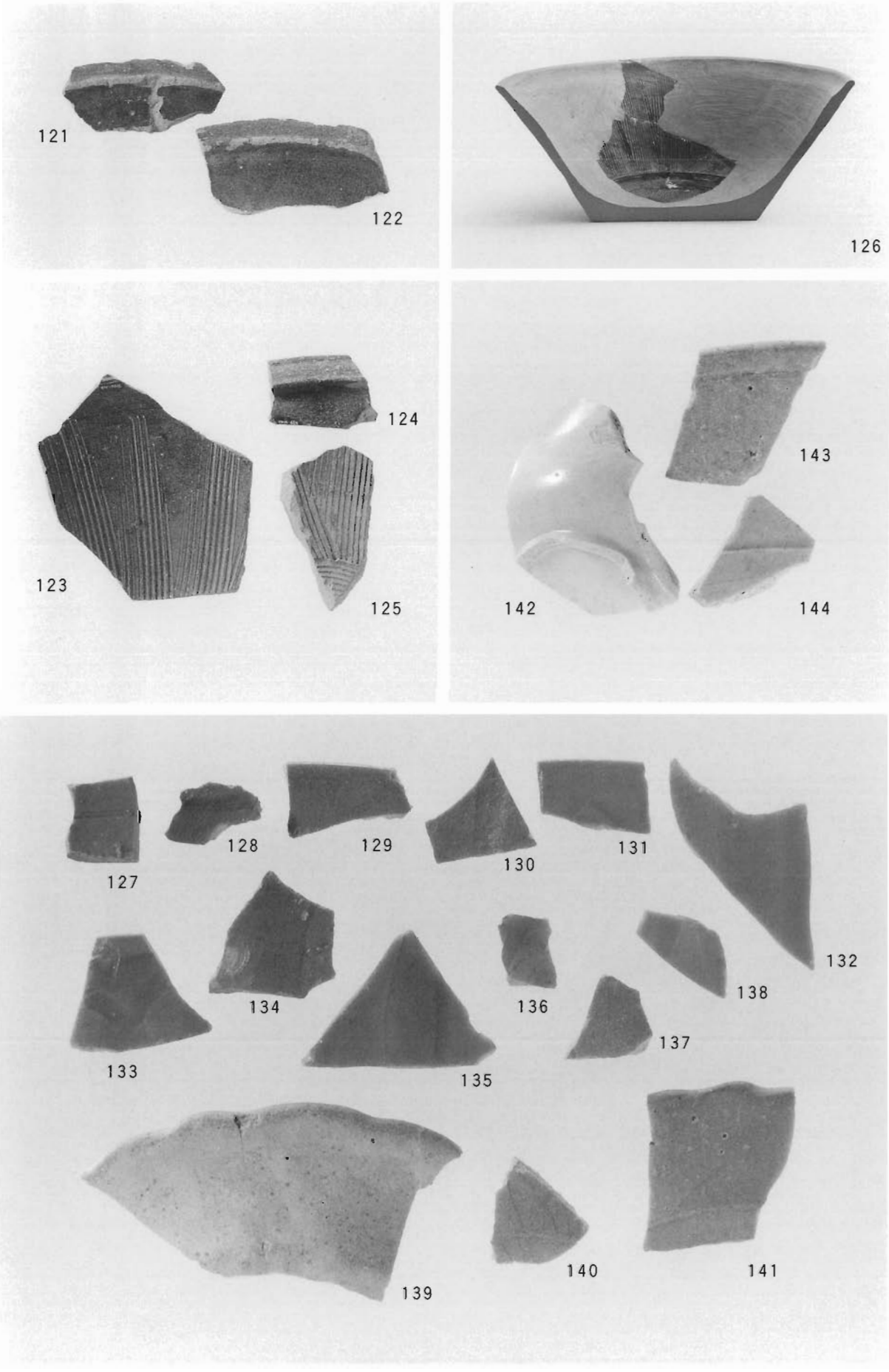

101
106
107

出土遺物４（陶器２）

図版16　宮ノ沢遺跡

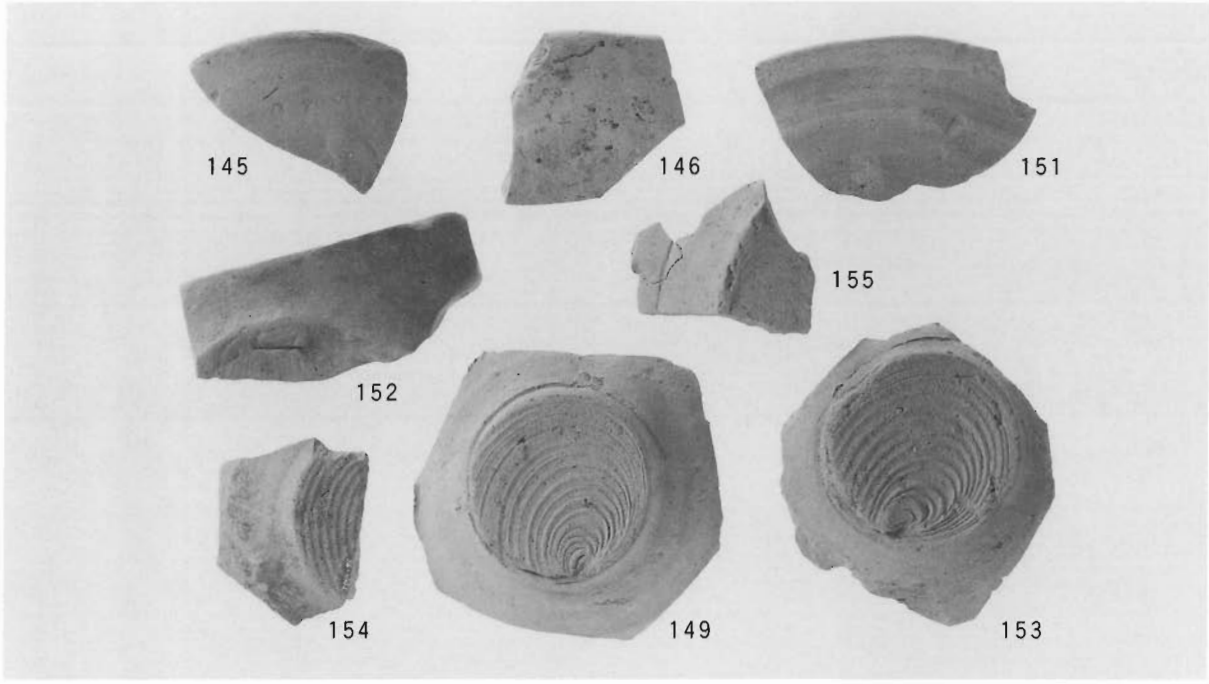


出土遺物５（陶器３）

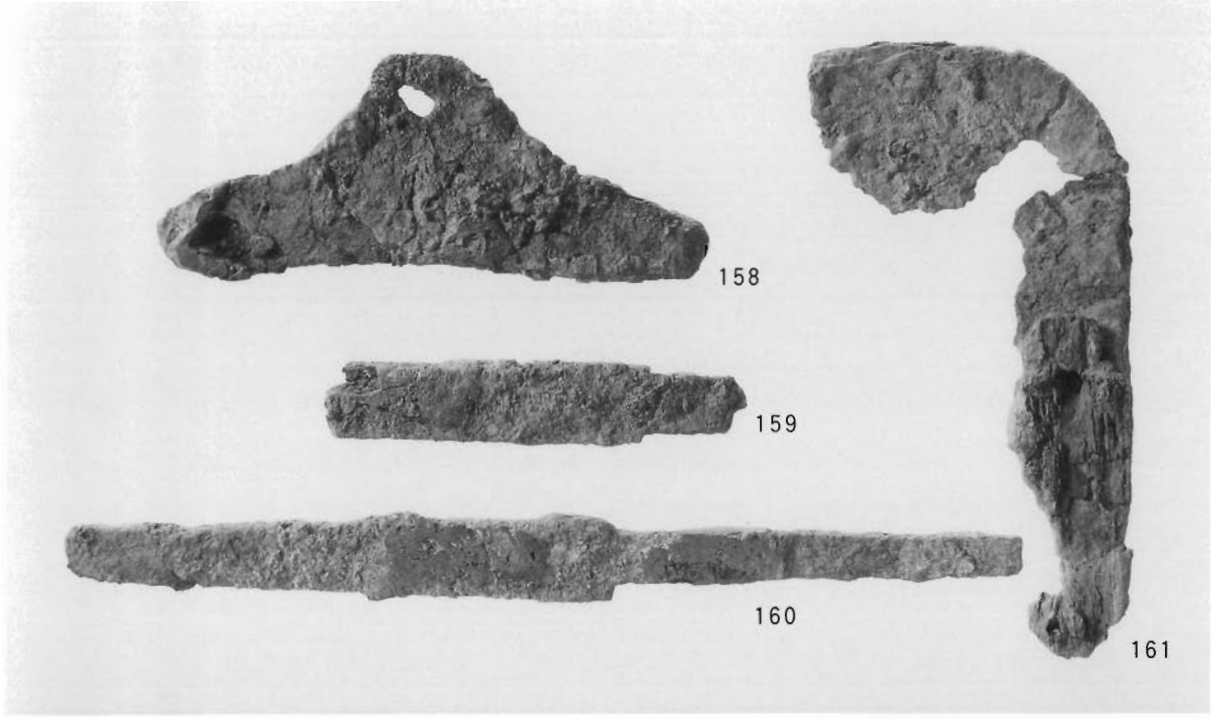

121
122
126
123
124
125
142
143
144
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141

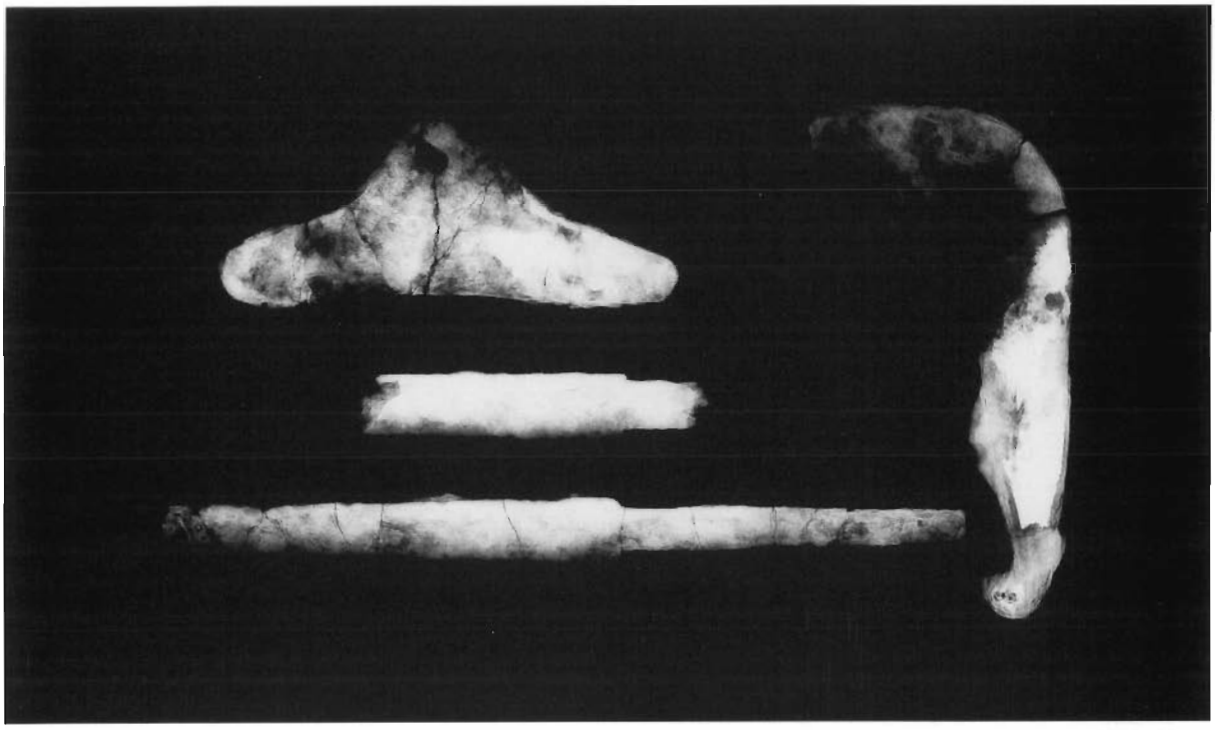
出土遺物６（陶器４、磁器）

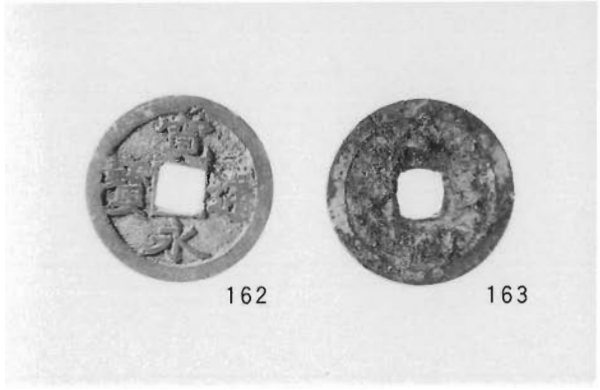
図版18　宮ノ沢遺跡

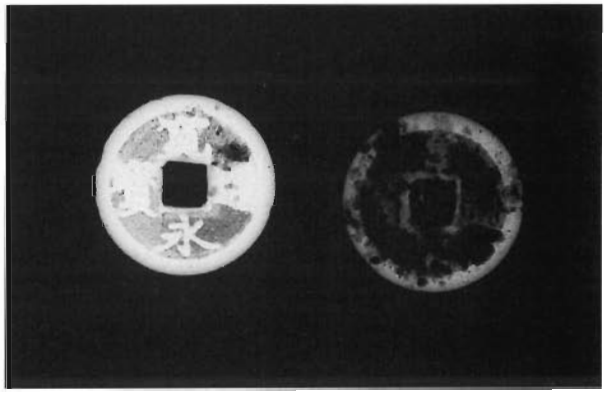


出土遺物７（カワラケ、柄杓）







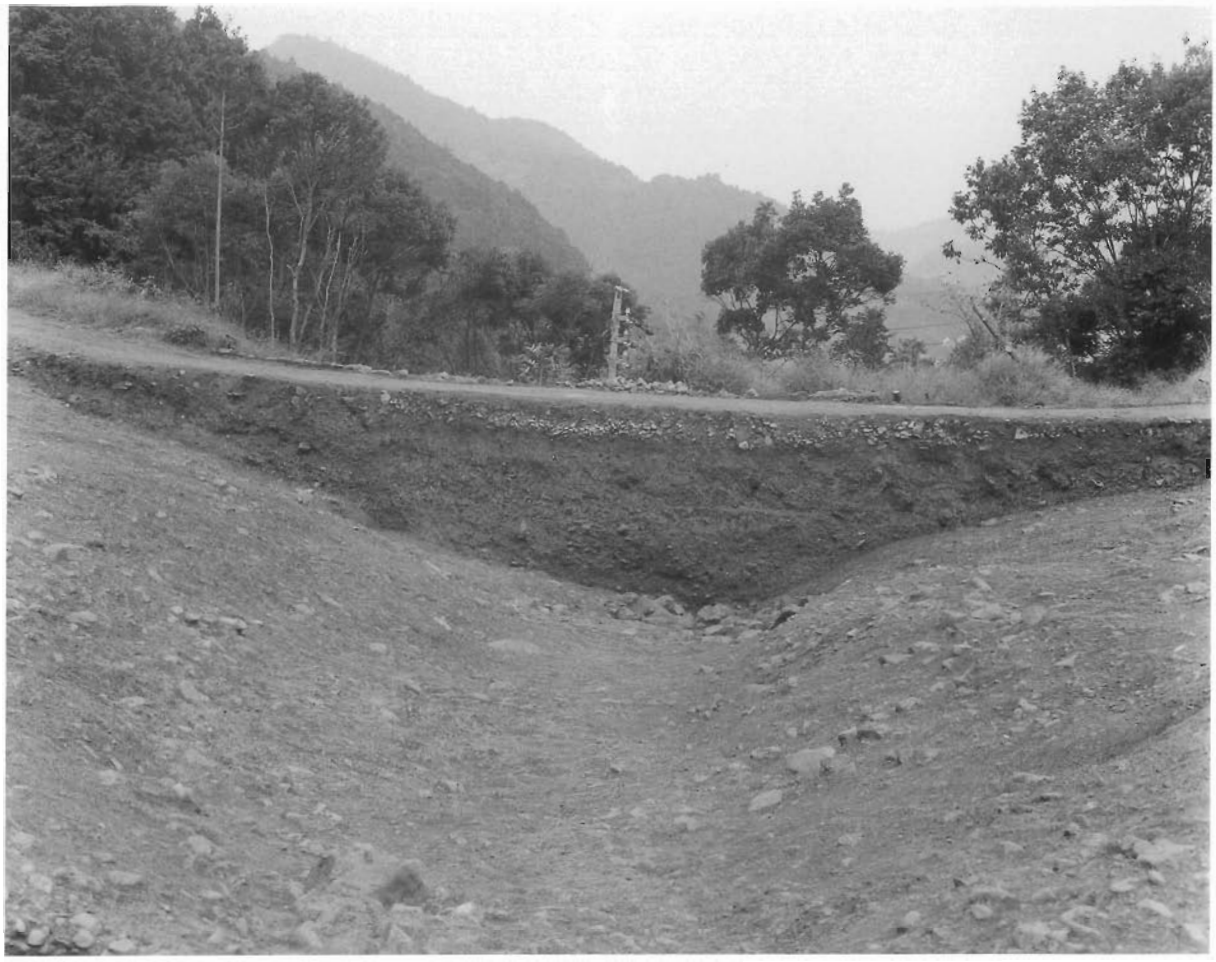


出土遺物８（金属製品）

図版20　大和田遺跡

1　東からの遠景

2　調査区全景（東から）



1　調査区西壁の断面（東から）

2　SF01～SF03（北西から）

3　SF01（西から）

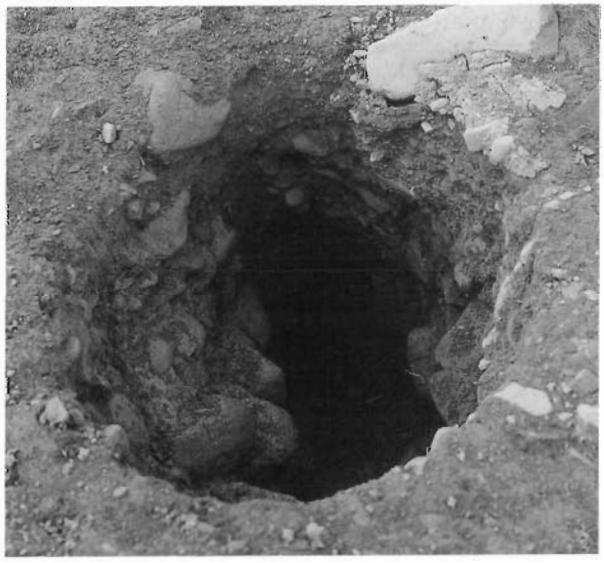
4　SF04（北から）

5　SF05（東から）

図版22　大和田遺跡

1　SF06（西から）

2　SF08（東から）



3　SF09（東から）

4　SF12（南から）

5　SF15（西から）

6　SF16（西から）

1　SF17（東から）

2　SF19（北から）

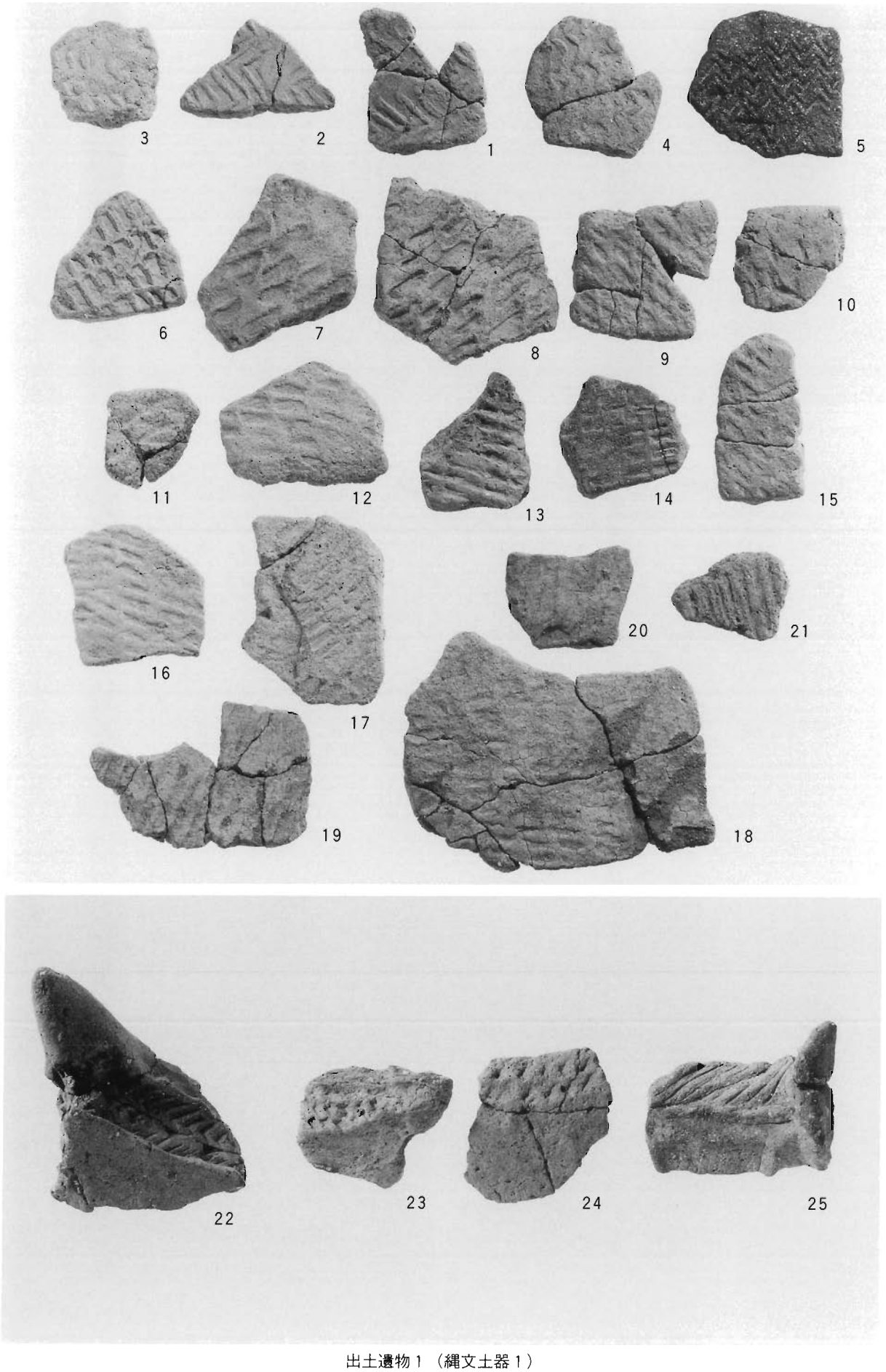
3　SF20（北から）

4　SF21（北から）

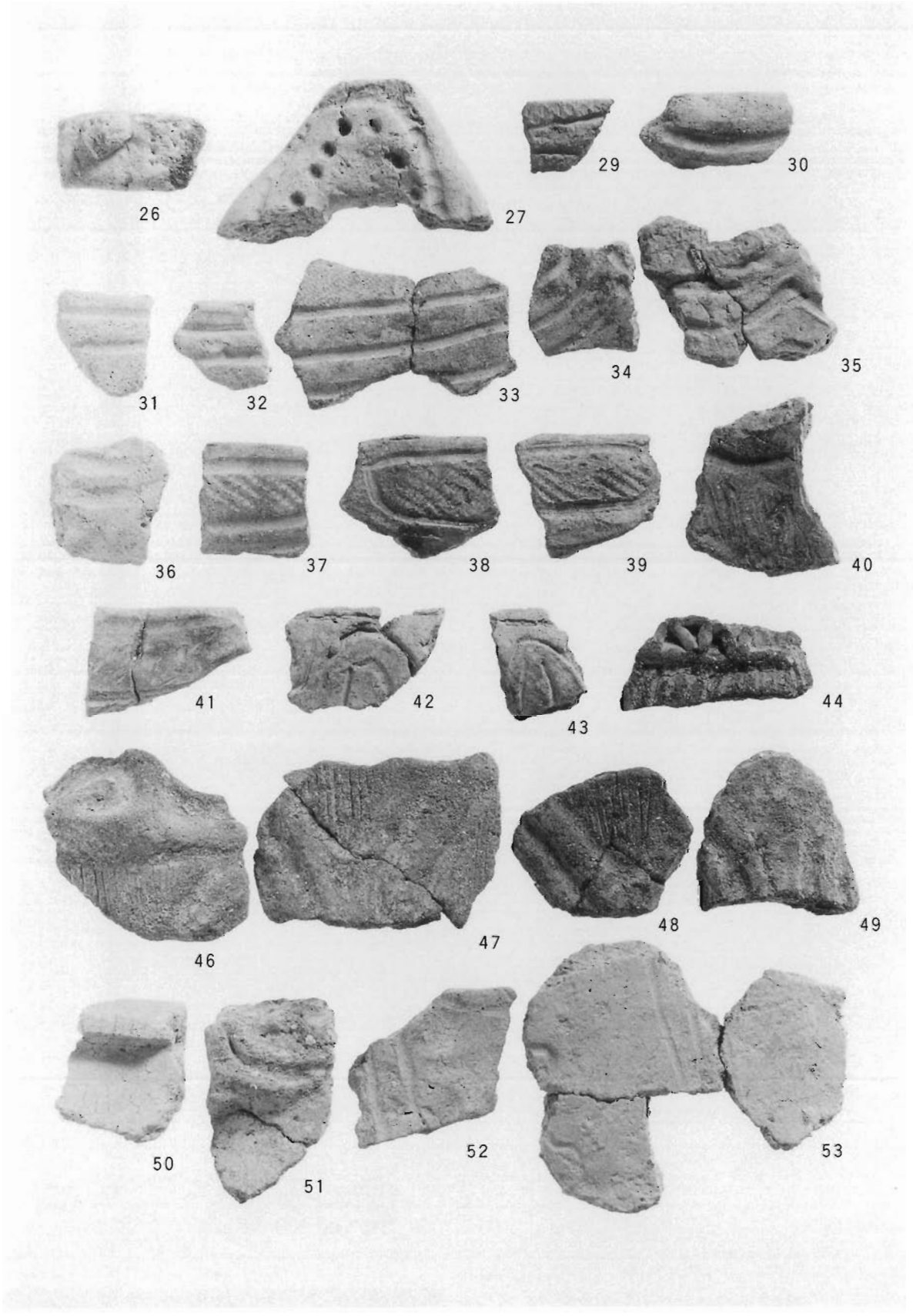
5　SF22（西から）

6　SF23（南から）

図版24　大和田遺跡

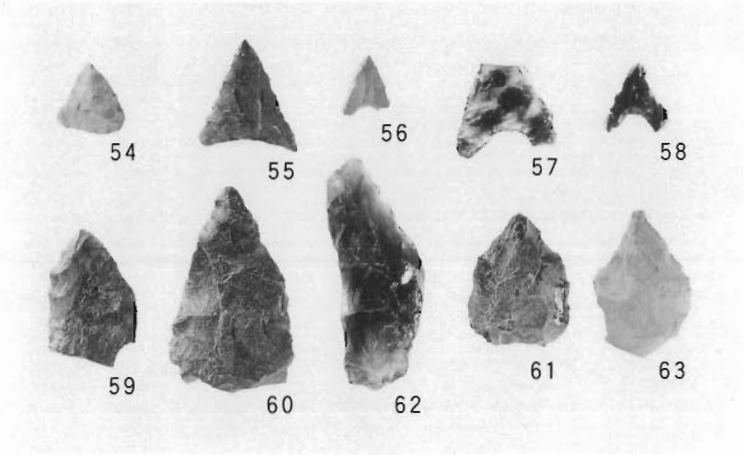


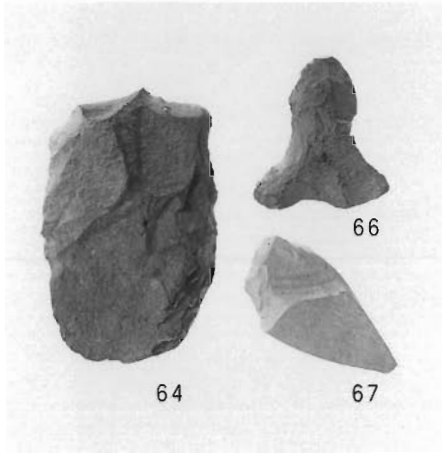
出土遺物１（縄文土器１）

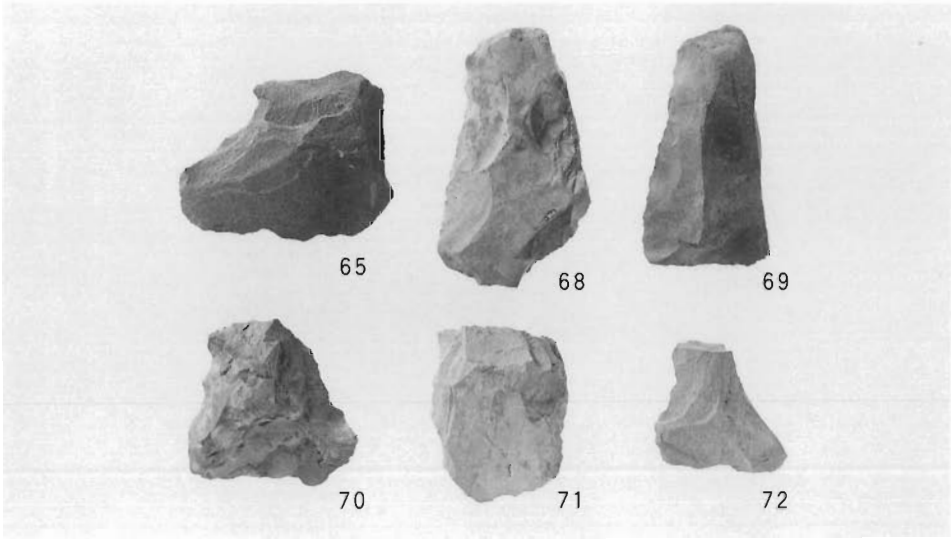

26
27
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
46
47
48
49
50
51
52
53

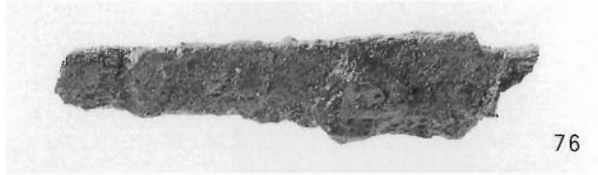
出土遺物２（縄文土器２）

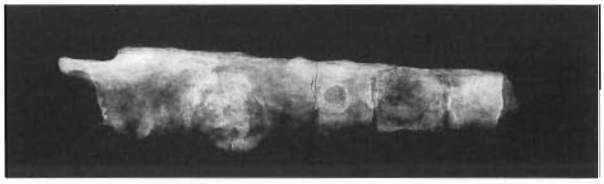
図版26　大和田遺跡











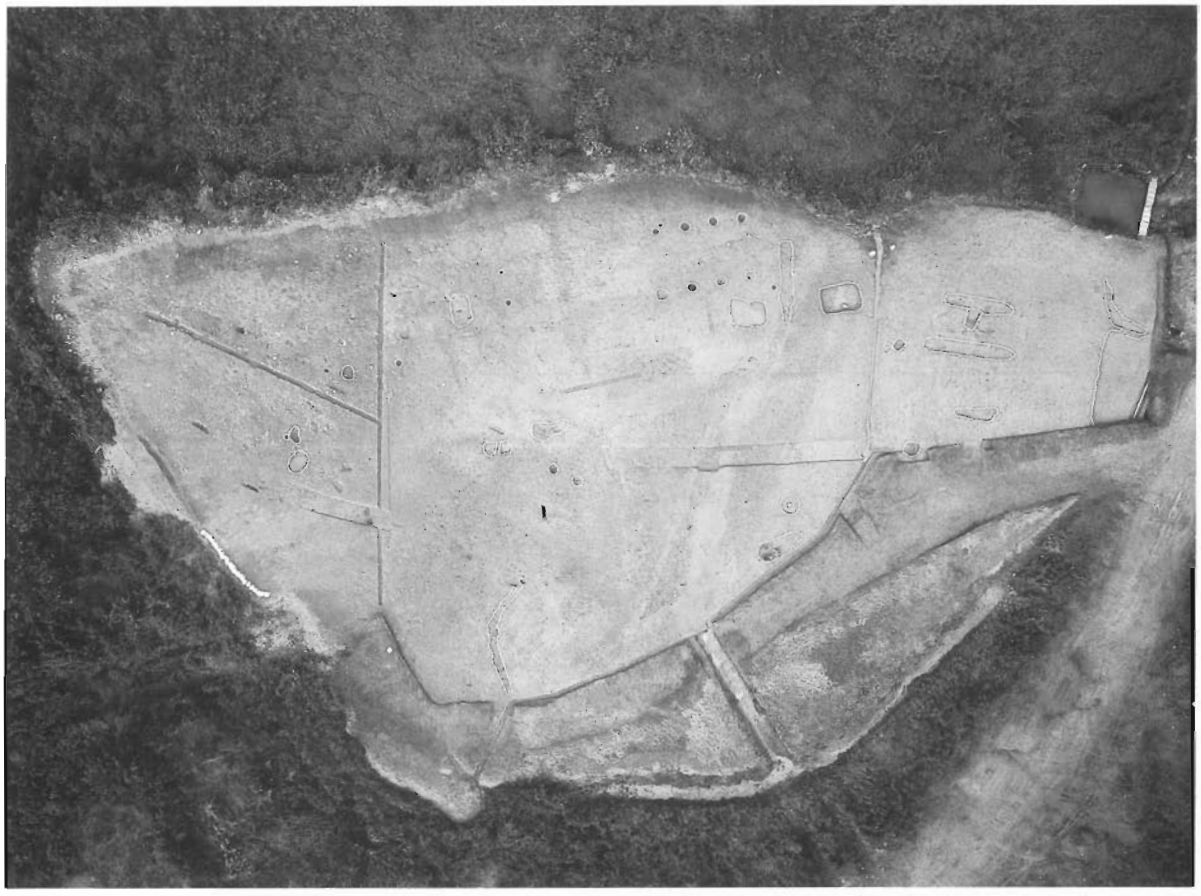
出土遺物３（縄文土器３、石器、中世の遺物）

1　西からの遠景

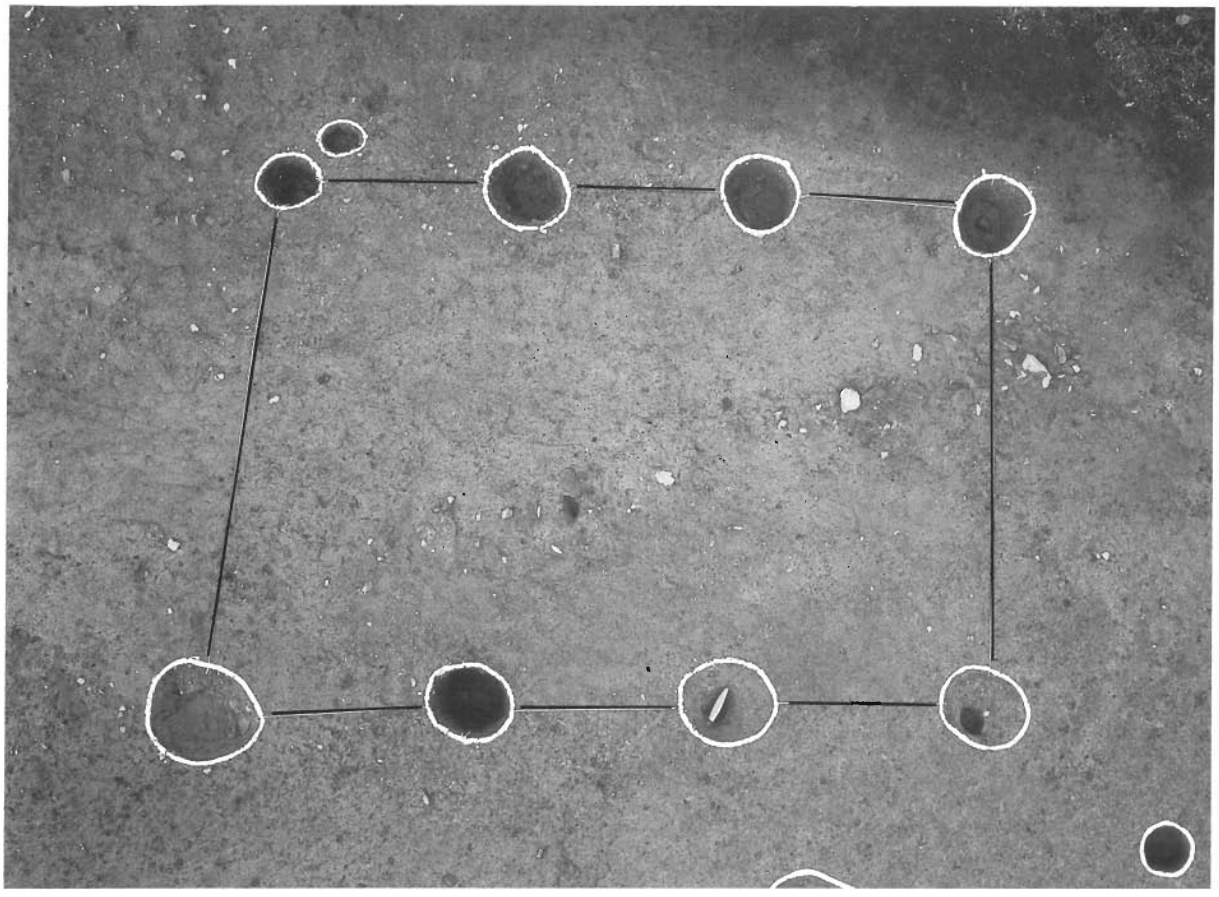
2　調査区全景（俯瞰）

図版28　平島Ⅰ遺跡

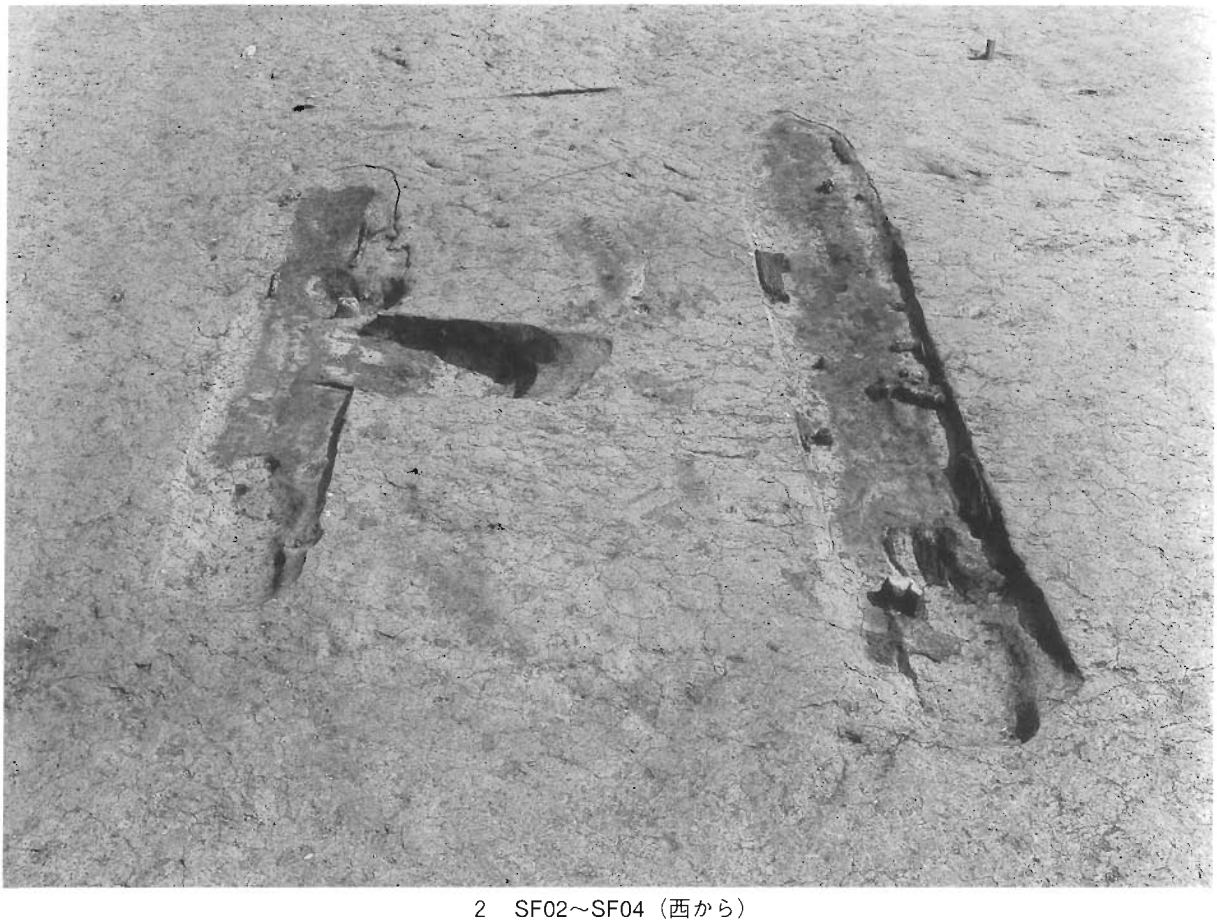
1　A区全景（東から）



2　A区全景（俯瞰）



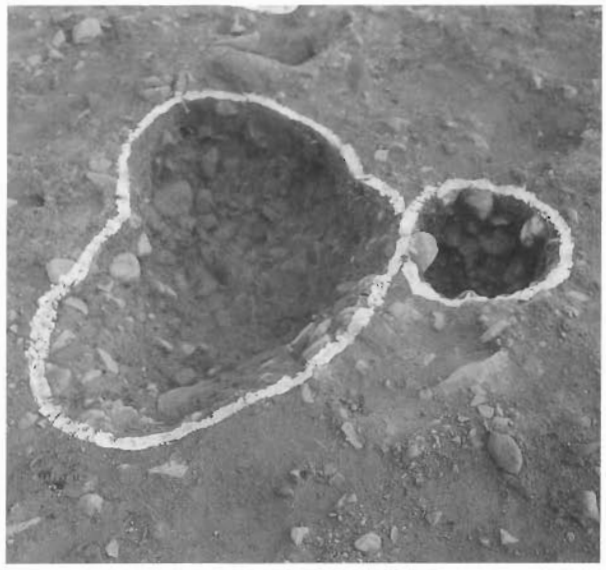
1　SH01（南から）



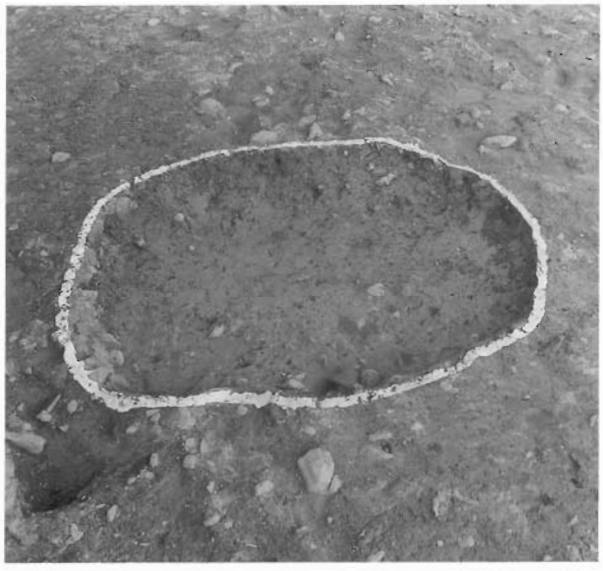
2　SF02～SF04（西から）

図版30　平島Ⅰ遺跡

1　SF01（北から）



2　SF05・SP30（北から）



3　SF06（北から）

4　SF08（西から）

5　SF07検出状況（北から）

6　SF07完掘状況（北から）

1　B・C区全景（俯瞰）

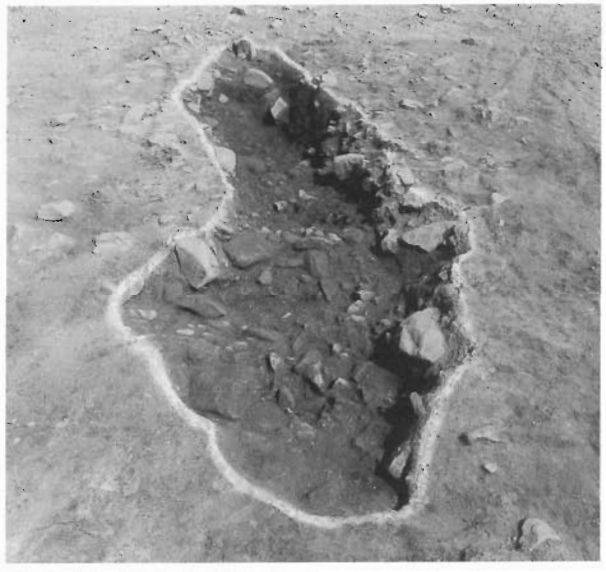
2　SF09（南から）

3　SF10（北から）

図版32　平島Ⅰ遺跡

1　SF14（東から）

2　SF15（東から）



3　SF18（南東から）

4　SF19（南から）

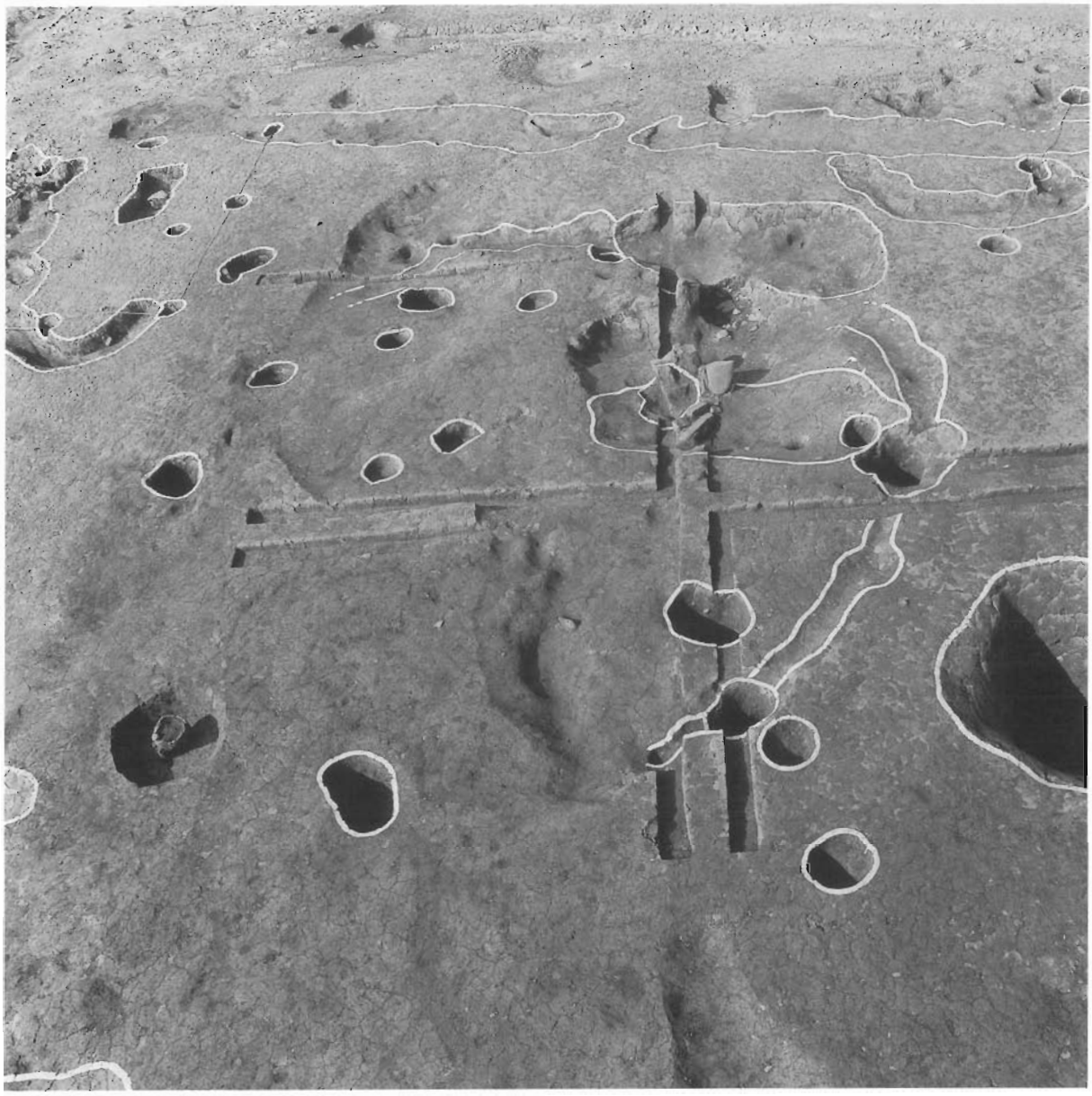
5　SF20（東から）

6　SF12（南から）

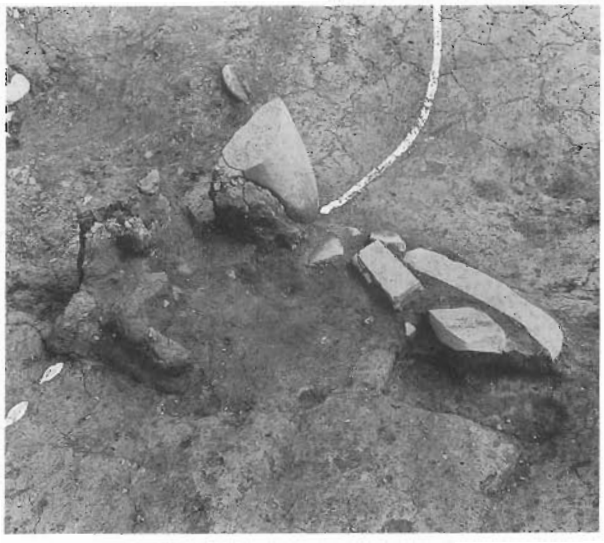
1　D区全景（俯瞰）

2　SB01周辺（俯瞰）

図版34　平島Ⅰ遺跡

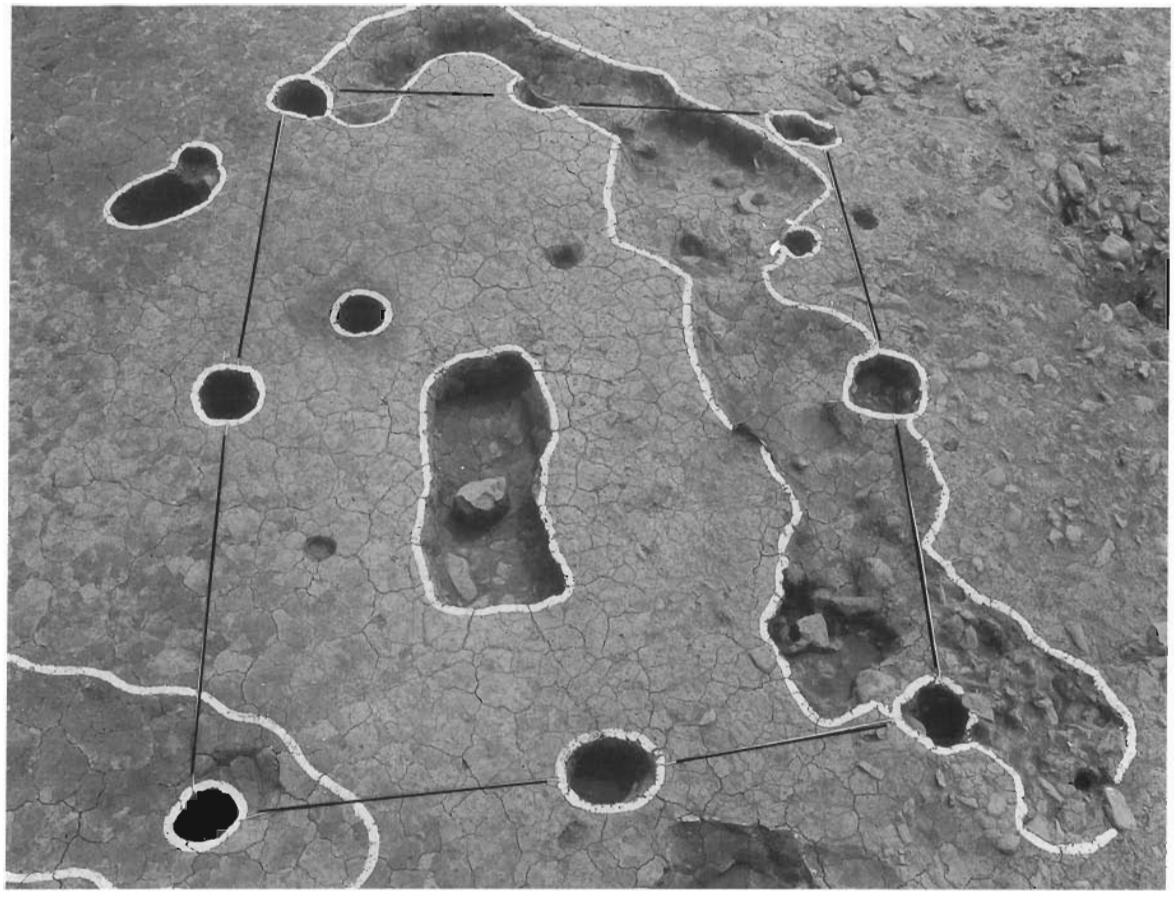


1　SB01（南から）

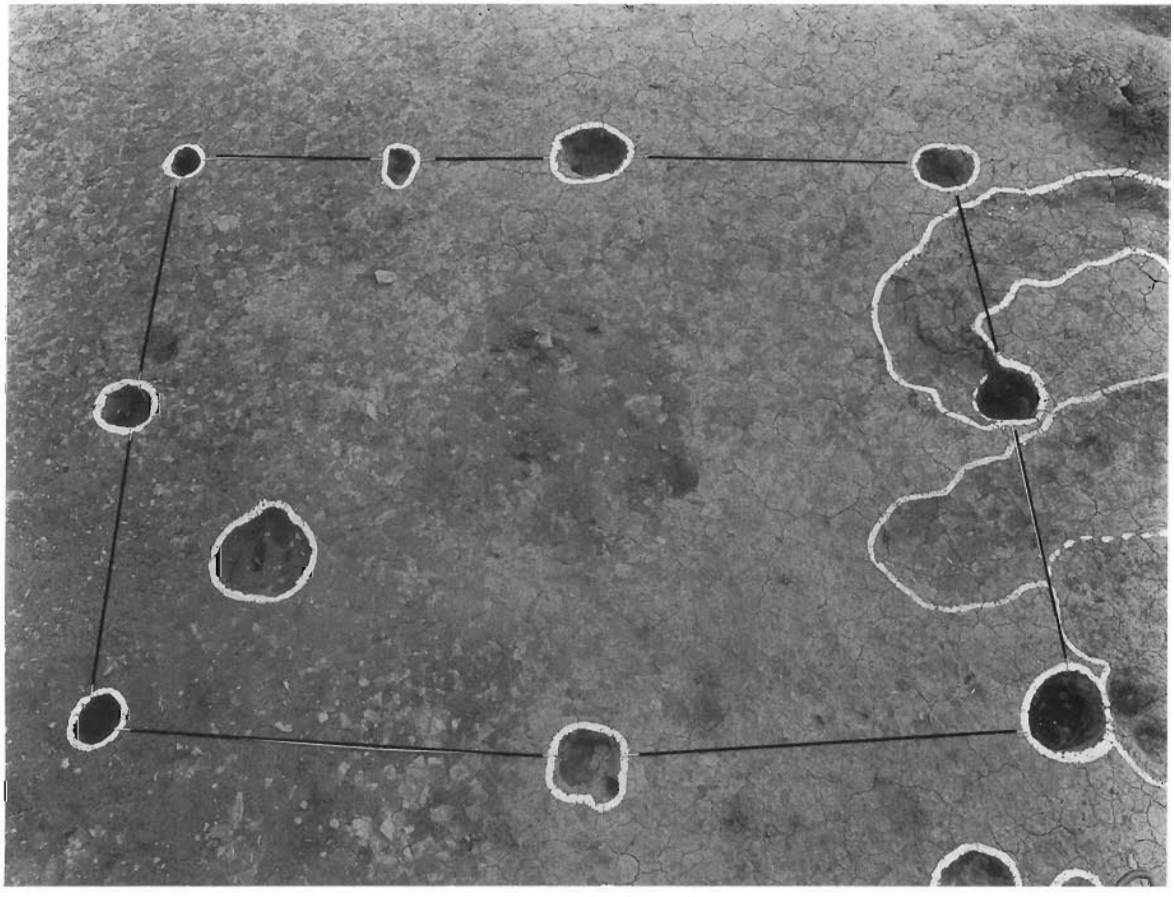


2　SB01炉（北西から）

3　SB01P16埋甕（東から）



1　SH04（北から）

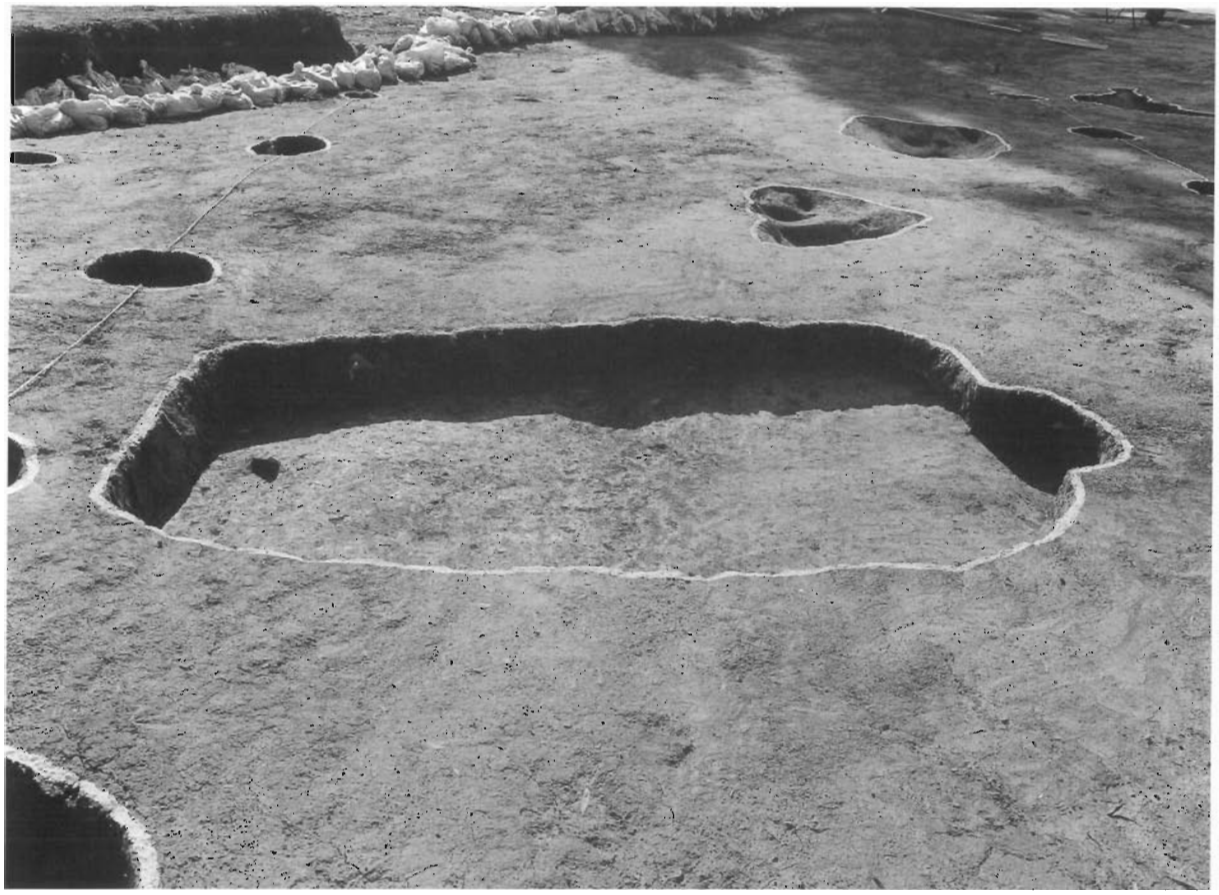


2　SH05（北東から）

図版36　平島Ⅰ遺跡

1　SH06・SH07（俯瞰）

2　SH09～SH11など（俯瞰）



1　SF22（東から）

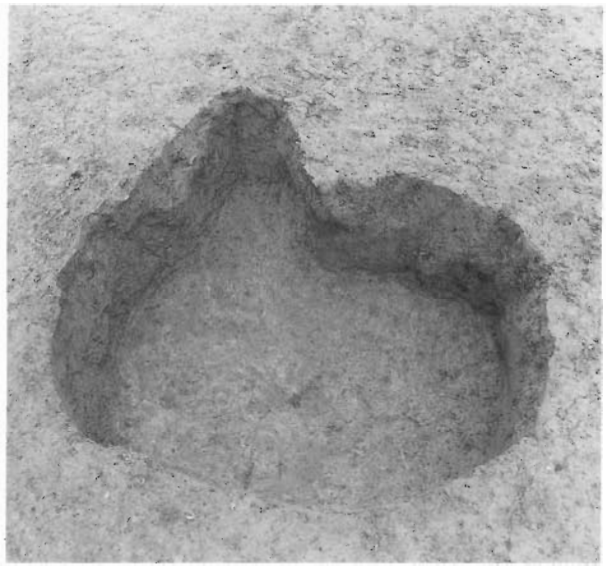
2　SF28（東から）

図版38　平島Ⅰ遺跡

1　SF25（北西から）

2　SF26（南東から）

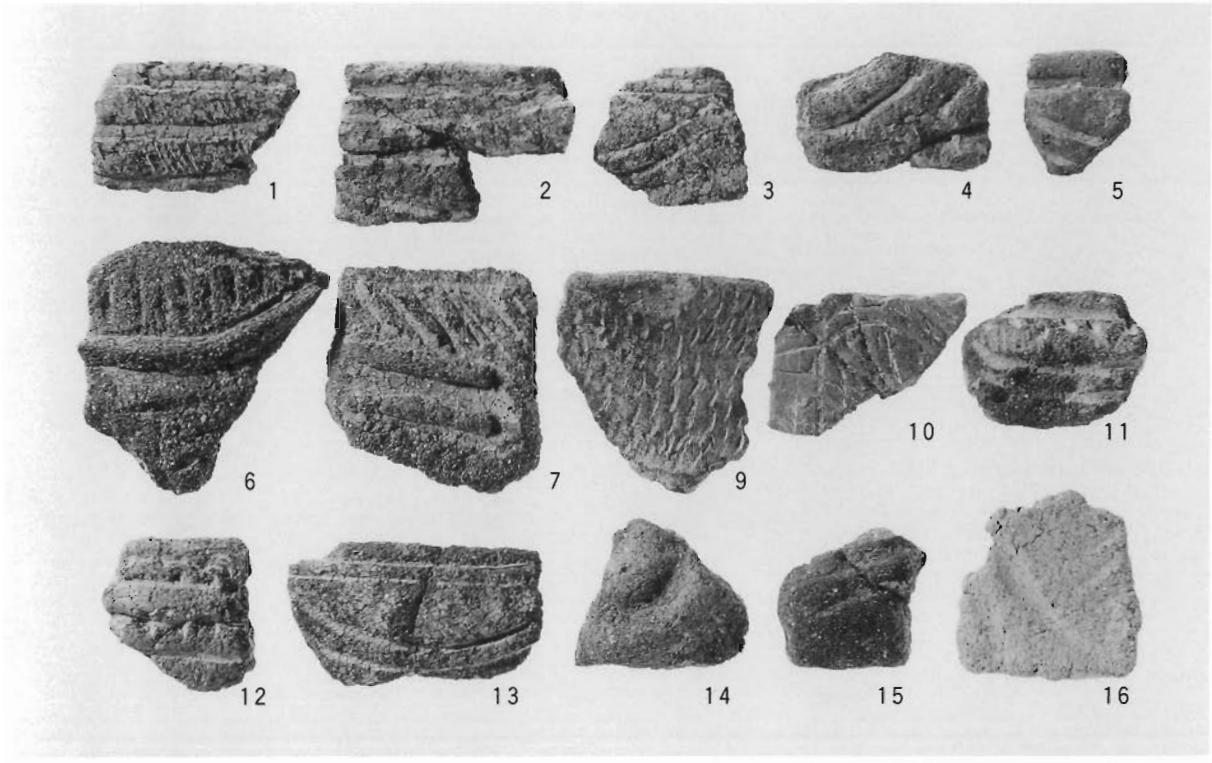
3　SF30（南東から）

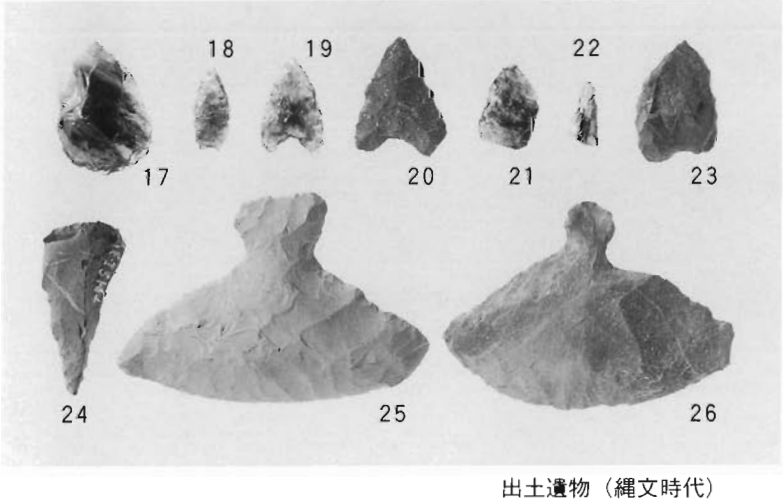


4　SF31（南西から）

5　SF27（北から）

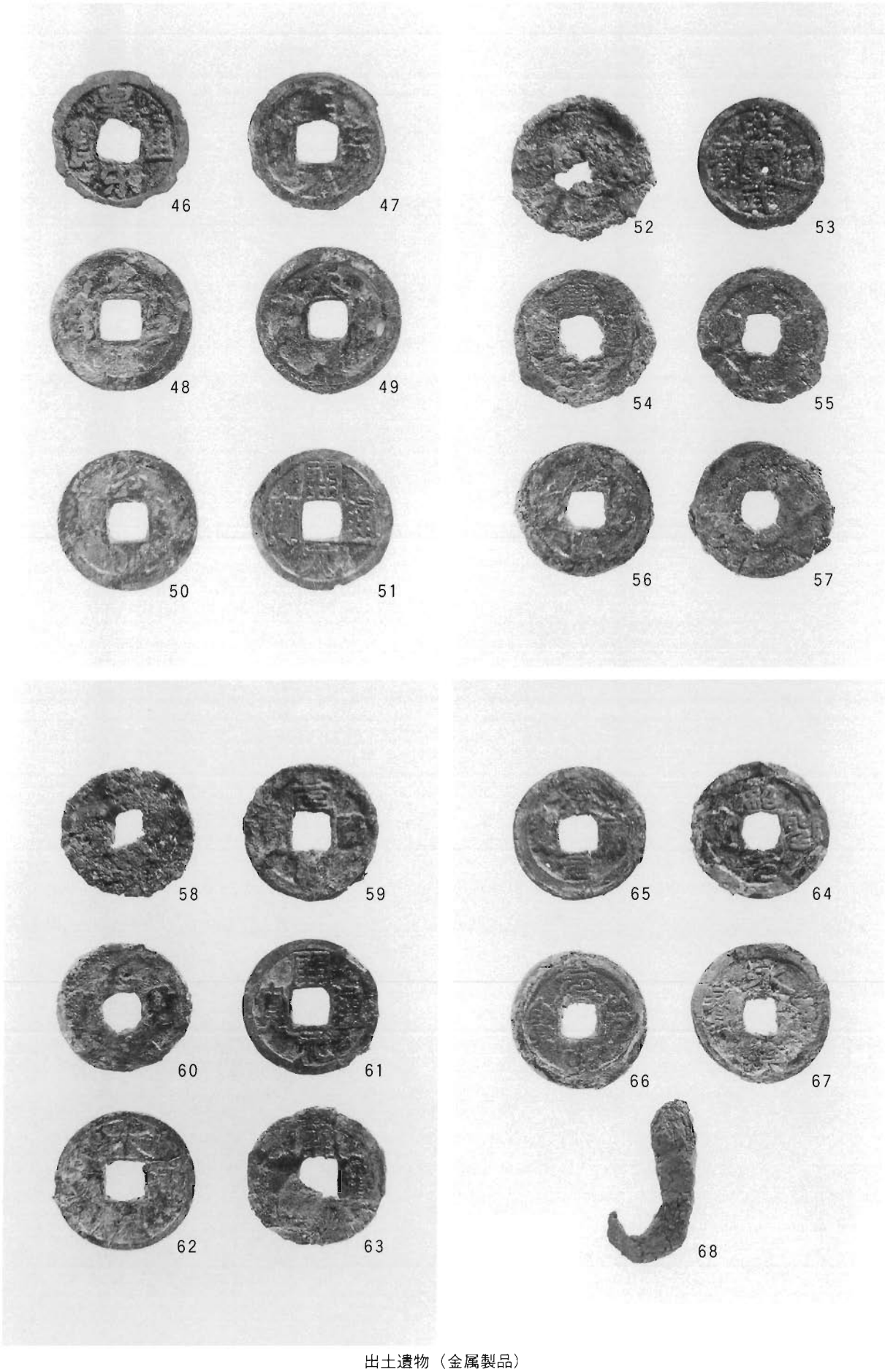
6　SD05・SD06・SX01（南から）



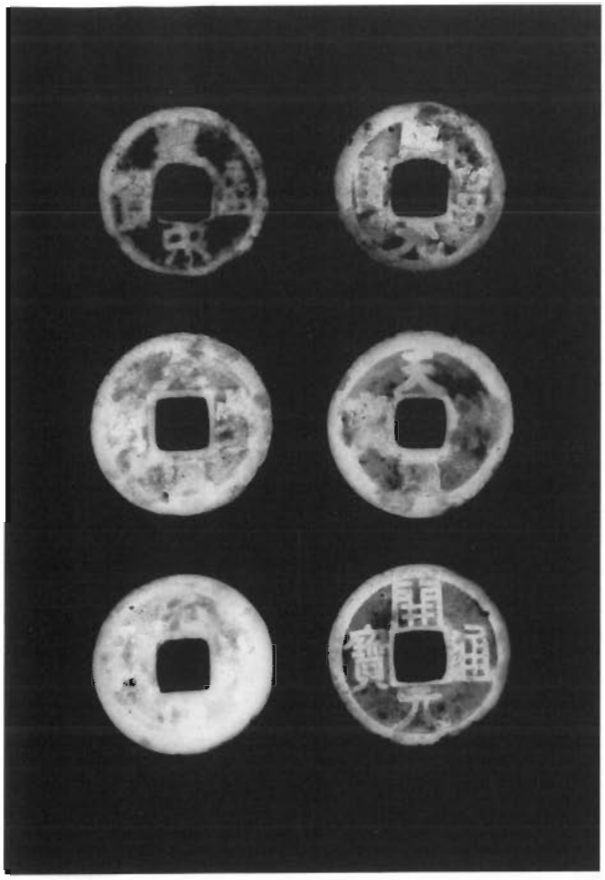


出土遺物（縄文時代）

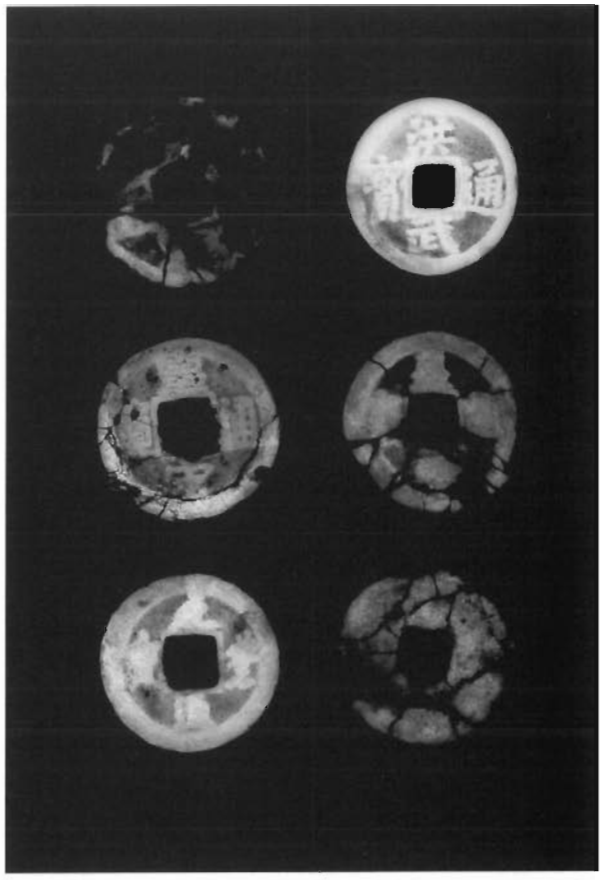
図版40　平島Ⅰ遺跡



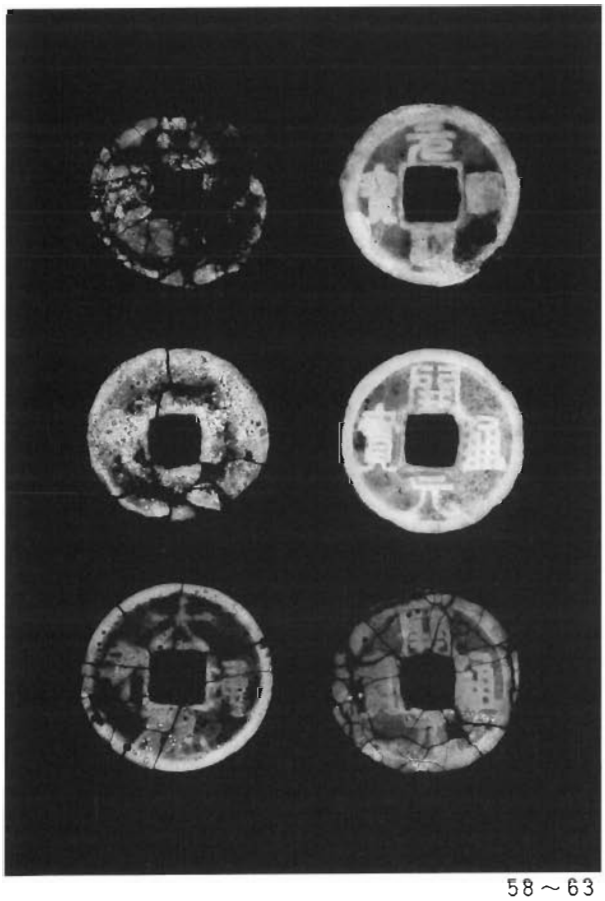
出土遺物（金属製品）



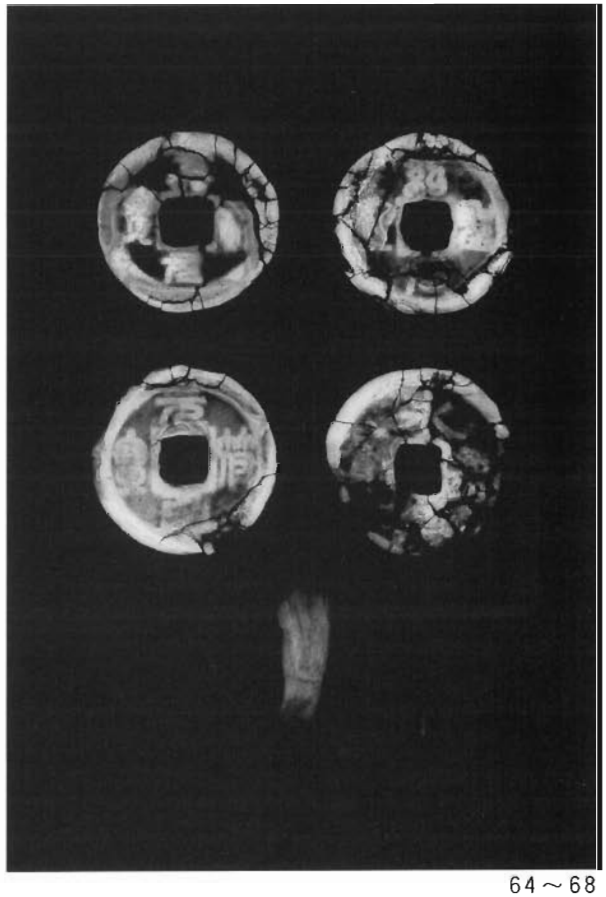
46～51



52～57



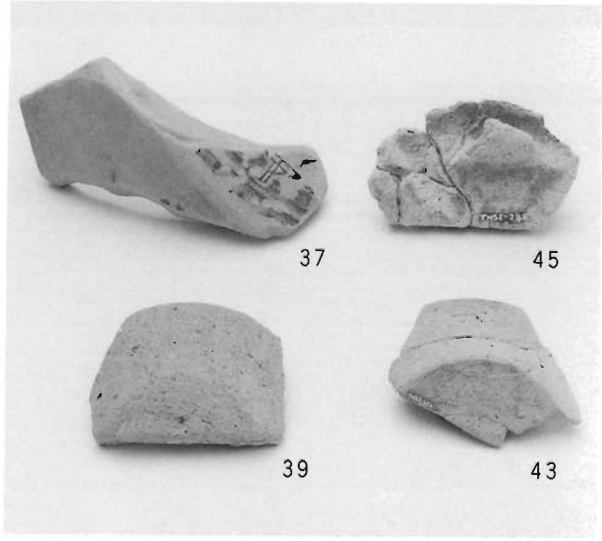
58～63



64～68

出土遺物（金属製品のX線写真）

図版42　平島Ⅰ遺跡



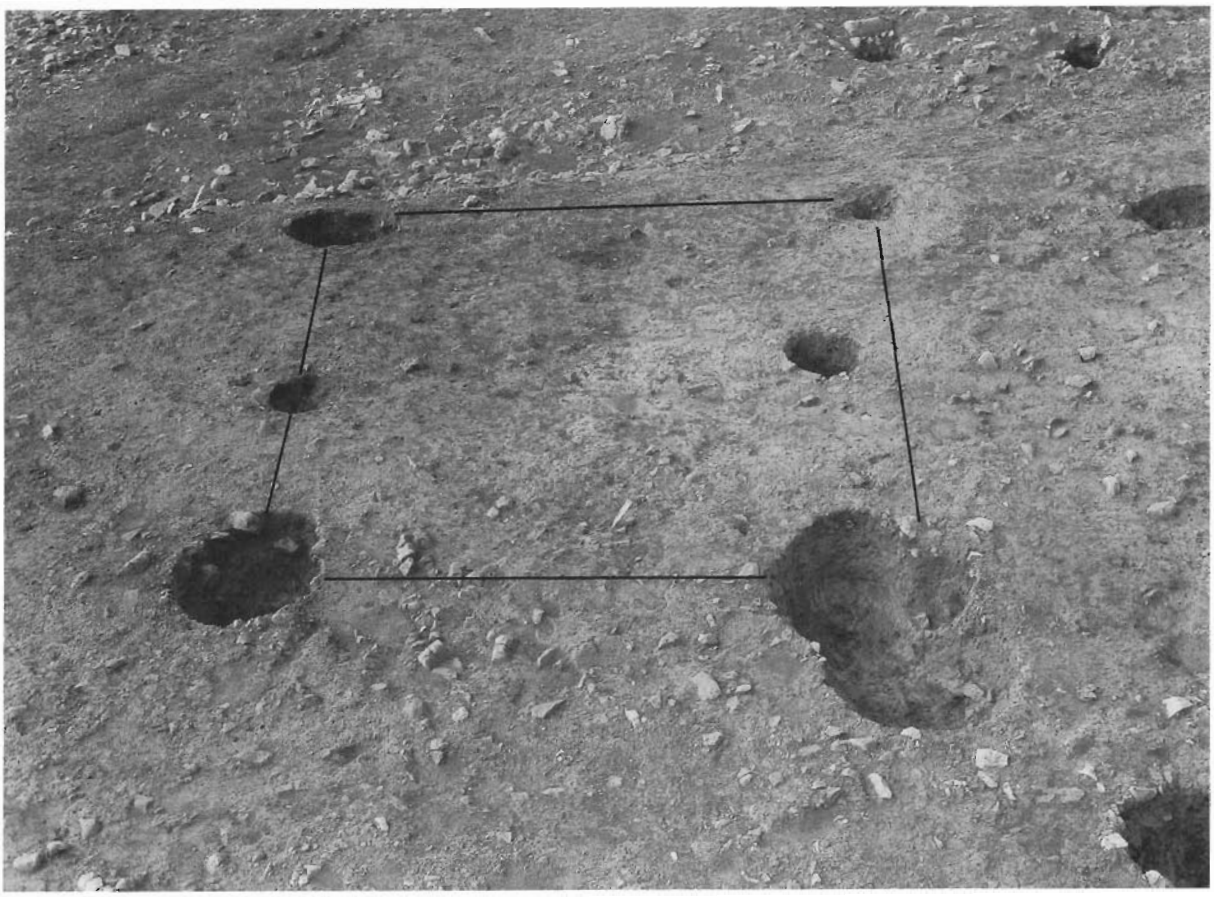
出土遺物（中近世）

1　東からの遠景

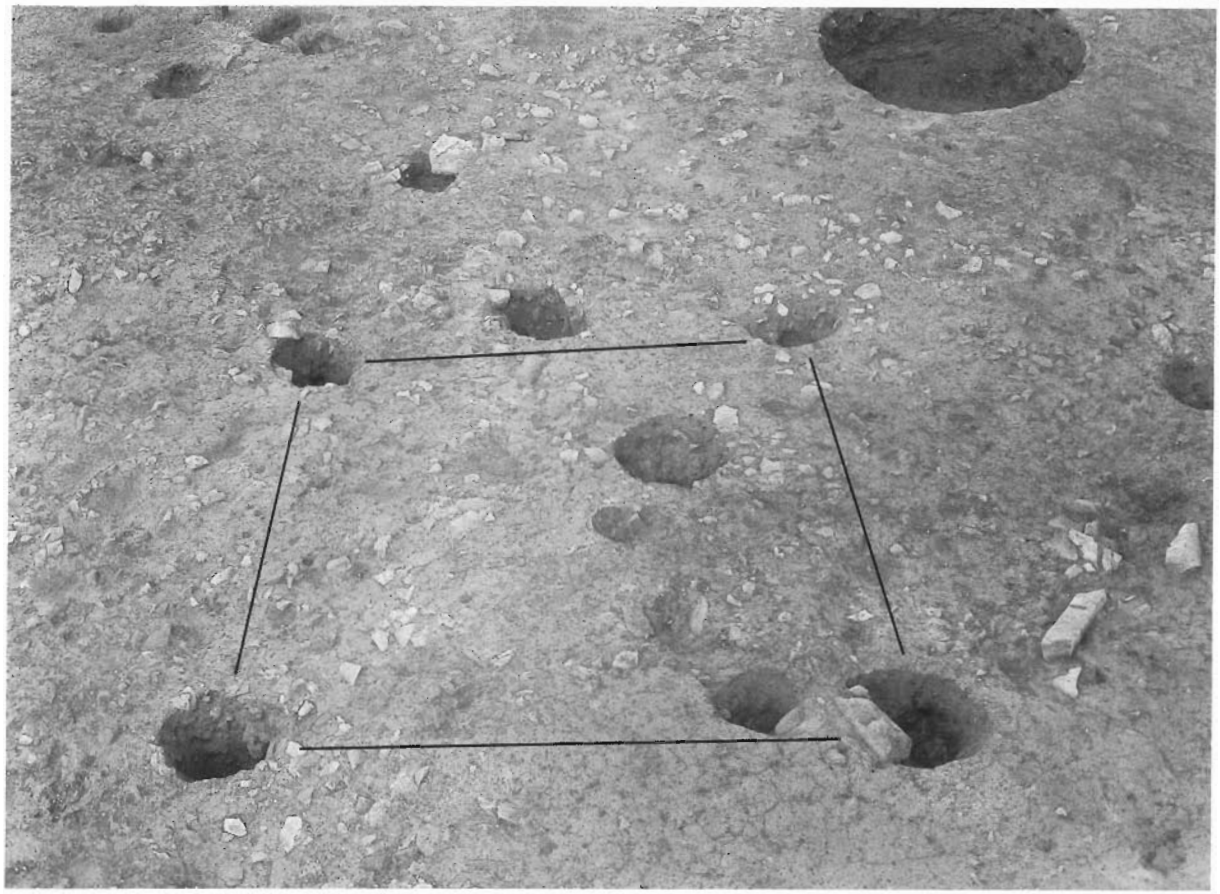
2　調査区全景（北から）

図版44　平島Ⅱ遺跡

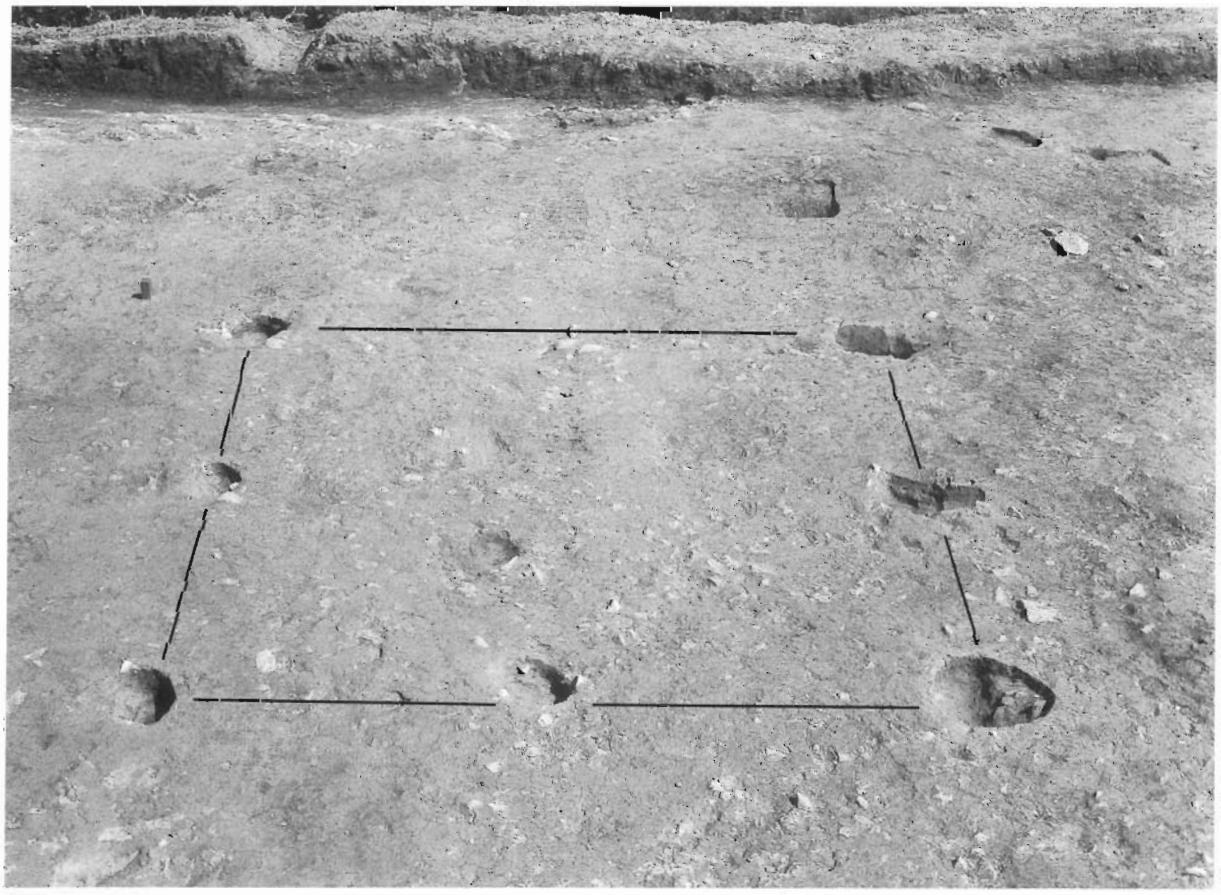
1　SX01・SD01・SH01（東から）



2　SH02（南東から）

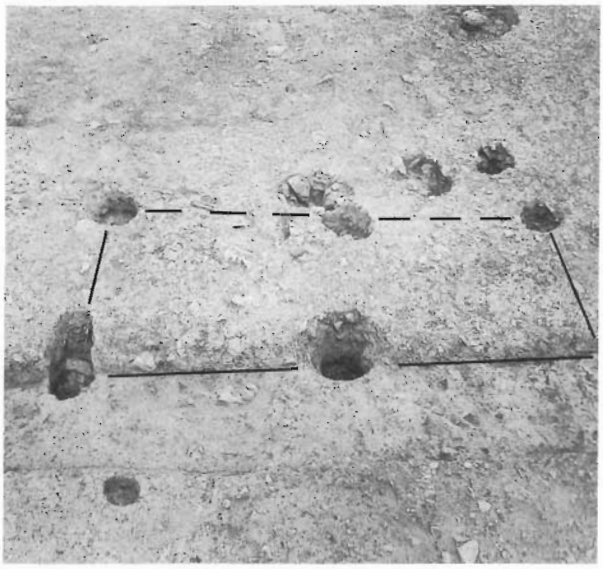


1　SH04（南西から）



2　SH05（西から）

図版46　平島Ⅱ遺跡

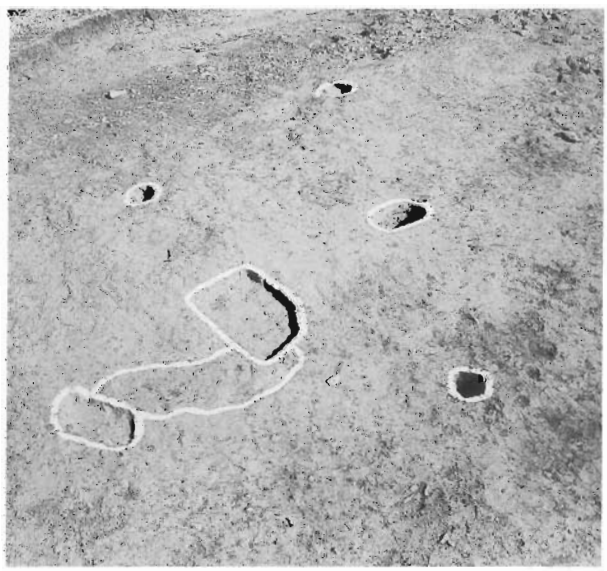


1　SH03（東から）

2　SF02（南東から）

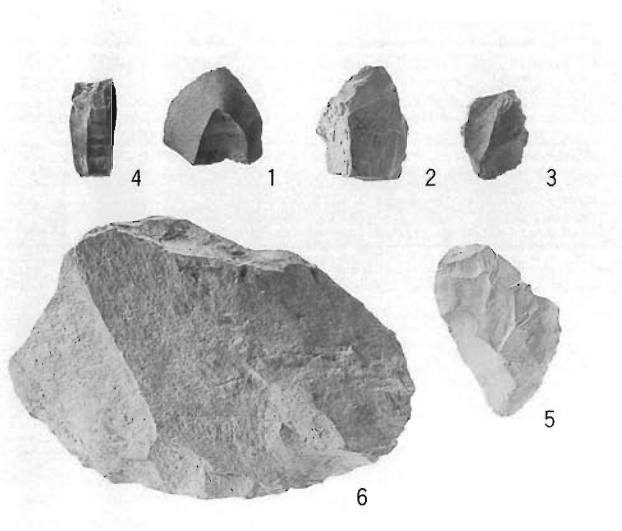
3　SF04（東から）

4　SF05（東から）

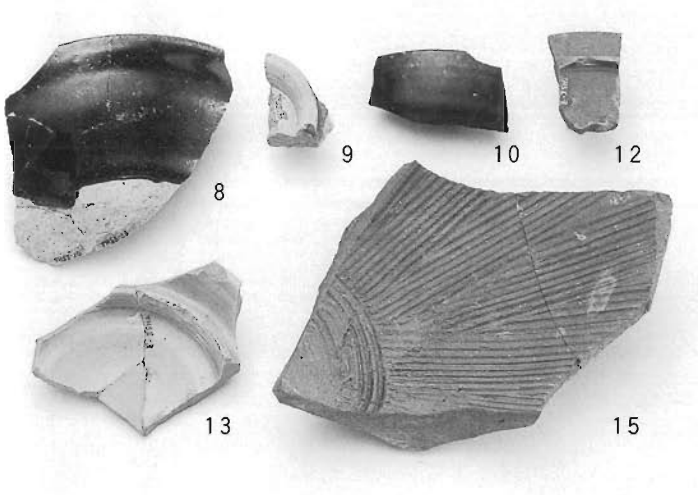


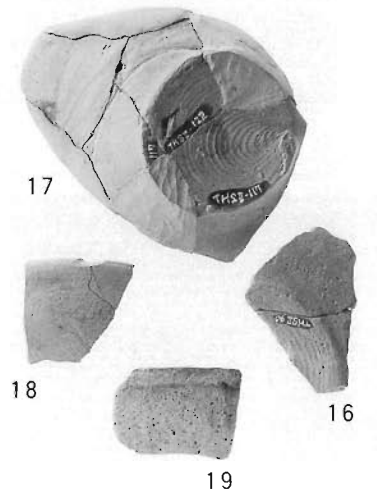
5　SF06および被熱範囲（北西から）

6　SF12（南西から）



7





11

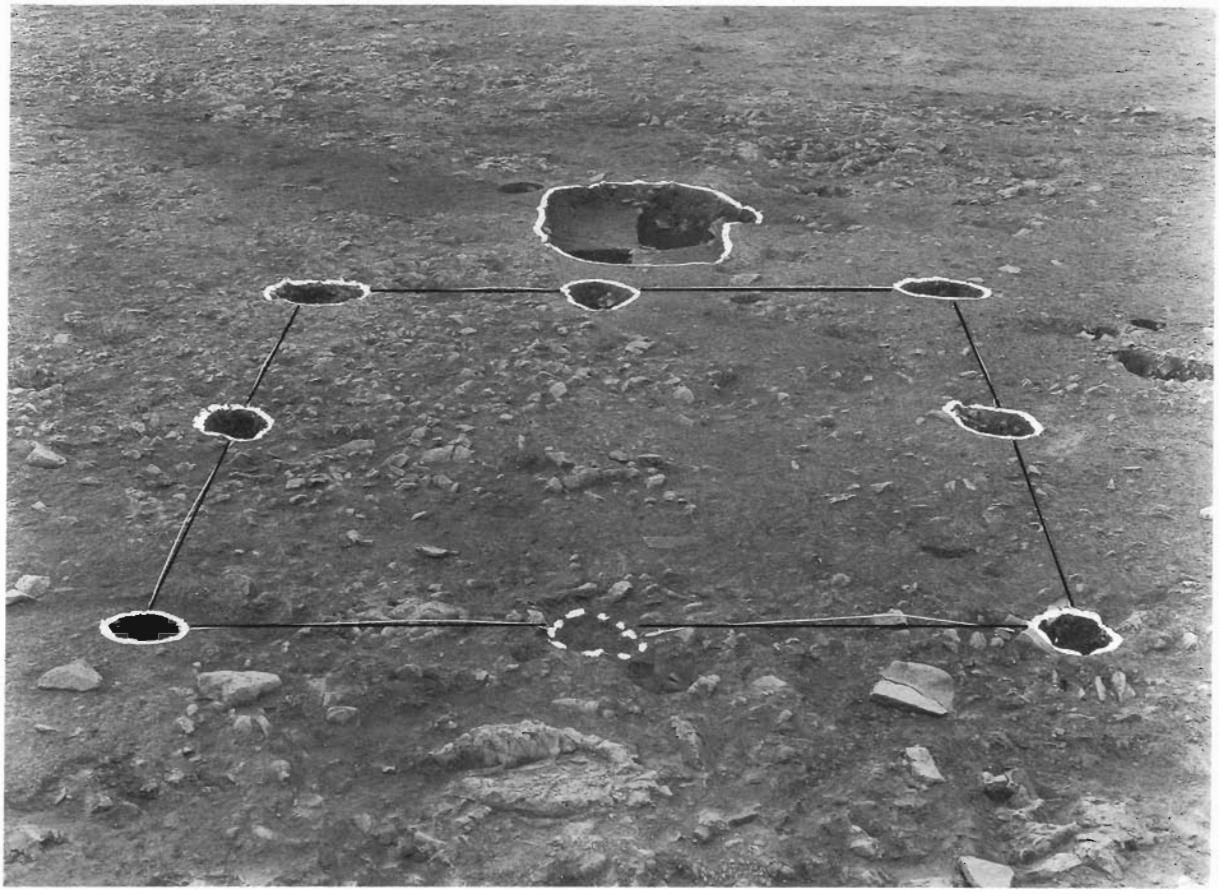
20

出土遺物

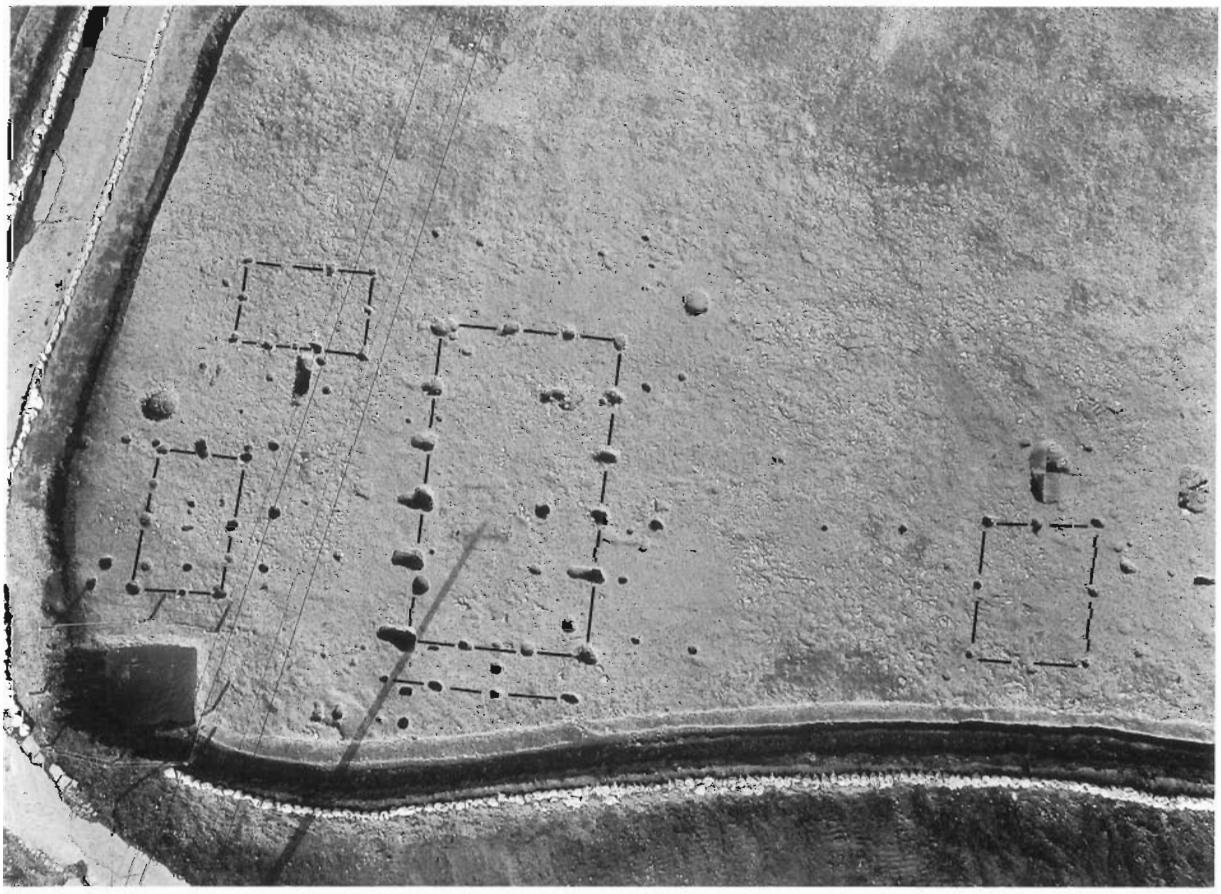
図版48　平島Ⅲ遺跡

1　調査区全景（西から）

2　A区全景（俯瞰）



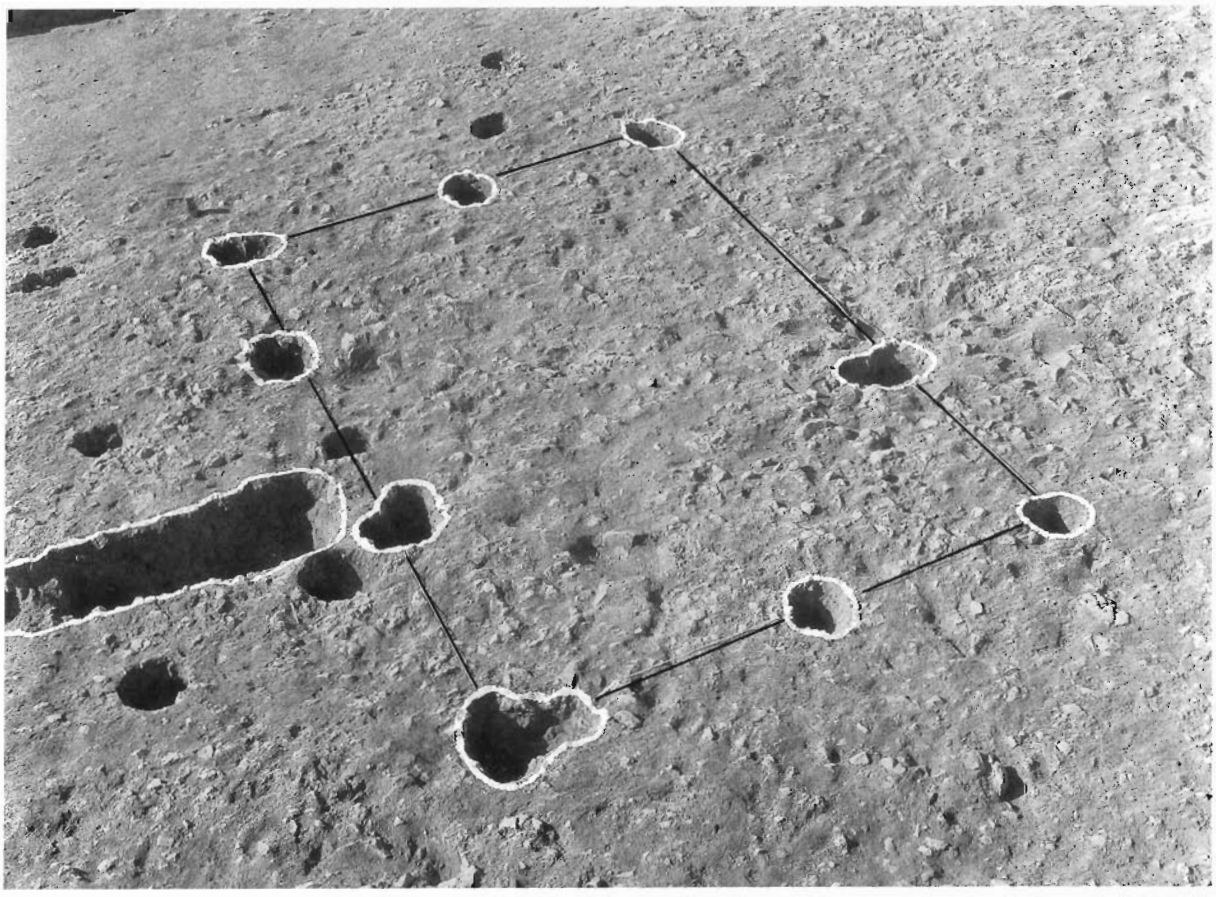
1　SH01・SF02（南東から）



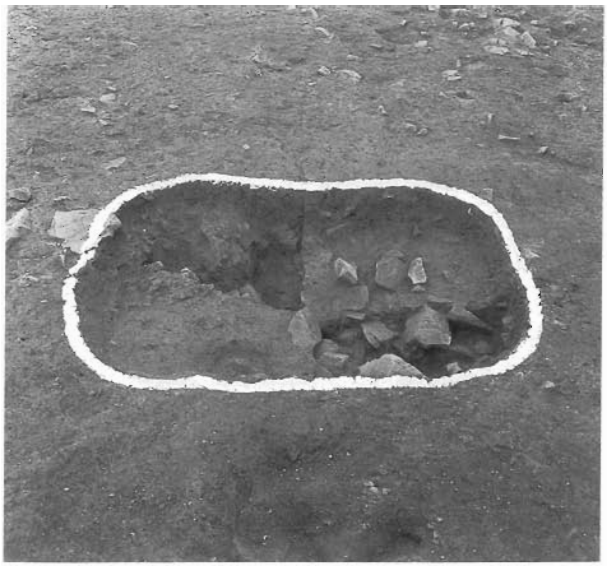
2　SH01～SH04・SH07など（俯瞰）

図版50　平島Ⅲ遺跡

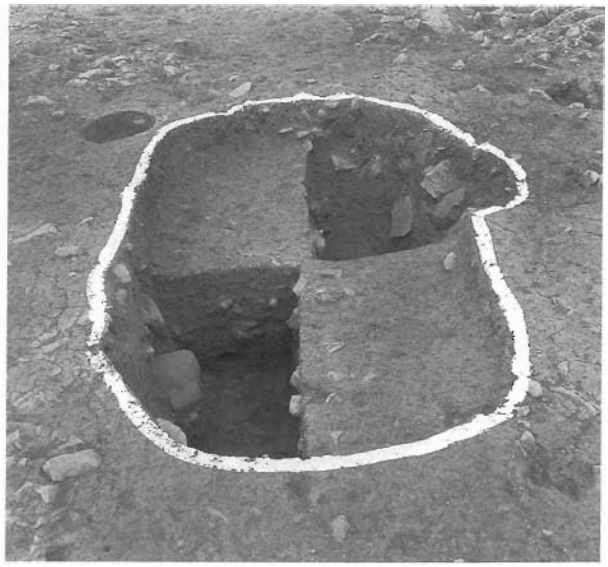
1　SH02（北西から）



2　SH04（東から）



1　SF01半裁状況（東から）

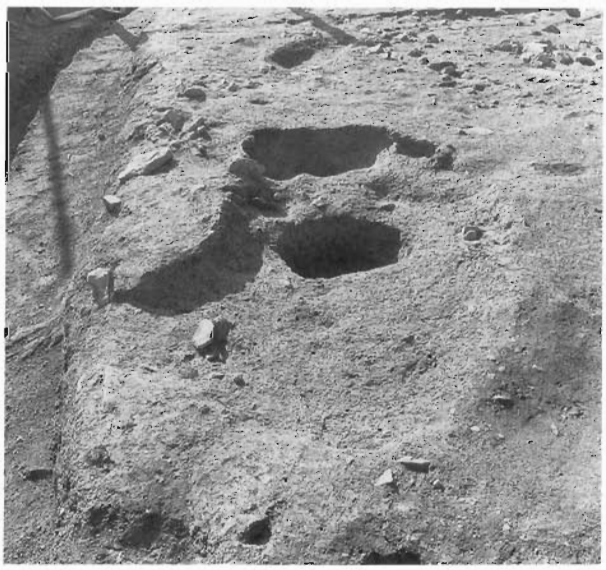


2　SF02半裁状況（南東から）

3　SF03検出状況（西から）

4　SF03完掘状況（南から）

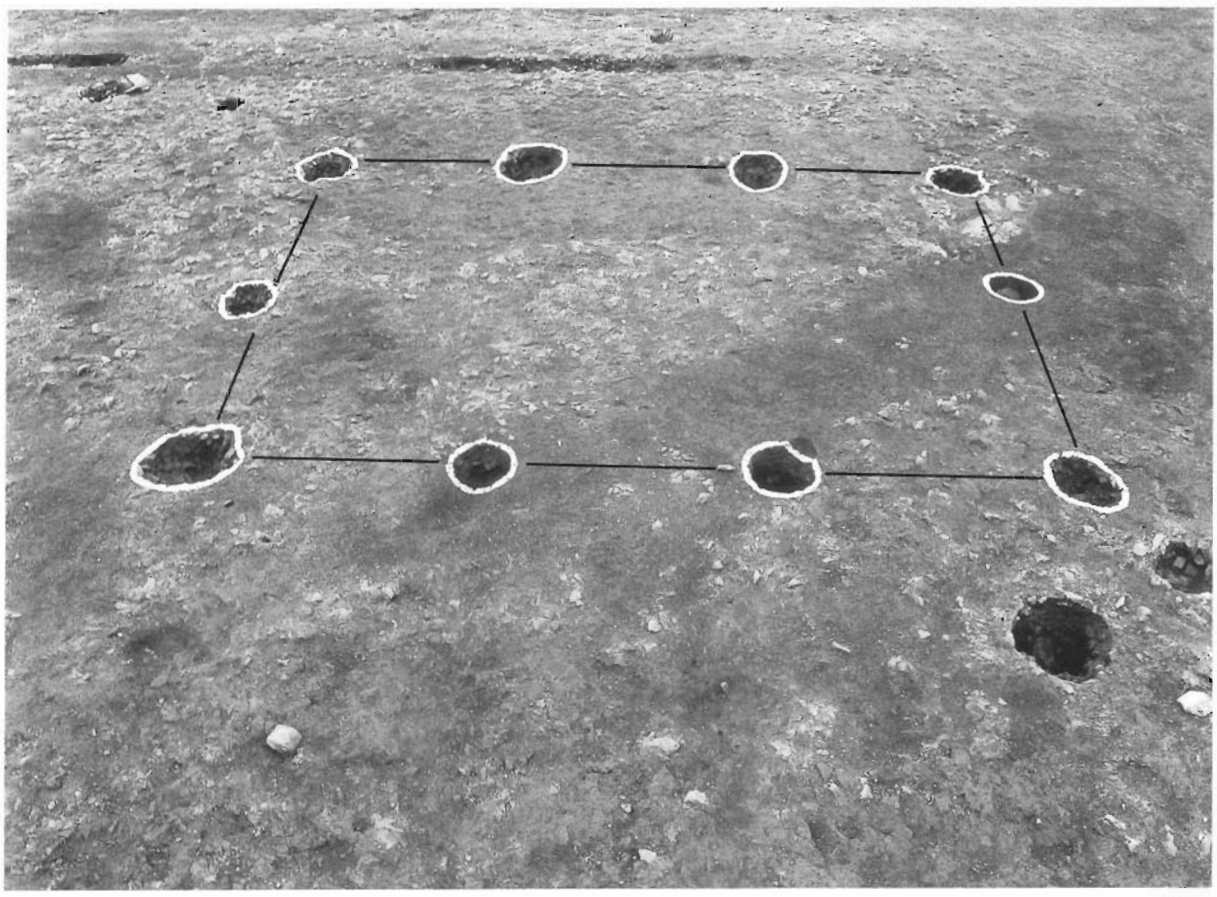
5　SF04検出状況（北から）



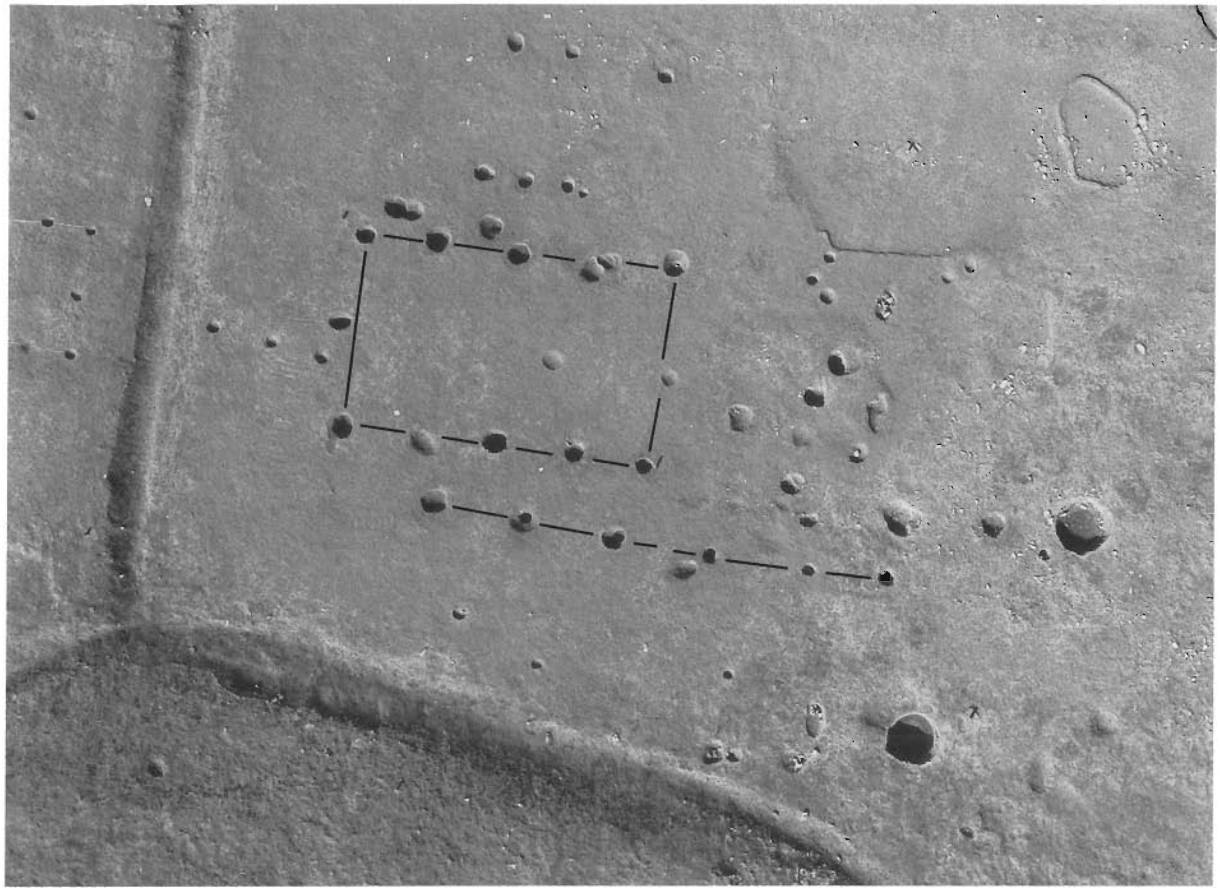
6　SF04完掘状況（東から）

図版52　平島Ⅲ遺跡

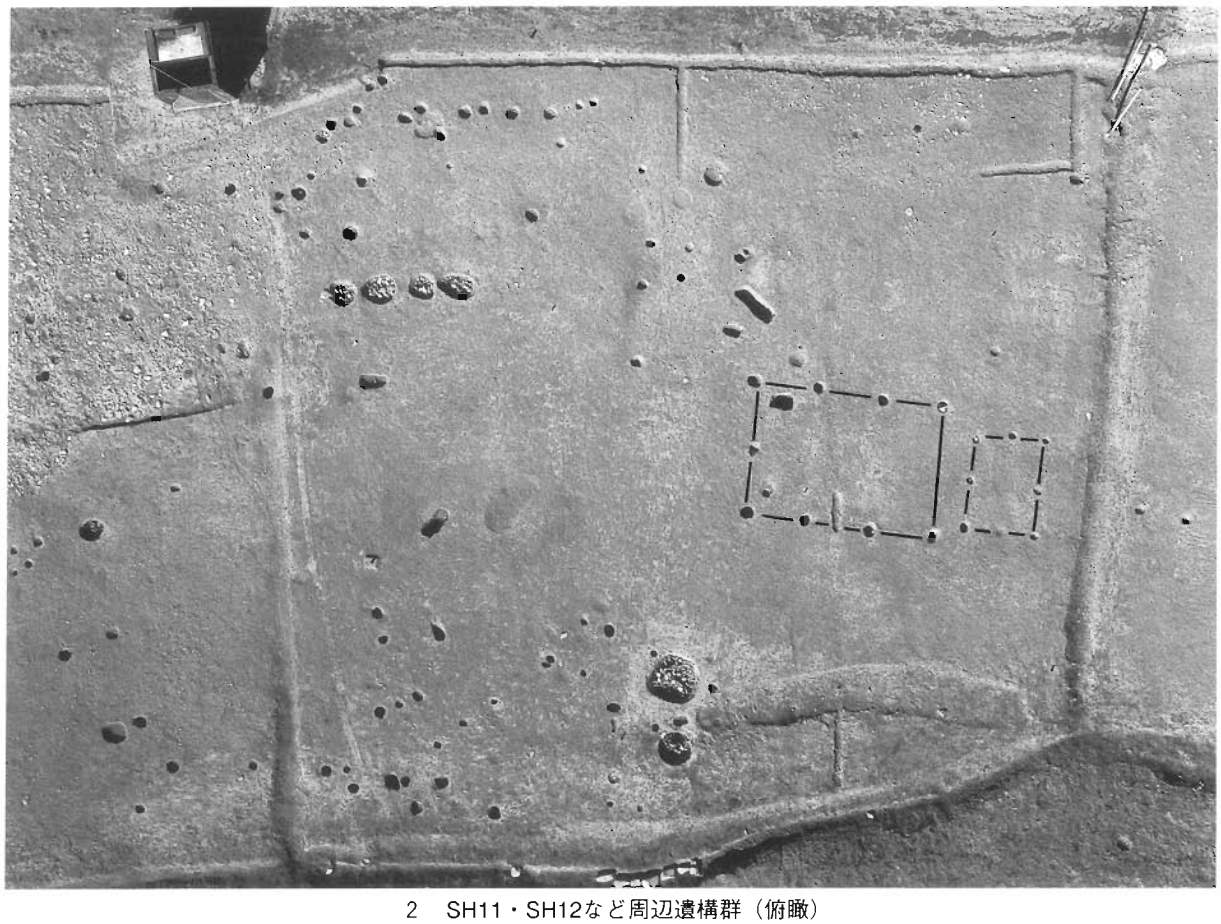
1　B区全景（俯瞰）



2　SH08（北西から）



1　SH09・SH10（俯瞰）



2　SH11・SH12など周辺遺構群（俯瞰）

図版54　平島Ⅲ遺跡

1　SF07検出状況（南から）

2　SF09検出状況（西から）

3　SF08半裁断面（東から）

4　SF08（西から）

5　SF10（東から）

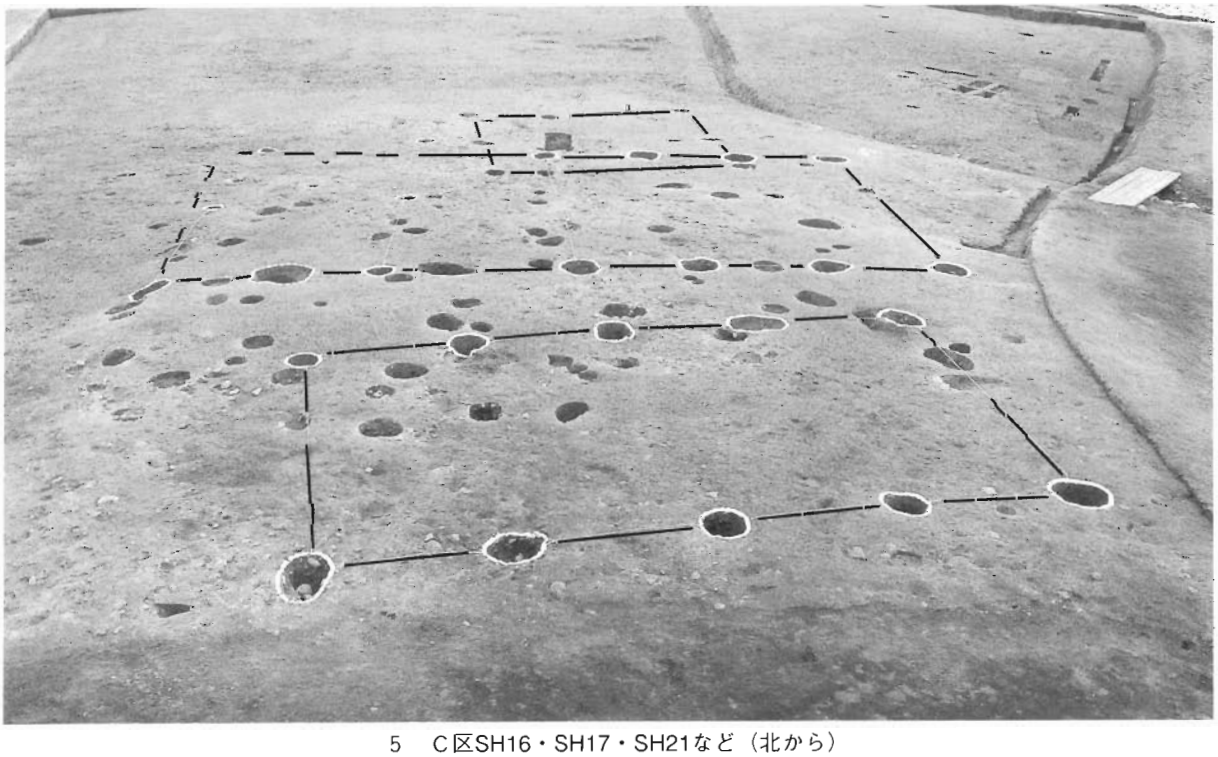
6　SF13検出状況（北から）

1　SF11検出状況（北から）

2　SF15検出状況（北から）

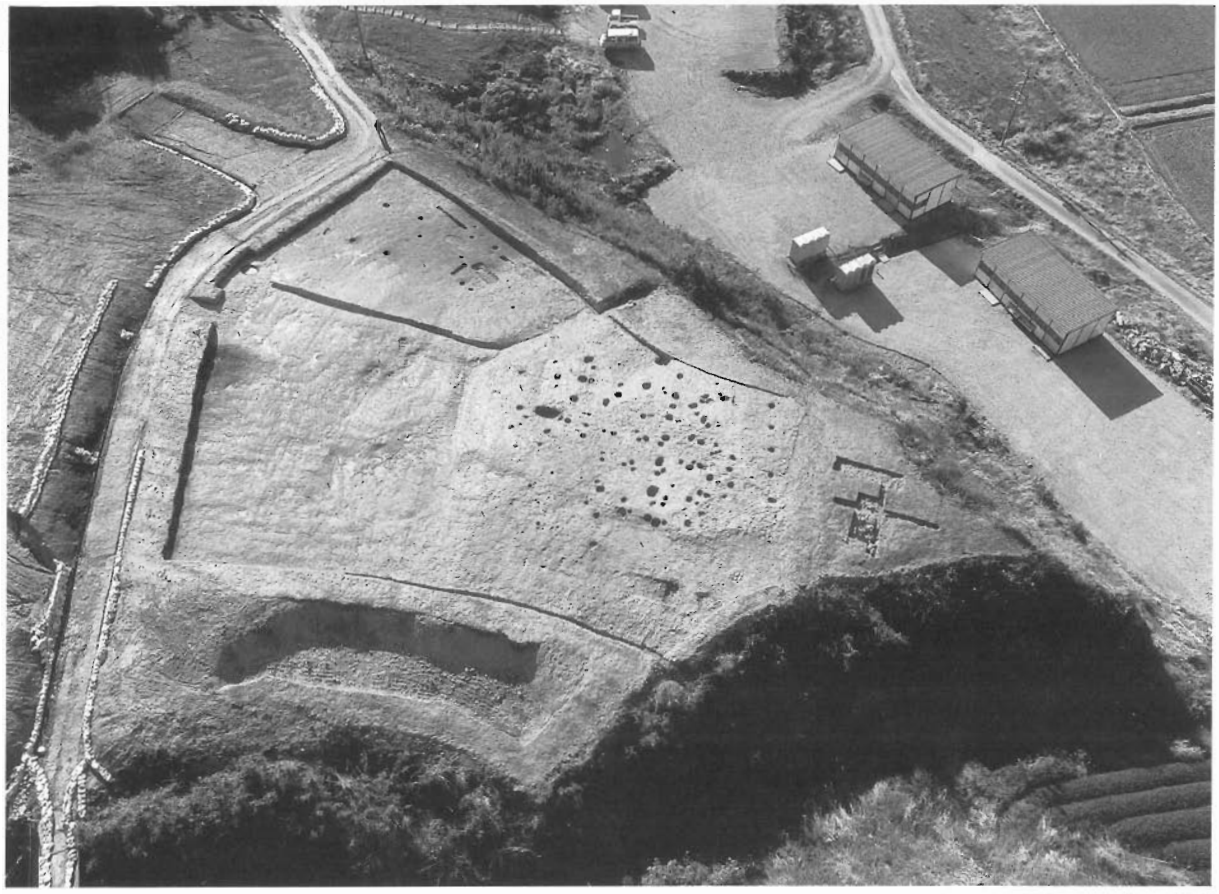
3　SF16検出状況（北から）

4　SF16完掘状況（東から）

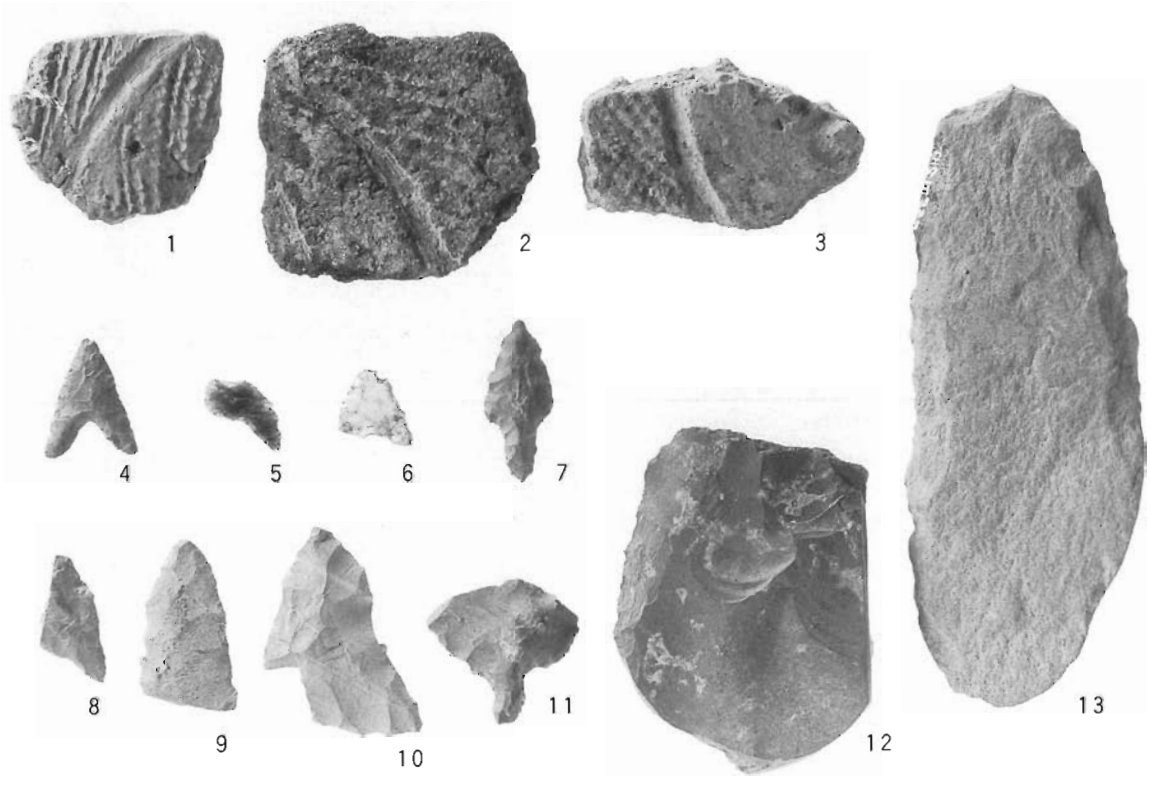


5　C区SH16・SH17・SH21など（北から）

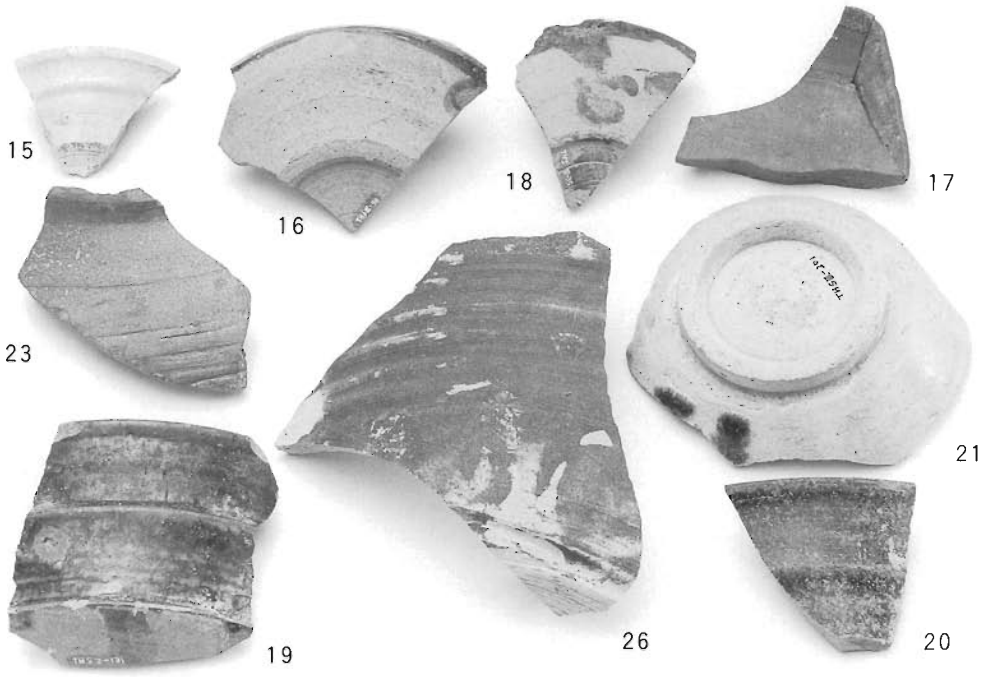
図版56　平島Ⅲ遺跡

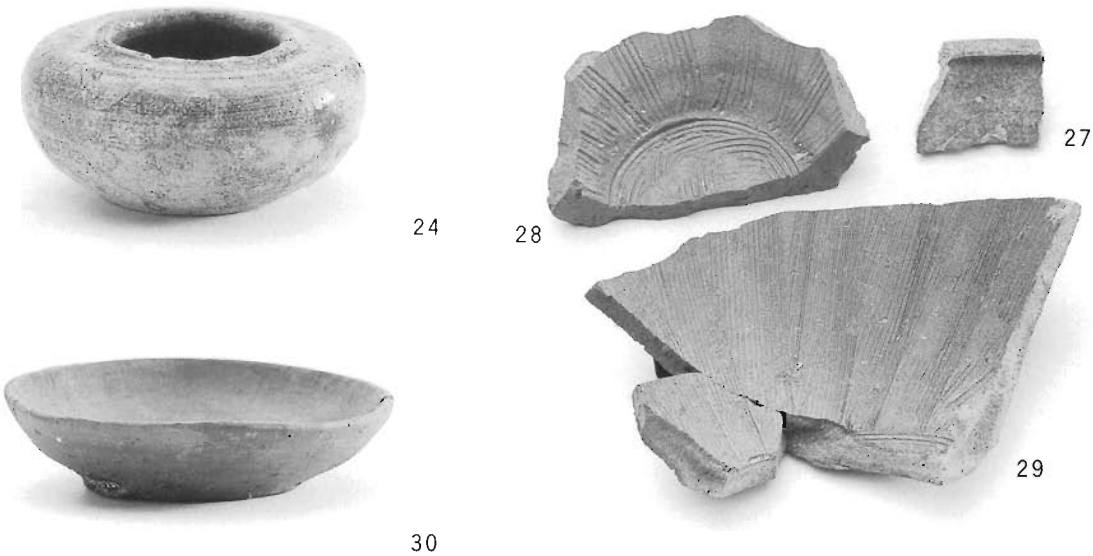


1　C区全景（東から）



2　出土遺物1（縄文時代）





出土遺物２（中近世）

報告書抄録

ふりがな	かけがわしおおわだ・ひらしまのいせき
書名	掛川市大和田・平島の遺跡
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	掛川市－1
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第159集
編著者名	及川 司　大庭 宏　西井 亨　田村隆太郎
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市谷田23-20　TEL　054-262-4261（代）
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査期間	調査面積	調査原因
みやのさわいせき 宮ノ沢遺跡	しずおかけんかけがわしおおわだ 静岡県掛川市大和田 619他	22213		36° 50′ 40″	138° 0′ 16″	20010116 ～ 20010711	2,000㎡	第二東名建設に伴う緊急調査
おおわだいせき 大和田遺跡	同上 （おおわだ 大和田1185-6他）	22213		34° 50′ 36″	138° 0′ 1″	20000605 ～ 20001107	2,600㎡	
ひらしまいちいせき 平島Ⅰ遺跡	同上 （ひらしま 平島834他）	22213		34° 50′ 37″	137° 59′ 55″	20000317 ～ 20001115	7,200㎡	
ひらしまにいせき 平島Ⅱ遺跡	同上 （ひらしま 平島217他）	22213		34° 50′ 35″	137° 59′ 49″	20000803 ～ 20001020	1,900㎡	
ひらしまさんいせき 平島Ⅲ遺跡	同上 （ひらしま 平島232他）	22213		34° 50′ 34″	137° 59′ 43″	20001101 ～ 20010331	8,900㎡	

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮ノ沢遺跡	集落	平安時代 ～江戸時代	小穴841（掘立柱建物跡・施設跡30）　土坑32　溝5　井戸および周辺施設跡1	灰釉陶器1　山茶碗72　その他の陶器52 磁器18　土師質土器11　柄杓2　鉄器4 銅銭2	・13世紀にはじまる集落
	散布地	古墳時代		土師器1	
大和田遺跡	集落	平安時代 ～鎌倉時代	炭窯1　小穴19	山茶碗3　鉄器1	・縄文時代早期および中期の土器群 ・屋外炉の発見
	集落	縄文時代	土坑21 焼土坑1	土器53（押型文、撚糸文、北屋敷式、勝坂式か、里木式、咲畑式、曽利式、加曽利E式） 石器19（石鏃10、石匕2、石斧5、不明2）	
平島Ⅰ遺跡	集落	室町時代 ～江戸時代	小穴411（掘立柱建物・施設跡17）　土坑15　溝6	陶器8　土師質製品9　鉄器1　銅銭22	・中世後半以降の建物群 ・中世後半の墓域（六道銭の出土） ・縄文時代中期の集落
	墓域	室町時代 ～江戸時代	火葬（荼毘）跡3　土坑（墓穴）5		
	集落	縄文時代	竪穴住居跡1　炉1 落し穴6　土坑等4	土器16（押型文、下吉井式、里木式、曽利式、加曽利E式）　石器12（石鏃6、石錐2、石匕2、石核2）	
平島Ⅱ遺跡	集落	室町時代 ～江戸時代	小穴144（掘立柱建物・施設跡5） 土坑9　溝1　竪穴状遺構1	陶器8　土師質土器5	・中世後半以降の建物 ・中世後半の墓域
	墓域	室町時代 ～江戸時代	土坑（墓穴）6		
	散布地	縄文時代	土坑1	石器7（楔形石器1、石鏃1、石匕1、二次加工のある剥片2、スクレイパー1、磨石1）	・中世後半以降の建物群（屋敷地か）
平島Ⅲ遺跡	集落	室町時代 ～江戸時代	小穴511（掘立柱建物・施設跡22） 土坑16	陶器15　土師質土器1	
	墓域	室町時代 ～江戸時代	火葬（荼毘）跡1		
	散布地	縄文時代		土器3（加曽利E式） 石器11（石鏃7、石錐1、スクレイパー2、二次加工のある剥片1）	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第159集

掛川市大和田・平島の遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

掛川市－1

平成17年3月31日

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市谷田23-20
TEL　(054)262-4261（代）
FAX　(054)262-4266

印　刷　所　中部印刷株式会社
静岡県浜松市東若林町1516-2
TEL　(053)441-2431（代）